

熊本県文化財調査報告第 337 集

八代海周辺の装飾古墳

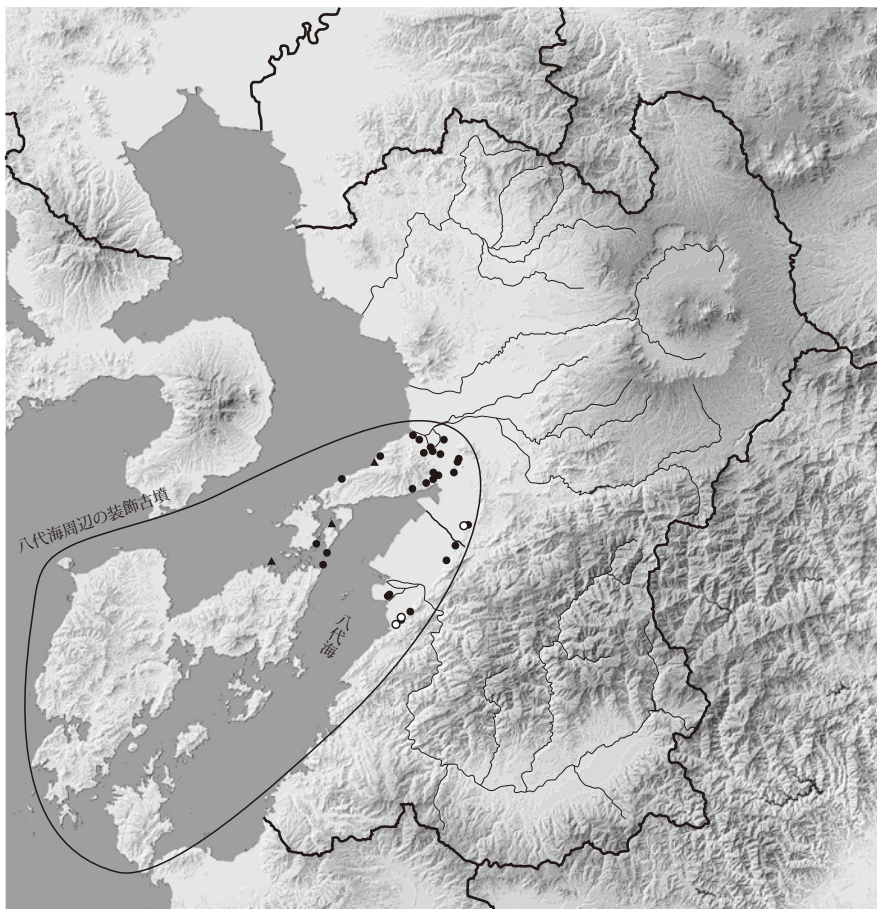
—発生と展開—

2020.3

熊本県教育委員会

八代海周辺の装飾古墳

—発生と展開—



2020.3

熊本県教育委員会

序 文

全国に 700 基程あると言われている装飾古墳のうち、約 200 基は熊本県に所在し、その数は全国一を誇ります。

特に菊池川流域のチブサン古墳や弁慶ヶ穴古墳などの装飾古墳は鮮やかな色彩と独特の文様で全国的にも広く知られています。また、この菊池川流域には全国唯一の装飾古墳専門機関として熊本県立装飾古墳館も開設されています。

一方、八代海地域の装飾古墳はこれまで一般にはあまり注目されてきませんでした。古墳研究者の間では八代海沿岸が装飾古墳発生地ではないかということが言われています。

そこで熊本県教育委員会では、文化庁の補助を受けて平成 24 年度から 8 年間にわたり八代海地域を対象とし、何故八代海で装飾古墳が発生したのか、また、どのようにして展開していくのか「八代海周辺の装飾古墳―発生と展開―」をテーマとし、関係市町の文化財部局と共同して調査を実施しました。

この結果、装飾古墳が何故発生し、どのように広まっていったかについて、道筋を明らかにすることができました。一方で保存施設設置から 40 年程が経ち装飾古墳保存施設の老朽化も顕著となるなど課題も見えてきました。

本書がより多くの人に活用され、文化財の保護と活用の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり、文化庁をはじめ関係市町村文化財担当部局、協議委員、調査協力機関など多くの方々の協力をうけ円滑な調査ができましたことに対して厚くお礼申し上げます。

令和 2 年 3 月 31 日

熊本県教育長 古閑 陽一

例 言

- 1 本書は平成24年度から令和元年度にかけて、文化庁からの補助金を受け熊本県教育委員会が3名の検討委員、八代市・宇土市・宇城市・上天草市・天草市・氷川町文化財担当者と共同で実施した八代海周辺の装飾古墳の発生と展開に関する研究の成果報告書である。
- 2 本書は5章構成をとる。第1章では本研究の目的と経過を、第2章では八代海周辺の装飾古墳の研究史を振り返り、第3章では各古墳の概要を、第4章では検討委員等による個別研究の成果を示し、第5章でそれらを総括した。
- 3 執筆は、第1章・第2章・第3章はじめに・第5章を古城史雄が執筆した。第3章各古墳の概要については執筆者をそれぞれ文末に示した。第4章考察は杉井健氏・高木恭二氏・池田朋生氏に執筆を依頼した。
- 4 使用した挿図の出典はそれぞれ文末に示した。第2章・3章・5章で使用した図の製図は中川治・島浦萌・戸田紀美子が主に行った。
- 5 本書の大扉の地図及び図3・4・143はカシミールで作成した。図5～10の地図は国土地理院発行の5万分の1地形図（三角）及び2万5千分の1地形図（網津・宇土・御船・松合・松橋・甲佐・鏡・日奈久）を利用した。
- 6 本書の編集は古城を中心に行い中川・島浦が補助した。
- 7 本書に掲載した古墳資料の保管場所は、第3章各古墳の概要でそれぞれ記載している。

凡 例

- 1 多くが1990年以前の調査のため嘉島町剣原2号墳・上天草市千崎古墳群を除くと国土座標には対応できておらず、方位は磁北を示す。また第3章各古墳の概要に記載した北緯と東経は、世界測地系によるが、嘉島町剣原2号墳・上天草市千崎古墳群を除き数値は国土地理院ホームページの地形図閲覧システムによるもので、基準点測量によって得られたものではない。同じく実測図に使用している水平線は標高の記載のないものは任意である。
- 2 報告書に掲載した実測図の縮尺は挿図ごとにスケールを示した。
- 3 横穴式石室は入口側から見て右・左としている。
- 4 装飾古墳名は、熊本県文化財調査報告第68集「熊本県装飾古墳総合調査報告書」を踏襲している。その後新たに発見された装飾古墳や非装飾古墳についてはそれぞれの調査報告書の名称による。また考察では各執筆者の古墳名称を尊重し、統一することはしなかった。そのため古墳群中の名称について、○号古墳、○号墳などの相違が見られる。
- 5 古墳名にはふりがなをふったが、田川内古墳群は「たのかわち」「たのこうち」2つの呼び名があり、統一できなかったため併記している。
- 6 従来から使用されている地下式板石積石室墓という呼称について、この種の墓制は石棺墓の一種であり「地下式」という用語も不適切とし近年「板石積石棺墓」と称するべきとの見解もあるため、両方の呼称を併記している。

（参考文献 藤井大祐 2009 「第3部考察 第1章 古墳時代薩摩地域における石棺墓の展開と特質—板石積石棺墓を中心に—」『薩摩加世田 奥山古墳の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No 4）

本文目次

序文

例言・凡例

第1章 調査目的と経過	1
第2章 八代海周辺の装飾古墳についての研究史	5
第3章 各古墳の概要	17
1 三拾町板碑転用石障材	27
2 梅崎古墳	29
3 城塚古墳	31
4 東畑古墳	32
5 椿原古墳	33
6 仮又古墳	37
7 宇土城跡城山遺跡出土装飾石材	40
8 晩免古墳	42
9 潤野古墳	44
10 宇賀岳古墳	46
11 不知火塚原1号古墳	51
12 鴨籠古墳	53
13 国越古墳	57
14 桂原古墳	62
15 鬼の岩屋古墳	67
16 ヤンボン塚古墳	69
17 小田良古墳	73
18 長砂連古墳	77
19 広浦古墳	82
20 大戸鼻古墳群	88
21 竜北高塚古墳	96
22 大野村石棺	100
23 大王山古墳第3号	101
24 門前2号古墳	103
25 小鼠蔵古墳群	109
26 大鼠蔵古墳群	114
27 五反田古墳	122
28 長迫古墳	126
29 田川内古墳群	129
30 竹之内古墳	137
31 千金甲1号古墳	138
32 井寺古墳	139
33 劔原2号墳	145
34 今城大塚古墳	150
35 城古墳群	153
36 千崎古墳群	158
37 竹島古墳群	165
第4章 考察	
八代海沿岸地域における装飾古墳の特質とその発生意義	杉井 健 171
八代海周辺における横穴系装飾古墳の発生と展開	高木恭二 195
八代海沿岸の砂岩製埋葬施設における石材利用の検証からみた石棺・石障の技術的系譜	池田朋生 219
第5章 総括	257

報告書抄録

挿図目次

第1章

- 図1 上左：28年度第1回会議、上右：29年度第3回会議、下：30年度第1回会議

第2章

- 図2 肥後型横穴石室模式図

第3章

- 表1 古墳時代の時期区分と実年代の関係

- 図3 八代海周辺装飾古墳分布図

- 表2 八代海周辺装飾古墳一覧表

- 図4 八代海周辺の装飾古墳・非装飾古墳及び参考とする装飾古墳分布図

- 表3 八代海周辺の参考とする装飾古墳及び関連古墳地名表

- 図5 宇土半島基部装飾古墳分布図（1～15）

- 図6 宇土半島装飾古墳（16・17）、非装飾古墳（35）分布図

- 図7 天草諸島装飾古墳（18～20）、非装飾古墳（36・37）分布図

- 図8 氷川下流域装飾古墳分布図（21～24）

- 図9 球磨川下流域装飾古墳分布図（25～30）

- 図10 熊本平野南部（緑川流域）参考とする装飾古墳分布図（32～34）

1 三拾町板碑転用石障材

- 図11 三拾町板碑転用石障材位置図

- 図12 三拾町板碑転用石障材装飾文様実測図

- 図13 三拾町板碑転用石障材全景（写真）

2 梅崎古墳

- 図14 梅崎古墳石室及び右側壁装飾文実測図

5 椿原古墳

- 図15 椿原古墳羨道部右側壁装飾文実測図

- 図16 椿原古墳墳丘測量図

- 図17 椿原古墳石室実測図

6 仮又古墳

- 図18 仮又古墳墳丘測量図

- 図19 仮又古墳石室及び側壁装飾文実測図

7 宇土城跡城山遺跡出土装飾石材

- 図20 宇土城跡城山遺跡出土装飾石材宇土市立図書館展示レイアウト及び線刻図

8 晩免古墳

- 図21 晩免古墳石棺図

- 図22 晩免古墳墳丘測量図

9 潤野古墳

- 図23 潤野古墳墳丘測量図

- 図24 潤野古墳石棺図

- 図25 潤野古墳全景

- 図26 潤野古墳石棺出土状況図

10 宇賀岳古墳

- 図27 宇賀岳古墳墳丘測量図

- 図28 宇賀岳古墳石室実測図

- 図29 宇賀岳古墳復元石室及び天井石・石柵実測図

- 図30 整備前の宇賀岳古墳石室（南より）（写真）

- 図31 整備前の宇賀岳古墳石室（北より）（写真）

- 図32 整備前の宇賀岳古墳石室（右が奥壁側）（写真）

- 図33 整備後の宇賀岳古墳（正面より）（写真）

11 不知火塚原1号古墳

- 図34 不知火塚原1号古墳石室及び天井石装飾文実測図

12 鴨籠古墳

- 図 35 鴨籠古墳墳丘測量図
- 図 36 鴨籠古墳石室実測図
- 図 37 鴨籠古墳舟形石棺実測図
- 図 38 鴨籠古墳舟形石棺

13 国越古墳

- 図 39 国越古墳墳丘測量図
- 図 40 国越古墳石屋形の装飾文様
- 図 41 国越古墳石室実測図
- 図 42 国越古墳石室調査風景（写真）
- 図 43 国越古墳石室（北より）（写真）
- 図 44 石屋形天井石片（写真）

14 桂原古墳

- 図 45 整備前の桂原 1 号古墳
- 図 46 桂原 1 号古墳墳丘測量図及びトレンチ断面図
- 図 47 桂原 1 号古墳石室及び装飾文実測図
- 図 48 桂原 2 号古墳羨道左側の装飾文実測図

15 鬼の岩屋古墳

- 図 49 鬼の岩屋古墳石室略側図及び奥壁の舟の線刻図

16 ヤンボシ塚古墳

- 図 50 ヤンボシ塚古墳墳丘測量図
- 図 51 ヤンボシ塚古墳石室実測図
- 図 52 ヤンボシ塚古墳出土遺物実測図
- 図 53 千足古墳石室実測図

17 小田良古墳

- 図 54 小田良古墳墳丘測量図
- 図 55 小田良古墳石室及び出土遺物実測図
- 図 56 小田良古墳石室全景（北東より）（写真）
- 図 57 小田良古墳奥障装飾（写真）

18 長砂連古墳

- 図 58 長砂連古墳下林作成石室見取図
- 図 59 長砂連古墳石障及び出土遺物実測図
- 図 60 発見当時の長砂連古墳（写真 2 枚）
- 図 61 長砂連古墳石障装飾（写真 4 枚）

19 広浦古墳

- 図 62 広浦古墳位置図
- 表 4 京大報告にある古墳群と認められる記述一覧
- 表 5 京大報告墳丘・内部主体・出土遺物記録一覧
- 表 6 えびそうど記録
- 図 63 広浦古墳周辺測量図
- 図 64 広浦古墳石棺石材実測図
- 図 65 広浦古墳石棺石材（写真 4 枚）

20 大戸鼻古墳群

- 図 66 大戸鼻古墳群位置図
- 表 7 大戸鼻古墳群に関する記述一覧
- 表 8 大戸鼻北古墳に関する記述一覧
- 図 67 大戸鼻北古墳墳丘測量図
- 図 68 大戸鼻北古墳墳丘測量図及び石室実測図
- 図 69 大戸鼻北古墳石室三次元モデル及び正面からの写真（写真）
- 表 9 大戸鼻南古墳の過去の状況一覧
- 図 70 大戸鼻南古墳（写真）
- 図 71 大戸鼻南古墳西小口石材（上）及び西小口石材（下）（写真 3 枚）

- 図 72 大戸鼻南古墳石室実測図
- 21 竜北高塚古墳
 - 図 73 竜北高塚古墳墳丘測量図
 - 図 74 竜北高塚古墳石棺及び石枕実測図
 - 図 75 牛橋生（福原岱郎）の竜北高塚古墳石棺実測図
 - 図 76 京大報告（梅原 1919）の竜北高塚古墳石棺実測図
 - 図 77 竜北高塚古墳西小口（写真）
 - 図 78 竜北高塚古墳東小口（写真）
- 22 大野村石棺
 - 図 79 大野村石棺スケッチ
- 23 大王山古墳第 3 号
 - 図 80 大王山古墳第 3 号石室実測図
 - 図 81 調査時の大王山古墳第 3 号石室（写真）
- 24 門前 2 号古墳
 - 図 82 門前 1 号古墳・2 号古墳地形測量図
 - 図 83 門前 2 号古墳石材 1 実測図
 - 図 84 門前古墳出土遺物実測図
 - 図 85 門前 2 号古墳石材（写真 2 枚）
 - 図 86 門前古墳出土遺物（写真 6 枚）
- 25 小鼠蔵古墳群
 - 図 87 小鼠蔵古墳群古墳分布図
 - 図 88 小鼠蔵 1 号古墳石室実測図
 - 図 89 小鼠蔵 1 号古墳石室三次元モデル及び東壁面（写真）
 - 図 90 小鼠蔵 3 号古墳全景（写真）
 - 図 91 小鼠蔵 3 号古墳実測図
- 26 大鼠蔵古墳群
 - 図 92 大鼠蔵古墳群古墳分布図
 - 図 93 大鼠蔵尾張宮古墳石室実測図
 - 図 94 大鼠蔵尾張宮古墳石室三次元モデル
 - 図 95 乙益作成の大鼠蔵東麓石棺配置図
 - 図 96 大鼠蔵東麓 1 号古墳装飾石材（写真）
 - 図 97 大鼠蔵東麓 1 号古墳装飾石材実測図
 - 図 98 大鼠蔵東北麓 2 号古墳装飾石材（写真）
 - 図 99 大鼠蔵西北麓 2 号古墳（写真 2 枚）
- 27 五反田古墳
 - 図 100 五反田古墳調査風景（写真）
 - 図 101 五反田古墳石室及び石障実測図
 - 図 102 振紋鏡拓影比較図（1：苺捨古墳 2 五反田古墳）
 - 図 103 五反田古墳出土遺物実測図
- 28 長迫古墳
 - 図 104 長迫古墳周辺位置図
 - 図 105 長迫古墳装飾石材
 - 図 106 東京国立博物館所蔵長迫古墳装飾石材（写真 2 枚）
 - 図 107 東京国立博物館所蔵長迫古墳装飾石材（写真）
- 29 田川内古墳群
 - 図 108 田川内 1 号古墳墳丘測量図
 - 図 109 田川内 1 号古墳石室実測図
 - 図 110 田川内 1 号古墳石室三次元モデル及び石室写真（写真）
 - 図 111 田川内 1 号古墳玄室（写真）
 - 図 112 田川内 1 号古墳出土遺物（写真 2 枚）
 - 図 113 田川内 1 号古墳出土遺物実測図
 - 図 114 田川内古墳装飾石材実測図

30 竹之内古墳

- 図 115 竹之内古墳装飾石材実測図
- 図 116 竹之内古墳装飾石材（写真）

31 千金甲 1 号古墳

- 図 117 千金甲 1 号古墳石室実測図

32 井寺古墳

- 図 118 井寺古墳墳丘測量図
- 図 119 井寺古墳石室（写真）
- 図 120 井寺古墳天井部（写真）
- 図 121 井寺古墳石室実測図
- 図 122 井寺古墳前障外面装飾実測図
- 図 123 井寺古墳左袖石装飾模式図
- 図 124 井寺古墳羨門正面装飾実測図
- 図 125 井寺古墳石柵及び仕切石等実測図

33 劔原 2 号古墳

- 図 126 劔原 2 号墳墳丘測量図
- 図 127 劔原 2 号墳石室実測図
- 図 128 劔原 2 号墳玄室内出土石障石材実測図及び写真
- 図 129 劔原 2 号墳前障装飾及び全景（写真 2 枚）

34 今城大塚古墳

- 図 130 今城大塚古墳墳丘測量図
- 図 131 今城大塚古墳石室及び腰掛形石製品実測図

35 城古墳群

- 図 132 城 1 号墳墳丘測量図及び石室実測図
- 図 133 城 2 号墳墳丘測量図
- 図 134 城 2 号墳石室実測図

36 千崎古墳群

- 図 135 千崎古墳群分布図
- 表 10 千崎古墳群所在箱式石棺の特徴
- 図 136 千崎 5 号墳石室実測図
- 図 137 千崎 10 号墳及び出土遺物実測図
- 図 138 千崎 22 号墳実測図

37 竹島古墳群

- 図 139 竹島古墳群分布図
- 図 140 竹島 3 号墳墳丘測量図
- 図 141 竹島 3 号墳石室及び出土石製品実測図
- 図 142 竹島 3 号墳（奥壁側・玄門部）（写真 2 枚）

第 4 章

杉井

- 表 1 装飾古墳分類の歴史
- 表 2 装飾古墳内外面加飾の傾向
- 表 3 八代海沿岸地域およびその周辺の主要な石棺系箱式石棺施文型装飾古墳と石障系装飾古墳
- 図 1 八代海沿岸地域の装飾古墳の事例 1
- 図 2 八代海沿岸地域の装飾古墳の事例 2
- 図 3 菊池川流域以南の九州島西岸における銅鏡の分布
- 表 4 菊池川流域以南の九州島西岸における弥生時代銅鏡出土遺跡・墳墓一覧（図 3 - ①表示分）
- 表 5 菊池川流域以南の九州島西岸における古墳時代銅鏡出土遺跡・墳墓一覧（図 3 - ②表示分）

高木

- 第 1 表 八代海周辺における装飾円文の分類
- 第 1 図 八代・天草の装飾古墳編年図
- 第 2 表 八代海周辺装飾古墳編年表
- 第 3 表 古墳時代の装飾をもつ埋葬施設一覧

- 写真 小鼠蔵 1 号墳の円文
- 第 2 図 成合津 2 号墳石槨実測図
- 第 3 図 天辰寺前古墳石槨実測図
- 第 4 図 横穴式石室隅部見取り図
- 第 5 図 小鼠蔵 1 号墳石室解説図
- 第 6 図 横穴系装飾古墳の諸要素
- 第 7 図 八代海周辺における横穴系装飾古墳関連図

池田

- 表 1 文化財石材硬度一覧表
- 図 1 下浦石工の細工道具
- 表 2 軟岩石材の製作工程及び使用工具案
- 表 3 うねり計測古墳一覧
- 図 2 調査対象古墳
- 図 3 熊本県土地資源対策課表層地質図
- 図 4 本論に関係する文化財石材調査図
- 表 4 文化財石材帯磁率一覧
- 写真 6 枚
- 図 5 うねり図計測凡例
- 図 6 石材判定図
- 図 7 石障・石棺に用いた部材うねり最大幅のデータ総数グラフ
- 図 8 うねり模式図・凡例
- 図 9 石棺・石障うねり相関・変遷図
- 図 10 小鼠蔵 1 号墳（石障）
- 図 11 大戸鼻北古墳
- 図 12 大鼠蔵尾張宮古墳
- 図 13 広浦古墳
- 図 14 小田良古墳
- 図 15 門前 2 号墳
- 図 16 田川内 1 号古墳
- 図 17 五反田古墳
- 図 18 小鼠蔵 1 号墳（石棺）
- 写真 1 枚（小鼠蔵 1 号墳）
- 図 19 小鼠蔵 3 号墳
- 図 20 千崎 8 号墳
- 図 21 千崎 9 号古墳
- 図 22 千崎 13 号墳
- 図 23 千崎 15 号墳
- 図 24 千崎 22 号墳
- 図 25 千崎 26 号墳
- 図 26 竹島 3 号墳
- 図 27 うねり模式図（石障・石材）
- 図 28 刳り込みうねり図
- 表 5 石障うねり観察表
- 表 6 石棺うねり観察表

第 5 章

- 図 143 古墳位置図
- 表 11 関連古墳の編年表
- 表 12 古墳時代中期の装飾古墳
- 表 13 古墳時代後期の装飾古墳
- 図 144 装飾古墳展開に関連する石室及び文様
- 図 145 主要装飾石棺

第1章

第1節 調査の目的

全国に700基程あるとされる装飾古墳のうち、約200基は熊本県内に所在し、その数は全国一であり、保存施設設置など装飾古墳保護の取組も早くから行われてきた。昭和59年度に刊行された「熊本県装飾古墳総合調査報告書」（熊本県文化財報告第68集）は、横穴墓を含め県下の装飾古墳を網羅したもので、県内の装飾古墳について体系的にまとめる契機となり、熊本の古墳時代研究の進展に大きく寄与した。また平成4年には、全国唯一の装飾古墳の専門機関として熊本県立装飾古墳館が開館した。

弁慶ヶ穴古墳など人物や馬・舟など鮮やかな色彩で描かれる菊池川流域の装飾古墳に対し、板石に円文を刻むだけの八代海沿岸の装飾古墳は華やかさに欠け、国史跡として菊池川流域では多くの装飾古墳が指定されているのに対し、八代海周辺では小田良古墳のみである。しかしながら近年八代海沿岸に初期の装飾古墳が集中することから、装飾古墳の出現地域として注目されている。そこで八代海周辺で装飾古墳が何故発生したか、またどのように展開していったのかを明らかにすることを目的として、八代海周辺に所在する装飾のある石室や石棺について調査研究を行うこととした。対象とする古墳は、装飾ある石室・石棺だけでなく、その出現に関連する非装飾の石室・石棺を含めた（調査の対象とした地域及び古墳については、第3章1はじめにを参照されたい）。同時にこうした装飾古墳の調査を通じて全国的に問題となっている装飾古墳の保存・活用についても改めて考える契機とし、併せてこれらの古墳を一体として文化的・歴史的な意義・価値づけを行い新たな史跡指定に繋げてゆこうとするものである。

具体的には以下のような目的を掲げた

- ・埋もれている過去資料を掘り起し検討を行い、県民に情報公開して重要性を知ってもらう。
- ・現在の研究水準で過去資料の再検討を行うとともに未報告資料を整理し報告する。
- ・将来に向けて保存と活用を図るための基礎資料とする。
- ・国指定にむけて、基礎資料を収集し、調査研究のきっかけをつくる。
- ・関連自治体が共通認識をもち、広域的に文化財保護に取り組むきっかけとする。

第2節 調査の方法と組織

調査は、過去資料の再検討及び現状観察を中心とした。古墳が存在する市町村が複数になるため、熊本県【県文化課】が中心となりまとめることとした。調査に際しては、県【県文化課：装飾古墳館】と市町が一体となって取り組む。学術的に価値付けを行うため協議委員会を設置する。協議委員は古墳時代を専門とする学識経験者3名をお願いした。この協議会は年に数回行い、市町村文化財担当者も必要に応じて参加してもらった。

協議委員

杉井健（熊本大学文学部准教授）

高木恭二（宇土市民会館長）

高木正文（元熊本県教育庁文化課課長補佐）

市町村文化財担当者

吉永明・米崎寿一・山内淳司・西山由美子・村田仁志（八代市経済文化交流部文化振興課）

藤本貴仁・芥川博士（宇土市教育委員会）

神川めぐみ（宇城市教育委員会）

徳弘恵吾・篠田良・山口駿・西田京平・矢野京子・高野信子（上天草市教育委員会）

今田治代（氷川町教育委員会）、松本博幸（天草市観光文化部文化課）

熊本県立装飾古墳館

坂口圭太郎（学芸課長 平成24～29年度）

池田朋生（参事 平成24・25年度 現在 阿蘇世界文化推進課主幹）

福田匡朗（主任学芸員 平成26～28年度）

事務局

【平成24年度】

調査責任者 小田信也（文化課長）

西住欣一郎（課長補佐）

調査総括 岡本信也（文化財調査第2係長）

調査事務局 中津幸三（課長補佐兼総務助成班担当）

調査担当 福田匡朗（主任学芸員）

【平成25年度】

調査責任者 小田信也（文化課長）

西住欣一郎（課長補佐）

調査総括 岡本信也（主幹兼文化財調査第2係長）

調査事務局 廣石啓哉（主幹兼総務文化係長）

天草英子（主任主事）

調査担当 福田匡朗（主任学芸員）

【平成26年度】

調査責任者 手島伸介（文化課長）

西住欣一郎（課長補佐）

調査総括 岡本信也（主幹兼文化財調査第2係長）

調査事務局 廣石啓哉（主幹兼総務文化係長）

天草英子（主任主事）

調査担当 古城史雄（主幹）

【平成27年度】

調査責任者 手島伸介（文化課長）

村崎孝宏（課長補佐）

調査総括 岡本信也（主幹兼文化財調査第2係長）

調査事務局 廣石啓哉（主幹兼総務文化係長）

天草英子（参事）・竹馬牧子（主事）

調査担当者 古城史雄（主幹）

【平成28年度】

調査責任者 平井貴（文化課長）

村崎孝宏（課長補佐）

調査総括 岡本信也（主幹兼文化財調査第2係長）

調査事務局 左座守（主幹兼総務文化係長）

稲本尚子・天草英子（参事）

竹馬牧子（主事）

調査担当者 古城史雄（主幹）

【平成29年度】

調査責任者 岡村郷司（文化課長）

村崎孝宏（課長補佐）

調査総括 岡本信也（主幹兼文化財調査第2係長）

調査事務局 左座守（主幹兼総務文化係長）

稲本尚子・天草英子（参事）

竹馬牧子（主事）

調査担当者 古城史雄（主幹）

島浦萌（臨時整理補助員）

【平成30年度】

調査責任者 岡村郷司（文化課長）

村崎孝宏（課長補佐）

調査総括 長谷部善一（主幹 文化財調査担当）

調査事務局 一寶直也（主幹 総務担当）

津田光生・松本哲郎（参事）

佐藤賢一（主任主事）

調査担当 古城史雄（参事）

島浦萌（臨時整理補助員）

【平成31年度・令和元年度】

調査責任者 中村誠希（文化課長）

長谷部善一（課長補佐）

調査総括 宮崎敬士（主幹 文化財調査担当）

調査事務局 津田光生（主幹 総務担当）

松本哲郎・佐藤賢一（参事）

調査担当 古城史雄（参事）

中川治（臨時整理補助員）

指導助言

文化庁 瀬宜田佳男・近江俊秀・建石 徹・川畑 純

第3節 調査の経過

平成24年度

調査開始にあたり、市町文化財担当者との意見交換を実施、装飾古墳の実態を把握するためのアンケートを実施する。

平成25年度

平成26年2月18日に最初の協議会を開催する。協議会は当面市町持ち回りで開催し、併せて現地の装飾古墳の検討することとした。また古墳調査票の様式を事務局で作成し次回の協議会で提示することを決定する。この他、調査対象とする古墳について初期の装飾古墳に限定する等、古墳の絞り込みについて議論したが、最初から限定すべきではないという意見が大勢を占めた。次いで3月に事務局と協議委員とで装飾古墳調査票の内容をどのようなものにするか、今後の会議の進め方について検討するため、特定の古墳を抽出し現地踏査と資料の調査を実施した。

平成26年度

計3回の協議会を行う（平成26年5月29日・平成26年11月14日・平成27年2月17日）。第1回協議会では、前年度問題となった対象古墳の絞り込みについて、まずは八代海周辺に位置するすべての装飾古墳を対象とし、後に必要であれば絞り込むことで了承される。事務局が作成した古墳調査票の内容を説明し、次回協議会までに古墳調査票の記入を市町担当者に依頼する。また第2回・3回協議会は市町が作成した調査票の検討を中心として行った。過去の調査は市町の文化財専門員が配置される以前のものが多く、市町にはその資料がないことが判明する。また保存整備事業の工事記録も多くが市町村合併時に廃棄されてしまっていることがわかった。26年度は宇城市国越古墳・鴨籠古墳・小田良古墳、宇土市ヤンボシ塚古墳、上天草市大戸鼻古墳群・千崎古墳群の見学を行う。その他熊本県文化課が昭和48年度・49年度に行った石室・石棺の実測図の所在確認、関連古墳の発掘届・現状変更届を調査する。

平成27年度

計3回の協議会を開催する（平成27年5月28日・平成27年11月12日・平成28年2月16日）。発掘調査に伴わないものも含め市町に残されている装飾古墳の資料（新聞記事・広報記事等）調査を行い、その成果を協議会で報告してもらう。また第1回協議会では、八代市田川内1号古墳を見学し、その場で保存科学的視点での観察方法を県文化課池田参事より説明を受ける。その他第3回協議会では、事務局が行った資料調査について情報を提供した。なお事務局が行った資料調査は、人吉市教育委員会が所有する國學院大學故乙益重隆名誉教授の資料（乙益文庫）調査、熊本県博物館ネットワークセンターにおいて故白石巖氏が撮影された装飾古墳の写真調査がある。この他宇城市国越古墳の発掘調査に参加された伊藤奎二氏にお話を伺い、当時の石室実測図等の資料提供を受けることができた。

平成28年度

平成28年4月におきた熊本地震の影響で協議会の開催は1回（平成29年2月28日開催）のみであった。参加市町が少なく報告書内容の検討は次年度に回すこととなる。その他事務局では、京都大学において京都帝國大學文科大學考古學研究報告第一冊及び第三冊に掲載されている写真・拓本等を中心に熊本県関連の資料調査を実施した。また「天草の古代」「不知火町史」を執筆されている故坂本経堯氏の資料調査も実施している。

平成29年度

3回の協議会を実施する（平成29年6月22日・平成29年11月17日・平成30年3月1日）。1回目の協議会で報告書について報告書構成の説明、執筆要綱等を提示し執筆分担を決定し、第3回協議会で次年度以降の報告書工程を示した。なお第2回協議会は事務局と委員のみで行い、事務局が作成した「研究

史」・「各古墳の概要（事務局分担分）」について協議委員より指導・助言をうける。

平成30年度

協議会は2回行っている（平成30年11月28日・平成31年2月26日）。第1回協議会では市町担当者が作成した原稿について疑義があるものについて検討を行った。第2回は事務局と協議委員で行い、報告書総括について文化庁より指導を受けたことをふまえその内容を協議した。また正式に文書の執筆を協議委員及び市町担当者に公文書で依頼を行った。

平成31年度・令和元年度

小鼠蔵1号墳・大鼠蔵尾張宮古墳・田川内1号古墳において石室の三次元計測を行ったほか、井寺古墳・大戸鼻古墳群・広浦古墳の補足調査を行った。

第4節 謝辞

本調査を実施するにあたっては、多くの方々、諸機関のお世話になった。以下にご芳名を記し、感謝の念を捧げたい（順不同・敬称略）。

甲元眞之（熊本大学名誉教授）・和田晴吾（立命館大学名誉教授）

吉井秀夫・下垣仁志・阪口英毅（京都大学）・池田栄史（琉球大学）・河野一隆（東京国立博物館）

伊藤奎二・徳永文代・江上節子

國本信夫（熊本県博物館ネットワークセンター）・手柴友美子（人吉市教育委員会）

橋口剛士（嘉島町教育委員会）・鳥津亮二・石原博（八代市立博物館未来の森ミュージアム）

有木芳隆・萬納恵介（熊本県立美術館）

木村龍生・廣田静学・坂井田端志郎・中村幸弘・亀田学（熊本県教育委員会）

京都大学文学部考古学研究室・熊本県博物館ネットワークセンター・熊本県立美術館・八代市立博物館未来の森ミュージアム・人吉市教育委員会・嘉島町教育委員会・東京国立博物館



図1 上左：28年度第1回会議（北園上野古墳群見学）、上右：29年度第3回会議、下：30年度第1回会議

第2章 八代海周辺の装飾古墳についての研究史

1 はじめに

装飾古墳の研究は、個別研究から東アジアの視点での装飾古墳研究まで膨大な論考がある。熊本の装飾古墳については乙益重隆の論考がある(乙益 1984)。近年では高木恭二により研究史がまとめられている(高木恭 2002・2005・2012)。高木は、装飾古墳研究の歴史として第1期(江戸期:偶然の発見と地誌への記載)から第6期(1990年以降:全国的視点での調査研究の集約)までに分け、大きな流れとして江戸期から明治にかけて発見の記録や単なる紹介であったが、広く全国に知られるようになって、より詳細な調査が行われ雑誌に発表され、この蓄積が次第に総合的な研究に結びついていったとする。特に京都帝国大学による九州の装飾古墳調査はその後の研究の進展に大きく寄与したとする(高木恭 2012)。これは1916年から1917年にかけての京都帝国大学による調査で、今回掲載した装飾古墳37基中16基が既に調査されている。その成果は『肥後における装飾ある古墳及横穴』(濱田・梅原 1917)、『九州における装飾ある横穴』(濱田・梅原・島田 1919)としてそれぞれ報告されている。

その後装飾古墳を扱ったものは1952年出版の齊藤忠「装飾古墳の研究」まで認められないが、1960年代から1970年代に装飾古墳関連書籍が多数出版されるようになる。その中でも1964年に出版された雑誌太陽「崩れゆく装飾古墳」(谷川編 1964)はカラーグラビア写真を豊富に盛り込むことで多くの人の知るところとなり装飾古墳ブームを起こした。同じ年に刊行された「装飾古墳」(小林編 1964)では装飾古墳の種類を石棺系・石障系・壁画系・横穴系の四種に分類し、石室構造の変遷を考慮して年代を決定するなど、現在の装飾古墳研究の基礎を築いた出版物である。その他主なものとして、「装飾古墳」(日下 1967)・「装飾古墳」(森 1972)・「日本装飾古墳の研究」(齊藤 1973)・「古代史発掘 装飾古墳と文様」(乙益編 1974)・「装飾古墳」(玉利勲 1978)・「装飾古墳」(藤井・石山 1979)などがある。乙益編「古代史発掘 装飾古墳と文様」では、彩色壁画の顔料や装飾古墳の保存科学についても取り上げている点は特筆される。この時期の装飾古墳研究は、装飾文様の種類とその意味に重点がおかれていた。特に直弧文については多くのページを割いている。それ以外には装飾古墳の分布に偏りがあることや装飾の目的について言及している。例えば「古代史発掘 装飾古墳と文様」では装飾古墳が北・中部九州に集中し、肥後南部に幾何学文が多く、菊池川流域や北部九州には壁画系装飾古墳が多いことを指摘している。若干の年代観の違いはあるものの他の書籍も同様であり、装飾の目的も鎮魂・辟邪とほぼ共通している。一方で装飾古墳の年代は5世紀前半、後半と言った大まかなものが多く、地域単位で古墳の先後関係を言及したものはない。また年代観が研究者により異なる古墳があるが、多くはその根拠が示されていない。

その後80年代になると出版数は少なくなるが、それでもコンスタントに装飾古墳を扱った書籍は出版され、主なものとして「装飾古墳」(森 1985)、「古代東アジアの装飾墓」(町田 1987)がある。また熊本県教育委員会から「熊本県装飾古墳総合調査報告」(高木正編 1984)が刊行されている。これは熊本県が1973年度(昭和48年度)から2か年をかけて行った装飾のある横穴式石室及び石棺の測量図作成調査、1981年度(昭和56年度)から3か年をかけて行った装飾のある横穴墓の悉皆調査の成果、これに過去に研究者や高校の考古学クラブが行った調査成果を加えたものである。これにより熊本県の装飾古墳の全体像を捉えることができるようになり、大きく研究が前進する契機となった。

1993年に国立歴史民俗博物館と朝日新聞社との共催による「装飾古墳の世界」が開催される。その研究成果である「装飾古墳の諸問題」(国立歴史民俗博物館 1999)には、明治以降から1995年までの主要文献が掲載されるとともに多角的視点での研究報告書となった。また2002年には、「装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～」と言うテーマで第51回埋蔵文化財研究集会在開催され、全国の装飾古墳を網羅し

た資料集が作成されている（埋蔵文化財研究会 2002）。

一方で高松塚古墳やキトラ古墳の壁画の劣化が問題となり、文化庁により古墳壁画の適切な保存活用を行うために「古墳壁画の保存活用に関する検討会」が設置され、調査研究を行う装飾古墳ワーキンググループが組織された。その成果報告書が2014年に刊行されている（古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ 2014）。その後2016年の熊本地震で被災した装飾古墳についても修復方法等についても引き続き調査研究が行われている。

今回の研究史は「八代海周辺の装飾古墳の発生と展開」に係るものに限って取り上げる。逆に石障系横穴式石室や石棺についての研究史は、一見装飾古墳とは関係ないように思われるが、初期の装飾は、横穴式石室の石障に施されるので、石障系横穴式石室の発生や伝播についての研究は取り上げ、また熊本から他県へ運ばれた石棺に装飾が施されている事例があるので、石棺輸送の研究も取り上げる。このほか装飾顔料等の科学分析や熊本県に於ける装飾古墳保護の取組についても、この研究史の中で述べる。

2 装飾古墳発生に関する研究

(1) 発生期の装飾古墳の年代観に関して

1970年代までの研究では、4世紀頃畿内及びその周辺で直弧文や円文を描くことから始まり5世紀の前半で途絶えたとされている（先駆的装飾）。その後5世紀中頃有明海沿岸で石人山古墳の妻入横口式家形石棺に直弧文が描かれることから新たに始まったとされた（初期装飾）。また八代海沿岸の長砂連古墳の直弧文は石人山のものに類似することからそれに続くものとされ、有明海沿岸・八代海沿岸の装飾古墳が古いことが指摘されている（小田 1974）。他の書籍も同様であり、初期の装飾古墳として石人山古墳があげられ、周辺にも装飾ある横口式石棺が分布することから有明海東部沿岸地域で装飾古墳が始まり、その後八代海沿岸に伝わったと考えられていた。

ところが1994年の高木恭二の石室構造変遷の研究により、八代海沿岸には長砂連古墳より古い装飾古墳が存在し、それは前方後円墳集成編年5期であるとされた（高木 1994a）。同じく高木の一連の石棺研究により、有明海東岸の妻入横口式家形石棺は、菊池川流域や氷川流域で製作されたことが解明され（高木 1987b・1994b）。更に1998年に「八女古墳群の再検討」をテーマに開催された第1回九州前方後円墳研究会で、有明海東部沿岸地域の妻入横口式家形石棺の年代について前方後円墳集成6期から7期に位置づけられたこと（岸本 1998・神保 1998・市川 1998）から、装飾古墳の発生は八代海沿岸地域から始まったとの認識が一般的となっていた。一方で初期装飾の始まりが5世紀前半頃まで遡ったことで、先駆的装飾との時期差が縮まったが、先駆的装飾は、本当に途絶えたとと言えるのか、系譜が違うのかということについての研究はあまりなされていない。

(2) 横穴式石室出現に関して

九州の横穴式石室についての研究は1950年代から本格的に始まる。論点は九州には2つの系統の石室があり、その系譜がどこに求められるかであった。その一つが肥後を中心に分布する肥後型横穴式石室で、最大の特徴は正方形プランの玄室とドーム形（穹窿形）の天井にある（樋口 1955・白石 1965・小田 1966）。また初期の肥後型横穴式石室は、玄室壁面に沿って板石を四方に巡らす石障が

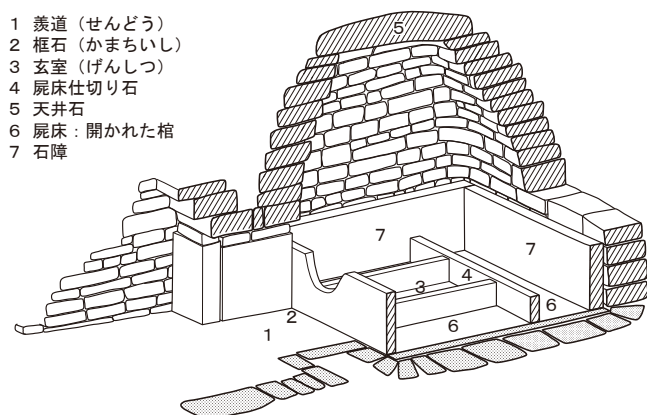


図2 肥後型横穴石室模式図

付随し、そこに円文などの装飾が描かれることが多く、石障系横穴式石室と呼ばれることもある。

八代海における最古の装飾古墳は円文を持つ小鼠蔵1号墳とされ前方後円墳集成5期に位置づけされている(高木恭 1994a)。横穴式石室なのか縦穴式石室なのか結論は出ていないが、石障を持つ石室で、石障の出現と同時に装飾も出現している。つまり石障系横穴式石室の出現と装飾の発生は不可分な関係であり、石障系横穴式石室の発生を研究することが装飾の発生を知ることに繋がっていくと考える。

肥後型横穴式石室の系譜について、横口の発想や玄室壁面隅角の稜線を消し構築するドーム形天井などの構築技術をどこに求めるか、石障の起源は何か、大きく二つに分けられる。

石室構築技術では、系譜を国外に求める考え方と国内に求める考え方がある。国外に求める考え方では、楽浪地域の埴室墓の技術が何らかの形で反映しているとする説(樋口 1955)や楽浪地域と限定せず中国或いは高句麗の埴室墓とするものがある(乙益 1980・松本 1971・矢野 1978)。また百濟熊津期や漢城期の石室に求める考え方(白石 1965・柳沢 1980)がある。問題は、埴室墓は年代的に古すぎ、百濟の石室は肥後型横穴式石室よりも後出することである。ただし近年朝鮮半島で稜線を消すドーム形天井石室が発見されていることから、今後さらに遡上し肥後型石室の起源となる石室が発見される可能性も指摘されている(甲元 2017c)。

国内に求める説では、稜線のないドーム形天井が地下式板石積石室墓(板石積石棺墓)と共通することなどから、地下式板石積石室墓(板石積石棺墓)や縦穴式石槨など国内に起源を求める説がある(高木恭 1994a)。地下式板石積石室墓(板石積石棺墓)に関しては、肥後南部の初期横穴式石室の多くが地表を掘り下げ、そこに石障を配置し石室の下部を構成する半地下式の石室であることからその関係が指摘されている(乙益 1980)。これに対して、地下式板石積石室墓(板石積石棺墓)には横口から墓室に入るという発想は窺えない等の反論がある(甲元 2017c)。横口の発想について上天草市千崎10号墳・18号墳箱式石棺や桐の木尾ばね古墳から検出された人骨が北部九州の渡来系弥生人やその影響を受け継いだ古墳人と同じ形質の特徴をもつことから北部九州との関連を考えたとしても良いとする考えもある(杉井 2009b)。

石障の成立は、箱式石棺に起源を求める考えがあり(小田 1966・乙益 1980・藏富士 1997・杉井 2009b)、特に杉井は、初期石障は平滑に仕上げられた砂岩をていねいに組み合わせるなど千崎型箱式石棺と共通するので、石障発生の候補として、千崎型箱式石棺^(註)をあげる。

その他、地下式板石積石室墓(板石積石棺墓)の周壁の板石に起源を求める考え(高木恭 1994a)もある。また装飾を施すためという考え方もある(小林 1964・松本 1971)。装飾の施されない石障もあるため装飾のために石障が発生したという説は一般的ではないが、本来すべての石障に彩色が施されていた可能性があるという指摘(佐古 1992)もあるので、本当に彩色による装飾がないか注意しておく必要はあるだろう。その他九州の開かれた棺である石障や仕切石は遺体の周りを板石で囲うという点で中国北朝の埋葬施設である「石棺床」の屏風に相当するとして、九州—(高句麗)—北朝とつながる可能性が指摘されている(和田 2007)。前述した石室構築技術の系譜を楽浪や高句麗に求める説に通ずる点でも注目される。

前述した高木論文は、横穴式石室の使用石材と石室構造に着目したもので、最古とされる小鼠蔵1号墳の石室壁体に用いられた安山岩と水俣周辺の地下式板石積石室墓(板石積石棺墓)に用いられた安山岩が同一産地であることを示し、両者の間には密接な関係があるとしたものである。こういった石室使用石材からの研究を更に進め、装飾文様と石材の関係や地域首長が石切場や石工工人の掌握する過程について論じた(高木恭 1999)。なお杉井も、石障石材と装飾文様の関係に着目し、砂岩製石障は円文など具象文様が、凝灰岩製には直弧文など幾何学文様が描かれる傾向があることや砂岩という石材で共通する箱式石棺と石障とのあいだには描かれる文様の内容についても共通性が認められるという指摘を行っている(杉井 2009b)。このような使用石材に着目した研究は、近年熊本県立装飾古墳館でも行われているが、「4 科学的分析によ

る研究」の所で述べる。

(3) 装飾の目的・意義についての研究

初期装飾の目的は避邪・鎮魂と言うことは古くから言われており、加えて八代海沿岸の箱式石棺の装飾については副葬品の代用としての目的も考えられている(乙益 1974)。

和田晴吾は棺の機能に着目し、遺体を密封するものという考えが極めて薄いものを「開かれた棺」とし、隙間のない密封された棺を「閉ざされた棺」とした(和田 1989)。この概念の提唱以来埋葬方法や葬送儀礼など埋葬習俗の視点からの研究が見られるようになる。遺体を納める「棺」とそれを保護する「槨」は、遺体に邪悪なものが寄りつかないように、邪悪なものが寄りついて暴れ出さないようにする装置とし、辟邪・鎮魂・密封といった性格を合わせもつ棺を「閉ざされた棺」とし、畿内の横穴式石室は「棺」と「室」で二重に密封されるとした(和田 2003・2007)。一方九州の横穴式石室では石障や仕切石など遺体を直接安置する諸施設が発達し、それらを「開かれた棺」と呼んだ。畿内系の横穴式石室は密封型の「閉ざされた棺」であり石室内部空間は死者が自由に浮遊できないものであったので装飾は施さず、一方九州では死者が石室内を自由に浮遊できる「開かれた棺」であったことから、石室内に邪悪なものが侵入しないように、邪悪なものが侵入して暴れ出さないようにとの工夫が装飾であったとする。また初期の装飾は、槨や室に対するものはほとんどなく、棺の辟邪・密封或いは棺に相当する石障の辟邪をより確実にするものであったとする(和田 2014)。

広瀬和雄は、初現期の装飾古墳として大阪府の安福寺所在の割竹形石棺をあげ、その淵現として、鏡面を外側に向けて割竹形木棺を覆っていた奈良県天理市黒塚古墳や奈良県川西町島ノ山古墳など、それらがもつとされた呪力で遺骸を封じ込め、邪悪なものへの侵入を防ぐ辟邪の観念に行き着くとした。やがて象徴性をおびて鏡文や同心円文に形象化されていった可能性を指摘している。次の段階の装飾は石棺・石障という狭い場所が辟邪空間であったとする。その後玄室全体に施文範囲が拡大していく時期に「靈魂観」が成立し、動かない遺骸から、石室内を浮遊する靈魂が辟邪の対象となった結果とする(広瀬 2009)。

河野一隆は、装飾は誰に見せるものか(被葬者・会葬者)、いつ描かれたかという問題を提起し、また「開かれた棺」「閉ざされた棺」を被葬者の視点でみると「開かれた棺」では「被葬者は見せられ」、「閉ざされた棺」では「隠される」ことになり、装飾古墳本来の使われ方は、前室に控えた会葬者が壁画で彩られた空間の中で被葬者と対面するための場所とする。装飾古墳とは死者を見せる「開かれた棺」を採用した葬送思想と密接に関連して生み出されたとする。ついで鎮魂・辟邪の方向性が、被葬者に対するものか、外部から憑依するものかの問題についても取り上げ、外側からの邪物に対応しようと思えば石障外側に施文すればよいとし、武器・武具の表面を被葬者に見せていることは、被葬者に対する「封じ込める力」が作用していたとする(河野 2011)。

以上の論からは装飾の目的はやはり辟邪・鎮魂であり、分布が九州に集中することも畿内とは死生観が異なっており遺体を密封することのない「開かれた棺」であったからと考えれば理解できる。畿内では石棺を更に竪穴式石槨で囲う、横穴式石室内にも密封できる棺を安置するなど、二重の封じ込めである。一方九州の装飾ある石棺は直葬或いは石槨があっても横口のある石棺である。横穴式石室内も開かれた遺体安置施設であり、一重の封じ込めであるので辟邪のため装飾が描かれた。

しかし同じ開かれた棺でも北部九州の初期横穴式石室には装飾が施されないし、石障系石室の中でも装飾のないものもある。このことについて、開かれた棺であることに加えて、更に何らかの要因があったであろうことが考えられるが、明確な回答は出されていない。また当初石棺の外面に装飾が施されていたのが、八代海沿岸では、石障の内面、石棺の内面に描かれることへの変化も納得できるような回答は出ていない。当初は外部の邪物に対応していたのが、八代海沿岸で被葬者を封じ込める方向に変化したのだろうか。

これに対し、初期装飾の目的は乙益同様、副葬品の代用とし、開かれた棺では辟邪の意味はなさず、直弧文も単なる文様に過ぎないとする考えも出されている（甲元 2017b）。確かに初期の装飾古墳は、小規模な円墳の主体部であるので、副葬品の代用として描かれた可能性はあるし、石棺や石障の内側に描くことも副葬品と考えれば納得がいく。宇野も小鼠蔵 1 号墳の円文は、前期古墳に見る頭上に副葬された鏡を想定させている（宇野 2008b）。前方後円墳の主体部である北部九州の横穴式石室では副葬品は豊富だろうから副葬品の代用として装飾を描く必要はなかったであろう。装飾自体が「文様」表現に過ぎないとなれば、石障系石室の中でも描かれない古墳があっても不思議ではない。ただ初期装飾の文様は、鏡（円文・同心円文）以外は刀・韋・盾など武具であり本当に辟邪の目的がなかったのか。前期古墳での頭部付近の鏡の副葬も辟邪の意味合いがあるとされており（広瀬 2009）、もう少し慎重に検討が必要であろう。

3 装飾古墳の展開についての研究

(1) 装飾文様の変遷

装飾文様について高木恭二は、石製表飾や装飾古墳の文様は地域祭祀のシンボルではないかとする。小地域ごとに円文・同心円文・直弧文・連続三角文・韋・盾などその地域の祭祀シンボルとして単一文様であったのが、地域間の交流をきっかけに 2 種 3 種の文様を一緒に描くようになったことを想定している（高木恭 1994c）。

また高木正文は肥後の装飾古墳について石室構造の変遷と装飾文様の変遷の両面から新旧関係を検討し地域ごとに編年を組み立て、それらの相互比較から装飾古墳の展開について言及した。熊本県下の初期装飾から横穴墓まで網羅した画期的な論文で、八代海周辺で装飾古墳が発生したことを文章化した最初の論文である。装飾の初源地は肥後南部の八代市で、天草や宇土半島へ分布域を広め、次第に北上し菊池川流域に伝わったとする。また直弧文を有す古墳は他の古墳より突出した存在であるとし、直弧文が簡略化したものが対角線文で、それが三角文に変化したとする（高木正 1999）。しかし研究対象が熊本県内に限定されたため、県外の初期装飾古墳、例えば有明海東部沿岸の妻入横口式家形石棺や岡山県千足古墳等との関係については触れられていない。

藏富士寛は、5 世紀代に盛行する石障系・石棺系装飾を「初期装飾」とし、施文者は石障製作や石棺製作にかかわった石工集団とした。一方 6 世紀代の彩色を中心とした装飾を「壁画装飾」とし、施文者は画工の可能性を示唆した。この大きな変化は玄室空間認識の変化で、石障の前障が消滅することで、棺（石障）から本来の意味での室（石室）になったとした。石屋形が出現することと併せて大きな画期であり、葬送に対する意識や儀礼の変化に伴うものであったとする（藏富士 1997・1999）。この「壁画装飾」成立の時期が和田の言う石室内を自由に浮遊できる「開かれた棺」成立の時期であり、広瀬の言う玄室全体に施文範囲が拡大していく時期に霊魂観が成立し、動かない遺骸から、石室内を浮遊する霊魂が辟邪の対象となった時期と思われる。この大きな変化は、装飾古墳の分布にも表れる。これ以降装飾古墳の中心は菊池川流域となり八代海沿岸では次第に衰退していく。併せて北部九州に装飾古墳が本格的に広まっていく。肥後地域以外に装飾古墳が分布する背景には、石室構造に関係しない石障から、石室壁体に取り込まれた石屋形への変遷を念頭におき、モノ（製品）の移動からヒト（製作者）の移動へと変貌を遂げたことが装飾古墳の拡大を容易にしたとする（甲元 2017b）。

この画期を境として八代海沿岸では彩色による装飾古墳は国越古墳と宇賀岳古墳のみになる。またこの後八代海や有明海を臨む宇土半島基部側に舟の線刻を主体とする装飾古墳が出現する。彩色による装飾古墳が八代海沿岸地域で衰退することについて具体的に言及したものはない。それは、八代海沿岸地域は 6 世紀代の古墳の内部主体が判明しているものが少なく、確実なものは氷川流域の大野窟古墳くらいで、同じ氷川流

域の野津古墳群も姫の城古墳に石屋形が採用されているが、残存からの判断で本当に装飾がなかったのかは不明であるなど、資料が乏しいことも一因である。舟の線刻については、船団等の海との関係が言われている（高木恭他 2010）が、その分布は限定され宇土半島基部付近に集中し、より海に囲まれた宇土半島の先端側や天草地域では確認されておらず、以前の装飾古墳との関係も不明である。

（2）石室の伝播に関して

2007年に「九州系横穴式石室墓の伝播と拡散」をテーマに日本考古学協会熊本大会が開催され、その記録集「九州系横穴式石室の伝播と拡散」（杉井編 2009a）が刊行されている。要約すれば九州系横穴式石室の伝播は単発的でごく限られた地域以外では根付くことはなかったということになるのだが、九州系の特色とされる石屋形・仕切り石など開かれた棺の要素は畿内を除く地域では比較的広く受け入れられていることがわかった。

古くは、出雲の石棺式石室と肥後との関係が指摘され（梅原 1918・山本 1964）、小田は宇賀岳古墳を石棺式石室の祖形とし、その技術が出雲に受容されたとした（小田 1980）。その後も角田や高木恭二も同様な指摘をおこなっている（角田 1993・高木恭 1995）。

石障系横穴式石室については、肥後以外の石障系石室は、福岡県久留米市の日輪寺古墳を除くと肥前南部の造墓集団が関与し肥後型とは区別されるとし（柳沢 1980）、肥後以外の石障系石室に関連して筑肥型横穴式石室と言う型式を設定した。肥後型の石障、屍床配置の属性と北部九州型の玄室平面形、天井構造の属性を折衷した（A類）と、肥後型の玄室平面形、天井構造の属性と、北部九州型の玄門、前庭構造の属性を折衷した（B類）があり、筑後地域の首長層主導のもとに創案されたとした（柳沢 1990・2007）。その後第2回九州前方後円墳研究会において九州の横穴式石室の集成図が作成された（九州前方後円墳研究会編 1999）。これにより従来の北部九州型横穴式石室の定義には収まらないものが多く存在することが判明し、藏富士は従来の北部九州型横穴式石室を今宿唐津型・福岡平野型・宗像平野型の3つに分類した（藏富士 2011）。これを受け太田宏明は今宿唐津型・福岡平野型・宗像平野型の他、肥後型石室を加えた4類型からなるものを九州系初期横穴式石室とし、これらの融合形態が「筑肥型」で、その融合の在り方は様々であり、類型としてまとめることはできないとし、岡山県千足古墳はこの融合形態が伝播したものとされた（太田 2016）。石室の伝播に装飾を伴うものは日輪寺古墳と千足古墳の2基だけである。熊本県内でも石障系石室で装飾を施される割合は八代、天草では100%だが、宇土半島や緑川流域では50%程度となり、白川下流域では更に低くなり、県北の菊池川流域や合志川流域では皆無で、八代海を離れるにしたがって装飾を施される比率が少なくなっていく。この要因については、これまで検討はされたことはなかった。

（3）石棺に関して

石棺は形態分類により、北肥後型・中肥後型・南肥後型に分類され、装飾のある竜北高塚古墳・晩免古墳・潤野古墳・石之室古墳の家形石棺はすべて南肥後型で、竜北高塚古墳石棺を舟形石棺に最も類似する環状縄掛突起をもつことから装飾をもつ南肥後型家形石棺の最古例とした（高木恭 2007）。

唯一棺身が刳抜式石棺である鴨籠古墳の石棺は、岡山県造山古墳前方部に存在する石棺と形態的に近いことを指摘し（高木恭 1986）、次いで九州外の阿蘇ピンク石（馬門石）家形石棺の製作地が宇土半島であり、その祖形が鴨籠古墳石棺や造山古墳前方部に存在する石棺であることを明らかにしている（高木恭・渡辺 1990b）。その後、鴨籠古墳石棺を中肥後型舟形石棺として型式設定を行い（高木恭 1994b）、この中肥後型舟形石棺から変化した中肥後Ⅳ型家形石棺が畿内の大王墓をはじめ有力古墳に使用されていくことを明らかにしている（高木恭 1998）。

4 科学的分析による研究

科学分析を利用した研究は、装飾顔料について行われ、古くは熊本市釜尾古墳で顔料の分析が試みられている（濱田他 1919）。その後山崎一雄は、赤がベンガラ、黄色が黄土、白が白土、黒にはマンガン酸化物と炭素の二種類があるとした（山崎 1951・1974）。その他に江本義理（江本 1974）、永嶋正春（永嶋 1999）などの研究がある。基本的には 1951 年の時点で山崎が指摘していた事実を大きく逸脱するような結果は青色顔料以外では見られないようである。1998 年からは熊本県立装飾古墳館と東京国立文化財研究所と合同で熊本県内の主要古墳の顔料・彩色調査を開始している。近年は大型カメラによる写真撮影、分光光度計、小型蛍光 X 線分析装置等を使用した分析が行われている。従来青色と考えられていたものが実は灰色であったことなどがわかってきている（朽津・川野 2000）。

石材については、石棺材や石室石材の顕微鏡等を使用した分析（高木恭・渡辺 1990a・b・高木恭 1994b・1999）があり、近年は帯磁率計を用いた分析、また石材の硬度についてエコーチップ硬度試験などがある。熊本県立装飾古墳館でも、装飾古墳使用石材を対象とした調査を行っている。ここでは石材の外観・性質を利用して人の手が如何に関わっているかという視点から分類する「文化財石材」の概念を用いていることに特色がある。文化財石材の調査には石の呼称のほか、石の硬度、石切場はどこだったのか、また加工技術や石工道具の研究なども含まれ、聞き取り調査が重要な意味を持つという。この調査の成果と以前から進めていた装飾顔料の調査成果をもとに 2003 年に「削る・創る 阿蘇の灰石展」、2004 年には「掘る・刻む 阿蘇の灰石展」が開催され、集大成として 2006 年に「阿蘇の灰石展」が開かれている。石障の製作、石障に直弧文を刻み顔料を塗る実験を通して石工の技と道具、また段取りを推定する試みや聞き取りを行っている。併せて石障や石製表飾の石材選択についても石材硬度の視点から言及している（池田編 2006a）。また石工道具についての成果や石材硬度試験の成果は別稿で報告している（池田 2006b・朽津・松倉・池田 2007）。これらは装飾古墳築造工程を推察する研究の一環で、その後高精度な三次元計測調査へと進んでいく。ここで得られた詳細な画像によって得られた細かな加工痕等に注目し、使用工具や工程を推察する試みも行われている。また往時の人の装飾を見る視点も見いだせるとする。（池田他 2009a・池内編 2015）。池田は個人的にも研究をすすめて、古墳時代の石材の使い分けは文化財石材的な特性を理解して築造に関わっている可能性を指摘している（池田 2013）。

5 熊本県に於ける装飾古墳の保存活用について

(1) 戦前までの取組

1880 年（明治 13 年）に熊本県下で古墳が発見された場合は調査報告が命じられ、その結果としてまとめられた『古墳発顕記録』には晩免古墳・潤野古墳等の装飾古墳も報告されている。1915 年（大正 4 年）には熊本県告諭第一号を以て「史蹟調査保存ニ関スル規程」が発せられ、また熊本県令第 25 号により「名勝・旧蹟・古墳墓・天然記念物ニ関スル規定」が制定され、登録台帳を作成することが条文化された。また京都帝国大学により『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』（濱田他 1917）、『九州に於ける装飾ある古墳』（濱田他 1919）が刊行される。この報告書に収められている古墳のうち井寺古墳・千金甲甲古墳・同乙古墳・釜尾古墳・大村横穴群・石貫穴観音横穴・石貫ナギノ横穴群の 7 古墳が 1921 年（大正 10 年）の第 1 期の国指定史跡になっており、次の 1922 年（大正 11 年）には、チブサン古墳・鍋田横穴の 2 古墳が指定されている。熊本県下の国指定史跡は、戦前 11 件でそのうち 9 件が前述の装飾古墳であり、残り 2 件は昭和になってからの指定であることから京都帝国大学により行われた装飾古墳調査の影響の大きさが窺われる。また装飾古墳保存の取組としては、京都帝国大学による調査の直前の 1917 年（大正 6 年）釜尾村青年団により釜尾古墳の修理がある。

(2) 戦後の取組

戦後から1972年(昭和47年)の文化課発足以前の間も装飾古墳保護の取組は行われている。1950年(昭和30年)に熊本県文化財保護条例が設置され1959年(昭和34年)から県史跡の指定が開始され、装飾古墳では永安寺東古墳と西古墳・長岩横穴・城横穴群・京ガ峰横穴群が、1963年(昭和38年)に大鼠蔵古墳群が県指定史跡となっている。保存修理は、1950年(昭和25年)に井寺古墳、1957年(昭和32年)には弁慶ヶ穴古墳が、翌1958年(昭和33年)には鍋田横穴、1966年(昭和41年)には千金甲1号古墳や釜尾古墳で、1971年(昭和46年)には長砂連古墳で行われている。釜尾古墳では石室上にコンクリートドームを築き石室の保護を図るとともに墳丘を復元するなど大規模な工事が行われているがこれは例外的で、多くは装飾石材の補強や簡易な覆屋の設置程度であった。現在の水準で考えると、欠損部をセメントで補填するなど問題の多いものもある。

1972年(昭和47年)に熊本県文化課が発足すると装飾古墳保護の施策が矢継ぎ早に行われている。1つは1973年度(昭和48年度)から1974年度(昭和49年度)にかけて行った装飾のある横穴式石室及び石棺の実測調査で、その成果は1981年度(昭和56年度)から3か年かけて行った横穴墓の調査と併せて「熊本県装飾古墳総合調査報告書」(高木正編1984)として報告されている。また「熊本県の装飾古墳白書」(熊本県教育委員会1974)の発行も重要である。1972年9月から1973年3月まで現状を確認するため県下の装飾古墳を巡回し、個々の古墳の保護の方法・緊急度や経費の見積りを算出している。この構想を具現化するためなのであろうか、1973年に5件(馬塚古墳・田川内1号古墳・大王山古墳第3号・桜の上横穴群・大戸鼻古墳群)、1974年に2件(稲荷山古墳・付城横穴群)、1975年に4件(長砂連古墳・袈裟尾高塚古墳・長刀横穴1号・桂原1号)、1976年(昭和51年)(宇賀岳古墳)と1977年(昭和52年)(御霊塚古墳)に各1件の装飾古墳が県指定史跡となっている。ここで指定となった古墳の多くは直ぐに保存整備が行われている。例えば1973年には馬塚古墳・稲荷山古墳・大戸鼻南古墳・田川内1号古墳が、1975年には桂原1号古墳・長砂連古墳の整備工事が行われている。一方で技術的に未解決の問題が多いことから装飾文様やその石材に安易に手を入れることへの懸念や長期間にわたり経過観察が必要であること、専門的な研究機関の設置が必要なが随所に書かれている。1981年度(昭和56年度)までに白書で特に緊急を要するものとされた古墳は、横穴墓を除けば19基中16基に何らかの保存施設などの保護措置が取られている(埋戻しや石材移転を含む)。

活用面では1976年(昭和51年)に開館した熊本県立美術館内に装飾古墳室が設置されたことが特筆される。県内の主要な装飾古墳のレプリカを常設展示している。古代の造形美術の視点からではあるが、保存と公開の両立を図る一つの方向性を示したものであった。以上のように文化課が発足した昭和40年代後半から、昭和50年代にかけては、装飾古墳の保存に向けての動きが急速に進んだ時期であった。

平成になり特筆されるのは、「肥後古代の森」の中核施設として熊本県立装飾古墳館が開館したことが挙げられる。「肥後古代の森」は、文化庁の「風土記の丘」構想に基づき1979年度(昭和54年度)から着手した事業であった。しかし事業の早期完成のため自治省(当時)の起債事業(地域総合整備事業債)に変更し、名称も最終的には「肥後古代の森」となった。その一環として装飾古墳である塚坊主古墳の整備や横山古墳の移築復元が行われ、併せて1992年(平成4年)に全国唯一の装飾古墳研究センターとして熊本県立装飾古墳館が開館した。考古学的視点から装飾古墳のレプリカを常設展示するとともに次のような取組を行っている。

前述した顔料分析などの研究の他、県内の装飾古墳を皮切りに大型カメラを用いた写真撮影を行っている。また2008年(平成20年)からは装飾古墳の保存と公開を両立させるために保存施設の環境調査が行われ、2009年(平成21年)からは装飾古墳の一斉公開を実施し、公開前後の温湿度のデータ収集等を併せて行い、

公開時の入室による影響をいかに少なくするかの取組も行っている。この環境調査は装飾の劣化の把握及びその対処法の検討も目的に含んでいる。(池田 2009b・池田他 2010・2012)。

2016年の熊本地震により県下の装飾古墳の多くが被災した。しかし石材の部分的な亀裂や欠損、或いは孕みなど本当に震災の影響なのか直ちには判断できないものも多かった。幸い県立装飾古墳館に過去に撮影した写真があり、またレプリカも現状を再現したものであったので比較検討が出来たが、日頃からの定点観測や三次元計測の必要性を改めて痛感した。また保存施設の壁体や復元した墳丘や石材に被害があったものも多かった。保存施設が完成して40年程が経過しており、保存施設の有効性や問題点など検証作業が今後必要となってきている。

6 おわりに

まず装飾古墳の発生は、これまでの研究史をみると装飾の発生は辟邪・鎮魂のためと見る説、副葬品の代用と見る説などがある。精神的・思想的な面が大きく、なかなか結論のにくい問題である。しかし八代海周辺では、石障系石室の発生と装飾の発生はほぼ同時期と考えられるので、何故石障が発生したかを研究し、装飾の発生に迫ることも一つの方法であり、今回はこの視点も含め研究を行いたい。

次に装飾古墳の展開では、拡散するのは石障系石室であり、八代海から宇土半島北岸の有明海側へと広がり北上していく。他に八代海周辺地域で製作された装飾のある妻入横口式家形石棺が有明海東部沿岸地域に運ばれている。また装飾古墳が拡散していく時期以降に、装飾はないが九州外に運ばれた石棺も八代海周辺地域で製作されたものである。県外の装飾古墳に共通するのは、文様は直弧文であり、石障や石棺石材は、阿蘇溶結凝灰岩特に馬門石と呼ばれる宇土半島産の石材であり、この視点で鍵になる古墳を抽出し検討することで、装飾古墳が展開していく意義に迫り、八代海周辺の装飾古墳の発生と展開について日本の古墳時代史の中での位置づけを考えてみたい。

註 千崎型箱式石棺とは、石材に砂岩を使用し、長側石小口部に溝状加工を施す。石材を継ぐ場合はカギ状に加工するなど丁寧な加工を施すものである。上天草市千崎古墳群を中心として、八代海沿岸地域の箱式石棺に共通する特徴(島津屋 2009)。

参考文献

- 池内克史編 2015「最新技術でよみがえる九州装飾古墳のすべて」 東京書籍株式会社
- 池田朋生編 2006a『阿蘇の灰石展 解説図録』 熊本県立装飾古墳館平成18年度前期企画展
- 池田朋生 2006b「資料紹介 熊本県下の石工道具二例」『熊本県立装飾古墳館研究紀要』第6集：pp.83 - 95
- 池田朋生・朽津信明・増田智仁・森本哲郎・池内克史・林田和人・前田真由子 2009a「三次元計測を用いた装飾古墳製作工程の研究—熊本市千金甲1号墳の事例—」『熊本県立装飾古墳館研究紀要』第8集：pp. 1 - 4
- 池田朋生 2009b「装飾古墳モニタリングの一方法—土色計を用いた装飾古墳彩色の変化から—」『熊本県立装飾古墳館研究紀要』第8集：pp. 5 - 19
- 池田朋生他 2010『装飾古墳石室内での湿度計、彩色の見えるえを対象としたモニタリングシステムの構築』研究報告書』平成21年度笹川科学研究助成実践研究部門 (21-810 G)
- 池田朋生・菊川和美 2012「装飾古墳の博物館資料化に向けた取組み—装飾古墳保護施設の保存環境について—」『熊本県立装飾古墳館研究紀要』第9集：pp. 1 - 17
- 池田朋生 2013「天草産出の砂岩を対象とした文化財石材の研究—上天草市維和島とその周辺で営まれた石工業から—」『先史学・考古学研究と地域・社会・文化論』：pp.160 - 172
- 市川浩文 1998「佐賀における動向」『八女古墳群の再検討—周辺地域で、なにがおこったか—』第1回九州前方後円墳研究会シンポジウム 発表要旨・見学会資料：pp.55 - 68

- 宇野慎敏 2008a「装飾古墳における三角文の出現と展開—中・北部九州例を中心に—」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集—』：pp.341 – 359
- 宇野慎敏 2008b「装飾古墳における円文の出現と展開」『古代学研究』第 180 号 森浩一先生傘壽記念論文集：pp.271 – 278
- 梅原末治 1919「第 6 章 肥後国益城郡松橋の古墳」『九州における装飾ある横穴』 京都帝国大学文学部考古学研究報告第三冊 京都帝國大學：pp.34 – 37
- 梅原末治・小林行雄 1940「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」 京都帝国大学文学部考古学研究報告第十五冊
- 江本義理 1974「装飾古墳の保存科学」『装飾古墳と文様』 古代史発掘 8 講談社：pp.146 – 148
- 太田宏明 2016「終章 横穴式石室の伝播からみた古墳時代の日本列島（2）九州地方における横穴式石室の成立」『横穴式石室と古墳時代社会 遺構分析の方法と実践』 雄山閣：pp.176 – 182
- 小田富士雄 1966「古墳文化の地域的特色 九州」『日本の考古学』IV古墳時代上 河出書房：pp.114 – 174
- 小田富士雄 1974「初期の装飾古墳」『装飾古墳と文様』 古代史発掘 8 講談社：pp.30 – 34
- 小田富士雄 1980「横穴式石室の導入とその源流」『東アジアにおける日本古代史講座』4 学生社：pp.242 – 295
- 乙益重隆編 1974『装飾古墳と文様』 古代史発掘 8 講談社
- 乙益重隆 1980「石障系石室古墳の成立」『國學院大學院紀要』第十一輯：pp.31 – 60
- 乙益重隆 1984「熊本県下における装飾古墳の発見と研究の歴史」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会：pp.363 – 369
- 角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『島根県考古学会誌』第 10 集 島根考古学会：pp.69 – 103
- 河野一隆 2010「装飾古墳研究の新展開」『史跡で読む日本の歴史』2 古墳の時代 吉川弘文館：pp.146 – 157
- 河野一隆 2011「装飾古墳における葬送の思想」『古墳時代の考古学』3 墳丘構造と葬送祭祀 同成社：pp.235 – 248
- 河野法子 1982「石障系古墳の一考察」『肥後考古』第 2 号 肥後考古学会：pp.42 – 58
- 岸本圭 1998「八女古墳群の動態」『八女古墳群の再検討—周辺地域で、なにかあったか—』第 1 回九州前方後円墳研究会シンポジウム 発表要旨・見学会資料：pp.23 – 39
- 木崎康弘 2017『肥後と球磨 その原史世界に魅せられし人々—肥後と球磨の考古学史—』 人吉中央出版社
- 日下八光 1967「装飾古墳」 朝日新聞社
- 九州前方後円墳研究会編 1999『九州における横穴式石室の導入と展開』 第 2 回九州前方後円墳研究会資料
- 朽津信明・川野邊渉 2000「九州装飾古墳の緑と「青」について」『保存科学』39：pp.24 – 31
- 朽津信明 2002「装飾古墳の顔料について—特に緑と青の問題を中心として—」『第 51 回埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開—彩色系装飾古墳を中心に— 発表要旨集』
- 朽津信明 2002「速報 装飾古墳の黒色顔料について」 第 51 回埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開発表資料
- 朽津信明・松倉公憲・池田朋生 2007「エコーチップ硬度試験による文化財石材の評価—熊本県下の装飾古墳の例—」『熊本県立装飾古墳館研究紀要』第 7 集：pp.1 – 5
- 熊本県教育委員会 1974「熊本県の装飾古墳白書」
- 藏富士寛 1997「石屋形考—平入横口式石棺の出現とその意義—」『先史学・考古学論究』Ⅱ 熊本大学考古学研究室創設 25 周年記念論文集 龍田考古学会：pp.133-166
- 藏富士寛 1999「装飾古墳考」『先史学・考古学論究』Ⅲ 白木原和美先生古稀記念献呈論文集 龍田考古学会：pp.87 – 103
- 藏富士寛 2011「玄界灘沿岸」『九州島における古墳埋葬施設の多様性—地域性と階層性はどうか〜』第 14 回九州前方後円墳研究会発表要旨集：pp.108 – 128
- 藏富士寛 2014「装飾古墳の保存と活用」『古墳時代の考古学』10 古墳と現代社会 同成社：pp.135 – 143
- 甲元真之 2017a「熊本の装飾古墳とその展開」『平成 28 年熊本地震による古墳の被災状況について』 文化庁・熊本県教育庁：pp.8 – 27
- 甲元真之 2017b「装飾古墳の分布の拡大」『葆光』：pp.19 – 34
- 甲元真之 2017c「肥後型石室考」『葆光』：pp.44 – 59
- 国立歴史民俗博物館編 1999「装飾古墳の諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 80 集

- 小林行雄 1964『装飾古墳』 平凡社
- 古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ編 2014『古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ報告書』
- 齊藤忠 1952「装飾古墳の研究」 吉川弘文館
- 齊藤忠 1965「古墳壁画」『日本原始美術』5 講談社
- 齊藤忠 1973「日本装飾古墳の研究」 講談社
- 佐古和江 1992「壁画古墳論」『古墳時代の研究』12 雄山閣：pp.89 - 104
- 島津屋寛 2009「熊本県下の古墳時代箱式石棺」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』：pp.125 - 156
- 白石太一郎 1965「日本における横穴式石室の系譜—横穴式石室の受容に関する一考察—」『先史学研究』第5号(『日本考古学論集』6に再録：pp.311 - 350)
- 神保公久 1998「北筑後地域における前方後円墳の動向」『八女古墳群の再検討—周辺地域で、なにがおこったか—』第1回九州前方後円墳研究会シンポジウム 発表要旨・見学会資料：pp.40 - 52
- 杉井健編 2009a『九州系横穴式石室の伝播と拡散 日本考古学協会 2007年度熊本大会分科会I記録集』北九州中国書店
- 杉井健 2009b「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』：pp.231 - 238
- 高木恭二 1983「石棺輸送論」『九州考古学』第58号 九州考古学会：pp.42 - 54
- 高木恭二 1986「鴨別と鴨籠」『MUSEUM KYUSHU』第21号：pp.34 - 40
- 高木恭二 1987a「石棺を運ぶ」『東アジアの古代文化』創刊50号記念特大号 大和書房：pp.295 - 305
- 高木恭二 1987b「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』下 同朋舎：pp.233 - 267
- 高木恭二・渡辺一徳 1990a「石棺研究への一提言—阿蘇石の誤認とピンク石石棺の系譜—」『古代文化』第42巻第1号：pp.21 - 32
- 高木恭二・渡辺一徳 1990b「二上山ピンク石製石棺への疑問—九州系舟形石棺から畿内系家形石棺への推移—」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集：pp.239 - 270
- 高木恭二 1994a「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp.109 - 132
- 高木恭二 1994b「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』第46巻第5号：pp.25 - 47
- 高木恭二 1994c「肥の石製品と古墳文化—装飾古墳文様との関連を中心として—」『石人・石馬—里帰り展—展示図録』岩戸山歴史資料館：pp.72 - 79
- 高木恭二 1995「石棺式石室と肥後—宇土半島基部における源流的要素」『横穴式石室にみる山陰と九州—石棺式石室をめぐる—』古代の出雲を考える 8：pp.50 - 69
- 高木恭二 1998「阿蘇石製石棺の分布とその意義」『継体大王と越の国』福井新聞社：pp.85 - 101
- 高木恭二 1999「横穴式石室の石材—石障系横穴式石室の事例を中心に—」『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料 九州前方後円墳研究会：pp.695 - 706
- 高木恭二 2002「九州の装飾古墳」『東アジアと日本の考古学』II墓制② 同成社：pp.1 - 32
- 高木恭二 2005「装飾古墳」『ドイツ展記念概説・日本の考古学』下巻 学生社：pp.562 - 570
- 高木恭二 2007「石棺から見た古墳時代の九州」『火の君、海を征く！—古墳からみたヤマトと八代—』平成20年度秋季特別展覧会 八代の歴史と文化 18：pp.126 - 141
- 高木恭二・土野雄貴 2010「船団か、追送刻か—数多く線刻された船の検討—」『古文化談叢』第65集 九州古文化研究会：pp.75 - 87
- 高木恭二 2012「第七章 古墳文化の諸相 装飾古墳」『講座日本の考古学』八 古墳時代下 青木書店：pp.478 - 505
- 高木正文編 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会
- 高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館：pp.97 - 150
- 高木正文 2011「直弧文のゆくえ—熊本から東国へ—」『旃檀林の考古学』大竹憲治先生還暦記念論文集刊行会：pp.361 - 372

- 谷川健一編 1964「特集 崩れゆく装飾古墳」『太陽』2月号 平凡社
- 玉利勲 1978「装飾古墳」『平凡社カラー新書』100 平凡社
- 永嶋正春 1999「装飾古墳の色彩と素材」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館：pp.337
- 362
- 土生田純之 1991『日本横穴式石室の系譜』 学生社
- 濱田耕作・梅原末治 1917『肥後における装飾ある古墳及横穴』 京都帝国大学文科大学考古学研究報告第一冊
- 濱田・梅原・島田貞彦 1919『九州における装飾ある横穴』 京都帝国大学文学部考古学研究報告第三冊
- 広瀬和雄 2009「装飾古墳の変遷と意義—靈魂観の成立をめぐる—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集
国立歴史民俗博物館：pp.273 - 314
- 樋口隆康 1955『九州古墳墓の性格』
- 藤井功・石山勲 1979「装飾古墳」『日本の原始美術』10 講談社
- 埋蔵文化財研究会編 2002「装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～」第51回埋蔵文化財研究集会
- 町田章 1987『古代東アジアの装飾墓』 同朋舎
- 松本雅明 1971「装飾古墳の成立と朝鮮半島」『アジア文化』第8巻第2号（松本雅明著作集8 『火ノ国の考古・
古代史論集』 収集）
- 森貞次郎 1972「装飾古墳」 朝日新聞社
- 森貞次郎 1985「装飾古墳」『歴史新書』41 教育社
- 森下浩行 1986「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究』第111号 古代学研究会：pp.1 - 17
- 柳沢一男 1980「肥後型横穴式石室考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会：
pp.465 - 497
- 柳沢一男 1990「横穴式石室からみた地域間動向・近畿と九州」『横穴式石室を考える』 帝塚山考古学研究所：
pp.75 - 92
- 柳沢一男 2007「横穴式石室の成立と普及」『日本の考古学』下 学生社：pp.527 - 533
- 矢野和之・三沢博昭 1978『99の謎 甦る古墳文化 石室の記録』 サンポウジャーナル
- 山崎一雄 1951「装飾古墳の顔料の科学的研究」『古文化財の科学』第2号
- 山崎一雄 1974「彩色壁画の顔料」『古代史発掘』8 講談社：pp.128 - 129
- 山崎信二 1985『横穴式石室構造の地域別比較研究』 1984年度文部省科学研究費奨励研究A
- 山本清 1964「古墳の地域的特色とその交渉—山陰の石棺式石室を中心として—」『山陰文化研究紀要』5号 島根
大学：pp.43 - 73
- 和田晴吾 1989「葬制の変遷」『古代史復元』第6巻 講談社：pp.105 - 119
- 和田晴吾 2003「棺と古墳祭祀—『閉ざされた棺』と『開かれた棺』—」『立命館大学考古論集』Ⅲ :pp.713 - 725
- 和田晴吾 2005「東アジアの『開かれた棺』『渡来系遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』：pp.19 - 40
- 和田晴吾 2009「古墳の他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集 国立歴史民俗博物館：pp.247 - 272
- 和田晴吾 2014「(1) 装飾古墳について」『古墳壁画の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ報
告書』：pp. 1 - 5

図出典

図2：新規作成

第3章 各古墳の概要

はじめに

八代海は九州本島の熊本県南西岸と宇土半島・天草諸島・長島に囲まれた内海で別名を不知火海ともいう。北は有明海、南は東シナ海につながる。今回取り扱う八代海周辺の範囲は、八代海沿岸に加え天草諸島・宇土半島・宇土半島基部の北岸の有明海側を含んでいる。それはこの地域にも装飾古墳の発生と展開を考える上で欠かせない古墳が存在するからであり、一体として捉えた方が良いと考えるからである(図3)。この八代海北岸に装飾古墳が数多く分布し、特に球磨川下流域とその対岸の天草大戸ノ瀬戸周辺地域は、円文を有す装飾古墳や天草砂岩で造られた箱式石棺が分布することなど共通性があり、肥後型横穴式石室の発生や装飾古墳の発生において重要な地域であることが以前から指摘されている(高木恭 1994、高木正 1999)。

一方で南部には地下式板石積石室墓(板石積石棺墓)が点在する地域(図4の▲印)があり、八代海は高塚古墳を築造する地域と築造しない地域両者を包括している。

この章で概要を記した古墳は、八代海周辺の装飾古墳(図3及び4の1～30)以外に熊本平野の千金甲1号古墳・井寺古墳・劔原2号墳・今城大塚古墳の4基の装飾古墳(図4の31～34)と八代海周辺に所在する非装飾古墳である城古墳群(1号墳・2号墳)・千崎古墳群(5号墳・10号墳・22号墳)・竹島古墳群(3号墳)である(図4の35～37)。

熊本平野の装飾古墳のうち千金甲1号古墳・井寺古墳・劔原2号墳の3基は、石障石材や装飾文様に変化があらわれ石障系装飾古墳の展開を考える上で参考になることから、また今城大塚古墳は八代海周辺の装飾古墳の終焉を考える上で参考となることから選定している。概要は記していないがこの他に熊本平野には石障系装飾古墳である坂本古墳や石棺系装飾古墳である石之室古墳や中郡古墳がある。

一方、八代海周辺の非装飾古墳のうち千崎古墳群・竹島古墳群は、横穴式石室の発生、特に石障の発生や横口の発想がどこから生まれたかを考える上で重要な古墳であることから選定した。また城古墳群は、装飾古墳であるヤンボシ塚古墳(図3・4・6の16)と同じ宇土半島北岸の網田平野に位置する。ヤンボシ塚古墳は、県外に所在する石障系石室と構造的に類似する点が多く、その構造は肥後型横穴式石室と北部九州型横穴式石室の折衷形態と言われている(柳沢 2007)。城古墳群の1号墳は肥後型横穴式石室であり、2号墳は北部九州型横穴式石室であることから、その両者が融合してヤンボシ塚古墳が成立した可能性があることから選定している。

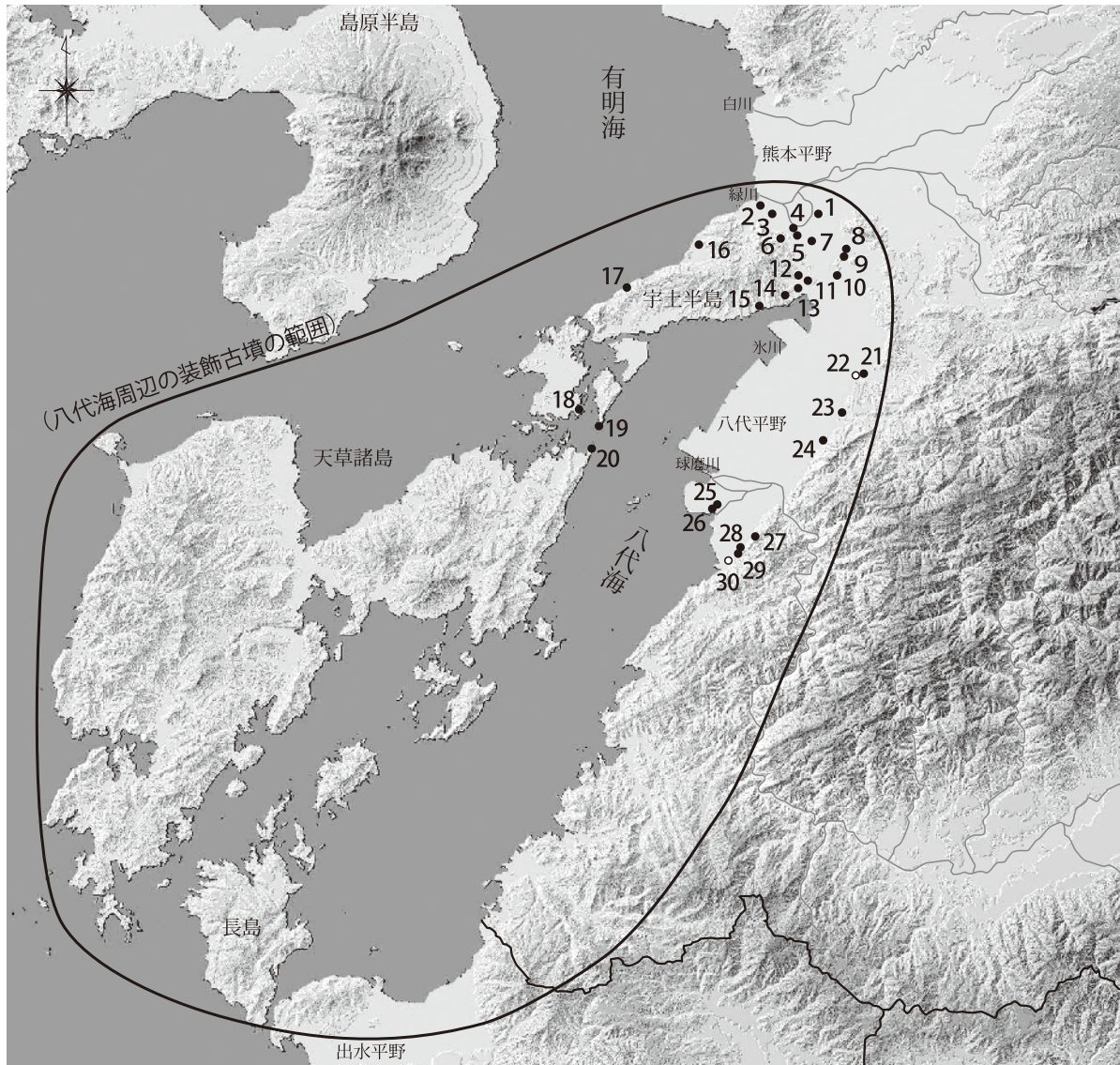
なお、古墳の年代は前方後円墳集成編年(広瀬 1991)を用い、より細分できるよう須恵器型式を併記した。しかし年代の手がかりとなるものがなく、そこまで限定できない場合は、○世紀前半、後半或いは○世紀代としたものもある。古墳時代の時期区分と実年代の関係は、前方後円墳集成編年9期の開始時期など研究者により若干の違いはあるが、ここでは杉井の年代観を参考とした(杉井 2010・表1)。

参考文献

- 杉井健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集 九州前方後円墳研究会：pp.131 - 184
- 高木恭二 1994a「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp.109 - 132
- 高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館：pp.97 - 150
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版：pp.24 - 26
- 柳沢一男 2007「横穴式石室の成立と普及」『日本の考古学』下 学生社：pp.527 - 533

暦年	古墳時代時代区分		集成編年	和田編年	埴輪	須恵器など
250	前期	前半	集成1期	和田一期	宮山型 都月型	
300			集成2期	和田二期		
350		後半	集成3期	和田三期	川西Ⅱ期	
400	前葉	集成4期	和田四期 和田五期			
		集成5期	和田六期	川西Ⅲ期	TG232	
450	中期	中葉	集成6期	和田七期	川西Ⅳ期	TK73
			集成7期	和田八期		TK216
500	後期	後葉	集成8期	和田九期	川西Ⅴ期	ON46
			集成9期	和田一〇期		TK208
550	後半	後半	集成10期	和田一一期		TK23
600						TK47
650	終末期					MT15
						TK10(古)
						TK10(新)
						TK43
						TK209
700						飛鳥Ⅰ TK217(古)
						飛鳥Ⅱ
						飛鳥Ⅲ
						飛鳥Ⅳ
						飛鳥Ⅴ

表1 古墳時代の時期区分と実年代の関係



※○は位置を確定できていないもの

図3 八代海周辺装飾古墳分布図

古墳番号	古墳名	古墳番号	古墳名	古墳番号	古墳名
1	三拾町板碑転用石障材	11	不知火塚原1号古墳	21	竜北高塚古墳
2	梅崎古墳	12	鴨籠古墳	22	大野村石棺
3	城塚古墳	13	国越古墳	23	大王山3号墳
4	東畑古墳	14	桂原古墳	24	門前2号墳
5	椿原古墳	15	鬼の岩屋古墳	25	小鼠蔵古墳群
6	仮又古墳	16	ヤンボシ塚古墳	26	大鼠蔵古墳群
7	宇土城跡城山遺跡出土装飾石材	17	小田良古墳	27	五反田古墳
8	晩免古墳	18	長砂連古墳	28	長迫古墳
9	潤野古墳	19	広浦古墳群	29	田川内古墳群
10	宇賀岳古墳	20	大戸鼻古墳群	30	竹之内古墳

表2 八代海周辺装飾古墳一覧表



図5 宇土半島基部裝飾古墳分布図 (1～15)



図6 宇土半島裝飾古墳 (16・17)、非裝飾古墳 (35) 分布図



図7 天草諸島裝飾古墳(18~20)、非裝飾古墳(36・37)分布図



図8 氷川下流域装飾古墳分布図 (21 ~ 24)

※ 22 大野村石棺の位置は推定



図10 熊本平野南部(緑川流域) 参考とする装飾古墳分布図(32~34)

1 さんじつちよういたび 三拾町板碑転用石障材 一字土市三拾町字堂ノ本一

市町村コード (43211) 遺跡番号 (一) 北緯 32 度 41 分 54 秒 東経 130 度 40 分 05 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

本板碑転用石障材は、かつて宇土市三拾町字鋤崎に所在していたが、圃場整備のため現在地に移されたという (富樫 1981)。「天正 12 年銘高濱武藏守吉信逆修碑」として知られていた板碑であったが、1999 年 (平成 11 年)、宇土市教育委員会の木下洋介がこの板碑に直弧文の線刻を発見したことから、本来は横穴式石室の石障の一部で、後に板碑として再利用された石材であることが判明した。同年、肥後金石研究会菅房行が拓本を作成するとともに、熊本県教育庁文化課青木勝士らが実測調査を行った。

2 位置及び装飾

緑川の支流である浜戸川左岸の沖積平野 (標高約 2 m) に所在する。石材の大きさは、高さ 150cm・最大幅 103cm・厚さ 19cm であり、下部は 15cm 程度土中に埋没している。石材は灰黒色の阿蘇溶結凝灰岩で、上端部は折れており鈍角状を呈する。板碑を程よい大きさにするために調節したのか、または転用時にはすでに折れていたのか不明である。線刻はキリクや蓮台、碑文によって削られている部分が多く、全容を把握するのは困難である。残された線刻を詳細に観察すると、1 辺約 60～65cm の方形区画が 2 つ (うち 1 つは推定)、短辺 35cm・長辺 60cm 前後の長方形区画が 1 つ確認できる。方形区画内部は 2 本の交差する斜交軸と呼ばれる線刻で 4 区に分けられており、いわゆる直弧文 A 型 (伊藤 1984) が描かれている。また、円文が少なくとも 3 つ確認でき、下半部を中心に赤色顔料が残存する。

3 保存施設・修復歴等

なし

4 図面等保管場所

拓本及び実測図・写真等の関係資料は、宇土市教育委員会に保管されている。

5 その他 (年代等)

文様構成に不明確な点があるものの、方形区画で単位図形化されているとみられる。文様構成が最も似ているのは、上益城郡嘉島町井寺古墳の直弧文が描かれた石障であり、井寺古墳が 5 世紀後半～末頃の築造と考えられることから、本石材が使用された古墳もこの頃に築造された可能性が高い。

現在、この時期に該当するような石障系横穴式石室を主体部とする古墳は、宇土半島基部では見出すことができないが、南へ 1.2km の位置にある石ノ瀬遺跡 (宇土市石小路町) の発掘調査において、川西編年 IV 期の円筒埴輪が出土しており、かつて同地に古墳が存在していたことが判明している (木下・藤本 2002)。先の想定年代とも合致することから、有力な候補地として注目される。

(藤本貴仁)

参考文献

伊藤玄三 1984『直弧文』ニューサイエンス社

木下洋介・藤本貴仁 2002「三拾町板碑転用石障材」『新宇土市史』資料編 2 (考古資料・金石文・建造物・民俗) 宇土市: pp.177 - 179

富樫卯三郎 1981「板碑ノート—高濱武藏守逆修碑ほか—」『宇土市史研究』第 2 号: pp.41 - 44

図出典

図 11: 熊本県・市町村電子自治体共同運営協議会が公開する熊本県遺跡地図を利用

図 12: 木下洋介・藤本貴仁 2002 より

図 13: 熊本県立装飾古墳館提供 (牛島茂・杉本和樹 1999 年 11 月 17 日撮影)



图 11 三拾町板碑転用石障材位置図

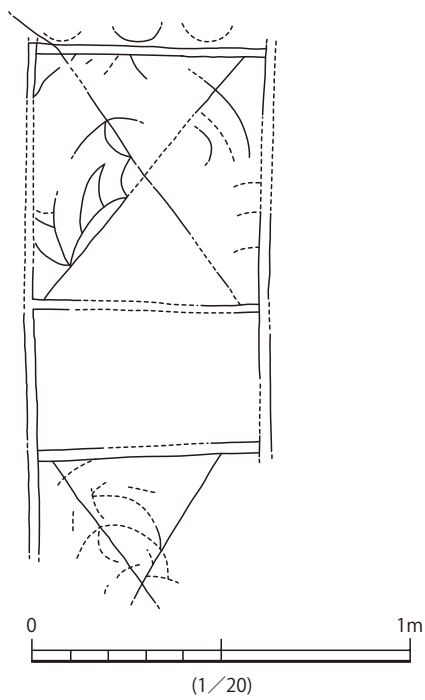


图 12 三拾町板碑転用石障材裝飾文様実測図



图 13 三拾町板碑転用石障材全景

2 ^{うめざき}梅崎古墳（昭和 42 年 5 月 30 日市史跡） 一宇土市笹原町字梅崎一

市町村コード（43211） 遺跡番号（020） 北緯 32 度 42 分 12 秒 東経 130 度 36 分 39 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1967 年（昭和 42 年）、宇土市立住吉中学校清見末喜教諭と宇土高校社会部 OB 中山真の現地踏査によって発見された。同年 4 月から 5 月にかけて富樫卯三郎や宇土高社会部員らによって発掘調査が行われ、横穴式石室に船が線刻された装飾古墳であることが判明した。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島基部の山塊より丘陵が北側に伸びており、その先端部の独立丘陵状を呈する小丘陵頂上部よりやや東に下った地点（標高約 50 m）に立地する。眼下の水田面との比高差は約 45 m であり、当該丘陵北側に緑川の河口部、北西側に有明海が広がる。墳丘は、長い年月を経てほぼ流出しており、墳形及び墳丘規模は確認できないが、石室規模を考慮した場合、直径 20 m 程度の規模を有するとみられる。

3 石室

主体部は南西方向に開口する横穴式石室である。奥壁や側壁の腰石だけが残存しており、天井石及び腰石上部の石材は消失している。残る腰石にも矢穴痕が残っていることから、石垣等の石材に転用されたものとみられる。また、玄門部付近で馬門石（阿蘇ピンク石）の破片が確認されている。これに関して、本墳から西へ約 200 m 付近で阿蘇ピンク石製の刳抜玄門がみつまっていることから、梅崎古墳の玄門部には該当石材が用いられていた可能性が高い（藤本 2002）。

石室の改変が著しいため、石室規模や石室プランは明確ではない。残存する 3 つの腰石に囲まれた部分の広さは、長さ約 2.3 m・幅約 1.9 m である。羨道部の規模・形態なども不明であるが、羨道部付近に天井石もしくは側壁の一部とみられる石材 1 個と、人頭大の石の列石が 3 m 程度確認されている。

4 装飾

奥壁に向かって右側の腰石に幅約 1.5 m・高さ約 0.9 m の範囲で舳艫型の船が重なるようにして描かれている。高木恭二らの分析により、これらの船は 6 艘に分けられており、いずれも準構造船とみられる（高木・士野 2010）。このうち、最も大きな船は、幅約 1.3 m・高さ約 0.7 m 程度で、船底から下方に伸びるオールが 24 本描かれており、これが両舷のオールを表したものだとする片舷 12 本を表現していることになる。この船の線刻画から実際の船の大きさを想定した場合、オールの間には漕ぎ手が入ると少なくとも 1 m の間隔が必要であることから、舳先や艫を合わせれば船の長さは 15 m 以上になる。なお、我が国の装飾古墳の線刻船の表現としては最も大きいものである（宇土市史編纂委員会編 2009）。その他の船にも、オールの表現がみられ、屋形や帆のような表現もある。

5 出土遺物

石室の埋土より須恵器片や耳環が出土。

6 保存施設・修復歴等

発掘調査終了後、石室は埋め戻された。

7 図面等保管場所

遺構実測図及び拓本等の資料は、宇土高校社会部に保管されていたが、2000 年（平成 12 年）に宇土市教育委員会に寄託された。

8 その他（年代等）

出土遺物から築造年代を推定するのは困難であるが、比較的大型の腰石を用いることや刳抜玄門の可能性が高いことを考慮すれば、6 世紀末頃から 7 世紀前半頃の築造と推定される。梅崎古墳の眼下に広がる平野

は、中・近世以降の干拓で陸化しているが、当時はすぐ目前に海がせまっていたと推測される。また、阿蘇ピンク石製石棺が多数運搬された網津川河口や、古代における肥後の玄関口といえる緑川河口に近接する。このことから、梅崎古墳の築造には多分に海が意識されていたと考えられる。

(藤本貴仁)

参考文献

宇土市史編纂委員会編 2009『宇土の今昔百ものがたり』宇土市

高木恭二・土野雄貴 2010「宇土半島基部の線刻を有する古墳」『うと学研究』第31号 宇土市教育委員会：pp. 9－34

富樫卯三郎・清見末喜 1968「梅咲山古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル』No.20 ニューサイエンス社

富樫卯三郎 1972「梅咲山古墳の装飾－線刻の舟－」『宇土市の文化財』第1集 宇土市教育委員会：p.12

富樫卯三郎・高木恭二 1987「梅崎古墳」『宇土半島基部古墳群』宇土市埋蔵文化財調査報告書第15集 宇土市教育委員会：pp.69－72

藤本貴仁 2002「梅崎古墳」『新宇土市史』資料編2（考古資料・金石文・建造物・民俗）宇土市：pp.245－248

図出典

図14：藤本貴仁 2002より

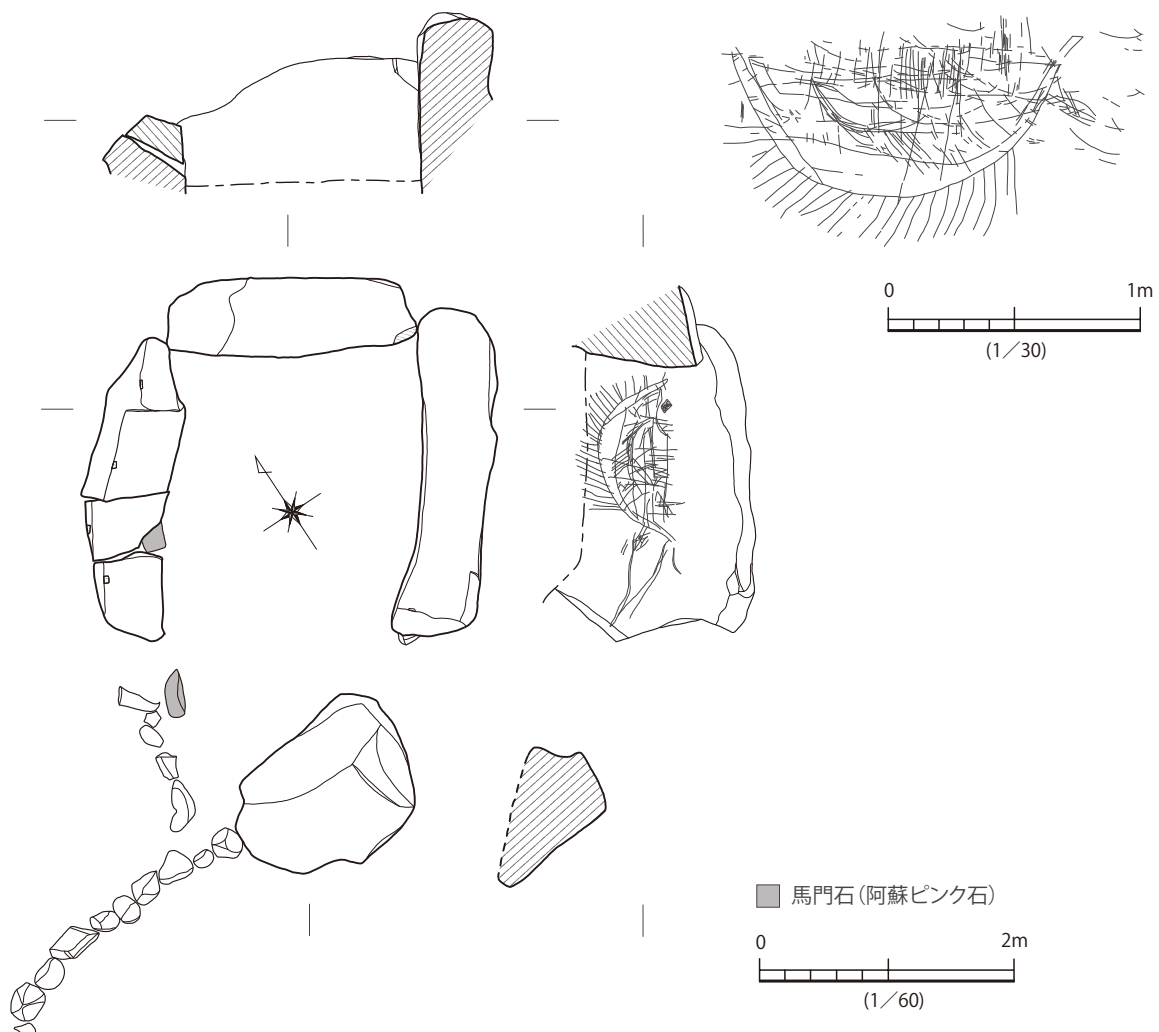


図14 梅崎古墳石室及び右側壁装飾文実測図

3 城塚古墳^{じょうつか} (未指定) 一宇土市城塚町字馬通一

市町村コード (43211) 遺跡番号 (025) 北緯 32 度 41 分 40 秒 東経 130 度 36 分 52 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯については知られておらず、発掘調査も行われていない。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島から延びた丘陵の側縁端部に位置し、標高約 60 m を測る。眼下の沖積平野との比高差は約 57 m である。丘陵側縁部の斜面を利用して墳丘は築かれており、現在は蜜柑畑として利用されている。地形の改変が著しく、墳丘盛土もあまり残っていないが、残存する石室の規模からみて直径 15 m 以上の円墳であったものと思われる。

3 石室

主体部は、巨石を使用した南方向に開口する横穴式石室であることは間違いないが、石室上部の周壁石材や天井石と考えられる巨石が石室内に落ち込み、土砂とともに石室内が満たされており、石室構造の詳細は不明である。奥壁と両側壁の腰石は残っているが、右側壁は倒れこみ、原位置を保っていないようである。石室に用いられているのは大半が安山岩であるが、玄門部に当たるとされる部分に馬門石（阿蘇ピンク石）の切石を用いる。刳抜玄門を採用した古墳である可能性が高い（古城 2002）。

4 装飾

装飾古墳の可能性が指摘されているが（高木 1987）、詳細については不明である。

5 出土遺物

なし

6 保存施設・修復歴等

なし

7 図面等保管場所

現地の写真については、宇土市教育委員会に保管されている。

8 その他（年代等）

出土遺物は知られていないが、腰石に巨石を用いることや刳抜玄門の可能性が高いことを考慮すれば、6 世紀末頃から 7 世紀前半頃の築造と推定される。

宇土半島基部地域における古墳時代後期から終末期にかけての横穴式石室を主体部とする古墳は、石室の玄門部分に阿蘇溶結凝灰岩製の刳抜玄門を有する石室が多い。特に宇土市轟地域から緑川地域には、馬門石（阿蘇ピンク石）を用いた刳抜玄門を採用しており、この城塚古墳もその可能性が高い。

（ 藤本貴仁 ）

参考文献

- 高木恭二 1987 「城塚古墳」『宇土半島基部古墳群』宇土市埋蔵文化財調査報告書第 15 集 宇土市教育委員会:p.80
古城史雄 2002 「城塚古墳」『新宇土市史』資料編 2（考古資料・金石文・建造物・民俗）宇土市：pp.244 - 245

4 ^{ひがしはた}東畑古墳 (未指定) 一宇土市恵塚町字東畑一

市町村コード (43211) 遺跡番号 (049) 北緯 32 度 41 分 09 秒 東経 130 度 38 分 07 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1978 年 (昭和 53), 的場義夫によって発見され, 付近の小字名をとって東畑古墳と命名された。その後, 分布調査に伴う踏査によって墳丘及び周溝の一部が削られていることが判明し, 南側周溝から多くの須恵器片が採集された。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島の山塊より派生した標高 55 m の丘陵上に位置しており, 本墳の西北西約 15 m に東畑 2 号墳が所在する。墳丘盛土は長年の年月を経てかなり流出している。上述の削平の結果, 墳丘南西側の約 10 m 範囲で幅 90cm, 同深さ 30cm 程度の周溝が確認された。比較的狭く浅いが, これは周溝上部が削られたことに起因するとみられ, 本来はこれより幅が広く深かったと考えられる。周溝より墳丘規模を推定すると, 直径約 26 m, 高さは 4 m 以上であり中規模の円墳といえよう。

3 石室

主体部は, 南方向に開口する両袖式の横穴式石室で, 主軸は $N-3^{\circ}-W$ である。天井石はほとんど消失し, 玄室や羨道部にかけての遺存状態も良好とはいえない。玄室は, 大型の腰石とその上部に 1 石ないし 2 石がのり, 石室石材の大半は安山岩であるが, 玄門部にのみ組合せ式の灰黒色の阿蘇溶結凝灰岩切石を用いており, 石室部位による石材の使い分けを意図しているとみられる。袖石にかみ合うようにして上石が載せられ, 比較的丁寧な造りである。玄室内に大量の土砂が流入しており, 発掘調査も行われていないため, 正確な規模は明らかにし難いが, 現況規模で長さ 2.9 m ・ 幅 1.8 m の長方形プランである。羨道部も同様の状態であるが, 約 2.6 m の長さを確認できる。また, 羨道部左側に袖石のような石材が存在するが, これが現位置を留めているのかどうか不明である。現位置であれば, 複室構造の可能性はある。

4 装飾

玄室右側壁の腰石に線刻が確認できるものの, 何を表現しているのかは不明である。

5 出土遺物

前庭部から坏身, 周溝底より須恵器の壺, 大甕の破片が出土しており, 墳丘上から須恵器片 (坏蓋, 高坏) や土師器片 (高坏) が採集されている。出土及び表採された須恵器の器形の種類は蓋坏, 高坏, 無蓋高坏, 瓶, 甕などがある。多くは破片のため詳細は明らかにしえないが, 器形や焼成の特徴から地元の宇城窯跡群産のものが多くを占めていると思われる (中原・藤本 2002)。土師器には高坏や甕があり, いずれも焼成良好ながら器表面が荒れていて調整などの観察が困難である。

6 保存施設・修復歴等

なし

7 図面等保管場所

現地の写真や出土遺物の図面は, 宇土市教育委員会に保管されている。

8 その他 (年代等)

出土遺物の年代から, 6 世紀後半頃 (前方後円墳集成 10 期) の築造と推定される。

(藤本貴仁)

参考文献

高木恭二 1987 「東畑古墳」『宇土半島基部古墳群』宇土市埋蔵文化財調査報告書第 15 集 宇土市教育委員会: pp.108 - 111
 中原幹彦・藤本貴仁 2002 「東畑古墳」『新宇土市史』資料編 2 (考古資料・金石文・建造物・民俗) 宇土市: pp.232 - 234

5 ^{つばはら}椿原古墳（平成13年7月13日市史跡） 一字土市椿原町字金嶽一

市町村コード（43211） 遺跡番号（036） 北緯 32 度 41 分 06 秒 東経 130 度 38 分 17 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1994年（平成6年）に農村公園整備事業に伴う伐採作業中に発見された。公園計画地内に含まれていたが、敷地北端部に位置することから、計画変更により墳丘とその周辺部を現状の地形で残すことになった。宇土市教育委員会は、保存整備を行い一般公開する目的で熊本大学文学部考古学研究室に発掘調査を依頼し、同研究室は1995年（平成7年）8月から1996年（平成8年）8月にかけて、計3次にわたり発掘調査を実施した（宇土市教育委員会1997）。

なお、発掘調査中に現地を訪れた地権者のご教示により、1959年（昭和34年）に発見され、宇土高校社会部に長年保管されていた「椿原」と注記された須恵器は、椿原古墳石室の前庭部付近から出土したことが判明した。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島の主峰である大岳（標高477.6m）から東側へ派生した標高約40mの丘陵端部に位置する。発見当時、墳丘盛土はかなり失われており、主体部の横穴式石室も玄門部の天井石が露出した状態であったが、周溝や列石の状況から石室主軸側が若干長い隅丸の方墳であることが確認された。

墳丘規模は、長辺（石室主軸側）約19m・短辺約18mであり、墳丘主軸西半部で列石が確認された。石材は宇土半島基部に産出する安山岩を用いており、多くは加工を施さない自然石を用いる。主軸南西側の列石は、大小さまざまな石を墳丘盛土部分にやや乱雑に配している。一方、主軸北西側では根石とみられる大型の石を墳丘盛土部分に規則的に並べており、場所によって石材の大きさや積み方を変えていた様子がかがえる。幅1.0～2.0m前後の周溝がめぐり、丘陵側の墳丘北西側が最も深く、墳丘南東側にいくにしたがって浅くなる。これは、墳丘西側より東側に緩く傾斜している地形に制約されているためであろう。墳丘南～南東側の周溝の幅が広がっているが、これは羨道より延びた墓道と交差しているためと考えられ、この部分の周溝は墓道を兼ねていたと推定される。

3 石室

主体部は、南西方向に開口する単室の横穴式石室で、主軸はN-43°-Eである。石材は主に安山岩が用いられ、玄門部にのみ馬門石（阿蘇ピンク石）が用いられている。

（1）羨道部

羨道部には、左側壁で2つ、右側壁で1つの面取り調整された大型の石材が残存しており、右側壁の石材抜取り跡から、左側壁と同様に右側壁も大型の石材を2つ用いたとみられる。羨道の規模は、長さ約290cm・幅約170cmである。大型石材より先は、破壊を受けており構造は不明である。石室の天井石は玄門上部のみ残存しているが、羨道側壁の大型石材上端のレベルがほぼ一定していることから、当該石材上部に天井石が架構されていた可能性が高い。

（2）玄室

玄室は、天井部や右側壁が失われ、奥壁や左側壁も一部破壊されているなど、後世に大幅な改変を受けている。そのため、石室を構成する石材から玄室規模を明らかにすることは難しいが、石材を据えるための掘り方や石材の抜取り跡などから、長さ約380cm・幅約224cmの長方形プランで、玄門部天井石の高さから玄室天井高は220cm程度とみられる。比較的残りが良い左側壁や唯一残る玄門部天井石から推定すると、基底部に大型の石材（腰石）を据え、その上に2～3石前後の比較的小型の石材を積み、その上に天井石をのせる構造と推測される。床面は、ごく一部に円礫が面的に広がる状況が確認されたことから礫床であろう。

玄門部は、コの字形に加工した2石の馬門石（阿蘇ピンク石）を組み合わせた刳抜玄門である。側壁に接する小口部を除き全面にチョウナ削りによる調整が施される。玄門の入口部分は幅50cm・高さ70cm・厚さ28～34cmである。楣石は灰黒色の阿蘇溶結凝灰岩で、右側壁側3分の2が欠損しており、玄門部天井石は羨道側に傾いている。石室石材の大半が安山岩であるのに対し、玄門部に限り阿蘇溶結凝灰岩を用いることから、石材を使い分けしていたことがうかがえる。

4 装飾

羨道部右側壁に矢印状と格子目状の線刻が描かれ、左側壁に浮彫円文が施されている。線刻文様のうち、矢印状の文様については帆か旗とみられ、船を表現している可能性がある（宇土市教育委員会 1997）。

5 出土遺物

須恵器や土師器、鉄器などが石室や周溝、墓道から出土した。羨道部床面直上で出土した刀子1点を除き、大半は原位置を留めておらず古墳の破壊などに伴う流れ込みと推定される。出土須恵器のうち、有蓋高杯が数多く出土していることが特徴であり、これらの須恵器はTK209～TK217型式に相当する。

6 保存施設・修復歴等

発掘調査終了後、石室内は崩壊防止のために土嚢で充填され、墳丘や周溝は保護盛土されている。

7 図面等保管場所

実測図や拓本、写真、調査日誌などの関係資料は、宇土市教育委員会に保管されている。

8 その他（年代等）

築造年代は7世紀の初め頃と考えられ、7世紀前半代を通じて追葬や祭祀行為が行われたと考えられる。なお、本墳以外の県内における方墳は、山鹿市鹿本町茶臼塚古墳が挙げられるが、当該古墳は前期の築造であり、後・終末期古墳では椿原古墳が唯一の事例である。

（ 藤本貴仁 ）

参考文献

- 宇土市教育委員会 1997『椿原古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第20集
 熊本大学文学部考古学研究室 1996「椿原古墳発掘調査概報」『宇土市史研究』第17号 宇土市史研究会・宇土市教育委員会：pp.81－93
 高木恭二・土野雄貴 2010「宇土半島基部の線刻を有する古墳」『うと学研究』第31号 宇土市教育委員会：pp.9－34
 藤本貴仁 2002「椿原古墳」『新宇土市史』資料編2（考古資料・金石文・建造物・民俗） 宇土市：pp.219－223

図出典

図15～17：宇土市教育委員会 1997より新たにトレース

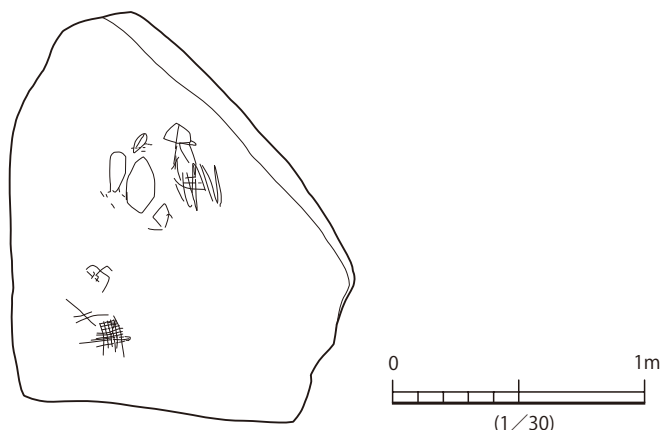


図15 椿原古墳羨道部右側壁装飾文実測図

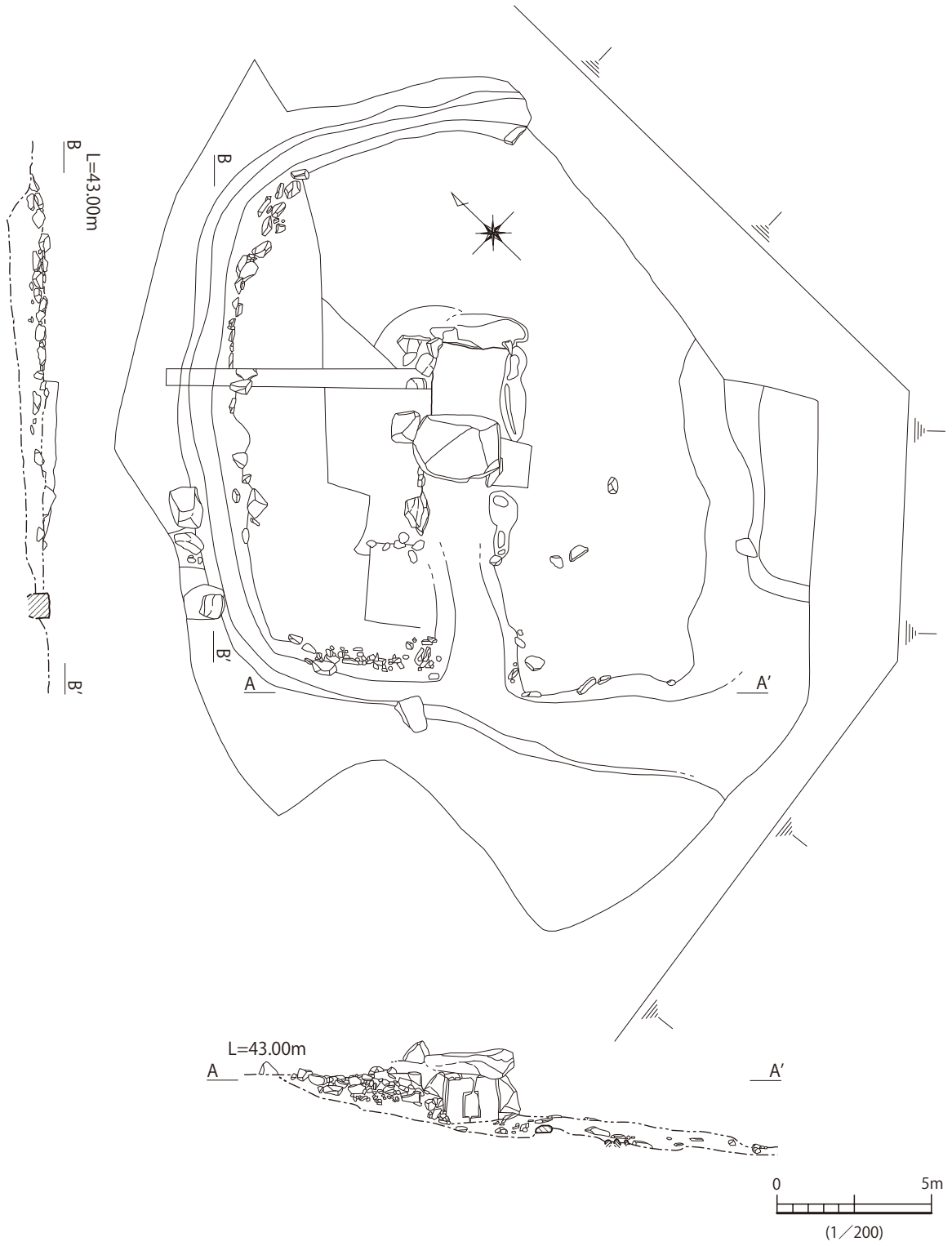


图 16 椿原古墳墳丘測量図

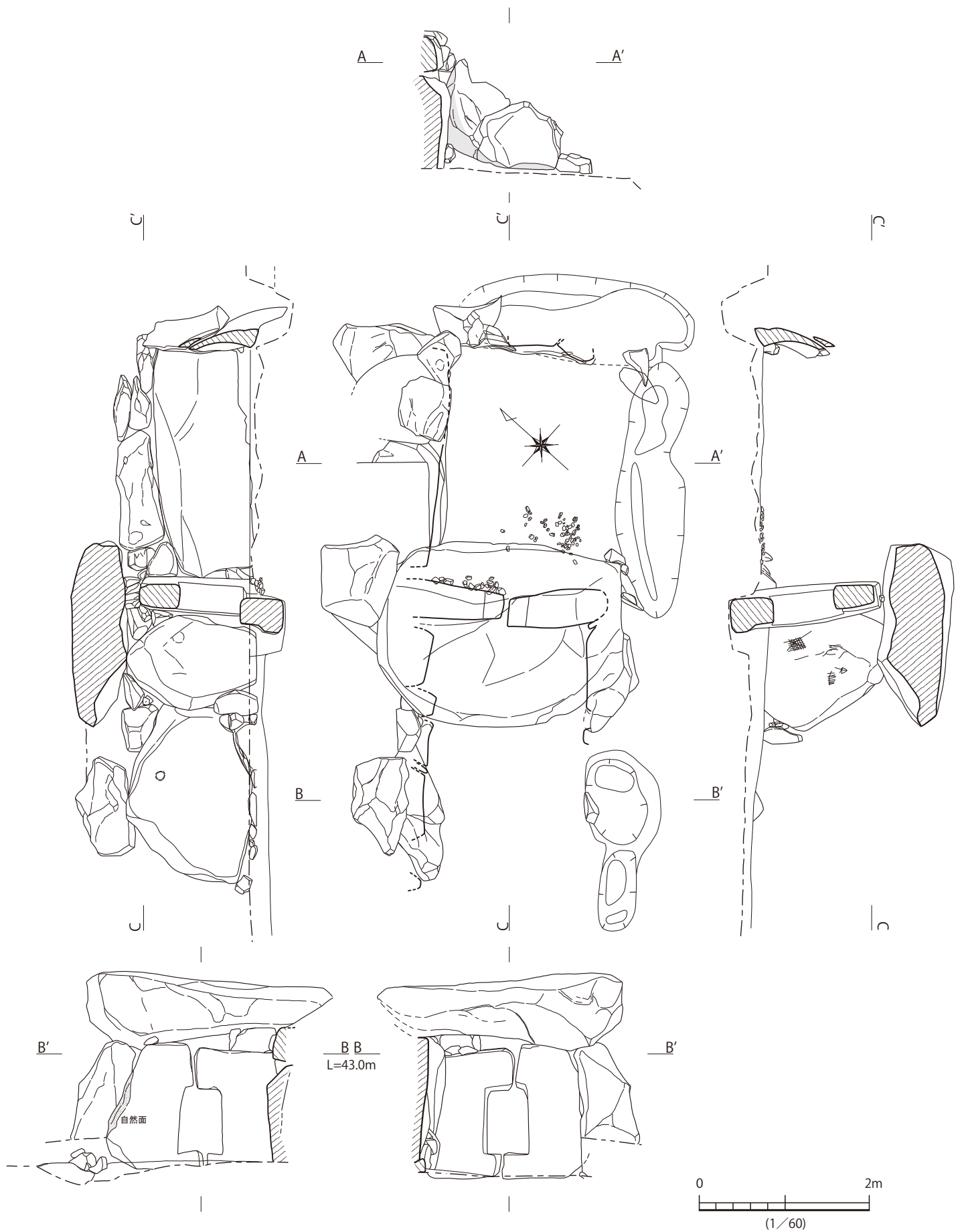


图 17 椿原古墳石室実測図

6 ^{かりまた}仮又古墳（昭和 57 年 3 月 10 日県史跡）—宇土市恵塚町字仮又一—

市町村コード（43211） 遺跡番号（032） 北緯 32 度 40 分 54 秒 東経 130 度 38 分 00 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

仮又古墳の存在は、かなり古くから知られていたようである。付近に本墳の石室と同じ安山岩の板碑があり、そこに刻まれた年号が 1564 年（永禄 7 年）であることや、発掘調査に伴い出土した遺物の中に中世の遺物が含まれることから、古墳の開口は中世以前に遡ると推測される。

大正年間に京都帝国大学による調査が行われたほか、1981 年（昭和 56 年）8 月から 12 月にかけて宇土半島基部古墳群分布調査の一環として、宇土市教育委員会による発掘調査が行われている（濱田・島田・梅原 1919、宇土市教育委員会 1982）。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島の主峰大岳（標高 477.6 m）から東に派生する丘陵斜面の中腹、標高約 45 m 地点に位置する。古墳のある斜面の北側には、東に向かって流れる飯塚川による開析谷が入り込み、古墳はこの谷にある水田面から比高差約 35 m を測る。谷を挟んで北側に対峙する丘陵には、仮又古墳と同様に横穴式石室を主体部とする東畑古墳や東畑 2 号墳、金嶽山古墳、椿原古墳が所在する。

仮又古墳の特徴のひとつは、その立地条件の悪さである。傾斜地に築造されているため、おそらく盛土の流出を防ぐ目的で、墳丘の東側及び北側に 3 段の列石を巡らしている。しかしそれでも墳丘盛土の大部分は流出し、現在は石室石材が露出した状態となっている。こうした現況から墳形や本来の墳丘規模を復元するのは難しいが、地形測量とトレンチ調査の結果から、東西約 12 m・南北約 14 m の規模で、不整形円形を呈するものと考えられる。

3 石室

主体部は、南東方向に開口する単室無袖の横穴式石室で、主軸方向は N - 29° - W である。規模は、玄室右側壁で全長 596cm・玄室中央部幅 177cm・高さ 166cm を測り、平面プランは長方形を呈する。

玄室内の腰石は直接地山に据え付けられ、北側の奥壁が 1 石、東西両側壁がそれぞれ 3 石で構成されている。いずれも安山岩で、本来は腰石の上に数段の塊石を積み上げて天井石が架構されていたと考えられるが、腰石の上の塊石は玄室内に落ち込んでおり、3 石の安山岩からなる天井石も、いずれも本来の位置を保っていない。なお、玄室内に落ち込んだ塊石の一部に、凝灰岩の切石が含まれることが確認されている。

古くから開口していたためか、床面はひどく攪乱されており、屍床配置を示す仕切石などは検出されていない。一方で拳大の安山岩角礫や凝灰岩片が検出されており、それらは石室構築時に基底面に敷かれたものである可能性があるが、詳細は不明である。

羨道は玄室とほぼ同じ幅で続き、幅 174cm を測る。羨道部に天井があったかどうかは不明である。また発掘調査により、前庭部には上端幅 350cm・下端幅 260cm の墓道と思われる掘り込みが確認されている。

4 装飾

玄室の両側壁で、最も奥壁寄りの腰石に線刻画が描かれている。奥壁に向かって右側、東壁の線刻は幅 162cm、高さ 76cm の範囲に、複数の船と木の葉状の文様が描かれている。これら船はゴンドラ型のものや帆、旗、オールなどが表現され、それらが複雑に重なり合って描かれており、高木恭二・土野雄貴による詳細な検討の結果、全部で 15 隻の船が把握されている（高木・土野 2010）。

また、西側壁には、長さ 75cm、高さ 55cm を測る単一の船が描かれており、帆とオールの併用式とみられるが、艫側の線刻文は舵の可能性もある。帆の表現はないが箆緒のようなものが表現されていることから、中央の縦線は帆柱とみられ、その上部に四角い旗のようなものが描かれている（高木・土野 2010）。なお、

この船の線刻の横には後世のいたずら書きとみられる「大正」の文字がみられる。

5 出土遺物

玄室内から、円頭広根斧箭式鉄鏃1、刀子片2、鉄滓数点が出土している。また羨道及び墓道から、須恵器や土師器、鉄滓が数点出土している。

6 保存施設・修復歴等

1981年（昭和56年）の発掘調査後、調査区は埋め戻しにより保存されているが、石室石材は露出した状態となっている。

7 図面等保管場所

1981年（昭和56年）の発掘調査時の実測図や写真などは、宇土市教育委員会で保管している。

8 その他（年代等）

出土遺物から7世紀前半から中頃にかけて築造されたと推定される。本墳にみられる単室無袖型の石室は、7世紀中葉頃の前墳にみられる特色で、椿原古墳などにみられる玄門部に刳抜玄門を採用する古墳に後続する可能性が高い（古城2002）。

（ 芥川博士・藤本貴仁 ）

参考文献

宇土市教育委員会 1982『仮又古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第6集
 高木恭二・土野雄貴 2010「宇土半島基部の線刻を有する古墳」『うと学研究』第31号 宇土市教育委員会：pp.9－34
 濱田耕作・島田貞彦・梅原

末治 1919「肥後国宇土郡緑川村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学考古学研究報告第3冊：pp.38－41

古城史雄 2002「仮又古墳」『新宇土市史』資料編2（考古資料・金石文・建造物・民俗）宇土市：pp.228－231

図出典

第18・19：宇土市教育委員会 1982より新たにトレース



図18 仮又古墳墳丘測量図

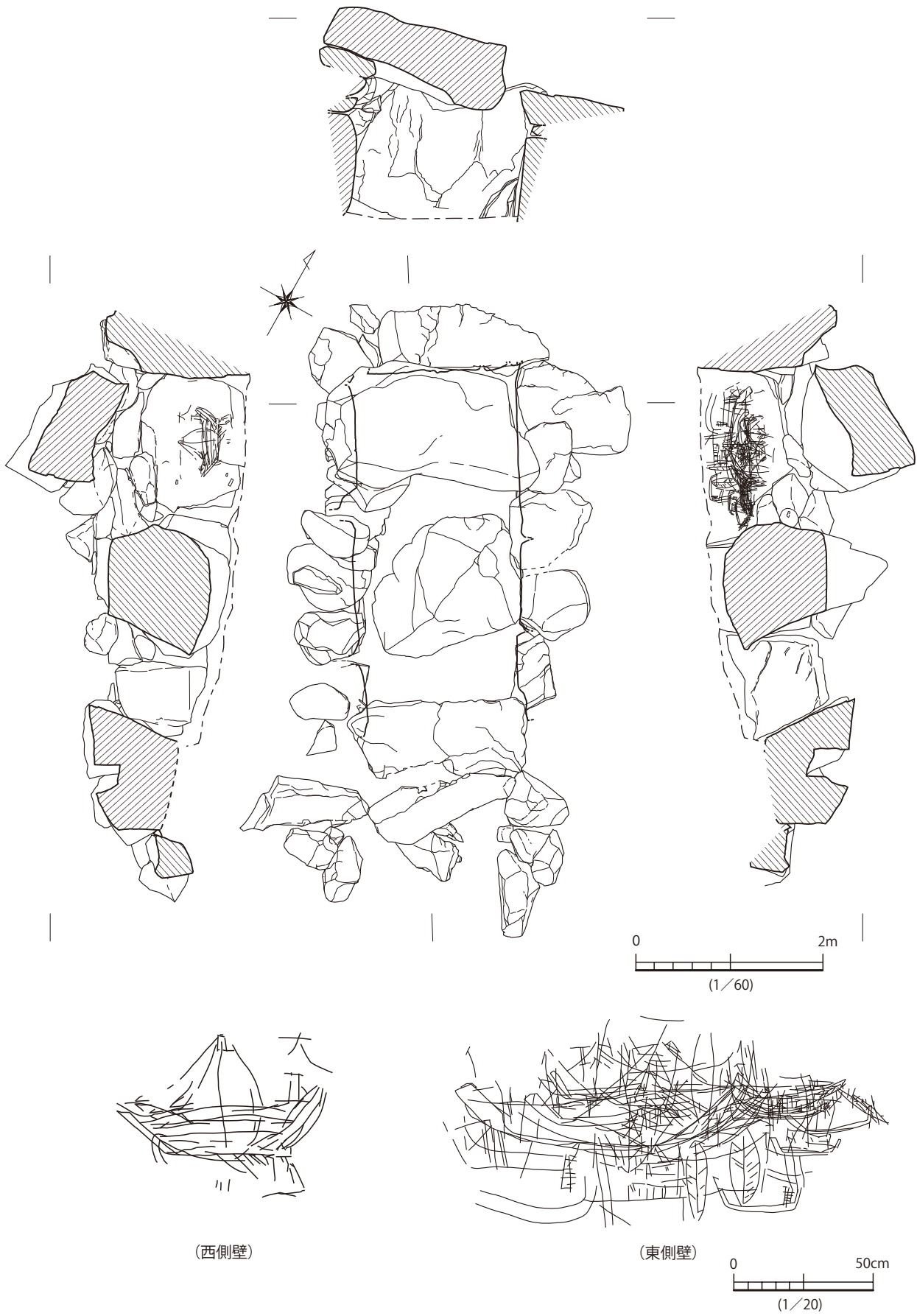


図 19 坂又古墳石室及び側壁裝飾文実測図

7 宇土城跡城山遺跡出土装飾石材（未指定）—宇土市神馬町字古城—

市町村コード（43211） 遺跡番号（一） 北緯 32 度 40 分 41 秒 東経 130 度 39 分 10 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1969 年（昭和 44 年）5 月、宇土城跡（城山）三ノ丸跡の採土作業中に石垣が発見されたことから、富樫卯三郎、宇土高校社会部により発掘調査が行われ、その後、1973 年（昭和 48 年）にも調査が実施された。これらの調査の結果、4 つの石材に線刻絵画が発見され、装飾古墳の石材が城郭の石垣に転用されたことが明らかとなった。当該調査で出土した線刻絵画を含むこれらの石材は、当時新設中の市立宇土小学校敷地内の保護施設に収納されていたが、その後の市立図書館建設計画に伴い移設された。

2 位置

本城跡は 16 世紀末にキリシタン大名・小西行長が築城した近世城郭であり、緑川によって形成された沖積平野南側の低丘陵（標高 16 m）に所在する。石材が発見された三ノ丸跡は本丸南側に位置しており、現在は宅地や耕作地となっている。なお、同丘陵は宇土半島基部における弥生・古墳時代の拠点集落である宇土城跡城山遺跡の所在地としても知られている。

3 装飾

出土した石材は、本来は横穴式石室の石材として用いられたものであり、築城に伴い古墳が破壊され、石垣の石材として同地に運搬されたと考えられる。全て宇土半島基部に産出する安山岩であり、装飾文様は線刻で表現されている。現在、市立図書館に保管されている 7 つの石材のうち、4 つの石材に計 5 点の線刻絵画が確認されている。以下、高木恭二と土野雄貴の報告にしたがい、装飾文様等の概要を示す（高木・土野 2010）。

- ・No.1 石材線刻：舳艫型とおぼしき船体の一部と、木の葉文が描かれている。
- ・No.3 石材線刻：2 箇所の平滑面にそれぞれ船が描かれている。3-1 線刻は、舷側板の表現が見られることから準構造船と考えられ、甲板上部の構造文様は屋形と考えられる。オールは 10 本あり、いずれも手前側にあるとみられ、船体全長の約 2/3 を占めている。3-2 線刻は、やや太めの線刻で 2 艘の準構造船と見られる船が描かれており、いずれも艫に旗を掲げているのが大きな特徴である。
- ・No.4 石材線刻：線刻範囲左下に動物らしき表現が認められる。
- ・No.7 石材線刻：非常に細い線で準構造船とおぼしき文様が描かれている。

4 保存施設・修復歴等

図書館への移設以降、散在した状態で野外に置かれていたこれらの石材を、2009 年度（平成 21 年度）に 1 箇所に集約し、石材を囲む木製柵と解説サインを新たに設置したうえで、装飾文様が確認できるように展示している。

5 図面等保管場所

拓本及び実測図・写真等の関係資料は、宇土市教育委員会に保管されている。

6 その他（年代等）

宇土半島基部では、梅崎古墳や仮又古墳のように線刻された船が横穴式石室の石材に描かれることが多い。その時期は中期のヤンボシ塚古墳を除き全て後・終末期の中小古墳である。また、一般的に宇土半島基部の装飾古墳は、横穴式石室の玄室側壁や羨道側壁に 1～2 石程度線刻される場合がほとんどであることから、これらの石材は、石垣の構築を目的として城跡周辺の複数の古墳から採取されて運ばれた可能性がある（藤本 2002）。文様構成からみれば、6 世紀後半から 7 世紀中頃に築造された古墳の横穴式石室に描かれたとみられ、これらの石材が採取された古墳として、宇土市椿原町の椿原古墳がその最有力候補と考えられてい

る(高木・土野 2010)。

(藤本貴仁)

参考文献

高木恭二・土野雄貴 2010「宇土半島基部の線刻を有する古墳」『うと学研究』第31号 宇土市教育委員会：pp.9-34
 富樫卯三郎 1972「宇土城の石垣」『宇土市の文化財』第1集 宇土市教育委員会：p.28
 富樫卯三郎・木下洋介 1987「古城古墳参考地」『宇土半島基部古墳群』宇土市埋蔵文化財調査報告書第15集 宇土市教育委員会：pp.121-123
 藤本貴仁 2002「宇土城跡城山遺跡出土装飾石材」『新宇土市史』資料編2(考古資料・金石文・建造物・民俗) 宇土市：pp.189-191

図出典

図20：高木恭二・土野雄貴 2010 より新たにトレース

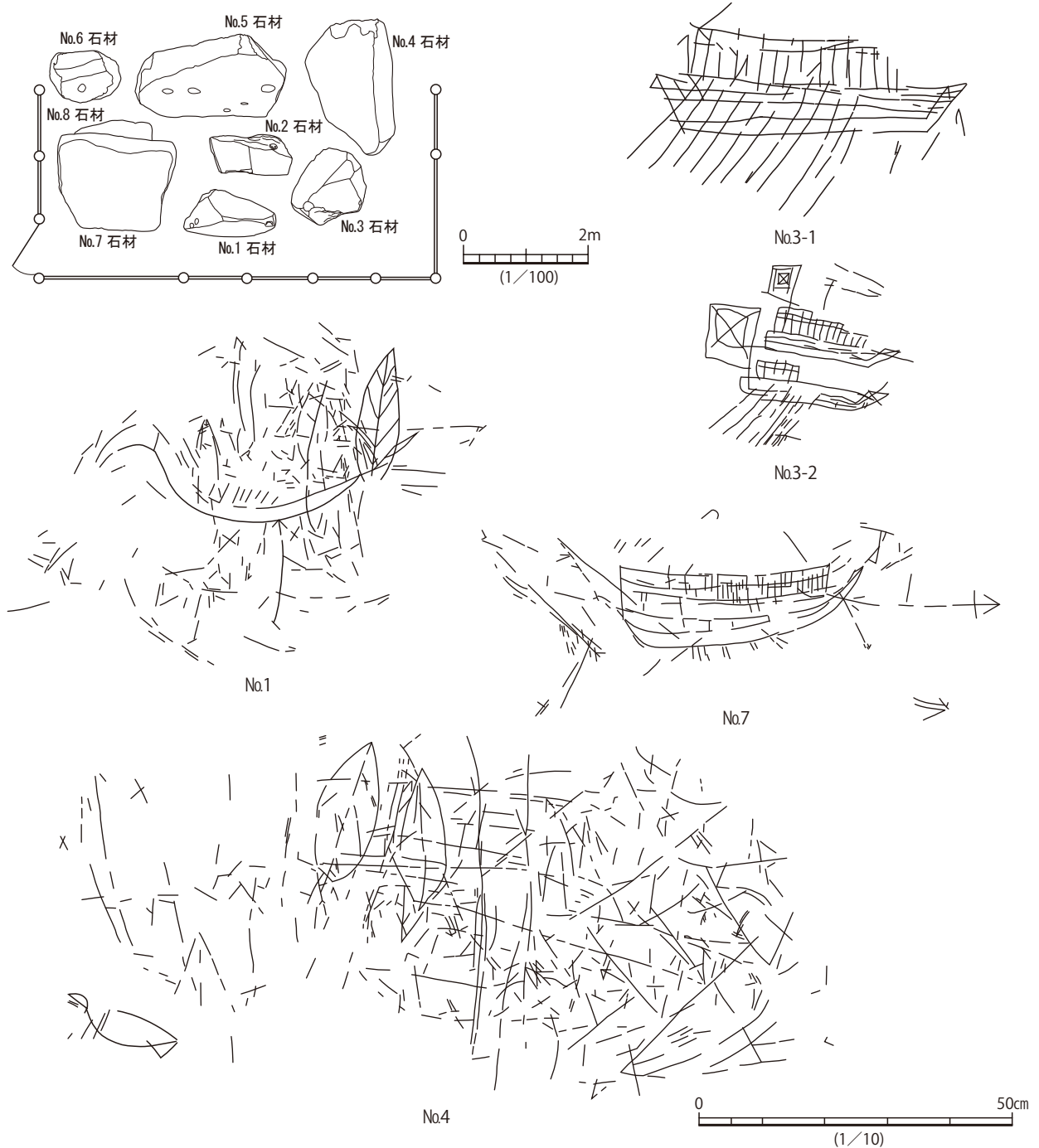


図20 宇土城跡城山遺跡出土装飾石材宇土市立図書館展示レイアウト(左上)及び線刻図

8 ^{ばんめん} 晩免古墳 (昭和 33 年 3 月 14 日市史跡) 一字土市立岡町字晩免一

市町村コード (43211) 遺跡番号 (107) 北緯 32 度 40 分 27 秒 東経 130 度 41 分 16 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1886 年 (明治 19 年) 6 月に家形石棺が発見され、それをきっかけに調査が行われた。発見から事後処理までの経緯は、当時の公文書や往復文書などの写しによって知ることができる (花岡 1982)。

調査の詳細は不明だが、図面作成を中心とした調査だったとみられ、文書に添付された図面などによって石棺内部の様子や蓋の形状、装飾文様などの概要を知ることができる。調査後、古墳そのものが安徳天皇の陵墓ではないかという地元の伝説を受けて、1888 年 (明治 21 年) に宮内庁の陵墓参考地に指定された。また、これを知った帝国古蹟取調会の小杉楡邨が、臨時全国宝物取調のため、1902 年 (明治 35 年) の 4・5 月頃にこの古墳を訪れ、当時の状況についてつぶさに調査を行っている (小杉 1902)。

その後、1958 年 (昭和 33) 年 3 月 14 日付けで当時の宇土町の史跡指定を受けており、同年 10 月 1 日付の市制施行に伴い市指定となった。1973 年 (昭和 48 年) には宇土高校社会部による地形測量が行われている (富樫 1984)。

2 位置及び墳形・規模

古墳そのものの規模や範囲、形状についてはよくわかっていないが、石棺が出土したのは周囲との比高差約 15 m の独立丘陵の頂上部であることから、この頂上部が古墳である可能性が高い。石棺は現在、玉垣で囲まれた盛土中に保存されているが、これを中心とした直径 30～35 m 程度を墳丘とする円墳と考えられる。本来の墳丘盛土は殆ど流出してしまっており、周辺で葺石や埴輪は確認されていない。

3 石棺

主体部である組合せ式家形石棺は、蓋が 2 石、身はそれぞれ 1 石ずつで構成されている。蓋の上面には短冊状の区画があるのが特徴的である。寸法は、内法が長さ 6 尺 (約 1.8 m) ・幅 2 尺 5 寸 (約 0.8 m) ・深さ約 3 尺 (約 0.9 m) と記録され、北側に頭骨が 2 つあったとされる (濱田・島田・梅原 1919)。蓋の小口部には円柱状の縄掛突起があり、また両長辺にも半円形の環状縄掛突起が 3 個ずつ付く。棺身内面には、小口と長辺の両方に刀掛状突起が造り出されているが、同一の石棺に環状縄掛突起と刀掛状突起を併せ持つ点は珍しい (高木 2002)。

4 装飾

刀掛状突起の近くに円文が施されている。

5 出土遺物

明治期の発見・調査であるため、出土遺物については不明である。

6 保存施設・修復歴等

1888 年 (明治 21 年) に陵墓参考地に指定されて以降、古墳の保存管理は宮内庁が行い、石垣と土盛り、玉垣による石棺の保存がなされている。

7 図面等保管場所

石棺発見とその後の経緯については、熊本県立図書館に所蔵されていた『肥後郷土誌資料』のうち「第一編 肥後古墳史料」(「古墳発掘記録」)の中に記されていたが、原本は昭和 20 年に戦災により焼失したとされる。その写しのみが夕葉文庫 (十条製紙八代工場内図書館) に収蔵されていた (花岡 1982) が、現在は熊本県立図書館で収蔵されている。

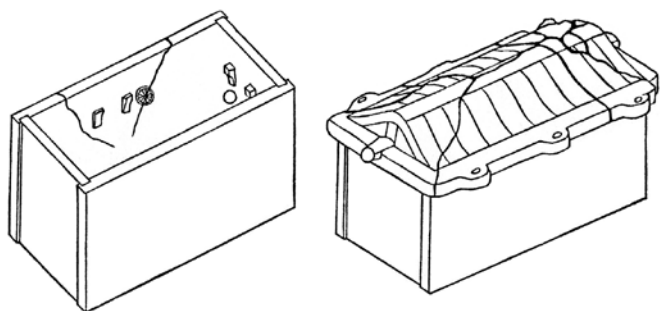


図 21 晩免古墳石棺図

8 その他（年代等）

石棺外面の環状縄掛突起は熊本県氷川流域で作られた石棺の特徴だが、本石棺は刀掛状突起を併せ持つ点から考えて、必ずしも氷川流域産とは限らず、宇土半島産である可能性も残されている。同じく刀掛状突起を持つ神ノ山1号石棺や西潤野古墳など付近で出土した石棺は、その多くが宇土半島の網引付近で作られた可能性が高いとみられており、晩免古墳の石棺がそれらとどう関連するかが注目される。石棺の特徴などから、古墳の築造時期は5世紀後半頃とみられる（高木 2002）。

（ 芥川博士・藤本貴仁 ）

参考文献

小杉樞郎 1902「肥後国に埋蔵するめづらしき石棺」『帝国古蹟取調会報』第3号

高木恭二 2002「晩免古墳」『新宇土市史』資料編2（考古資料・金石文・建造物・民俗）宇土市：pp.117 - 119

富樫卯三郎 1984「晩免古墳—花園陵墓参考地—」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集：pp.107 - 108

花岡興輝校訂 1982「古墳発願記録（抄）」『宇土市史研究』第3号：pp. 1 - 10

濱田耕作・島田貞彦・梅原末治 1919「肥後国宇土郡花園村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3冊：pp.22 - 27

図出典

図 21・22：高木恭二 2002 より新たにトレース

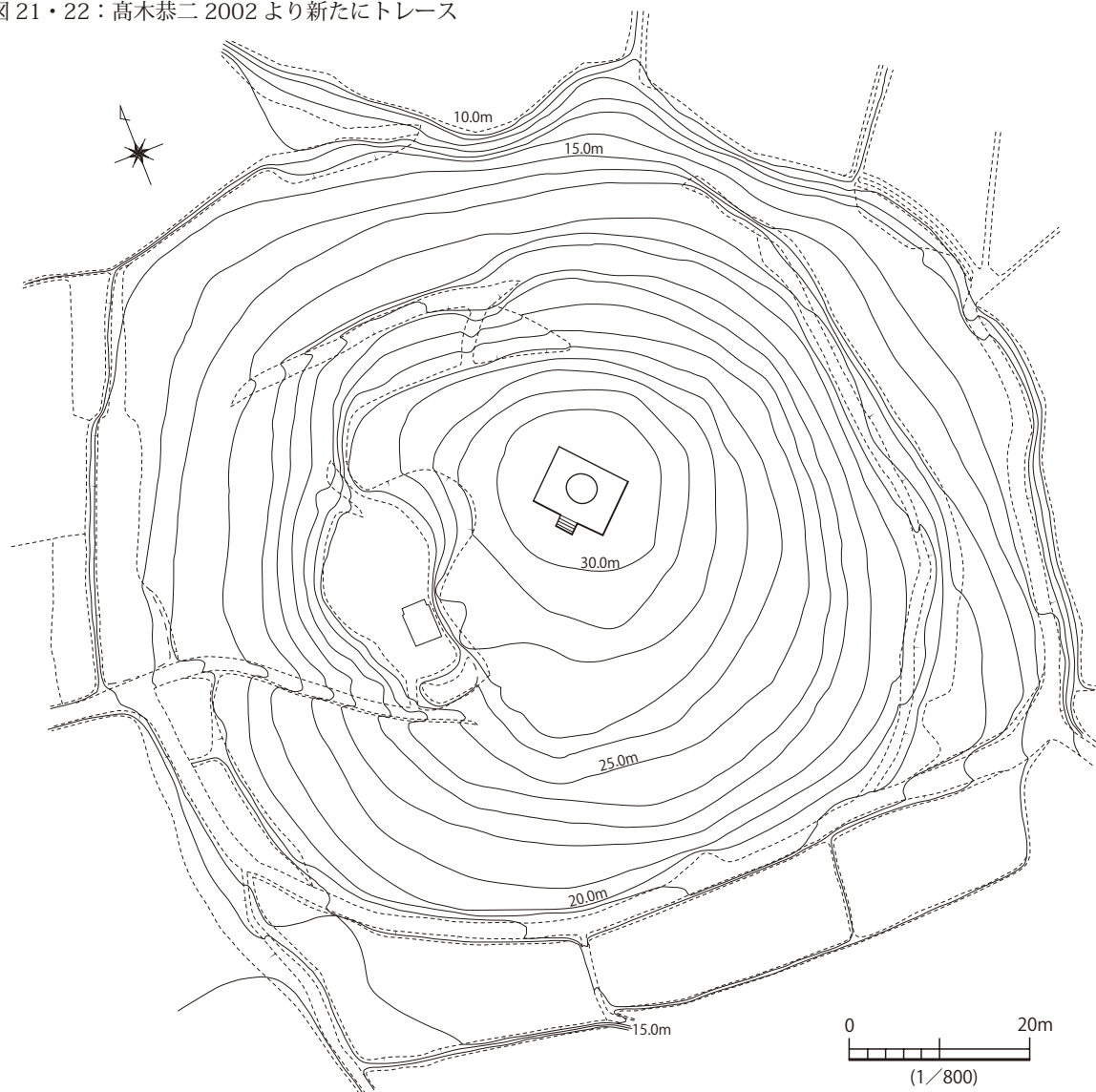


図 22 晩免古墳墳丘測量図

9 ^{うろの}潤野古墳 (未指定) 一字土市立岡町字中潤野一

市町村コード (43211) 遺跡番号 (108) 北緯 32 度 40 分 21 秒 東経 130 度 41 分 12 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1883 年 (明治 16 年) 3 月, 何者かによって荒らされて本墳の石棺が大きく破壊された。これを受け, 直後に県から職員の派遣がなされている。まだ考古学的な調査手法も確立していない明治期のことであるため, 調査といっても今日行われるような詳細なものではないが, 石棺内の実査も行われたらしいことが, 地元花園村と熊本県, 国などとの往復公文書から明らかになっている (花岡 1982)。

2 位置及び墳形・規模

本墳は, 現在の国道 3 号線松橋バイパス東側の丘陵地から北西方向に延びる尾根の途中, 麓からの急傾斜がやや緩くなる傾斜変換点付近 (標高約 33 m) に所在する (富樫 1984)。墳丘の形状・規模は不明だが, 現地の地形からさほど大きな古墳ではないとみられる。

3 石棺

埋葬施設は組合式家形石棺であるが, 現地に盛土して保存されており, 現在実見することはできない。しかし, 石棺発見にまつわる上記の文書に掲載されている図面から, 形状などをある程度復元することができる (濱田・島田・梅原 1919)。

蓋は破損しているが, 各長辺に 2 個ずつの環状縄掛突起がつき, 小口部にはやや省略気味の円柱状縄掛突起が表現されている。身は長辺が各 2 枚, 小口部は各 1 枚の凝灰岩製板石で構成され, 長辺と小口の噛み合わせ部にはしっかりかみ合うように溝が掘られている。棺身は長さ 7 尺 4 寸 (約 2.3 m)・幅 2 尺 5 寸 (約 0.8 m)・高さ 3 尺 2 寸 (約 1.0 m)・蓋は長さ 8 尺 (約 2.4 m) を超え, 幅は 3 尺 8 寸 (約 1.2 m) 内外と記録されている。棺身内面の長辺側に刀掛状突起がある。

4 装飾

刀掛状突起の上辺には連続三角文を施した細長い長方形の装飾があり, その下部に円文が 4 個描かれている。小口側内面にも 3 個の円文が描かれている。なお, 蓋の下面に「平資盛」「吾人」の文字が刻まれているが, これは明治期のイタズラといわれる。

5 出土遺物

鉄斧 1 個と鉄片数個があったといわれるが, その詳細は不明である。

6 保存施設・修復歴等

石棺は現在, 周囲に石を貼った土饅頭状の盛土で被覆され, その上部には深い彫り込みで「古墳」と記した標柱が立つ。

7 図面等保管場所

発見が早かったため, この古墳に関する当時の資料類は所在不明である。ただ, 前述のとおり, 石棺発見にまつわる当時の対応状況がうかがえる行政文書の写しが夕葉文庫 (十條製紙八代工場内図書館) に保管されていた (花岡 1982) が, 現在は熊本県立図書館で所蔵されている。

8 その他 (年代等)

図面からうかがえる石棺の形状から見て, 築造時期は 5 世紀後半頃とみられる。付近に所在し, 発見の時期・経緯などがよく似た晩免古墳よりもやや遅い時期と考えられる (高木 2002)。本墳は熊本県内でも最も早い時期に発見・注目された古墳の一つであり, 発見直後から古墳の保存施設建設に関わる数々の行政的措置や指導は, 文化財に対して当時の行政がどう関わったかを知ることができ, 文化財保護の歴史を考えるうえで重要である。

(芥川博士・藤本貴仁)

参考文献

- 高木恭二 2002「潤野古墳」『新宇土市史』資料編2(考古資料・金石文・建造物・民俗) 宇土市: pp.120 - 121
 富樫卯三郎 1984「潤野古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集: pp.105 - 106
 花岡興輝校訂 1982「古墳発掘記録(抄)」『宇土市史研究』第3号: pp. 1 - 10
 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治 1919「肥後国宇土郡花園村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3冊: pp.22 - 27

図出典

図23・24: 高木恭二2002より新たにトレース

図25: 熊本県博物館ネットワークセンター提供(白石巖1971年11月1日撮影)

図26: 花岡興輝校訂1982より新たにトレース

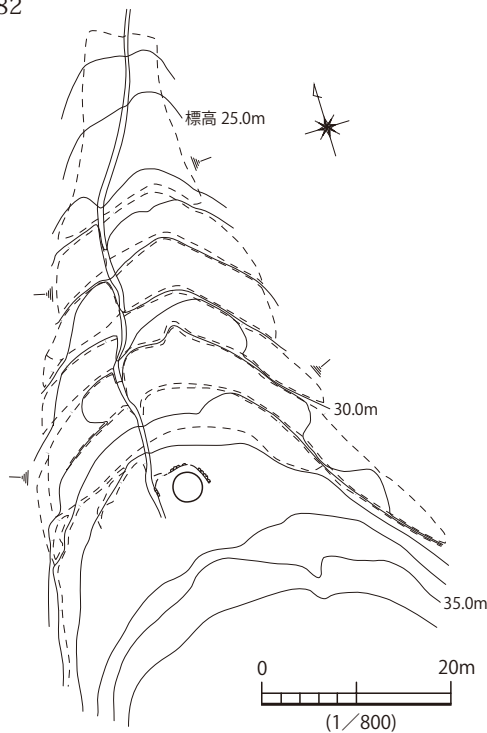


図23 潤野古墳墳丘測量図

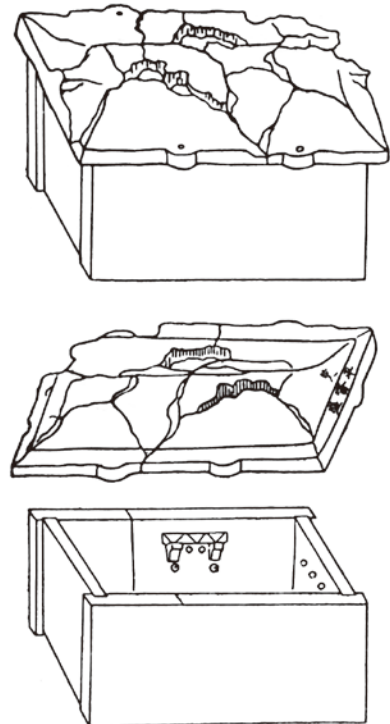


図24 潤野古墳石棺図



図25 潤野古墳全景



図26 潤野古墳石棺出土状況図

10 宇賀岳古墳^{うがたけ} (昭和51年8月24日県史跡) 一字城市松橋町松橋岩谷一

市町村コード (43343) 遺跡番号 (009) 北緯 32 度 39 分 26 秒 東経 130 度 40 分 39 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は不明だが明治時代には盗掘にあったとされる。1916年(大正5年)12月の京都帝国大学考古学研究室による鴨籠古墳の調査時にこの古墳に装飾があることを知り、あらためて1919年(大正8年)に調査が行われたが、既に墳丘は失われ石室が露出していた。1980年(昭和55年)に古墳保存修復工事に伴い松橋町教育委員会(当時)による発掘調査が行われ墳丘測量図・石室実測図が作成された。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島基部東側丘陵の南端、宇賀岳(岡岳)と呼ばれる標高約65mの小丘陵に位置する。1980年の調査では墳形・規模を決定する資料を得ることは出来ていないが、石室の規模・周辺地形より径10数mの円墳と推定されている。

3 石室

南に開口する単室の横穴式石室である。保存修理以前は、奥壁、両側壁が残存し、屋根形をした大小の2石の石材などが石室の中に落ち込んでいた。1980年の調査では、玄門袖石・羨道部側壁の掘方が確認され、楣石と框石の他奥壁の北側にも石材が発見されている(図28)。調査の結果から以下のように復元されている。

- ・奥壁腰石は、側壁より低くなっているが、京大報告の写真(図32)では、奥腰石の上に更に1石が載り同じ高さになっているので、奥壁の北側で発見された石材が載せられている。しかしそれでも側壁と高さが同じにならないためか、樹脂をいれ調整している。
- ・小形の屋根形をした石材は、奥壁にそって石柵状に、腰石の上に架け渡す。
- ・各壁面上部は切石ブロックを数段持ち送って積む。
- ・大きな屋根形をした石材を石室の天井石として妻入りに架ける。

これにより玄室長2.4m、幅1.95m、羨道部は長さ0.8m、幅1.3mとなる。石室を構成する石材はすべて凝灰岩で、天井石、石柵状石材の内側は彫くぼめられている。床面に仕切り石の区画があったかどうかは不明である。また奥壁・両側壁の腰石、框石、楣石には鍵(L字)形に加工された個所が認められる。框石の中央には方形の剝込みが確認できる。天井と床の間に棒状のもの差し込み閉塞をより強固にしていた可能性も考えられるが対応する天井石が欠損しているのと言及はできない。

4 装飾

装飾は奥・両側壁に施される。奥壁石材には2個の造り出しの突起の基部が残存している。この突起の上下に横線が引かれ、その間に径10cm程の円文が11個確認されている。突起にはさまれた2個の円文には赤い彩色があり、この円文の周囲は緑色で縁取りされる。円文の下段は横線で3つに区画され、そこに連続三角文が描かれる。また上段にも三角文が描かれる。赤、薄い赤、緑の彩色が確認されている。左側壁も2条単位の横線により4つに区画され、それぞれに連続三角文が描かれる。また2段目の2条の横線の間は直交する線があり梯子形の文様となる。この他にも梯子形文が斜めに描かれている個所がある。彩色は赤、薄い赤が確認される。右側壁も左壁同様2条の横線で区画し連続三角文を描いているようであるが、部分的にしか確認できない。赤の彩色が確認されている。

緑色の顔料について分析が行われているが、「緑の分布が極めて狭いため、計測されたスペクトルが厳密に顔料によるものか確認がないものの、福岡県下で観察されたものと類似する緑色のスペクトルがえられる個所が観察された(朽津他2000)」と報告されている。

5 出土遺物

調査でも古墳時代の遺物は確認されておらず、中世の遺物がわずかに出土したのみである。

6 保存施設・修復歴等

1980年に、石室及び墳丘を復元し、保存施設を設置。

7 図面等保管場所

保存修復工事報告書は宇城市教育委員会に保管されているが、調査時の図面等の所在は未確認。

8 その他（年代等）

石棺式石室の源流と言われている石室であり、築造年代は、前方後円墳集成9期（陶邑編年TK10）頃と考えられる。

（ 古城史雄・神川めぐみ ）

参考文献

島田貞彦 1918「肥後国下益城郡松橋の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究报告第三冊：pp.34 - 37

勢田廣行 1984「宇賀岳古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.101 - 104

高木恭二 1995「石棺式石室と肥後一宇土半島基部における源流的要素一」『横穴式石室にみる山陰と九州』古代の出雲を考える8 出雲考古学研究会：pp.50 - 69

永嶋正春 1999「装飾古墳の色彩と素材」『装飾古墳の諸問題』国立歴史民俗博物館研究报告第80集：pp.337 - 363

朽津信明・下山進・川野涉邊 2000「熊本県下の装飾古墳の緑と青の顔料について」『熊本県立装飾古墳館平成11年度研究紀要』第4集：pp.21 - 34

図出典

図27・図28左下 石室平面図：昭和55年宇賀岳古墳

保存修復工事報告書より新たにトレース

図28 石室実測図，図29 復元石室：勢田廣行

1984より新たにトレース

図29 天井石・石柵実測図：高木恭二

1995より新たにトレース

図30：人吉市教育委員会提供

（乙益重隆撮影）

図31：熊本県博物館ネットワークセンター

提供（白石巖 1971年8月18日撮影）

図32：京都大学大学院文学研究科考古学研

究室提供

図33：熊本県立装飾古墳館提供（牛島茂・

杉本和樹 1999年11月19日撮影）

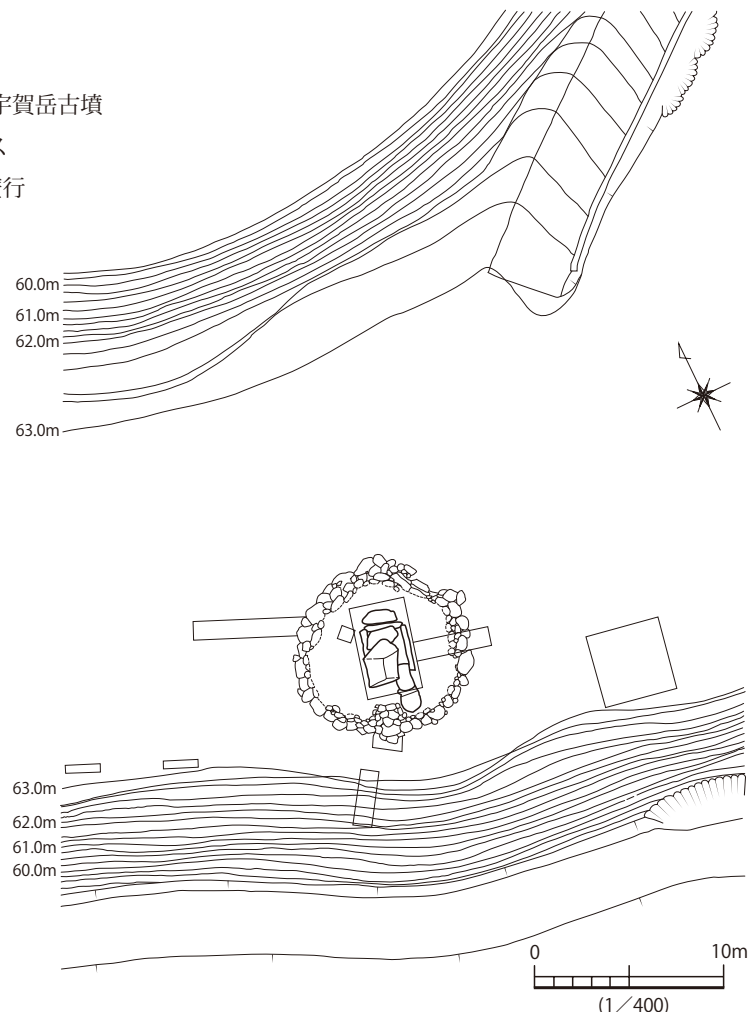


図27 宇賀岳古墳墳丘測量図

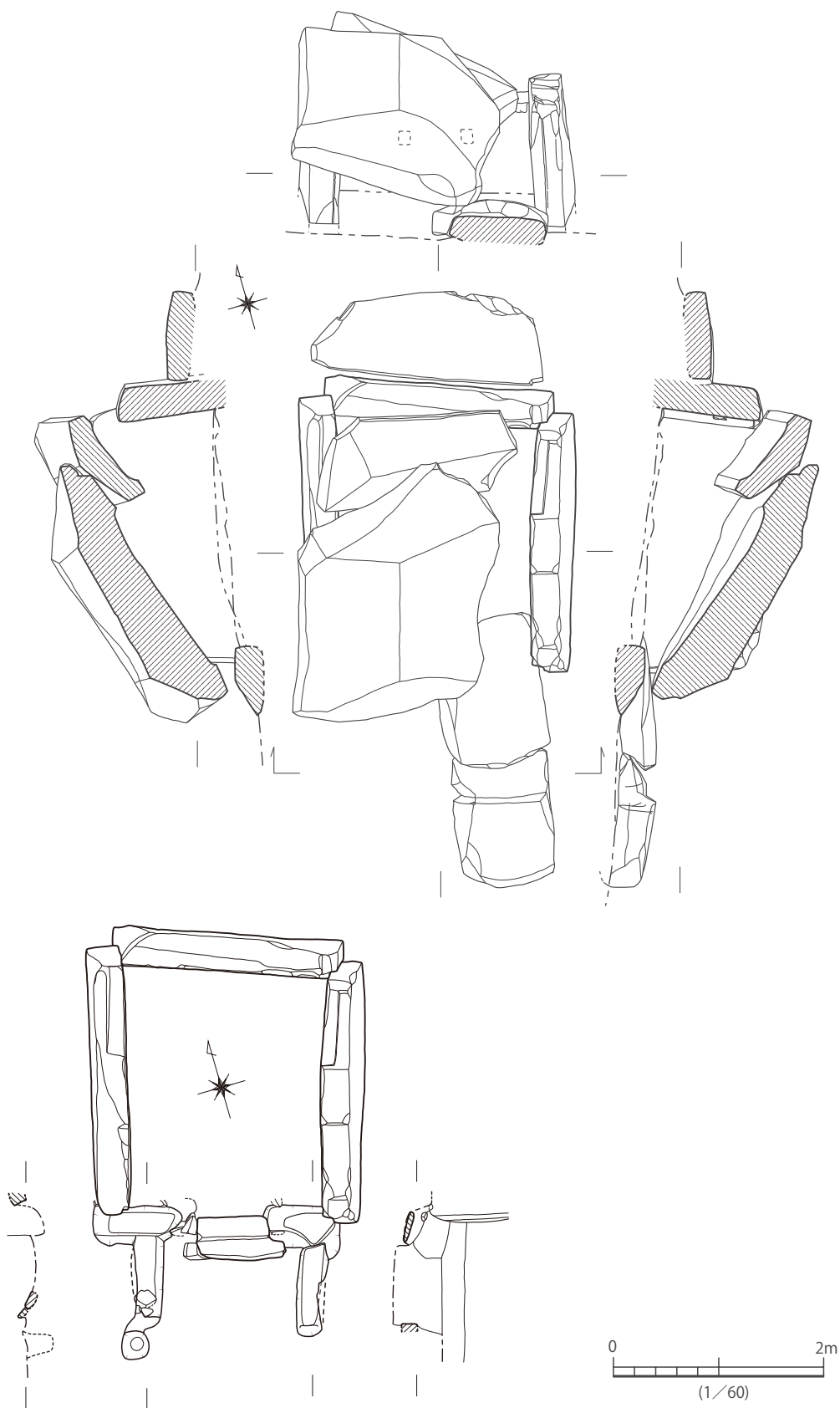


図 28 宇賀岳古墳石室実測図（左下：天井石を除去後の平面図）

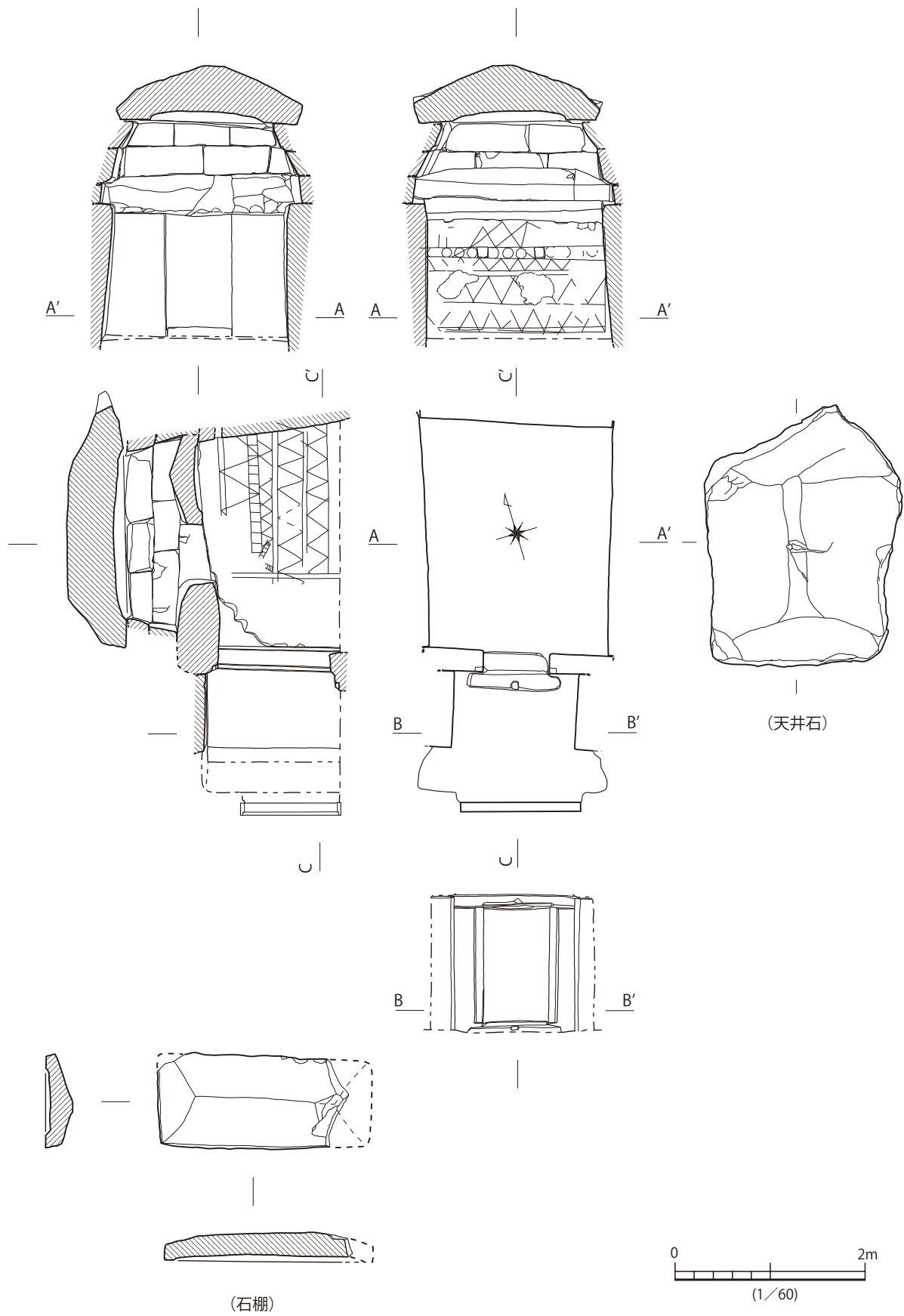


图 29 宇賀岳古墳復原石室及び天井石・石棚実測図

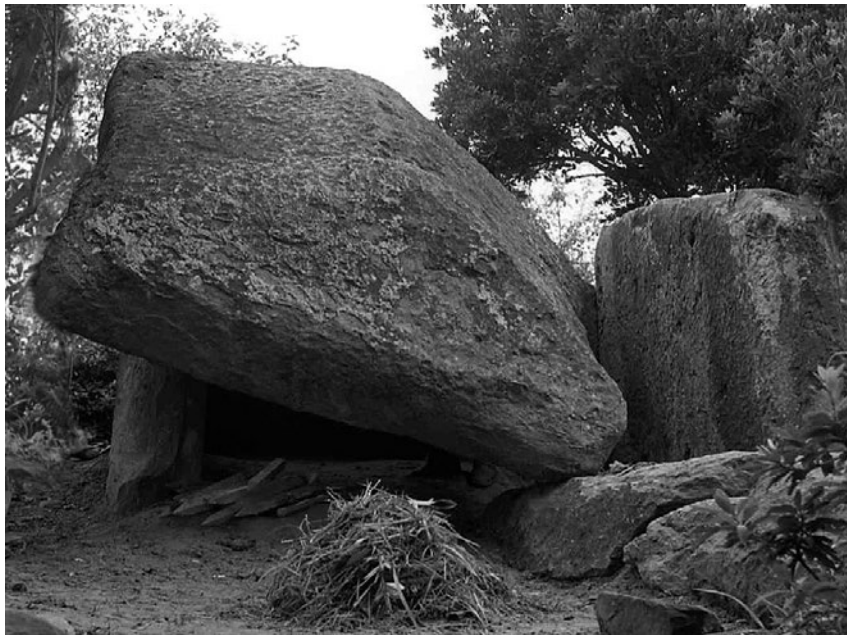


図30 整備前の宇賀岳古墳石室
(南より)



図31 整備前の宇賀岳古墳石室
(北より)



図32 整備前の宇賀岳古墳石室 (右が奥壁側)

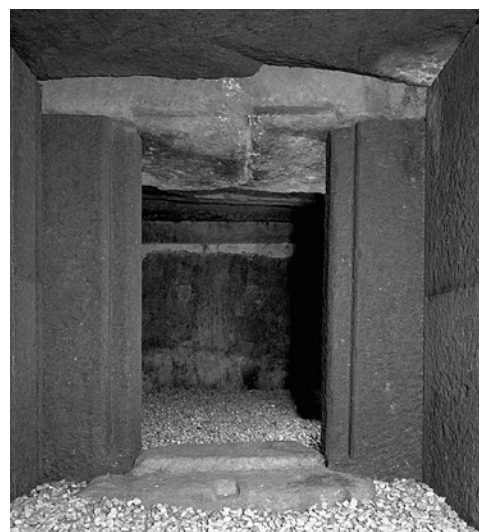


図33 整備後の宇賀岳古墳 (正面より)

11 不知火塚原1号古墳 （昭和50年10月10日県史跡） 一字城市不知火町高良栗崎坊ノ平

市町村コード（43322） 遺跡番号（006） 北緯32度39分01秒 東経130度39分25秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は不明であるが、「塚原」という名称からもこの一帯に多くの古墳があることが古くから知られていたと思われる。調査は1961年に桂原1号墳の調査と並行して三島格らで行われている。

2 位置及び墳形・規模

大野川右岸の丘陵、南西側に位置し、八代海を臨む。南北に並ぶ2基の古墳の南側の古墳である。封土が流出し石室の天井石が完全に露出している。墳丘の調査は行われていないが、径7m、高さ3m程の円墳の可能性が考えられている。

3 石室

南に開口する単室の横穴式石室である。石材は安山岩とされている。明確な袖石はないが羨道側の幅が若干狭くなっている。

羨道は、長さ約180cm・幅約98cm・高さ約90cmとされている。左側壁2石、右側壁1石が現存する。玄室側には楣石が載るが、それ以上の石積は確認できない。

玄室は長さ約250cm・幅約160cm・高さ約160cmで、長方形プランとなる。腰石は、奥壁1石、両側壁2石の巨石を用い、腰石の上にも比較的巨大な石を2段ないし3段積み上げ天井を架す。

4 装飾

装飾の部位は、天井石や奥壁、左右側壁及び羨道左側壁に認められる。右側壁は複数の船が描かれているが、他の装飾は、柱状の線刻や斜め格子状の線刻などで何を表しているのか明確ではない。

5 出土遺物

なし

6 保存施設・修復歴等

保存施設はないが、玄室右隅の奥壁、右側壁はセメントで補修されている。このことについて三島は「昭和5年3月鳥居龍藏博士を迎え在熊の研究者が桂原やこの塚原を訪れているので、この機運によって補修されたのであろう」としている（三島1972）。

7 図面等保管場所

石室実測図、拓本の所在未確認。

8 その他（年代等）

築造年代は、出土遺物が不明だが、石室構造から推察すると、終末期頃と考えられる。

（ 古城史雄・神川めぐみ ）

参考文献

三島格 1972 「栗崎古墳・鬼塚」『不知火町史』 不知火町史編さん委員会：pp.52 - 56

三島格 1984 「不知火塚原1号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』 熊本県文化財調査報告第68集：pp.124 - 126

図出典

図34：三島格1984より新たにトレース

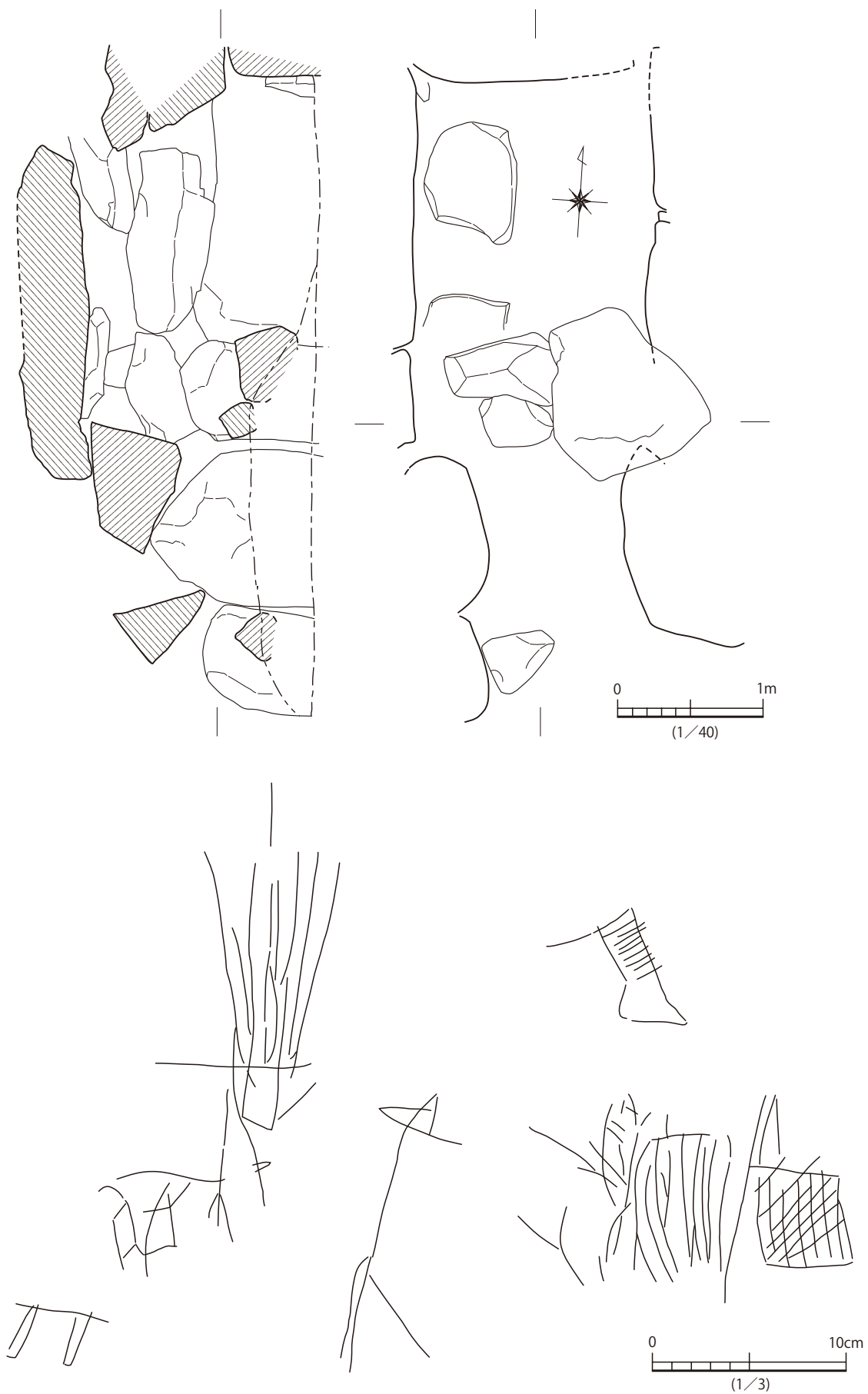


图 34 不知火塚原 1 号古墳石室及び天井石裝飾文実測図

12 鴨籠古墳^{かもこ} (昭和50年10月27日市史跡) 一字城市不知火町長崎坊ノ平一

市町村コード(43322) 遺跡番号(003) 北緯32度39分01秒 東経130度38分52秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

「京都帝国大学考古学研究报告」第1集(濱田他1917)によると1715年(正徳5年)に鳥居建設のために来村していた石工が発見した遺物を持ち去り、その後は埋もれて畑となり側壁のみが見えていたが、橋材に用いようと掘ったところ棺を発見し中止されたようである。

調査歴は、1916年(大正5年)角田政治の調査、翌年1917年(大正6年)には京都帝国大学文学部考古学研究室により、熊本県下の装飾ある古墳及び横穴に関する調査の一環として実施された。その際に石棺は石室から引き上げられ熊本県教育會の明麗館に移転された。1961年(昭和36年)には三島格・杉村彰一らにより墳丘測量及び石室の実測図が作成されている。

2 位置及び墳形・規模

八代海を望む宇土半島基部南岸の城ノ越丘陵の端部に立地する。1961年に墳丘作測量により、墳丘の形状は楕円形で、長径約25m、短径約16mで、高さは不明としながらも約6mを想定している(三島1984)。この東側は一段低くはなるが墳丘が削平されたものと考えれば径25m程の円墳と想定できる。

3 石室

4枚の巨大な板石を組み合わせて石室とする。石材は砂岩で、東側壁と北側壁の組み合わせ部は東側壁に浅い溝を造り出す。石室上部に使用されるような石材は全く確認できず上部構造は不明である。石棺に平行する北側の側壁を奥壁と想定した場合、石室の長さは345cm・幅245cm程を測る。1961年調査時は、床面

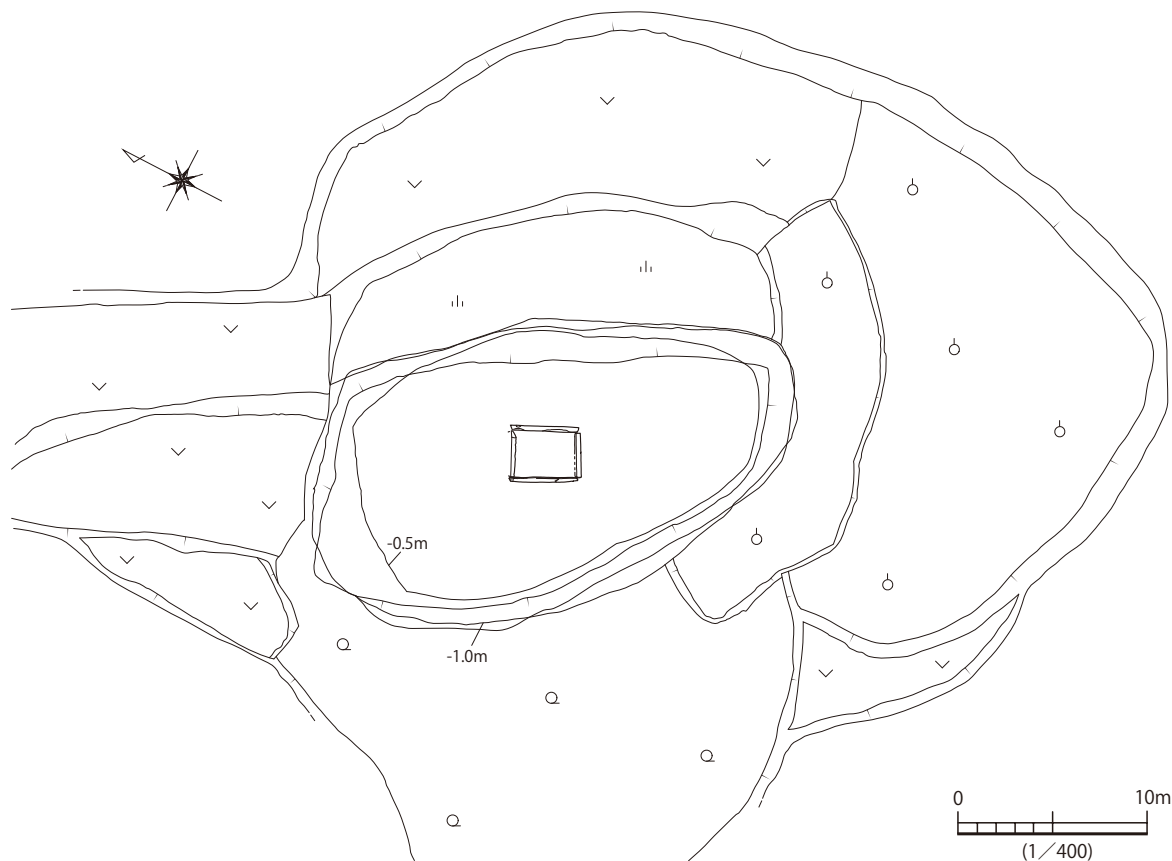


図35 鴨籠古墳墳丘測量図

には5cm程の礫石を敷きその上に粘土を敷いた部分が一部残存していたようである。床面より側縁上部までの高さ160～170cmで、南側壁には赤彩が認められたという。石室のやや奥壁より舟形石棺が安置されていた。前述したように石棺は取り上げられているが、図面には、京大報告を参考に石棺が描かれている。

この石棺は現在熊本県立美術館に保管されている。高木恭二分類の中肥後型石棺に該当する。石材は阿蘇溶結凝灰岩で宇土半島の馬門石で、この中肥後型石棺は吉備造山古墳前方部にある石棺の外、畿内の今城塚古墳や植山古墳などで用いられている。特注棺と考えられているもので、肥後では鴨籠古墳のみである（高木恭1994）。

棺蓋は刳抜式で寄棟造りである。長さ173cm・幅78cm・高さ40cmを測る。下端周縁部に幅の狭い平坦面を巡らす。側縁部に各2個の縄掛突起が造り出されていたと考えられている。棺身も刳抜式で枕を造り出す。身の縦断面形を見ると枕のある頭部側の外面のカーブが大きい。なお石棺の蓋と身の組み合わせは、京大報告では、蓋の破損が大きい方が足元側となっている。一方熊本県総合調査報告の図では、蓋の破損が大きい方が頭側となっている。石棺は石室から引き上げられて以降何度か移転しているため、どこかで蓋と身の組み合わせに混乱が生じたと考えたが、結論から言えば熊本県総合調査報告掲載の図が妥当と判断した。県立装飾古墳館のレプリカの身・蓋の合わせ部分の計測値は、身の頭側の小口幅は66.5cm、足元側の幅は61.2cmである。蓋の小口幅は66cmと62.5cmであり、破損の大きい側の幅が広い。このことから蓋も破損の大きい方が頭位側と結論づけた。また石棺内面の略側図は熊本県立装飾古墳館のレプリカの計測値から起こしたものであり、内法は床部分で全長135.5cmである。

4 装飾

棺蓋の全面に装飾が施される。頂部は2条の線で大きな長方形区画を作り、内部を2条と1条の線及び梯子形文で10個の区画を作る。長辺斜面もそれぞれ5つに区画し、同心円文と直弧文を交互に施文する。小口部は中央の5条の線で2分割し、それぞれに直弧文を施す。その他側縁外周には梯子形文が描かれる。8区画で直弧文が認められる。報告では赤・青で彩色されていたとある。また永嶋正春氏は赤以外の彩色について、かろうじて緑色味を残しているように認められる個所があること、白褐色で幾分艶のある塗装が行われているように観察できる区画もあることから、当初の彩色が赤色のみであった可能性は小さいとし、赤色、白色（あるいは黄色）、緑色の3色からなる塗り分けが行われていたと想定したいとしている（永嶋1999）。また最近の顔料調査では赤以外の顔料が存在したであろう痕跡は確認されたものの、測色を行っていないため、いずれの顔料であるか特定できていないとされた（朽津他2000）。

5 出土遺物

京都帝国大学調査時に奥壁と棺の間より刀・剣・矛の残片が出土している。また1961年の測量調査時に床面清掃を実施し、石棺破片、刀子片2、鉄刀片1、鉄鏃数本が出土しているが、いずれも所在不明である。この他2012年（平成24年）頃にも石棺片が採集され、宇城市教育委員会で保管されている。

6 保存施設・修復歴等

石棺は、現在熊本県立美術館で保管。石棺のレプリカは熊本県立装飾古墳館で展示。石棺蓋は昭和50年前後に修復されているが正確な修復年月日は不明である。

7 図面等保管場所

墳丘測量図・石室実測図・石棺実測図は、熊本県文化財資料室で保管。

8 その他（年代等）

築造年代は、前方後円墳集成7期（陶邑編年TK208）頃と考えられる。

（ 古城史雄・神川めぐみ ）

参考文献

- 濱田耕作・梅原末治 1917「宇土郡不知火村の古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』京都帝国大学文学部考古学研究報告 第1冊：pp.24 - 29
- 坂本経堯 1972「鴨籠古墳」『不知火町史』：pp.57 - 59
- 三島格 1984「鴨籠古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.119 - 123
- 高木恭二 1986「鴨別と鴨籠」『Museum Kyushu』第21号：pp.34 - 40
- 高木恭二 1994「九州の刳拔式石棺について」『古代文化』第46巻第5号：pp.25 - 47
- 永嶋正春 1999「装飾古墳の色彩と素材」『装飾古墳の諸問題』国立歴史民俗博物館研究報告第80集：pp.337 - 363
- 朽津信明・下山進・川野涉邊 2000「熊本県下の装飾古墳の緑と青の顔料について」『熊本県立装飾古墳館平成11年度研究紀要』第4集：pp.21 - 34

図出典

図35・36：三島格 1984 より新たにトレース

図37：三島格 1984 より一部改変し新たにトレース（石棺身内面図はレプリカを略測）

図38：熊本県博物館ネットワークセンター提供（白石巖 1971年4月29日撮影）

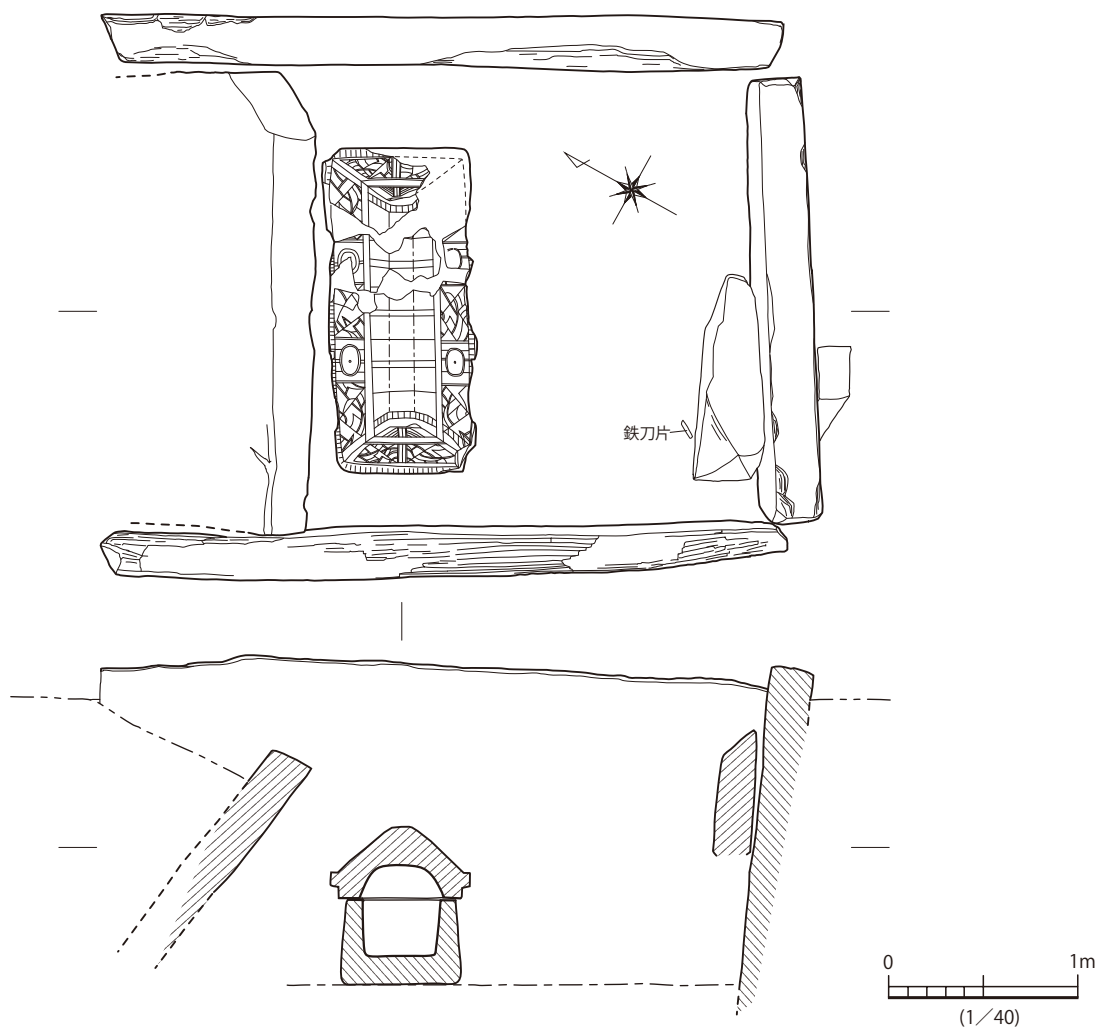


図36 鴨籠古墳石室実測図

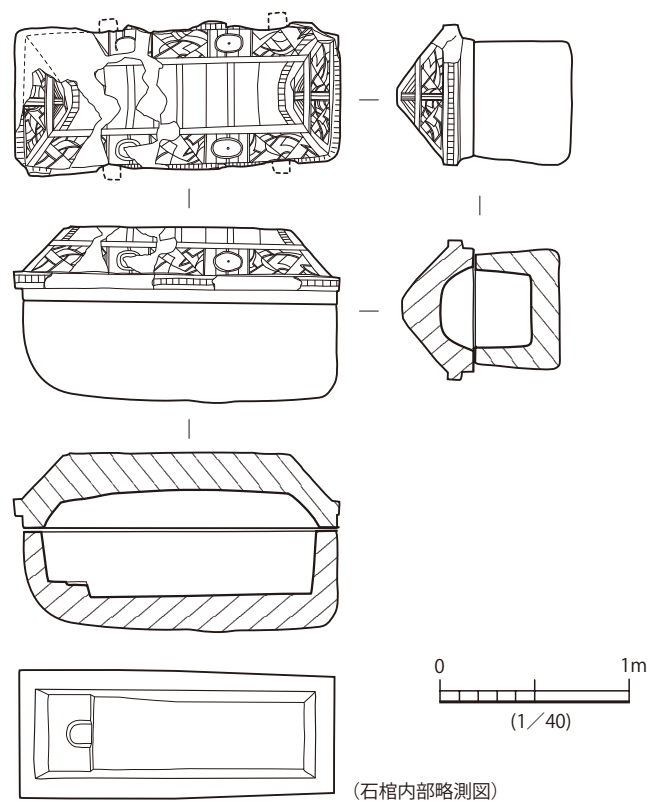


図 37 鴨籠古墳舟形石棺実測図



図 38 鴨籠古墳舟形石棺

13 国越古墳^{くにごし} (平成 10 年 9 月 16 日県史跡) 一字城市不知火町長崎国越一

市町村コード (43322) 遺跡番号 (041) 北緯 32 度 38 分 43 秒 東経 130 度 38 分 43 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1963 年 (昭和 38 年) に富樫卯三郎宇土高等学校教諭らによって発見された亀崎古墳群 (弁天山古墳・国越古墳・道免古墳・八久保古墳) の 1 基。同年秋から蜜柑園造成のため重機による開墾で前方部が削られ始め、その応急処置として富樫指導の下宇土高校社会部により弁天山古墳・国越古墳・道免古墳の測量調査が行われた (1 次調査)。しかし道免古墳は無届のまま完全に破壊され、残り 2 基も破壊の恐れが出てきたため宇土高等学校社会部では 1965 年 (昭和 40 年) 8 月に弁天山古墳と国越古墳の発掘調査を計画したが、予算の関係で弁天山古墳は完掘できたが、国越古墳は羨門部だけの調査にとどまった (2 次調査)。その後国越古墳は墳裾が開墾され墳丘斜面も階段状に切り取られたので、1966 年度 (昭和 41 年度) 国庫補助を受け熊本県教育委員会により緊急発掘調査が行われた (3 次調査 調査期間昭和 41 年 7 月 24 日から 8 月 2 日)。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島基部の南岸に位置する。亀崎丘陵部にある前方後円墳で、端部には前期の前方後円墳である弁天山古墳が存在する。八代海を臨み、氷川町の野津古墳群を見渡すことができる位置にある。全長 62.5 m の前方後円墳で、後円部径 36.2 m を測る。周溝は確認されていない。前方部頂部や南北斜面、また後円部北側や東裾部から円筒埴輪片が多量に出土。その他人物・器材埴輪も出土している。葺石は確認されていない。

3 石室

南に開口する単室の横穴式石室である。使用石材は報告によると、玄室の腰石や上段の積石、石屋形や閉塞石は凝灰岩が使用され、その他楣石などには砂岩が使用される。

(1) 羨道部

全長約 300cm・幅は羨門側で約 120cm・前庭部側で約 155cm である。羨門から約 120cm までに天井石が架かり、この個所までは側壁も巨大な板石を使用しており、ここまでが羨道でその先は前庭部とすべきものかもしれない。高さは羨門側で約 135cm を測る。羨門部には閉塞石があり、更に約 60 個余りの塊石で塞がれている。この閉塞石は阿蘇溶結凝灰岩で高さ 132cm・幅 74cm・厚さ 11cm で、中央に造りつけの把手を設ける。羨道のほぼ中央床面下に幅 20～40cm・深さ約 20cm の礫溝があり、排水溝と考えられている。羨門直下から外に延び、約 6 m の地点まで確認されている。

(2) 玄室

玄室の平面形は、長さ約 285cm・幅 216cm の長方形である。天井石は玄室内に落下していたが、床面より 220cm 以上の高さを有していたと推測されている。

石室の腰石は、石障が石室に取り込まれたような形状で、前壁 1 石・奥壁 1 石・側壁各 1 石からなる。前壁の腰石は中央部を大きく挟み通路とする。袖石の上には羨道天井を兼ねた楣石が載る。屍床配置は基本的には「コ」の字形であるが、奥壁の石屋形の前に別区とよばれる空間を設ける。石屋形は、平入りの横口式家形石棺と呼んでも差し支えないものであるが、身の奥壁と側壁は石室と共有する。屋根石は中央部分が欠け石室内に落ち込んでいた。奥壁の 4 カ所に突起があり、そのうちの 1 個ははめ込み式である。正面は左右に屋根石を支える袖石とその間に低い板石で構成する。板石の中央は 3 段に掘り込み入口とする。また別区を構成する仕切石は 4 石からなり、真ん中の 2 石にも 3 段の掘り込みがある。壁面は腰石の上からブロック状の石材を持ち送り状に積むが、上部は破壊されている。

4 装飾

装飾は石屋形にのみ施され、屋根石表面、袖石前面、奥壁及び突起に施される。屋根石は前面の斜面及び軒に施文される。屋根の斜面は方形に区画され、その下には連続三角文を線刻している。軒には方形区画を並べその中に鍵ノ手文を描く。奥壁、両袖石も梯子形文で区画した中を鍵ノ手文等で埋める。報告によれば赤・青・緑・白の4色で塗り分けられるという。奥壁の装飾は透明フィルムの上からマジックでなぞり赤・青・緑に塗り分けて装飾文が作成されている。このフィルムには白の表記はないが、熊本県装飾古墳総合調査報告(乙益 1984)のピンク色で塗られた個所が白と思われる。また奥壁の施文範囲は、ほぼ開口部分に限定され、玄門部から見られることを意識したものである。

5 出土遺物

東屍床：四獣鏡1、金環・銀環各1、鉄鏃約20、大刀1

西屍床：人骨2体以上、獣文緑獣帯鏡1、金環2対、勾玉1、碧玉製管玉13、空玉3、小玉、粟玉多数

別区：斧8、ノミ2、刀子4、鉋3、矛2、石突2、鋤先12、鎌6、鉄鏃多数、銅椀1、杏葉1、辻金具2、帯金具2、ミニチュア斧3、鏃先4、刀子2、鎌2、鋤先3等

石屋形内：人骨2体、画文帯神獣鏡1、鹿角製玉飾付矛1、勾玉10、小玉・粟玉多数、鉄鏃約30、帯金具2、ノミ1等

中央通路：須恵器高坏・脚台付蓋付壺

出土遺物は熊本県立装飾古墳館に収蔵(一部熊本県文化財資料室)。埴輪は熊本大学・宇土市教育委員会で保管。

6 古墳の保存状況

特に保存施設は設置されず、調査後に埋戻されている。後円部の玄室前壁に当たる個所に盗掘坑の痕跡の窪みが見られる。

7 図面等保管場所

石屋形装飾文様を転写した透明フィルムは、人吉市教育委員会で保管。石室実測図、遺物出土状況図は熊本県文化財資料室で保管。墳丘測量図の所在は不明(青焼図は熊本県文化財資料室で保管)。

8 その他(年代等)

築造年代は、石室構造より前方後円墳集成9期(陶邑編年MT15)頃と考えられる。

(古城史雄・神川めぐみ)

参考文献

乙益重隆 1966「宇土郡不知火町国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』熊本県教育委員会

乙益重隆 1984「国越古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.127 - 130

坂本経堯 1972「国越古墳」『不知火町史』不知火町史編さん委員会：pp.65 - 71

図出典

図39：1966年村井真輝・佐藤伸二・佐藤哲三・北川繁明作成墳丘測量図(青焼)をトレース

図40：右上石屋形装飾を転写したフィルムを撮影、左下1966年乙益重隆・伊藤奎二ほか作成実測図をトレース

図41：1966年乙益重隆・伊藤奎二ほか作成石室図をトレース

図42・43：人吉市教育委員会提供(乙益重隆撮影)

図44：熊本県文化財資料室所蔵(上野辰男撮影)

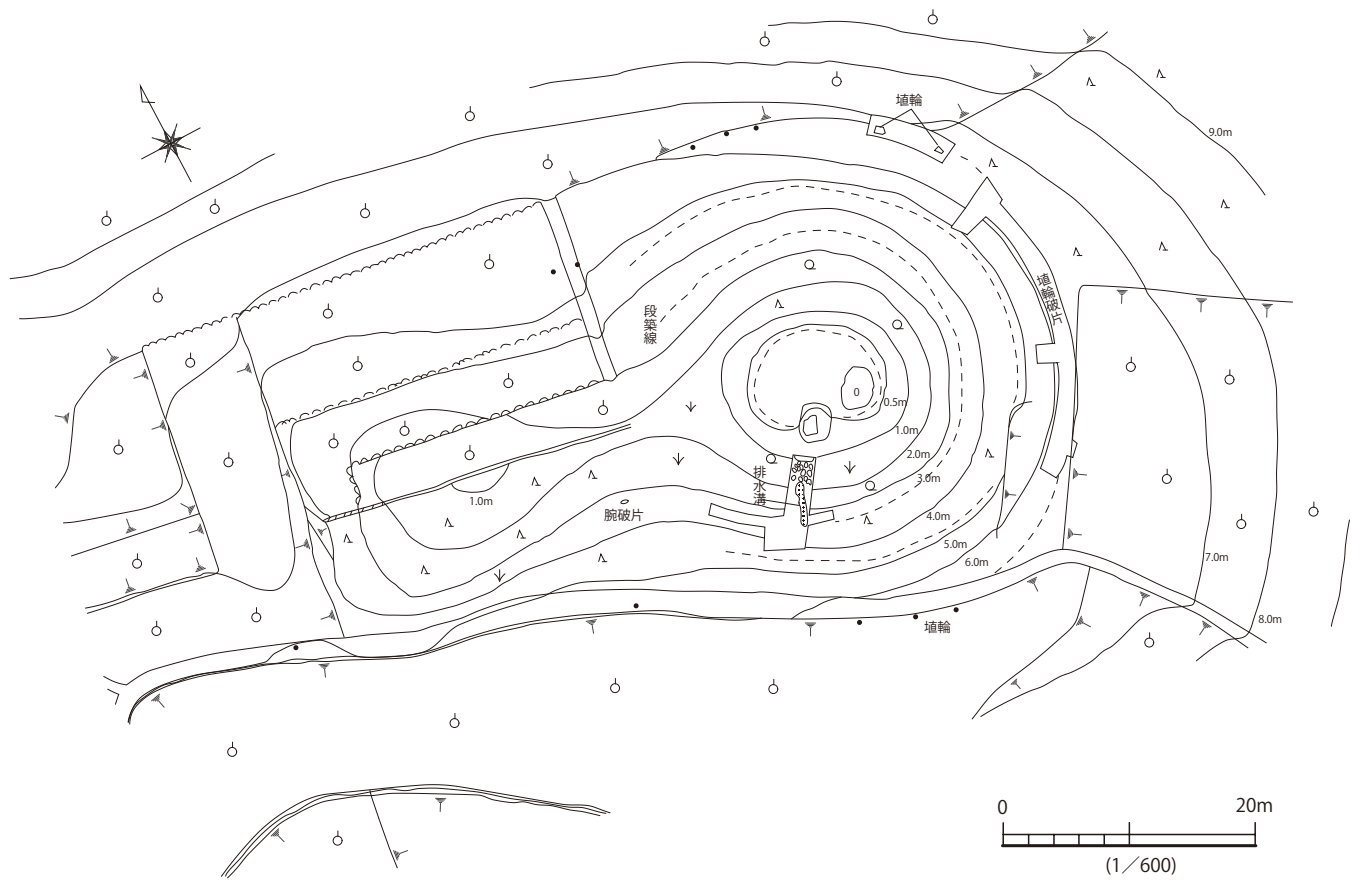
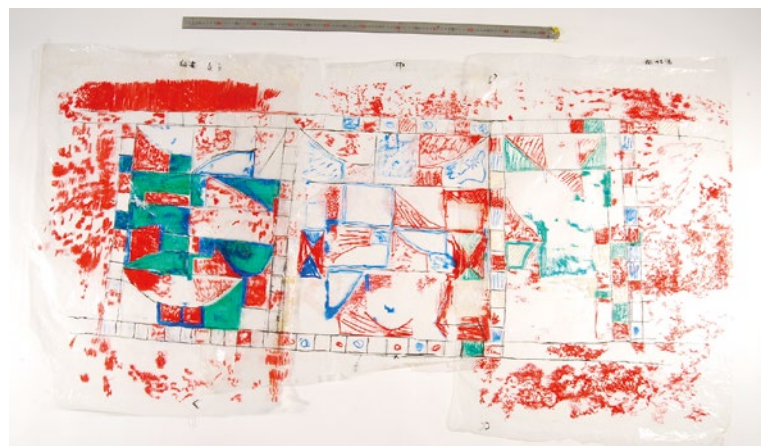
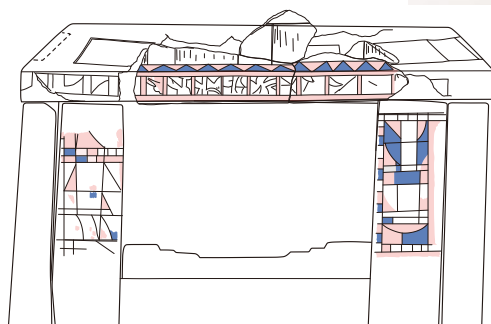


図 39 国越古墳墳丘測量図



石屋形奥壁を転写したフィルム



赤
青

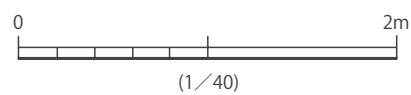


図 40 国越古墳石屋形の裝飾文様

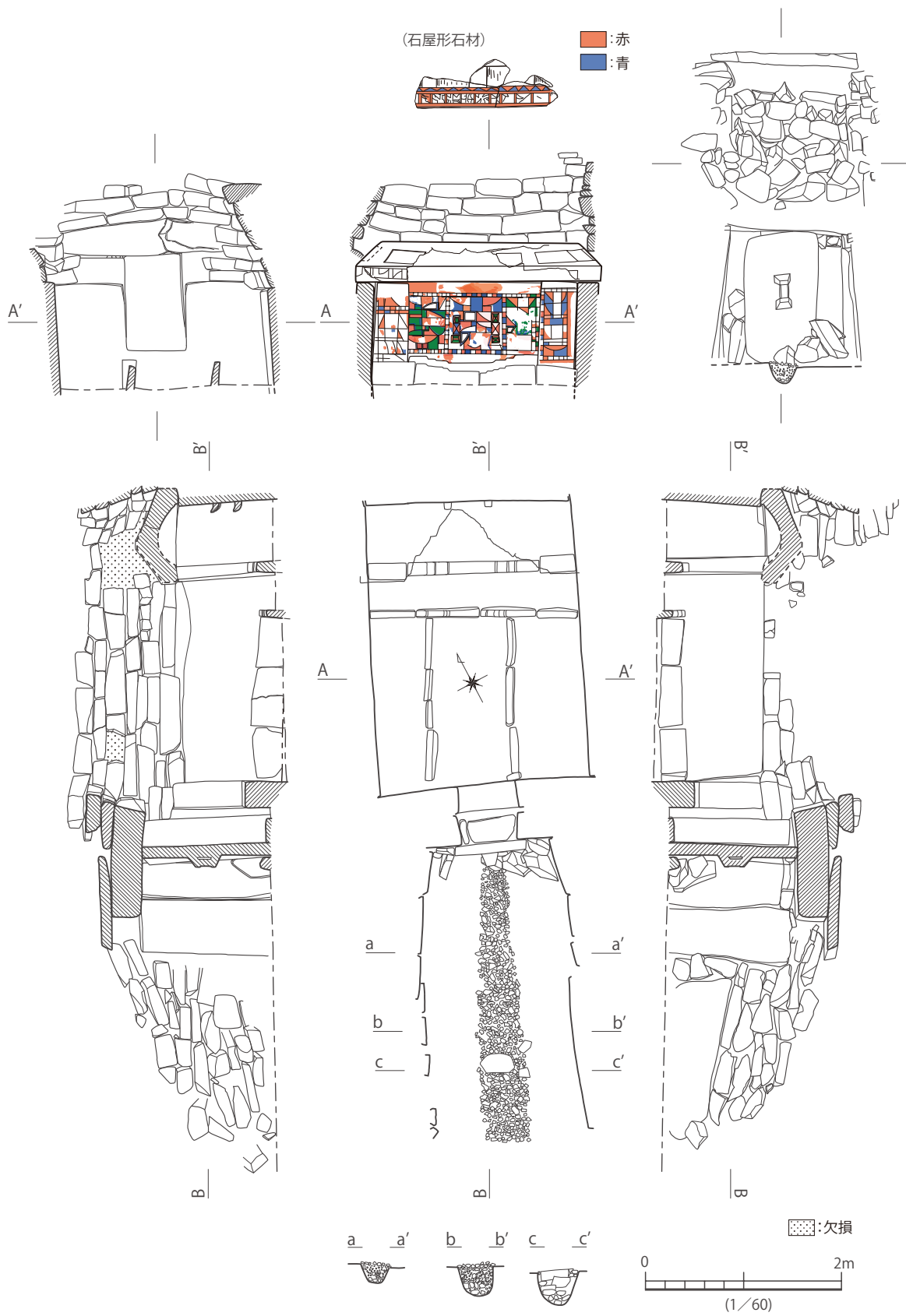


图 41 国越古墳石室実測図

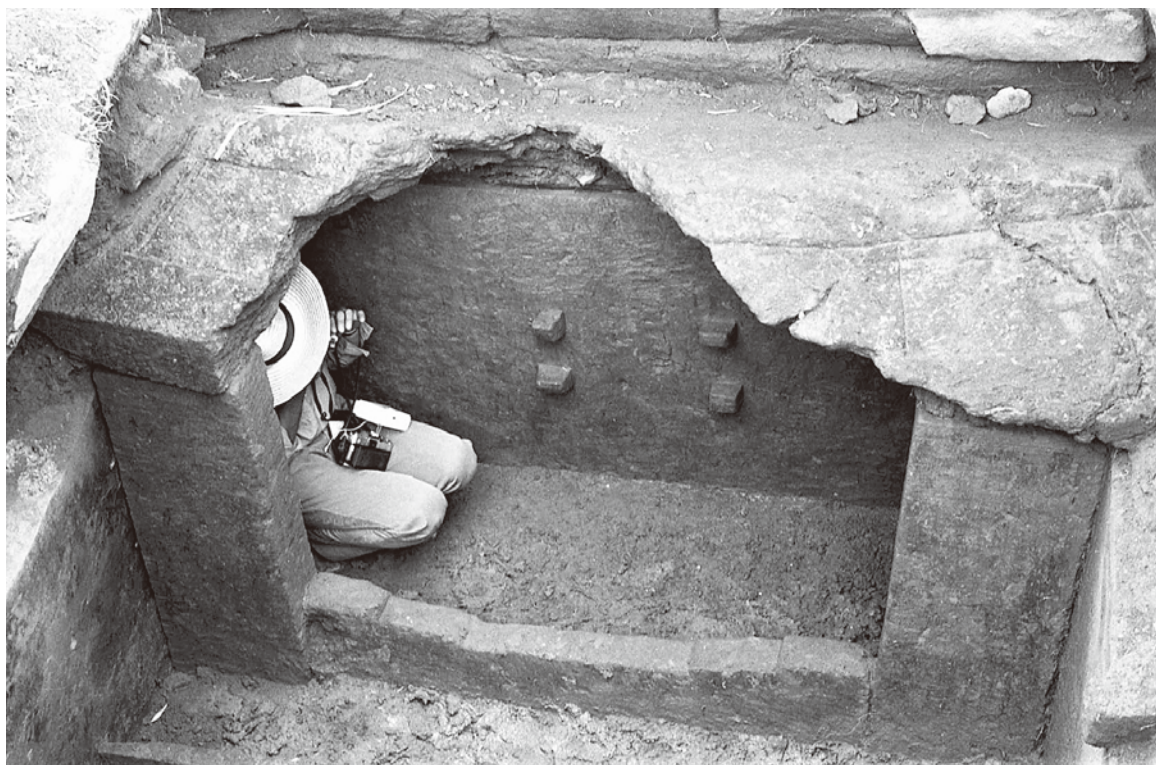


図 42 国越古墳石室調査風景



図 43 国越古墳石室（北より）



図 44 石屋形天井石片

14 ^{かづわら}桂原古墳 一宇城市不知火町長崎白玉一

市町村コード (43322) 遺跡番号 (030) 北緯 32 度 38 分 16 秒 東経 130 度 38 分 05 秒

①桂原1号古墳 (昭和50年11月11日県史跡)

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は不明であり、現在のところ最も古い記載は「九州に於ける装飾ある古墳」(濱田他 1919)の第1図「九州装飾古墳分布図」に Shiratama Tomb として位置が落とされている。正式な調査は、1961年(昭和36年)12月に三島格を中心として行われ墳丘測量図が作成されている。その後1974年(昭和49年)には熊本県教育委員会により石室実測図が作成され、1975年(昭和50年)9月に不知火町教育委員会により保存施設設置に伴う墳丘周辺のトレンチ調査が実施されている。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島南岸基部より2kmほど半島側に行った丘陵中腹に位置する。東方約50mのところには2号古墳がある。1975年の墳丘周辺のトレンチ調査では直ぐに地山となり周溝などは確認されていない。現状では径13m程の円墳である。

3 石室

南に開口する単室の両袖型の横穴式石室で、刳抜玄門がある。石材は宇土半島産の輝石安山岩と考えられているが刳抜玄門は阿蘇溶結凝灰岩で色調は灰黒色である。

羨道の幅は玄門側で150cm・入口側で115cm・長さ260cm・高さ130cm程を測る。床面中央部分に敷石4石が認められる。玄門は「L」字形の石材2石を組み合わせ刳抜玄門とする。厚さは20～25cmである。その上に巨石を載せ、羨道の天井石・玄室の前壁とする。右側壁2石・左側壁3石の巨石で構成する。この巨石の上面は平らでなく、平坦にして天井石を架すため20～50cm程の石材で補填する。

玄室は、幅約215cm・長さは刳抜玄門から奥壁までで約250cmである。ただし刳抜玄門とは別に内側に突出する袖石状の石材があり、この石材は石室主軸に対して直角ではないので、平面プランは玄門側がすぼむ六角形のような平面形となる。側壁は腰石の上に50～80cm程の比較的大きな石材を3、4段程積む。奥壁は腰石の上に石柵を載せる。その上に石材を積み上げるのか、石柵の背後から石材を積むのか実測図では不明であるが4段程積み上げる。石柵は二つに割れている。厚さ約25cmで、長さは奥壁から約60cm突出している。腰石より上部の石積はかなり雑である。天井石は一枚石であるが、横断図では西側に傾き、断面図では玄室中央から奥壁に向かって高くなり、天井の高さが一様ではない。これが天井石そのものの形状によるものなのか、石室に歪みが生じているためなのか判断できていない。高さは玄室中央で約210cmである。

なお、熊本県装飾古墳総合調査報告では、「開口部近くの側壁石はかなり取り去られ、かつ積直しがあつたらしく舟の線刻をもつ石材が倒立して使用されている」との記述がある。この線刻は羨道端近く西側の線刻であるが、この積直しが玄室天井部付近まで及ぶのか不明である。

4 装飾

線刻と彩色による装飾があると言われている。彩色の装飾は奥壁左上段の円文であるが、安山岩に含まれる雲母が凝縮したものが円に見える可能性もあり、人為的なものか自然にできたものか確認できていない。線刻は玄室奥壁に1つ、西側に4つ、東側に8つ、南側に4つ、石柵上面に1つ、羨道西側に1つがあるとされている。

5 出土遺物

現在も周辺で須恵器が表面採集されるが、調査に伴って出土したものは無い。

6 保存施設・修復歴等

1975年度に保存施設が設置されている。2016年の熊本地震により被災を受け、石室内部の石材の表面の剥落、石柵の一部崩落が確認され、全体的に石材に緩みが発生している。

7 図面等保管場所

石室実測図（平面図の所在は不明）、墳丘測量図、1975年のトレンチ実測図は県文化財資料室で保管。拓本の所在は未確認。

8 その他（年代等）

築造年代は、石室構造や装飾文様から推察すると、前方後円墳集成10期(陶邑編年TK43)頃と考えられる。

（ 古城史雄・神川めぐみ ）

参考文献

神川めぐみ 2017「熊本県宇城市における平成28年熊本地震による被災古墳の現状と課題」『平成28年熊本地震による被災古墳の現状と課題』第20回九州前方後円墳研究会熊本大会発表要旨集：pp.51－58

上村俊雄 1991「古墳時代の帆船について」『交流の考古学』三島格会長古稀記念肥後考古第8号

齊藤忠 1973「桂原古墳」『日本装飾古墳の研究』講談社：p.198

高木恭二・土野雄貴 2010「船団か、追葬刻か―数多く線刻された船の検討―」『古文化談叢』第65集：pp.75－87

西山由美子 2002「古墳に描かれた船」『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』第51回埋蔵文化財研究会発表要旨集：pp.97－112

文化庁・熊本県教育庁 2017『平成28年熊本地震による古墳の被災状況について』：pp.72－74

三島格 1972「桂原古墳」『不知火町史』不知火町史編さん委員会：pp.72－77

三島格 1984「桂原1号墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集：pp.131－133

図出典

図45：熊本県博物館ネットワークセンター提供（白石巖1976年撮影）

図46：三島格1984の墳丘測量図に高木正文作成トレンチ配置図・土層断面図（1975年作成）を配置し新たにトレース

図47：三島格1984より新たにトレース



図45 整備前の桂原1号古墳

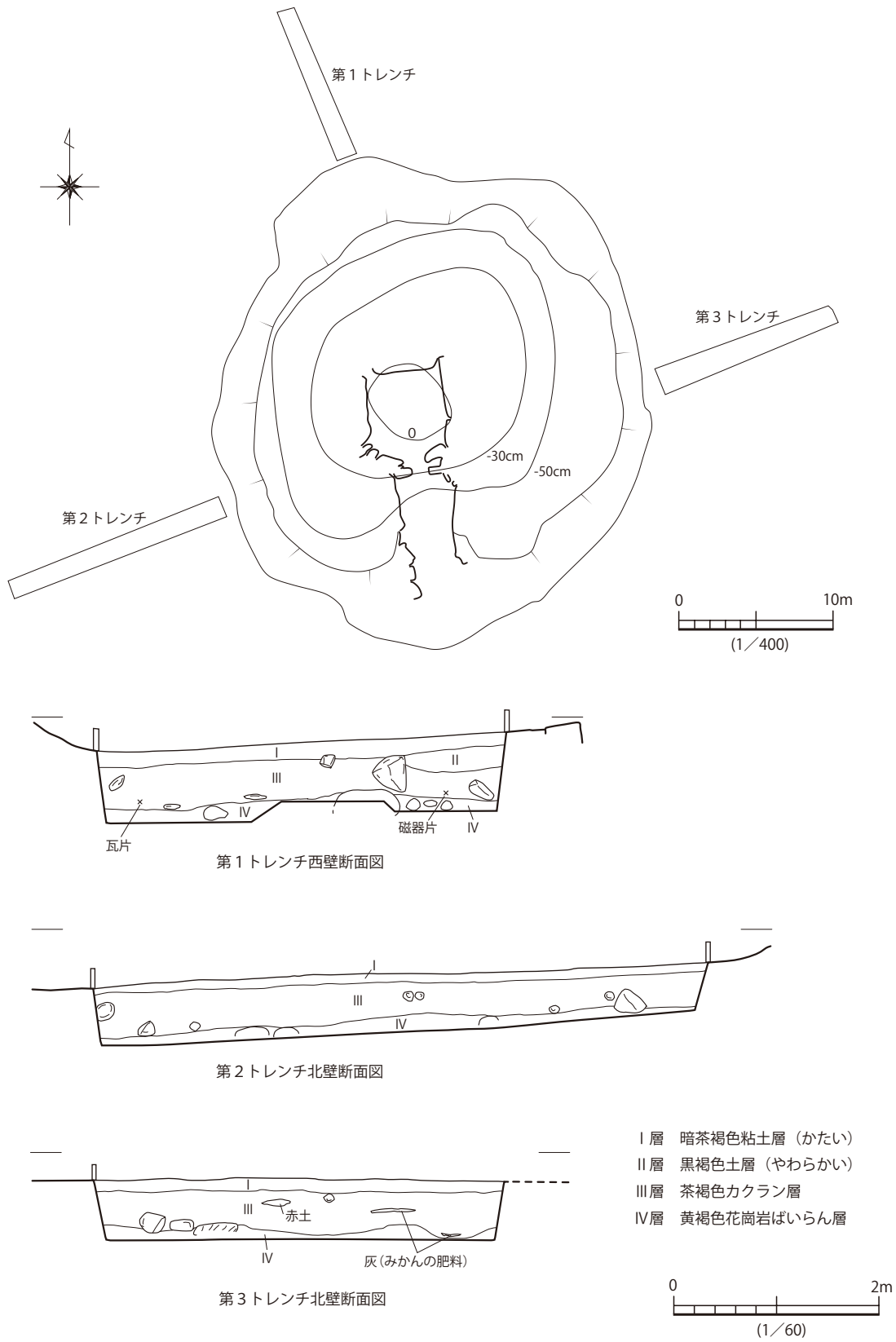


図46 桂原1号古墳墳丘測量図及びトレンチ断面図

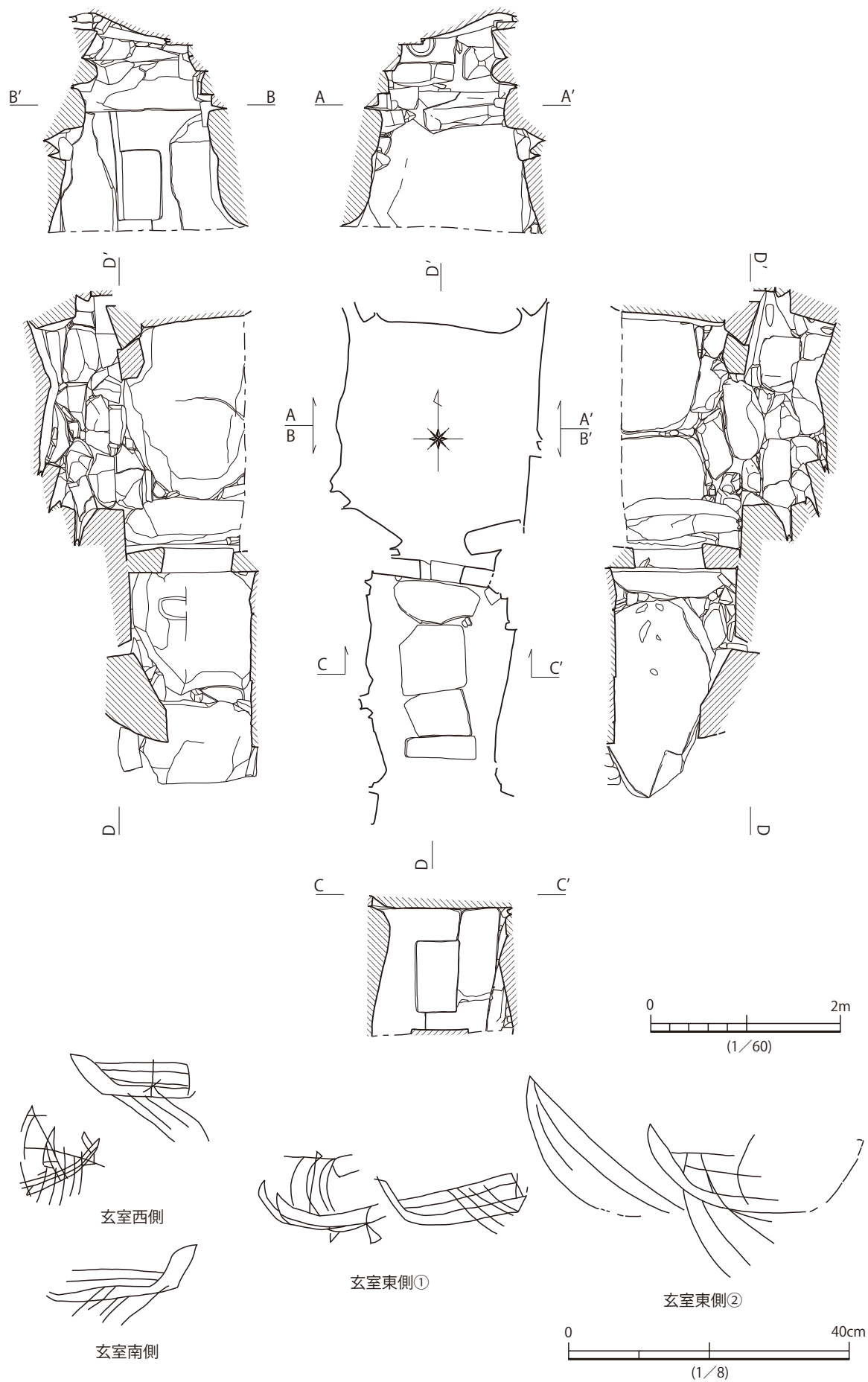


図 47 桂原 1 号古墳石室及び装飾文実測図

②桂原2号古墳（未指定）

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は不明であり、正式な報告は「熊本県装飾古墳総合調査報告書」（平山・高木 1984）が初出と思われる。

2 位置及び墳形・規模

桂原1号古墳の東方約50mの所に位置する。封土は流出し腰石のみが残存するのみで、墳形や墳丘規模は不明である。

3 石室

南東に開口する単室の両袖型の横穴式石室である。腰石のみが残存し、上部の石積や天井石は欠損する。羨道は、現状で幅95cm・長さ128cmを測る。長さ30cmの袖部を挟んで玄室となる。なお袖部には閉塞石がある。玄室は、幅約140cm・長さは195cmである。土砂で床面は不明で現存高約90cmを測る。

4 装飾

羨道左側壁に舟の線刻がある。長さ35.7cm・高さ31.1cmの大きさと、ゴンドラ状の舟で、中央にマストをたてる。また舟の下には波を描いている。

5 出土遺物

なし

6 保存施設・修復歴等

なし

7 図面等保管場所

実測図は作成されていない。拓本は宇土市教育委員会で保管。

8 その他（年代等）

築造年代は、出土遺物も不明だが、立地から推察すると、桂原1号古墳より新しいものと考えられる。

（ 古城史雄・神川めぐみ ）

参考文献

平山修一・高木恭二 1984「桂原2号墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集：p134

図出典

図48：平山修一・高木恭二 1984より新たにトレース

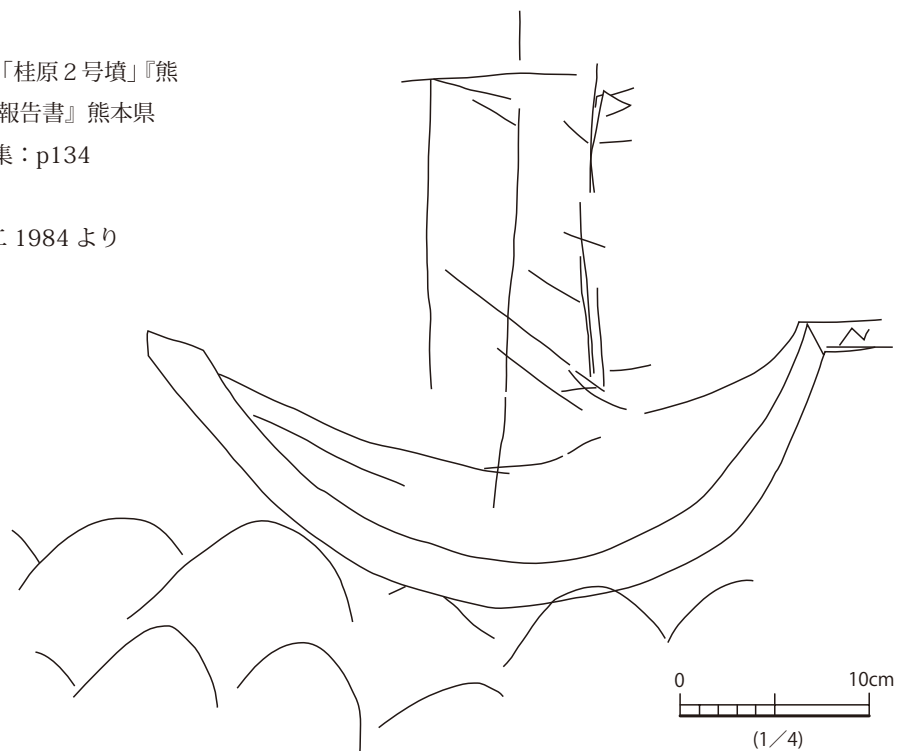


図48 桂原2号古墳羨道左側の装飾文実測図

15 おに いわや 鬼の岩屋古墳（未指定） 一字城市不知火町永尾河添一

市町村コード（43322） 遺跡番号（032） 北緯 32 度 37 分 59 秒 東経 130 度 36 分 46 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は不明であるが、1921 年（大正 10 年）刊行の『宇土郡誌』には記載があり、不知火町史（不知火町史編さん委員会 1972）には石室の見取図入りで「河添鬼の岩屋古墳」として報告されている。従来装飾については知られていなかったが、熊本古墳研究会で現地見学を行った際に「舟の線刻」が確認された。2002 年（平成 14 年）5 月 22 日に研究会のメンバーである高木正文により装飾文様の採拓と石室の略側が実施され、その拓本から図を起こし、『別冊太陽 古代九州』（高木正 2005）及び熊本古墳研究第 3 号（高木正 2010）に資料紹介が行われている。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島南岸基部より 3 km ほど半島側に行ったところに位置する。西浦川の左岸にあたり、海を臨む入り組んだ丘陵の東南端に位置する。現在は段々畑の縁際に残存するような状態である。東西約 15 m、南北約 6 m の楕円形状をなすが本来は直径 15 m 以上の円墳であったと考えられている。現在の高さは下段の畑からは約 3 m である。

3 石室

南南西に開口する単室の両袖型の横穴式石室である。石材は宇土半島産の輝石安山岩と考えられている。

羨道は幅約 90cm・長さ 230cm で玄室長とほぼ同じである。左右壁は各 2 石からなり、玄門には左右とも厚さ約 30cm・幅約 50cm の袖石をたて、その上に楣石を渡し、更に巨大な天井石を架ける。天井石は玄門側のみで、入口側には現状では認められない。

玄室は、幅約 160cm・長さ約 230cm の長方形プランである。高さは床面に土砂が堆積しているため現状で約 150cm だが、床本来は 200cm 程の可能性もある。左右奥壁とも巨石を据え腰石とする。腰石は、奥壁・右壁は各 1 石、左側壁は 2 石である。腰石の上に、前壁は楣石の上に 2 段の石材を積み、左右壁は 3～5 段の石材を積み上げる。奥壁は腰石の上に石柵を載せ、その上に 3 段石材を積み上げる。天井は一枚石である。石柵は厚さ約 20cm で、長さは奥壁から約 50cm である。

4 装飾

石柵から天井石までの間に 3 段の積石があり、その中段の横約 110cm、縦 50cm の石材に舟の線刻がある。線刻は横 57.6cm、縦 38.2cm に渡って描かれており、舟首は左を向いている。舟体は舟首と舟尾が緩やかに跳ね上がる。舟体の中央には帆柱が描かれ、その先端から船首に向かって 1 条、舟尾に向かって 2 条の線があり、ロープを張った状態を表現していると思われる。また舟体の下方に縦方向の線が数本あり、櫂を表現していると思われる舟尾には舵と思われるものも表現している。

このほか、玄室両側壁に線刻の一部が認められるので、他にも舟などの線刻が描かれている可能性がある。

5 出土遺物

『宇土郡誌』によると「付近より多数の土器を発掘せり」と記されているが、確認できていない。

6 保存施設・修復歴等

なし

7 図面等保管場所

石室略側図、拓本、拓本より起こした線刻図は、高木正文氏保管。

8 その他（年代等）

築造年代は、出土遺物も不明だが、石室構造や装飾文様から推察すると、前方後円墳集成 10 期（陶邑編

年 TK43) 頃と考えられる。

(古城史雄・神川めぐみ)

参考文献

宇土郡役所 1921『宇土郡誌』

坂本経堯 1972「22. 河添の鬼の岩屋」『不知火町史』不知火町史編さん委員会：pp.78 - 79

高木正文 2005「黄泉の国の芸術—九州装飾古墳の変遷」『別冊太陽 古代九州』平凡社：pp.75 - 79

高木正文 2010「船の線刻が発見された不知火町鬼の岩屋古墳」『熊本古墳研究』第3号：pp.55 - 59

図出典

図 49：高木正文 2010 より新たにトレース

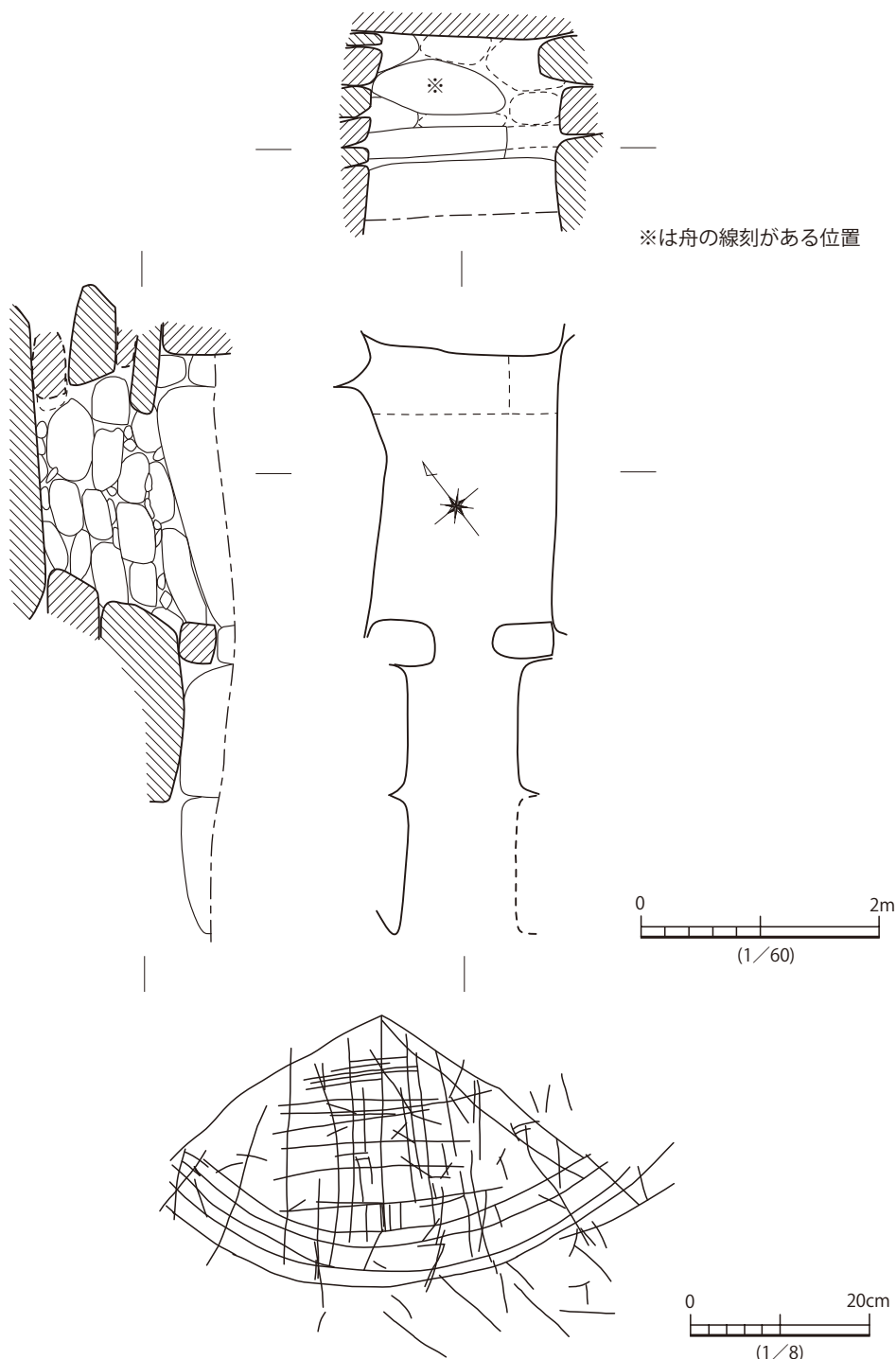


図 49 鬼の岩屋古墳石室略測図及び奥壁の舟の線刻図

16 ヤンボシ^{づか}塚古墳 (昭和 63 年 9 月 6 日市史跡) 一字土市上網田町字小宗一

市町村コード (43211) 遺跡番号 (012) 北緯 32 度 40 分 36 秒 東経 130 度 33 分 34 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1976 年 (昭和 51 年), 熊本県教育庁文化課の大田幸博によって古墳と確認された。その後, 1985 年 (昭和 60 年) に, 地権者がミカン園造成のため開墾し, 古墳が削平されるおそれが生じたことから, 地権者の承諾を得て宇土市教育委員会による緊急の発掘調査が実施された。調査の過程で, 地権者が古墳の保存に前向きな考えを示され, ミカン園のための開墾から古墳部分を除外したことによって古墳は保存されることとなった。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島の山塊から西側に派生する丘陵の先端部, 標高 17 m 付近に位置する。調査時には既に古墳の一部が削平されていたが, 古墳の中心付近, 特に石室入口付近は手つかずの状態を保っていた。墳丘に設定したトレンチにより周溝が確認され, その内周から直径約 20 m の円墳であることが判明した。

3 石室

安山岩の割石を小口積みして構築した肥後型横穴式石室であり, また石室壁体の内側四周に阿蘇溶結凝灰岩製の石障をめぐらした, いわゆる石障系横穴式石室でもある。発掘調査の結果, 玄室石材の抜き取りをはじめ, 玄室上部から大がかりな破壊を受けていることが明らかになっており, 早い段階で破壊を受けたことがわかる。

石障内面の復元内法は, 床面で長さ 200cm・奥壁幅 135cm・前障幅 130cm の長方形プランをなす。床面上部から天井石下面までの想定玄室高は約 180cm を測る。玄室床面に仕切石の一部が残っていたことから, 川の字形もしくはコ字形の屍床配置が想定されたが, 発掘調査の所見としては川の字形と想定している (宇土市教育委員会 1986)。仕切石の他, 奥壁向かって左石障の一部と奥壁, 右側壁の石障は抜き取られ, 天井石を含む壁体上部の石材もかなり無くなっていた。しかし, それ以外の壁体下半部や羨道部, 前庭部は良好な状態を保っていた。

石室壁体を構成する石材は, 下半の石障で隠れる部分には人頭大よりやや大きい塊石を使用し, その上部にやや小さめの割石を小口積みし, さらに上の壁体上半部にはやや大きめの板石を用いている。玄門入口部は, 高さ 104cm・幅 64cm・厚さ 5.5cm の砂岩製板石を扉石とし, その外側から人頭大の塊石と板石で閉塞している。この閉塞は恐らく最終埋葬時の状態をとどめているとみられる。玄門は方柱状の安山岩塊石を両側に立てる, いわゆる玄門立柱であり, その上部には楣石が置かれている。石室に入るためには玄門立柱と玄室手前側の石障によって狭められた空間と通る必要があるが, この部分は高さ 106cm・幅 34cm と狭くなっている。少しでも入りやすくするためか, 手前側の石障上部には削り込みが施されている。玄門外側の羨道にあたる部分は, 前述の閉塞石が一部側壁より高い部分にまで達している点から, 築造当時から天井石は存在しなかったとみられる。

4 装飾

この古墳には大きく分けて 2 種類の装飾があるのが特徴である。ひとつは左石障の内面に施された円文で, 直径 12.7cm・深さ 3.5mm の円形の彫り込みが 2 か所確認されている。その配置・間隔から, おそらく本来は 3 か所あったものと考えられる。また, 同様の円文が右石障にも施されていたと考えられるが, 石障が抜き取られているため確認できない。灰黒色の馬門石を用いた左及び手前の石障に対し, 奥壁側の石障はピンク色の馬門石を使用していた痕跡が残っており, 上天草市大矢野町に所在する長砂連古墳の事例を参考にすれば, 異なる石材を用いた奥の石障には, 装飾は施されていないと推定できる。

もうひとつの装飾は、玄門内面の一か所と壁体上部の安山岩板石に細い線刻で描かれた船であり、古墳内部に描かれた船としては、我が国で最も古い。玄門に描かれた船は、船首から船尾までの長さ 17.0cm、帆柱状の縦線の上端から船底までの高さ 17.2cm の小さなものである。一方、玄室上部の壁体に描かれたものは、長さ 37cm・高さ 22cm を測る。

5 出土遺物

石室内は盗掘を受けていたため、副葬品はほとんど残っていなかった。わずかに、鉄鍬先と鉄鍬茎部片、刀子茎部片のみが玄室左側の奥壁付近で出土したのみである。ただし、これらは石障を抜き取った掘り込み内から出土したもので、埋葬当時の位置を示すものではない。

その他、周溝から土師器の高坏及び壺（図 52 の 1・2）が出土した。いずれも小片であるため時期推定の根拠に欠けるが、高坏は布留式最新段階か初期須恵器を共伴する時期が推定される。

6 保存施設・修復歴等

発掘調査後、石室は埋め戻して保護され、現在に至る。

7 図面等保管場所

出土遺物を含め、全ての資料を宇土市教育委員会で保管している。

8 その他（年代等）

本墳の石室は、玄門部から前障部分の特徴が岡山市に所在する千足古墳と大変似ており、石室構築技術の密接な関連性をうかがわせる。このことは、千足古墳に用いられている石材に天草砂岩が含まれる可能性が高いとされている点と併せ、大変興味深い。手前側石障にみられる削り込みの様子から、ヤンボシ塚古墳の時期は千足古墳や宇城市三角町に所在する小田良古墳よりわずかに先行するとみられる（高木 1994）。石室の特徴や周溝から出土した土師器の想定時期から、築造時期は 5 世紀前半代に比定できる。

その他、玄門部扉石には天草砂岩が、石障にはピンク色と灰黒色の馬門石が併用され、その他の大半の壁体には安山岩を用いるという複雑な石材の混用は、古墳の石室を構築する石材の供給地について考える上で注目すべき事例である。

（ 芥川博士・藤本貴仁 ）

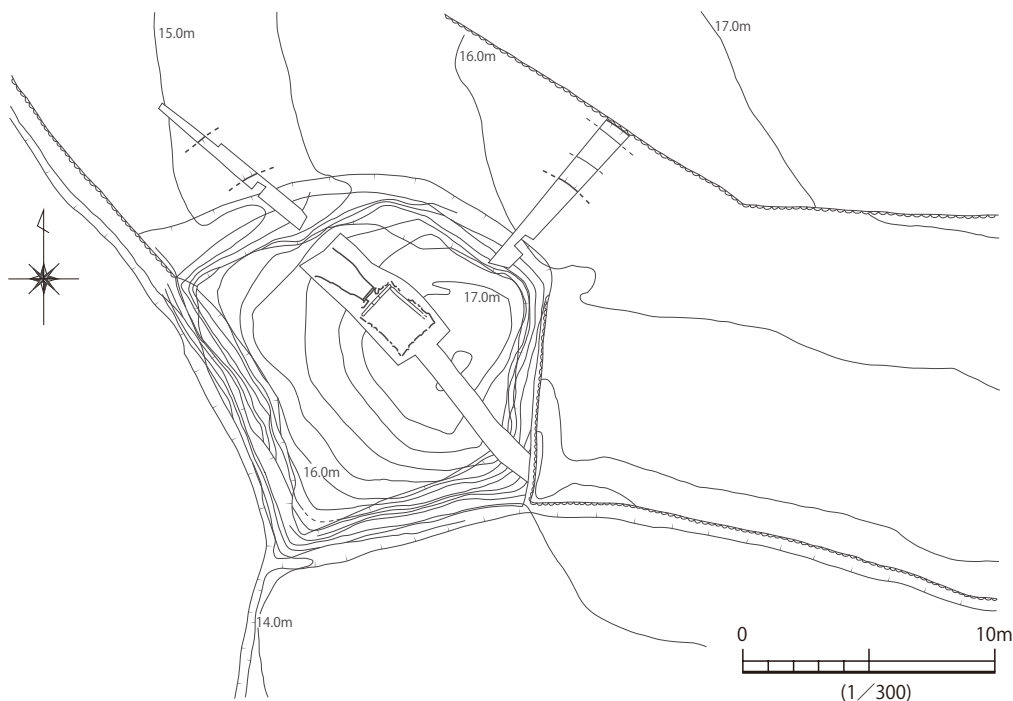


図 50 ヤンボシ塚古墳墳丘測量図

参考文献

宇土市教育委員会 1986『ヤンボシ塚古墳・櫛崎古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第13集

高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp.109 - 132

高木恭二 1986「鴨別と鴨籠」

『Museum Kyushu』第21号

博物館等建設推進九州会議

：pp.34 - 40

高木恭二 2002「ヤンボシ塚

古墳」『新宇土市史』資料編

2（考古資料・金石文・建

造物・民俗）宇土市：

pp.276 - 280

高木恭二・土野雄貴 2010「宇

土半島基部の線刻を有する

古墳」『うと学研究』31号

宇土市教育委員会：pp.9 - 34

図出典

図50・51・52：宇土市教育委員会

1986より新たにトレース

図53：岡山市教育委員会 2015

「千足古墳」より

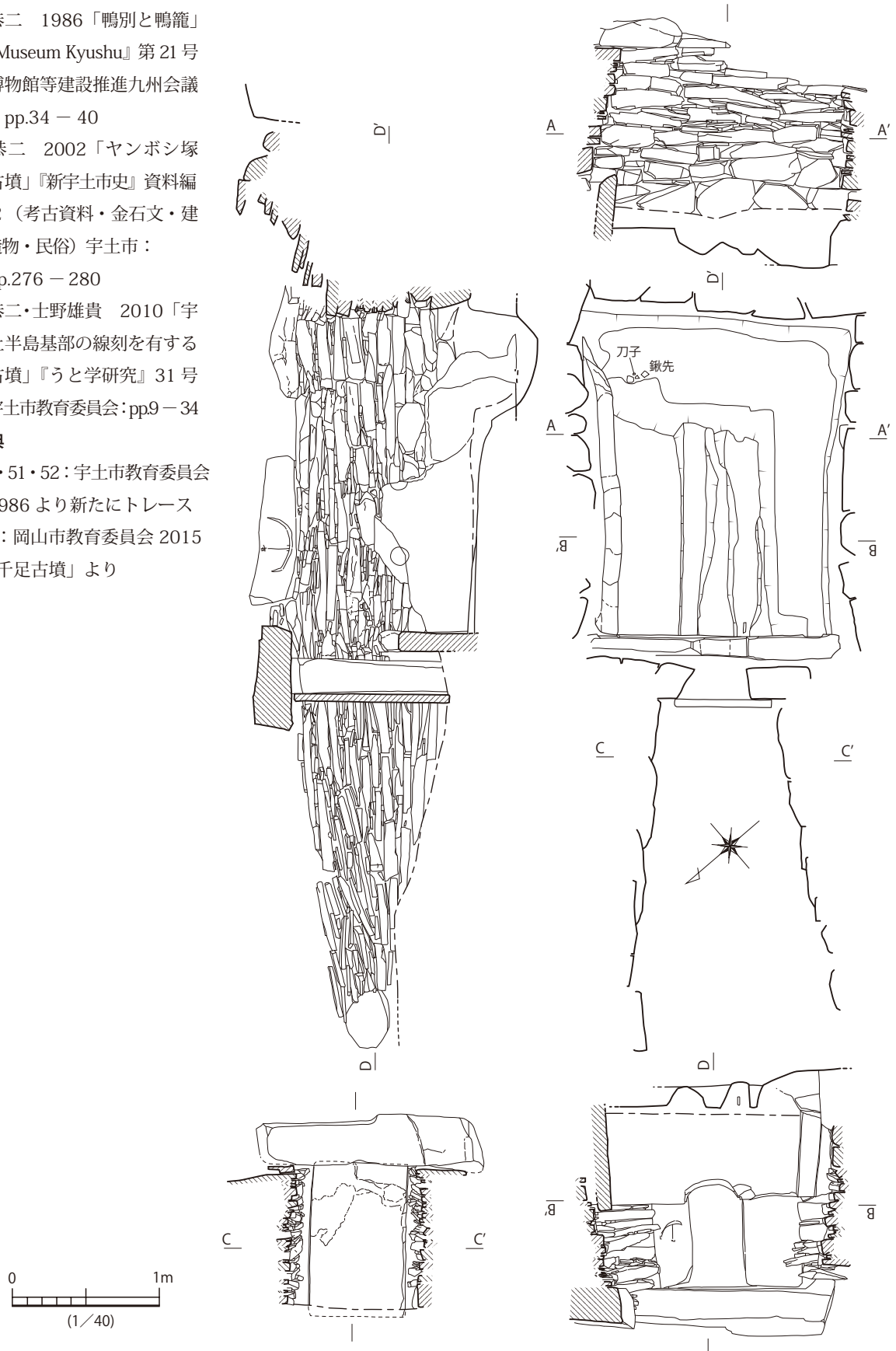


図51 ヤンボシ塚古墳石室実測図

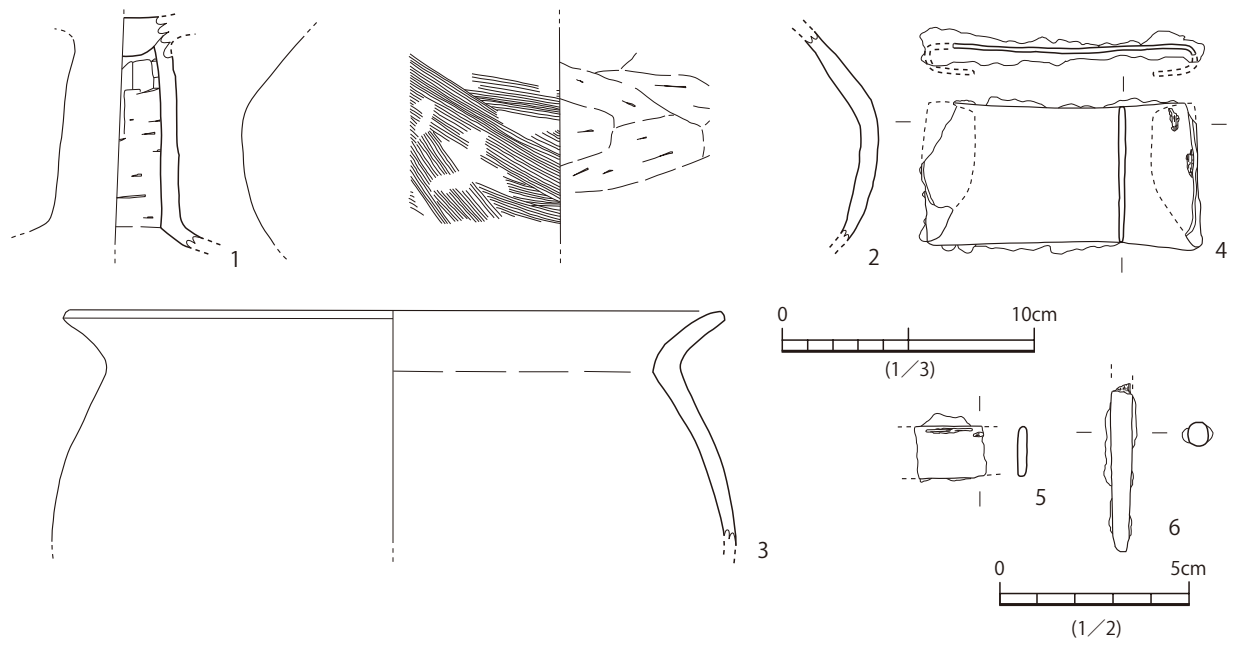


図 52 ヤンボシ塚古墳出土遺物実測図

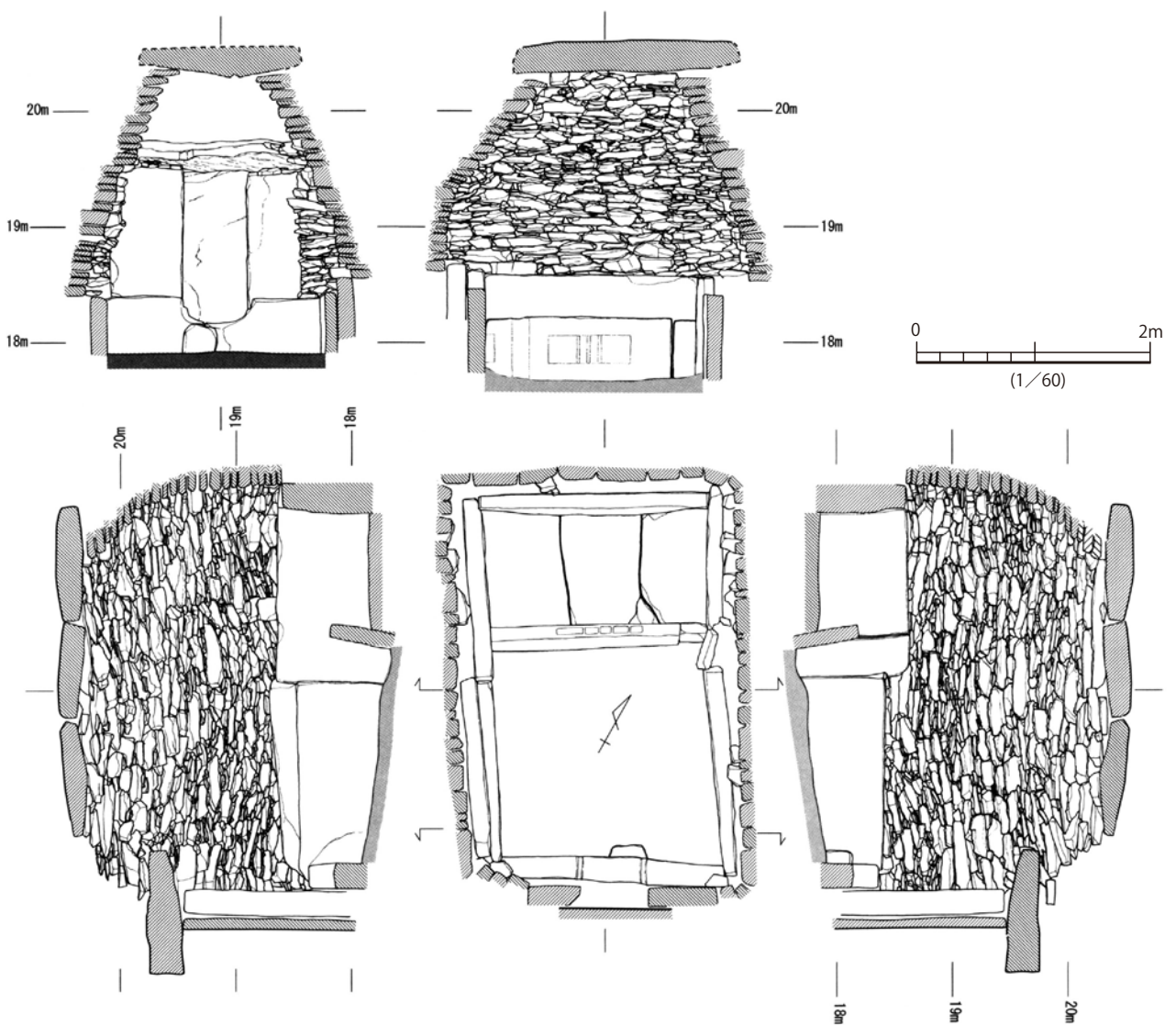


図 53 千足古墳石室実測図

17 小田良古墳 (昭和 54 年 10 月 23 日国史跡) 一字城市三角町中村前畑一

市町村コード (43321) 遺跡番号 (003) 北緯 32 度 38 分 57 秒 東経 130 度 29 分 36 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

地元で「チンカンさん」と呼ばれる割石を積み上げた所は、古墳であるとの伝承があつて、それを確かめるべく 1977 年 (昭和 52 年) 2 月に三角町教育委員会により調査が開始された。割石を取りはずしていくと石障の上面が確認され、埋土を取り除くと装飾古墳であることが判明した。一旦埋戻しを行い、調査体制を整えた後、1978 年 (昭和 53 年) に発掘調査が実施された。調査の特徴は、東京国立文化財研究所により保存対策調査も並行して行われたことである。その後 2014・2015 年 (平成 26・27 年) に墳丘形状・規模を確認するためのトレンチ調査が宇城市教育委員会により行われている。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島の北岸で、この地点より東側 (基部側) は干潮時は干潟が表れ、西側 (半島先端側) は岩礁となる個所でその境界付近に位置する。田畑の中に古墳は所在し、標高 10 m 程である。北側は 6 m 程で海に面し、南は 4 m 程で国道 57 号線に接する。周囲にはほとんど平野はなく、南西 2 km 程の地点に太田尾製塩遺跡がある。

墳丘は完全に削平されており墳形や規模は不明であるが、1978 年の調査では石障を中心として十字形のトレンチを設定し調査が行われている。その結果石室構築に伴う土壙と考えられる掘り込みは確認されたが、墳丘端部は確認されていない。しかし 2・3 トレンチで落ち込みが検出されており、これが周溝の可能性もあることから、2014 年の調査では 2・3 トレンチの再発掘等が実施されたが、既に地山となり落ち込みは周溝ではないことが確認された。また 2015 年の調査では 1・2・3 トレンチを延伸したが墳丘端部は確認できなかった。

3 石室

西に開口する単室の横穴式石室である。石障、仕切石とわずかに控積の石と思われる割石が残存する。石障と仕切石は砂岩、割石は安山岩である。

石障の内法は、長さ 195cm・幅 187cm の方形プランで、奥障と前障は左右石障により挟まれる。前障中央部には 2 段の U 字形の削り込みがある。石障の厚さは 8～11cm・高さは 80cm で礫床から測ると 60cm 程度で、20cm 程が礫床に埋まる。1 トレンチの土層観察結果より、石障の下端周囲に 10～20cm 大の礫石を置き根石とする。底から 24cm 程は拳大の礫を含んだ黄褐色粘質土で埋められており、かなり固い。その上 10cm は礫石と粘質土で強く固めている。その面から割石を積み始める。屍床配置は「川」の字形である。床面は、通路も含め丸石を 7～8cm の厚さで敷き詰めている。通路の床は屍床面より 4cm 程低い。仕切石は 2 枚とも中央部に前障と同じ削り込みがある。礫床から上端までの高さは 14cm 程である。

4 装飾

石障の内面、4 面すべてに描かれるが仕切石には施されていない。石障上端より 9～10cm の位置とそこから更に 28～30cm 下に横線が施され、この横線で挟まれた間に装飾文様が描かれる。奥障だけは円文以外に鞆や盾が描かれる。円文は全ての面に浮彫風に描かれており、中心部に孔のある二重円文である。奥障は円文と縦線により 4 区分され、左右端の区画には鞆を、内側の区画には盾をそれぞれ描く。鞆は浮彫で、盾は線刻で表現されている。左石障には 4 個の円文、右石障には 3 個の円文が描かれる。前障は削り込み部分には横線が描かれない代わりに縦線が描かれ終結している。ここに 2 個の円文が描かれる。円文は、上下の横線のほぼ中央に描かれるが前障は不ぞろいである。円文の間隔はほぼ均等であるが、3 個の円文が描かれている右石障は不均衡である。円文の外円の径は 15.4～18cm で、17.7cm 前後のものが多い。内円の径は 8.3

～ 11.0cmで、10.5cm前後のものが多い。

5 出土遺物

石障外から直刀1、石障内から約700個の玉類、青銅製鈴、刀子、人骨片、獣骨片、馬骨が出土している。

6 保存施設・修復歴等

発掘調査後埋戻し。埋戻しは、石障表面をホルマリン、アルコールを噴射による殺菌後、和紙で保護し、パラホルムアルデヒド（防黴剤）を配置、薄手のビニールシートで被覆。石障内部に砂をつめ養生している。1991年（平成3年）に熊本県立装飾古墳館のレプリカ作成にあたり一度掘り返しているが、劣化は見られなかったという。

7 図面等保管場所

調査時の図面・写真・拓本は熊本県文化財資料室で保管。

8 その他（年代等）

築造年代は、前方後円墳集成6期（陶邑編年TK216）頃と考えられる。

（ 古城史雄・神川めぐみ ）

参考文献

江本直 1979『小田良古墳』三角町文化財調査報告

江本直 1984「小田良古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：
pp.135 - 139

図出典

図54：江本直・下村智 1978年作成周辺測量図を新たにトレース

図55：（石室）江本直・下村智 1978年作成石室実測図を改変し新たにトレース、（遺物）江本直 1979を新たにトレース

図56・57：熊本県文化財資料室所蔵



図54 小田良古墳墳丘測量図

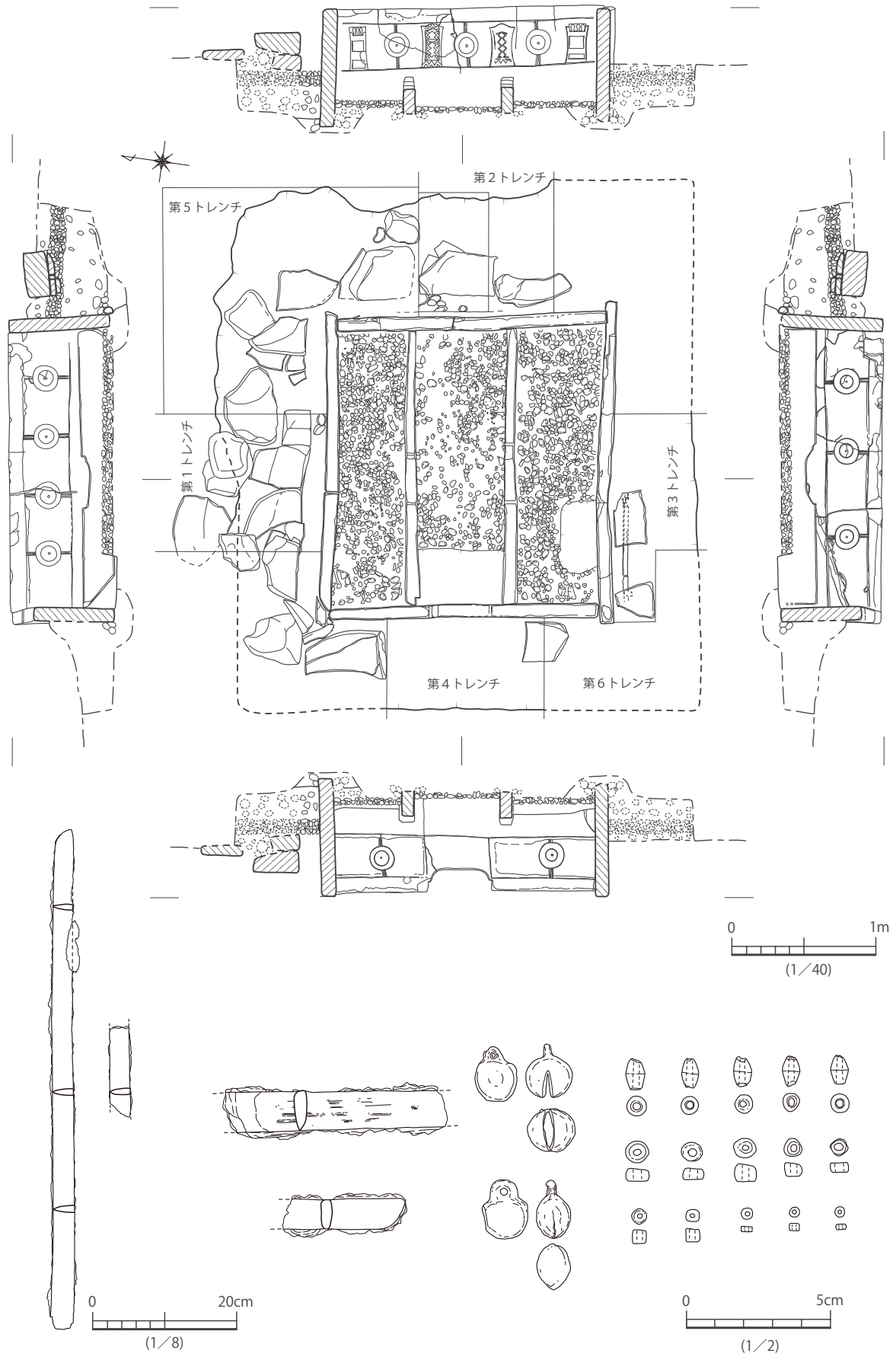


図 55 小田良古墳石室及び出土遺物実測図



図 56 小田良古墳石室全景（北東より）



図 57 小田良古墳奥障装飾

18 ながさ長砂連古墳れ (昭和 50 年 5 月 7 日県史跡) —上天草市大矢野町中長砂連 7554 番地—

市町村コード (43212) 遺跡番号 (027) 北緯 32 度 33 分 14 秒 東経 130 度 26 分 51 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1934 年 (昭和 9 年) 4 月、金刀比羅宮の社殿建造の際に発見され、同年 6 月に熊本県史蹟調査委員の下林繁夫が同地を訪れ報告している (下林 1984)。1965 年 (昭和 40 年) 頃に斉藤忠と乙益重隆により石障の実測図が作成されている。その後 2004 年 (平成 16 年) に上天草市史大矢野町編の編纂事業に伴い熊本大学考古学研究室により、石障の実測・拓本作成及び遺物の実測が行われている。

2 位置及び墳形・規模

大矢野島の東南端に位置する。南東に広浦古墳を、南南東には大戸鼻古墳群を望む。発見当時にはすでに封土の大部分を失い石室石材が散乱した状態であったといい、墳形及び規模は不明である。

3 石室

南西に開口する横穴式石室である。石室石材が散乱した状態で、原位置を保っていたのは石障とその内部を区画する 2 枚の仕切り石、および羨道の一部をなす 2 枚の石材のみだったという。現在は石障だけが残存し、仕切り石及び羨道石材は現存しない。

(1) 羨道部

玄門部に 2 枚の石材があることから、玄門部あるいは羨道部を形成するような何らかの施設があったことは間違いなく、その石材の間隔は 2 尺 5 寸 (約 75.8cm) とあるが、詳細は不明である。

(2) 玄室

石障のみが残存しているが、完全に残っていたのは前障だけで奥石障は下半部のみ、左右石障は基部のみの残存だったらしい。現在石障は復元されているが本来の石材でないものも含まれている。

下林の石室見取図と復元整備後に斉藤忠・乙益重隆により作成された図では、右石障の突起の位置が異なり、右石障の奥壁側が本来のものより短くなっている可能性があるという (南 2005)。

右石障は、灰色の阿蘇溶結凝灰岩 1 枚石であったが 3 片に割れている。現状で縦約 75cm・幅約 190cm・厚さ約 13.5cm である。刀掛状突起は、上段左側が欠損し 3 個のみが現存する。左石障も灰色の阿蘇溶結凝灰岩で、多くの石材が欠損しコンクリート等で隙間を充填されている。現状で縦約 71.5cm・横約 195cm・厚さは約 20cm である。奥障はさらに多くの石材が欠損するが、右半分にはピンク色をした阿蘇溶結凝灰岩が使用されている。現状で縦約 100cm・横約 170cm・厚さ約 17cm である。前障は比較的残りが良く、上部中央に浅い U 字形の挟り込みがある。1 枚石で縦が 70.5 ~ 87.5cm・横約 180cm・厚さ約 15cm である。

現在石障内を区画する仕切り石は失われているが、下林の見取り図から「川」の字形に仕切られていたことがわかる。また右屍床の奥壁側はさらに区画されていたようである。この仕切り石は砂岩であったとされている。

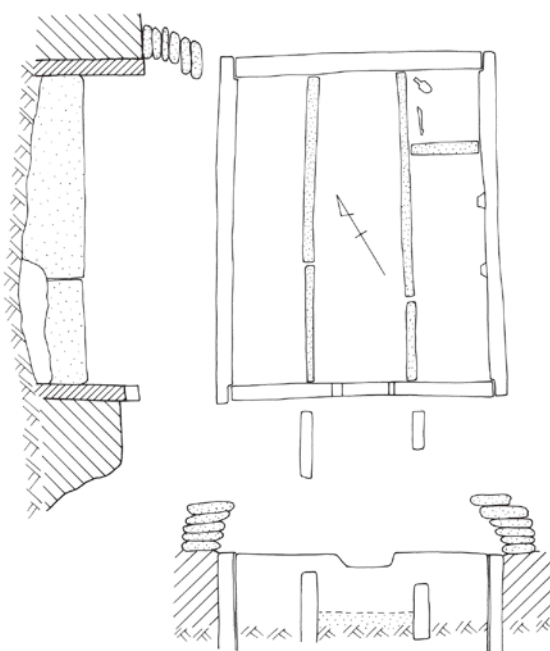


図 58 長砂連古墳下林作成石室見取図

4 装飾

装飾は、右石障・左石障に直弧文の装飾がみられる。右石障には3個の直弧文があり、左側の直弧文は小林分類のA型で右回り、中央は4つの区画のうち上と右区画がB型、下と左区画がA型からなる（小林分類のC型）。右側はA型で左回りである。赤色顔料の付着が認められる。左石障には、左右の直弧文の間に同心円文がある。現在は左側の直弧文と中央の同心円文の一部しか確認できなくなっているが、過去の写真や拓本をみると右にも直弧文があり、いずれもA型に該当し、左側が右回り、右側が左回りである。また円文の中心部には小孔が確認できる。

5 出土遺物（図59-1～4）

1934年の社殿工事に伴って発見されたもので、鉄銚片2点（2・4）・鉄刀片1点（3）・不明鉄器片6点・土師器片1点（1）がある。鉄銚と鉄刀は右屍床の副屍床内から検出されている。鉄銚は高田寛太編年のⅡ期に、土師器は林田和人分類のBa3ないしBa4に該当するという（南2005）。

6 保存施設・修復歴等

まず石障の欠損部分をコンクリート等で補填し、基部を固定する作業が行われているが、本来の場所に復元されたのかどうかは定かではない。露天で石材の風化が激しくなったため1974年（昭和49年）11月より翌年2月にかけて保存施設設置の工事が行われ、円丘が築かれた。

7 図面等保管場所

1965年作成図面の所在は不明。2004年作成図面は熊本大学文学部考古学研究室で保管。京都大学に発見当時の写真が保管されている。

8 その他（年代等）

築造年代は、「川」の字形屍配置、前障の浅いU字形掘込等の石室構造の特徴、直弧文の表現方法、出土遺物から前方後円墳集成6～7期（陶邑編年TK73～TK216）頃と考えられる。

（ 古城史雄 ）

参考文献

- 乙益重隆 1964「長砂連古墳」『装飾古墳』平凡社：p.91
坂本経堯・経昌 1971「長砂連古墳」『天草の古代』私家版：pp.63 - 64
乙益重隆 1984「長砂連古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.140 - 141
下林繁夫 1984「長砂連古墳調査報告」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.141 - 143
南健太郎 2005「長砂連古墳石障実測調査報告」『考古学研究室報告』第40集 熊本大学文学部考古学研究室：pp.39 - 50

図出典

- 図58：下林繁夫1984より新たにトレース
図59：南健太郎2005より
図60・61：京都大学大学院文学研究科考古学研究室提供

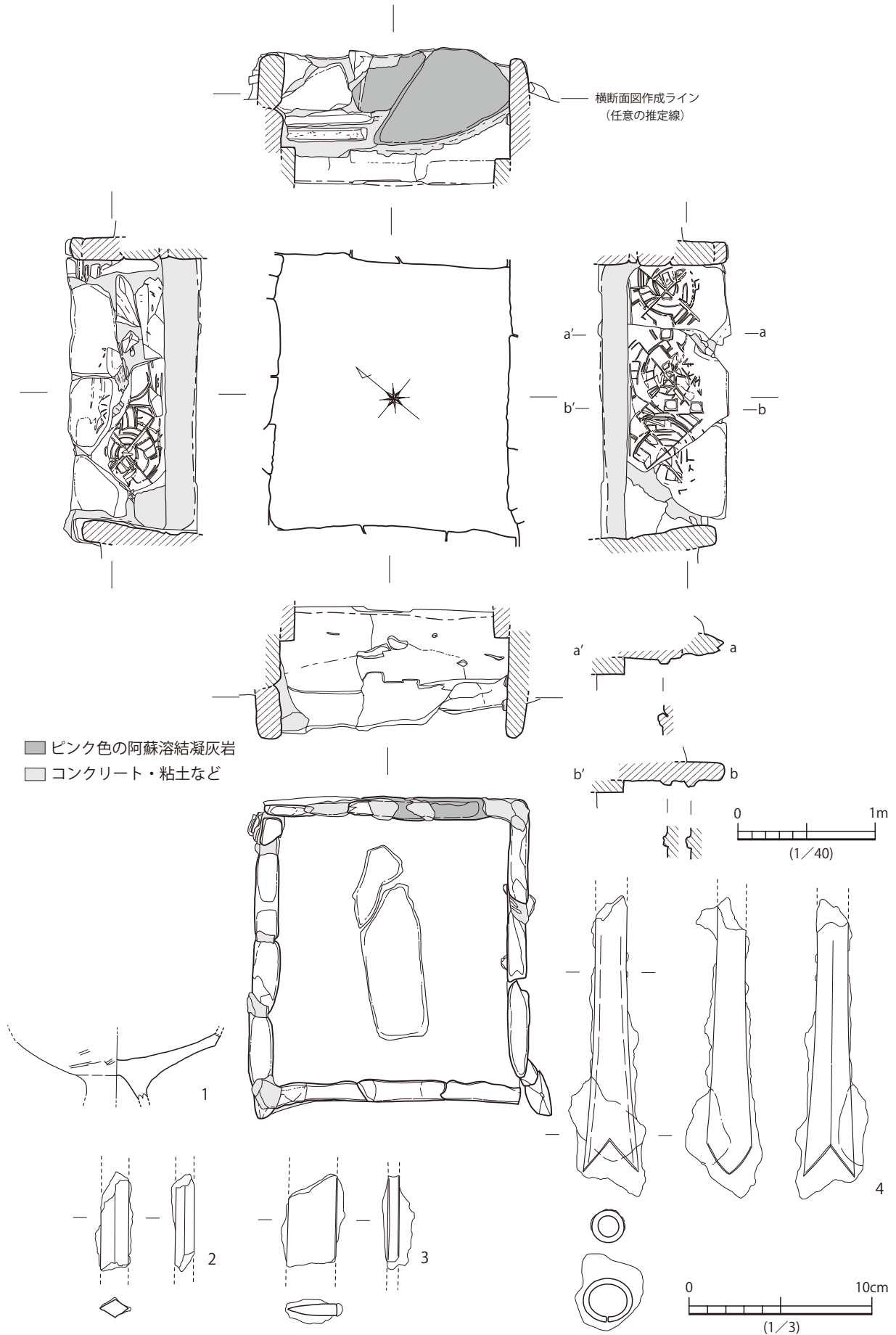


図 59 長砂連古墳石障及び出土遺物実測図

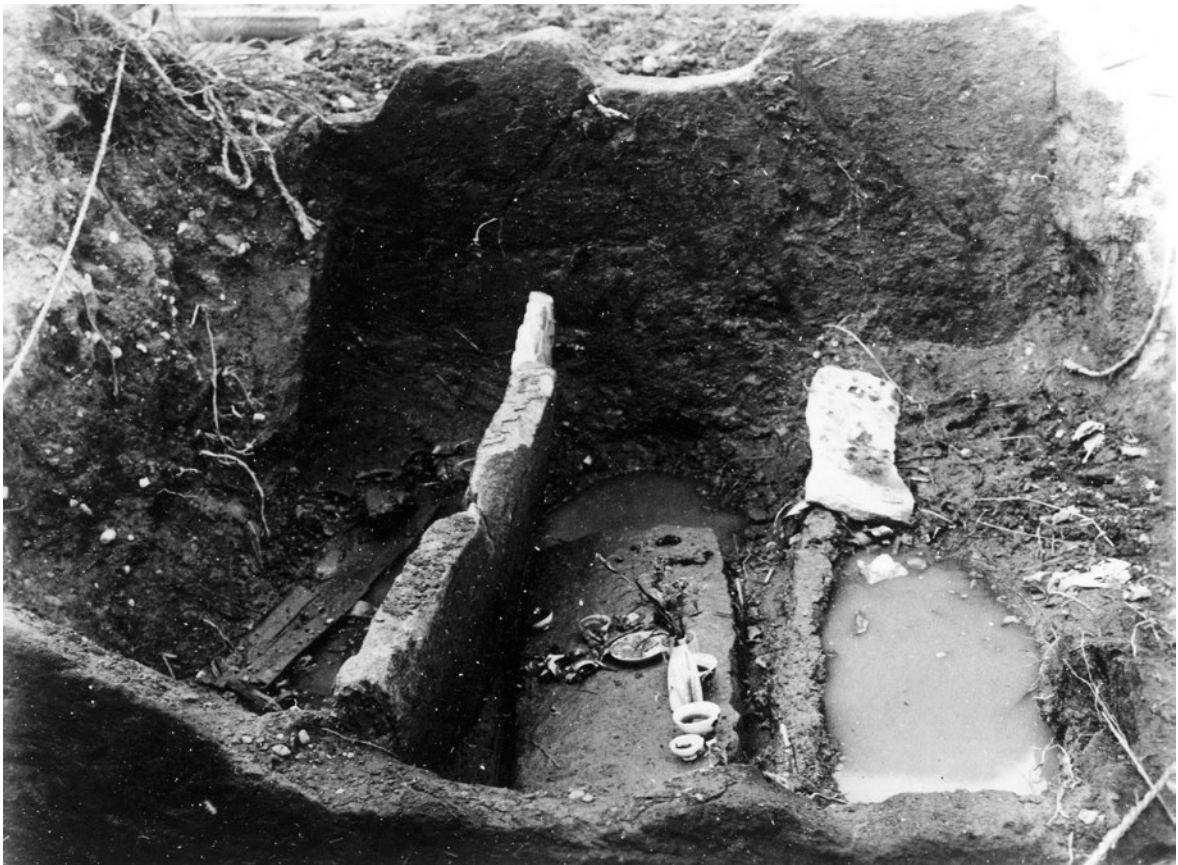
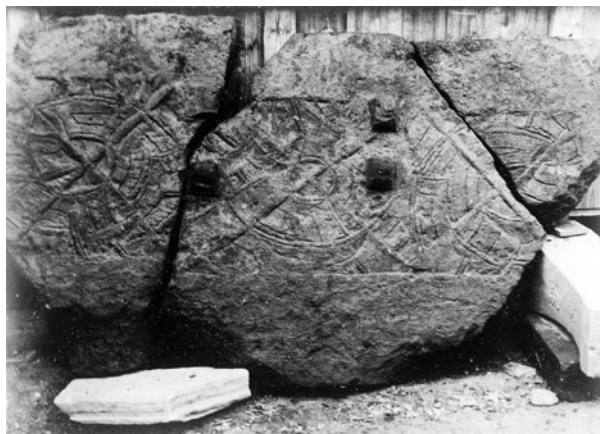


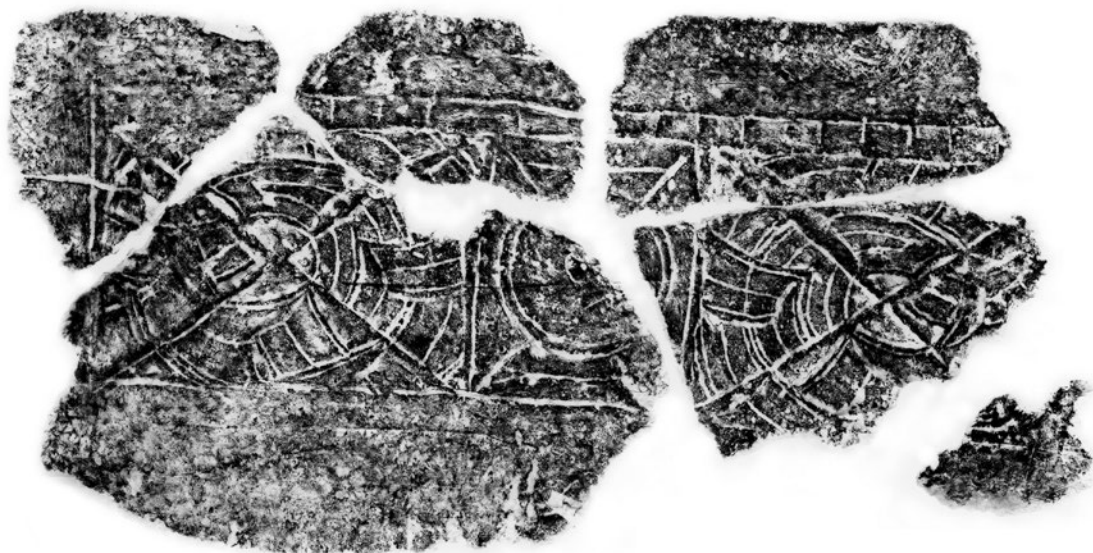
図 60 発見当時の長砂連古墳全景



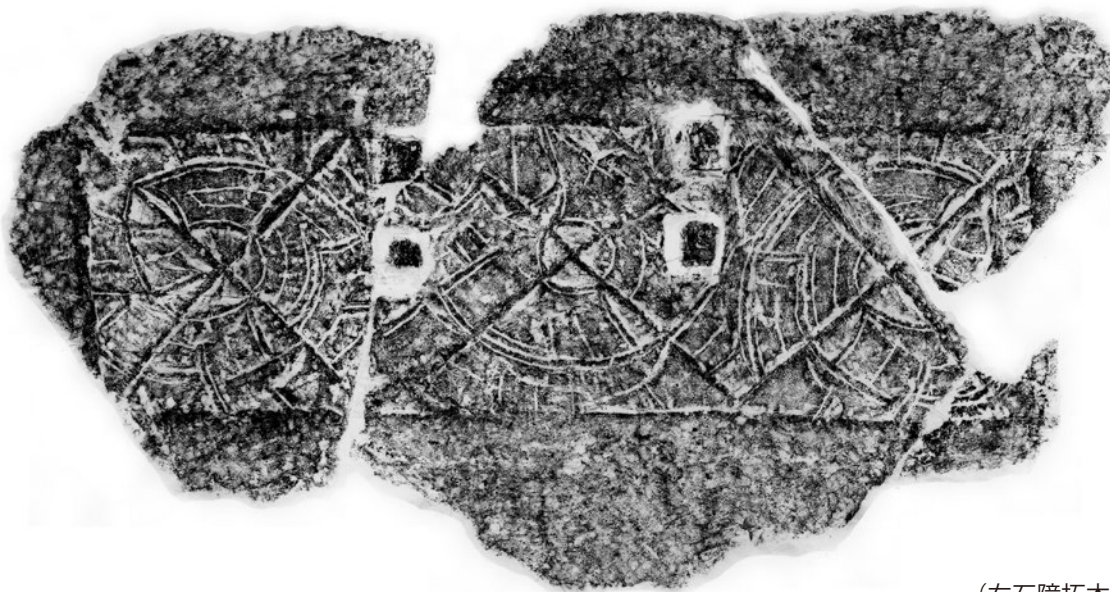
(左石障)



(右石障)



(左石障拓本)



(右石障拓本)

图 61 長砂連古墳石障裝飾

19 広浦古墳 ひろうら —上天草市大矢野町維和廣浦—

市町村コード (43212) 遺跡番号 (051) 北緯 32 度 32 分 31 秒 東経 130 度 27 分 48 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1918 年 (大正 7 年) 頃、維和島における銅精錬所の施設建設に伴い発掘されたとされる。大正 7 年 7 月に平野乍により装飾石材を採取のうえ濟々巒中学校に持ち帰ったことにより (濟々巒第一石・第二石)、大正 7 年 8 月 10 日には九州日日新聞紙上に『珍しき紋様古墳 天草千束島で発見』と報道されている。大正 8 年 4 月この石材を実見した濱田耕作は、主に梅原末治等からの現地確認、聞き取りの結果を基に「天草維和村の古墳」として報告を纏めている。濱田は大正 8 年の「海の荒い冬の最盛り」に現地を訪れており、その際の調査は「えびそうど」として短く纏めている^(註)。その後、坂本経堯 (坂本 1971) による広浦古墳群としての紹介、乙益重隆 (乙益 1985) による広浦古墳の石材収録、2005 年 (平成 17 年) に上天草市大矢野町編纂事業に伴い熊本大学考古学研究室により周辺の地形測量及び墳丘・石材の実測調査が行われている。この時、杉井健・神川めぐみ等による熊本

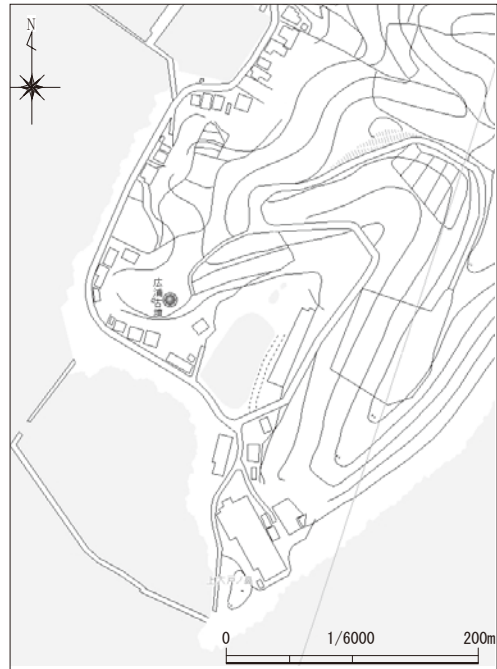


図 62 広浦古墳位置図

大学考古学研究室での現況測量調査 (2005)、甲元眞之・杉井による大矢野町史編纂時に、追加踏査・測量調査がなされた。自然科学分析では朽津信明等による石材の硬度調査により軟岩を加工した石材を利用したことが判明した (朽津 2006)。熊本県立装飾古墳館による維和村第一石の展示、報告により石障を持つ古墳であるとしている (池田 2014)。池田は報告を総括し、南側の大型石棺は石障の一部と捉え肥後型石室と評価した (池田 2015)。杉井は大矢野町史のなかで大矢野島の古墳認識の変遷に触れ、大矢野町所在古墳認識の変遷として年代ごとの古墳の表記を一覧にしている。これによって各古墳の認知度の推移が伺える。それによると広浦古墳は 1926 年 (大正 15 年) から 1935 年 (昭和 10 年) には、1～3 号墳までが周知されている。その後 1955 年 (昭和 30 年) 以降は号数の記載が見られなくなる。神川等によって測量調査が行われた現在残る墳丘は、この何号に比定されるかは不明である。広浦古墳とされる墳丘が壊されたのは大正 7 年頃のことであるが、大正 15 年の 1～3 号墳が装飾古墳である広浦古墳を含んでいたか推測する手がかりはつかめていない。坂本経堯 (坂本 1971) はもとは数基の古墳があったとして『広浦の崖に箱式石棺らしいもの』、『上大戸鼻 (維和島南端の岬を指す地名) の不知火海側に竪穴石室らしいもの』の 2 基が露出していると紹介しているが、この 2 基が京大報告の何れか、あるいは異なる古墳か、現時点では特定する根拠を待って判断せざるを得ない。

	記述	発掘時期	推定箇所	主体部	備考	解釈
1	目指す古墳は (中略) 千束島の尖端	海の荒い冬の最盛り (大正 8 年 12 月か)	丘陵先端の頂部付近?	石棺	濱田等による石棺の実測	肥後国天草郡千束島製錬所側古墳
2	其の傍らに現存する塚の如かりし	—	丘陵先端から二番目?	石室か	熊本大学による墳丘測量	現存する古墳か
3	端から第三位にありし物象を彫刻せる石棺	大正 7 年 2～3 月頃	丘陵先端から三番目	肥後型石室	維和村の古墳 広浦古墳のこと	所謂広浦古墳
?	本古墳発掘の日時	大正 7 年 9 月頃	本古墳発掘の日時 (中略) 事務所新設の時なり	—	八木氏談から存在を推定	他の古墳? 根拠は聞き取りの時期差のみ。

表 4 京大報告にある古墳群と認められる記述一覧

2 位置及び墳形・規模

維和島南端の西方へ突き出した岬上に位置する。西側の狭い海峡を挟んで大矢野島南東端の長砂連古墳と天草上島北端の大戸鼻古墳群と対峙する。ここでは京都大学の報告（表5）、えびそうど（表6）の記述から以下のように提示しておく。このうち聞き取りによる記述は異なる古墳を示したものが現時点で確認はないが、将来の検討事項を意図して記載する。杉井の取り纏めを根拠とすれば、3基は最低でも存在したとの見解に留める。維和島、天草上島の阿村は、東方の八代市側に向かってサカハダと呼ばれる砂岩等の堆積岩が傾斜して堆積する。それら基盤層上に大矢野島側（ムカイハダ）に向かって幾つか独立丘陵が存在する。丘陵間は干拓地になっており、天草で数多くみられる小規模干拓地である。かつての入江の跡であるこれら干拓地の一つに千束という地名がある。広浦古墳群のある丘陵は西側の矢野島に向かって伸びた独立丘陵のひとつにあり、維和島の南端に位置する。丘陵からは長砂連古墳の丘陵がある大矢野島柳、大戸鼻古墳群がある大戸ノ鼻が眺望できる。

次に墳丘、主体部について述べる前に「京大報告」と「えびそうど」から以下のような一覧を示す。

内 容	番号	記 述	解 釈
墳丘形状	①	小形の土饅頭、其の傍らに現存する塚	傍らの塚とは熊大測量による墳丘か
石室構造	②	上部に円形の石材堆積	天井石か
天井より見た下部構造	③	内部に大なる板石の積重ねたるもの	積石か
石室（石棺）の構造	④	封土の南半に南北に長さ位置を取れる大形の一室	東西方向？
〃	⑤	一室の外に北半には之と相接して同方向を取れる。稍々小形のもの2個3個	
〃	⑥	その数2個	千束小鎌田辰人
〃	⑦	小室の構造は何れも箱式石棺の系統	
〃	⑧	側壁は各四枚の砂岩の石、下部は底石無し	⑩と関連
〃	⑨	直接石材を地中に埋めたり	
〃	⑩	南半に在りし大棺の分と思わるるものは三枚より成り	⑧と関連
〃	⑪	個々の石棺の大きさの精細を知る由無し	
〃	⑫	天井石は其の内面身と接する凹入せるを以て大きさを推知	? 箱式石棺の蓋石と推知か
〃	⑬	内面に凹みのある天井石、三つ	3枚の蓋石 梅原末治、実見
〃	⑭	他の二個の石棺は、用材と確認すべきもの不明	蓋石は大形棺のものと推知？
〃	⑮	著しく小形なりしとは認むる能はず。寧ろ相似たる大きさにして、僅かに小形なりしもの	
棺内の様子	⑯	南方の大形棺、貝殻を敷く。全面に朱、人骨、歯、直刀	
〃	⑰	他の棺…遺物を認めざりし	

表5 京大報告墳丘・内部主体・出土遺物記録一覧

海の荒い冬の最盛り (大正八年十二月)	目指す古墳は（中略）千束島の先端にあって、製錬所の煙突が寒空に高く聳えている。（中略）小さい塚なので（中略）ただ鏽刀と灰のようになった人骨だけが石棺の内から現われた。（中略）棺中見るものもない古墳の実測はこれを果たさねばならない。（後略）珍しい彫刻のある石棺の石材をもらいうけて。	浜田青陵 K君等 大矢野島柳浦に逗留
------------------------	--	--------------------------

表6 えびそうど記録

3 主体部

広浦古墳群としての各古墳の主体部は、京都大学所蔵写真や京大報告、大矢野町史から推定すると表4の一覧のようになる。また坂本経堯の記述には、「竪穴石室らしきもの」と「箱式石棺」の2つが紹介されている。京大報告中の「端から第三位にありし」古墳が、物象を彫刻せる石棺という記述から装飾古墳である広浦古墳と言える。装飾古墳総合調査報告以降「広浦古墳」として命名しているが、課題がこの古墳の主体部の解釈である。以前から石棺として報告されてきたもので、京大報告によれば蓋を有した箱式石棺が推定復元図として掲載されている。この復元図提示の根拠となった事実関係の把握は、表5⑫、⑬の記述である。この記述からは石棺蓋内面にほぞを持つ石棺と理解できる。一方で②、③、④、⑤の記述は、石室の天井石を外

した石室内部に大型の石棺1基、小型の石棺2～3基が置かれていたとする記述である。記述通りに従えば石室内に3つの石棺が隣り合わせにあり、そのうちの南側の大型石棺に装飾と蓋石が備わっていたという解釈になる。この記述を現在の理解で捉えるなら、複数の屍床のプランを持った石室と見られる。その配置は④、⑤の記述「南半に南北に長き位置を取れる大形の一室」と「北半には之と相接して同方向を取れる。少々小形のもの2個3個」が根拠となる。南半に「南北」ではなく、「東西」と解するなら、複数の屍床を持つ石室と理解できる。更に、長き位置を取れる大型の一室にはほぞのある蓋石が伴っていたとするならば、石室の空間内に蓋石を伴った石棺と蓋石を持たない小型の石棺が複数存在したことになる。しかしながら、残された部材のうち濟々鬘第一石として報告された部材に5mm、京都大学に持ち帰られた維和村第一石に6mmの僅かなくろこみが存在することから、この部材が石障の一部と捉えられ、肥後型石室であると理解できる。但し「南北に長き」の「南北」の方向と石障に「蓋石」があるとするならば、幾つかの解釈が想定され課題は残る。

4 装飾

濟々鬘第一石、第二石は、左右側面と下側面が割られており、上端部のみオリジナルである。維和村第一石は両端が割られており、上下の端部がオリジナルである。濟々鬘第一石は、鞘を表現した太刀のうえに鹿角製らしき柄を表現した鞘入りの刀子が浮彫で表現されている。濟々鬘第二石は、装飾文様にいくつかの解釈が考えられ課題が残る。ここでは向かって右から、刀子、垂下する何某かの表現を付けた鏡、目庇付冑と理解しておく。ただ、このような省略された文様の厳密な解釈は言及はできても、検討は尚必要である。維和村第一石は刀子と二つの円文、円文は鏡の可能性も考えられる。維和村第二石は所在不明であり観察できていないため、解釈はできていない。何れの部材も上端部で剥片剥離による粗成形の後、所謂チョウナ敲きで平坦に加工している。ただし、くりこみのある付近はチョウナ敲き痕が消えており、磨いた形跡がある。

維和村第一石（京都大学所蔵名：装飾石材破片）が、唯一石障の高さを知る手がかりである。実物では下端部から20cmのところから下半が黒ずんでおり、赤色顔料の残滓が認められない。おそらくこのラインが屍床の面でありそれより下部が埋設した範囲と捉えられる。下半部は表裏に交互剥離を行って切っ先を尖らせており、地中埋設を意図した加工ということが理解できる。

このことから、装飾は地表に露出した幅のほぼ中央付近に浮彫が施されたと理解できる。同じ高さに装飾を施した事例に、箱式石棺である小鼠蔵3号墳がある。装飾を施している位置には加工による段差があるものの、全て平滑にすることなく段差を残したまま装飾を施している。広浦古墳の装飾もこの特徴を有し、表面のチョウナ痕が明瞭に残る。浮彫は周囲をやや浅く掘りくぼめた後、約2.5cmのタガネ状の工具で彫刻している。また、濟々鬘第一石のほぼ中央付近に太刀の装飾に切られた幅2mmに満たない細い一筋の線刻が認められる。浮彫に切られていることから先行する加工であるが、その幅とまっすぐな線から装飾ではなく何らかの下書き線が残ったものと捉えておく。

5 出土遺物

南側の棺より刀と人骨片が出土しているようであるが、工事中に埋め戻されている。また、濱田等が大正8年12月に調査したと思われる石棺（竪穴石室、或いは石棺系石室か）からは鏽刀と灰のようになった人骨が出土したという記述がある。何れの遺物も所在不明である。

6 保存施設・修復歴等

なし。但し、維和村第一石は、平成24年度の熊本県立装飾古墳館展示時に背面で劣化した石材片が落下したことにより一部修理を行っている。これらは別途修理報告をしている（池田2015）。また、県立美術館装飾古墳室内に置かれた濟々鬘第一石、第二石が比較的良好な保存状況下にあることを報告している。

7 図面等保管場所

図 63 周辺測量図等 2005 年調査の資料は、熊本大学文学部考古学研究室で保管、図 64 の実測図は実測者（池田朋生）が保管。

8 その他（年代等）

築造年代は、前方後円墳集成 5 期頃と考えられる。

（ 池田朋生 ）

註

甲元眞之氏の教示による。

参考文献

濱田耕作 1919「九州に於ける装飾ある古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告第 3 冊

浜田青陵 1969「えびそうど 三」『百済観音』東洋文庫 149 ※原著は 1924 年『大阪毎日』

坂本経堯・坂本経昌 1971「広浦古墳群」『天草の古代』

乙益重隆 1984「広浦古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会：p.51

神川めぐみ 2005「第 2 部 広浦古墳測量・実測調査報告」『考古学研究室報告』第 41 集 熊本大学文学部考古学研究室

甲元眞之・杉井健 2007「上天草いにしへの暮らしと古墳」上天草市史大矢野町編 1 原始・古代

池田朋生 a 2014「京都大学総合博物館所蔵「装飾石材破片」について」『研究紀要 第 10 集』熊本県立装飾古墳館

池田朋生 b 2014「装飾古墳保存施設の特徴とその管理について」口頭発表 O-36 文化財保存修復学会第 36 回大会

池田朋生他 2015「京都大学所蔵「装飾石材破片」の表面剥離とその修理について」ポスター発表 文化財保存修復学会第 37 回大会：p.129

図表出典

図 62：熊本県市町村電子自治体共同運営協議会が公開する熊本県遺跡地図を利用

表 4・5・6：池田朋生作成

図 63：神川めぐみ 2005 より

図 64：池田朋生作成

図 65：濱田耕作 1919 より

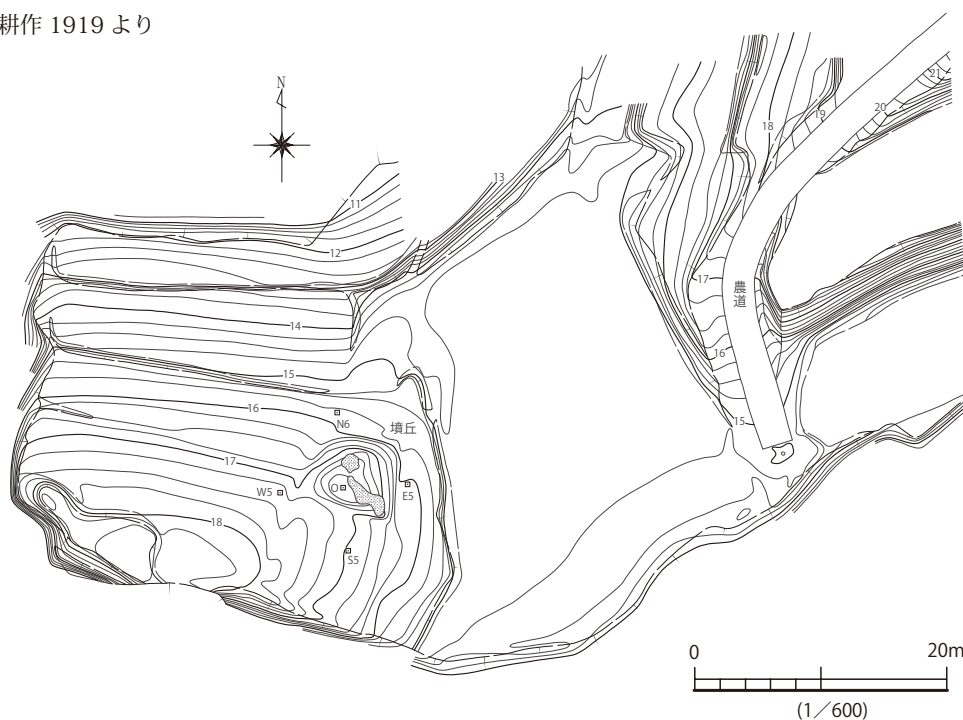
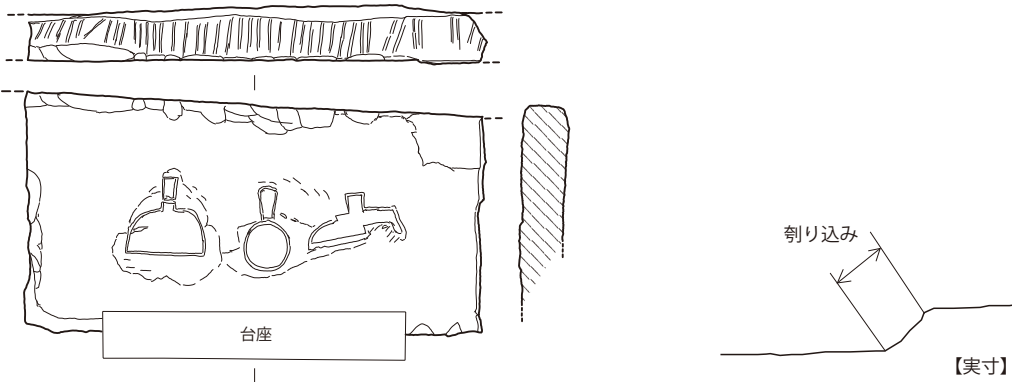
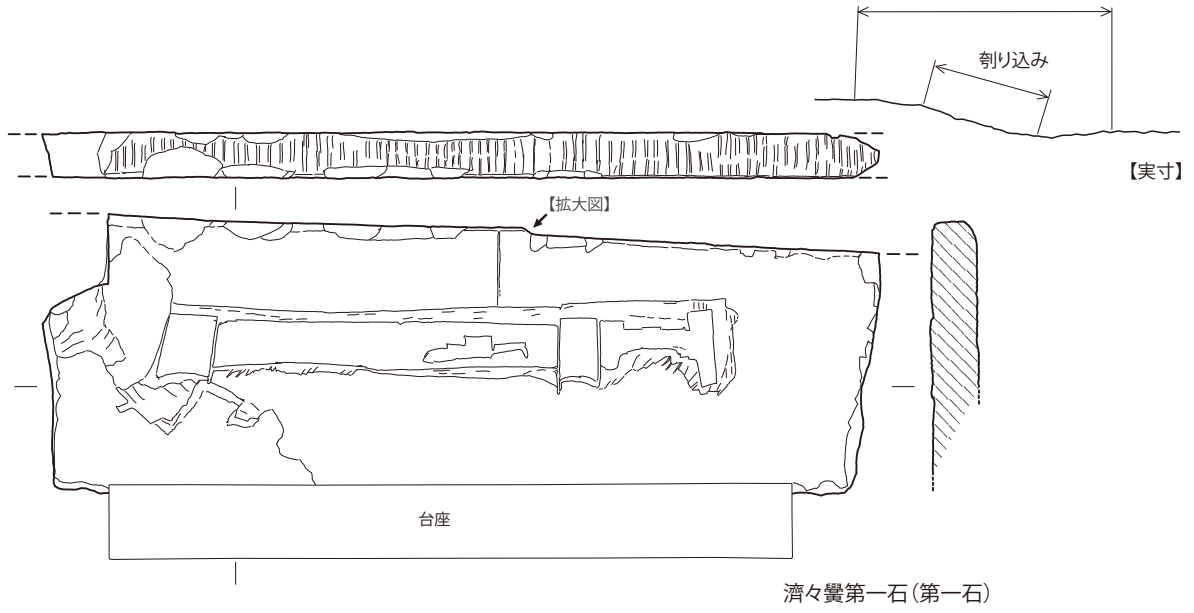
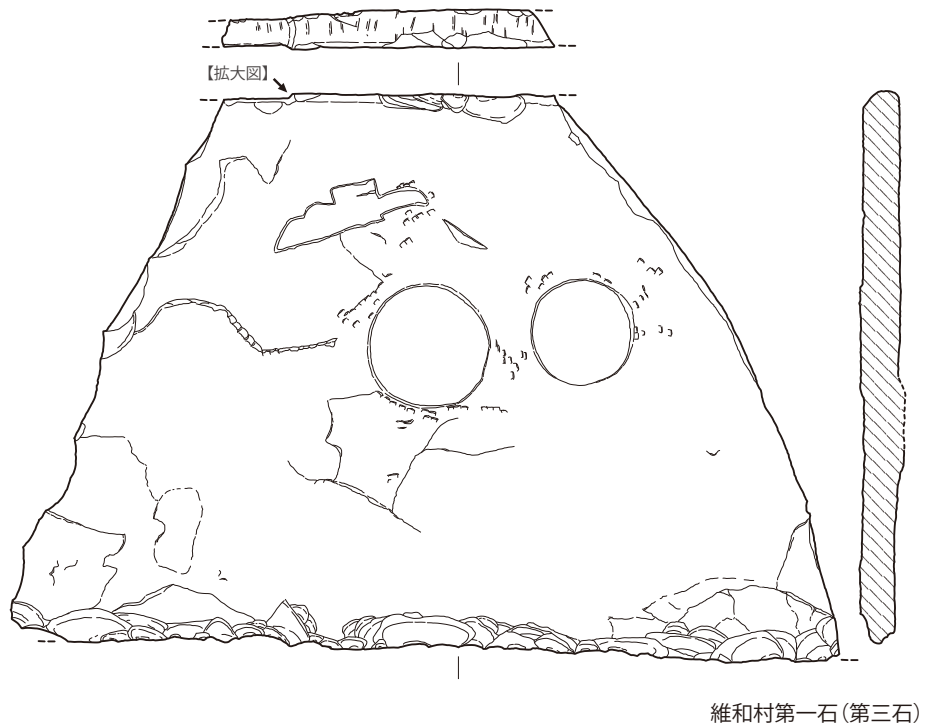


図 63 広浦古墳周辺測量図

ナデのようなミガキでチョウナタキ痕が消えている



濟々巖第二石(第二石)



0 50cm
(1/10)

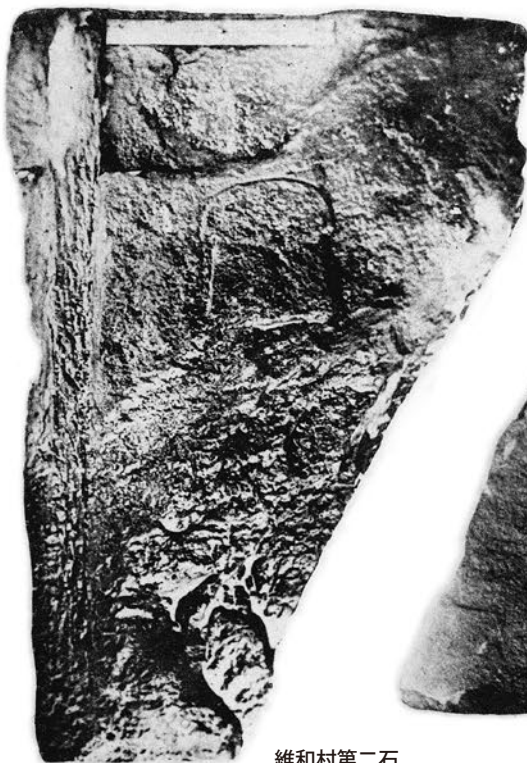
図 64 広浦古墳石棺石材実測図



濟々覺第一石（第一石）



濟々覺第二石（第二石）



維和村第二石



維和村第一石（第三石）

図 65 広浦古墳石棺石材

20 おおとばな 大戸鼻古墳群 (昭和48年11月26日県史跡) —上天草市松島町阿村大戸鼻—

市町村コード (43522) 遺跡番号 (018) 北緯 32 度 31 分 39 秒 東経 130 度 27 分 35 秒

大戸鼻古墳群の位置

大戸鼻古墳群は、天草上島の北北東、八代海（不知火海）に面した下大戸ノ岬の丘陵上に位置する。対岸の維和島の南端にある上大戸ノ岬側には、広浦古墳群がある。この下大戸ノ岬からは、広浦古墳群の他、大矢野島長砂連古墳、八代市大鼠蔵古墳、小鼠蔵古墳などが一望できる。古墳群の正確な数は不明である。1913年（大正2年）5月29日、九州日日新聞の1面に2段にわたって掲載された、肥後の古墳（上）熊本県属矢野寛によると、『(前略) 同郡（注天草郡）に於て最も古墳に富めるは阿村、今津、維和村及び其付近の島嶼を第一とし（後略）』とあり、同じ記事内に、『阿村の東北東に…（後略）』として、二つの古墳を紹介している。一方が、大戸鼻北古墳、もう一方が大戸鼻南古墳であろう。この時点で地元では、大戸鼻北古墳を「鬼ノ池サン」と呼称されていたと紹介されていることから、板石で四方を囲んだ石室の構造を、「鬼が造った池」に捉えていたと考えられる。こうした状況から古墳群の発見時期は定かではなく、古墳内に祠があるなど開口は古いとみられる。これまでいくつかの報告があるので、古墳群として理解された経緯を整理しておく。

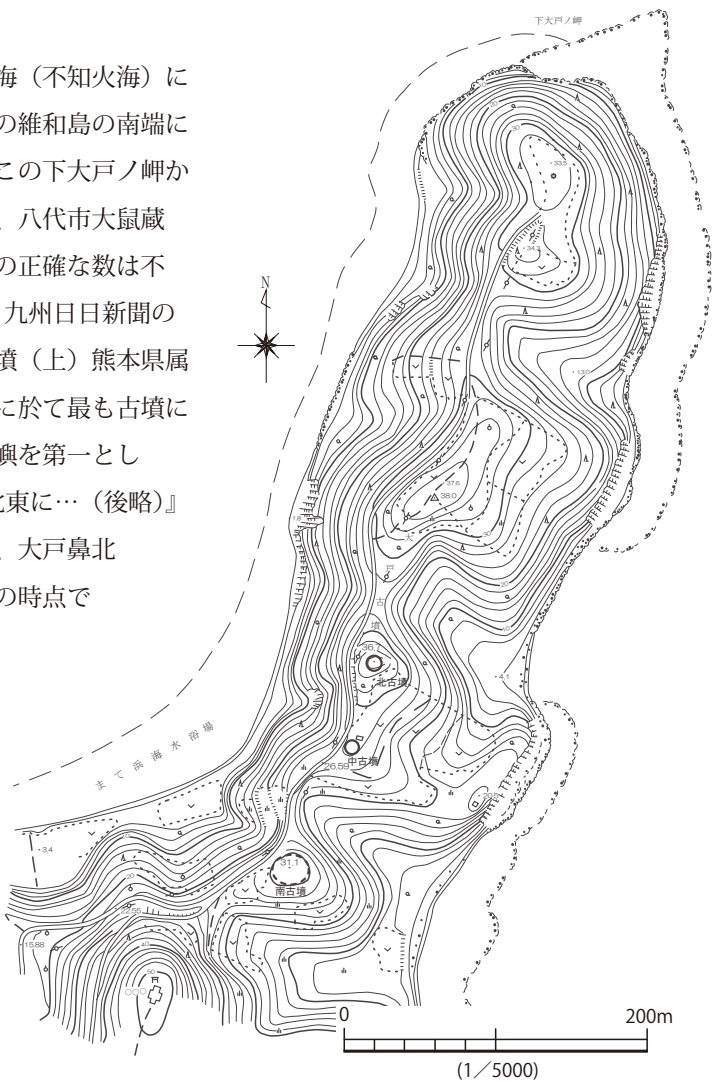


図 66 大戸鼻古墳群位置図

①矢野寛 (濱田・梅原 (1917) 引用)	②矢野寛 (1913)	③濱田・梅原 (1917)	④天草案内 (1926)	⑤天草の史蹟と遺物 (1928)		
阿村大戸 (甲) 古墳	●	阿村大戸北古墳	一號	大戸鼻北古墳	北ノ古墳	大戸鼻北古墳
阿村大戸 (乙) 古墳	●	阿村大戸南古墳	三號	大戸鼻南古墳	南ノ古墳	大戸鼻南古墳
阿村大戸 (丙) 古墳			二號	大戸鼻中古墳	南ト北トノ中間	大戸鼻中古墳
阿村大戸 (丁) 古墳		小さき組合せ石棺	三號	大戸鼻石棺		
			四號	※横穴石室?	北ノ下手	※横穴石室?
⑥天草写真大観 (1935)	⑦坂本経堯 (1956)	⑧坂本経堯・経昌 (1971)	⑨熊本県装飾古墳総合調査報告 (1984)		⑩本文	
大戸鼻北古墳	北古墳	北古墳	大戸鼻北古墳		大戸鼻北古墳	
	南古墳	南古墳	大戸鼻南古墳		大戸鼻南古墳	
	中古墳	中古墳				
	大戸鼻石棺	大戸鼻石棺	大戸鼻石棺			
	中古墳の東	※横穴石室?				

表 7 大戸鼻古墳群に関する記述一覧

過去の文献で細部は異なるが、装飾を持つ古墳2基、小石棺、横穴石室墳にほぼ集約される。このことから、大戸鼻北古墳、大戸鼻南古墳、そして非装飾の横穴石室を持つ大戸鼻中古墳の残存状況については、1913年（大正2年）から保存施設ができる1981年（昭和56年）頃まで大きな違いは無いとみられる。この間、

1915年（大正4年）から1927年（昭和2年）に熊本県が行った史蹟調査保存事業により、史蹟の調査、保存が組織的に進む（1974 田辺）。この先駆的な文化財行政の制度のなかでも保存上の措置の一端が、木柱、木柵を設置した大戸鼻北古墳の写真からうかがえる（天草写真大観 1935）。古墳の解釈で異なるのは、大戸鼻南古墳の装飾、大戸鼻石棺の評価と、天草案内（1926）で四號とされた横穴石室らしき古墳の残欠の有無である。大戸鼻石棺とされる報告の初見は、矢野寛、濱田・梅原（1917）の当初から、大戸鼻南古墳に隣接し、露出していたとみられる。南古墳のこの露出した経緯は不明であるが、北古墳と同様に石祠が祀られており、後世における当地での古墳利用の一端を示しているのかもしれない。これまであまり取り上げられなかった古墳を古墳時代研究のみならず、後世の時代上の取り扱いを視差することで改めて当該地の古墳の理解が進むと考えられる（池田 2013）。このうち大戸鼻石棺は、天草の古代（坂本 1971）において砂岩製の石棺内面に赤色の円文があったとする聞き取りを記している。一方、濱田・梅原（1918）でもこの石棺は取り上げられており、『(前略) 長さ四尺九寸、幅二尺六寸、深二尺二寸、四石を以って成り、蓋石は之を省き、何等の装飾なし（後略）』とされる。二つの報告では、長さ、深さの寸法は内寸外寸の差はあるがほぼ同じ値を記録しているものの、幅の値がほぼ倍違う。何れの調査時も、写真図版が残っており同じものを指しているとみられる。環八代海沿岸の砂岩製装飾古墳で彩色のみでの描画は皆無であり、むしろ全面赤色塗布後の後世の剥落や残存部位を意味ある形に見出し、或いは地衣類等の繁茂の誤認が考えられる。装飾古墳の顔料に対する視差は、大正期～昭和初期と高度経済成長期で大きく変わる。むしろ後世になるほど誤認が多く、石本来の色や風化による変化を顔料と誤解する例もある（池田 2009）。従って、大戸鼻石棺は濱田・梅原の報告に従い装飾古墳としては扱わない、現在、石棺内面は土砂で充填されており確認できない。天草案内（1926）で初見となる四號とされた横穴石室の残欠については今後の確認が必要である。従って、本文では装飾古墳として疑いない大戸鼻北古墳、大戸鼻南古墳を取り上げる。

① 大戸鼻北古墳

1 発見の経緯及び調査の経緯

大戸鼻北古墳の発掘調査歴は無く、発見の経緯は開口して古いことからはっきりしない。そこで、これまでの記述を一覧にする。

年代	内容
①大正2年5月29日	阿村の東北方に突出せる凸角に近き地点（中略）鬼の池と称せられ（中略）古墳ありて柵内に石棺あり其内面には圓紋の沈み彫りあり（矢野 1913）
②大正6年5月30日	鬼ノ池サン（中略）奥柵壁と東壁とには圓輪の模様を陰刻す。（濱田・梅原 1917）
③大正15年4月10日	字大戸鼻にて、北の古墳と呼び、本村に於ける唯一完全の石柵（天草案内 1926）
④昭和31年12月	丘頂の円墳、径約2.5米、高さ約4米、（中略）板状砂岩を小割にして煉瓦状に積み上げたコルベール天井で、高さ1.9米、石室内壁に沿って箱式に組んだ隔壁（中略）板状砂岩の見事な一枚板で内面を研ぎ丹を以って彩る。奥正面に円文3つ（1個滅失）、右（東）側壁に円文四か所並び彫られている（坂本 1956）
⑤昭和46年2月発行	南の丘の北150米の頂上の円墳で、25米高さ約4米、東南に開口している。（中略）羨門部に巾47糎深さ7糎の切込みをつくる。従って、石室床は柵壁によって羨道面より落込みとなる。（坂本経堯・経昌 1971）
⑥昭和59年3月発行	石障の三面に稚拙な円文を彫る。円文は直径約15cmで奥に3個、左右に各4個描かれている。（隈 1984）

表8 大戸鼻北古墳に関する記述一覧

何れの記述も、柵壁と称する石障に円文を刻むとある。入口から向かって奥の石障、東側の石障に円文が刻まれていることは理解されている。当初から、鬼の池と呼ばれているところから、石室内に石障が置かれていた状況にそれほど変化は無いとみられる。①の『柵内に石棺あり』は、その時点では仕切り石が存在した可能性も考えられる。③の時点では、桐の木尾羽古墳など阿村周辺の他の石室が見つかっていなかった可能性を示唆する。④の論考で、箱式石棺との相似性、そして石障表面を精緻に加工するという二つの視点で観察されており特筆される。また、⑤にて、石障のくりこみ、羨道部から落ち込む石室構造を指摘、半地下構造の肥後型石室の特徴をこの時点で記している。

2 墳形・規模

標高約 36 m の丘陵頂部に立地する。墳形は円墳と見られているが、保存施設設置以降、規模、墳丘の構造を知る手がかりが乏しい。特に石室と墳丘規模との関りは、砂岩製の石障を持つ古墳に共通して未解明な部分が多く課題である。④、⑤の記述から、保存施設設置前の墳丘規模としては円墳であり、径約 25m、高さ 4 m とされるが、周溝、段築、葺石の有無など、墳丘に関わる情報は見いだせない。

3 内部施設

(1) 使用石材 石室使用石材は、簡易判定を行ったところ全て砂岩であり、使用石材に火成岩は含まれていない。下大戸岬は基盤層が砂岩であり周囲の海岸、山間部で採取、切り出されてきた歴史があるので珍しいこととは感じられないが、実は砂岩単体でのみ石室を造り同じく石障を持つ装飾古墳はそう多くはなく、本古墳と八代市田川内 1 号墳がある。五反田古墳、門前 2 号墳、長迫古墳は積石が不明であり、小田良古墳、小鼠蔵 1 号墳、大鼠蔵尾張宮古墳は積石の一部に安山岩系の石材を使用する。非装飾ではあるが、竹島 3 号墳は積石に泥岩が含まれる。単室構造と見られるが追認はできていない。

(2) 石室構造 羨門は砂岩製の眉石の一石を左右の袖石が支えるが、この袖石に相当する箇所は砂岩製の板状石材を幾重にも重ねたもので、それに板材を立てかけられる特徴を有している。玄門入口は高さ約 80cm・幅 23～29cm、玄室奥行き 2.05m、幅 1.9m とほぼ正方形のプランである。前障の玄門部分に繋がるところにのみ、刳り込みがあり、約 4.3cm 程度と比較的浅い。天井石は、修復されており緒元の状況は不明である。積石は四隅をまたぐものが複数あり、窮隆状のプランを意識している。四方の石障のうち奥障のみ欠損しているがその経緯は不明である。特筆すべきは、四方の石障加工である。坂本経堯が指摘したように一切の凹凸、層理割れもなく加工痕跡も見え難い。八代海沿岸の砂岩製埋葬施設では屈指の整形石材を四方全てに用いている唯一の例である。詳細は後述するがこれは単に箱式石棺の技術を引用したにとどまらず石障独自の使用の萌芽と言える。実際は前後左右どの位置に用いるかなどの規定は、石室構築時の規制であり、それ以前にあらかじめ準備する場合には同じ規格を用意したものとして捉えるならば、四方全てに刳り込みを持つ大鼠蔵尾張宮古墳の石障の存在理由と似た理解ができる。

4 装飾

奥石障、東側に位置する右石障に、円文を配している。一定の高さ、間隔で配する。前述した石障と異なり、加工は先行研究でも指摘されるように精緻さに欠ける。奥側、東側に装飾を配する理由とその装飾を施す期間が、石障そのものを準備する期間より短いことを示唆するものとみられる。また、2013 年（平成 25 年）2 月の古墳公開時に、志賀建史（当時熊本大学学生）により西側の石障に幅 1 mm の線刻で歪な円と垂下した線存在が指摘されている。装飾とは認めがたいほどの細かい線刻は、広浦古墳の濟々鬘第一石でも認められるが、本古墳の場合は石障設置後のものと見られるものの、尚検討を要する。

5 出土遺物

開口が古く不明。

6 保存施設・修復歴

1980 年（昭和 55 年）、旧松島町により保存施設が



図 67 大戸鼻北古墳墳丘測量図

設置されているが、保存施設入口、復元した墳丘頂部の劣化が認められる。

7 図面等保管場所

1974年（昭和49年）作成の石室実測図は熊本県文化財資料室で保管。

8 その他（年代等）

石室構造から5世紀前半のものと捉えられる。

（池田朋生）

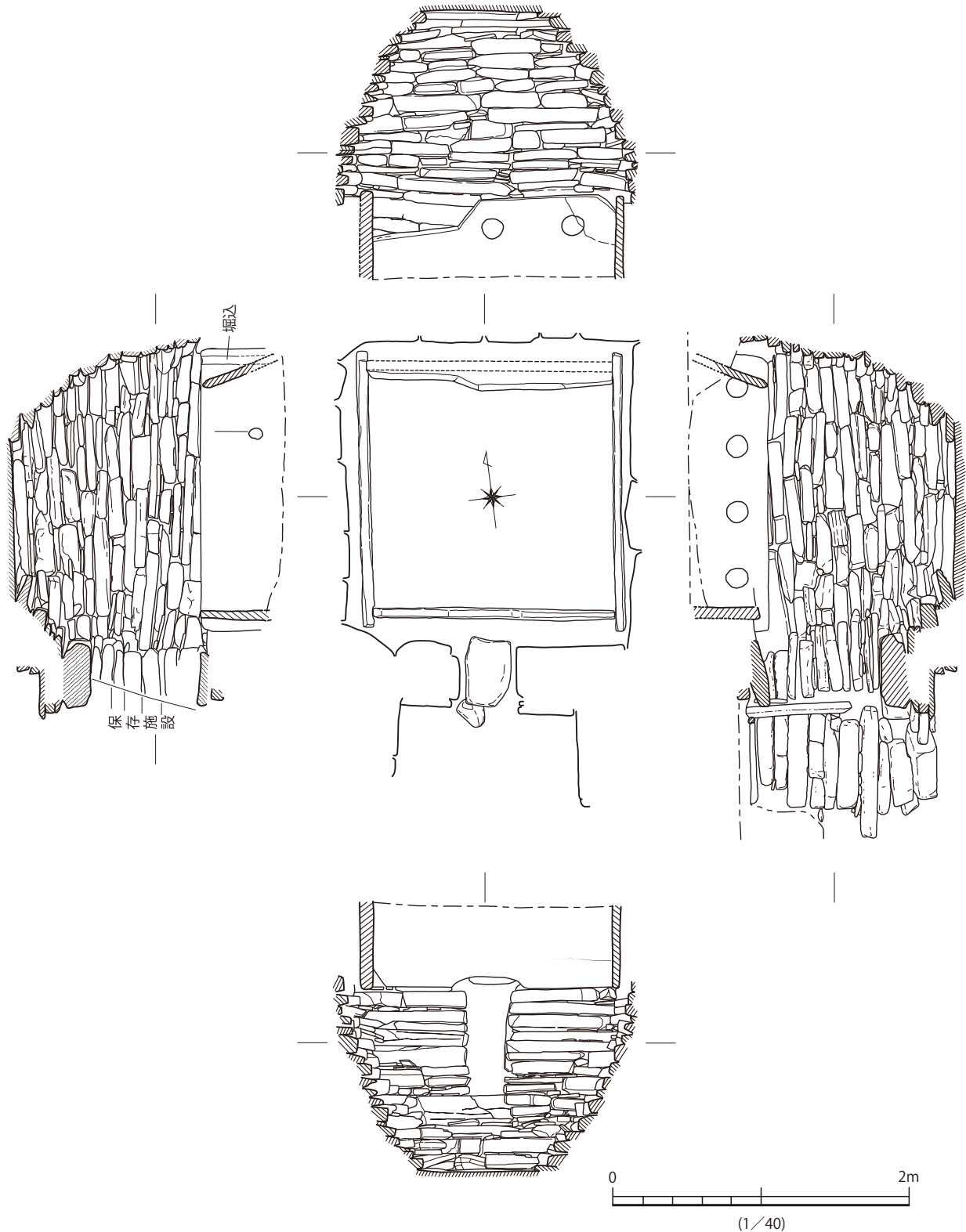


図68 大戸鼻北古墳墳丘測量図及び石室実測図(左壁は3次元モデルからのトレース)

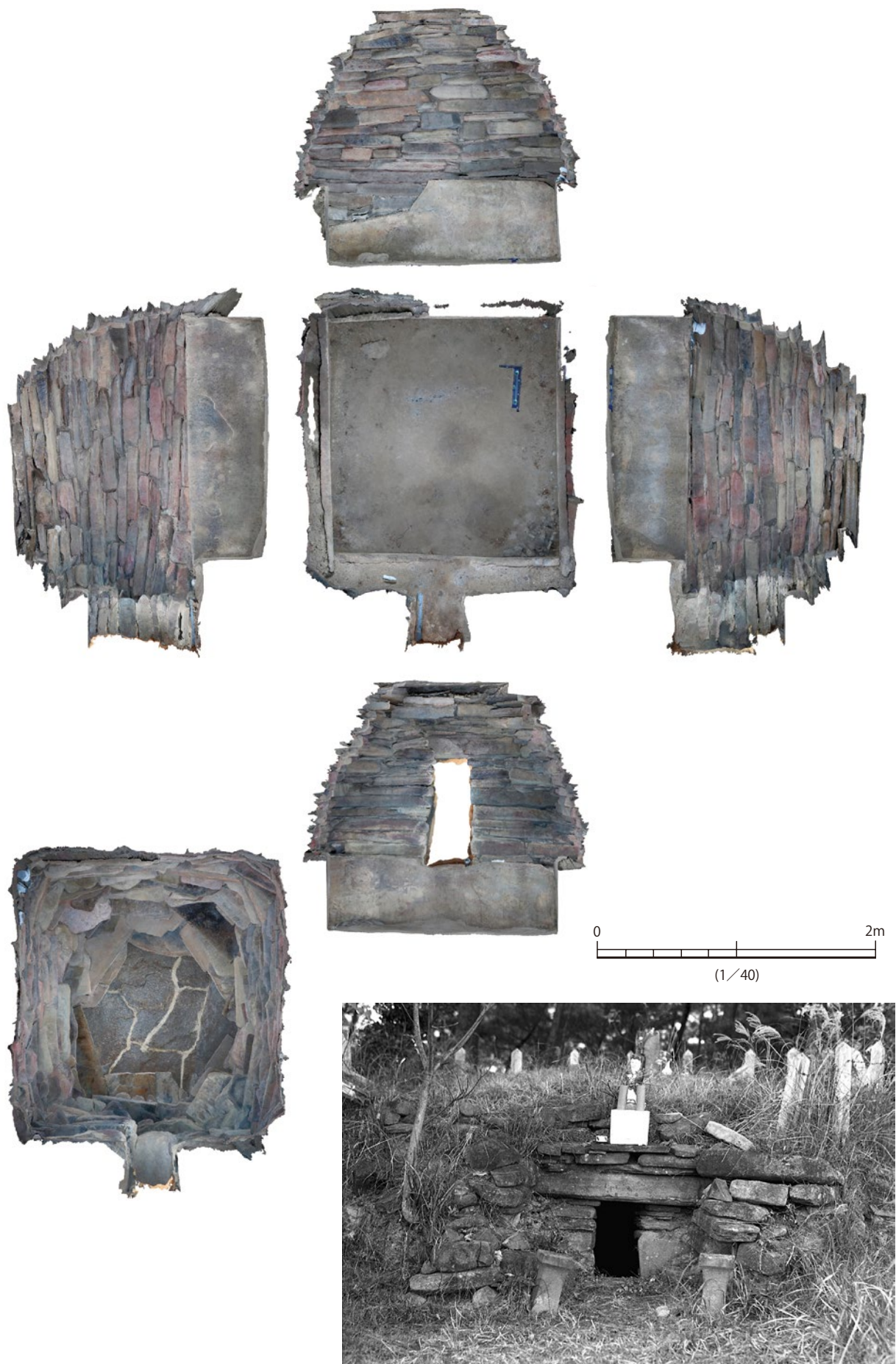


図 69 大戸鼻北古墳石室三次元モデル及び正面からの写真（整備前）

② 大戸鼻南古墳

1 発見の経緯及び調査の経緯

北古墳と同様、開口が古いため表9にまとめる。認識が異なるのが、坂本の④、⑤の西側側壁上位にある浮彫様の円文と鳥とされた線刻である。⑥以降、この文様が認められない。

2 墳形・規模

不明。1974年（昭和49年）の保存施設設置時に、それまで露出していた石棺材を墳丘風盛土で覆い、保存施設の入口を西側側壁側に設けている。本来の形状を確認する追加調査、調査結果は得られておらず課題が残る。

3 内部施設（石室）

箱式石棺。報告された当時より石棺全体が露出していたとする記録のみしか見つかっていないため経緯が不明であるが、本来は地下に棺身の一部分が埋設されたものと考えられる。現在の入口は保存施設で便宜上のもの。現在熊本市立博物館に移設されている美里町中郡古墳と同様な構造と見られる。故に周囲は掘方まで掘削されていると考えられる。

4 装飾

②の段階より砂岩表層の剥落が進んでいるが、漢式鏡を模したと評される垂下した線刻と三つの同心円文は確認できる。その後東側側壁において、径7cmの彫りの浅い小円文が確認できた（池田2019）。鏡とされる既出の円文と同程度の高さにあるが、線刻の彫りが細く小鼠蔵1号墳と酷似した場所に施工、形状も類似する。なお、西小口の外面装飾は京大報告（濱田1917）や天草の古代（坂本1971）に報告されているが、現在は円文下部が約3分の2程、剥離している。

年代	内容
①大正2年5月29日	同所を距ること南方丁餘の地には地上に露出せる石棺あり内面には同様の圓紋ありて其意匠及彫刻の技巧は前者に比し遙に精巧を極め（矢野1913）
②大正6年5月30日	南壁の一部奥に近き所に三個の同心円の模様有り（濱田・梅原1917）
③大正15年4月10日	二號古墳の稍南方にあり、南の古墳といひ、大小二個の石棺である（天草案内1926）
④昭和31年12月	長186糎、幅90糎、深さ95糎、南側壁に漢式鏡を吊るした状態の文様3か所（中略）西側壁上位に円形を浮彫し鳥らしい線刻文（後略）（坂本1956）
⑤昭和46年2月発行	南の丘頂上の石室で箱式石棺の長大化した箱式石室（中略）、西側壁がなく天井に載せられて上下が反対になっている（中略）長さ186糎、幅90糎、深さ95糎、上方を狭く組み、床に板状砂岩を張りつめ、天井には厚い板状砂岩を三枚のせたもの。（中略）南側壁に三個の漢式鏡の刻文と西側壁上位の浮彫円文と飛ぶ鳥の刻文（後略）（坂本経堯・経昌1971）
⑥昭和59年3月発行	南側壁に直径16～18cmの同心円文3個、西壁にも円文の中に飛ぶ鳥の刻文（後略）、現存しない。（隈1984）

表9 大戸鼻南古墳の過去の状況一覧

5 出土遺物

開口が古く不明。

6 古墳の保存状況

まず、墳丘風に見える土盛りは、砂岩製の石棺の表層剥離など劣化が進行しやすい装飾を保護してきた保存施設の一部であり、現在まで装飾を保護してきた点で評価できるものである（池田2010）。しかしながらあくまで保護盛り土としての役目、施工であるため、墳丘復元と捉えられること、経年劣化による盛り土の流出、流土による石棺内への外気の流入、塩類の析出、砂岩剥落という劣化のスピードが近年著しい。「がんぜき」を用いた石棺内の空隙を封じた応急措置を行っているが（池田2007）、雨水流入を防ぐ防水シートの弊害により盛り土の乾燥化が進んでおり「がんぜき」が有効に作用しない環境にある。透水性シート等への交換の後、保存施設の復旧が必要である。

7 図面等保管場所

1974年作成の石室実測図は熊本県文化財資料室で保管。

8 その他（年代等）

中郡古墳と類似した構造という解釈を根拠として（池田 2007）、5 世紀後半と考えられる。

（ 池田朋生 ）

参考文献

- 矢野寛 1913「肥後の古墳（上）」九州日日新聞5月29日朝刊一面
濱田耕作・梅原末治 1917「肥後に於ける装飾ある古墳及横穴」京都帝国大学文学部研究報告第3冊
編うしほ会・天草郡役所 1926「天草案内」※復刻版平成3年
熊本県教育会天草郡支會編 1929「天草の史蹟と遺物」
坂本経堯 1956「古代の天草—松島地区調査概報—」熊本史学10号
坂本経堯・経昌 1971「天草の古代」
田辺哲夫 1974「大正期の熊本県史蹟調査保存事業について」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告（全）：pp.797 - 800
隈昭志 1984「大戸鼻北古墳・大戸鼻南古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集
熊本県教育委員会：pp.146 - 149
坂口圭太郎 2012「装飾古墳修復材料の研究～「がんぜき」を用いた試み～」熊本県立装飾古墳館研究紀要第9集：pp.18 - 21
池田朋生 2013「天草産出の砂岩を対象とした文化財石材の研究」先史学・考古学研究と地域・社会・文化論 高橋
信武退職記念論集編集委員会：pp.159 - 172
池田朋生 2007「中郡古墳家形石棺（四十八塚4号石棺）について」熊本県立装飾古墳館研究紀要第7集：pp. 6 - 13
池田朋生・大友由紀 2007「がんぜき製作の記録—轟泉水道組合でのがんぜき製作」熊本県立装飾古墳館研究紀要
第7集：pp.20 - 27
池田朋生 2009「顔料に関する考古学的検証の一視点—彩色が施された装飾古墳を中心に—」肥後考古第16号
池田朋生 2010「装飾古墳石室内での温湿度、彩色の見えを対象としたモニタリングシステムの構築研究報告書」pp.20 - 21
池田朋生 2019「不知火海に分布する古墳の使用石材とその特徴」『熊本古墳研究』第7集：pp.31 - 42

図表出典

- 図 66：上天草市土地地番図（平成 28 年 10 月 14 日）を利用
図 67：隈昭志 1984 を新たにトレース
図 68：池田栄史 1981「河浦町郷土史（第五輯）」に左壁を加筆
図 69：木村龍生作成（2018 年 12 月撮影），右下写真：人吉市教育委員会提供（乙益重隆撮影）
図 70：人吉市教育委員会提供（乙益重隆撮影 複写の可能性）
図 71：（上・下左）古城史雄（2019 年 5 月撮影），（下右）坂本経堯・経昌 1971 より
図 72：隈昭志 1984 を修正・加筆，表 8～10：池田朋生作成



図 70 大戸鼻南古墳



※白円部分は同一箇所

図 71 大戸鼻南古墳東小口石材（上）及び西小口石材（下）（左：2019年現在、右：「天草の古代」掲載時）

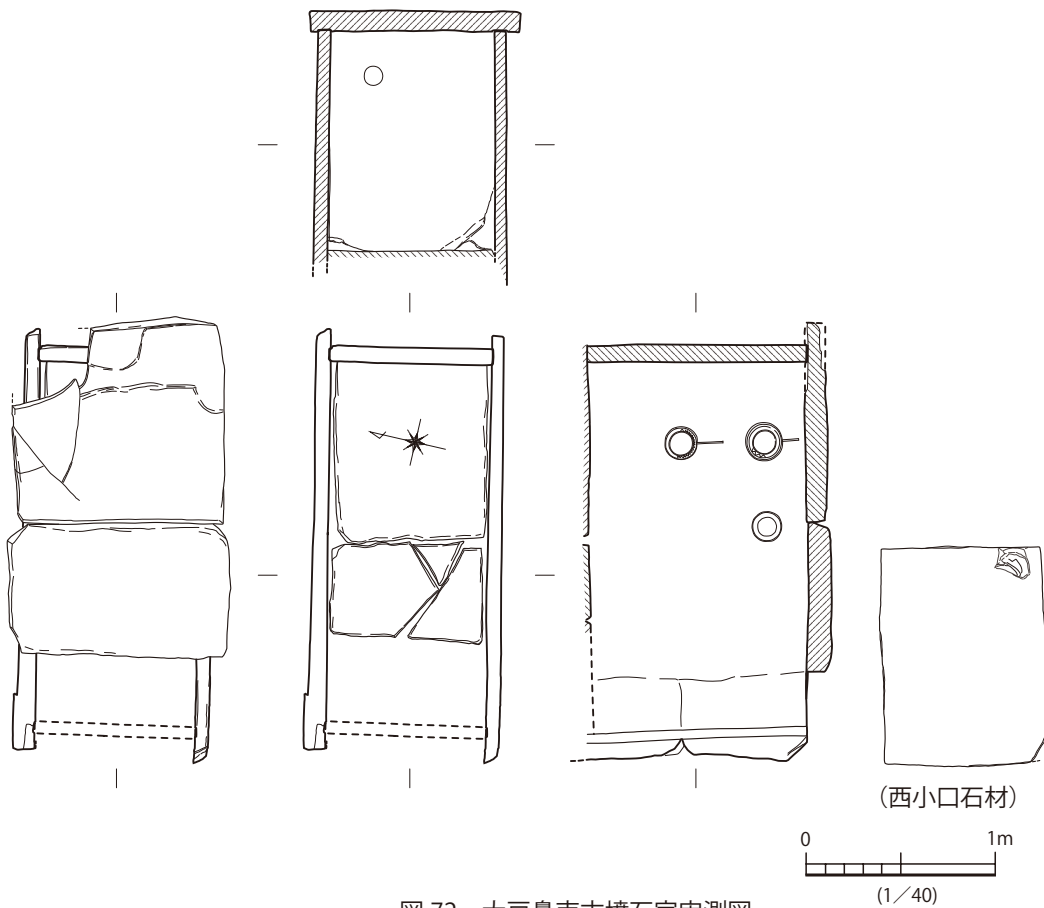


図 72 大戸鼻南古墳石室実測図

21 ^{りゅうほくたかつか}竜北高塚古墳 (昭和 62 年町史跡) — 八代郡氷川町高塚字西新城 —

市町村コード (43464) 遺跡番号 (旧竜北町:005) 北緯 32 度 34 分 36 秒 東経 130 度 42 分 08 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は不明だが、1899 年 (明治 32 年) 刊行の『考古学会雑誌』第 2 巻第 9 号に福原岱郎が「午橋生」というペンネームで書いた「肥後雑件 (二)」の中に竜北高塚古墳の記載が見られるのが最も古い記録で、石棺のスケッチが掲載されている (三島 1984、木崎 2017)。調査は 1918 年 (大正 7 年) 1 月に京都帝国大学文学部により調査が行われている (梅原 1919)。その後 1967 年 (昭和 42 年) 12 月 18 日に三島格を中心として墳丘測量調査が行われた。また 1982 年 (昭和 57 年) に三島、高木恭二を中心に石棺の実測が行われ、新たに石枕が発見された。

2 位置及び墳形・規模

砂川下流の右岸で丘陵裾部に位置する。1967 年に現状の墳丘測量が行われているだけで、発掘調査は行われていない。作成された測量図から長径約 44.6 m・短径 29 m・高さ 3 m の円墳とされている (三島 1984) が、主体部に比して墳丘規模が大きすぎるように思われる。京大報告では長径約 120 尺 (約 36 m)、短径 90 尺 (約 27 m) の楕円形の基臺の一隅にあるとされている (梅原 1919)。

3 主体部

組合せ式の家形石棺で、石材はすべて阿蘇溶結凝灰岩である。棺身は小口、側壁各 1 石の計 4 石からなり、床石はない。北側の石材が内側に倒れ込み、西側の小口も傾いている。京大報告によると内法は長さ 194cm、幅は西小口側で 78cm、東小口側で 84cm とされている。蓋は 1 枚石を刳り抜いて造っているが破損が甚だしく、蓋の半分強が欠損しているが、蒲鉾形に近い断面形をなし、下縁に幅約 7～9 cm の平縁をめぐらす。蓋の長さ 226cm・高さ 43cm、幅は京大報告によると約 100cm である。また棺材と思われる石材は棺の内外に散在し、その中から石枕が発見されている。石枕は、幅 80cm・奥行 32cm・高さ 19cm である。中央に頭をのせるため、円形に彫りくぼめているが、その背後に衝立状の突出部があり、その上縁に 4 カ所の切込が見られる。

4 装飾

装飾は、棺身・棺蓋の内面及び石枕で確認されている。棺身の装飾は両小口に描かれ、西側は長方形の区画の中に円文 3 個が浮き彫りされ、両端の円文は上部から吊り下げられているかのように表現されている。なお、午橋生のスケッチでは、長方形の区画はさらに 3 つに区画されその中に円文が描かれているが、既に京大報告でもその区画は描かれておらず、確認できなくなっている。東側小口は、北端に石材を組み合わせるための溝が掘られ、その右に長方形区画の中に円文が浮彫され、更にその右にも区画の痕跡が見える。京大報告の写真では円文の下に刀子が描かれている (図 75 中段左が該当するが 90 度時計回りに回転してしまっている) が、現在は確認が困難である。棺蓋は、内面頂部を中心に長方形の区画が彫られている。西小口側は、左右に 2 つの区画があり、区画内に各 1 個の円文が浮彫されていたが、現在はその小口部分の石材が確認出来ない状態である。石枕は僅かに直線と弧線が認められ、直弧文系の装飾であった可能性が高いとされている (高木恭 1983)。

5 出土遺物

京大報告によると鉄環 1 個が出土しているようであるが、遺物の所在等は不明である。

6 保存施設・修復歴等

設置年代は不明であるが、簡易な覆屋が設置されている。また献花のための花立が設けられている。

7 図面等保管場所

1967年作成の墳丘測量図青焼は、熊本県文化財資料室で保管しているが、原図の所在は不明。また1982年作成の石棺・石枕実測図は、宇土市教育委員会で保管。

8 その他（年代等）

築造年代は、石棺形態より前方後円墳集成6期（陶邑編年TK73）頃と考えられ、南肥後型石棺で装飾を施す初期の例とされる。

（ 古城史雄 ）

参考文献

- 午橋生 1899「肥後雑件」(二)『考古学会雑誌』第2巻第12号
 梅原末治 1919「肥後国八代郡吉野村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』3：pp.42－45
 木崎康弘 2017「福原岱郎の報告～肥後雑件(二)～『肥後と球磨 その原史世界に魅せられし人々～肥後と球磨の考古学史一』：pp.150－151
 高木恭二 1983「肥後南部の石棺資料(三)」『宇土市史研究』第4号：pp.37－47
 三島格 1983「明治中期の熊本県考古学」『肥後考古』第4号：pp.1－30
 三島格 1984「竜北高塚古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集：pp.154－158

図出典

図73～76：三島格1984より

図77：熊本県博物館ネットワークセンター提供（白石巖1971年11月18日撮影）

図78：熊本県立装飾古墳館提供（牛島茂・杉本和樹2000年11月27日撮影）

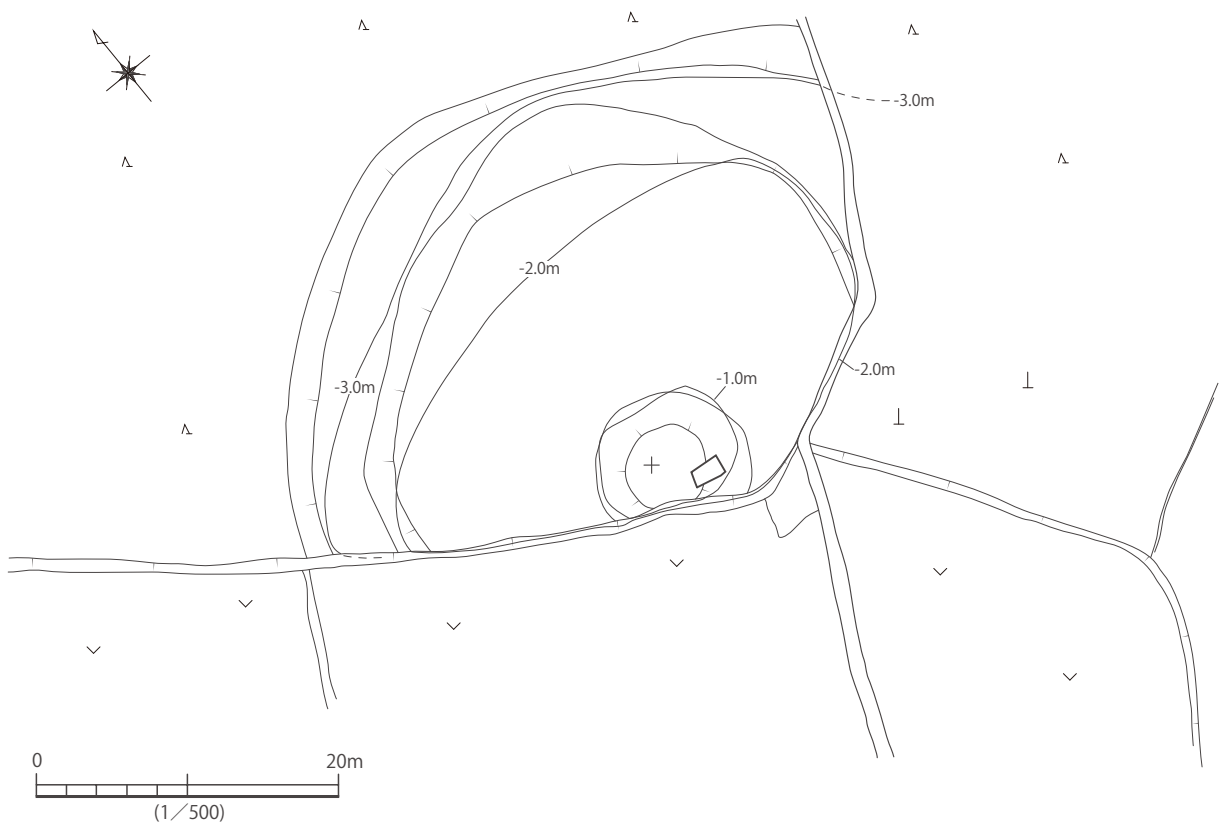


図73 竜北高塚古墳墳丘測量図

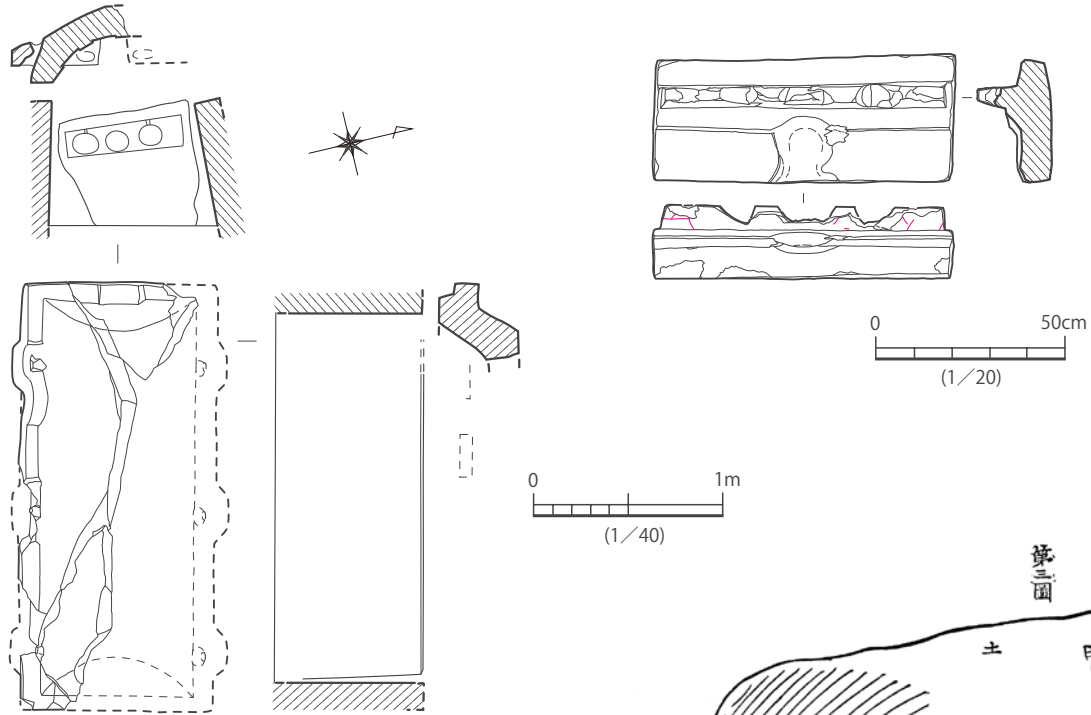


図 74 竜北高塚古墳石棺及び石枕実測図

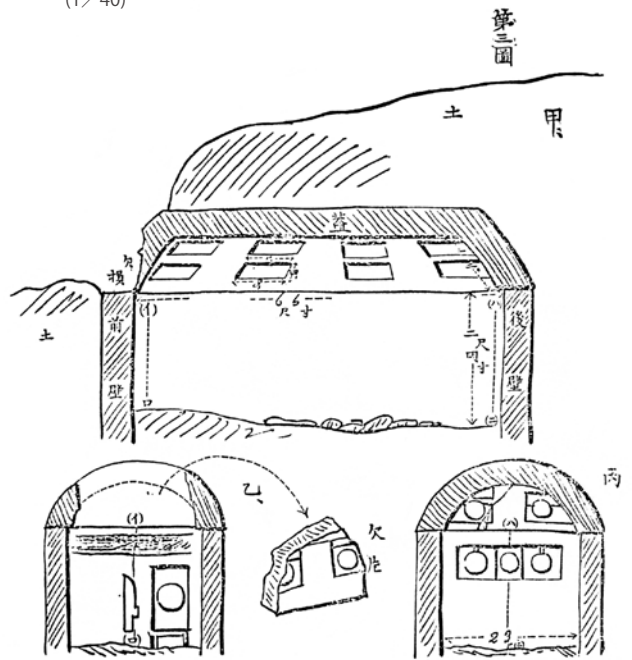


図 75 午橋生（福原岱郎）の竜北高塚古墳石棺実測図

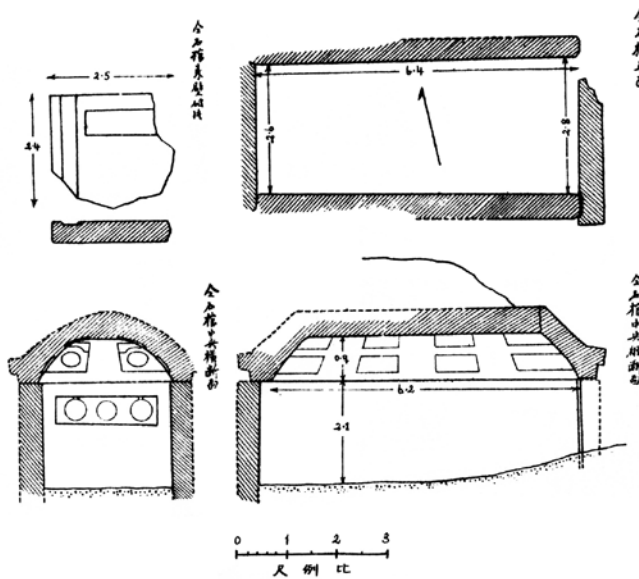


図 76 京大報告（梅原 1919）の竜北高塚古墳石棺実測図



图 77 竜北高塚古墳西小口

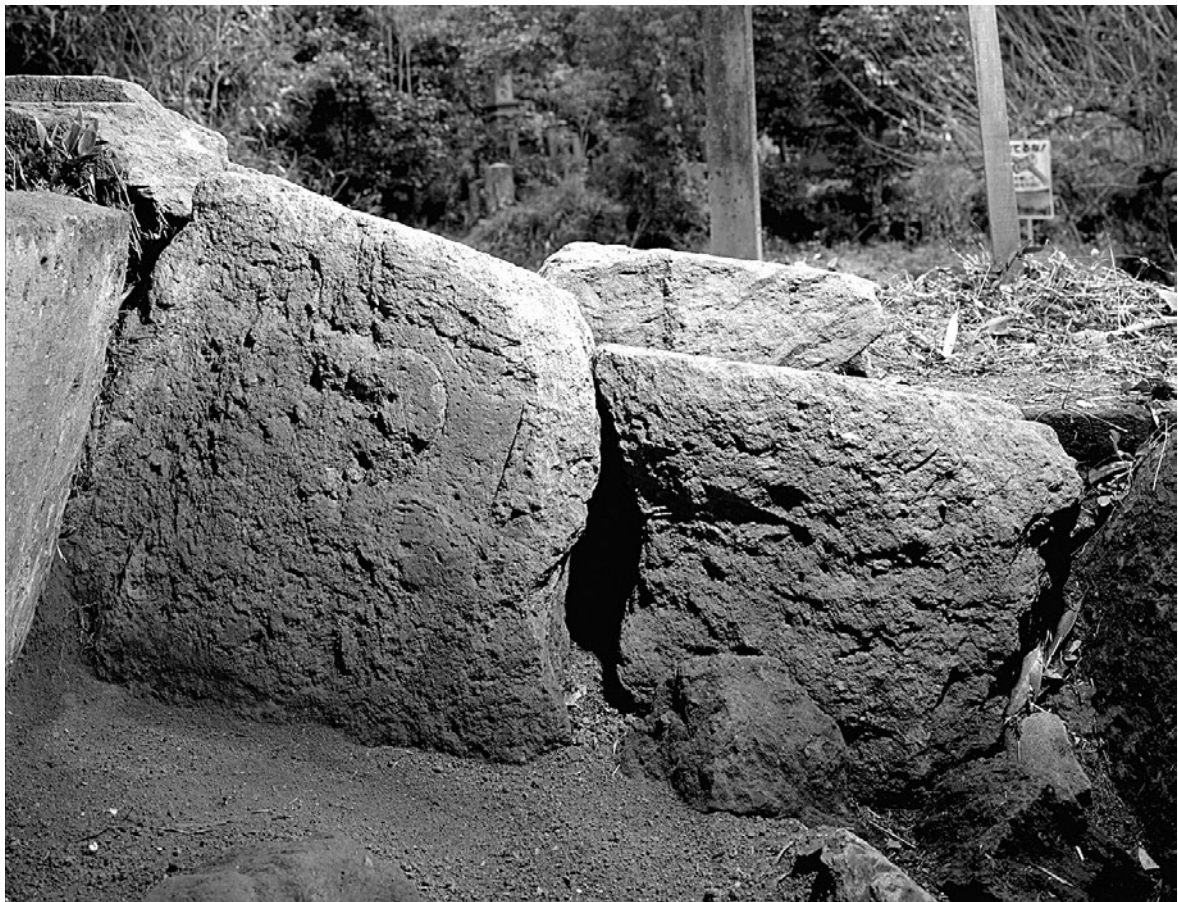


图 78 竜北高塚古墳東小口

22 おおのむら 大野村石棺 —八代郡氷川町大野—

市町村コード (43468) 遺跡番号 (旧竜北町: 152)

1 発見の経緯及び調査の経緯

明治 12 年、日本考古学の草分けといえる E・S・モースが九州旅行を行い、その紀行文『日本その日その日』において、スケッチ入りで紹介している (第 79 図)。

2 位置

石棺は大野村の貝塚付近にあったとされ、この貝塚は氷川町の大野貝塚と考えられている。しかしどの石棺を指すのかは不明である。

3 内部施設

モースの記述やスケッチから見て、舟形石棺の蓋と考えられる。断面はかまぼこ形を成す。頂部には明確な平坦面を作らないが、斜面の長辺に、2 個所ずつ環状縄掛突起を造りだしている。突起は半円形で、穿孔は方形に近い。

4 装飾

蓋の内面に亀甲状の長方形区画が彫り込まれており、モースは「・・・内側は小間に刻んである・・・」と表現している。

5 出土遺物

不明

6 古墳の保存状況

不明

7 図面等保管場所

不明

8 その他 (年代等)

石棺の形態より、5 世紀前半～中葉と考えられる。『八代郡誌』に、大野貝塚に長さ 6 尺以上の舟形石棺 (石枕あり) が出土したとされており、大野村石棺の身 (大野貝塚付近の石棺) とも考えられる。

(今田治代)

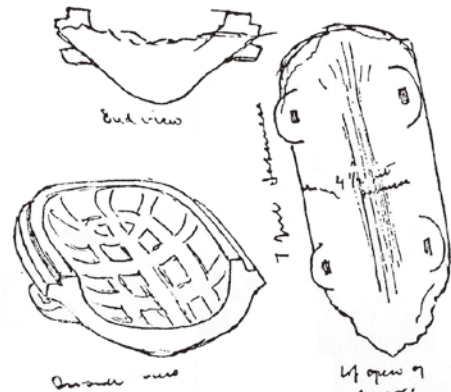


図 79 大野村石棺スケッチ
(E・S・モース 1917 年より)

参考文献

- E・S・モース著 石川欣一訳 1971『日本その日その日』3 東洋文庫
 江上敏勝 1978「エドワード・S・モースと八代」『夜豆志呂』49 八代史談会
 高木恭二 1979「環状縄掛突起を有する石棺について (1)」『熊本史学』53 熊本史学会
 高木恭二 1980「環状縄掛突起を有する石棺について (2)」『熊本史学』54 熊本史学会
 高木恭二 1983「肥後南部の石棺資料 (3)」『宇土市史研究』第 4 号 宇土市史研究会
 高木恭二 1984「大野村石棺」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会:
 p.153

図出典

図 79: 高木恭二 1984 より

23 ^{だいおうやま}大王山古墳第3号 (昭和48年6月7日県史跡) 一八代郡氷川町早尾一

市町村コード(43465) 遺跡番号(旧宮原町:005) 北緯32度32分55秒 東経130度40分51秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

大王山古墳群(第1号、第2号、第3号)の1基である。『肥後國誌』によると、貞亨頃(1684～1687)の発掘といわれている。昭和33年、熊本女子大学助教授乙益重隆(当時)らによって調査が行われた。

2 位置及び墳形・規模

竜峰山(標高517.2m)の西麓、旧国道3号に臨む早尾地区集落の裏山、標高38.2mの高さに位置する。直径約30mの円墳である。

3 内部施設

割石小口積みの竪穴式石室で、長さ3.6m、幅1.15mである。石室内いっばいに阿蘇石の舟形石棺を納め、内部は赤く彩色されている。割石は砂岩の板状石が使用され、棺身の下は粘土が敷かれている。棺身は長さ3.04m、幅約90cmで、作り付けの石枕を彫り出している。長辺に舟べり状の平縁がつき、断面はやや扁平な丸底である。棺蓋は現存長さ1.8m、幅1.05m、高さ37cmで、短辺に縄掛突起を彫り出している。長辺に約8cmの平縁があり、各辺に2か所ずつ、計4か所に矩形の穿孔が施される。

4 装飾

蓋の頂部は幅約18cmの平坦面をなし、斜面に区画を表現する。区画は34cm×70cmの長方形で、浅く掘りくぼめたもので、両面に4か所ずつあったと思われる。

5 出土遺物

石室床面の足側から、刀子(現存長さ6cm、幅1.3cm)1点、頭側から直刀1片が出土している。

6 古墳の保存状況

昭和50年、石積みの復元を行い、石室保存のため保護施設を設置する。

7 図面等保管場所

石棺実測図は人吉市教育委員会(乙益文庫)に保管。

8 その他(年代等)

築造年代は、石棺の形態より4世紀代と考えられる。やや離れた東側に建武中興の碑があり、この古墳の天井石を転用したとの言い伝えがある。

(今田治代)

参考文献

乙益重隆 1958「熊本県八代郡大王山古墳」『日本考古学年報11』昭和33年度 日本考古学協会

乙益重隆 1984「大王山古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.159 - 160

高木恭二 1983「肥後南部の石棺資料(3)」『宇土市史研究』第4号 宇土市史研究会

宮原町公民館 1959『宮原町郷土誌』

山下利夫 1958「大王山古墳について(第3号墳)」宮原町公民館

図出典

図80：乙益1984より

図81：人吉市教育委員会提供(乙益重隆撮影)

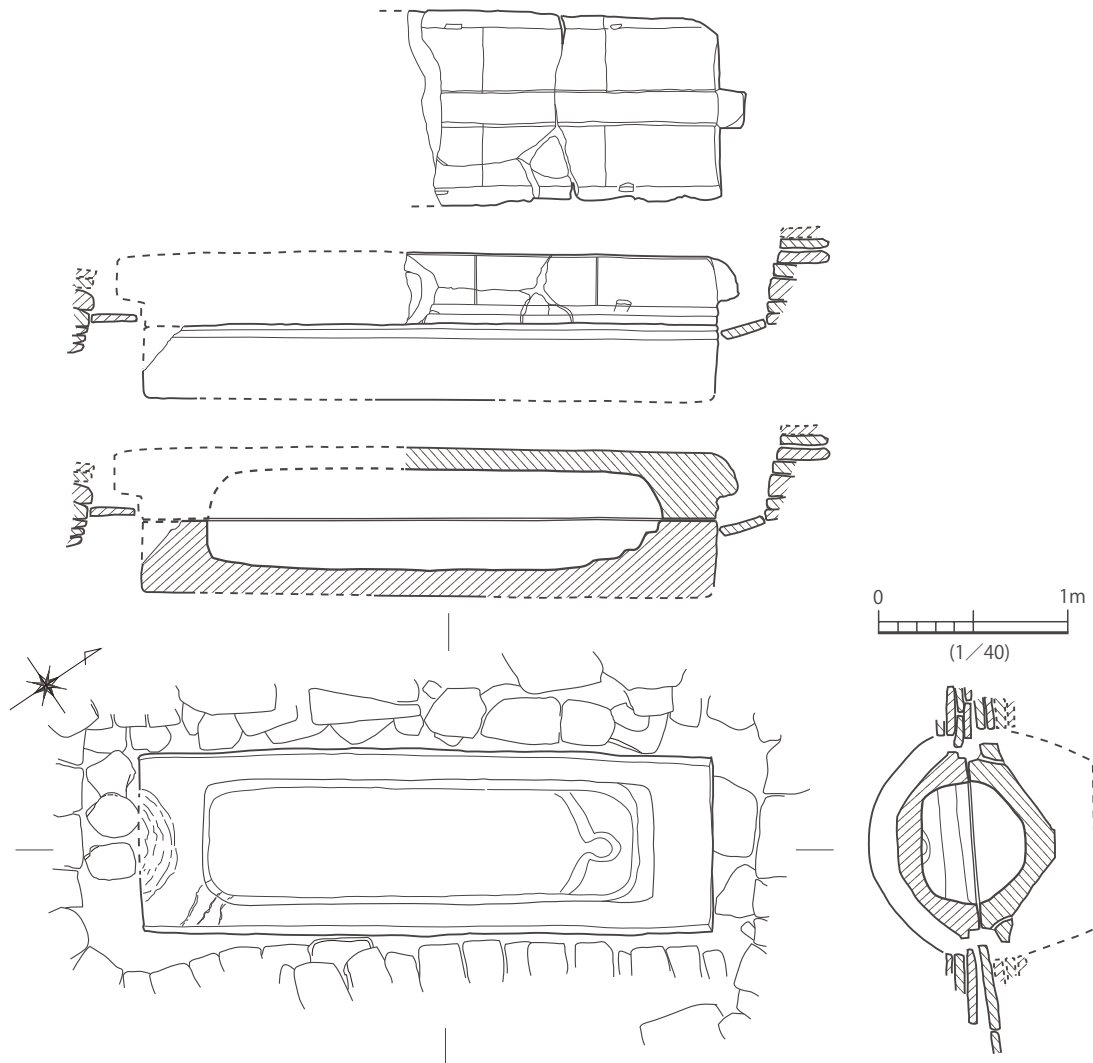


图 80 大王山古墳第 3 号石室実測図



图 81 調査時の大王山古墳第 3 号石室

24 門前2号古墳 もんぜん 一八代市岡町大字谷川字門前1250-3-

市町村コード(43202) 遺跡番号(026) 北緯32度31分49秒 東経130度39分59秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1891年(明治24年)に編纂された「熊本県公文書類纂 第一類 古墳発現記録」の原本は火災で焼失したものの、その精緻な写本が熊本県立図書館に残されている。それによると1884年(明治17年)2月27日に八代郡岡谷川村の荒蕪地において住民が芋作りをするため掘ったところ石蓋を発見し、それを木杵で動かし長さ1間・幅2尺5寸位の石櫃の中から鏡3面と剣・刀・歯数本・骨等が出土した。そのことが郡役所から県、さらに宮内省へと報告された。これが門前1号古墳である。1892年(明治25年)若林勝邦はこの県への報告文をもとに東京人類学雑誌に門前古墳の紹介を行なっている^(註1)。

次に1917年(大正6年)年3月頃に住民が、3面の鏡を出土した塚(1号古墳)の北に隣接する場所で開墾中に偶然石室を掘り当て、彫刻のある石材が出土した。その後、熊本県の下林繁夫の報告によって装飾古墳として知られるようになり、1919年(大正8年)の京大報告に載ることとなった。これが門前2号古墳である。

京大報告に紹介された装飾ある石材は1点のみで、のちに谷川公民館の前を流れる谷川の護岸として転用され、さらにその後に公民館敷地に移設された。しかし地元によると同様の板状の石材は他にもう1個あり、一時期谷川の川底に敷かれていたが、いつしか所在不明となっていた。

2015(平成27年)7月16日、谷川公民館駐車場での浄化槽設置工事のため重機で掘削作業中、客土から大型石材1点が出土した。筆者が現地確認したところ既存石材と同規模の板状の砂岩で円文も確認され、住人の話からも長らく所在不明の石材であることが判明した。河川工事の際に隣接する公民館の敷地に埋め込まれたものと見られる。以下、既知の石材1に対し、この再発見のものを石材2として紹介する。

2 位置及び墳形・規模

八代平野を見下ろす竜峯山の西麓に八代市岡町があり、九州縦貫自動車道に程近い標高10～11mの集落内に鬼の岩屋式と呼ばれる巨石積の清水古墳や谷川古墳群が点在する中、谷川公民館の裏手に門前2号古墳がある。京大報告には、削平を受けているが本来丘陵に築かれた円墳で、現状の長径約50尺(約15m)、高さ6尺(1.8m)であると記されている。鏡等が出土した1号古墳の北東約12～13mの位置に2号古墳の円墳が所在しているが、1979年(昭和54年)2～3月の熊本県教育委員会の調査では、2号古墳から1号古墳にかけてわずかではあるが他の部分より高くなっていることからこの両古墳は同一のもので、現状で全長38m、前方部幅13m・長さ18m、後円部径20m・高さ2.3mの規模の北東から南西方向に伸びる前方後円墳であるとされている。

3 石室

2号古墳の内部施設はこれまで未調査であるため正確な位置や状況は不明である。京大報告では、封土の中央にくぼんだ穴がありこれが開墾に際し石材が発見された場所で、砂岩質の扁平な石材が累々と見られるとともに、穴の西端と東隅には石材を持ち送りで積み重ねた部分があり、石室の側壁であることを容易に認められると記載されている。これらの記述と現在も墳丘周辺においても散見できる砂岩の割石及び出土した2個の石材の特徴から、門前2号古墳は田川内1号古墳と同様の石障を有する石室で、まだ数枚の板状石材が墳丘内に残っているものとみられる。

2号古墳の2点の石材は石障石材であり、石材1は長さ253cm・高さ110cm・厚さ17cm。左右と下部の3方に幅5～8cm・深さ3cmの断面方形の浅い溝が彫り込まれている。溝に囲まれた内法は幅211cm・高さ80cmである(図83)。

石材2は長さ248cm・高さ108cm・厚さ16cm。左右と下部の3方に幅6～7cm・深さ2～3cmの断面方形の浅い溝が彫り込まれている。溝に囲まれた内法は幅205cm・高さ81cmで左上隅に幅51cm・深さ30cmにわたって削り込みが施されている。田川内1号古墳右障石・長迫古墳石材より削り込みが深い(図85石材2)。この2石は法量的には全く同じ大きさといえる。例外はあるものの一般的な石障石材の組合は、前障と奥障が側石に挟み込まれる形であることから、この石材は左右の側石である可能性が高い。屍床に敷石のある石障系石室は、田川内1号古墳の奥屍床や宇城市重盛山古墳で見られるが類例は少なく、敷石を石障と組み合わせるために溝を彫った例は現在まで他に知られていない。

4 装飾

石材1 浮き彫りに近い陰刻の二重円文が3個並んでいる。向って左端の円文と中央の円文の間は59cm、中央と右端の円文との間は92cmで、3個の円文は等間隔でない。また左端と中央の円文は1本の線刻で結ばれている。表面に赤く塗られていた痕跡をとどめる。

石材2 石材表面の剥離のため装飾の確認は難しいが、同心円文1個の線刻が確認できる。円の中心が石材上端から28cm、左端から55cmの場所に内円直径が12cm、外円が26cmの同心円文である。石材右側にも円文とみられる微かな痕跡がみられるが形状や直径は不明である。

5 出土遺物

明治17年の1号古墳発見時には鏡3面・曲玉1本・管玉16本・朱・光沢ある小石5個・尖弁形の剣3本・刀2本が出土している。鏡は内行花文鏡2面(直径11.8cm・10.2cm)と獣首鏡1面(直径11.6cm)である。曲玉はガラス製で長さ2.0cm、管玉は碧玉製で長さ2.4～3.4cm。鏡・曲玉・管玉・朱は明治19年に県を通じて宮内省に献納され、現在宮内庁書陵部で所蔵されている。

大正6年の京大調査に際しては2、3の赤焼土器が採集されており、その中には薄灰色の素焼の鉢で、高さ2寸3分(約7cm)、口径4寸6分(約14cm)の三脚付きのものがあるとされている。赤焼土器とは土師器であろう。

1989年(平成元年)8月20日に2号古墳西側斜面に隣接する公園の整地作業の際に須恵器と土師器の小片が採集された。このうち17点を実測している(図82・84・86)。1～10は土師器で、かろうじて反転復元ができる程の小片である。1は壺か甕、2・3は甕の口縁部である。4は甕の5は甕の肩部にあたる。6は甕の底部片で内面にヘラケズリ痕跡が、外面はハケメ調整が認められる。7は坏、8は脚台付になる可能性がある。9・10は高坏片である。小片で時期を特定できるものはない。11も土師質の土器片で、幅3cm程の突帯を巡らす。タタキの痕跡も僅かに認められるがハケメにより消されている。まず突帯を貼りつける前に斜め方向のハケメ調整を行い、その後突帯を貼りつけている。その後縦方向のハケメ調整を施す。また突帯には4から5条の横線が施される。内面はハケメ調整である。南九州の成川系土器の可能性も考えたが同じものはなく、円筒埴輪の可能性も考えられるが、他に類似した土器片は出土していない。12～17は須恵器で、12～15は器台である。12は8個体からなり接合はできないが色調や胎土から同一個体と判断した。坏部は全容が把握できるが、脚部は底部等を欠損する。坏部は外に向って緩やかに立ち上がり、口縁部付近で大きく開く。脚部は裾が開く形状になる。坏部・脚部ともに3条の突帯が巡らされ、坏部は4段に区画され、脚部も4段に区画されると想定される。坏部の区画のうち2・3段目には上向きの鋸歯文、4段目にはコンパス文が施文されている。鋸歯文は針状の細い工具を用い、まず外枠線を描きその後内側に4から5条の線を描いている。いずれも外枠線の交点に向い下から上へ施文する。コンパス文は細い棒状工具を用い2重の同心円文を上下交互に施文しており、コンパスの軸痕がはっきりと残る。現存する脚部の区画にはそれぞれ波状文が施文される。坏部に比べると線が細く弱い。それぞれに長方形の透かし孔が穿孔されている。13は、器台の脚部片で2条の突帯を巡らしその上下に方形透かし孔を穿孔している。14は、2

個体からなり接合できないが色調・胎土等から同一個体と判断した。器台の脚端部で2条の突帯を巡らす。13と同一個体かもしれない。15は胴部片で器形は不明である。2条の突帯を巡らし2段の波状文を施文する。16・17は小片で器形・天地・傾きも不明だが、器壁が薄く陶質土器の可能性もあるため掲載した。外面はナデが施されているが、格子目タタキの痕跡が残る。内面はナデにより消されている。

6 古墳の保存状況

谷川公民館の裏手、一段高い場所の民家敷地に墳丘が残る。1号古墳及び2号古墳ともに長らく蜜柑園と屋敷庭園の一部として利用されている。現在石材2石はともに公民館の附属施設内に保管されている。

7 図面等保管場所

石材1の実測図及び遺物実測図は八代市で保管。図82の墳丘測量図及び石材1の拓本は文化財資料室で保管。

8 その他（年代等）

石障高が高いことや、円文の径が大きいこと、また類似するコンパス文の須恵器が出土した松橋大塚古墳では、埴輪の年代から前方後円墳集成7期頃を想定していることを参考にすれば、築造年代はそれほど古くはなく前方後円墳集成7期頃と考えられる。球磨川下流右岸では現在唯一の石障系装飾古墳である。

なお、門前古墳の南側に近接する谷川3号墳は未調査ながら石材の形状が極めて門前に類似しており、今後の調査が待たれる。

（吉永 明）

註

- 1) 1900年（明治33年）6月4日に岡谷川村を訪れた八木契三郎は村内の古墳20基程を見ているが、門前古墳に関する記述は無い。
- 2) 1885年（明治18年）12月28日付けで宮内大臣から県令へ取調のため遺物を差出すよう通知があり、翌19年7月13日に発見者から県令宛に目録を添えて献納願が提出され、7月31日付けで宮内省へ報告された。その後、献納に対して同省から発見者へ金八円が下賜されている。

参考文献

- 神川めぐみ 2015「松橋大塚古墳」『宇城市文化財調査報告書』第5集 宇城市教育委員会
 熊本県立図書館 1891「古墳資料 飽託 宇土 八代 鹿本」『肥後郷土誌資料 第壹編』
 若林勝邦 1892「肥後ノ古墳ノ一二（二）肥後国八代郡岡谷川村字門前ノ古墳」『東京人類学雑誌』第7巻 第73号
 八木契三郎 1900「九州地方遺跡調査報告」『東京人類学雑誌』第15巻 第173号
 京都帝国大学 1919「九州に於ける装飾ある古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3冊：pp.46 - 48
 図版第17・20
 竜峰村史跡研究会 1961『竜峰村史』pp.14 - 15
 熊本県教育委員会 1980『清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓』熊本県文化財調査報告第41集：pp.29 - 40
 佐藤伸二 1984「門前2号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.161 - 162
 澤田宗順 1993『たたかいと祈りと』八代市立博物館未来の森ミュージアム

図出典

- 図82：1971年2月作成墳丘測量図（井上時男・小原由昭・竹本由美子作成）をトレース
 図83：1991年吉永明作成石材実測図をトレース
 図84：1989年吉永明作成遺物実測図をトレース
 図85：石材1 熊本県立装飾古墳館提供（牛島茂・杉本和樹2000年11月28日撮影）
 石材2 発見時頃のメモ写真（2015年7月22日撮影）
 図86：熊本県文化財資料室所蔵（中川・島浦・古城 2019年1月30日撮影）



図 82 門前1号古墳・2号古墳地形測量図

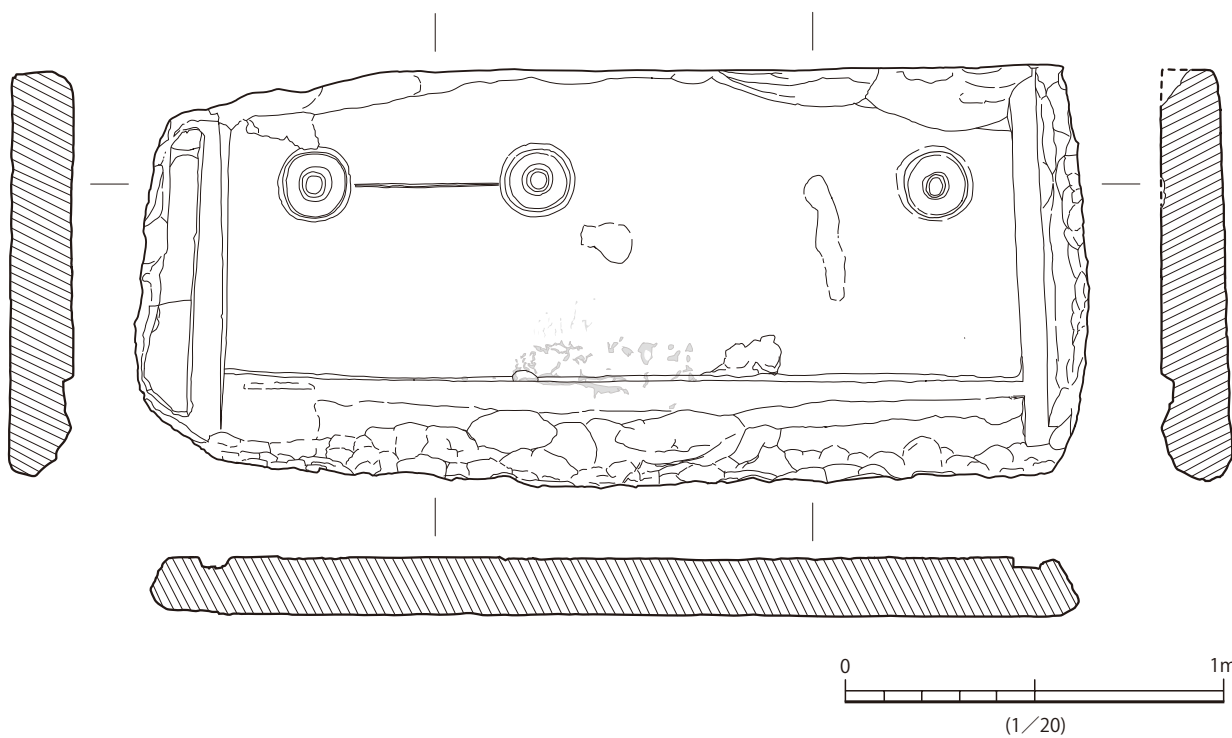


図 83 門前2号古墳石材1実測図

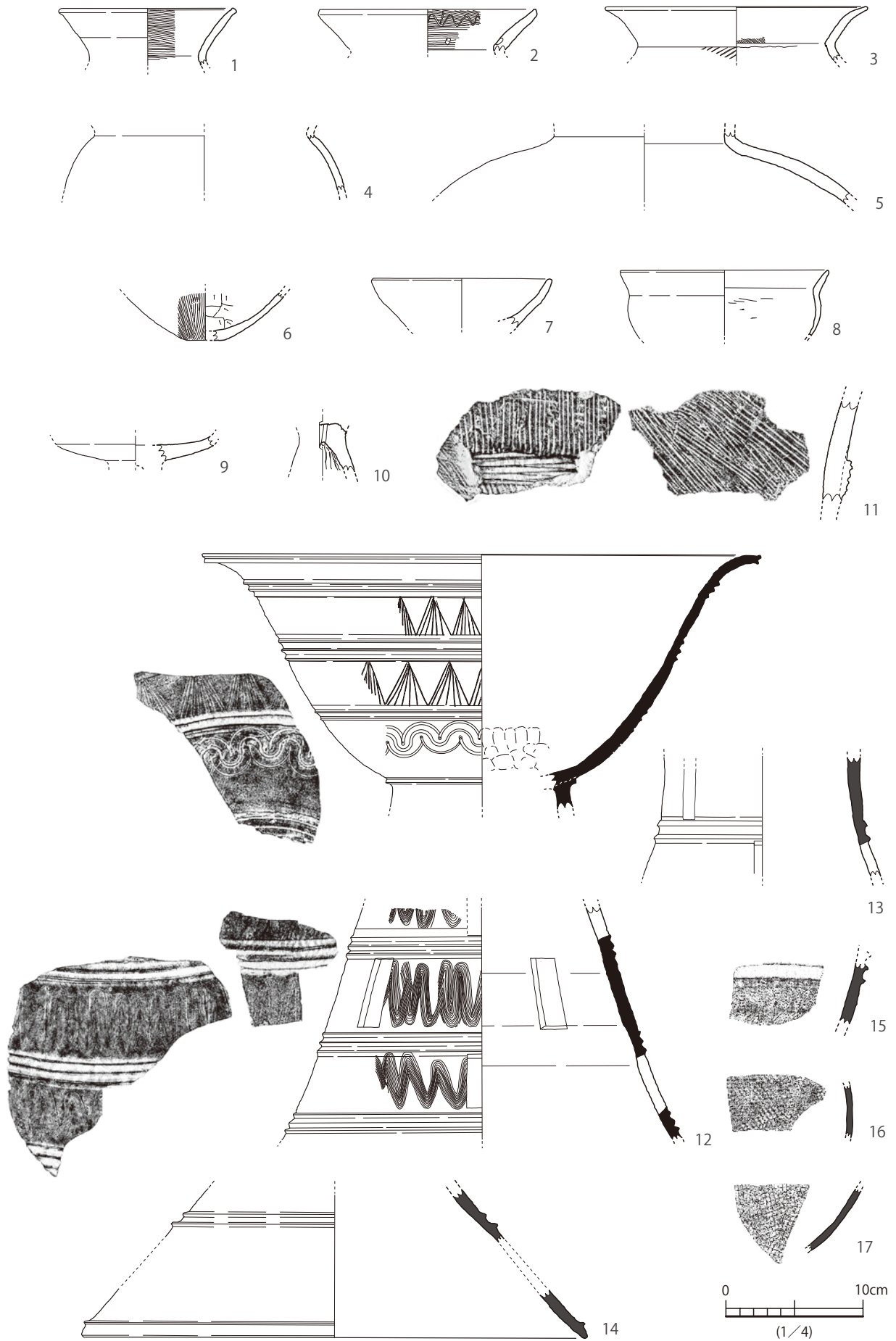


图 84 門前古墳出土遺物実測図



図 85 門前2号古墳石材 (左：石材1、右：石材2)



図 86 門前古墳出土遺物

25 小鼠蔵古墳群 (昭和 38 年 4 月 20 日八代市史跡) —八代市鼠蔵町小鼠蔵—

市町村コード (43202) 遺跡番号 (121) 北緯 32 度 28 分 57 秒 東経 130 度 34 分 21 秒

小鼠蔵古墳群の位置

球磨川河口に形成された三角州の南端に二つの丘陵があり、大きな方を大鼠蔵、小さい方を小鼠蔵と呼ばれて、本来小島であったものが 1847 年 (弘化 4 年) の干拓により陸地につながったものである。

小鼠蔵 (標高 35.5m) の山頂に小鼠蔵 1 号古墳 (円墳) があり、1 号古墳の西方約 40 m の尾根の突端部に 3 号古墳 (箱式石棺) が位置する。また 1 号古墳の南西部に 2 号古墳 (箱式石棺) が、北東麓の崖下に 5 号古墳 (箱式石棺) が立地し、更に東に 4 号古墳 (箱式石棺) があった。現在は 1 号・2 号・3 号が残るだけとなっており、4 号・5 号は消滅している。

① 小鼠蔵 1 号古墳

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は不明であるが、矢野寛が 1909 年 (明治 42 年) に行った葦北郡の古墳調査の成果で、小鼠蔵島の古墳の記述が見え、これが最も古い記述である (木崎 2017)。1983 年に池田栄史達により石室の実測図が作成されている。

2 墳形・規模

墳丘の測量や調査は行われていないが、直径約 8m、高さ約 2m 程度と推測されている。

3 内部施設 (石室)

小鼠蔵 1 号古墳の石室は割石を持送り式に平積にした石室で、当初竪穴式石室とされているが、横穴式石室ではないかとの見解もある (高木 1994)。長さ 2.10m、幅 1.80m、天井までの高さ 1.80m を測る。周壁に沿って高さ 53cm、厚さ 8cm を有する砂岩の切石を石障として立てめぐらし、その内部には高さ 40cm の切石 2 枚で仕切り、3 つの区画が設けられる。中央の区画は箱式石棺そのままにつくり、蓋石 1 枚が残る。内法の長さ 1.83m、幅 55cm を有し、石障に沿った西側には内壁を設けている。外側の区画は共に長さ 195cm、幅 50cm の同じ規格につくられて蓋石はない。これらの両区画には遺体を安置するだけの余地は充分あるが、屍床に供したかどうか明らかでない。

4 装飾

中央区画の西側内壁に直径約 7cm の円文が確認できる。

5 出土遺物

不明

6 古墳の保存状況

保存施設等はない。



図 87 小鼠蔵古墳群古墳分布図

7 図面等保管場所

実測図は池田栄史氏保管。

8 その他（年代等）

前方後円墳集成5期頃と考えられる。

（ 山内淳司 ）

参考文献

池田栄史 1986「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第60号：pp.93－112

乙益重隆 1984「64. 小鼠蔵1号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.169－170

木崎康弘 2017『肥後と球磨 その原史
世界に魅せられし人々—肥後と球磨
の考古学史—』人吉中央出版社：
pp.345-348

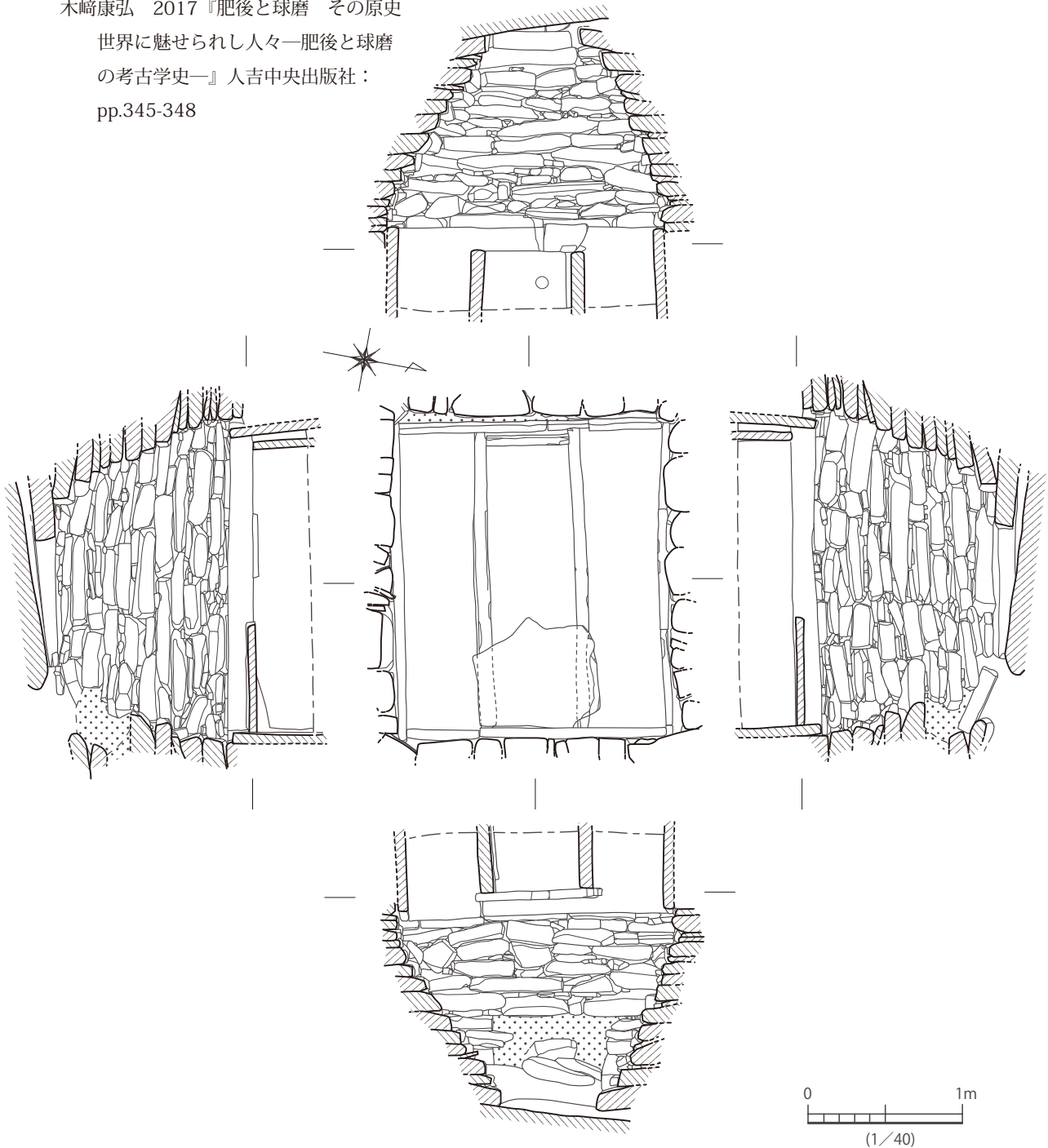


図 88 小鼠蔵1号古墳石室実測図

高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp.109 - 132

図出典

図 87：八代市都市計画基本図を利用

図 88：乙益 1984 より新たにトレース

図 89：木村龍生作成（2019年5月撮影），
左下写真 装飾古墳館提供（牛島茂・
杉本和樹 2000年11月29日撮影）



図 89 小鼠蔵 1 号古墳石室三次元モデル及び東壁面

② 小鼠蔵3号古墳

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は不明であり、1号古墳と同様矢野により紹介されている。同じく1983年に池田栄史達により石棺の実測図が作成されている。

2 墳形・規模

調査は実施されていないが、墳丘を構築せず、主体部のみを尾根上に埋設したと思われる。

3 内部施設（石室）

石棺は主軸をほぼ東西に向けた組合式箱式石棺で、四壁を厚さ10cm前後の砂岩製板状切石各1枚で構築している。両長側壁は各々中程で2つに折れており、両長側壁石材の両端部には浅い溝を切り、短側壁を挟み込むように規格され、底石はない。石棺内側の法量は奥行き約180cm、幅は東短壁側で65cm、西短壁側で63cm、深さ50cmを測る。蓋石は1枚のみが南にずれた状態で残存しており、長さ約90cm、幅約105cm、厚さ10～15cmを測る。蓋石の裏面には棺身の石材と組み合わせるための深さ1～2cm、幅8～10cmの溝が「H」型に彫り込まれている。蓋石の表面にも裏面の削り込みとほぼ同じ位置に加工の痕跡が残されている。実測図を作成した池田は、表面の剥落が激しく、加工も途中で止められていることから、本来削り込みを施す予定でありながら加工の段階で表面と裏面を入れ替えたものとみている（池田1984）。

4 装飾

3号古墳は北長側壁に3個、南長側壁に1個の円文が線刻されている。石棺内面全体に赤色顔料が塗付されていた痕跡があるが、円文に特別な彩色を施していたものかどうかは不明である。北長側壁の円文3個のうち2個は棺材のほぼ中央部に並彫されており、直径は9cmを測る。他の1個は東の隅にあり、直径6.5cmである。南長側壁の円文はやはり棺材のほぼ中央部にあり、直径9cmであり、北長側壁東隅の円文は楕円形を呈し、他の3個に比べて直径が小さい。

5 出土遺物

3号古墳については、不明。5号箱式石棺から小形丸底壺1点と、人骨が出土したと言われている。

6 古墳の保存状況

保存施設等はない。

7 図面等保管場所

石棺実測図は池田栄史氏保管。

8 その他（年代等）

実測者の池田は、5号石棺から出土した小型丸底壺を参考に、3号石棺もそれと前後する時期とし、5世紀代とされている。

（山内淳司）

参考文献

- 池田栄史 1984「65. 小鼠蔵3号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会 :pp.170 - 171
池田栄史 1986「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第60号 : pp.93 - 112



図90 小鼠蔵3号古墳全景

図出典

図 90：熊本県立装飾古墳館提供
 (牛島茂・杉本和樹 2000 年
 11 月 28 日撮影)

図 91：池田栄史 1984 より新たにトレース

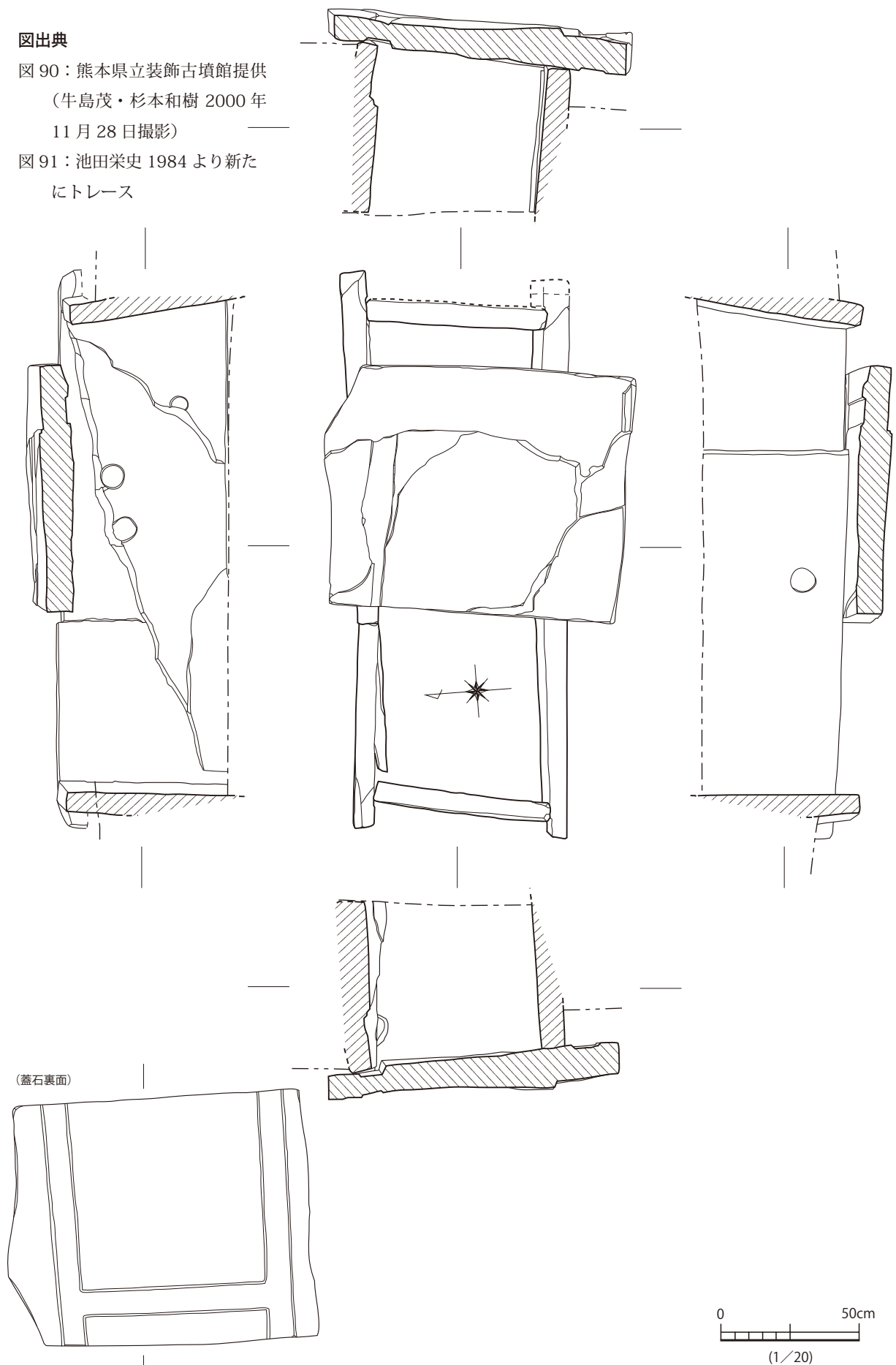


図 91 小鼠蔵 3 号古墳実測図

26 おおそぞう 大鼠蔵古墳群 (昭和38年1月22日県史跡) —八代市鼠蔵町大鼠蔵—

市町村コード (43202) 遺跡番号 (128) 北緯 32 度 28 分 39 秒 東経 130 度 34 分 14 秒

大鼠蔵古墳群の位置

球磨川河口に形成された三角州の南端に2つの丘陵があり、大きな方が大鼠蔵、小さい方が小鼠蔵と呼ばれる。本来小島であったものが1847年(弘化4年)の干拓により陸地につながったものである。新しい測量図では、大鼠蔵山には2つの頂部があり、標高は北側の頂部で46.3m、南側は42.1mである。北側の頂部には、竪穴石郭を持つ楠木山古墳が位置する。尾張宮古墳は、南側の頂部附近に位置するが、南側頂部の最高所ではなく、最高所には別の古墳が存在する可能性がある。大鼠蔵山・小鼠蔵古墳の分布図(昭和42年当時)の青焼きが乙益文庫に所蔵されている。原図は江上敏勝が作成したものであるが、尾張宮古墳の北に新しい古墳が追記されている。この他、東麓に6基、東北麓に3基、西北麓に3基の箱式石棺が見つかっており、乙益・江上の報告では西北麓に1基、東南麓に2基の横穴式石室を有する古墳があったとされるが、現在は確認することができない。また、現在、尾張宮古墳の南の尾根に箱式石棺の蓋らしき石材が露出しているが、身はないようである。島の各所に多数の古墳が築かれ、尾張宮古墳、東麓1号古墳、東北麓2号古墳、西北麓2号古墳で装飾が確認されている。

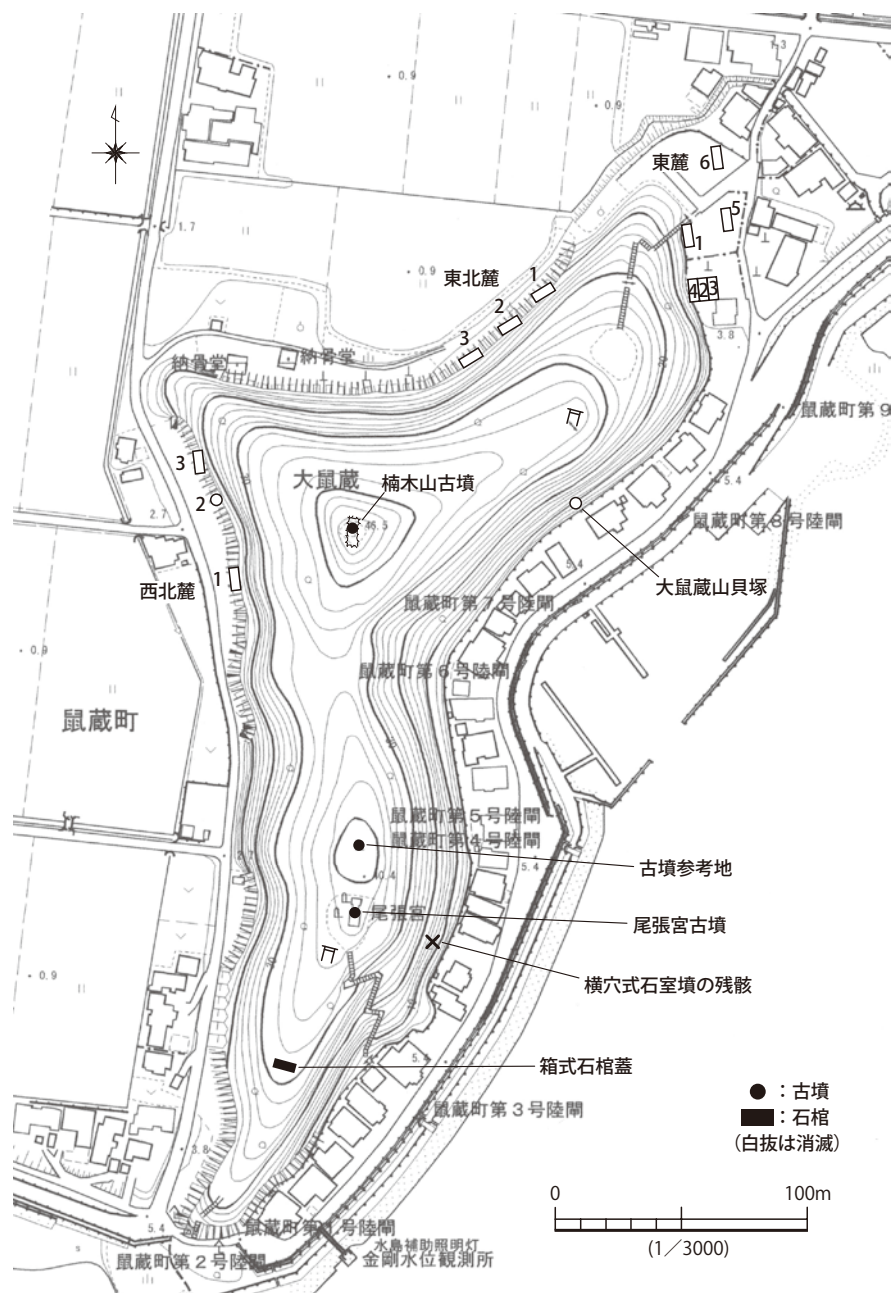


図92 大鼠蔵古墳群古墳分布図

① おおそぞうおわりのみや 大鼠蔵尾張宮古墳

1 発見の経緯及び調査の経緯

明治の初め、地元住民による開墾作業中に石室が発見され、発見者の妻に尾張大納言を祀れというお告げがあったことから、古墳の上に小堂を建て「尾張大明神」と名付け、崇拝したという。大正6年に京都帝国大学文学部考古学研究室により調査が行われ、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第1冊の中で、「八代郡金剛村大鼠蔵古墳」として石室内部の状況が報告されている。1950年（昭和25年）、蓑田田鶴男らによる調査が行われた。蓑田はその成果を1959年（昭和34年）刊行の『金剛の歴史』にまとめ、その中で「大鼠蔵尾張宮古墳」の名称を用いた。また1974年（昭和49年）には装飾古墳総合調査の一環として石室の実測が熊本県教育庁文化課により実施されている。

2 墳形・規模

墳丘の正式な調査は行われていないが、自然地形を利用した円墳と考えられているが、墳丘規模は不明である。

3 内部施設

南に開口する単室の横穴式石室である。使用石材は砂岩であると考えられる。全面に赤色顔料が塗布されている。

羨道部は、全長71cm・幅53cm・高さ101cmである。板石により閉塞された状態で、床面には板石を2枚敷き、側壁は板石を小口積みになっている。羨道部の床面は玄室床面より約60cm高くなっている。

玄室の平面形は、長さ約222cm・幅232cmの隅丸方形である。現床面から天井までの高さは205cmである。大小の板石を小口積みにして、アーチ状の天井部を構築し、上部に大型の天井石を置いた横穴式石室である。石室内には石障を設ける。石障は石室壁面からわずかに間隔をとって配置され、板状に加工した厚さ5～8cmの板石各一枚で構築される。石障の内法は長さ180cm・玄門側の幅180cm・奥壁側の幅190cm・現床面からの高さ約40cmを測る。四周の石障上端面には浅いU字形の削り込みが施されるが、玄門側の削り込みは一段で幅45cmと狭いのにに対し、他の3枚では二段で、幅約130cm、深さ約3cmと広く浅いものとなっている。また、石障内は「川」の字形屍床配置となっているが、現在は東側の仕切石の一部が残存するのみである。

4 装飾

装飾は奥壁側の石障にのみ見られ、直径10.6cmの円文が等間隔で3個線刻されている。

5 出土遺物

開口が古く、不明である。

6 古墳の保存状況

天井部が開口しており、その部分には簡素な被い屋がかけられている。また、墳丘上には尾張大明神の社殿が建てられている。

7 図面等保管場所

石室実測図は熊本県文化財資料室で保管。

8 その他（年代等）

築造年代は、石室構造より前方後円墳集成期5期頃と考えられる。

（ 西山由美子 ）

参考文献

蓑田田鶴男 1959「大鼠蔵山古墳群」『金剛の歴史』八代市立第六中学校PTA：pp.31 - 47

隈昭志 1984「大鼠蔵東北麓1号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.163 - 164

図出典

図 92：八代市都市計画基本図を利用

図 93：1974 年 松村道博・丸山武水作成石室図を新たにトレース

図 94：木村龍生作成（2019 年 6 月撮影）

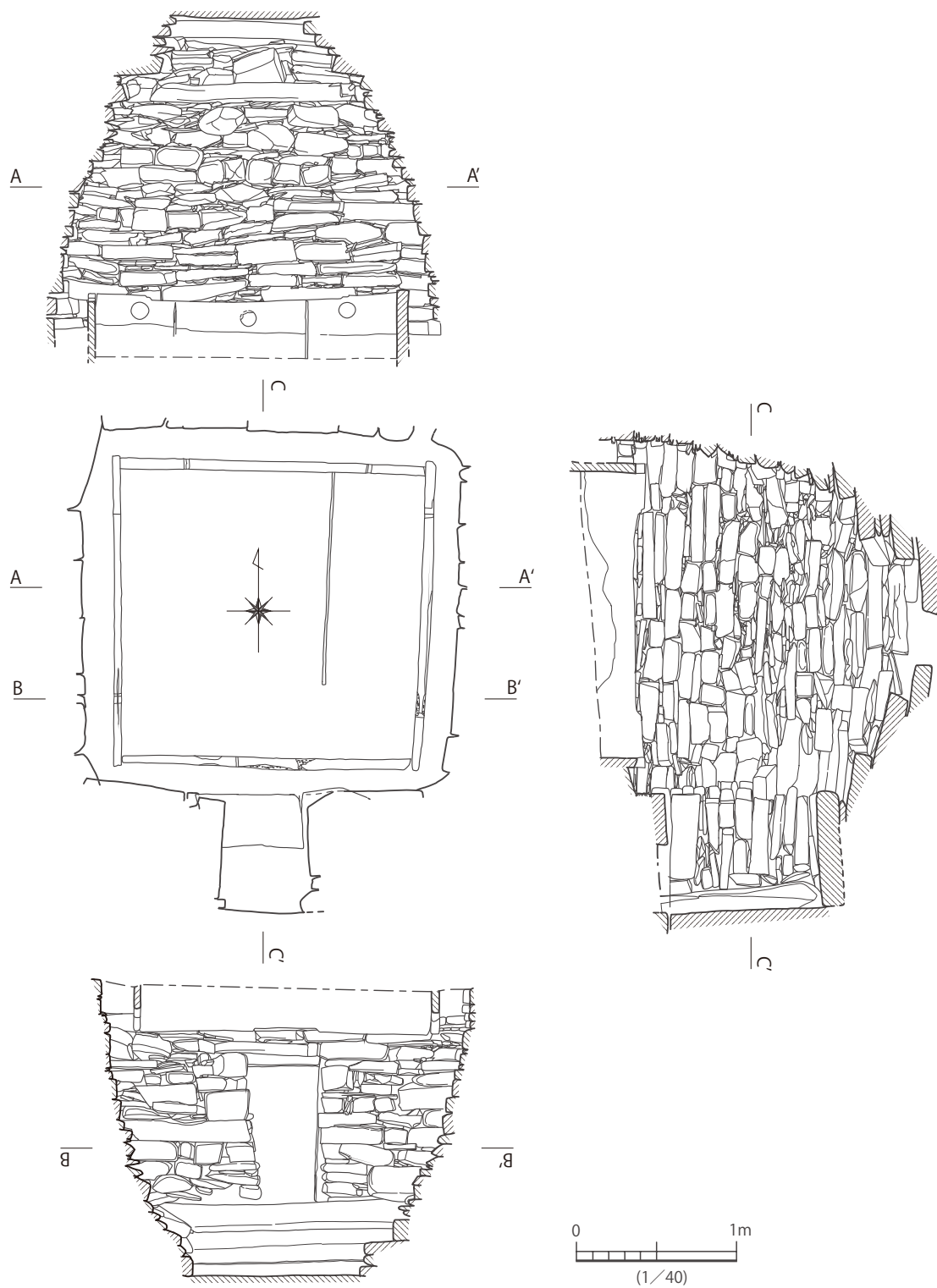


図 93 大鼠蔵尾張宮古墳石室実測図

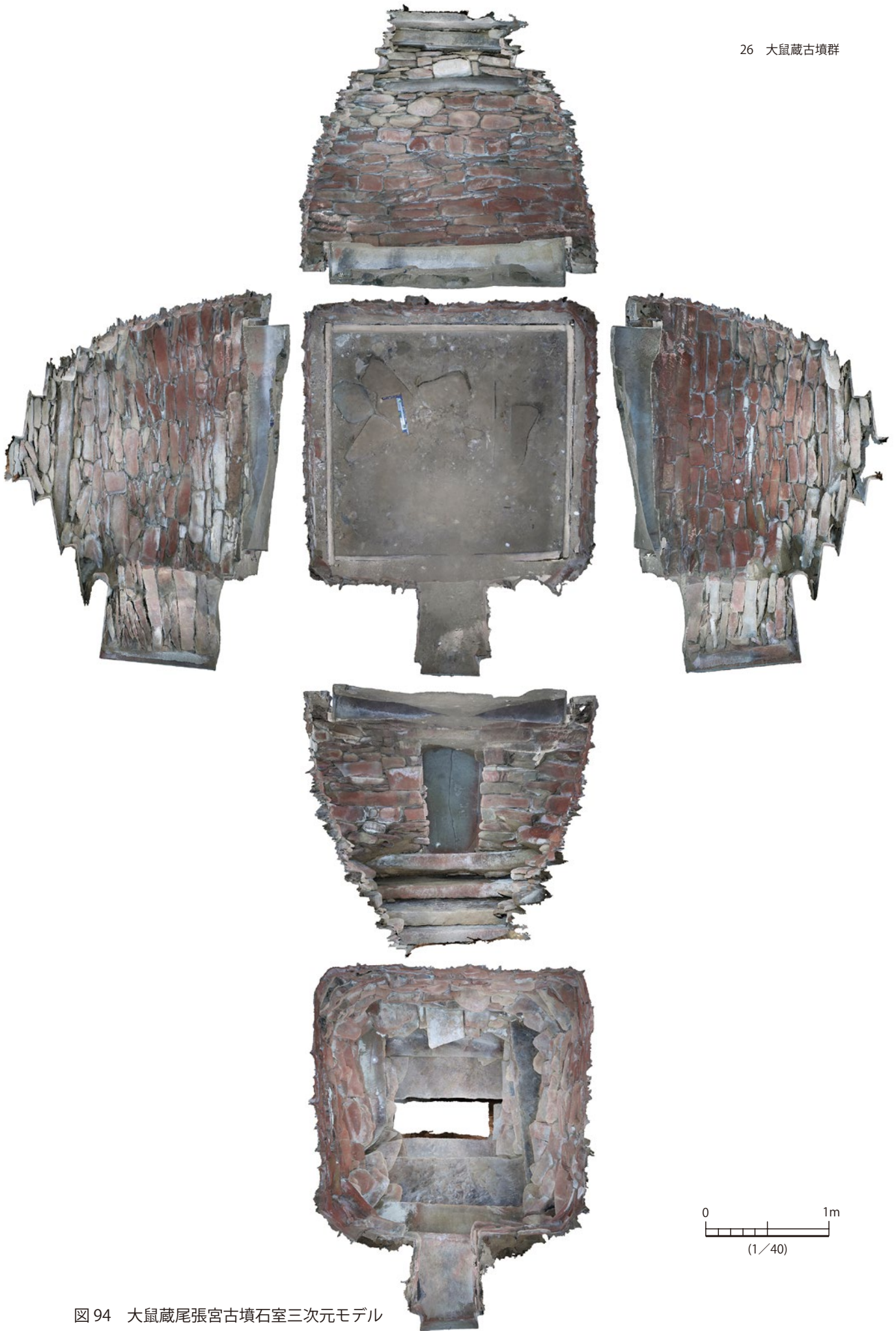


図 94 大鼠蔵尾張宮古墳石室三次元モデル

② ^{おおそぞうとうらく}大鼠蔵東麓 1 号古墳

1 発見の経緯及び調査の経緯

1954 年(昭和 29 年)9 月 18 日、大鼠蔵山の東麓で農業倉庫建設のため土取工事中に箱式石棺が発見され、翌 9 月 19 日八代市教育委員会の担当者及び当時八代市史の編纂を行っていた蓑田田鶴男が現地に赴いたところ、第 2 号石棺が発見された。実測、写真撮影を行うとともに、八代市教育委員会並びに当時熊本県文化財保護委員であった乙益重隆に報告した。併せて、工事の中止を要請し、9 月 21 日八代市教育長をはじめ市教育委員会 6 名による現地調査が行われ、重ねて工事の中止を要請した。10 月 5・6 日乙益による調査が行われ、新たに 3 号箱式石棺が発見された。その後、江上敏勝が現地の踏査を行い、現在では周辺で 6 基の箱式石棺が確認されている。なお、本古墳について、乙益の報告の中で 5 号墳と記載されているが、蓑田は発見順に命名するとして、当古墳を 1 号墳とした(蓑田 1959)。これに倣った江上が『熊本県装飾古墳総合調査報告書』においても 1 号古墳としたことで、この古墳を 1 号古墳とすることが一般的になった。図 95 は乙益が作成した石棺配置図である。

2 墳形・規模

東麓 1 号古墳の墳丘については、工事中に発見されたものであったため、詳細は不明だが、当初から存在しなかったと考えられている。

3 内部施設

前述したとおり、この古墳は工事中の発見であったため、規模や構造の詳細は不明であるが、板石を 9 枚組み合わせた箱式石棺であったと推定されている。主軸は南北で装飾のある石材は西側壁を構成する 2 枚の板石のうちの 1 枚で、長さ 125.7cm・高さ 55.7cm・厚さ 12cm の砂岩の板石である。もう 1 枚の石は長さ 90cm 程度のものであったという。東側の側石には装飾がなく、140cm 程と 70～80cm 程の長さの 2 枚の板石を組み合わせたものと考えられている。また、北側の板石は長さ 74.5cm・幅 6cm 程度の溝が彫られ、組み合わせのための加工が施されていたと考えられる。装飾のある石材については現在八代市立博物館において保管・常設展示されているが、他の石材については不明である。

4 装飾

装飾は西側壁のこの 1 枚にだけ施されていたようで、赤色の彩色が残る。左から半月形の弓(船とする説もある) 5 本の矢を並べた鞞、吊り下げられたような二重円文(鏡か)、三角板を使った短甲、二重円文を吊り下げ、鹿角製刀装具を装着したような太刀が彫られている。副葬品の代わりに描かれたのではないかともいわれている。また、八代平野の装飾古墳の中で、鏡以外の器物を描いたものは唯一の例である。

5 出土遺物

出土遺物は少なく、熟年男性のものと思われる人骨一体と土師器の高坏 1 点のみである。出土した高坏は八代市立博物館において保管されている(所蔵は八代市教育委員会)。

6 古墳の保存状況

発見時にはすでに取り壊されており装飾石材のみが保管されている。

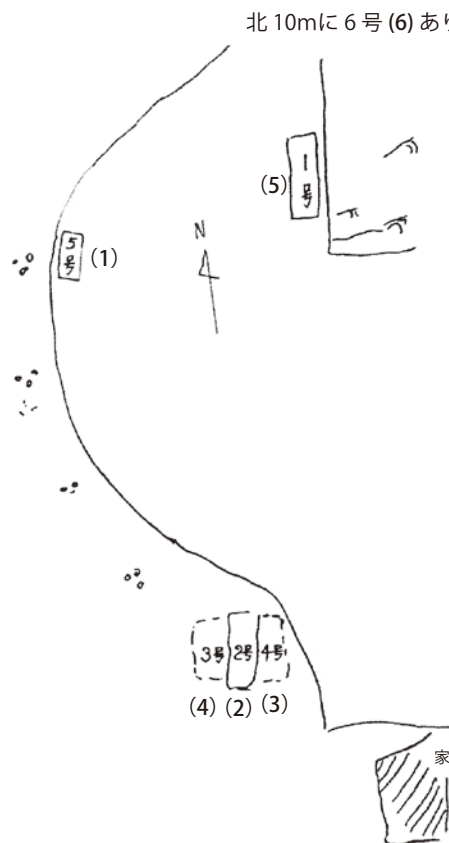


図 95 乙益作成の大鼠蔵東麓石棺配置図
(() 内の番号は現在のもの)

7 図面等保管場所

調査時の実測図及び写真は、人吉市教育委員会（乙益文庫）で保管。古墳発見・調査時の写真 15 枚ほどが八代市立博物館において保管されている。

8 その他（年代等）

築造年代は、5 世紀前半頃と考えられる。

（ 西山由美子 ）

参考文献

蓑田田鶴男 1959「大鼠蔵山古墳群」『金剛の歴史』八代市立第六中学校 P T A : pp.31 - 47

乙益重隆 1956「八代市大鼠蔵山古墳（肥後における箱式石棺内合葬について）『考古学雑誌』第 41 号第 4 巻 日本考古学会 : pp.43 - 53

江上敏勝 1984「大鼠蔵東北麓 1 号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会 : pp.165 - 166

図出典

図 95 : 乙益重隆作成配置図（青焼）をトレース

図 96 : 熊本県立装飾古墳館提供（牛島茂・杉本和樹 2000 年 11 月 28 日撮影）

図 97 : 江上敏勝 1984 より新たにトレース



図 96 大鼠蔵東麓 1 号古墳装飾石材

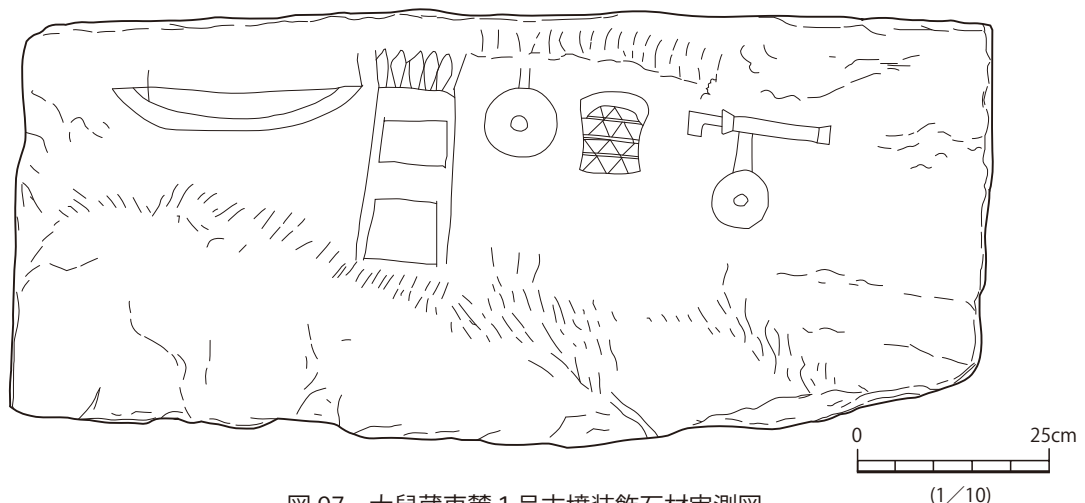


図 97 大鼠蔵東麓 1 号古墳装飾石材実測図

③ 大鼠蔵東北麓2号古墳

1 発見の経緯及び調査の経緯

熊本県装飾古墳総合調査報告によると、「戦後、この東北側脚線部の土取り工事で3基が発見され、すでに破壊されて詳細は明らかでないが、その中の2号古墳には二重円形刻文があった。その側壁1枚は個人の屋敷に祀ってあった。おそらく採土中の発見のため封土はあったものと思われるが、その3基の全貌ははっきりしない。」とされている（江上 1984）。

2 墳形・規模

墳形・規模共に不明である。

3 石室

この古墳は3基ともに箱式石棺であったと推定され、装飾があったのは東北麓2号古墳の側壁の一部である。すでに破壊墳のために石棺の規模や構造は不明である。江上が行った聞き取りによると、板石9枚からなる組合式の箱式石棺であることが考えられる。

4 装飾

現存していた箱式石棺の側壁には二重円刻文（径約10～12cm）を3つ並べて彫ったものである。個人の屋敷内に1971年（昭和46年）頃まであったが、その側壁の行方がわからなくなっていると言う。

5 出土遺物

不明

6 保存施設・修復歴等

不明

7 図面等保管場所

不明

8 その他（年代等）

築造年代は不明。

（ 村田仁志 ）

参考文献

江上敏勝 1984「大鼠蔵東北麓2号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.167

図出典

図98：江上節子氏提供
（江上敏勝撮影）



図98 大鼠蔵東北麓2号古墳装飾石材

④ おおそぞうせいほくら 大鼠蔵西北麓 2号古墳

1 発見の経緯及び調査の経緯

1960年（昭和35年）2月、金剛地区の鼠蔵海岸堤防の嵩上げ工事のための土砂採掘中に発見されたものである。4基発見されたが、すでに3基は粉碎され、残る1基も石積の一部が残るだけとなっていた。その後、1967年（昭和42年）11月頃の採土取りにより完全に消滅する。昭和35年発見当時に簡易的な調査が行われているようであるが詳細は不明である。

2 墳形・規模

出土地点は現在の海面から3～5m位の高さにあり、工事関係者の話を総合すると、封土があったようである。

3 石室

発見された4基のうち3基は、箱式石棺であったと考えられる。残る1基は割石積みの横穴式石室で、露出している側壁の長さ180cm・奥行き80cmを計測する。

4 装飾

現存していた1基の石室内部の右側の側壁には二重円文3つが刻まれていた。その他、3基の破壊墳に装飾があったかはわからない。

5 出土遺物

人骨4片（上顎骨白歯5本つき）、須恵器片。

6 保存施設・修復歴等

なし

7 図面等保管場所

図面の所在は不明だが、2号古墳発見時の写真を江上敏勝が複写している。

8 その他（年代等）

築造年代は不明。

（ 村田仁志 ）

参考文献

江上敏勝 1984「大鼠蔵西北麓 2号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.168

図出典

図99：江上節子氏提供（江上敏勝撮影）



図99 大鼠蔵西北麓 2号古墳（下の写真：石材左端に同心円文が確認できる）

27 ^{ご た ん だ}五反田古墳 (昭和38年4月20日市史跡) 一八代市敷川内町五反田一

市町村コード(43202) 遺跡番号(134) 北緯32度27分07秒 東経130度35分41秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

五反田古墳の存在は江戸時代より地元で認識されており、土地所有者の仏壇に、当古墳から取り出された鏡が祀られていた。明治時代より数度の破壊を受け、天井石と見られる石材も他所に転用される等していたが、祟りを恐れた住民の手により鏡は古墳内に戻された。その後、1952年(昭和27年)5月1日に再度古墳から取り出した。1958年(昭和33年)7月18日、地元敷川内町の依頼により八代市史の著者、蓑田田鶴男が敷川内町の史跡調査を行い、この鏡の存在と五反田古墳の外観を確認した。同年9月頃、蓑田より松本雅明熊本大学教授にこの鏡が紹介され、振紋鏡であることが判明した。

1959年(昭和34年)2月21・22日の2日間、松本雅明を中心に、乙益重隆・原口長之・三島格・花岡興輝、八代市教育委員会、八代史蹟保存会、肥後考古学会八代支部及び地元敷川内の人々が参加して発掘調査が行われた。また、所有者や地元の要望により調査終了後の3月14・15日に石室の復元が試みられ、その作業中に人骨、鉄鏃などが出土した。1961年(昭和36年)報告書が刊行された。なお当初、古墳は所有者の姓を冠して呼ばれていたが、調査後、五反田古墳と命名された。

2 位置及び墳形・規模

八代平野南部を流れる敷川内川により形成された扇状地の先端部に位置する。古墳のある付近一帯は縄文中期から後期の貝塚(五反田貝塚)である。古くから宅地として利用され、地形の改変が著しく、墳丘は不明。

3 内部施設(石室)

砂岩の割石を小口積みにした横穴式石室であると考えられるが、大きく破壊されており、南壁と東壁の最下部3～5段ほどが残存するのみであり、南壁が奥壁になると考えられる。報告書(松本1961: pp.41～43)には「古墳は蓋石の下に側壁らしい石が見えている。蓋石は長径(南北)164cm・短径(東西)88cm・厚さ6.5～9cmで、表裏はかなり削平された、砂岩質の不整の石である。その東側に長さ107cm・高さ46～63cm・厚さ8cmの側壁らしい石(A)が立てて埋められていた。蓋石をあけると、その下には、幅40～20cm・長さ25～70cm・厚さ5cm内外の割石がつまっていた。それらをとりつけて、側壁の深さにさらえてみたが、側壁らしいものは東側のみで、北・西・南にはない。そこには割石が雑然と重ねられているのみで、意識的につまれたあとは見えなかった。丹を塗った石片もまじるが、雑然と投げこまれた形である。丹交じりの土塊や貝片もそうである。(中略) そこでその周囲を調査しているうちに、そのほぼ南側、やや東よりに、別に斜めに外側に約30度傾いている長さ217cm・高さ60～80cm・厚さ9～10cmの板石(B)が発見された。またこの石自身、西部がかなり沈下していた。(中略) この石の外側に(東側では約12cm離れて)、割石の小口積が三段あらわれ、それは北側に直角にのびていることがみとめられた。しかしそれは北側の竹藪の中と西側にはなかった。しかし先の南側の板石に相對して、130cm北に、内側に倒れた板石(C)が発見された。この石は長さ180cm・高さ35～50cm・厚さ7～8cmで、先の南側のものよりもかなり薄く、かつ低く、円形刻文はなかった。しかしおそらくB石に相對する側壁の一部分であろうと推定された。そうするとはじめのA石は奥壁となる。」また、その後の復元工事の際の記録として「まず北側壁(C)をおこし、附近を調査すると、その外側(北)に頭骨片が発見された。埋葬状態はわからず、後世の発掘で、かなり散乱している。またその内側(南)からも頭骨・顎骨・上腕骨・大腿骨・脛骨などが発見された。(中略) 骨が側壁の外側にあることは、側壁そのものが倒れ、移動しているためであるにちがいない。」と記述されている。実測図をみると、平面図にある板石Cが断面図には見られず、文中にCは倒れた状態で見つかったことから、断面図は調査時、平面図は復元工事の際の状況が反映されていると考えられる。また、報告の中

で、Cは側壁（石障）とされているが、人骨の出土状況等をあわせて、C及び、Bの北側にあり、Aと直交する板石は、仕切石である可能性も考えうる。報告書では同種の古墳を参考にして幅約160cm、奥行190cmの正方形に近い平面形をした石室と考えられている。

4 装飾

装飾は石障と考えられる二つの石材に各2個の円文が刻まれている。円文はいずれも一重で、径は13～14cm、やや粗く彫られている。

5 出土遺物

鏡（振紋鏡）1、勾玉（硬玉）1、管玉（微小片1、碧玉2、ガラス1）、小玉（土製1、メノウ1、ガラス29）、刀子2、鉄鏃39、帯金具1、須恵器（提瓶2）。人骨が出土しており、少なくとも5体分であると報告されている。

また、振紋鏡について、近年、島根県松江市の苜捨古墳で同範鏡が出土した（第102図）。苜捨古墳は径約20mの不整形な円墳で、3基の主体部を検出した。振紋鏡はその中央の第一主体部から前漢鏡の破鏡、水晶製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉とともに出土した。苜捨古墳の振紋鏡は五反田古墳のものに比べ鑄上りがよく、先に鑄造されたと考えられる。苜捨古墳は古墳時代前期の築造である。

鉄器・人骨以外の出土遺物は八代市立博物館未来の森ミュージアムに寄託されている。

6 古墳の保存状況

地元敷川内町の希望により出土石材を用いて現地に復元された。その際、浸水がはなはだしかったため、現位置には復元せず、30cmほど嵩上げが行われた。

7 図面等保管場所

不明

8 その他（年代等）

出土遺物の時間幅が大きく石室構造も明確でないため、築造年代は確定できないが、円文の径が小さいことから前方後円墳集成6期～7期頃の可能性が考えられている。

（ 西山由美子 ）



図100 五反田古墳調査風景（正面：石材A、右：石材B）

参考文献

- 蓑田鶴男 1959「五反田古墳」『金剛の歴史』八代市立第六中学校PTA：pp.11 - 30
 松本雅明 1961「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第1集 熊本県教育委員会：pp.41 - 55
 佐藤伸二 1984「五反田古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.172 - 173
 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011『苅捨古墳 西川津遺跡』主要地方道松江島根線改築工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ 島根県教育委員会

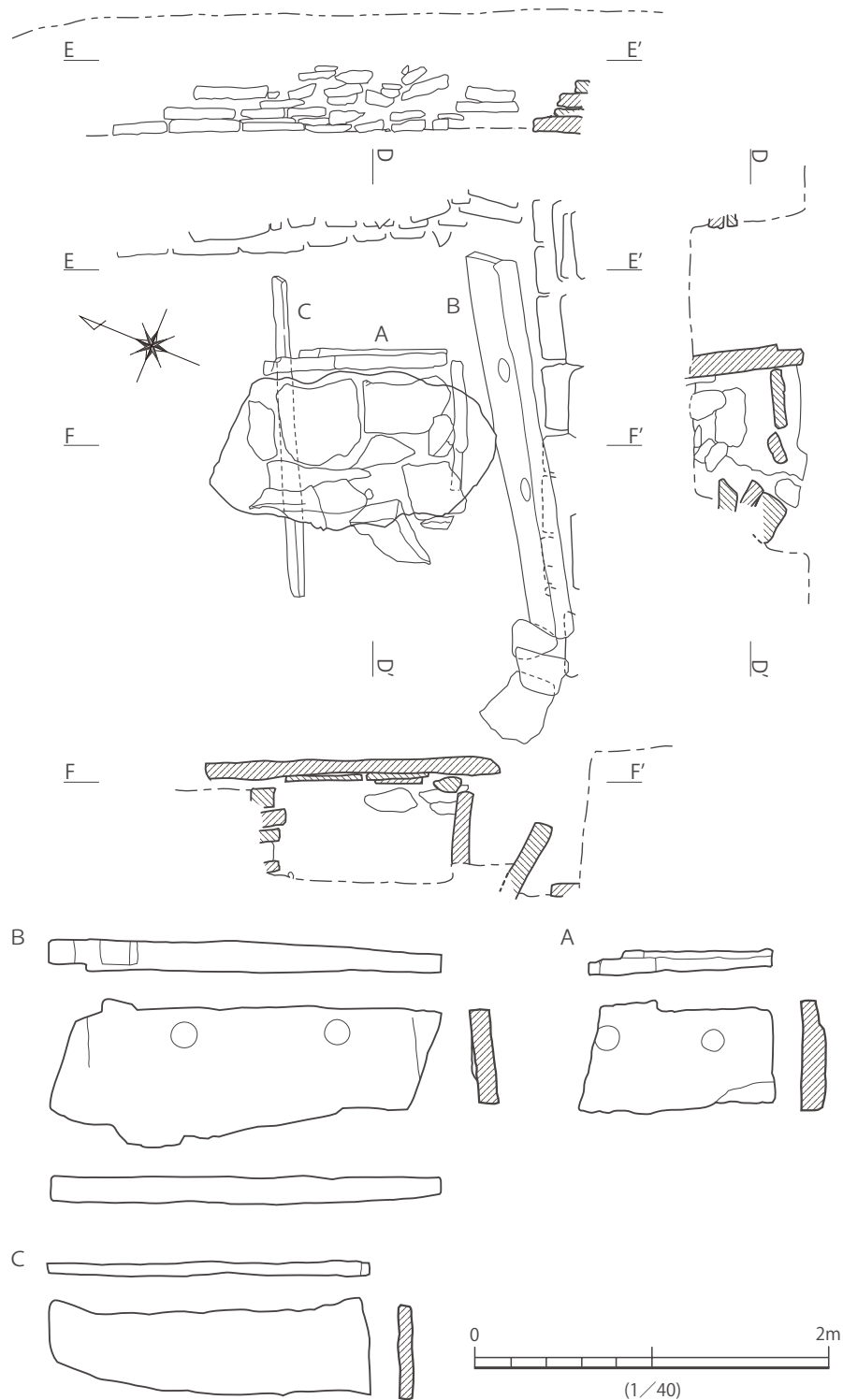


図 101 五反田古墳石室及び石障実測図

図出典

図 100：人吉市教育委員会提供（乙益重隆撮影）

図 101・103：松本雅明 1961 より新たにトレース

図 102：島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 より

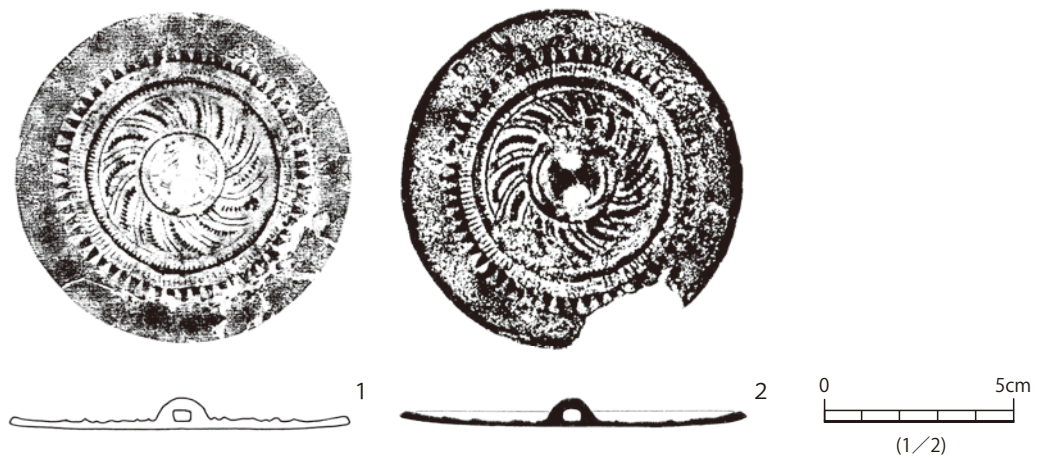


図 102 振紋鏡拓影比較図（1：苅捨古墳 2：五反田古墳）
（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 より）

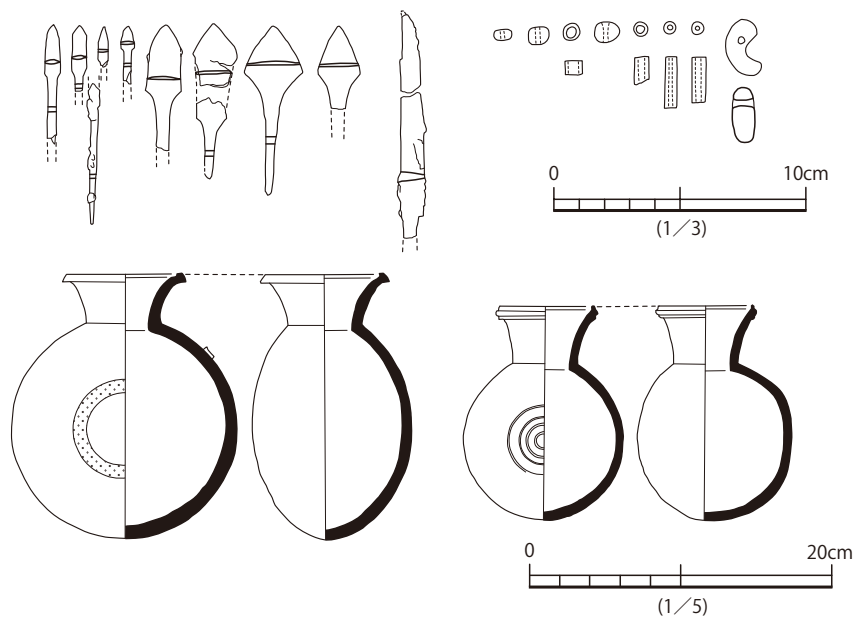


図 103 五反田古墳出土遺物実測図

28 なぐさこ 長迫古墳 — 八代市日奈久大坪町字大坪川 1843 — 1 —

市町村コード (43202) 遺跡番号 (137) 北緯 32 度 26 分 42 秒 東経 130 度 35 分 23 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1917 年 (大正 6 年) 刊行の『京大報告』に依ると、葦北郡日奈久町^(註1)の「田川内石室の北、字永迫の内椎屋」また「田川内の北方数町、同じく山麓」にある小高い封土を、その 30 余年前に開墾して田を作った際に石槨を発見したとあるので、発見は明治 10 年代ということであろう。内部から人骨、刀剣、金具等が出土し山腹に建てた小堂に収めたが、いつの頃からかそれらは散逸し堂も廃絶したという。

現存する石材はいずれも砂岩で、そのうち 2 枚は発掘者が持ち帰り井戸の側石に用いていたが、1913 年 (大正 2 年) 夏に請われて東京帝室博物館 (現東京国立博物館) に収蔵され、現在このうちの 1 枚が平成館で展示されている。また別の石材 1 枚は千小田村の氏神である日奈久阿蘇神社 (大明神) 付近の橋材に転用されていたが、現在は神社境内の一角にある。その他にも角田政治蔵の小石材があり、さらにその半分が日奈久山下町の個人の敷地内にある。

1959 年 (昭和 34 年) 12 月中旬、日奈久大坪町に於いて耕土作業中に古墳を発掘し、剣破片若干・土師器片 8 点・人骨歯 2 点・磨製石斧 1 点などが出土した^(註2)。この遺跡を長迫古墳^(註3)として 1960 年 (昭和 35 年) 6 月 11・12 日に市教委と肥後考古学会八代支部が主催し、熊本大学松本雅明教授を調査責任者とする調査が行われた。

京大報告では古墳の所在を示す地図や写真が掲載されておらず、また松本が調査古墳を長迫古墳とした経緯について記録が残っておらず石材出土地と 1960 年調査地が間違いなく同一であるとは言えないが、田川内古墳の北側の山麓に位置する古墳としては松本が調査した古墳の可能性が高い。

2 位置及び墳形・規模

八代市日奈久大坪町の、長迫の地名のとおり三方をなだらかな丘陵に囲まれた迫 (谷) にあり、すぐ近くを大坪川が西流する。北側の丘陵上 (塩釜山) には塩釜古墳が、また南の丘陵端部上には田川内古墳がある。1960 年調査では墳形や周溝の有無は確認されていない。

3 内部施設

古墳の破壊が甚だしく 1960 年の調査は困窮を極めたが、その復元によると長迫古墳はタテ 3 m・ヨコ 2.5 m の横穴式石室で、割石積みの内側に板石を四方に並べ、中央に箱式石棺を置いたものとみられている。

4 装飾

石材のうち東京国立博物館平成館で展示されているもの (図 107) が最も精巧で、長さ 218cm・高さ 85cm・厚さ約 12cm を有し、上縁の一端から約 60cm にわたって深さ約 10cm の切り欠きを有する。一面に 6 個の図形を半肉彫にし、うち 2 個は円と同心円文をあらわすが、他の 4 個は三重の同心円の外周を精緻な三角形連続文で縁どりし、中心に円孔があり、いずれも上縁から二条の紐で垂下した状態を表す。なお右端の円文の外円線は右端が欠けていることから石障石材はもう少し長かったと考えられる。東京国立博物館に保管されているもう 1 枚 (図 105 - 3・図 106) は、前障にあたり、内面・外面両面に円文が刻まれている。

日奈久阿蘇神社の一石 (図 105 - 1) は長さ約 210cm・高さ 85cm・厚さ 12cm を有し、文様は確認でき

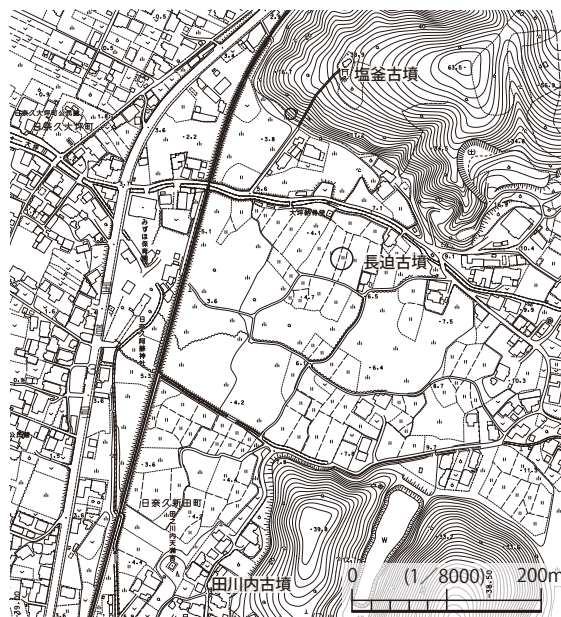


図 104 長迫古墳周辺位置図

なくなっているが、京大報告の拓本では上縁から紐で垂下した同心円4個がほぼ等間隔に並ぶ。角田所蔵の一石には紐で垂下した同心円2個がみえ、その半分をなす日奈久山下町の個人所有のもの（図105-2）と接合し、計4個の同心円があったことになる。

5 出土遺物

明治期の発見時には人骨・刀剣・金具等が出土し、現地の堂に収められたがその後散逸し現存しない。1959年12月の発見時には剣破片若干・土師器片8点・人骨歯2点・磨製石斧1点が出土。1960年6月の調査では、刀の破片2点・陶製の管玉破片4点・土器の破片が8点出土している。現在、土地所有者宅に1960年調査時の鉄刀の破片が保管されている。

6 古墳の保存状況

既に京大報告の時点で、「今その地は全く田と化し、遺存せる用材の一部を現はせるのみ」とある。現在も水田や休耕地が広がり墳丘の痕跡をとどめない。文様ある石材のうち神社境内のものは、橋材に転用された後長年にわたる屋外保存のため全面的風化が進行し、現在では文様を確認することが出来ない。日奈久山下町の個人所有の石材は覆いが設けられ大切に保存されている。

7 図面等保管場所

1960年調査時の図面の所在は不明。

8 その他（年代等）

築造年代は、田川内1号古墳同様前障の外面にも施文されるが、前障刳込の深さは田川内1号古墳より深くないことから田川内1号古墳よりは若干古い年代が想定される。またこの石障石材には門前2号古墳で見られたような組合せのための溝が見られないことや石室の規模（タテ3m・ヨコ2.5m）が間違いのないとするなら、まだ別の石障石材がある可能性がある。

（吉永 明）

註

- 1) 温泉地として有名な日奈久は1889年（明治22年）に日奈久村・日奈久町・千小田村が合併して葦北郡日奈久村が成立、1902年（明治35年）には同郡日奈久町と発展、1955年（昭和30年）に八代市と合併し今日に至る。京大調査時は葦北郡日奈久町大字千小田である。
- 2) 発見者の子息によると、馬で鋤を曳く際によく石に当たって難儀していたという
- 3) 厳密な地名表記では日奈久大坪町字大坪川で、字長迫は古墳所在地の東方の山麓部に当たる。しかし地元では現在の肥薩おれんじ鉄道より東側の平地一帯を長迫と総称している。また長迫は「ながさこ」ではなく「なぐさこ」と呼ばれている。

参考文献

- 乙益重隆 1984「長迫古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集：pp.174－175
- 京都帝国大学文学部 1917「日奈久町字永迫古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文学部考古学
研究報告第一冊：pp.38－43
- 佐藤伸二 1984「付1. 日奈久神社の石材」「付2. 日奈久山下町の石材」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本
県文化財調査報告第68集：pp.176－177
- 蓑田田鶴男 1959『金剛の歴史』八代市立第六中学校PTA：pp.51－57
- 熊本日日新聞 1960「割石積み横穴石室 八代 長迫古墳調査で判る」昭和35年6月15日6面
- 八代市教育委員会 2004『熊本県指定史跡 田川内第1号古墳―石室修理報告書一』八代市文化財調査報告書第24集
八代市教育委員会

図出典

図104：八代市都市計画基本図を利用

図105：1・2：佐藤1984より、3：図106左写真を補正しトレース（石材計測は河野一隆氏（東京国立博物館）の協力を得た）

図106：京都大学大学院文学研究科考古学研究室提供 図107：人吉市教育委員会提供（乙益重隆撮影）

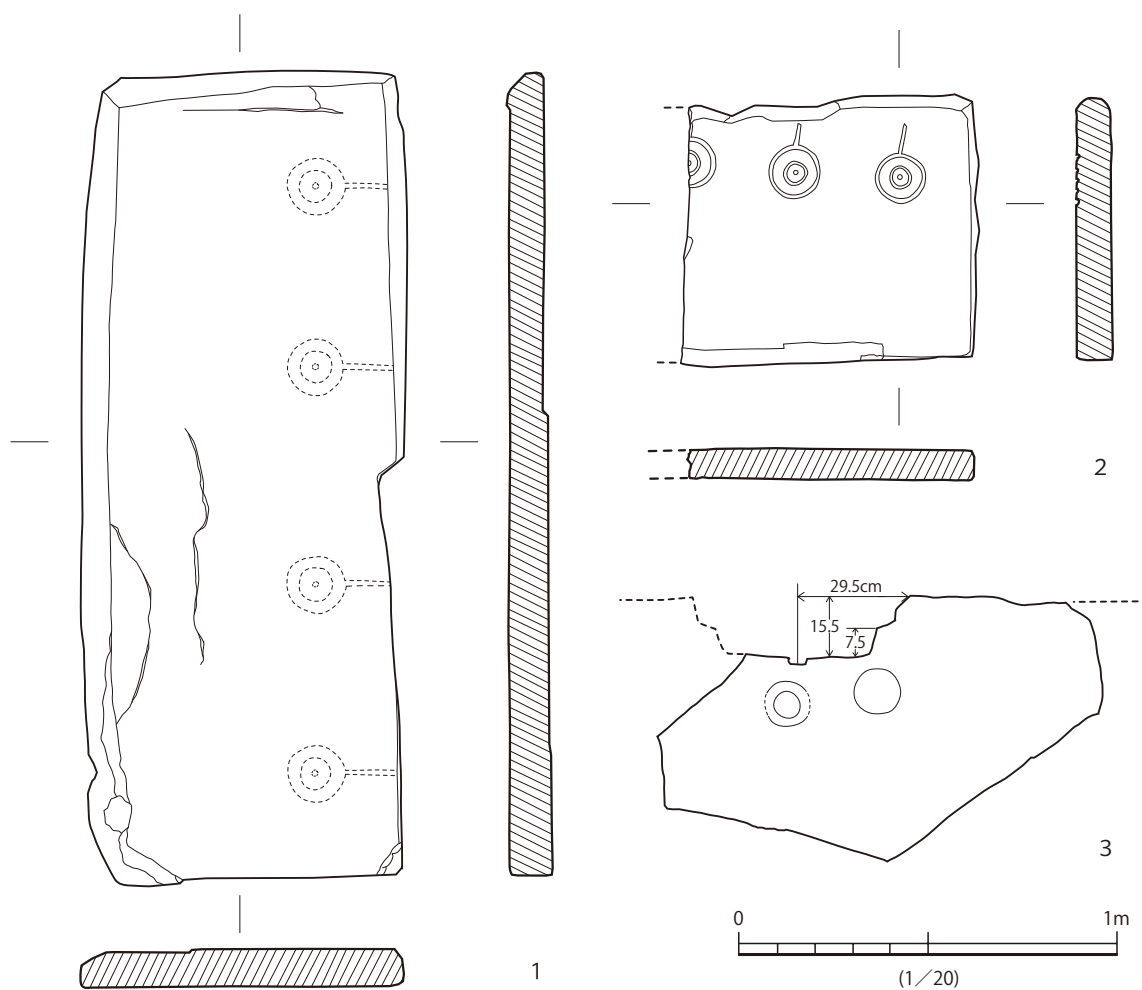


图 105 長迫古墳裝飾石材（1：日奈久神社所在石材、2：日奈久山下町所在石材、3：東京国立博物館所蔵石材模式図）



图 106 東京国立博物館所蔵長迫古墳裝飾石材



图 107 東京国立博物館所蔵長迫古墳裝飾石材

29 たのかわち(たのこうち) 田川内古墳群

市町村コード(43202) 遺跡番号(138) 北緯32度26分32秒 東経130度35分13秒

田川内古墳群の位置

八代市の南部、同市日奈久新田町に位置する。古墳のある田川内集落は近世の海岸線まで約200mの丘陵端部上に位置し、古墳に近接して通る里道は太閤道と呼ばれる往時の主要道である。丘陵の先端に1号古墳があり、この北東50m程離れた地点に2号古墳があったとされている。3号古墳は1号古墳の近くにあったとされているが正確な地点は不明である。

① 田川内1号古墳(昭和48年5月16日県史跡) —八代市日奈久新田町2083—

1 発見の経緯及び調査の経緯

『肥後国誌』によれば、寛政年間(1789～1800)に里民の一人が一部露出していた天井石周辺の土砂を除去し、その下に石室を発見したとされている。但し中原文二は1900年(明治33年)の著書の中で「今を去る四十年前の発見で(中略)寛政年中の発見と有は誤謬なり」と断言している。

1909年(明治42年)には熊本県の矢野寛が古墳を実見し宮内省に報告がなされた。1912年(大正元年)8月には東京帝大人類学教室の柴田助手が、また翌年5月には熊本県属の矢野が、日奈久古墳を視察している。学術調査としては1917年(大正6年)1月の京都帝国大学によるものが最初で、翌2月にかけて福田葦北郡長・松永主任書記・矢野の指導の下、日奈久町青年会員30余名を動員して発掘・修理作業が行われた。

1927年(昭和2年)には保存工事として石室天井部の四周をコンクリートで固め、コンクリート柱の柵を廻らす作業が行われた。1950年(昭和25年)11月26日には、八代市史の原稿執筆のため著者の蓑田田鶴男が熊本県社会教育主事の杉山繁とともに石室の実測調査を行い、その実測略図が市史第一巻に掲載されている。

田川内古墳が縄文時代の貝塚の上に作られていることから、貝塚をも対象とした発掘調査が1960年(昭和35年)10月8・9日に熊本大学松本雅明教授の指導の下、八代市日奈久公民館・八代市日奈久出張所主催で行われたが、後に調査対象は古墳に限定された。明治・大正・昭和の3代にわたる調査の出土遺物の分析は三島格らによって1990年(平成2年)に纏められた。

1974年(昭和49年)2月5日から3月31日にかけて、石室天井の開口部を天井石で塞ぎ墳丘を築くとともに、石室の閉塞石をはずし羨門につながる通路を新設する保存修理が八代市によって行われた。また2003年(平成15年)7月25日から翌年3月15日にかけて、八代市教育委員会は劣化の進んだ石室石材の修復に伴い石室の実測及び地形測量を行った。

2 墳形・規模

古墳は縄文中期から後期にかけての貝塚の上に築造されている。地形測量の結果、直径約34m、墳丘高約4mの円墳とみられる。墳丘上には天神社が祭られている。

3 石室

南西に開口する単室の横穴式石室である。使用石材は石障や割石を含めすべて砂岩を用いている。

(1) 羨道部

1974年に通路が新設されるまで石室羨門は閉塞石で閉じられており、1950年や1960年調査記録も羨道の状況に触れていない。通路新設の際に本来の羨道部の調査がなされた形跡がなく、石室主軸を延長した場合現在の通路より南西方向(県史跡の標柱側)に未だ埋れたままとみられる。なお板状砂岩の閉塞石は通路に保存されている。

(2) 玄室

大小の板状の砂岩を小口積みにして、アーチ状の天井部を構築し、上部に天井石4枚を置いた単室の横穴式石室である。高さ200cm・奥行き237cm・幅は206～235cm、奥に向ってやや広がった正方形に近い。石室四方の壁の前面に石障が廻らされ、内部は板石を立てて仕切りコの字形に、西区(左)・東区(右)・北区(奥)の3屍床を作り中央部分が通路となっている。西区は幅65cm・長さ180cm、東区は幅55cm・長さ184cm、奥区は幅45cm・長さ228cmを測る。西区の仕切石は1974年の修理以後に屍床側に傾いてきている。北区は石障と両屍床の仕切石の上に一枚石の蓋石を乗せかけ石屋形状構造にし、高さ80cm余りの別空間を設けている。また、東西両屍床の床面は土のままであるが、北区の床面には一枚石が全面にわたって敷きこまれており、特別な空間を構成している。

4 装飾

石室内の装飾はすべて円文である。左右と奥の石障に各々3個の二重円文、奥の仕切石に3個の円文、入口の石障の外側に2個の二重円文がある。このうち左側石障の3個の二重円文のうち、中央のものは剥落欠失している。その右側の二重円文は1973年(昭和48年)の修理の際に薄片をモザイク状に張り合わせて円文を復元してある^(註1)。二重円文の外円の直径が18～20cm、内円が6～7cm、円文が同じく6～7cmと大きさを揃えているとともに、装飾が同じ高さや等間隔になるよう努めている。円文の形状はすべて浅い線刻からなり、形はいずれもやや歪でコンパスを用いたような正円ではない。

石室内面に赤色顔料の塗布が見られる。東京文化財研究所の分析結果から「ベンガラ」と判明している^(註2)。

5 出土遺物

発見時の遺物としては短刀、鍔金物、鉄輪等と三人の体骨がある(『肥後国誌』)。次に大正6年発掘時の遺物としては、瑠璃玉10個・蕨手刀2口・剣身1口・鉄斧1口・貝輪5個・鎧残欠・刀身残欠・齋瓮式の土器片数個。5体分の人骨も出土し、人骨は直ちに原位置に葬られた。なお、齋瓮式の土器について陶質土器ではないかとの指摘がある(佐藤1984)が、大正以前に出土した遺物の所在は不明である。

1960年10月調査時では、北区から短甲残欠片・鑿1・鎌2・人骨細片、東区から黄色ガラス小玉167個・真珠小玉1個・刀及び剣刃部破片・鍔茎破片・鎧破片・刀子の柄かと推される破片、西区から曲玉5・小形管玉2・緑色ガラス小玉8・藍青色ガラス小玉など40・剣1・刀1・鹿角製刀装具1・鎧破片の以上である。この他1994年(平成6年)に高木恭二等により綴片・短甲片・鉈などが表採されている。この出土遺物のうち三島が分担保管していた遺物については実測図が作成されている(第113図-3～8)。北区の鉄製品と西区の鹿角製刀剣装具と思われる。その他西区出土の刀剣についても触れ、「(5) 剣は長さ約50cm、鎧を作らない。(6) 刀は約37.8cm、茎に目釘穴があり関は刃まちである。(5)(6)は屍床西側の壁に接して、剣の上に刀をおく配置で、把を頭位の方にそろえて検出。(7) 鹿角製刀剣装具は剣・刀の把の横に割れて出土した。剣・刀のいずれかに装着されたのか、特定できない」とある(三島1988)。この刀剣は錆化が著しく実測作業は行わなかったが、「熊本県装飾古墳総合調査報告」(高木正編1984)に使用した図面等の中に刀剣遺物実測図が残されていたので、それを掲載した(第113図-1・2)。実測者も実測年月日も書かれていないが、田川内35年調査西区出土と書かれている。この他貝輪等(9)も実測図が作成されていた。1994年表採遺物および1960年調査の出土遺物は現在八代市立博物館に保管されているが、図113-3～7の遺物は含まれていない。

1960年出土で再確認された人骨は、男性2体・女性3体の計5体。男性は成年後半1体(西区4号人骨)と、おそらく成人に達していたと思われる1体。女性は経産婦であったと考えられる1体、おそらく成人であったと思われる1体、若年から成年初期1体。鹿角製刀装具は4号人骨に伴っていた。5体分の外耳道すべてに骨腫が認められていることが注目され、要因としては遺伝性のほかに潜水作業などによる冷水刺激の

可能性もあるとされ、八代海に面した田川内古墳の被葬者の生活を復原する上で重要な事項である。

6 古墳の保存状況

丘陵の末端部にあたる墳丘西側（正面左手）は擁壁工事によって一部削平されている。2003年度（平成15年度）には石室石材表面の亀裂及び剥離を防止するため、樹脂含浸による応急処置と石室実測及び地形測量が行われている。2011年度（平成23年度）からは熊本県立装飾古墳館により石室内環境データの検知・収集が継続中である。

7 図面等保管場所

2003年作成の石室実測図は八代市文化振興課で保管。1974年作成の石室実測図は熊本県文化財資料室で保管。

8 その他（年代等）

出土遺物には年代の古いものも伴っているが、石室構造を加味すると築造年代は、前方後円墳集成7期頃と考えられる。

② 田川内2号古墳

1937～1938年（昭和12～13年）頃の発見で、1950年（昭和25年）に蓑田田鶴男により調査されている。1959年（昭和34年）頃までは田川内1号古墳の垣内に石材は保管されていたようであるが、所在不明となっている。

③ 田川内3号古墳

1960年（昭和35年）に1号古墳の墳丘の南側の藪の中から石材が発見されたもので、古墳のあった場所は不明である。2石が発見され、1石に二重円文が1つ、他の石に一重円文が線刻されている。現在は一重円文のある石材のみが1号墳の保存施設入口部に保管されている。

（吉永 明）

註

- 1) 長い年月の間に封土を失い天井石が露出し、石室内への出入は巨大な天井石を手で移動させて隙間を作り、その隙間から石室内に上下していた。昭和2年、保存工事として石室天井部の四周をコンクリートで固め、コンクリート柱の柵をめぐらしたが、これがかえって雨水を室内に流入させる結果となった。そのため石室囲み石の風化が促進されて、壁面の剥離現象をおこし、西壁ぞいの囲み石の二重円文のうち1個は剥落消滅し1個はなかば剥落しかかっている。（八代市教育委員会1974より）
- 2) 分析結果から、田川内第一号古墳で見られる赤色顔料は、鉄を発色の主要因とする広義の「ベンガラ」と考えられる。ベンガラは、近年さらに細分化されて議論される場合があるが、その意味では今回の顕微鏡観察からは、筑後川流域の装飾古墳でいくつか記載例のある「ばいぶ状ベンガラ」と同様のベンガラが用いられている可能性は乏しいと推定される。その一方で、顔料粒子は比較的均質に認められたため、「不順なベンガラ（茶色顔料）」とも状況が異なり、範疇としては「パイプ状ベンガラではないベンガラ」と表現されるべきものと思われる。（八代市教育委員会2004より）

参考文献

- 後藤是山 『肥後国誌』下巻「葦北郡田浦手永千代永村（補）」青潮社：pp.382
 中原文二 1900「隠れ穴」『日奈久温泉浴の栞』
 九州日日新聞 1912「八代中学校記事 古墳調査」大正元年9月20日5面
 九州日日新聞 1913「葦北郡に於ける古墳墓」大正2年5月30日1面
 九州日日新聞 1917「日奈久古墳整理」大正6年1月31日3面
 九州新聞 1917「日奈久の古墳 青年会員整理す」大正6年1月31日5面
 九州新聞 1917「千年前の古墳 刀剣類を発掘す」大正6年2月2日5面
 九州新聞 1917「日奈久の古墳」大正6年2月27日5面
 京都帝国大学文学部 1917「日奈久町字田川内古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文学部考古学研究報告第一冊：pp.38 - 43

平野流香 1927「日奈久古墳の貝輪」『肥後史談』

熊本日日新聞 1960「縄文中期の住居跡？ 八代田川内貝塚の本調査始まる」昭和35年10月9日11面

熊本日日新聞 1960「貴重な土器埋蔵か 田ノ川内貝塚を本調査」昭和35年10月10日11面

蓑田田鶴男 1969『金剛の歴史』八代市立第六中学校PTA

中原文敬 1970『日奈久の歴史—郷土史—』

八代市教育委員会 1974『田ノ川内古墳第1号古墳 補修工事報告書』八代市教育委員会

佐藤伸二 1984「田川内1号(甲号)古墳」「田川内2号古墳」「田川内3号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』

熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会 :pp.178 - 182

蓑田田鶴男 1992『八代市史 第一巻』八代市教育委員会

三島 格・土肥直美・田中良之 1988「熊本県田川内古墳1号出土の遺物および人骨」『日本民族・文化の生成』六興出版 :pp.659 - 698

吉永 明 2004『熊本県指定史跡 田川内第1号古墳—石室修理報告書—』八代市文化財調査報告書第24集 八代市教育委員会

西山由美子 2008『火の君、海を征く！ ～古墳からみたヤマトと八代～』八代市立博物館未来の森ミュージアム

図出典

図108・109：吉永明2004より新たにトレース

図110：木村龍生作成（2019年5月撮影）

図110左下写真及び図111：県立装飾古墳館提供（牛島茂・杉本和樹2000年11月30日撮影）

図112：八代市立博物館提供（2010年12月13日撮影）

図113-1・2・9：熊本県文化財資料室所在実測図を新たにトレース

図113-3～8：三島 格・土肥直美・田中良之1988より新たにトレース

図114：佐藤伸二1984より新たにトレース

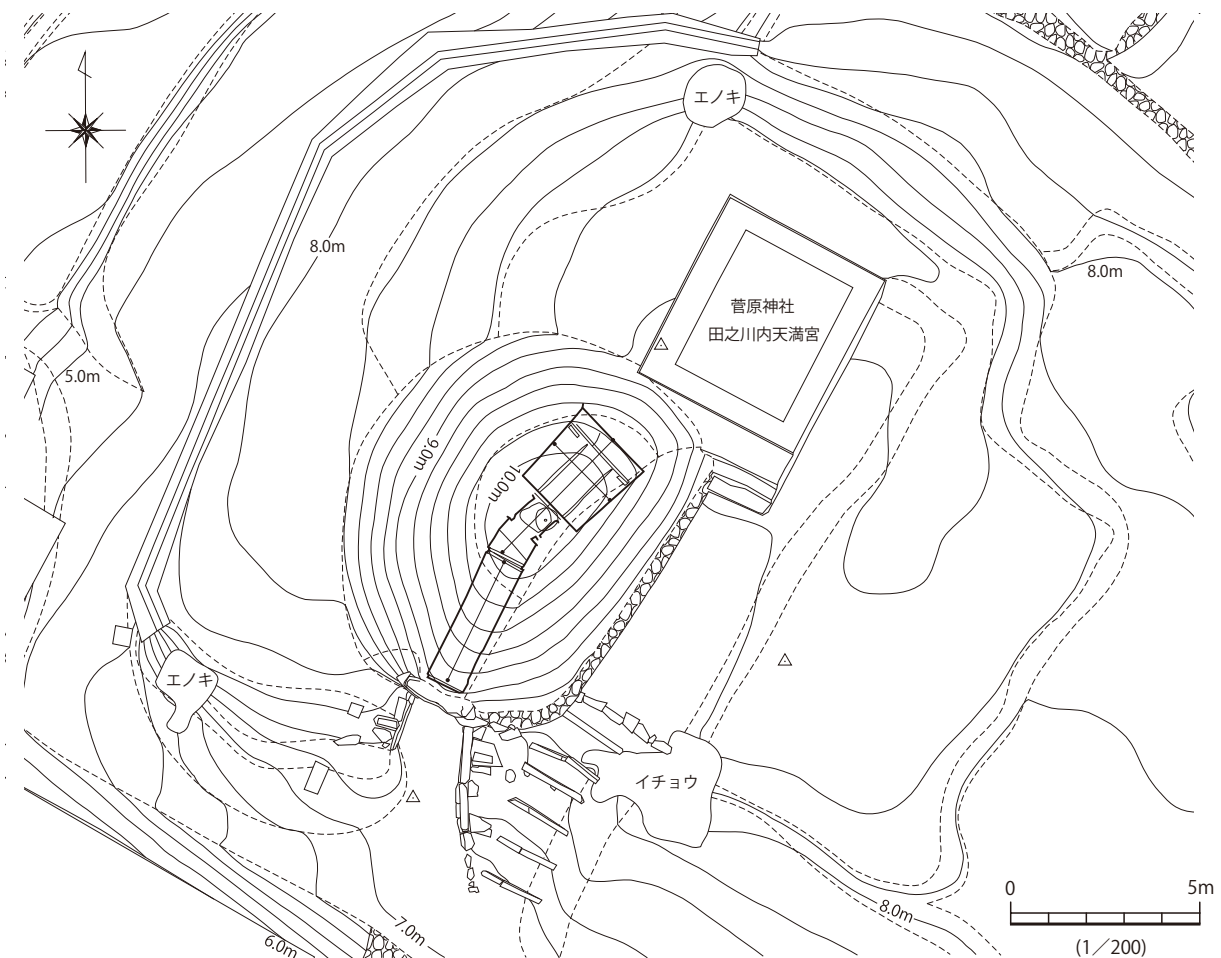


図108 田川内1号古墳墳丘測量図

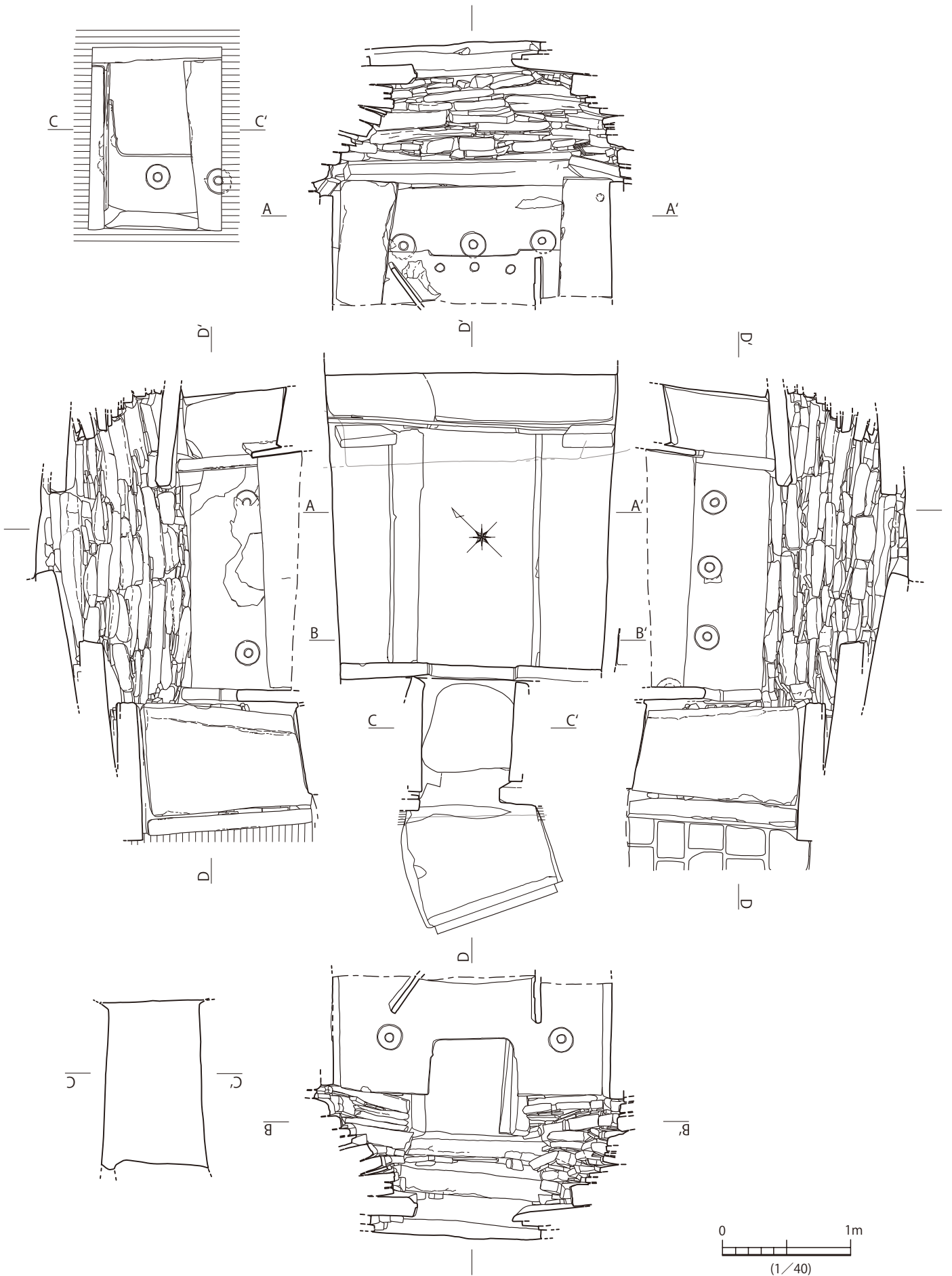


图 109 田川内 1 号古墳石室实测图

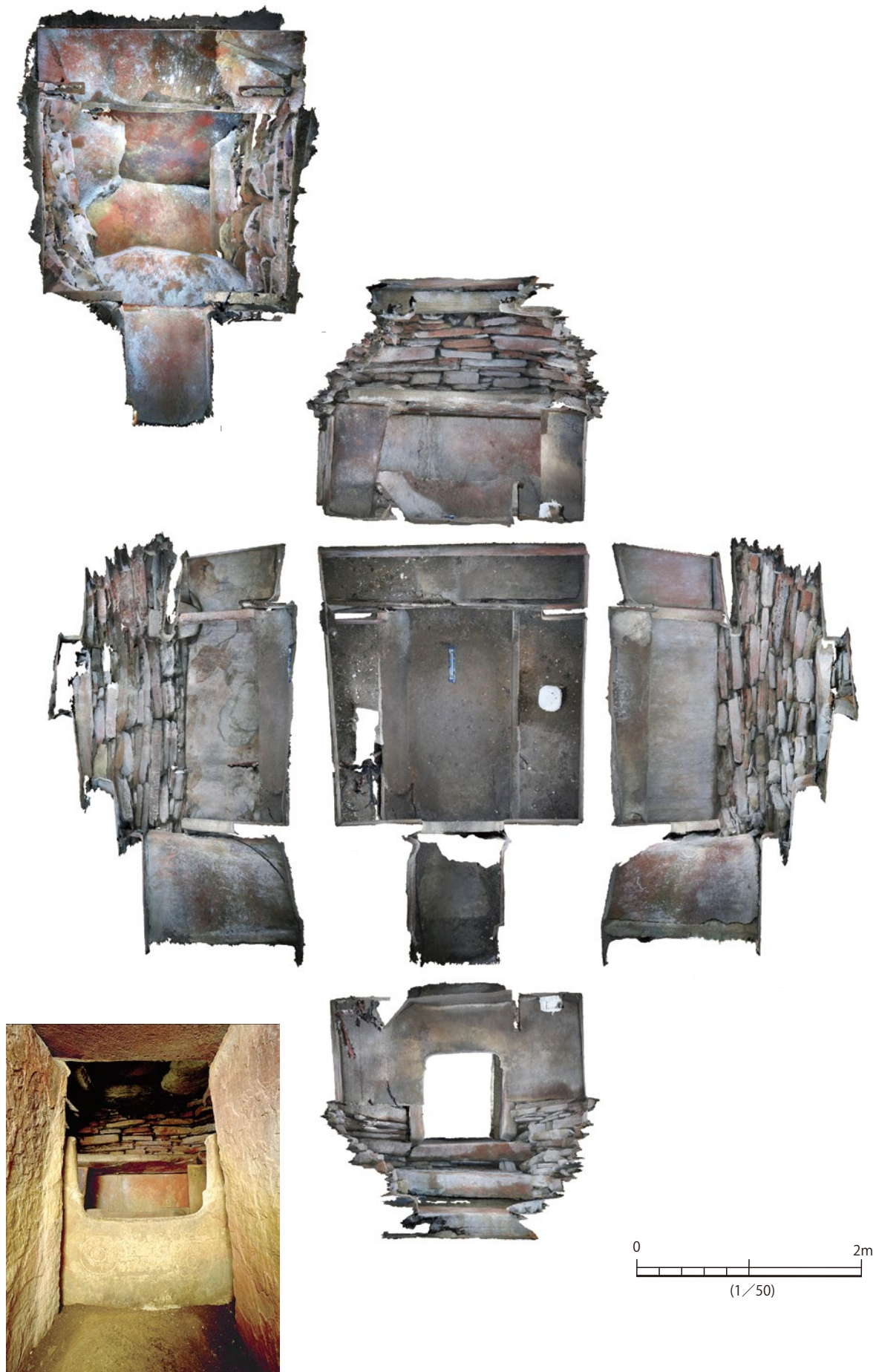


図 110 田川内 1 号古墳石室三次元モデル及び石室写真（左下 羨道部より玄室を臨む）



图 111 田川内 1 号古墳玄室



图 112 田川内 1 号古墳出土遺物

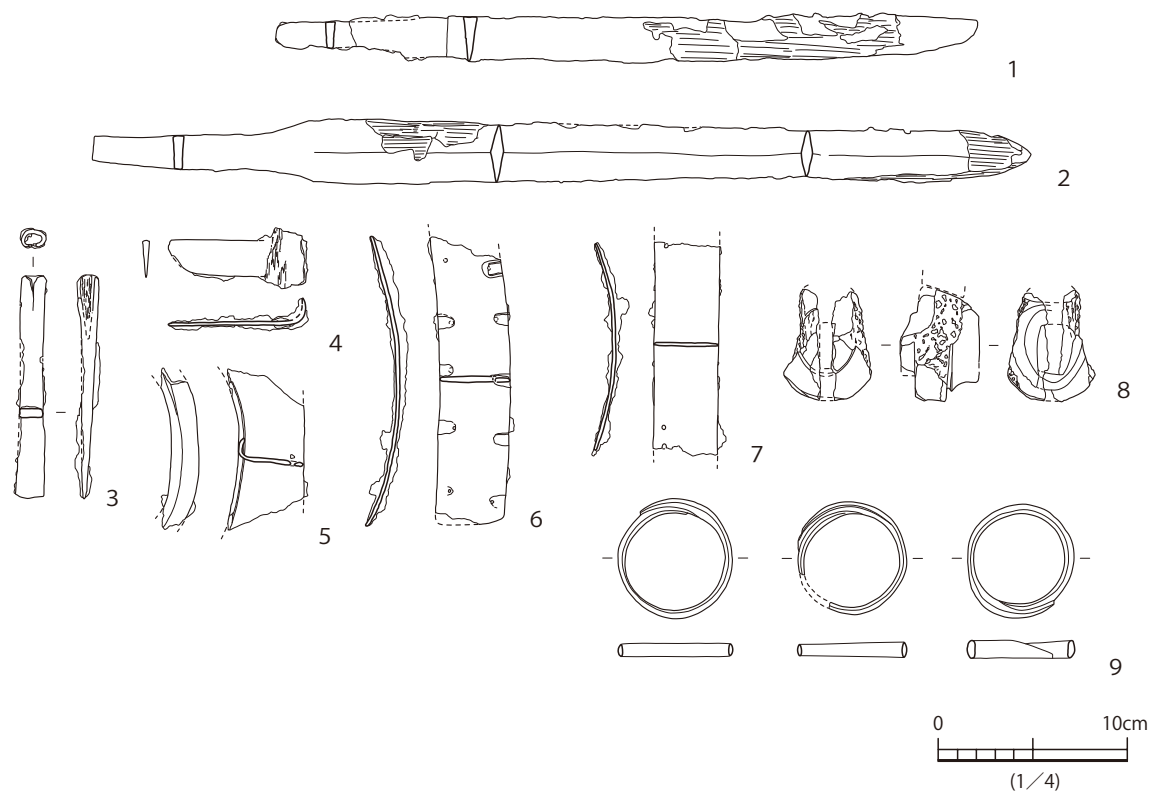


图 113 田川内 1 号古墳出土遺物実測図 (鉄器：1 鉄刀、2 鉄剣、3 鉄鑿、4 鉄鎌、5 頸甲片、6・7 革綴短甲片、8 鹿角装具、9 貝輪)

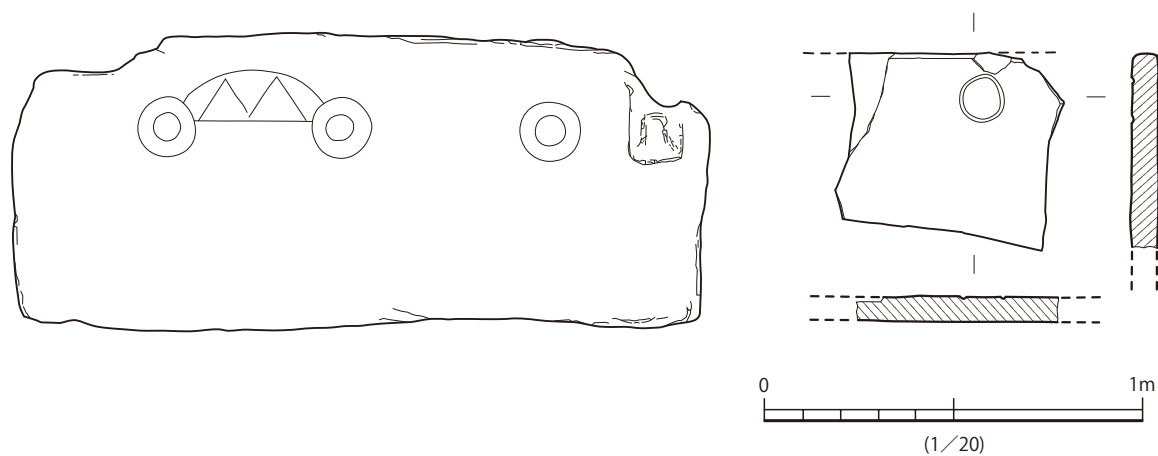


图 114 田川内古墳裝飾石材実測図(左: 2号古墳、左:3号古墳)

30 竹之内古墳^{たけのうちの}（未指定） —八代市日奈久竹之内町—

市町村コード（43202） 遺跡番号（なし）

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は不明である。もとは竹之内神社近くの線路脇（現：肥薩おれんじ鉄道）にあったといわれ、現在は近くの個人宅裏庭の祠内に移設されている。表面には線刻による文様があり、紐で吊した一重の円文が観察される。全体に剥離がひどく、本来の個数は不明である。円文の右上部に弧線の一部が見える。田川内2号のように円文と円文をつなぐ弧線であろうとされている（佐藤 1984）。

その後、2008年（平成20年）に奈良文化財研究所と熊本県立装飾古墳館が実施した調査では、円文は装飾古墳に由来する文様ではなく、後世に刻まれた阿弥陀如来像の光輪ではないかとの指摘がなされた。石材自体は箱式石棺の石材が転用されている可能性もある。なお、八代市指定史跡となっている「竹之内古墳（鬼の岩屋式古墳）」とは別に存在した古墳の石材と考えられ、ほかにも竹之内神社境内には箱式石棺の蓋石が立てられている。

2 位置及び墳形・規模

出土した位置及び墳形・規模共に不明。

3 装飾

砂岩製の石材（一点）が残るが、上記のとおり装飾古墳由来の文様であるか疑問が残る。石材は下部が台座に埋め込まれており、全長は不明である。円文の径は約18cmである。

4 出土遺物

不明

5 保存施設・修復歴等

覆屋あり。修復履歴なし。

6 図面等保管場所

『熊本県装飾古墳総合調査報告書』に掲載された図面の所在は未確認。平成20年の調査時の写真については熊本県立装飾古墳館で保管。

7 その他（年代等）

不明

（米崎寿一）

参考文献

佐藤伸二 1984「竹之内古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：p.182

図出典

図115：佐藤伸二1984に加筆しトレース

図116：熊本県立装飾古墳館提供（牛島茂・杉本和樹 2000年11月29日撮影）

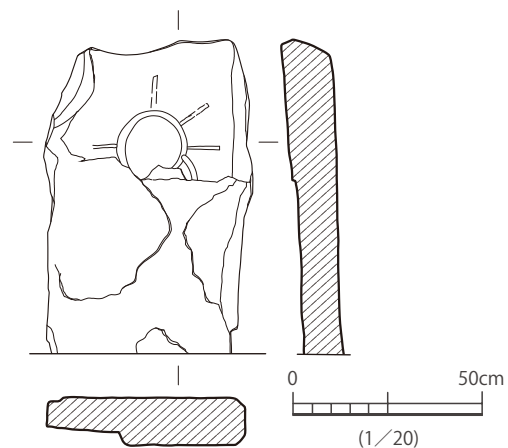


図115 竹之内古墳装飾石材実測図



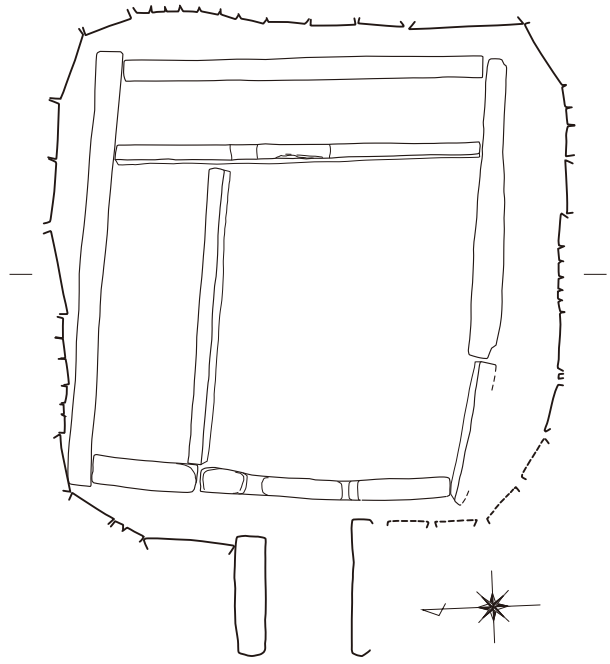
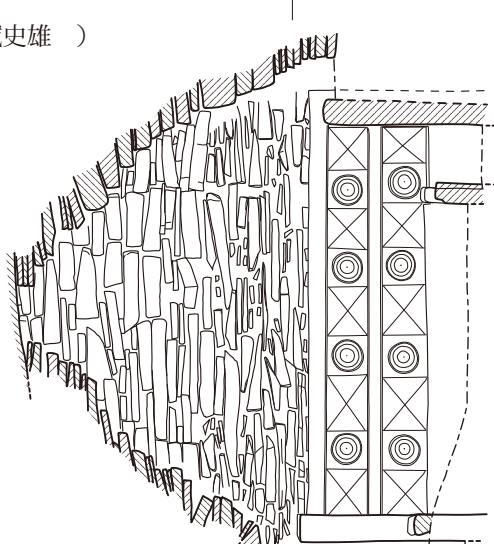
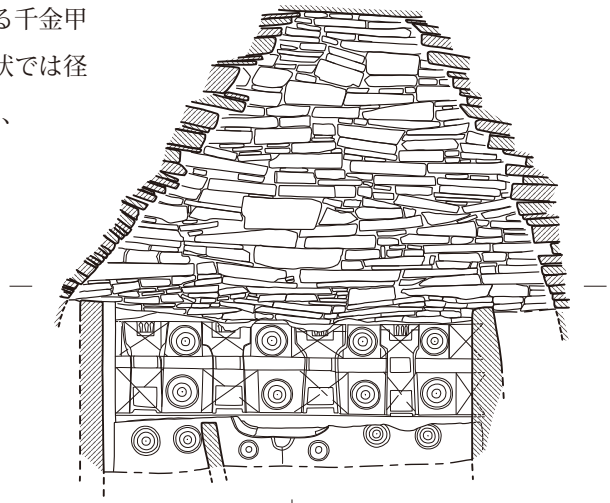
図116 竹之内古墳装飾石材

31 ^{せごんこう} 千金甲1号古墳 (大正10年3月3日国指定) ー熊本市西区小島下町勝負谷ー

市町村コード (43201) 遺跡番号 (164) 北緯 32 度 47 分 04 秒 東経 130 度 37 分 49 秒

熊本平野の北西部にあたり、丘陵の南斜面に位置する千金甲古墳群中の1基。墳丘の調査は行われていないが、現状では径12mの円墳である。西に開口する単室の横穴式石室で、羨道部は未調査であるが、細長い羨道が付く。玄室の規模は長さ270cm・幅260cm程の方形プランで、高さは約240cmである。壁面に沿って高さ80cm・厚さ15cmの阿蘇溶結凝灰岩の板石を立て巡らし石障とする。コの字形の屍床配置をとり、装飾は奥障及び左右の石障に描かれ、前障には描かれない。また奥屍の仕切石前面にも描かれる。赤・青(灰)・黄の彩色が確認できる。

(古城史雄)



参考文献

- 梅原末治 1917「飽託
郡小島町千金甲高城山
古墳群」『京都帝国大学
文学部考古学研究報告』
第1冊：pp.16 - 24
- 三島格 1984「千金甲1号
(甲号)古墳」『熊本県装
飾古墳総合調査報告書』
熊本県文化財調査報告
第68集 熊本県教育
委員会：pp.83 - 85

図出典

図117：三島1984より

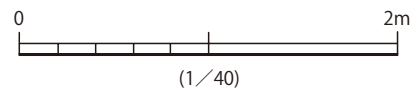


図117 千金甲1号古墳石室実測図

32 井寺古墳^{いでら} (大正 10 年 3 月 3 日国史跡) ー上益城郡嘉島町井寺富屋敷ー

市町村コード (43442) 遺跡番号 (010) 北緯 32 度 45 分 10 秒 東経 130 度 46 分 42 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

これまで 1857 年 (安政 4 年) 5 月 13 日の地震で開口し、その存在が知られるようになったとされていたが、熊本被災史料ネットワークにより、被災された家からもち込まれた古文書 (有馬家文書) の中に井寺古墳発見の様子が書かれたものが見つかった。地震ではなく採土により崖が崩れて発見されたようであり、出土遺物はこれまで知られていたもの以外に多量の鉄鏃があったようである (三澤 2018)。

調査歴は、京都帝国大学文学部考古学研究室により、1916 年 (大正 5 年) 12 月下旬から翌年 1 月中旬にかけて熊本県下の装飾ある古墳及び横穴に関する調査の一環として実施された。1964 年 (昭和 39 年) には乙益重隆・緒方勉らにより墳丘測量及び石室の実測図が作成されている。また 1982 年 (昭和 57 年) には、田添夏樹を調査団長とし、嘉島町教育委員会により範囲確認調査が行われている。2016 年 (平成 28 年) の熊本地震により甚大な被害を受け、その修復の一環として 2017 年 (平成 29 年) より継続して調査が行われている。

2 位置及び墳形・規模

緑川は中流域で加勢川と御船川に枝分かれする。その加勢川の支流、矢形川の右岸の井寺台地に位置する。1964 年に墳丘測量図を作成した乙益は、径約 28 m の円墳で、高さ 6 m とした。田添は、1982 年に新たに作成した墳丘測量図から径 38 m 程の円墳と推測し、範囲確認調査を実施したが、結果的には周溝は確認できなかった。2017 年の調査では 1982 年調査時のトレンチの再発掘が行われたが、やはり周溝ではないと判断された。現墳丘の周囲は石室床面より低くなっており、すでに削平されている可能性もある。現状の地形より前方後円墳の可能性も指摘されていたが確定するまでには至っていない。

3 石室

西に開口する横穴式石室である。現在確認されている石材はすべて阿蘇溶結凝灰岩である。主に灰黒色の凝灰岩が使用されているが、前庭部側壁と玄室壁体の一部にピンク色の馬門石製阿蘇溶結凝灰岩が使用されている (高木恭 1994)。

(1) 前庭部・羨道部

前庭部は長さ約 160cm・幅は羨門側で 160cm、入口側で 185cm を測る。羨道部は板石を左右に立て袖石とし、更にブロック状の石を 1 段積み、その上に 3 枚の天井石を架し羨門とする。前面の天井石は奥行がないため以前から前方に傾斜していたが、2016 年の熊本地震で最上段の石が落下してしまった。羨門の内法は幅 66cm・奥行き 30cm・高さは現状で 128cm である。羨道側壁は左右各 1 石の板石を配置する。左側の板石は内側に大きく傾いてしまっている。この上に 1 段割石を積み、その後天井を架す。羨道の規模は幅 50cm・長さ 82cm・高さは現状で 119cm を測る。

(2) 玄室

長方形プランの石室で、断面セクション部で長さ 306cm・幅 249cm を測る。天井までの高さは現状で 294cm を測る。側壁各 2 石、奥壁・前壁各 1 石からなる石障を巡らす。前障の両端及び左右石障の奥壁側端には組合用の「L」字形の加工痕が見られる。また前障の中央部は大きく「U」字形の繰り込みが入る。石障の内側の規模は、断面セクション部で長さ 246cm・幅 208cm を測る。現状で石障の高さは 82cm 前後である。

壁面は石障の背後から凝灰岩の切石を積み上げ、四隅に架け渡す石材は角を消すよう丸く加工されている。左右側壁では石障の上端の高さと同じレベルで各 2 個の突起を設ける。あたかも左右の石障を押さえ込むかのようなものである。また奥壁側の突起は、奥障より割石 1 石分高いレベルで 2 個の突起を設ける。石障の上に石

棚を載せれば、石棚は奥壁の突起と奥障に挟み込まれた形となる。その他壁面で特徴的なことはブロック状の積石の一方を「L」字形に加工し他の積石と組み合わせる切組積の手法が見られることである。天井は内面をくりぬいた2石からなり、仰ぎ見ると長楕円形となる。石室の全体形はドーム形となる。

現在石障以外の付帯施設は見られないが、石棚をもつ奥屍床とその前に通路を挟んで左右に床屍があったと考えられている。床には石棚や屍床仕切石の破片が残っており、京大報告では、石棚は2つに割れ小口に装飾文様があるとされている。2つの石材を合わせれば長さ七尺余(約212cm)・幅三尺(約90.9cm)となり、石障幅の内法が約208cmであることより石棚に間違いはない。乙益等の調査で実測が行われているが、既に3石となっており幅91cm・長さの合計は約200cmで小口には「ハシゴ」と実測図に記されているので、梯子文が描かれていると想定され、ほぼ京大報告の内容と一致する。装飾が描かれている方の端部は「L」字形に加工され厚みは約15cm・反対側の端部の厚みは約12cmである。この石棚端部の加工や有馬家文書に柱石の記載があることから、石屋形の袖石のようなものがあった可能性がある。また左右石障の上端面には奥壁より約90cmまでは装飾が描かれていないことから、石棚は左右石障に架け渡し奥壁の突起で押さえられていたと思われる。乙益等の調査では、他にも7点の石材片が実測されている。屍床仕切り石と思われ、実測図には浅い挟りや、小口に梯子文のような表現されているものがある。

4 装飾

詳細は後述するが戦後に現代の顔料で上塗りされた可能性があり、顔料調査では赤・緑(福岡県下における顔料に類似)・白の3色は確認されているが、灰(青)色は確認できていない(朽津他2000)。しかし本来は灰(青)色があった箇所、近代の顔料を重ね塗りしたために確認出来なかった可能性は残る。施文部位は以下のとおりである。

- ・羨道部天井3石小口面：直弧文？・梯子形文？
- ・袖石(前面・側面)：直弧文・梯子文
- ・羨道 側壁：直弧文・梯子文
- ・石障 前障 上面：(含剝込部) 鍵手文、内面：直弧文・梯子文・車輪文、外面：直弧文
右石障 上面：鍵手文 内面：直弧文・梯子文・車輪文
左石障 上面：梯子文？ 内面：直弧文・梯子文・車輪文
奥障 内面：直弧文・梯子文・車輪文

ただし石障の上面は、石棚が架かっていたと思われる箇所には施文されない。

- ・石棚(前面小口)：梯子文

このうち、袖石上の石材や羨門天井石小口部分の装飾(図124)・前障外面の装飾(図122)は今回初めて公になるものであるが、その存在は以前から知られていたようである。羨門の袖石から天井石小口にかけての一連の装飾についてスケッチながら高木正文により図が作成されている(図123)。「熊本県装飾古墳総合調査報告書」作成時の資料の中に紛れていたことから、当時その存在は既に認識されていたと思われるが、何故かそのことに言及されなかった。また前障外面の装飾の存在も以前から指摘されている(藏富士1999)。現在模式図にあるような線は確認できなくなっているものもあるが、左右ともに袖石と袖石の上に載るブロック状の石材及び天井石小口面に描かれた対角線文や梯子文は連続しており、少なくとも上段のブロック状石材や天井石小口の装飾は、石材積載後に施された可能性が高い。以前から図121のように羨道天井石は前方に傾斜してしまっており、羨道正面図に正確に装飾文を表現できないため、天井石材が水平に載っているものとして別図124を作成した。ただし以前から知られている最上段の羨道天井石小口の装飾は現在確認できなくなっている。

5 出土遺物

京大報告によれば、奥屍床に直刀と鏡が、左右屍床には人骨があったといわれている。一方で鏡は石柵の上にあったとの説もある（乙益 1984）。1901～1902年（明治34～35年）頃に盗掘を受け遺物は散逸してしまったという。直刀4本が熊本市博物館に保管されるのみである。その他京大報告には「封土の附近より埴輪円筒の破片とおもわるるものを拾得せりと雖も、如何なる部分に存在せしか明ならず」の記載がある。また有馬家文書によると他に槍・鉄鏃も出土しているようである。

6 保存施設・修復歴等

装飾古墳白書によると、「昭和25年、落書き等で荒れていた装飾石材の欠損部をセメント等を使って充填し復元を図るという工事が行われた」とある（上野 1974：p.22）。また日本装飾古墳の研究に、「乙益氏の記述によると奥壁の一部は近年補修されたものである」との記載がある（斉藤 1974：p.210）。顔料の調査では、井寺古墳で青とされている所からチタンが検出され、チタンを主成分とする顔料が普及したのは19世紀以降との指摘があること（朽津他 2000）から、1950年（昭和25年）の補修で塗りなおされた可能性がある。

2016年（平成28年）4月の熊本地震により甚大な被害を受けた。現在修復にむけて委員会が設置され、復旧に向け動き始めており、落下した羨道天井石は、石柵片、仕切石片と一緒に周辺の倉庫で保管中である。

7 図面等保管場所

墳丘測量図・石室実測図・石柵片等実測図は、人吉市教育委員会（乙益文庫）で保管。

8 その他（年代等）

築造年代は、前方後円墳集成8期（陶邑編年TK23～47）頃と考えられる。

（ 古城史雄 ）

参考文献

- 上野辰男 1974「第3章 熊本県の装飾古墳とその保護対策2 現状とその保護対策 ウ本県および国の施策」『熊本県の装飾古墳白書』原口長之編 熊本県教育委員会：pp.21 - 26
- 乙益重隆 1964「井寺古墳」『装飾古墳』小林行雄編 平凡社：pp.88 - 89
- 乙益重隆 1983「鏡式不明鏡 79 井寺古墳」『肥後考古』第3号 肥後古鏡聚英 肥後考古学会：pp.95 - 96
- 乙益重隆 1984「井寺古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.88 - 91
- 朽津信明・下山進・川野邊渉 2000「熊本県下の装飾古墳の緑と青の顔料について」『熊本県立装飾古墳館平成11年度研究紀要』第4集：pp.23 - 34
- 藏富士寛 1999「装飾古墳考」『先史学・考古学論究』Ⅲ 龍田考古学会：pp.87-103
- 斉藤忠 1973「井寺古墳」『日本装飾古墳の研究』：p.210
- 田添夏樹 1982「史跡 井寺古墳」嘉島町教育委員会
- 橋口剛士 2017「平成28年熊本地震による史跡井寺古墳への被害と今後の見通し」『平成28年熊本地震による被災古墳の現状と課題』第20回九州前方後円墳研究会発表要旨集：pp.37 - 44
- 濱田耕作 1917「第2章第1節 上益城郡六嘉村大字井寺古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴』京都帝国大学文学部考古学研究報告 第1冊：pp. 8 - 16
- 文化庁・熊本県教育庁 2017「第2章第3節 7.史跡 井寺古墳」『平成28年熊本地震による古墳の被災状況について』：pp.53 - 63
- 三澤純 2018「新出有馬家文書の概要と井寺古墳関係史料発見の意味」第5回熊本被災史料レスキューネットワーク講演会「学んで守ろう熊本の文化遺産」講演会資料

図出典

- 図118・121・125：乙益重隆他1964年作成実測図を新たにトレース（図121 羨道正面の装飾は新たに作成）
- 図119・120：熊本県立装飾古墳館提供（牛嶋茂・杉本和樹1998年6月4日撮影）
- 図122・124：新規作成（現物・熊本県立美術館及び県立装飾古墳館レプリカを実測）
- 図123：高木正文作成模式図をトレース

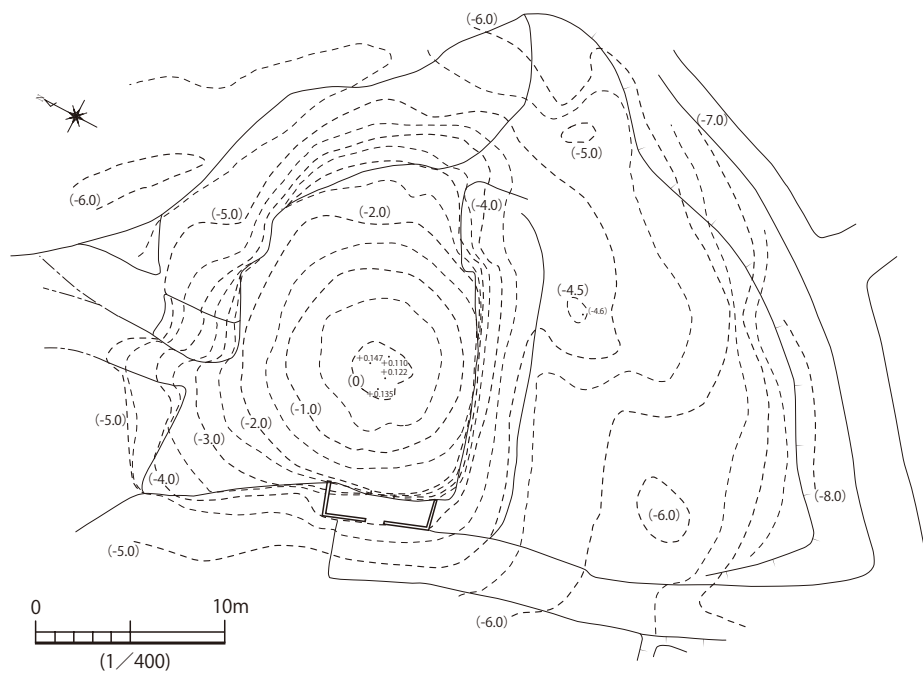


图 118 井寺古墳墳丘測量図



图 119 井寺古墳石室



图 120 井寺古墳天井部

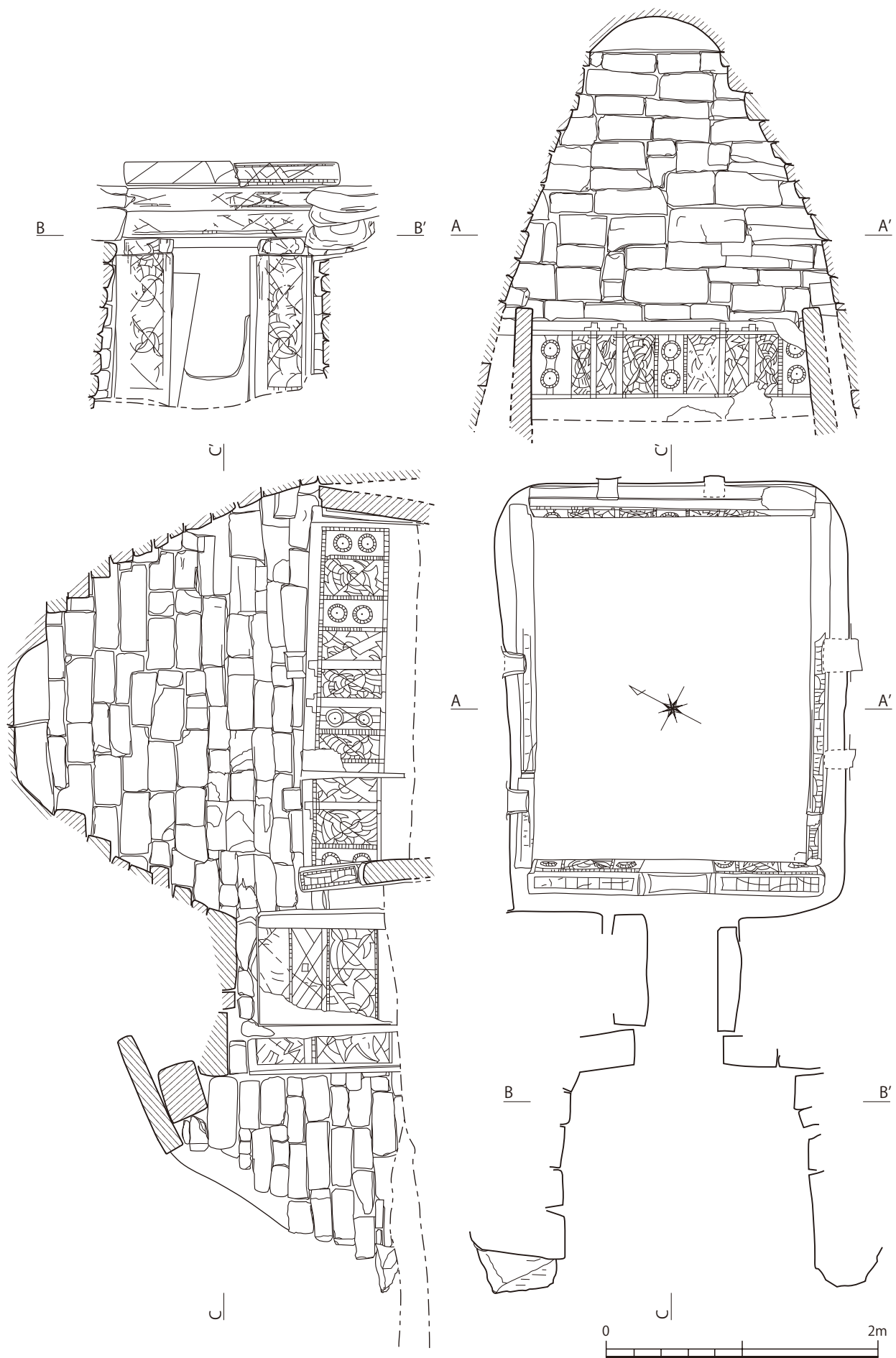


图 121 井寺古墳石室実測図

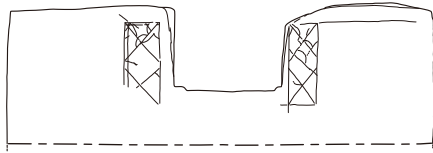


図 122 井寺古墳前障外面装飾実測図

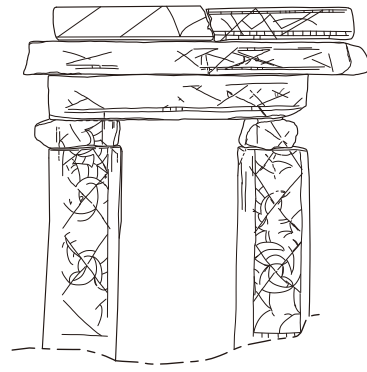


図 124 井寺古墳羨門正面装飾実測図

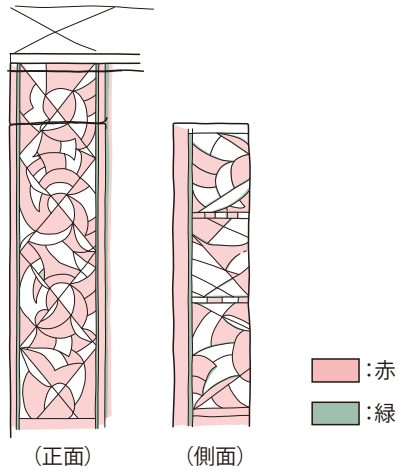
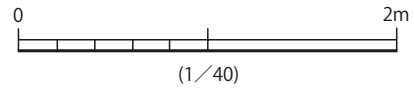


図 123 井寺古墳左袖石装飾模式図



(石棚)

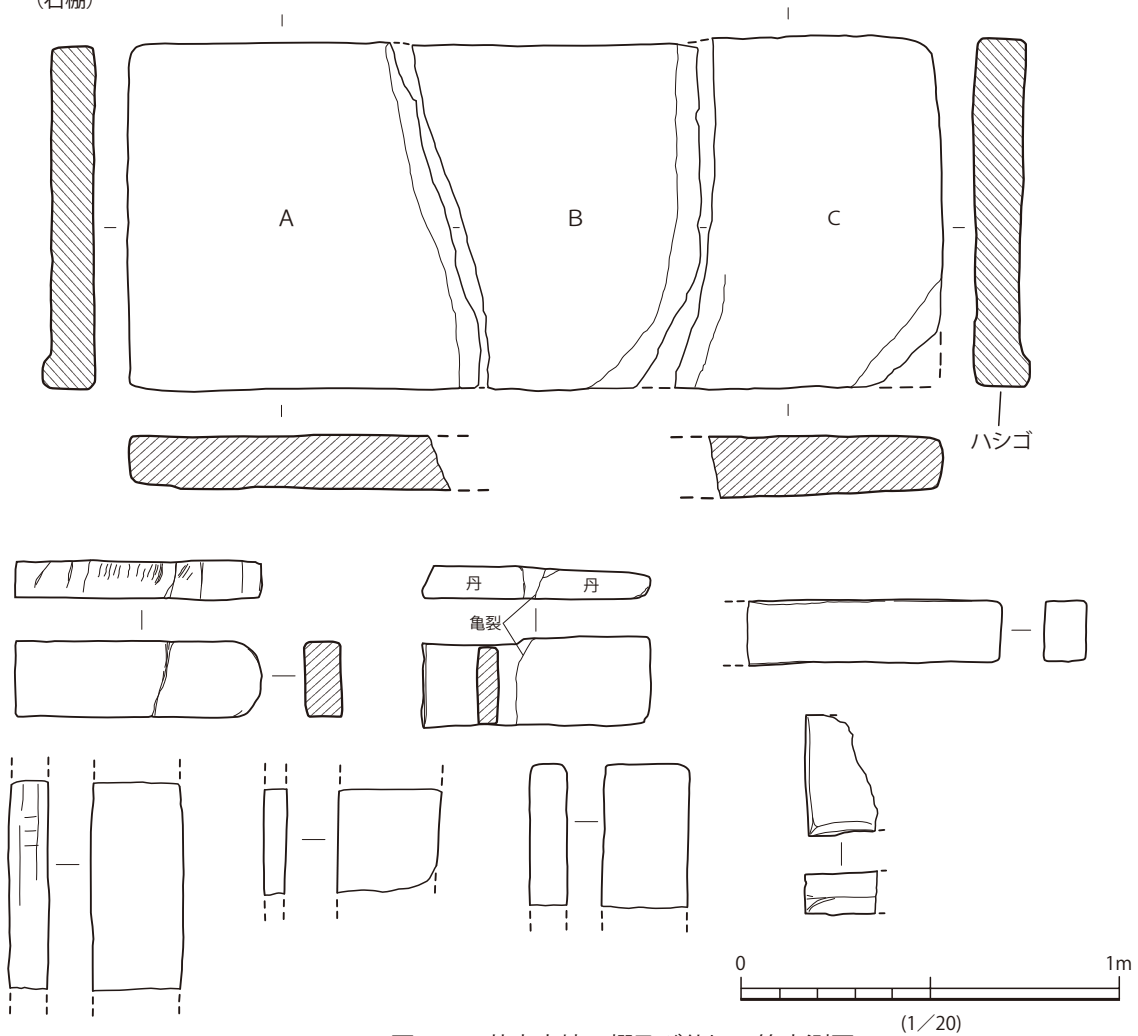


図 125 井寺古墳石棚及び仕切石等実測図

33 ^{つるぎばる} 劔原2号墳 —上益城郡嘉島町大字北甘木劔原—

市町村コード (43442) 遺跡番号 (026) 北緯 32 度 44 分 49 秒 東経 130 度 46 分 31 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

熊本都市計画事業嘉島東部台地土地地区画整理事業に伴う発掘調査によって 2001 年（平成 13 年）に発見されたもので、石室の基底石及び石障の前障部が残存しており、前障部に装飾があることが確認された。

2 位置及び墳形・規模

緑川は中流域で加勢川と御船川に枝分かれする。その加勢川の支流である矢形川の右岸、北甘木台地の西側に位置する。これまで正式名称がなく石塚遺跡内古墳などと呼ばれていたが、この個所には既に劔原古墳として遺跡地図に登録されていたので、今回発見された古墳を劔原2号墳とされた。この台地一帯で多くの遺跡が調査されており、現在報告書刊行に向け整理中であり、劔原2号墳も未発表であるが嘉島町教育委員会のご厚意で特別に掲載を許可して頂いた。なおすぐ北側の井寺台地には直弧文の装飾で有名な国指定史跡井寺古墳がある。

墳丘は完全に削平され横穴式石室の基底石がかるうじて残されていたに過ぎないが、周溝が確認されており、径 25 m 程度の円墳であったことがわかる。

3 石室

南に開口する単室の横穴式石室で、墳丘のほぼ中央に位置する。石材は玄室と羨道入口側の 2 石までブロック状の厚みのある凝灰岩である。それより南側の羨道側壁石材は、扁平で写真の感じでは安山岩のように思われるが確認はできていない。基底石のみの残存で床面も破壊を受け確認できていない。そのためか羨道部は地面のラインが書かれていなかったため、やむを得ず各石の下端を結んで地面を表現した。その他にも幾つかの不明点があったが既に 15 年以上が経過しており調査担当者も変わっており確認することができなかった。

(1) 羨道部

羨道は玄室の中央よりやや左寄りに付く。玄室入口部より約 3 m まで石列が確認できる。石積みは一部で 2 段の箇所が見られるが多くは最下段の石材のみである。幅は入口側で約 1.2 m、南側で 1.5 m 程になり外に向かって徐々に開いていく。石列が途切れた後も南側へ 3 m 程にわたって掘り込みが確認できる。また右側石列が途切れた東側に部分的に掘り込みが表現されている。

カラー写真で見ると玄室の外縁部分を囲むように土色が違って見える箇所があり、この掘り込みと併せて石室構築に伴う掘方の可能性もあるのではないかと考えたが、羨道石列の左側や玄室の外縁に掘り込みラインは検出されていないのでそれ以上言及できない。また羨道の掘り込みは、すべてに石積があったとするなら 6 m 以上の羨道になってしまう。この時期の石室で羨道が長いとされる千金甲 1 号古墳でも 3 m 程であるので、現状以上の石積は無く、墓道のようなものが考えられる。石材の種類を根拠にするなら玄門側 2 石程までに天井石が載り、それより南は、天井石は無く側壁だけの可能性も考えられる。床面は既にカクランを受けていたためか、或いは掘りすぎたためか表現されておらず、レベルの記入もなく横断面 (c-c') にも床面は表現されていない。

(2) 玄室

玄室の平面形は、長さ約 2.9 m、幅 2.8 m のほぼ方形プランである。削平を受け、基底石とその上の石材が残っているに過ぎない。更に奥壁中央部は溝 (トレンチ?) により壊され、かるうじて最下段の石材 1 段が残存している。

石障は前障だけが確認できる。平面図には前障の中央から三角形に広がる箇所 (図 127 斜線) が描かれ

ており、そこにレベルが書かれている。前障側で 17.0m 程、中央部は 16.95 m 程で、この個所のみ床面が残存していた可能性がある。その他 A-A'・B-B' 横断面図にのみ 16.76～16.79 m 程に線（2点破線）が引かれている。石積の底レベルは左側壁で 16.78m 前後、右側壁で 16.89 m 前後なので、表記された線のレベルだと若干低くなってしまふ。このレベル以下が破壊を免れていたのかも知れないが一切説明が書かれておらず不明である。調査では更に 16.55 m 程まで全面を掘り下げている。須恵器や鉄鏃・馬具などの遺物は 16.6～16.7 m 付近に集中して出土している。このことから考えると玄室内は全面にわたってカクランを受けており、石障や仕切り石の掘方痕跡も確認できなかつたようである。本来の床面レベルは前障の装飾文様のレベルやその直下の赤彩を考慮すると 16.85 m 前後であり、前述した三角形部分のレベルより 10～15cm 低くなるが概ね 16.85 m 前後が床面ではないだろうか。玄室側からみた前障見通し図 B-B' には 16.85 m レベルに極部分的だが線が引かれており、特に説明もないがこのラインを床面と想定していたのかも知れない。

前障は 2 石からなっており、玄門から見るとほぼ中央で 2 石が接しているように見えるが、玄室の中から見ると、左側壁から 130cm、右側壁からは 170cm で 20cm 程左に寄る。下位部分のみの残存で、右側の突出した個所に装飾が認められる。この突出部の上端面にも赤の彩色が確認出来るのでこの高さで完結していることがわかる。そのレベルは 17.2 m で床面を 16.85 m とするなら 35cm 程の高さとなり、入口の中央にあってもさほど邪魔になるものではない。また羨道と玄室の床面レベルは不明であるが、石積レベルからは羨道と玄室の床面段差はほとんどないと考えられ、その場合は前障の中央部が大きく抉られる形状が一般的である。前障中央部を大きく抉る古墳としては、千金甲 1 号古墳・井寺古墳・田川内 1 号古墳があり、これらの抉られた個所の高さは床から 30～40cm 程である。この個所は前障の一番低い入口部に当たると思われる。前障の形状は、やはり 2 石からなり千金甲 1 号古墳に類似する可能性が高い。

4 装飾

明確な装飾文様は前障の外側に確認できる。上下に横線を引き、その中に対角線文を描く。写真を見ると赤と黒で塗り分けているように見えるが分析は行われていないので、黒については確かではない。前障の内側は、下位の横線と赤彩は認められるがそれ以外の沈線は確認できない。また内外面とも下位横線の下にも赤彩が認められる。また玄室内奥壁側で出土した石障片（図 128）は、高さ 22cm・幅 13cm・厚さ 8 cm 程の小片である。天地は不明であるが 2 条の横線のある方を天として図化した。前障の装飾を参考にするなら上下の横線の中に対角線を描く構成で、横線と対角線の交点までの間隔は 9.7cm 程であるので、上下の横線の間隔は約 20cm と考えられる。この構成が玄室内では千金甲 1 号古墳のように 2 段になっているのかも知れない。なおこの石障片は赤色のみが認められ、塗り分けは行われていない。

5 出土遺物

遺物の種類や点数は今後の整理で変わると思われるが、現段階では羨道部で鉄製品 2 点と耳飾り 2 点が出土。玄室内で、耳飾り 1 点・鉄製品 2（うち 1 点は鉄鏃）、馬具（雲珠？） 1 点が出土し、更に掘り下げると須恵器片 2 点や鉄製品 7 点（うち鉄鏃 1）が検出されている。

6 古墳の保存状況

保存のため、調査後に埋戻されている。

7 図面等保管場所

嘉島町教育委員会で保管。

8 その他（年代等）

築造年代は、石障の外面にも装飾が描かれていることや玄室と羨道の床面の差がほとんど無いと推察されることから、前方後円墳集成 8 期頃と考える。

(古城史雄)

参考文献

中川裕二 2015「嘉島町東部台地遺跡群—C エリアにおける調査概要報告—」嘉島町文化財調査報告書 第1集

図出典

図126・127：嘉島町教育委員会提供実測図をトレース

図128：2019年古城作成実測図をトレース，写真（村田百合子・松本智子・野下智美 2017年9月5日撮影）

図129：熊本県立装飾古墳館提供（池田朋生 2001年撮影）

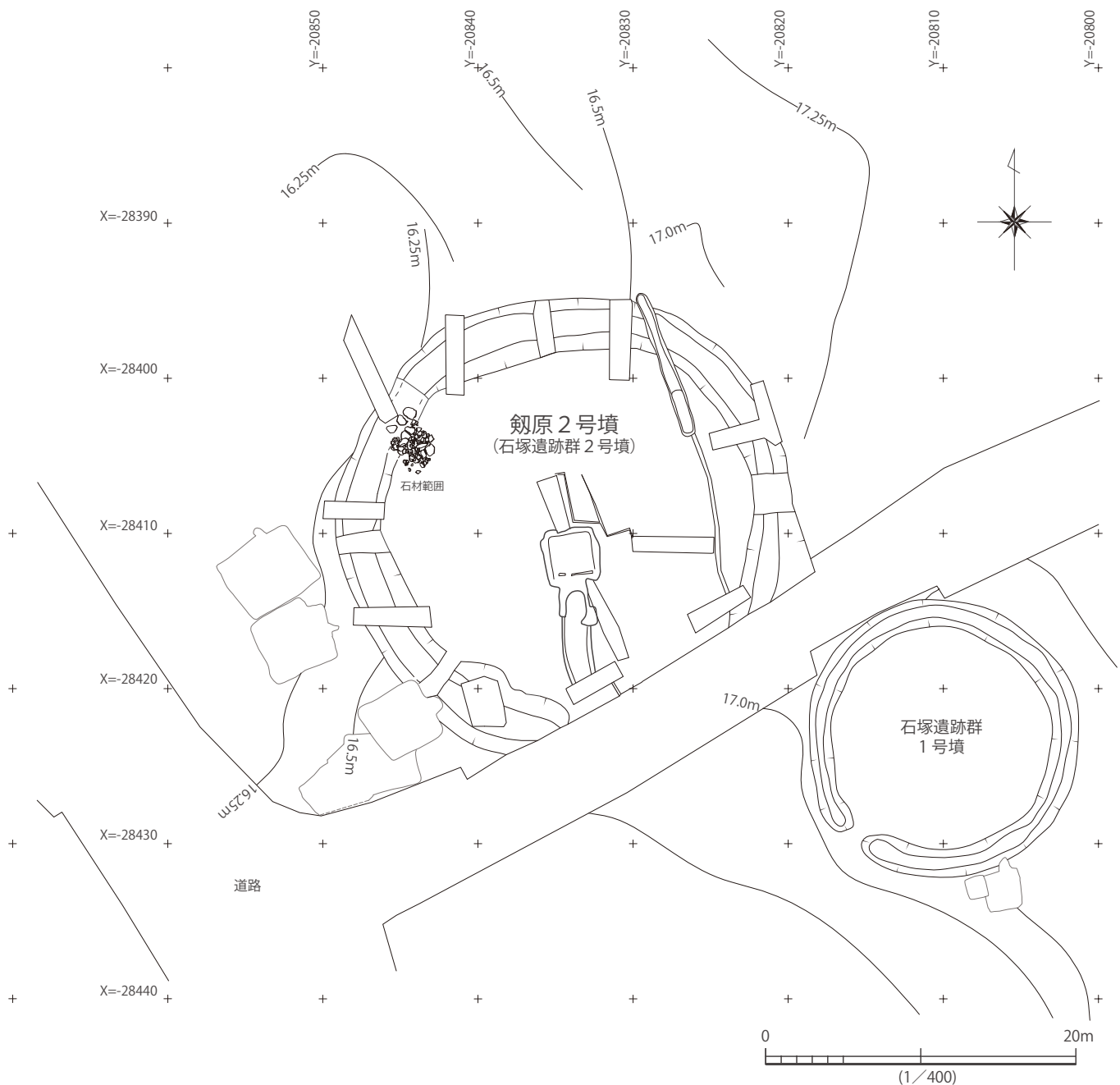


図126 劔原2号墳墳丘測量図（座標は日本測地系による数値）

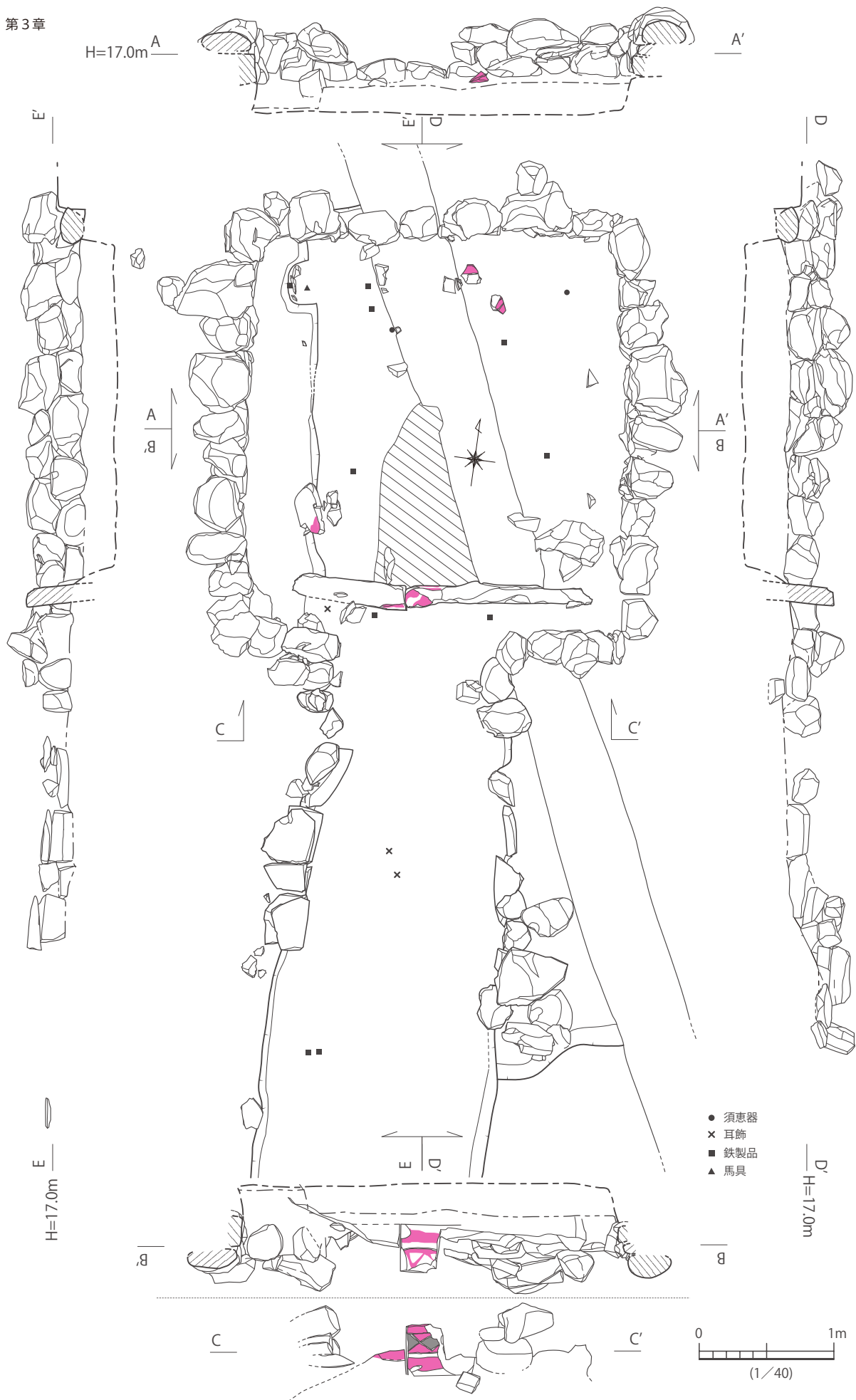


图 127 劔原 2 号墳石室実測图

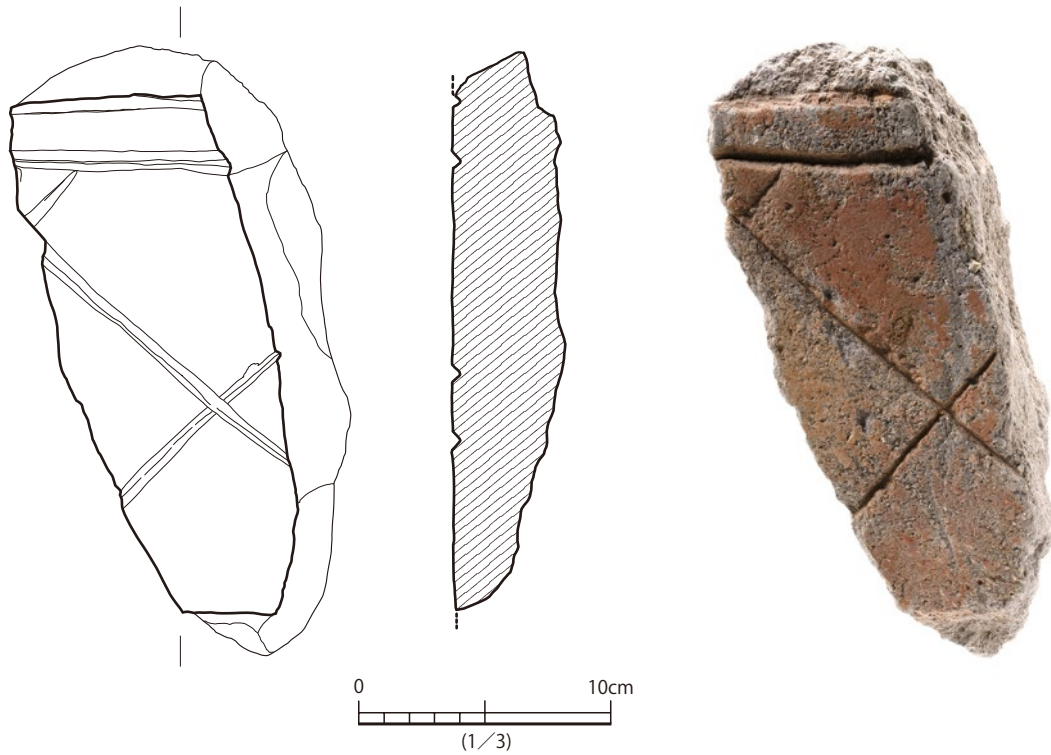


図 128 劔原 2 号墳玄室内出土石障石材実測図及び写真



図 129 劔原 2 号墳前障裝飾及び全景

34 いまじょうおおつか 今城大塚古墳 (昭和 54 年 7 月 4 日町史跡) —上益城郡御船町滝川 1373 番地—

市町村コード (43441) 遺跡番号 (026) 北緯 32 度 42 分 57 秒 東経 130 度 47 分 05 秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯はわかっていないが、既に『肥後國誌』に陣村の座敷塚として紹介されている。1913 年 (大正 2 年) に和田千吉により、また 1918 年 (大正 7 年) に京都帝国大学により調査が行われている (梅原 1919)。その後 1970 年代前半頃に緒方勉らにより墳丘測量、石室実測や装飾文様の実測が行われている。

2 位置及び墳形・規模

御船川左岸に沿って南東から北西方向にのびる台地上で、御船川を北に望む台地の縁辺近くに築かれている。正式な墳丘調査は行われていないが墳丘測量図から、前方後円墳とされている。墳丘の周囲が削平を受けているため本来の形状や規模は不明だが、現状での残存長は約 30m である。

3 石室

後円部に築かれた単室両袖式横穴式石室で西に開口する。石材はすべて阿蘇溶結凝灰岩である。

羨道は、左側壁側で約 330cm・幅は玄門側で約 130cm、羨門側で約 150cmを測る。大量の土砂が流入し埋もれていて高さは正確にはわからないが 150cm以上と考えられる。両側壁とも 3 石から成り、その上に直接天井石が載る。現在玄室側の天井石 1 石だけが残存している。この天井石は両袖石の上に載り、玄室の前壁体の一部も兼ねている。

玄室の形状は長方形を呈し、長さは、左側壁で約 330cm・右側壁で約 333cm、幅は奥壁側で約 212cm・玄門側で約 188cmを測る。両袖石は側壁に対して垂直に突出せず、羨道側に突出しており、玄室中央で長さを測るなら 358cm程となる。天井までの高さは土砂が堆積し正確ではないが 380cm程度と推定される。奥壁 1 石・左側壁 2 石・右側壁 1 石の腰石を配置する。なお右側壁の腰石には、袖石と組み合わせる個所に L 字形の加工が施されている。奥壁側はこの腰石の上から石棚が架せられる。奥壁側はこの石棚に直接ブロック状の石材が積まれ奥壁となる。両側壁は腰石状端面の奥まった位置からブロック状の石材を積み壁体とし、石棚の上にブロック状の石材が直接載ることはない。壁面を構成するブロック状の石材の幾つかには L 字形の切込が観察できる。所謂切組積の技法が使用されている。また壁面四隅の角を消すことはしておらず、ドーム形天井にはならない。その他石棚の先端部の下の両側壁に棒状のものを差し込んでいたと見られる円形の刳り込みが確認できる。

4 装飾

装飾は、奥壁腰石の全面に描かれていたようであるが、少なくとも 2000 年以降赤以外の色は確認出来なくなっており、文様も判然としなくなっている。装飾に関して肥後國誌では「東ノ方大石ヲ壁ニシテ朱ニテ塗り蛇ノ目ノ紋三ツ付タリ」とある。装飾文様の模写は、1913 年 (大正 2 年) の和田千吉・1918 年 (大正 7 年) の京都帝国大学・1970 年代頃の緒方により作成されているが、それぞれ違いがある。和田は緑、朱、黄等の彩色があるとされるが、京都帝国大学や緒方の調査では朱 (赤) 以外は確認されていない。三者に共通するのは右端上段の 4 つの隅丸方形のようなもの (緒方 1976 では「田の字形」と表現)、左端上段の盾のような模様などである。その他位置は違うものの円文が書かれていたのは間違いのないようである。

5 出土遺物

一部の床さらえて大型器台の須恵器の存在が確認されている (緒方 1984) とあるが詳細不明。その他熊本県の装飾古墳白書 (1974) には、変形獣文鏡・鉄銚・鉄鏃・鉄剣・玉類などの出土があったとされるがやはり詳細は不明である。また羨道入口の南側に石製品があり長年「石函」とされてきたが、腰掛形石製品が反転したものであることが明らかになった (高木正 2017)。

6 古墳の保存状況

京都帝国大学により作成された石室実測図でも大量の土砂が石室内に流れ込んでおり、墳形も 1970 年代頃の図と大きくは変わっていないが、戦後に墳丘上で耕作が行われた影響で昭和 40 年代頃石室の一部が崩れるなどの影響が出始めていた。2015 年（平成 27 年）7 月の豪雨で墳丘の一部が崩落、翌年 2016 年（平成 28 年）の熊本地震により墳丘に大規模な亀裂、入口が崩落土でふさがり石室内部の確認が出来ない状況となる。

7 図面等保管場所

石室・墳丘測量図面の保管場所は未確認。1999 年撮影写真は熊本県立装飾古墳館で保管。

8 その他（年代等）

石室平面プラン、壁面四隅の角を消さない構築方法や石柵の構造など、熊本県南部の氷川町の大野窟古墳との関連がうかがえる古墳である。一方で装飾は彩色を中心とした壁画系装飾であり八代海沿岸地域とは一線を画し熊本平野以北地域との関連がうかがえるなど熊本県北部地域、南部地域両者の特色を合わせ持つ古墳である。装飾文様や石室形態から前方後円墳集成 10 期（TK43 型式）頃と考えられている。

（ 古城史雄 ）

参考文献

- 梅原末治 1919 「肥後国下益城郡今城の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第 3 冊：pp.30 - 33
 緒方勉 1975 「今城大塚古墳」『久保遺跡』熊本県文化財調査報告第 18 集 熊本県教育委員会：pp.124 - 128
 緒方勉 1976 「今城大塚古墳」『熊本の装飾古墳—熊本の風土とところ—』熊本日日新聞社：pp.142 - 143
 緒方勉 1984 「今城大塚古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会：pp.92 - 94
 高木正文 2017 「熊本県御船町今城大塚古墳の腰掛形石製品」『古文化談叢』第 78 集 九州古文化研究会：pp.51 - 56
 森本一瑞 1772 『肥後國誌』

図出典

- 図 130・131 石室実測図：緒方勉 1984 より
 図 131 右上 腰掛形石製品実測図：高木正文 2017 より

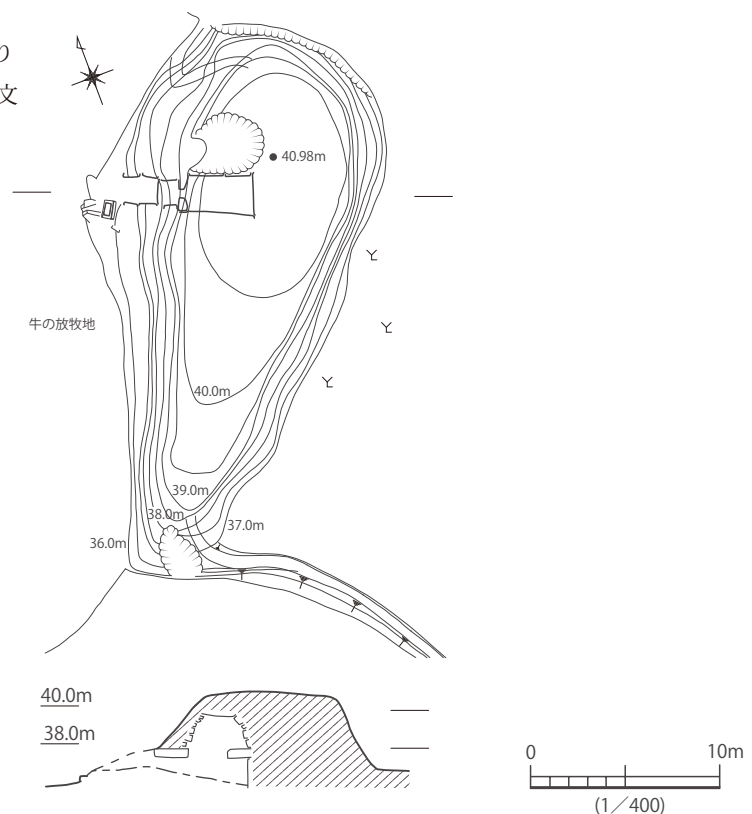


図 130 今城大塚古墳墳丘測量図



图 131 今城大塚古墳石室及び腰掛形石製品実測図

35 城古墳群^{じょう}（昭和42年5月30日市史跡） 一字土市上綱田町字城一

① 城1号墳

市町村コード（43211） 遺跡番号（006） 北緯32度40分25秒 東経130度33分13秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

1960年（昭和35年）、蜜柑園の暗渠掘削中に巨石が掘り当てられたことにより、古墳の存在が明らかになった。これを受けて、同3月に富樫卯三郎氏、松本雅明氏、宇土高校社会部による緊急発掘調査が実施され、石室内の発掘及び実測が行われた（宇土市教育委員会1981）。その後、1976年（昭和51年）8月の地形測量を経て、1982年（昭和57年）には蜜柑園芸用の簡易道路建設に伴う発掘調査が行われた（宇土市教育委員会1983）。

発見当初は「塩屋2号墳」の名称で認識され、1962年（昭和37年）に遺跡登録がなされた（熊本県教育委員会1963）が、後に現在の「城1号墳」に改められた。

2 位置及び墳形・規模

宇土半島の主峰である大岳（標高477.6m）から北北西に延びる丘陵上に中世の綱田城（田平城）が存在し、その城内の一面に城1号墳・2号墳が存在する。1号墳は標高20m付近にあるが、綱田城の築城等に伴い改変された可能性が高く、本来の墳丘からはかなり変化しているとみられる。残存する墳丘の形状は、東西約20m、南北約25mの楕円形をなすことから円墳とみられる。現状の高さは西側で約5m、東側で約1.5mである。

3 石室

主体部は北西方向に開口する石障系横穴式石室で、平面形は方形プランである。石室上半部は失われているが、壁体を持ち送ってドーム状天井をなすとみられ、典型的な肥後型横穴式石室といえる。玄室石障内部の内法は、長さ約270cm、幅約250cmで、仕切石によりコ字形の屍床配置をなす。残存していた壁体の高さは羨道付近で145～183cm、奥壁付近では123～144cmを測る。

玄室及び羨門部の壁体は安山岩の割石小口積みで、天井石・楣石も同じく安山岩を用いる一方、石障及び仕切石には砂岩を用いている。その他、床面には厚さ約8cmの円礫が敷かれている。羨道部側の石障、いわゆる前障により玄門部はかなり狭く、この部分の前障には幅46cm、深さ11cmのU字形の削り込みがある。玄門より外側の羨道にあたる部分は未調査だが、石積みによりラッパ状に開く側壁が構築されているとみられる。

4 出土遺物

玄室内では、左屍床から人骨の細片が出土したのみで、副葬品は発見されていない。その他、墳丘北東側裾部から二重口縁の土師器壺が出土している。1982年（昭和57年）の調査では葺石や埴輪は確認されていないが、墳丘裾部から二重口縁の土師器壺が出土している。

5 保存施設・修復歴等

石室は1960年（昭和35年）の発掘調査後に埋め戻して保存され、現在は実見することができない。

6 図面等保管場所

石室出土の人骨資料は不明だが、墳丘出土の土師器は宇土市教育委員会で保管している。

7 その他（年代等）

北東側の墳丘裾部から出土した二重口縁壺は、布留式新段階に属す時期と考えられる。また、石室構造から付近に所在する城2号墳に続く5世紀前半代の築造とみられ、この後にヤンボシ塚古墳が続くと考えられる（高木2002）。

城1号墳と2号墳，ヤンボン塚古墳とは距離わずか数百mの至近距離に位置し，時期的にも大きな差は無いと考えられる。それにも関わらず，3基の古墳の石室構造がそれぞれ異なる点は重要である。また，石室に用いる石材の違いも注意が必要である（高木 2000）。

（ 芥川博士・藤本貴仁 ）

参考文献

熊本県教育委員会 1963『熊本県埋蔵文化財遺跡地名表（昭和 37 年度）』
 宇土市教育委員会 1981『城 2 号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第 3 集
 宇土市教育委員会 1983『田平城跡』宇土市埋蔵文化財調査報告書第 8 集
 高木恭二 2000「横穴式石室の石材」『九州における横穴式石室の導入と展開』第 2 回九州前方後円墳研究会資料集
 九州前方後円墳研究会：pp.34 - 40
 高木恭二 2002「城 1 号墳」『新宇土市史』資料編 2（考古資料・金石文・建造物・民俗）宇土市：pp.270 - 272

図出典

図 132：宇土市教育委員会 1981 より

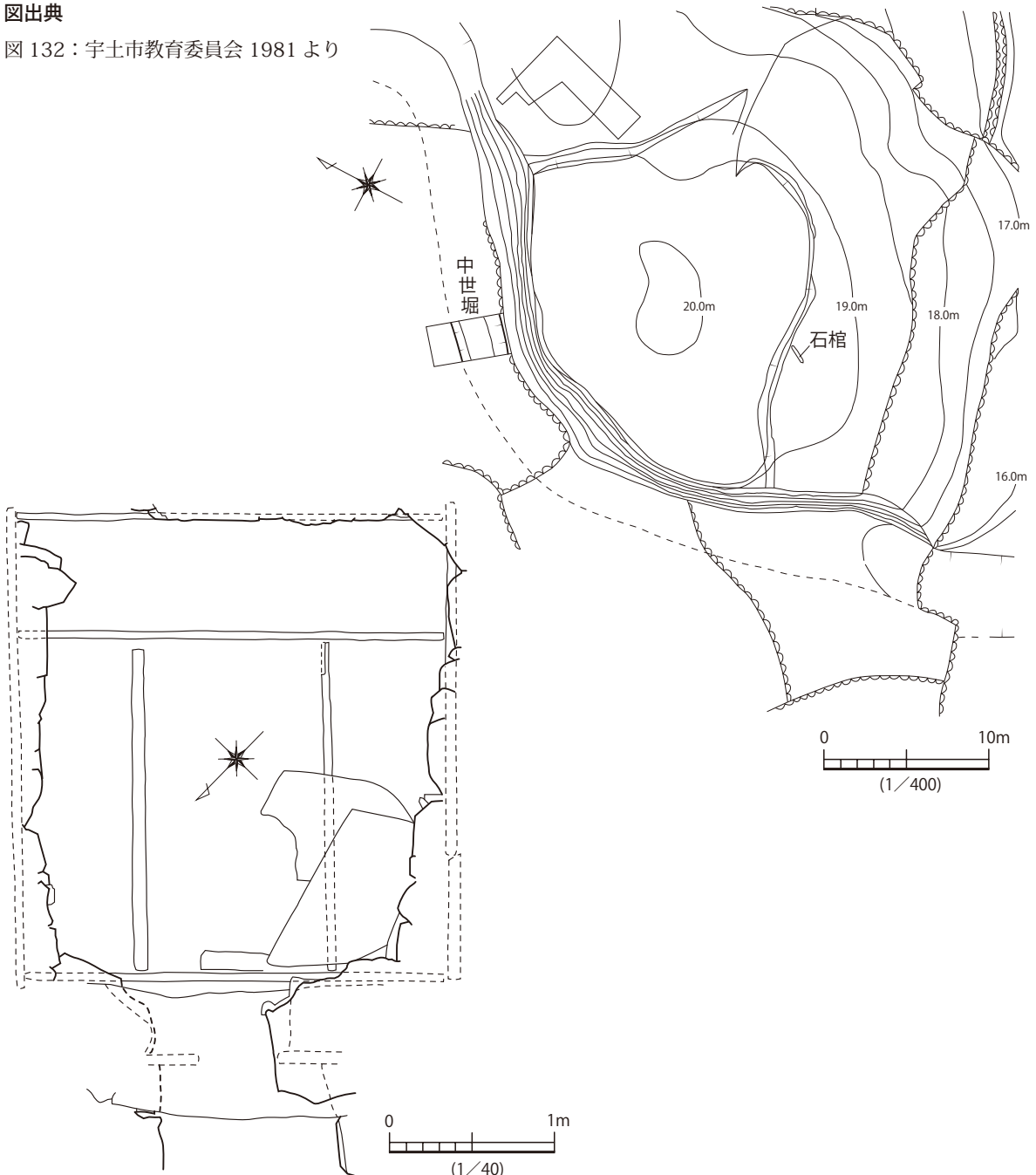


図 132 城 1 号墳墳丘測量図及び石室実測図

② 城2号墳

市町村コード(43211) 遺跡番号(007) 北緯32度40分31秒 東経130度33分18秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

古墳の存在はかなり早い段階でわかっていたようで、地元の人がこの古墳の石室内に入っていたという話を聞くことができる。古墳としての正式な発見日時の詳細は不明であるが、少なくとも戦後4～5年経った頃、この古墳から刀が発見されている。その後、1962年(昭和37年)の熊本県埋蔵文化財遺跡地名表には、塩屋古墳群として登録がなされた。

本墳の石室が北部九州のものにひけをとらないほど古式の様相を示すことから、研究者の注目を受けることになり、1978年(昭和53年)、三島格は同好の士を集めて「城2号墳発掘調査団」を組織し、本墳の学術調査を計画され、12月28日から約1年かけて、日曜や祝日を利用して調査が実施された(宇土市教育委員会1981)。

2 位置及び墳形・規模

古墳の場所は、中世網田城跡(田平城跡)の一角にあるため、墳丘の一部は大きく改変を受けている。北東側に竪堀状の崖があり、墳丘は北西-南東方向に長い楕円形をなす。城全体の縄張りの詳細はわかっておらず、現状での盛り土状の高まりが、本来の古墳の範囲を示すのかも不明である。墳丘の一部は削平され、地均しが行われて城の施設の一部としても利用されたことなども考慮しておく必要がある。実際、墳丘の調査によって中世と思われる土壌墓も検出された。

発掘調査によっても、古墳の規模・形状を明確に示すような葺石や埴輪が検出されなかったが、元々は直径約20～25mほどの円墳であったとみられる。

3 石室

主体部の横穴式石室は、墳丘のほぼ中央付近に主軸をN-65°-Eにとるもので、玄室床面での広さは、長さ261cm、右壁の長さ258cm、左壁の長さ247cm、奥壁幅161cm、前壁幅155cmを測る。長さとの比率は1対1.6となり、長さのわりにはやや幅が狭い長方形プランとなっている。

床面には円礫が敷き詰められており、その厚さは約10cmある。円礫上面から天井石までの高さは173cmあり、大人がちょうど立てる程度である。奥壁に向かってやや左寄りの前壁側に仕切り石があり、いくつかの屍床に分かれていたことが明らかであった。発掘によって内部には奥側と左側に屍床がありLの字形の配置をなし、右手前は通路状の空間であることがわかった。床に敷かれているのは円礫であるが、それ以外に石灰藻も一緒に敷かれ(菊池1981)、かなり珍しい葬法である。石灰藻は海藻が石灰質の石のようになったもので、網田海岸では見ることができず、天草方面など他地域から持ち込まれたものである。

壁体は安山岩の割石を小口積みしたもので、かなり丁寧な造りとなっている。特に前壁側には床面からの高さ60cmに、幅44～54cmで、高さ93cmの横口部がある。これが石室の入り口であり、奥行きは約40cmを測る。横口の外は一枚の大きな板石を用いて閉塞石としているが、この石が載っている面はやや浮いた状態であり、最終追葬時の閉塞状況をあらわしているとみられる。横口部前面の前庭部は側壁に沿って石積みがある。前庭部の土層観察によって、石室の最初の埋葬が行われた段階では墳丘から前庭部に入るには80cmほど急激に深くなっている。ところがその後追葬時には墳丘から降りるような状況ではなく、約20度の傾斜をもって横口部方向に向かって下がるような形状に変えられたことがわかる。

4 出土遺物

副葬品として、玄室内の奥屍床より琴柱形石製品2点、管玉10点、白玉10点、鉄剣1本、鉄鎌3本、刀子1本が出土しており、左屍床からも鉄剣1本、刀子1本、鉄斧1本、鉄鎌?1本も出土、通路空間からも鉄鎌1本が出土している。このほか出土場所は不明ながら石室内から、「カタナ」が以前に出土したとい

われる。

なお、石室からは人骨も確認されたが、永井昌文の鑑定によれば少なくとも通路部分の成人男性一体とその他にもう一体の人骨があるという（永井 1982）。

5 保存施設・修復歴等

なし

6 図面・写真保管場所

実測図や写真等は、城2号墳発掘調査団から宇土市に寄贈され、現在、宇土市教育委員会に保管している。

7 その他（年代等）

琴柱形石製品や鉄鏃などは、5世紀第1四半期頃に属する遺物とみてよく、古墳が造られたのもその時期とみられる。本墳の最も重要と思われるのは、この古墳の石室が著しく古式の様相を備えているということであり、熊本県内だけではなく九州の中でも、最初期に属する横穴式石室のひとつにあげられる。つまり、本墳は我が国に横穴式石室が導入された4世紀末頃からさほど時間をおかない時期に採用された初期の横穴式石室であり、県内における重要な古墳のひとつである（高木 2002）。

（ 藤本貴仁 ）

参考文献

宇土市教育委員会 1981 『城2号墳—宇土市上綱田町字城所在城2号墳調査報告—』宇土市埋蔵文化財調査報告書 第3集

菊池泰二 1981 「石灰藻ヒライボについて」『城2号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集 宇土市教育委員会：pp.89 - 91

高木恭二 2002 「城2号墳」『新宇土市史』資料編2（考古資料・金石文・建造物・民俗）宇土市：pp.273 - 276

永井昌文 1982 「城2号墳人骨について」『宇土市史研究』第3号 宇土市史研究会・宇土市教育委員会：pp.11 - 14

図出典

図 133・134：宇土市教育委員会 1981 より



図 133 城2号墳墳丘測量図

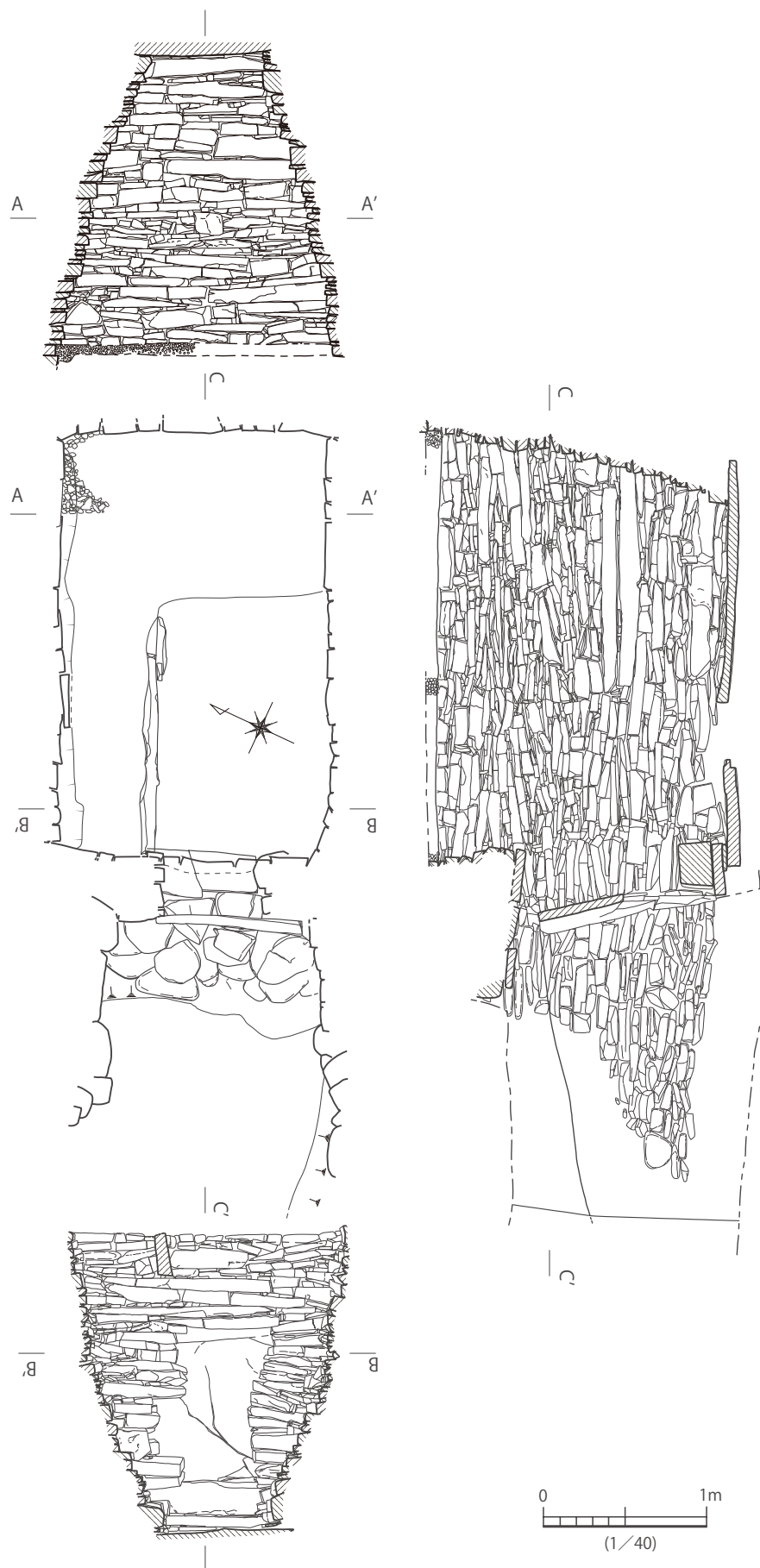


图 134 城 2 号墳石室実測図

36 ^{せんざき}千崎古墳群 (昭和52年11月15日町史跡(現在市史跡) 一上天草市大矢野町維和千崎一

市町村コード(43212) 遺跡番号(018) 北緯32度35分04秒 東経130度28分18秒

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯はよくわかっていないが、1912年(大正元年)9月8日付福岡日日新聞に柴田常恵のインタビュー記事に千崎古墳群のことが紹介されており、その頃には古墳の存在は知られていたことがわかる(木崎2017)。第1次調査は、1955年(昭和30年)に玉名高等学校により行われ、千崎丘陵上で23基の古墳の存在が確認されている。このうちの4基で発掘調査が実施され(現在の10号墳・18号墳・11号墳・13号墳)、人骨や鉄剣などが検出された。その後2003年度(平成15年度)から2006年度(平成18年度)までは上天草市教育委員会が主体となり、2007年度(平成19年度)・2008年度(平成20年度)は熊本大学文学部考古学研究室が主体となり調査が行われた(第2～7次調査)。丘陵の測量調査及び露出している12基の石棺の現状実測図作成の後、5号墳・6号墳・10号墳・25号墳で発掘調査が行われている。

2 千崎古墳群の位置及び分布

千崎古墳群の所在する維和島は天草諸島の北端にある大矢野島の東約1kmに位置している。南北約5.5km、東西約2.5kmの菱形を呈した島で平地はきわめて少ない。千崎古墳群は維和島の北端、千崎丘陵状に位置し、かつては海に突出した岬であったと考えられる。図135のとおり、11号墳のある地点を分岐点として、北・南・東の3方向に尾根が伸び、南尾根に4基・東尾根に6基・北尾根には分岐点にある11号墳を含め16基の古墳が分布し、計26基の古墳が確認されている。23号墳を除くと古墳は尾根筋上に分布する。また丘陵には幾つかの頂部があり、頂部には必ず古墳が築かれ、多くは箱式石棺である。

千崎古墳群の特徴は、箱式石棺・横穴式石室など複数種類の墓制が混在することで、尾根単位でグループングされ、北尾根はさらに4つのグループに分けることができる。箱式石棺と推定できるものは、南尾根の4号墳、東尾根が6号墳・8号墳・9号墳・10号墳、北尾根が11号墳・13号墳・15号墳・16号墳・17号墳・18号墳・20号墳・21号墳・22号墳・25号墳・26号墳である。また12号墳は石棺系石室の可能性が考えられている。一方確実な横穴式石室は東尾根の5号墳だけであるが、横穴或いは竪穴式石室の可能性のあるものは、南尾根の2号墳・3号墳、東尾根では7号墳、北尾根では23号墳・24号墳がある。その他1号墳・14号墳・19号墳の主体部は不明である。

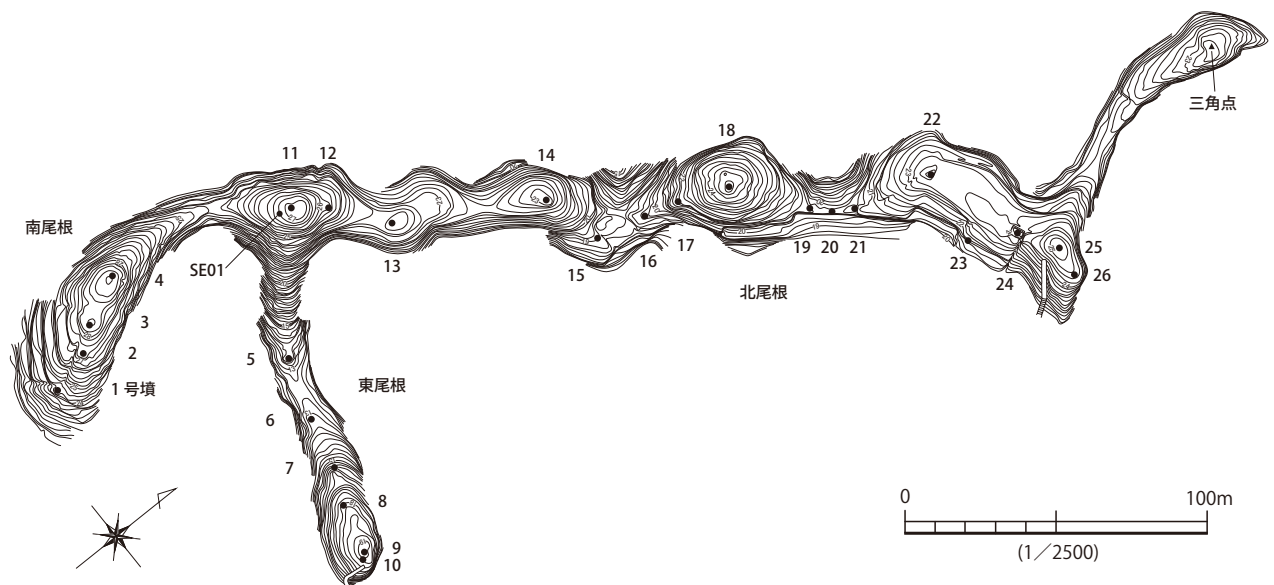


図135 千崎古墳群分布図

3 箱式石棺について

箱式石棺の構造は表 10 のとおりで、主軸方向は、25 号墳を除くと尾根筋と直交する。また構造は、底部に石材は無く、小口と長側石の組み合わせ形状は、清家の言う H 字形が大部分を占める（清家 2001）。石材の枚数は、小口はすべての石棺が各 1 石である。長側石は両側石とも 1 石の確実な例は 22 号墳だけであり、多くは 2 石で構成される。長側石は小口と接する箇所には溝状の掘り込みが施されるものが多く、複数で長側石を構成するものの石材の組合せは、カギ状の加工が認められる特徴がある。一部に安山岩の使用が認められるものの、砂岩を使用した石棺が主で、長側石小口部に溝状加工を施し、石材を継ぐ場合カギ状に加工するなど丁寧な加工を施されるものが多く、このような特徴をもつ石棺は「千崎型箱式石棺」と呼ばれている（島津屋 2009）。その中で北端にある 25 号墳、26 号墳は石材の使用や石材の組み合わせ方等が異質である。調査が行われた 25 号墳は、主軸は尾根筋に平行し、長さ 64cm・幅 27cm の小型の箱式石棺で、南長側石に安山岩が使用されている。また長側石と小口石の組合には加工は見られないなど、他の千崎古墳群の箱式石棺と様相が異なり、天草諸島南部に所在する宮崎箱式石棺などと類似し、千崎古墳群の中でも古い段階に構築されて可能性が指摘されている（一本・高濱 2009）。

ここでは調査が行われた 10 号墳及び千崎古墳群の中で唯一副室を有し、小口・長側石ともに 1 枚石で構成され、階層的にも上位ではないかとされている 22 号墳について記載する。

10 号墳

東尾根東端の頂部に位置し、西側に 9 号墳が隣接している。10 号墳と 9 号墳は主軸間距離が 2 m で、主軸はほぼ平行している。1955 年の玉名高等学校の調査で人骨 4 体が出土している。また 2006 年から 2008 年にかけて熊本大学文学部考古学研究室により再発掘調査（第 5～7 次調査）が行われ、その結果、墓壇の切り合いから 9 号墳の築造が先行することや、テラスを造り出す二段墓壇であることが判明した。墓壇は長軸 284cm、短軸 215cm の隅丸長方形で地山岩盤を掘り込んでいる。墓壇埋土から農具のミニチュア鉄器が出土し、その位置から墓壇内に石棺を据え、一旦テラス面まで埋戻し、そこで鉄器を用いた祭祀を行ったと考えられている。

石棺の蓋石は 2 枚で、裏面には身と接する箇所に矩形凹状加工が施されている。棺身は、両小口 1 枚・西

名称	主軸 尾根筋との関係	寸法（内法）(cm)		石材数		小口と長側石の 組み合わせ形	長側石※4	
		小口※1	長さ※2	小口	長側石		凹状割り込み	2枚の石材の組み合わせ方
8号墳	直交	北：65.6 南：60	195	北：1枚 南：1枚	西：2枚 東：1枚	H字形	○	カギ状の加工
9号墳	直交	北：58 南：54.5	204.5	北：1枚 南：1枚	西：2枚 東：2枚	H字形	○	カギ状の加工
10号墳	直交	幅：35.5	224.5	北：1枚 南：1枚	西：2枚 東：2枚？	H字形	○？	カギ状の加工？
13号墳	直交	西：56 東：50	184	西：1枚 東：1枚	北：2枚 南：2枚	H字形	○	カギ状の加工
15号墳	直交	西：42 東：42	178	西：1枚 東：1枚	西：1枚 東：8枚	H字形	○	重ね継ぎA
16号墳	直交	西：70	65	西：1枚	—	H字形	×	—
17号墳	(直交)	—※3	—	—	(2枚)	—	—	—
20号墳	直交	東：40～50	196	—	南：1枚	—	—	—
21号墳	直交	東：47	163	東：1枚	—	H字形	—	—
22号墳	直交	北：60 南：65	173	北：1枚 南：1枚	西：1枚 東：1枚	北：コ字形 南：H字形	○	×
25号墳	平行	東：29.5	86.5	(東：1枚)	—	H字形	—	—
26号墳	直交	北：51 南：40	176	北：1枚 南：1枚	西：2枚 東：3枚以上	北：H字形 南：井桁状	×	重ね継ぎ (西長側石南側石材のみ加工)

※1 10号墳は棺身露出部の幅、20号墳は東断面での推定値、25号墳は露出部の値である。

※2 10号墳は蓋石をされた状態での全長、20号墳は北長側石の長さ、16・25号墳は残存部の最大の長さである。

※3 ーは不明もしくは残存していないことを示す。

※4 ○はその要素を持つこと、×はその要素を持たないことを示す。

表 10 千崎古墳群所在箱式石棺の特徴

長側石1枚・東長側石2枚の計5枚の板石からなる。大きさは内法で長軸173cm・北小口幅49cm・南小口幅46cmである。長側石と小口石の組み合わせ方はH字形で、長側石には溝状の加工が施される。また東長側石2枚の組み合わせ部にはカギ状の加工が施されるなど、千崎型箱式石棺の典型的な例である。ただし石材はすべて砂岩とされていたが帯磁率調査で、東長側石は2石とも礫岩とされている（池田2013）。

出土遺物としては、墓壙内からミニチュアの鉄器が出土している。内訳は、直刃鎌・鉞・刀子・無肩袋状鉄斧・器種不明鉄器それぞれ1点で、この組成から近畿地方と葬送儀礼に関する情報を共有していたとされる。またこの出土遺物から10号墳の築造は古墳時代前期後半から中期前半とされた。その他、1955年に10号墳から出土した人骨については、18号墳及び隣接する桐ノ木尾ばね古墳の竪穴式石室から出土した人骨とともに報告され、いずれも高身長で、北部九州の渡来系弥生人やその影響を受け継いだ古墳人と同じ形質的特徴を持つとされている（中橋2006）。

22号墳

2004年（平成16年）に熊本大学文学部考古学研究室により現状実測図が作成されているが発掘調査は行われていない。北尾根の北端に近い場所で、他の古墳と若干離れた地点に位置する。グルーピングに迷う古墳で、あるいは、独立して存在しているとも考えることもできる立地である。

棺身上には蓋石の一部が残存し、北約4.5mの地点には蓋石片と思われる石材が2点散布している。石棺内外には多量の石材が散乱する。北小口に2枚の板石をたてて副室を形成する点が特徴的である。本来であれば北小口石となるべき石材が仕切り石の役割を果たしている。したがって南小口の組み合わせ方はH字形だが、北小口はコ字形となる。副室の幅は約60cm・長さは約12cmである。両長側石・両小口石・仕切り石ともに1枚の石材であり、副室の存在とともに千崎古墳群の中では唯一である。階層的に上位にあるものである可能性がある。また北小口だけ目の粗い石材が用いられている。また長側石の南小口石・仕切り石と組み合う部分には溝状の掘り込みが設けられている。石棺の大きさは内法で北小口幅は約60cm・南小口幅約65cm・長さは約173cmであり、幅の広い南側が頭位方向と考えられている。出土遺物は知られていない。

4 横穴式石室について

横穴あるいは竪穴式石室の可能性があるものは、南尾根の2・3号墳、東尾根では5・7号墳が、北尾根では23・24号墳であるが、正式に調査が行われたのは5号墳だけである。しかし熊本大学文学部考古学研究室が2004年度に行った第4次調査で、東尾根東端頂部から西へやや下った傾斜地に位置する7号墳において石材散布状況の現状実測及びピンポールを用いた調査から石障系横穴式石室の存在が指摘されている。

ここでは2004年度から2007年度にかけて熊本大学文学部考古学により発掘調査（第3～7次調査）が行われている5号墳について記載する。

5号墳

11号墳のある尾根分岐点から斜面を50mほど南東に下った東尾根中央の鞍部に位置する。直径約6mの円墳で主体部は南に開口する横穴式石室である。石室主軸は尾根と直交する。前庭部・羨道・玄室から構成されるが、天井石を含め上部の石積は失われている。使用石材は砂岩である。

前庭部の規模は長さ75cm・幅65cmで、羨道壁体前面部分と側壁によって形成される。高さは残りの良い左壁部分で52cmである。床面は羨道側の閉塞石が立てかけられる個所には石材が敷かれているが、南側の床面は粘質土である。なお閉塞石の前面には積石が確認されている。

羨道は長さ59cm・幅は羨門側で42.5cm・玄門側で30cmを測り、ハの字状を呈する。現状の高さは左側壁で60cmである。床面は自然石の板石が敷かれているが、羨門側は粘質土を充填している。また羨道壁体の玄室側の石材は、玄室前壁をも構成している。

玄室は、長さ1.68m・幅1.25mで長方形の平面プランを呈する。両側壁に3枚ずつ、前壁・奥壁には2

枚ずつの低い腰石を設置する。この腰石の上に自然石または割石を平積みし、壁体を構築する。一定のレベルまで垂直に積まれたのち、四隅に隅角消しの石材が配置され、それ以降持ち送りながら石材が積まれており、現存していないが天井部はドーム形になると思われる。屍床は玄室右側壁に沿って1箇所存在する、2枚からなる仕切り石は、平滑に加工され、南側の石材の上面には削り込みが行われている。また奥壁腰石の高さは、右側が高く屍床のある個所の腰石のみ高く設置した可能性がある。また仕切り石上面のレベルは持ち送りが開始されるレベルとほぼ等しい。屍床内の初葬面と考えられる面より玉類が、また追送面と考えられる面からベンガラが検出され、いずれも南側であったことから頭位方向は南であった可能性が高いとされている。

出土遺物は、前述したように玉類があり、内訳は勾玉 11 点・白玉 18 点である。

築造年代は、石室構造より古墳時代中期前葉から中葉（前方後円墳集成 5～6 期）頃と考えられる。

5 古墳の保存状況

1977 年には旧大矢野町（現上天草市）文化財に指定され、1989 年（平成元年）から公有地化が図られている。1980 年代前半頃に撮影された古墳の写真と比較しても現状と大差なかったが、近年イノシシにより石材をひっくり返されるなどの被害が多発しているが、有効な対策をとれていないのが現状である。

6 図面等保管場所

1955 年調査の玉名高等学校調査の資料は未確認。第 2 次調査から第 7 次調査の実測図面・写真・遺物は熊本大学文学部考古学で保管。人骨は熊本大学大学院医学部薬学研究部に保管。

7 その他（年代等）

千崎古墳群の特徴として、複数種類の墓制が混在することがある。類例としては球磨川下流域の大鼠蔵古墳群があり、竪穴式石室・横穴式石室・箱式石棺が混在し、特に箱式石棺の石材には凹状の加工が施される点も共通する。しかし大鼠蔵古墳群では頂部には石室墓が築かれ、麓付近に箱式石棺が分布するのにに対し千崎古墳群では頂部に箱式石棺が築かれ、石室墓は鞍部や斜面に築かれる点に違いがある。千崎古墳群の立地は時期差の可能性を指摘されており、箱式石棺から石室墓への変遷を考える上での貴重な事例である。特に初期の石障と千崎型箱式石棺は、平滑に仕上げることや組み合わせ部に溝を施すなどの共通性があり石障系横穴式石室の発生を考える上でも欠かせない古墳群である。

（ 古城史雄 ）

参考文献

- 池田朋生 2013「天草産出の砂岩を対象とした文化財石材の研究—上天草市維和島とその周辺で営まれた石工業から—」『先史学・考古学研究と地域・社会・文化論』:pp.159 - 172
- 一本尚之・高濱美央 2009「千崎古墳群第 7 次調査報告」『考古学研究室報告』第 44 集 熊本大学文学部考古学研究室
- 木崎康弘 2017「三 考古学者たちの肥後訪問と古墳調査」『肥後と球磨 その原史世界に魅せられし人々—肥後と球磨の考古学史—』人吉中央出版社：pp.215 - 217
- 清家 章 2001「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』第 152 号 古代学研究会：pp. 1 - 18
- 島津屋寛 2009「熊本県下の古墳時代箱式石棺」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎研究』2006 年度～2008 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書、熊本大学文学部：pp.125 - 156
- 中橋孝博 2006「熊本県上天草市維和島・千崎古墳群出土の古墳時代人骨」『考古学研究室報告』第 41 集 熊本大学文学部考古学研究室：pp.85 - 93
- 前田真由子 2006「千崎古墳群第 4 次調査報告」『考古学研究室報告』第 41 集 熊本大学文学部考古学研究室
- 三好栄太郎・仙波靖子 2007「千崎古墳群第 5 次調査報告」『考古学研究室報告』第 42 集 熊本大学文学部考古学研究室
- 森幸一郎 2005「千崎古墳群第 2 次・第 3 次調査報告」『考古学研究室報告』第 40 集 熊本大学文学部考古学研究室

山野ケン陽次郎・有馬絢子 2008「千崎古墳群第6次調査報告」『考古学研究室報告』第43集 熊本大学文学部考古学研究室

図・表出典

表 10：前田真由子 2006 を一部改変

図 135：前田真由子 2006 より

図 136：一本尚之・高濱美夾 2009 より

図 137：山野ケン陽次郎・有馬絢子 2008 より

図 138：森幸一郎 2005

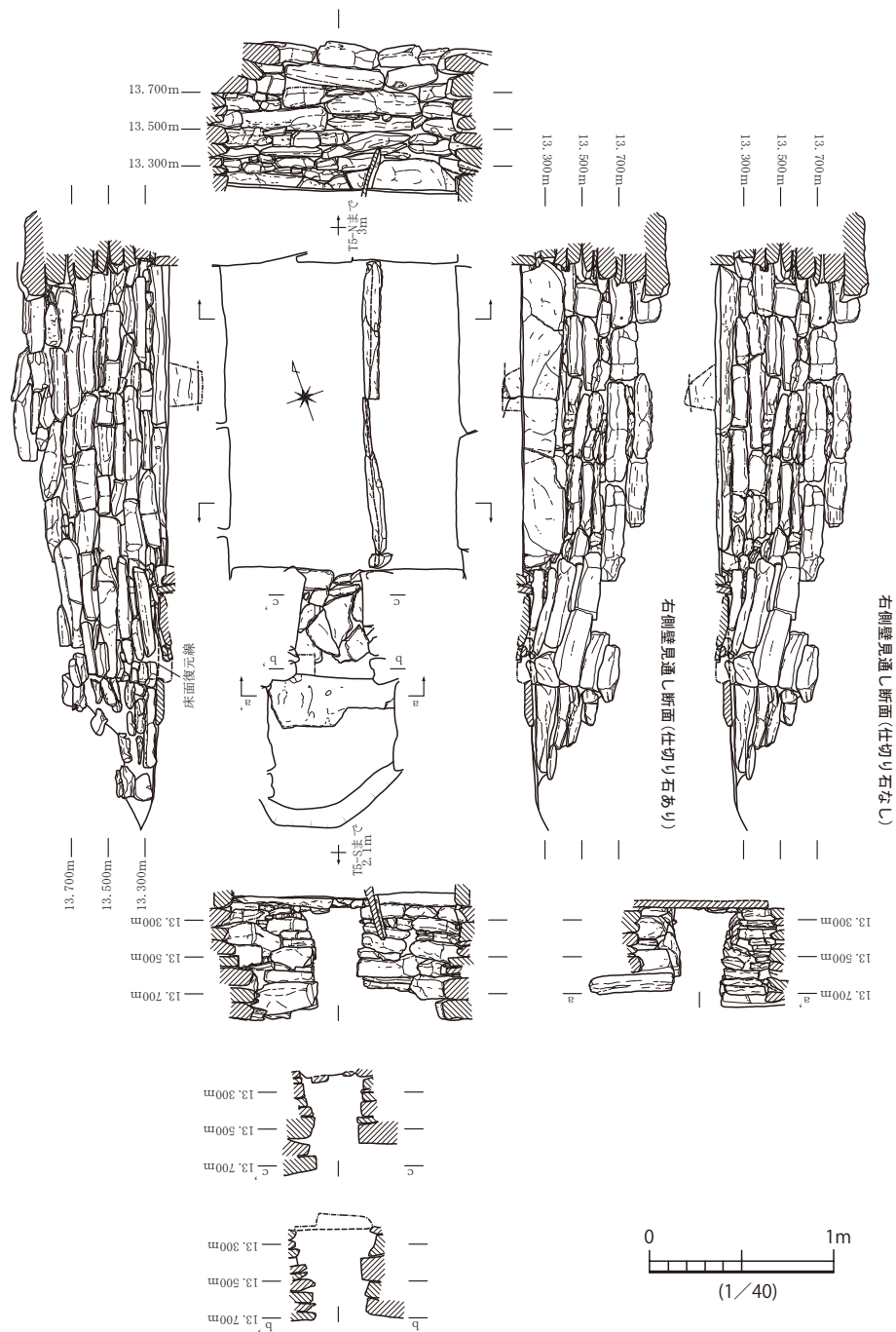


図 136 千崎 5 号墳石室実測図

調査区設定図

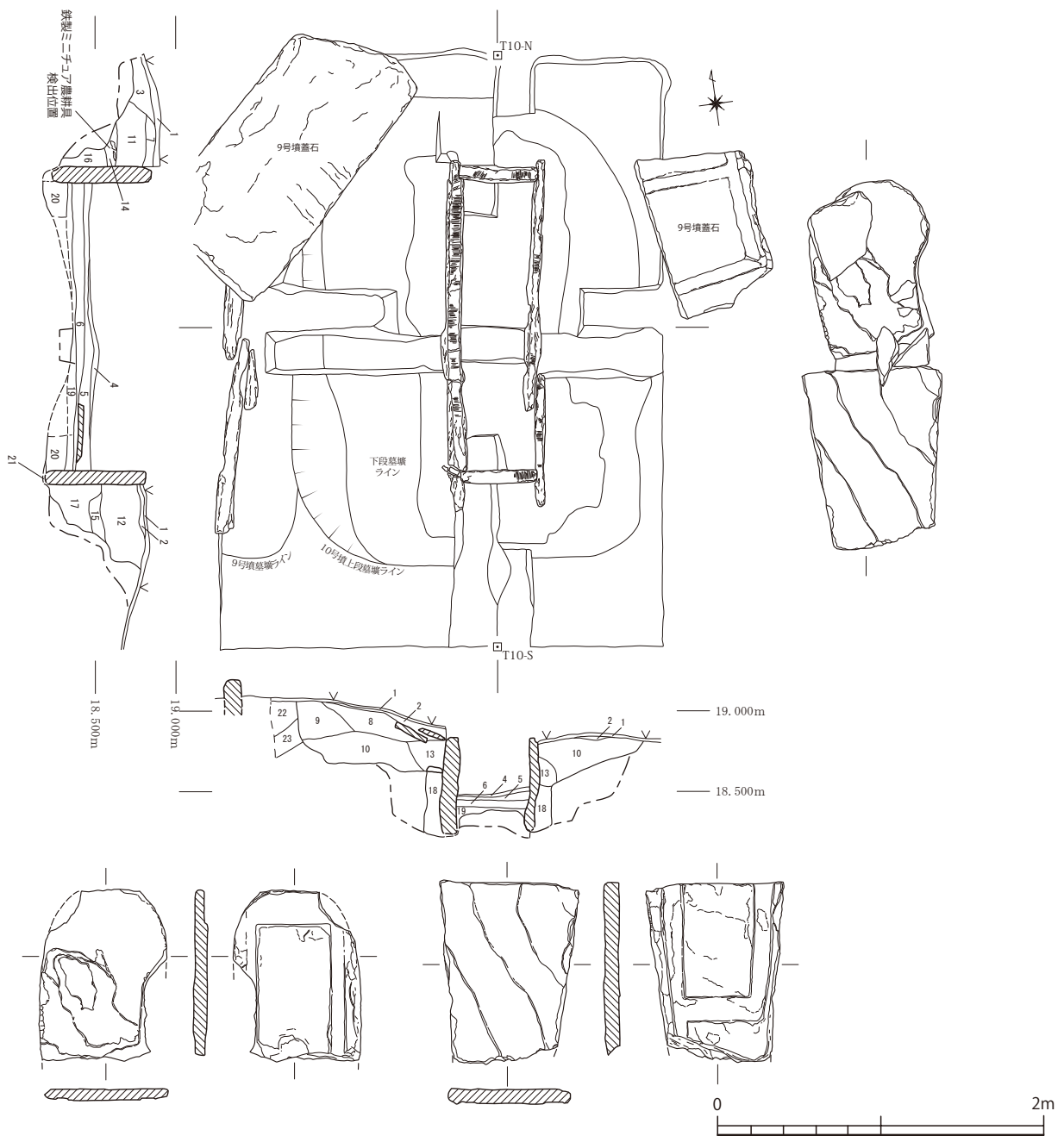
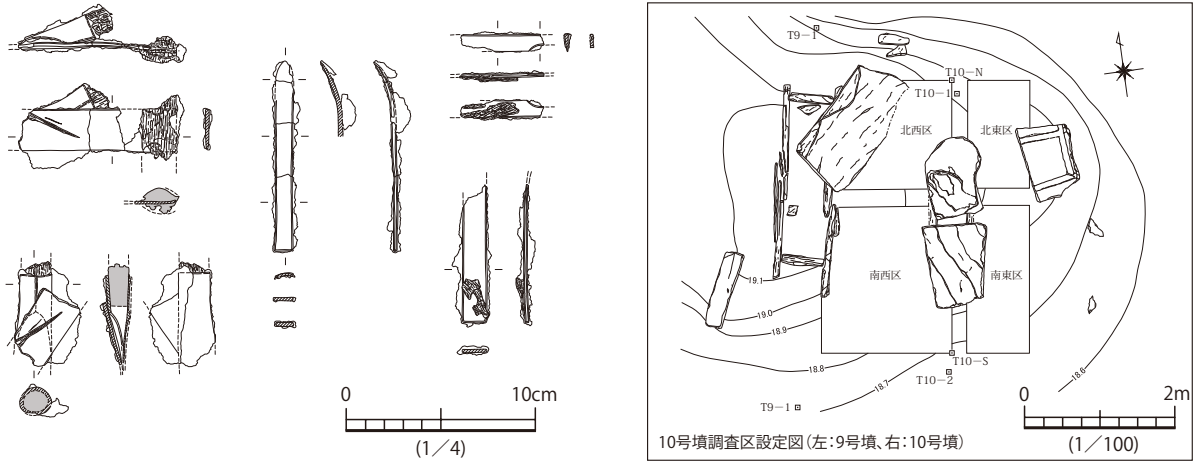


図 137 千崎 10 号墳及び出土遺物実測図

(1/40)

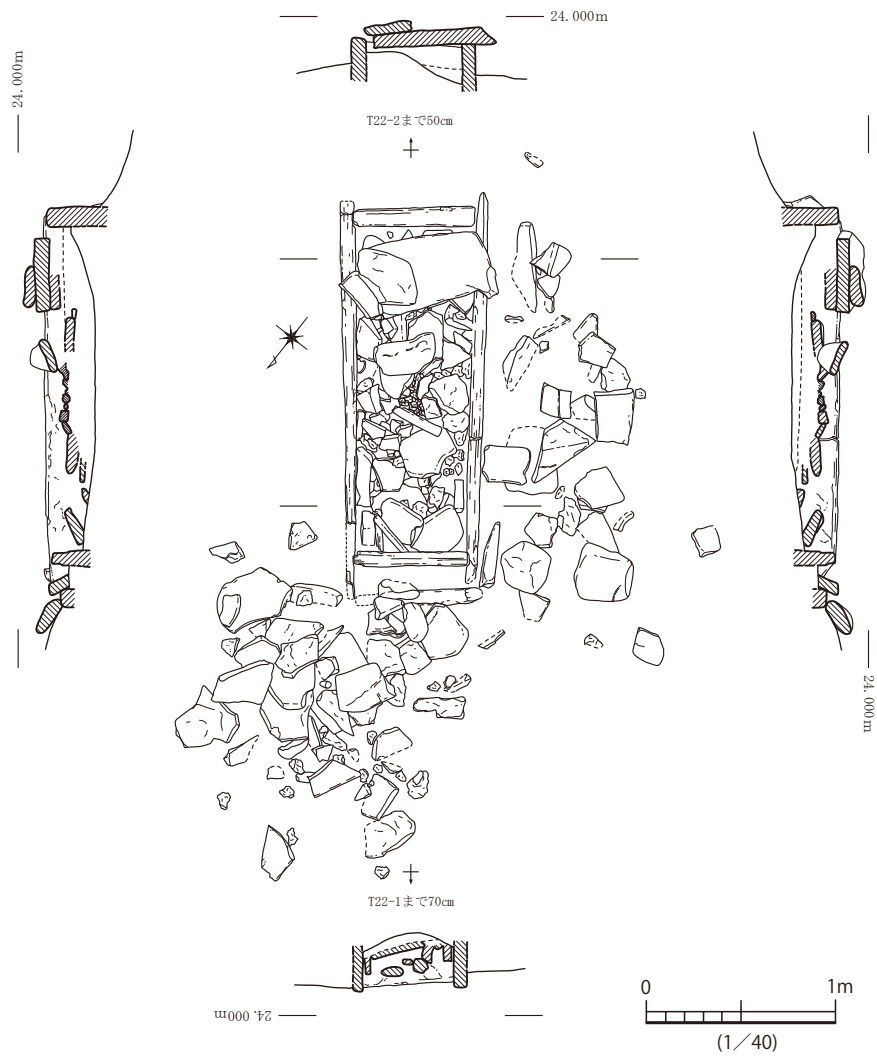


図 138 千崎 22 号墳実測図

37 ^{たけしま}竹島古墳群 一天草市有明町大字大浦字竹島一

市町村コード (43523) 遺跡番号 (630) 北緯 32 度 31 分 43 秒 東経 130 度 22 分 22 秒

竹島古墳群の位置

天草上島の北部に位置し、大浦港の沖北方約 250 m に浮かぶ周囲 4 キロほどの小島である。南北に長く、島の北と南に 2 つの丘陵がある。古墳は南の丘陵の頂部に 2 基が存在し、最高所に 2 号墳が位置し、やや下がった東に 3 号墳が位置する。この頂部から 2 つの尾根が伸び、南側に伸びる尾根に 1 号墳が位置し、東側に伸びる丘陵に 3 基の古墳 (4 号・5 号・6 号) が位置する。また北の丘陵頂部にも古墳が存在する可能性がある。このうち 3 号墳と 4 号墳で調査が行われている。

竹島 3 号墳

1 発見の経緯及び調査の経緯

発見の経緯は良くわかっておらず、1971 年 (昭和 46 年) 刊行の「天草の古代」には竹島に石棺があると言うが実見していないと書かれているのみである。3 号墳の調査は 1988 年 (昭和 63 年) 8 月 25 日から 31 日にかけて、4 号墳は翌年の 1989 年 (平成元年) に谷口義介熊本商科大学 (現熊本学園大学) 教授を中心として行われている。

2 墳形・規模

主体部を中心に十字に 4 本のトレンチが設定された。西側の 1 トレンチで幅 1 m・深さ 30cm の溝が確認されたが、他の 3 本では溝は確認されなかった。調査者は尾根を切断した西側にのみ半円形に周溝を巡らし、墳形を円く整えることを意図したものとし、南と北で確認された 20 ~ 40cm の段落は、地山を削りだして裾部を整えたものとしている。これにより東西 11 m・南北 8 m の円墳とされた。なお葺石・埴輪は確認されていない。

3 内部施設 (石室)

西に開口する単室の横穴式石室である。使用石材は砂岩であると考えられる。玄室天井部を欠損する。

(1) 羨道部

玄門部は割石で構成し、玄室床面より 40cm 程高い。現状では右側 4 段・左側 2 段の石積が残存しているのみで、上部は楣石を含め欠損している。玄門幅は約 43cm である。なお玄門と閉塞に使用された割石の間に約 10cm の隙間があり、また割石が垂直に積まれていることから、この隙間に偏平な閉塞石があった可能性が考えられている。羨道は断面形が逆台形を呈し、長さ約 100cm・幅は玄門付近で 80cm・先端部約 110cm で外に向き開いている。羨道が終わると床面は急角度で上昇し墳丘につながる。

(2) 玄室

玄室の平面形は、長さ約 175cm、幅は奥壁側で 172cm、前壁側で 168cm を測り、ほぼ正方形である。床面は地山整形の後径 2 ~ 3 cm 程の円礫を厚さ 4 cm 前後敷く。地山面からの現状の高さは左側壁で 155cm だが、本来はあと 30cm 程高かったと考えられる。屍床配置は「川」の字形で左右の区画を屍床とする。両屍床とも小口部は壁面とは

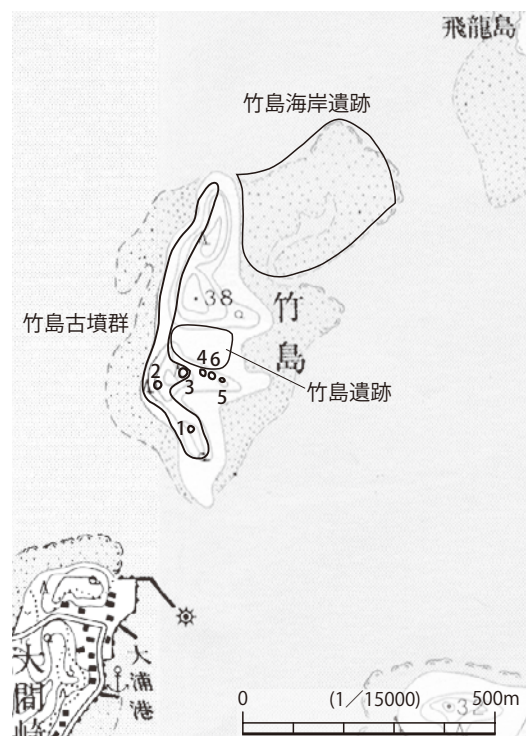


図 139 竹島古墳群分布図

別に板石を配置する。側壁側は、壁面のままで板石を立てることはしていないが、箱式石棺を意識した造りである。壁面は砂岩の板石を小口積にし、床面から4段目（高さ30～40cm）までは垂直に、5段目以降内側にせり出すよう持ち送る。前壁左右コーナー及び奥壁左コーナーは屍床小口の板石の上面レベル位（40～50cm）から隅角を消すよう交差する壁面に石材を架け渡し始めるが、奥壁右コーナーだけは80cm程から架け渡し始める。天井部は失われているがドーム形天井になると思われる。

4 出土遺物

遺物は出土していないが、羨道部の前面40cmの所から石製表飾らしきものが出土している。厚さ7cmの偏平な板石で菱形を呈し縦68cm・横52cmで、茎状の突出部をもつ。先端を墓室の方に向け、倒れた状態で出土しているが、茎の真下に径20cmのピットが検出されたことから、茎の部分をピットに埋め立てていたものと考え銚の模造品ではないかとされている。ただし他の石製表飾が凝灰岩製であるのに対し唯一砂岩製である。

5 古墳の保存状況

隙間はあるが、壁面も板で塞いだ覆屋が建てられており、保存状況は良好である。

6 図面等保管場所

図面は天草市文化課で保管。調査時写真の所在は未確認。

7 その他（年代等）

築造年代は、石室構造より前方後円墳集成期5期頃と考えられる。なお、4号墳は腰石を使用した横穴式石室で、墓道部から須恵器の広口壺が検出されている。玄室内からは土師器片や鉄鏃の茎部分の破片が出土している。年代は6世紀代とされる。

（ 古城史雄 ）

参考文献

谷口義介 1990「第11章 天草における横穴式石室墳の展開—有明町竹島3・4号墳を中心に—」『総合研究 天草』

熊本商科大学産業経営研究所叢書17：pp.63 - 87

坂本経堯・経昌 1971『天草の古代』：p.83

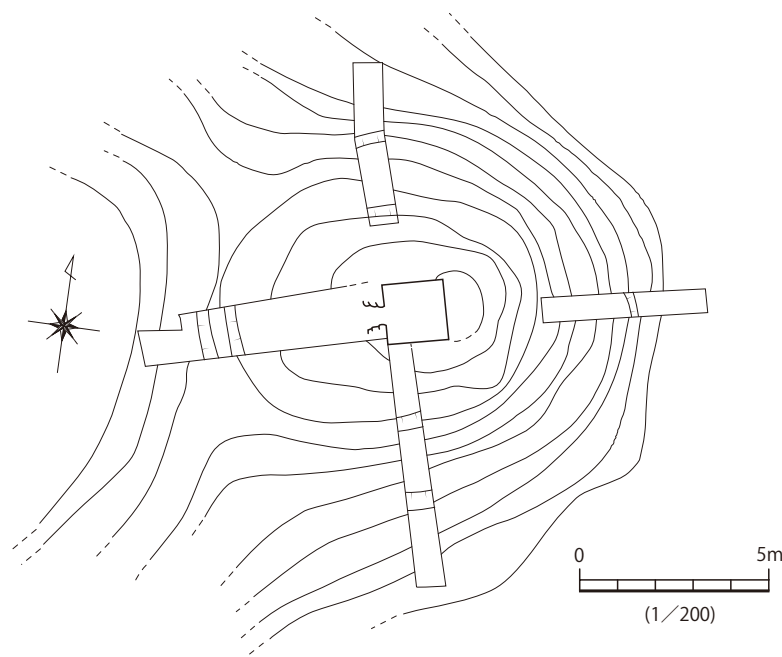


図140 竹島3号墳墳丘測量図

図出典

図 139：国土地理院発行 2万5千分の1地形図を利用

図 140・141 石室：谷口義介 1990 を新たにトレース

図 141 出土石製品：藤本貴仁作成実測図をトレース

図 142：杉井健氏提供（2007年3月17日撮影）

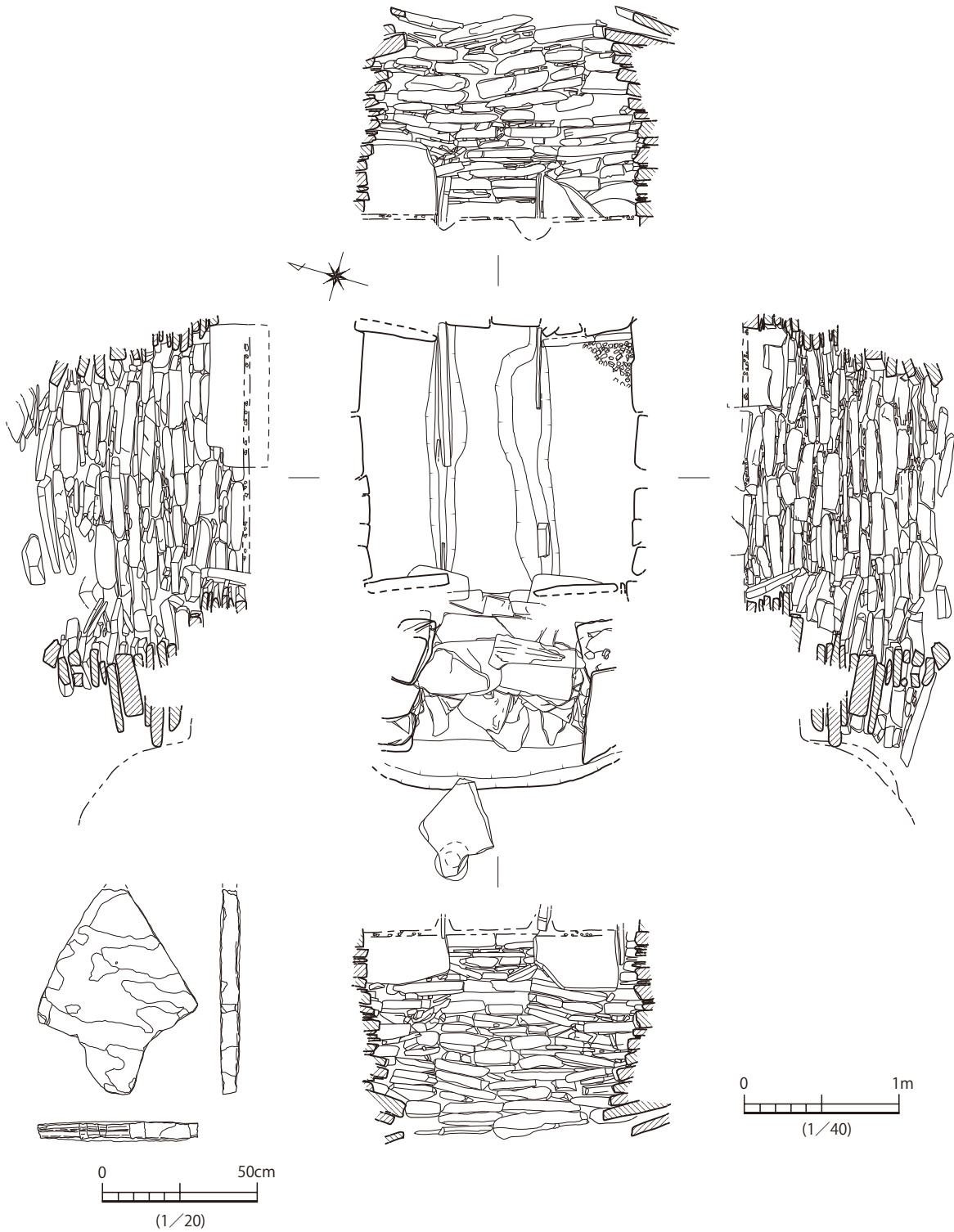


図 141 竹島 3 号墳石室及び出土石製品実測図



图 142 竹島 3 号墳（上：奥壁側、下：玄門部）

第4章 考察

八代海沿岸地域における装飾古墳の特質とその発生意義

杉井 健

八代海周辺における横穴系装飾古墳の発生と展開

高木恭二

八代海沿岸の砂岩製埋葬施設における石材利用の
検証からみた石棺・石障の技術的系譜

池田朋生

八代海沿岸地域における装飾古墳の特質とその発生意義

杉井 健

はじめに

装飾古墳とは、棺の内外面、あるいは墓室の内外壁に文様が描かれた古墳を指す。埋蔵文化財研究会による集計（埋蔵文化財研究会編 2002）などにもとづけば、装飾古墳は全国で 660 基以上が確認されており、そのうちの約 3 割、200 基程度が熊本県に存在する。

八代海沿岸地域は、そうした熊本県にあって、菊池川流域に並ぶ装飾古墳分布の集中地域である。そのため、八代海沿岸地域の装飾古墳についてはこれまでもさまざまに検討されてきた。本稿では、それら先学による成果に学びながらあらためてその特質をまとめたうえで、当地域でいち早く装飾古墳が出現した背景を考えてみたい。

1. 装飾古墳の分類

(1) 装飾古墳分類の歴史

まずは、装飾古墳分類の歴史を振り返っておこう（表 1）。分類は、八代海沿岸地域の装飾古墳の特質を探るうえできわめて重要と考えるからである。

小林行雄分類からの流れ 装飾古墳の分類において、今日まで強い影響を与えているのは、小林行雄によるものである（小林 1964）。小林は、装飾が施される埋葬施設の種類や部位に着目し、装飾古墳を石棺系、石障系、壁画系、横穴系の 4 つに分類した。この小林分類の特徴は、埋葬施設の種類や部位にもとづく分類であるにもかかわらず、横穴式「石室の壁面に彩色もしくは線刻の文様や絵画を描いたもの」を「壁画系」と名付けたことにある（小林 1964 : p. 4）。おそらく、石室「壁」面に描かれた「画」であることを含意させた分類名称と思われるが、字面だけをみれば壁画一般を指すとの誤解を生むおそれがある。また、石屋形にのみ装飾が行われたものを石棺系に包含させた点も特徴の 1 つである。石屋形は石棺からの変形態であるとの認識のもと、それを石棺という大きな枠組みのなかに落とし込んだのである。棺形態という点に着目した場合、このとらえ方は正しい。

森貞次郎は、この小林分類を基本的に踏襲するが、石障系石室のなかに障櫛式石室と石屋形を含ませた点に独自性がある（森 1972）。障櫛とは、いま我々が一般に石障と呼んでいるものを指す用語である。つまり、森は石障あるいは石屋形に装飾が描かれたものを同じに分類したのである。

乙益重隆による分類も小林分類に倣ったものだが、1972 年に発見された奈良県高松塚古墳、さらには陶棺にまで目配せしている点が重要である（乙益編 1974）。ただし、装飾が施された陶棺にはそれ独自の分類名称は与えられていない。乙益分類でもっとも特徴的なのは、箱式石棺を他の石棺とは別個にあつかい、箱式石棺系を石棺系から独立させた点である（乙益 1974a : p.24）。これは、箱式石棺が弥生時代以来の系譜をひく盛土のない墓制であり、「九州の装飾古墳が豪華絢爛と栄えた素地には、箱式石棺系装飾古墳のような、在地土着文化の所産があった」（乙益 1974b : p.39）との理解が根本にあって導き出された視点である。箱式石棺に装飾を施すものは八代海沿岸地域でとくに発達するから、こうした乙益の理解は当該地域の装飾古墳を考察するうえでの 1 つの重要な導きとなる。ただし、箱式石棺系という分類が、他者に採用されることはなかった。

藤井功・石山勲の分類は、彼らが石棺に祖型をもつと評価する石障・石屋形・石柵をすべて石棺系に含めている点にもっとも大きな特徴がある（藤井・石山 1979）。加飾された地下式横穴もとりあげ、それを横穴系に分類した点も特徴である。また、埋葬施設の型式に素直にしたがった分類名称を採用し、小林分類の「壁

視点であるといえよう。ただ、小林分類と同じ「壁画系」という分類名称を用いながら、小林分類では「石棺系」に含まれていた石屋形を「壁画系」に分類し直した点で読者に無用な混乱を生じさせる懸念があること、また、時期を分類基準の第1として記述する論述法に若干の違和感を覚えることは否定できない。とはいえ、浮彫・線刻の初期装飾と彩色の壁画装飾に区分したことによって、両者の分布の明確な差異の抽出に成功している点はきわめて重要である。そのため、藏富士によって提示されたこの新たな視点は、これ以降の研究に大きな影響を与えることとなった。

1993年に開催された『装飾古墳の世界』展は、彩色があざやかに再現された福岡県桂川王塚古墳石室の原寸大模型で人びとに強い印象を与えた。その展示図録では小林分類が踏襲されたが、巻末の「装飾古墳・壁画古墳一覧表」に装飾が施された陶棺や地下式横穴も掲載された点（国立歴史民俗博物館編 1993：pp.231 - 244）、巻頭の解説文で白石太一郎が「7世紀には石棺や陶棺に蓮華文を彫刻したものなどがあり、石棺系装飾古墳に分類することも出来よう」と記した点は（白石 1993：p.11）、装飾古墳の概念範囲を広くするうえで大きな役割を果たしたといえる。

これを受け、2000年開催の『残されたキャンパス』展の図録では、岩瀬透によって、地下式横穴および陶棺も含めたかたちでの装飾古墳分類案が提示された（岩瀬 2000）。すなわち、装飾をもつ地下式横穴は地下式横穴系とされ、また装飾された陶棺は石棺系に分類されたのである。さらに注目されるのは、小林分類の「壁画系」を「石室系」と名称変更したこと、そして装飾された石屋形をこれに含めたことである。藏富士寛の視点をふまえつつも、小林分類との混同を避ける新たな分類名称が提案されたのである。

もっとも近年の高木恭二による分類は、この岩瀬分類に倣ったものだが、これまで壁画古墳として装飾古墳とは別個にあつかわれることも多かった高松塚古墳やキトラ古墳を装飾古墳と同列にあつかい、横口式石槨系と分類した点にもっとも大きな特徴がある（高木恭 2012）。ただし、装飾が施された陶棺には言及されなかった。

濱田耕作と齋藤忠の分類 上述した小林分類とはやや異なった観点での分類が、齋藤忠によって示されている（齋藤 1973a）。それは濱田耕作が1917年に提示した分類がもとになっている。

濱田耕作が装飾古墳の分類を提示したのは『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』においてである（濱田 1917）。濱田は装飾が施される部位に着目し、次の5つに分類した。すなわち、石室や横穴の内壁面に施される第1類、石室内部に設けられた槨壁（石障）に施される第2類、石棺の蓋上に施される第3類、石室や横穴の奥壁に設けられた石厨子（石屋形）に施される第4類、横穴の外壁面に施される第5類である。濱田が当時知り得た熊本県地域の事例を中心とした分類であるが、今日の分類に表された主要なものはおよそ示されている。石室と横穴を区別せずに分類している点に特徴がある。

齋藤忠の分類は、この濱田分類を基礎としながらも、横穴を古墳一般とは区別してあつかっている点に、もっとも大きな特徴がある（齋藤 1973a）。すなわち、装飾が施された横穴を装飾横穴、それ以外の埋葬施設に装飾が施されたものを装飾古墳とするのである。そのうえで、装飾が施される部位によって、それぞれを細分するという手法がとられた。そのため、装飾古墳については、石屋形への施文も、独立して分類されることとなった。その一方で、装飾された陶棺と石棺は、棺系統のものへの施文として1つにまとめられた。他方、装飾横穴も、内壁面に図文が施されるもの、外壁面に施されるもの、石屋形施設に施されるもの、それらが複合したものに細分された。小林分類では横穴系と一括される装飾横穴が細分される点に、濱田分類との共通性をみることができる。

（2）装飾古墳の分類案

ここまでみてきたように、装飾古墳の分類についてはさまざまな考え方があつた。しかし、すべての分類に

装飾古墳分類		加飾部位	
		外面(壁)	内面(壁)
陶棺系	陶棺	○	
石棺系	割竹形石棺	○	
	舟形石棺	○	
	長持形石棺	○	
	家形石棺	○	○
	箱式石棺		○
石屋形系	石屋形	○	○
石室系	横穴式石室		○
横口式石槨系	横口式石槨		○
石障系	石障	△	○
横穴系	横穴	○	○
地下式横穴系	地下式横穴		○

表2 装飾古墳内外面加飾の傾向

へ施文される場合は、石棺系箱式石棺施文型装飾古墳のように記述することとしたい。

(3) 外面加飾タイプと内面加飾タイプ

八代海沿岸地域の装飾古墳を考えるうえで、装飾文様の施文位置が埋葬施設の内側か外側かの区別はきわめて重要な意味をもつ。この点について、高木恭二は、佐藤伸二や高木正文からの教示と断りながら、「石棺内にこのような装飾文様を描くという発想は、讃岐に起源をもつ刳抜式石棺文化のなかからは出てこなかったものであり」、八代付近で「独自に生まれた可能性が高い」と述べた（高木恭 2002：p.198）。

この点に注目して、以前私は石棺系装飾古墳を「外面加飾タイプ」と「内面加飾タイプ」に区分したことがあるが（杉井 2009a：p.236）、その二者の区別が各装飾古墳型式にどのように現われるのかを整理すると表2のようになる。これをみてあらためて気付かされるのは、石棺系装飾古墳のなかにおける箱式石棺の特異性である。箱式石棺への施文はその内面にのみ行われる点で、ほかの石棺型式とはまったく異なっているのである。乙益重隆が箱式石棺系というそれ単独の装飾古墳型式を設定しようとしたこと（乙益 1974a）の重要性が想起される。また、石障系がほぼ内面加飾タイプに限られる点も箱式石棺との関係を探るうえで重要である。これについては以前にも記したが（杉井 2009a）、石障の発生に箱式石棺が密接にかかわっていることを傍証するものといえるだろう。

2. 八代海沿岸地域の装飾古墳の特質

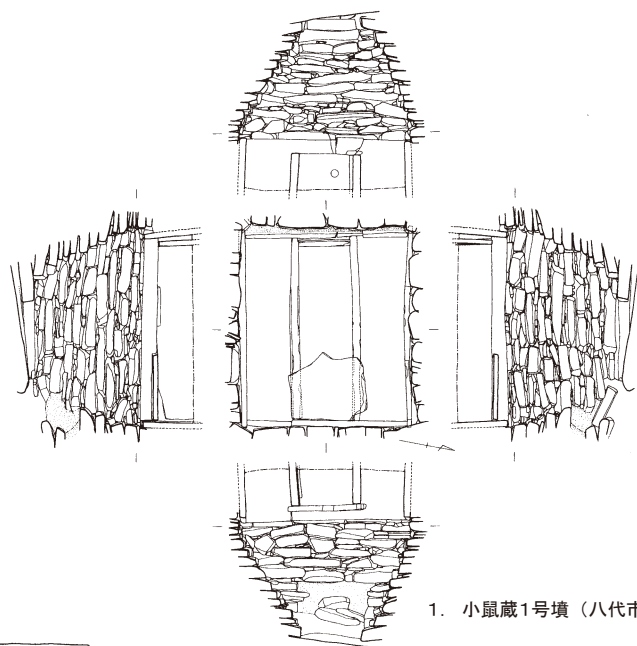
では、八代海沿岸地域の装飾古墳には、どのような特徴があるのだろうか。当地域およびその周辺に位置する主要な石棺系箱式石棺施文型装飾古墳と石障系装飾古墳を表3にまとめた。これを参照しつつ、いくつかの事例を紹介する作業を通じて、八代海沿岸地域の装飾古墳の特徴をまとめておこう。

(1) 若干の事例の検討（表3、図1・2）

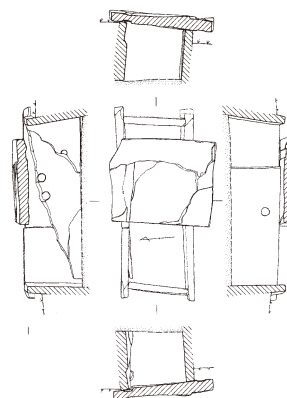
1) 石棺系箱式石棺施文型装飾古墳

小鼠蔵1号墳（八代市）（図1-1） 現在、九州山地から八代平野へ流れ出た球磨川は、北から前川、南川、球磨川に分かれて西流し、八代海に注いでいる。その分流後の球磨川が八代海に達する直前の右岸に大鼠蔵山が、その300～400m程北に小鼠蔵山が位置している。当地は19世紀半ばの干拓により陸地化された場所であるから、この2つの山は、それ以前には八代海に浮かぶ小さな島であった。そうした大鼠蔵島と小鼠蔵島には多くの古墳が築かれており、それらのうちのいくつかに装飾文様が描かれている。

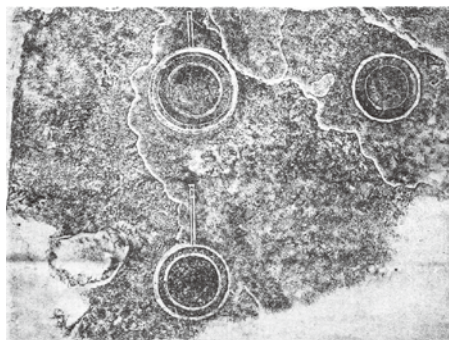
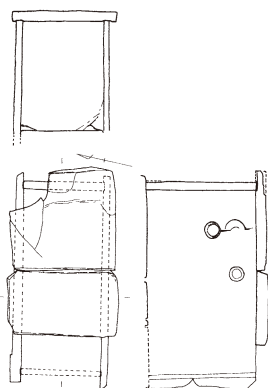
小鼠蔵1号墳は、小鼠蔵島の頂上に築造された円墳で、石障系石室を内部主体とする。調査がなされおらず、また出土遺物も知られていないことから、築造時期を推定する材料に乏しいが、その石室構造が



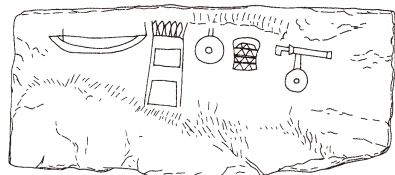
1. 小鼠蔵1号墳（八代市）



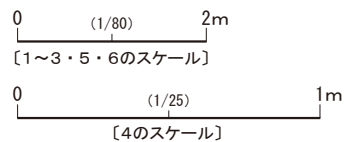
2. 小鼠蔵3号墳（八代市）



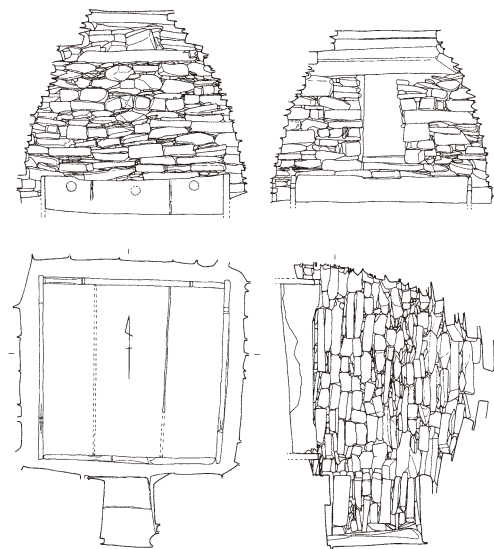
3. 大戸鼻南古墳（上天草市）



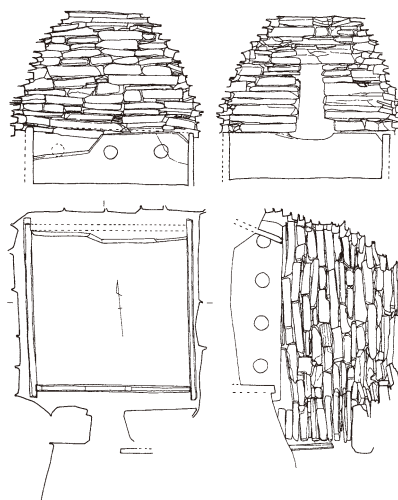
4. 大鼠蔵東麓1号墳（八代市）



(※拓本・写真の大きさは任意)

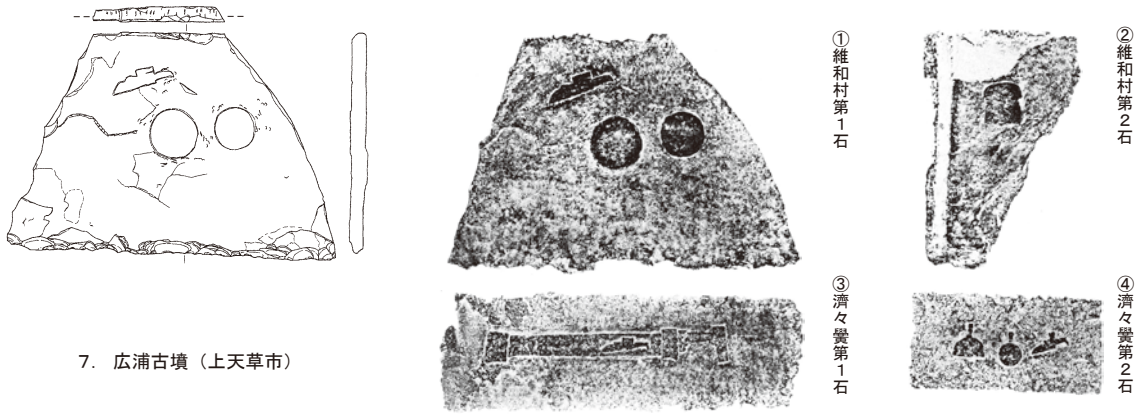


5. 大鼠蔵尾張宮古墳（八代市）

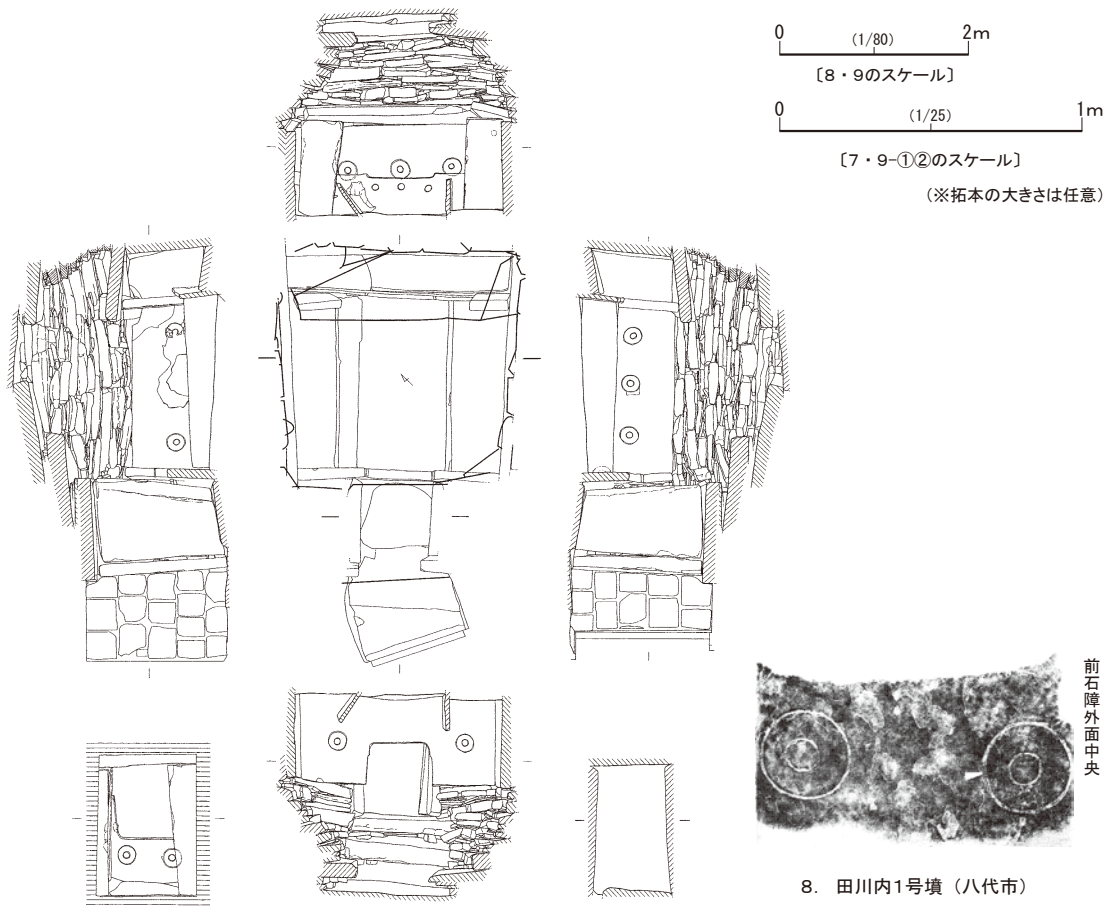


6. 大戸鼻北古墳（上天草市）

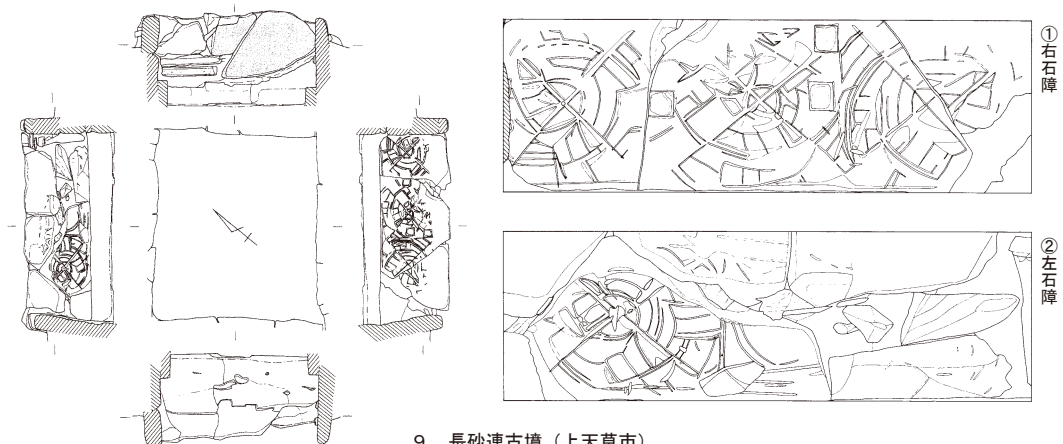
図1 八代海沿岸地域の装飾古墳の事例1



7. 広浦古墳（上天草市）



8. 田川内1号墳（八代市）



9. 長砂連古墳（上天草市）

図2 八代海沿岸地域の装飾古墳の事例2

個彫り窪められている。従来、小鼠蔵1号墳は、石障系装飾古墳に分類されることが一般的であるが、装飾が施されるのはあくまで箱式石棺の小口石であることから、石棺系装飾古墳に分類すべきものとする。この視点は、かつて齋藤忠が示したものと同じである（齋藤 1973a : p.17）。

小鼠蔵3号墳（八代市）（図1-2） 小鼠蔵3号墳は、上述の小鼠蔵1号墳のすぐ西側に位置する箱式石棺である。石棺石材は砂岩で、長側石の小口石と組み合う箇所および蓋石の棺身石材と接する箇所には溝状の割り込みがなされている。東西方向を主軸とし、北長側石の内面に3個、南長側石の内面に1個の一重円文が線刻されている。当石棺からの出土遺物は知られていないが、小鼠蔵島北東側の裾部付近にかつて存在した石棺（小鼠蔵5号墳）から土師器壺1点が出土しており（乙益 1972b、八代市文化財審議委員会 1980）、それは林田和人編年（林田 2002）の2期、5世紀前葉に位置付けられる。これがそのまま小鼠蔵3号墳の時期を表すわけではないが、小鼠蔵島に築かれた古墳の時期の一端を示すものとして重要である。

大戸鼻南古墳（上天草市）（図1-3） 八代海の西側には天草諸島が南北に連なり、八代海と外海とを画している。天草諸島のうち、八代平野の対岸にあるのは上島以北の島々である。その上島の北東端に突出した下大戸ノ岬の尾根筋上に大戸鼻古墳群が築かれている。大戸鼻南古墳はそのなかの1基で、蓋石から床面までの高さが約1.15mもある大型の箱式石棺である。石棺石材は砂岩である。東西方向を主軸とし、南長側石の内面に円文3個が線刻されている。それらのうちの右側1個は二重の同心円文であるが、上下に並ぶ左側の2個は同心円文の外区に鋸歯文が描かれ、また上方に懸垂用の紐が表現されている。これは銅鏡の鏡背を表したものとみて間違いのないだろう。そのほか、西小口石の内面上方に小さな一重円文が浮き彫りされている。出土遺物は知られておらず、時期の詳細は不明である。

大鼠蔵東麓1号墳（八代市）（図1-4） 大鼠蔵島の頂部には竪穴式石室を内部主体とする楠木山古墳があり、その南約150mの尾根筋上には後述する大鼠蔵尾張宮古墳が位置している。そうした大鼠蔵島の裾部には多くの箱式石棺が築かれているが、大鼠蔵東麓1号墳もそのなかの1つである。当初、乙益重隆はこれを第3号棺として紹介し（乙益 1956）、池田栄史もそれを踏襲して3号石棺と記述している（池田 1986）。その一方で、蓑田田鶴男は、発見順に命名するとして、当古墳を第1号古墳と名付けた（蓑田 1959）。これに倣った江上敏勝が『熊本県装飾古墳総合調査報告書』における当古墳の執筆を担当したことから（江上 1984）、当古墳を1号とすることが一般に定着した。

さて、大鼠蔵東麓1号墳は、土取り工事中に発見され、乙益重隆が現場に到着したときには石材だけが残された状態であったという（乙益 1956 : p.49）。そのため、埋葬施設の構造がどのようなものであったのか不明なところが多いが、当時の聞き取り調査をもとに箱式石棺と推測されている。石棺石材は安山岩とされてきたが（乙益 1956、江上 1984）、今回、帯磁率の調査によって砂岩であることが判明した。石棺の主軸方向は南北で、西長側石にいくつかの装飾文様が線刻されている。左から順に、弓、鞆、吊り下げられた二重円文、地板が三角板の短甲、鞘入りの大刀とそれに吊り下げられた二重円文である。ここに描かれた二重円文のうち、右端の大刀に吊り下げられたものを弓の弦巻（乙益編 1974 : pp.38・114、福島 2018）、中央のものを的（^まと）（福島 2018）と解釈する見解も提示されているが、上述した大戸鼻南古墳や石障系装飾古墳の長迫古墳にみられるように、外区に鋸歯文を描き明らかに鏡背文様と判断できる吊り下げられた多重円文があることから、当古墳の二重円文も鏡表現の一種で、鋸歯文が省略されたものと考えておきたい。

ところで、乙益によれば、「現地では棺内で出土したという人骨一体分と、土師器の高杯を採取した」とのことで、その高杯の実測図が1956年の報告に示された（乙益 1956 : pp.48・50 - 51）。また、『土師式土器集成本編』2にも同じ高杯の実測図が掲載されたが、そこでは「大鼠蔵楠木山古墳出土の土器」という項目名のあとにその実測図番号だけが記され、本文中ではその土器についての説明がなされなかった（乙益 1972a）。本来であれば、大鼠蔵東麓1号墳出土として紹介すべきものを大鼠蔵楠木山古墳のところに誤

記したのだと思われる。さて、その実測図をもとにすれば、この高坏は、林田編年（林田 2002）の 2 期、5 世紀前葉に位置付けられる。これは、三角板を地板とする短甲の時期とも矛盾しない。上述した小鼠蔵島の古墳築造時期の一端とほぼ同じ時期であるといえる。

2) 石障系装飾古墳

大鼠蔵尾張宮古墳（八代市）（図 1-5） 大鼠蔵尾張宮古墳は、大鼠蔵島の尾根筋南端付近に築造された円墳である。主体部は石障系横穴式石室で、現在、その上には尾張神社の社殿が建っている。現地の地形から推測すれば、小鼠蔵 1 号墳の石室と同じく、当石室も地山を深く掘り込んだ墓壙内に構築されていると考えられ、「掘込墓壙 c 類・墳丘完成後タイプ・地山基盤型」（杉井 2005）に分類される可能性が高い。石障石材は砂岩である。

さて、当古墳にみられる装飾は、奥石障に線刻された一重円文 3 個である。これ以外の石障には装飾文様は描かれていない。石障内における屍床配置は川の字形であり、したがって左右の屍床（横穴式石室の左右は羨道から玄室をみた場合の左右で示す、以下同じ）および中央通路の奥壁内面側にそれぞれ 1 つずつの円文が刻まれている格好になる。屍床に視点をすえれば、一方の小口壁内面にのみ 1 個の円文が配されていることになり、その状況は上述した小鼠蔵 1 号墳の箱式石棺とまったく同じである。この点に着目すれば、これまで小鼠蔵 1 号墳の石室から大鼠蔵尾張宮古墳の石室への変遷が想定されているが（高木恭 1994a）、装飾文様の種類やそれが描かれる位置、数の類似性からも、これら 2 つの石室が近い関係にあったことをうかがい知ることができるだろう。

大戸鼻北古墳（上天草市）（図 1-6） 大戸鼻北古墳は、上述した大戸鼻南古墳の北約 150 m に位置する円墳で、石障系横穴式石室を内部主体とする。石障石材は砂岩である。古墳の立地する地形から推測すれば、ある程度の盛土が行われている可能性も考えられるが、確証を得ない。石障のうち、奥石障と右石障に一重円文が明瞭に線刻されている。現状の奥石障には 2 個、右石障には 4 個確認できるが、円文配置をもとにすれば、奥石障の向かって左側の欠失部にも 1 個の円文が存在したと考えられるから、本来奥石障には 3 個の円文が刻まれていたと想定できる。なお、今回、左石障の向かって右下にも不明瞭ながら円文 1 個が存在することが確認された。とはいえ、線刻の明瞭さからすれば、主要な装飾文様は奥石障 3 個と右石障 4 個の円文であることには変わりがない。したがって、屍床配置が川の字形と推測されることを念頭におけば、小口壁に加えて長側壁にも同様の円文が刻まれている右屍床の方が左屍床よりも重視されていた可能性も想定できよう。出土遺物が知られていないため、時期の詳細は不明である。なお、八代市五反田古墳でも、奥石障と右石障にのみ円文が刻まれていることが報告されている（松本 1961 : p.42）（表 3）。

広浦古墳（上天草市）（図 2-7） 大戸鼻古墳群が築かれた上島北東端の下大戸ノ岬のすぐ北側には、大戸ノ瀬戸をはさんで維和島が存在する。広浦古墳が所在するのは、その維和島の南端近く、西方へ突出した短い岬の上である。古墳は 1918 年（大正 7）に発見、そして破壊されたが、その際、装飾のある砂岩製板石 4 個が確認され、それぞれ濟々鬘第 1 石、濟々鬘第 2 石、維和村第 1 石、維和村第 2 石と名付けられた（濱田 1919）。現在、濟々鬘第 1・2 石は熊本県立美術館に、維和村第 1 石は京都大学に所蔵されているが、維和村第 2 石は行方不明となっている。装飾文様を確認しておけば、濟々鬘第 1 石には鞘入りの大刀と革製鞘入りの刀子が、濟々鬘第 2 石には革製鞘入りの刀子と吊り下げられた一重円文、柄を付したような半円文が、維和村第 1 石には革製鞘入りの刀子と 2 個の一重円文が、維和村第 2 石には短甲が表されている。大刀や短甲が描かれる点に着目すれば、この文様構成は上述の大鼠蔵東麓 1 号墳に類似している。

ところで、濱田耕作の報告では、広浦古墳の埋葬施設は箱式石棺とされたが（濱田 1919）、同じ報告のなかで「上部に圓形の石材堆積し、」「此の石材を上部より取り除きたるに、内部に大なる板石の積重ねたる

ものを発見せり」などと記されていることや（濱田 1919：pp.14－15）、現地には現在、石室石材と思われる板石が多数積み上がっていること（神川編 2006）などから、石室であった可能性も考えられていた（杉井 2007）。近年、池田朋生は、残された装飾石材を詳細に観察し、維和村第1石および濟々巖第1石の上辺に深さ5～6mm程度の浅い割り込みが存在することを発見した。そして、こうした造作は石障の上辺にみられるものであることから、広浦古墳の主体部は石障系石室であると指摘した（池田 2014・2016）。これは、大変説得力のある妥当な見解と考える。本稿で広浦古墳を石障系装飾古墳に分類した所以である。

田川内1号墳（八代市）（図2－8） 田川内1号墳は、八代平野の南端部、九州山地と平野の接点付近に位置する円墳である。そこは、日奈久温泉のすぐ北にあたる。周辺地形から、一定程度の盛土がなされていると推測できる。内部主体は石障系横穴式石室で、石障石材は砂岩である。コの字形の屍床配置であるが、奥屍床だけは、その上に板石からなる屋根石が乗せられており、石屋形を形成している。四辺すべての石障内面に二重円文が線刻されているほか、前石障の外側中央、羨道からみえる位置にも2個の二重円文が刻まれている。石障の外側にも装飾が施されている点が必要な特徴である。また、奥屍床の前面に配された仕切石の中央通路に面した箇所にも3個の一重円文が刻まれている点も特徴である。革綴短甲や多段鍔、頸甲の破片の存在が知られていることから（西嶋 2012）、前方後円墳集成編年（広瀬 1991）の7期頃、5世紀中葉に位置付ける。

長砂連古墳（上天草市）（図2－9） 大矢野島は天草諸島の最北端にあり、その東隣には上述した維和島が存在する。長砂連古墳は、その大矢野島の南東部に突出した岬の上に位置している。先に触れた大戸鼻北・南古墳と広浦古墳、そして長砂連古墳は、お互いに視認することができる位置関係にある。長砂連古墳は円墳で、石障系横穴式石室を内部主体とする。現在、石室の石積みはすべて失われており、石障のみが残存する。石障は阿蘇溶結凝灰岩製で、屍床配置は川の字形である。装飾文様は左右の石障に刻まれている。X字状の斜交軸を基準にして数えれば、右石障には3単位の直弧文が、一方、左石障には中央の同心円文をはさんでその左右に直弧文が1単位ずつ浮き彫りされている。出土遺物から、5世紀中葉の築造時期が想定できる。表3をみれば明らかであるが、八代海沿岸地域に位置する装飾古墳としては、石障が凝灰岩製である点、および文様が直弧文である点において、長砂連古墳はきわめて特異な存在である。

（2）八代海沿岸地域の装飾古墳の特質

ここまで、八代海沿岸地域に築かれた装飾古墳のうち、重要と考えるものをいくつか紹介してきた。先行研究でも繰り返し言及されてきたことだが、前節での記述および表3をもとに当地域の装飾古墳の特質をあらためて整理すれば、次のようになるだろう。

すなわち、

- ①石棺系箱式石棺施文型装飾古墳が卓越すること、
 - ②石障系装飾古墳が卓越すること、
 - ③①・②に密接に関連することだが内面加飾タイプが卓越すること、
 - ④石棺系箱式石棺施文型および石障系のいずれにおいても装飾文様は彫刻された円文が主体であること、
 - ⑤箱式石棺および石障のいずれにおいても装飾（円文）が施されるもののほとんどは砂岩製であること、
 - ⑥石棺系箱式石棺施文型と石障系は同時並行的に古墳時代中期（5世紀代）に盛行すること、
- の6点である。

このように整理すれば、すでに記述したことだが、凝灰岩製の石障に直弧文が描かれた長砂連古墳の特異性は明らかである。X形文を斜交軸の表現と解釈すれば、直弧文や鍵手文は凝灰岩製の埋葬施設との相関をもつことがうかがえる（表3）。

さらに、石棺系舟形石棺施文型・外面加飾タイプの宇城市鴨籠古墳や石棺系家形石棺施文型・内面加飾タイプの氷川町竜北高塚古墳、石屋形系・内外面加飾タイプの宇城市国越古墳なども、八代海北部沿岸地域全体を一体としてとらえるならば特異な存在とみなされるだろう。ただし、所在地を詳細にみれば、それらはいずれも氷川流域以北に位置している。すなわち、上で指摘した①～⑥の特徴は、八代市域とその対岸の上天草市域、もっと限定するならば、球磨川の河口周辺とその対岸の大戸ノ瀬戸周辺に築かれた装飾古墳の特徴といえるのである。

この点は、すでに高木正文によって整理されていることである（高木正 1999）。高木は、熊本県の装飾古墳を検討するにあたって、「八代・天草の装飾古墳」という項目を設けて解説を行うが、そこで取り上げているのは球磨川河口周辺および大戸ノ瀬戸周辺に築かれた装飾古墳のみであり、しかも長砂連古墳については「肥後中部の直弧文を施す装飾古墳」という別の項目のなかで言及しているのである。私は、これを参考にしながら表3をまとめ、①～⑥を具体的に指摘したにすぎない。

また、当地域に円文が卓越することについては、高木恭二や宇野慎敏によって、より詳細な検討がなされている（高木 1994b・2002、宇野 2008）。高木恭二は、装飾文様の地域性の意味を考察するなかで、「石棺内に円文だけを描く球磨川河口八代付近から天草にかけての地域」と指摘したうえで、「それぞれの地域ごとに文様を祭祀のシンボルとする地域社会が確立しつつあったものと思われる」と解釈した（高木恭二 2002：p.199）。宇野慎敏は、円文・同心円文をその施文方法によって陰刻、線刻、半肉彫りに細分し、それぞれの分布に差異がみられることを明確に図示した（宇野 2008：p.276）。私の検討は、こうした先行研究に支えられたものである。

私は、上述したように、当地域の円文が意味するものについて、とくにその初期のものは副葬品としての銅鏡を表していると考え、これも幾人かの先学によってすでに指摘されてきたことである。宇野慎敏は、小鼠蔵1号墳や大鼠蔵尾張宮古墳にみられる円文は、その描かれる位置から「前期古墳に見る頭上に副葬された鏡を想定させる」とするが（宇野 2008：p.272）、私もそれに同感である。内面加飾タイプであること、円文以外では短甲が表される場合もあることを考えれば、八代海沿岸地域で当初描かれた円文は、副葬品としての銅鏡を表すことを第一の目的とするものであったと推測できよう。それに僻邪等の意味が付与されるようになるのは、形象埴輪にも表される鞍や盾、そして円文を、横に並べるようにして石障に描くようになってからではないだろうか。

円文を描くことは、八代海沿岸地域以外でもなされている。時期の古い事例としては、福井県小山谷古墳の舟形石棺が著名であるが、中心に小突起を有す円文が蓋石上面の左右に4個ずつ、計8個配されている。あたかも銅鏡が棺外に立て並べられた様子を表しているかのようなのである。これはおそらく、外面に多数を並べるように描く点から推察すれば、僻邪の意味が込められている可能性が高いだろう。大阪府安福寺境内の割竹形石棺蓋石外面の合わせ目に刻まれた直弧文には、封じ込めの意味が付されているようにも想像されるが、石棺系装飾古墳の外面加飾タイプはそうした僻邪の意味合いの強いものであったと推察されよう。

そのように考えてよければ、八代海沿岸地域における内面加飾タイプの円文装飾は、副葬品を表すものである点で、装飾古墳全体のなかでもきわめて独特な存在だといえるのである。

では、八代海沿岸地域において、実際の銅鏡はどのような存在であったのか。次に、当地域での銅鏡のあり方を検討する作業を通じて、円文が銅鏡に代わるものとして棺内に描かれるようになった背景を考えることにしたい。

3. 八代海沿岸地域における鏡の位置付けと装飾古墳

(1) 熊本県地域の銅鏡分布にかんする研究略史

熊本県地域出土の銅鏡については、肥後考古学会によって集成が行われており、いまでもそれがもっとも有益な基礎情報の1つである(肥後考古学会編 1983)。そのなかで、古墳時代の鏡についての解説を担当した高木恭二は、弥生時代の鏡との比較を行い、両者の分布に明確な相違がみられることを指摘した。すなわち、「弥生時代鏡の多くが県北を中心として分布し、県南部には皆無に近い」。「ところが、これに対するかのように古墳時代前期に代表される三角縁神獸鏡は、県南のみに偏在して、北部には全くみられない。これは三角縁神獸鏡だけの傾向ではなく、他種の鏡式についてもいえる。特にそれは中部に濃密で、その出現の仕方は特異である。そして、古墳時代中・後期の段階になって、県内全域に普遍的に拡がっていった」と述べたのである(高木恭 1983: pp.37 - 38)。この高木の指摘はきわめて重要で、熊本県地域での鏡のあり方が弥生時代と古墳時代とでは大きく異なっていた可能性を強く示唆する。

南健太郎は、熊本県北・中部地域の弥生時代の銅鏡にまとを絞った検討を行い、漢鏡6期までは「菊池川中流域を中心とした流通」であるが、「漢鏡7期は菊池川流域中心の流通が衰退する時期」と指摘した(南 2007: p.20)。そのうえで、漢鏡6期までは山鹿市方保田東原遺跡や菊池市小野崎遺跡などが所在する菊池川中流域にいったん集まった銅鏡が再流通した可能性、そして、そうした流通システムが漢鏡7期段階に大きく変化した可能性を想定した。この南の視点は、熊本県地域における古墳時代の鏡の動向を考えるうえでも示唆に富む。

こうした先行研究を受けて、私も、熊本県地域における前方後円墳出現期前後の集落動向を検討するなかで、当該地域で漢鏡7期段階に生じた銅鏡分布の変化は、「同時期に生じた日本列島規模の中国鏡分布の変化、すなわち北部九州地域から畿内地域へ中国鏡分布の中心が移動することと連動するものであった可能性が高い。熊本県地域の三角縁神獸鏡が、それ以前の銅鏡分布の中心地域とは異なる場所にもたらされている点も、こうした列島規模での中国鏡分布の変化と関連していると思われる」と記述した(杉井 2018: p.380)。また、三角縁神獸鏡が八代から芦北にかけての地域で多く出土している事実から、「熊本県地域の古墳時代前期を考える際には、もっと八代から芦北の動向に注目する必要がある」との考えを示した(杉井 2009b: p.23)。

伝葦北郡出土の三角縁神獸鏡にかんしては、近年、森下章司によって、新たな資料の発見が報告された(森下 2013)。森下によれば、これまで京都大学総合博物館(以下、京大博)に伝葦北郡出土三角縁神獸鏡片が2点所蔵されていたが、そのうちの1つに接合する破片1点と新たな鏡片1点の存在が確認され、そのことにより伝葦北郡出土の三角縁神獸鏡は都合3面になったという。森下の整理にしたがって鏡式を確認しておけば、三角縁方作二神二獸鏡が2面(接合した1面および新発見の1面)、三角縁波文帯神獸鏡が1面(従来からの京大博所蔵品)であり、前者は福永伸哉による舶載鏡編年(福永 2005)のC段階、後者はD段階に位置付けられる。森下は、新発見の2点の破片は「ひとつの古墳から出土した同範・同型品がそのままとまりのまま流通し、現在に至ったと考えるのが自然であろう」としたうえで(森下 2013: p.40)、「波文帯神獸鏡片をふくめて、三角縁神獸鏡3面がひとつの古墳から出土したことになる。かつ伝葦北郡という出土地に間違いなければ、3面もの三角縁神獸鏡を副葬した古墳が熊本に存在したことになる。現在のところ、中・南九州において、三角縁神獸鏡を複数面出土した古墳は他に確認されていない」とのきわめて重要な指摘を行っている(同: p.41)。この伝葦北郡出土の3面以外にも、伝八代郡出土の三角縁波文帯四神二獸鏡(福永編年B段階)1面の存在も知られているから、八代・芦北地域においてはじつに4面もの三角縁神獸鏡が出土しているのである。これら4面以外では、熊本県地域においては宇土半島基部地域西側丘陵上の宇土市城ノ越古墳から出土した三角縁珠文帯四神四獸鏡(福永編年B段階)1面しか存在しないから、八代・芦北地域への三角縁神獸鏡の集中度の高さは注目に値する。



数	舶載鏡	破鏡とされるもの	弥生倭製鏡	不明
1	●	■	○	◇
2	●	■	○	
3	●		○	
4	●			
8			○	

①弥生時代の青銅鏡の分布
(下垣 2016・南 2007・発掘調査報告書をもとに作成)



数	三角縁神獸鏡		その他			不明
	舶載	倭製	舶載鏡	破鏡とされるもの	倭製鏡	
1	▲	△	●	■	○	◇
2			●			
3	▲		●		○	
4					○	
5			●			

②古墳時代の青銅鏡の分布
(下垣 2016・発掘調査報告書をもとに作成)
※厳密な出土地点が不明なものは、おおよその場所にドットを落とした

図3 菊池川流域以南の九州島西岸における銅鏡の分布

所在県	市町村	住所詳細	遺跡名	時期	青銅鏡の種類と数				合計枚数
					舶載鏡	破鏡とされるもの	弥生倭製鏡	不明	
熊本	荒尾市	宮内字鐘撞	鐘撞遺跡(伝)	弥生		1?			1
熊本	南関町	下坂下大場	大場石棺群	弥生後期		1			1
熊本	玉名市	岱明町野口	大原遺跡	弥生後期～		2	1		3
熊本	玉名市	岱明町野口木船	木船西遺跡	弥生後期～		1			1
熊本	玉名市	山田字高岡原	高岡原遺跡	弥生後期		1?	1		2
熊本	玉名市	山田	山田松尾平遺跡	弥生?		1			1
熊本	玉東町	稲佐91-1	稲佐津留遺跡	弥生後期	1		1		2
熊本	和水町	江田字諏訪原	諏訪原遺跡	弥生末期			1		1
熊本	和水町	江田字大久保	清原遺跡	不明			1		1
熊本	山鹿市	方保田	方保田東原遺跡	弥生後期・末期	3		8		11
熊本	山鹿市	方保田字白石	方保田白石遺跡	弥生後期			1		1
熊本	菊池市	泗水町吉富字古閑原	古閑原遺跡	弥生末期		1			1
熊本	菊池市	七城町台	うてな遺跡	弥生後期			2		2
熊本	菊池市	七城町蘇崎・小野崎	小野崎遺跡	弥生	4		8		12
熊本	大津町	大津字西弥護免	西弥護免遺跡	弥生後期			1		1
熊本	阿蘇市	乙姫字下山西	下山西遺跡	弥生			1		1
熊本	阿蘇市	狩尾字湯の口	狩尾・湯の口遺跡	弥生末期～		1			1
熊本	南阿蘇村	久石字西一丁畑	西一丁畑遺跡	弥生後期		1			1
熊本	南阿蘇村	吉田字南鶴	南鶴遺跡	弥生後期～			1		1
熊本	合志市	上庄字木瀬	木瀬遺跡	弥生後期			1		1
熊本	合志市	合生字八反原	八反原遺跡	弥生後期			1		1
熊本	熊本市	北区植木町滴水字ヲスギ	ヲスギ遺跡	弥生後期			1		1
熊本	熊本市	北区植木町石川字小迫	石川遺跡	弥生後期			1		1
熊本	熊本市	北区徳王字鶴畑	徳王遺跡	弥生			1		1
熊本	熊本市	北区貫町・和泉町	五丁中原遺跡群	弥生後期			1		1
熊本	熊本市	北区八景水谷1丁目	清水町遺跡群	不明		1			1
熊本	熊本市	西区上高橋字高田	上高橋高田遺跡	弥生～古墳		2			2
熊本	熊本市	西区戸坂町北原	戸坂遺跡	弥生後期		1	1		2
熊本	熊本市	西区田崎1丁目	二本木遺跡群	弥生後期		1	1		2
熊本	熊本市	西区蓮台寺	八島町遺跡	弥生後期			2		2
熊本	熊本市	中央区本荘	本庄遺跡	?			1		1
熊本	熊本市	東区石原町亀甲	石原亀の甲遺跡	弥生			2		2
熊本	熊本市	東区弓削町山尻	弓削山尻遺跡	不明			1		1
熊本	熊本市	東区長嶺	長嶺遺跡群	弥生			1		1
熊本	熊本市	南区平田	平田町遺跡	弥生?			1		1
熊本	熊本市	南区城南町宮地字構口	構口遺跡	弥生			1		1
熊本	熊本市	南区城南町宮地字新御堂	新御堂遺跡(宮地遺跡群)	弥生後期	2		2		4
熊本	嘉島町	北甘木字塚の上	二子塚遺跡	弥生後期	1	2	1		4
熊本	山都町[矢部町]	下名連石字枯木原	枯木原遺跡	不明		1			1
熊本	山都町[矢部町]	北中島	北中島西原遺跡	弥生後～末期		1	1		2
熊本	宇土市	宮庄町須崎	轟貝塚	不明		1			1
熊本	錦町	木上字夏女	夏女遺跡	弥生後期			2		2
熊本	あさぎり町	免田東字北吉井	本目遺跡	弥生後期～古墳		1			1
鹿児島	長島町	蔵之元明神617-2	明神3号墳	古墳			1		1
鹿児島	薩摩川内市	五代町西外川江	外川江遺跡	弥生後期			1		1
鹿児島	湧水町	川西字須行	永山遺跡3号墓	古墳前期			1		1
鹿児島	霧島市	隼人町西光寺字東免	東免遺跡	弥生			1		1
鹿児島	霧島市	国分中央2丁目	本御内遺跡	弥生後期		1			1
鹿児島	霧島市	上福元町不動寺前田	不動寺遺跡	不明		1	2		3
鹿児島	南さつま市	金峰町宮崎	芝原遺跡	弥生末期		2	3		5
鹿児島	指宿市	西方字横瀬	横瀬遺跡	弥生後期			1		1
福岡	みやま市	高田町海津字横馬場	海津横馬場遺跡	弥生後期			1		1
長崎	島原市	中野町高城元	景華園遺跡(伝)	弥生				1	1
長崎	雲仙市	北有馬町丁今福名字今福	今福遺跡	弥生			2?		2

表4 菊池川流域以南の九州島西岸における弥生時代銅鏡出土遺跡・墳墓一覧(図3-①表示分)

(2) 菊池川流域以南の九州島西岸における銅鏡の分布(図3、表4・5)

では、こうした先行研究をふまえ、あらためて菊池川流域以南の九州島西岸における銅鏡の分布を図示すると図3のようになる。この図の作成にあたっては、基本は下垣仁志による銅鏡集成(下垣 2016)に依拠したが、一部、南健太郎の論考(南 2007)や発掘調査報告書などの情報も加味した。また、伝八代郡出土や伝葦北郡出土の三角縁神獣鏡など、厳密な出土地点不明なものについては、おおよその場所にドットを落とした。広い範囲に視野をおいて出土傾向を確認するうえで、これでも大きな支障はないものとする。なお、この図に示した遺跡・墳墓については表4・5にまとめた。

さて、図3をみて明らかなのは、高木恭二が指摘するように、熊本県南部地域には弥生時代の銅鏡がもたらされていないことである。また、南健太郎が述べるとおり、熊本県地域における弥生時代の銅鏡分布の中

所在県	市町村	住所詳細	遺跡名	出土 埋葬施設 ・遺構	時期	青銅鏡の種類と数					合計 枚数	
						三角縁神獸鏡		その他				不明
						舶載	倣製	舶載鏡	破鏡と されるもの	倣製鏡		
熊本	荒尾市	下井手字山ノ上	狐塚2号墳	家形石棺	中期?						1	1
熊本	荒尾市	本井手字亀原	別当塚東古墳(伝)	横穴式石室	中期						1	1
熊本	玉名市	岱明町開田字京塚	院塚古墳	舟形石棺	前期			1			1	2
熊本	玉名市	繁根木字馬場	繁根木古墳(伝)	箱式石棺	中期?			1				1
熊本	玉名市	河崎字柳町、フケほか	柳町遺跡	大溝・包含層	前期				1	1		2
熊本	玉名市	天水町部田見字城ノ平	天水経塚古墳	舟形石棺	中期					1		1
熊本	玉名市	天水町立花字大塚	天水大塚古墳	箱式石棺	前期					1		1
熊本	和水町	江田字清原	江田船山古墳	家形石棺	中期			5				6
熊本	和水町	江田字清原	塚坊主古墳	横穴式石室	後期					1		1
熊本	山鹿市	方保田字辻	辻古墳1号石棺	舟形石棺	中期					1		1
熊本	山鹿市	方保田字東原	方保田東原遺跡2号石棺	箱式石棺	中期?						1	1
熊本	山鹿市	平山字舞野	舞野2号石棺	箱式石棺	前期					1		1
熊本	山鹿市	鹿央町岩原字久保原	久保原石棺	箱式石棺	中期?					1		1
熊本	菊池市	泗水町豊水字久米	久米若宮古墳	家形石棺	後期			1				1
熊本	菊池市	泗水町豊水字久米	久米石棺(伝)	箱式石棺	古墳時代					1		1
熊本	菊池市	泗水町福本字西宅地	福本遺跡	?	古墳時代?					1		1
熊本	阿蘇市	一の宮町中坂梨字番出	番出1号墳	箱式石棺	前期~中期					1		1
熊本	阿蘇市	一の宮町中通字上鞍掛	長目塚古墳	竪穴式石室	中期					1		1
熊本	阿蘇市	一の宮町中通字上鞍掛	鞍掛塚古墳	箱式石棺	中期					4		4
熊本	阿蘇市	一の宮町中通字上鞍掛	鞍掛古墳(伝)	箱式石棺	中期					1		1
熊本	阿蘇市	一の宮町中通字上鞍掛	中通古墳群(伝)	箱式石棺	中期					1		1
熊本	阿蘇市	一の宮町手野字的場	迎平6号墳	横穴式石室	後期			1				1
熊本	合志市	合生字八反原	ハヤマ2号石棺	箱式石棺	前期?					1		1
熊本	熊本市	北区植木町	吉松村横穴(伝)	横穴	後期					1		1
熊本	熊本市	北区清水町打越字永浦	打越稲荷山古墳	横穴式石室	後期					1		1
熊本	熊本市	北区清水町津浦字竹ノ上	竹ノ上石棺	箱式石棺	前期~中期					1		1
熊本	熊本市	北区龍田陣内	陣ノ内(陣内)石棺	箱式石棺	前期?			1				1
熊本	熊本市	西区小島下町下松尾	高城山3号墳	舟形石棺	前期?			1				1
熊本	熊本市	西区城山上代町無田脇	高橋稲荷石棺群	箱式石棺	前期~中期					1		1
熊本	熊本市	西区春日1丁目	北岡古墳	横穴式石室	中期			1				1
熊本	熊本市	東区水源1-1	水源地遺跡7号周溝墓	箱式石棺	中期?					1		1
熊本	熊本市	南区城南町塚原字上の原	上の原7号墳	円墳周溝	後期					1		1
熊本	熊本市	南区城南町塚原字丸山	將軍塚古墳(伝)	横穴式石室	中期						1	1
熊本	益城町	寺迫字城の本	城の本古墳	箱式石棺	中期					1		1
熊本	嘉島町	井寺字富屋敷	井寺古墳(伝)	横穴式石室	中期						1	1
熊本	御船町	豊秋字秋只	秋只古墳	竪穴式石室	中期			1		1		2
熊本	御船町	小坂字下原	小坂大塚古墳	横穴式石室	中期					1		1
熊本	御船町	小坂	小坂大塚付近石棺(伝)	箱式石棺	前期					1		1
熊本	御船町	滝川	今城大塚古墳(伝)	横穴式石室	後期					1		1
熊本	宇土市	神馬町馬場字千畳敷	西岡台遺跡	V字溝	後期			1				1
熊本	宇土市	栗崎町城ノ越	城ノ越古墳	箱式石棺	前期			1				1
熊本	宇土市	古保里町八津江	古保里2号墳	箱式石棺	前期					1		1
熊本	宇土市	立岡町西潤野	西潤野2号墳	箱式石棺	中期					1		1
熊本	宇土市	松山町向野田	向野田古墳	竪穴式石室	前期			3				3
熊本	宇土市	松山町南山内	チヤン山古墳	竪穴式石室	前期			1				1
熊本	宇城市	三角町三角浦字清水	清水甲古墳(伝)	箱式石棺	前期~中期						1	1
熊本	宇城市	三角町波多	重盛塚甲古墳	?	古墳時代						1	1
熊本	宇城市	不知火町長崎字国越	国越古墳	横穴式石室	後期			3				3
熊本	八代市	永田町字用七	用七遺跡	石棺?	前期?					1		1
熊本	八代市	岡町谷川字門前	門前1号墳	石櫃?	中期?					3		3
熊本	八代市	古閑浜町産島	産島2号墳	箱式石棺	前期~中期						1	1
熊本	八代市	敷川内町5反田	5反田古墳	横穴式石室	中期					1		1
熊本	八代市	日奈久大坪町塩釜上	塩釜1号墳	横穴式石室	後期					1		1
熊本	八代市	?	八代郡(伝)	?	前期			1				1
熊本	八代市	?	八代郡岡村(伝)	?	古墳時代					1		1
熊本	八代市・葦北郡	?	葦北郡(伝)	?	前期			3				3
熊本	天草市	亀場町亀川字下湯	妻の鼻3号墓	板石積石棺	中期					1		1
熊本	天草市	亀場町亀川字下湯	妻の鼻2号墓	板石積石棺	中期						1	1
熊本	あさぎり町	免田西字永才	才園古墳	横穴式石室	後期			1				1
鹿児島	長島町	蔵之元字白金崎	白金崎古墳	横穴式石室	後期						1	1
鹿児島	薩摩川内市	陽成町後迫・王子田	妻之浦貝塚	包含層	前期~中期				1			1
鹿児島	薩摩川内市	天辰町寺前	天辰寺前古墳	竪穴式石室	中期					1		1
鹿児島	薩摩川内市?	?(新田神社88号鏡)	鹿児島県(推定)	?	前期?			1				1
鹿児島	湧水町	川西堀ノ原	堀の原所在石棺	箱式石棺	?						1	1
鹿児島	日置市	東市来町伊作田字中梶	向梶城跡	住居	前期				1			1
福岡	みやま市	山川町清水字面のの上	面の上1号墳	箱式石棺	中期					1		1
福岡	大牟田市	黄金町1-469他	潜塚古墳	箱式石棺	前期			2				2
福岡	大牟田市	岬	石櫃山古墳	攪乱坑	中期					1		1
長崎	雲仙市	国見町多比良字岩名丁	高下古墳(伝)	横穴式石室	後期			1				1
長崎	南島原市	有家町蒲河	鬼塚古墳(伝)	横口式石室?	?						1	1
長崎	南島原市	北有馬町	塚田(伝)	?	?						1	1
宮崎	えびの市	上江字小木原	小木原2号地下式横穴	地下式横穴	後期					1		1
宮崎	えびの市	島内字杉ノ原	島内139号地下式横穴	地下式横穴	中期					1		1

表5 菊池川流域以南の九州島西岸における古墳時代銅鏡出土遺跡・墳墓一覧(図3-②表示分)

心が菊池川中流域にあることも明白である。さらに、古墳時代になると銅鏡の分布が宇土半島基部地域以南に広がることも、高木が指摘するとおりである。

ただし、熊本県地域よりも南、すなわち八代海沿岸地域よりも南にも視野を広げてみると、若干異なった様相としてとらえうる余地が生じてくる。鹿児島県長島町明神3号墳や同県湧水町永山遺跡3号墓など、一部に古墳時代の墳墓から出土した弥生倭製鏡も含まれているが(表4)、弥生時代の銅鏡が川内平野(川内川下流域)や吹上浜(万之瀬川下流域)といった薩摩半島地域にも比較的多くもたらされているのである(図3-①)。また、球磨川上流域の人吉盆地にももたらされている。つまり、視点を変えれば、弥生時代の銅鏡は、八代海沿岸地域のまわりにはもたらされているととらえられるのである。

こうした状況をみれば、弥生時代の銅鏡は熊本県南部地域に不在であるととらえるよりは、八代海沿岸地域に不在であるとみなす方が、より実態に即していると思われる。あえていうなら、弥生時代の銅鏡は、八代海沿岸地域を避けるようにして流通しているともとれる分布状況なのである。これは、甕棺が宇土半島基部地域までの主要分布範囲を越えて、薩摩半島西岸の吹上浜に飛地のように分布する状況とよく似ている(藤尾1989)。おそらく、甕棺と弥生時代の銅鏡は、同じようなルートをとって伝播したのであろう。

ただし、八代市上日置女夫木遺跡で小銅鐸と舌が、また八代市用七遺跡で青銅製鉞が出土していることからわかるように、弥生時代の八代海沿岸地域に青銅器がまったくもたらされていなかったわけではけっしてない。そのため、当該地域に暮らす当時の人びとが、すぐ北の宇土半島基部地域にまではもたらされていた銅鏡の存在をいっさい知らなかったとは考えがたい。より南の人吉盆地や薩摩半島には伝わっていることを考えれば、弥生時代の八代海沿岸地域では銅鏡をあえて受け入れなかったとみる方が蓋然性が高い。南健太郎が指摘するように、熊本県地域では弥生時代の銅鏡は、個人への帰属を示す墓への副葬事例がきわめて少なく、そのほとんどが集落遺跡からの出土であることから(南2007)、「政治性が希薄で儀礼的性格の強い存在」(上野2011:p.147)であったと考えられるが、弥生時代の八代海沿岸地域では銅鏡を用いた儀礼を採用しなかったとみられるのである。

ところが、古墳時代になるとこの状況は一変する。銅鏡出土数における菊池川中流域の優位性が完全に失われるとともに、八代海北部沿岸地域、とりわけ宇土半島基部地域の南半部から八代・芦北地域に多くの銅鏡がもたらされるようになるのである。なかでも、八代・芦北地域は、有力な前期の前方後円墳こそ存在しないが(杉井2018)、三角縁神獣鏡の集中度からすれば、一気に熊本県地域における序列トップの地位に躍り出る。福永伸哉は、「畿内の中央政権は、三角縁神獣鏡を最上位の威信財に位置づけるとともに、雑多な青銅器を廃して銅鏡の大きさと種類による序列を整備し、古墳という記念物の序列を加えながら、あらたな時代を開いていった」と述べるが(福永2008:p.123)、八代・芦北地域は、中央政権主導のそうした政治秩序が直接およぶ日本列島南西の最前線の位置に組み込まれたのである(杉井2018:pp.380-381)。

(3) 八代海沿岸地域における円文を描く装飾古墳の発生

このように、八代海沿岸地域の人びとは、弥生時代には銅鏡を横目にもみただけであったが、古墳時代になると銅鏡を完全に受容した。それは、当該地域が、なかでもとくにその北部地域が、中央政権を中心とする墳丘や埋葬施設、副葬品の質・量にもとづいた政治秩序体系に組み込まれたことを意味する。

そして、前代までは銅鏡を知りつつもその利用とはまったく無縁であったからこそ、そのことがかえって、よりいっそう銅鏡を用いた序列表示システムを社会階層の末端にまで意識させることになったのではないか。当初は、主として上位階層においてそのシステムが機能していたが、やがて銅鏡そのものではないとしても、銅鏡を埋葬施設の内面に描いてまでも序列表示システムに参画することが始まったのではないだろうか。円文の描かれた古墳が、墳丘をもたない箱式石棺墓であったり、あるいは小規模な円墳である点は、銅

鏡を用いた序列表示システムの最末端として、埋葬施設の内面に円文を描くことが始まったことを裏付けているように思う。このように考えてよければ、当初の円文は、地域における祭祀のシンボルとしてではなく、銅鏡を用いた序列表示システムのなかの1つとして始まったと考えることができる。

しかし、円文を埋葬施設の内部に描く行為が始まったのは古墳時代中期であり、すでに時代は、銅鏡ではなく甲冑をはじめとする武器・武具によって政治秩序を表すように変わっていた。そのため、真の銅鏡の代わりとして円文を描くことの意味が急速に変質し、形象埴輪にも表される鞍や盾、そして円文を横に並べて多数描き、僻邪の意味を込めるように変化したのではないだろうか。

おわりに

八代海沿岸地域の装飾古墳の特質は、本稿第2章第2節で提示した①～⑥に集約される。その場合、同じ八代海沿岸地域に築かれた宇城市国越古墳などは、それには当てはまらない。しかし、①～⑥に該当しない装飾古墳が少数築かれることにも、重要な歴史的意味があると考えられる。そのことについては今回議論できなかったが、今後、古墳時代後期以降の石屋形系や石室系、横穴系の装飾古墳も視野に入れて、熊本県地域の古墳時代を考察していきたいと思う。

引用・参考文献

- 池田栄史 1986「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第60号、九州考古学会：pp.93 - 112
- 岩橋 透 2000「古墳への装飾 その出現と変遷」『残されたキャンバス 装飾古墳と壁画古墳』大阪府立近つ飛鳥博物館図録22、大阪府立近つ飛鳥博物館：pp.73 - 77
- 上野祥史 2011「青銅鏡の展開」『弥生時代の考古学』第4巻、同成社：pp.139 - 154
- 宇野慎敏 2008「装飾古墳における円文の出現と展開」『古代学研究』第180号、古代学研究会：pp.271 - 278
- 宇野慎敏 2018「装飾古墳にみる有力首長層の動向—装飾文様の出現と展開—」『つどい』第362号、豊中歴史同好会：pp. 1 - 12
- 岡崎 敬 1983「熊本県の古鏡—弥生時代と古墳時代—」『肥後考古』第3号、肥後考古学会：pp. 1 - 11
- 乙益重隆 1956「八代市大鼠蔵山古墳—肥後における箱式石棺内合葬の例について—」『考古学雑誌』第41巻第4号、日本考古学会：pp.43 - 53
- 乙益重隆編 1974『古代史発掘』第8巻、装飾古墳と文様、講談社
- 乙益重隆 1974a「装飾古墳とはなにか」『古代史発掘』第8巻、装飾古墳と文様、講談社：pp.23 - 24
- 乙益重隆 1974b「九州の装飾古墳」『古代史発掘』第8巻、装飾古墳と文様、講談社：pp.35 - 50
- 乙益重隆 1980「石障系石室古墳の成立」『國學院大學大学院文学研究科紀要』第11輯、國學院大學大学院：pp.31 - 60
- 河口貞徳 2001「新田神社・三角緑神獸鏡」『鹿兒島考古』第35号、鹿兒島県考古学会：pp. 1 - 10
- 河野一隆 2011「装飾古墳における葬送の思想」『古墳時代の考古学』第3巻、墳墓構造と葬送祭祀、同成社：pp.235 - 248
- 藏富士寛 1999「装飾古墳考」『先史学・考古学論究』Ⅲ、白木原和美先生古稀記念献呈論文集、龍田考古会：pp.87 - 103
- 河野法子 1982「石障系古墳の一考察」『肥後考古』第2号、肥後考古学会：pp.42 - 58
- 甲元眞之 1983「弥生時代の鏡」『肥後考古』第3号、肥後考古学会：pp.15 - 17
- 甲元眞之 2017a「熊本の装飾古墳とその展開」『葆光』私家版：pp. 1 - 18（初出：『平成28年熊本地震による古墳の被災状況について』文化庁・熊本県教育庁、2017年：pp. 8 - 27）
- 甲元眞之 2017b「装飾古墳の分布の拡大」『葆光』私家版：pp.19 - 34

- 甲元眞之 2017c「肥後型石室考」『葆光』私家版：pp.44 - 59
 国立歴史民俗博物館編 1993『装飾古墳の世界 図録』朝日新聞社
- 小林行雄 1964『装飾古墳』平凡社
- 齋藤 忠 1952『装飾古墳の研究』吉川弘文館
- 齋藤 忠 1965『古墳壁画』日本原始美術5、講談社
- 齋藤 忠 1973a『日本装飾古墳の研究』講談社
- 齋藤 忠 1973b「図文の考察」『日本装飾古墳の研究』講談社：pp.30 - 68
- 齋藤 忠 1989『壁画古墳の系譜』日本考古学研究2、学生社
- 佐古和枝 1992「壁画古墳論」『古墳時代の研究』第12巻、古墳の造られた時代、雄山閣出版：pp.89 - 104
- 重藤輝行 2018「九州からみた畿内」『講座 畿内の古代学』第Ⅱ巻、古墳時代の畿内、雄山閣：pp.334 - 345
- 下垣仁志 2011『古墳時代の王権構造』吉川弘文館
- 下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
- 白石太一郎 1993「装飾古墳へのいざない」『装飾古墳の世界 図録』朝日新聞社：pp.11 - 15
- 白石太一郎 1995「古墳壁画の語るもの」『装飾古墳が語るもの—古代日本人の心象風景—』吉川弘文館：pp.97 - 112
- 白石太一郎 1999「装飾古墳にみる他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集、国立歴史民俗博物館：pp.73 - 9523 - 314
- 杉井 健 2005「盛土上に基底石を置く横穴式石室の史的意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊、大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団：pp.371 - 389
- 杉井 健 2009a「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、熊本大学文学部：pp.231 - 238
- 杉井 健 2009b「前方後円墳の出現」『宇土の今昔 百ものがたり』宇土市：pp.20 - 23
- 杉井 健 2018「弥生時代後期集落の消長よりみた古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景—なぜそこに古墳は築かれたのか—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集、国立歴史民俗博物館：pp.351 - 407
- 高木恭二 1983「古墳時代の鏡」『肥後考古』第3号、肥後考古学会：pp.31 - 40
- 高木恭二 1994a「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号、宮嶋利治学術財団：pp.109 - 132
- 高木恭二 1994b「肥の石製品と古墳文化—装飾古墳文様との関連を中心として—」『石人・石馬—里帰り展—』岩戸山歴史資料館：pp.72 - 79
- 高木恭二 2002「九州の装飾古墳」『東アジアと日本の考古学』Ⅱ、墓制②、同成社：pp.189 - 220
- 高木恭二 2012「装飾古墳」『講座日本の考古学』第8巻、古墳時代（下）、青木書店：pp.478 - 505
- 高木正文編 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会
- 高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集、国立歴史民俗博物館：pp.97 - 150
- 田尻義了 2012『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会
- 谷川健一編 1964『太陽』No. 8、特集 日本の原始絵画、平凡社
- 中村幸宏 2002「肥後」『装飾古墳の展開—彩色系装飾古墳を中心に—』第51回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、埋蔵文化財研究会：pp.25 - 42
- 濱田耕作 1917「装飾附加の場所」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古学研究報告第1冊、京都帝國大學：pp. 6 - 7
- 濱田耕作・梅原末治 1917『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古学研究報告第1冊、京都帝國大學
- 濱田耕作・梅原末治・島田貞彦 1919『九州に於ける装飾ある古墳 附録 彌生式土器形式分類圖録』京都帝國大學文學部考古学研究報告第3冊、京都帝國大學

- 林田和人 2002 「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨集、九州前方後円墳研究会：pp.117 - 144
- 肥後考古学会編 1983 『肥後考古』第3号、肥後古鏡聚英
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社：pp.24 - 26
- 広瀬和雄 2009 「装飾古墳の変遷と意義—靈魂観の成立をめぐる—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集、国立歴史民俗博物館：pp.273 - 314
- 福島雅儀 2018 「布幕の描かれた古墳」『実証の考古学』松藤和人先生退職記念論文集、同志社大学考古学シリーズXⅡ、同志社大学考古学研究室：pp.345 - 353
- 福永伸哉 2005 『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 福永伸哉 2008 「青銅鏡の政治性萌芽」『弥生時代の考古学』第7巻、同成社：pp.112 - 126
- 藤井 功・石山 勲 1979 『装飾古墳』日本の原始美術 10、講談社
- 藤尾慎一郎 1989 「九州の甕棺—弥生時代甕棺墓の分布とその変遷—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第21集、国立歴史民俗博物館：pp.141 - 206
- 古城史雄 2009 「肥後の横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会 2007 年度熊本大会分科会 I 記録集、北九州中国書店：pp.21 - 45
- 埋蔵文化財研究会編 2002 『装飾古墳の展開—彩色系装飾古墳を中心に—』第51回埋蔵文化財研究集会発表要旨集・資料集
- 丸林禎彦 2002 「円文・三角文の展開」『装飾古墳の展開—彩色系装飾古墳を中心に—』第51回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、埋蔵文化財研究会：pp.137 - 154
- 光本 順 2001 「6・7世紀における陶棺の変容とその特質—定東塚・西塚古墳出土陶棺の評価によせて—」『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室：pp.257 - 290
- 南健太郎 2007 「肥後地域における銅鏡の流入とその特質」『肥後考古』第15号、肥後考古学会：pp.13 - 30
- 蓑田田鶴男 1959 『金剛の歴史』八代市立第六中学校 P T A
- 森下章司 2013 「林裕己氏蔵三角縁神獣鏡と伝葦北郡出土鏡」『横浜ユーラシア文化館紀要』第1号、横浜市ふるさと歴史財団横浜ユーラシア文化館：pp.37 - 42
- 森貞次郎 1972 『装飾古墳』朝日新聞社
- 森貞次郎 1985 『装飾古墳』教育社歴史新書 日本史 41、教育社
- 八代市文化財審議委員会編 1980 『八代市の文化財 総集編』八代市教育委員会
- 柳沢一男 1980 「肥後型横穴式石室考—初期横穴式石室の系譜—」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会：pp.465 - 497

表3に示した装飾古墳の関連文献

小鼠蔵1号墳

- 蓑田田鶴男 1959 「小鼠蔵山古墳群」『金剛の歴史』八代市立第六中学校 P T A：pp.47 - 51
- 乙益重隆 1984 「小鼠蔵1号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.169 - 170
- 池田栄史 1986 「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第60号、九州考古学会：pp.93 - 112
- 杉井 健 2009 「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、熊本大学文学部：pp.231 - 238

小鼠蔵3号墳

- 蓑田田鶴男 1959 「小鼠蔵山古墳群」『金剛の歴史』八代市立第六中学校 P T A：pp.47 - 51
- 乙益重隆 1972b 「小鼠蔵古墳出土の土器」『土師式土器集成本編』2（中期）、東京堂出版：p.126
- 八代市文化財審議委員会 1980 「小鼠蔵山第5号古墳出土土師埴（市指定）」『八代市の文化財 総集編』八代市教育

委員会：p.47

池田栄史 1984「小鼠蔵3号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.170 - 171

池田栄史 1986「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第60号、九州考古学会：pp.93 - 112

大戸鼻南古墳

濱田耕作 1917「阿村大戸南古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第1冊、京都帝國大學：pp.46 - 47

坂本経堯・経昌 1971「下大戸岬古墳群」『天草の古墳』私家版：pp.69 - 74

隈 昭志 1984「大戸鼻南古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.148 - 149

田川内3号墳

蓼田田鶴男 1959「田の河内古墳群」『金剛の歴史』八代市立第六中学校P T A：pp.58 - 61

松本雅明 1961「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第1集、熊本県教育委員会：pp.41 - 55

佐藤伸二 1984「田川内3号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.181 - 182

田川内2号墳

松本雅明 1961「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第1集、熊本県教育委員会：pp.41 - 55

佐藤伸二 1984「田川内2号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：p.181

大鼠蔵東北麓2号墳

江上敏勝 1970「熊本県八代地方における文化財・遺跡の破壊の概要について」『夜豆志呂』15・16合併号、八代史談会：pp.8 - 21

江上敏勝 1972「熊本県八代地方に分布する古墳時代箱式石棺集成地名表」『夜豆志呂』27・28合併号、八代史談会：pp.23 - 34

江上敏勝 1984「大鼠蔵東北麓2号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：p.167

大鼠蔵東麓1号墳

乙益重隆 1956「八代市大鼠蔵山古墳一肥後における箱式石棺内合葬の例について」『考古学雑誌』第41巻第4号、日本考古学会：pp.43 - 53

蓼田田鶴男 1959「大鼠蔵山古墳群」『金剛の歴史』八代市立第六中学校P T A：pp.31 - 47

江上敏勝 1970「熊本県八代地方における文化財・遺跡の破壊の概要について」『夜豆志呂』15・16合併号、八代史談会：pp.8 - 21

江上敏勝 1972「熊本県八代地方に分布する古墳時代箱式石棺集成地名表」『夜豆志呂』27・28合併号、八代史談会：pp.23 - 34

乙益重隆 1972a「大鼠蔵楠木山古墳出土の土器」『土師式土器集成本編』2（中期）、東京堂出版：pp.125 - 126

江上敏勝 1984「大鼠蔵東麓1号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.165 - 166

池田栄史 1986「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第60号、九州考古学会：pp.93 - 112

大鼠蔵尾張宮古墳

濱田耕作 1917「八代郡金剛村大鼠蔵古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第1冊、京都帝國大學：pp.36 - 38

蓼田田鶴男 1959「大鼠蔵山古墳群」『金剛の歴史』八代市立第六中学校P T A：pp.31 - 47

隈 昭志 1984「大鼠蔵尾張宮古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.163 - 164

大戸鼻北古墳

濱田耕作 1917「阿村大戸北古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第1冊、京都帝國大學：pp.45 - 46

隈 昭志 1984「大戸鼻北古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.146 - 148

五反田古墳

蓑田田鶴男 1959「五反田古墳」『金剛の歴史』八代市立第六中学校PTA：pp.11 - 30

松本雅明 1961「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第1集、熊本県教育委員会：pp.41 - 55

佐藤伸二 1984「五反田古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.172 - 173

広浦古墳

濱田耕作 1919「肥後國天草郡維和村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳 附録 彌生式土器形式分類圖録』京都帝國大學文學部考古學研究報告第3冊、京都帝國大學：pp.14 - 21

乙益重隆 1984「広浦古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.144 - 145

神川めぐみ編 2006「広浦古墳測量・実測調査報告」『考古学研究室報告』第41集、熊本大学文学部考古学研究室：pp.27 - 42

杉井 健 2007「広浦古墳」『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編1、原始・古代、上天草市：pp.232 - 242

池田朋生 2014「京都大学総合博物館所蔵『装飾石材破片』について」『研究紀要』第10集、熊本県立装飾古墳館：pp.19 - 22

池田朋生 2016「京都大学所蔵『装飾石材破片（熊本県上天草市広浦古墳）』を巡る一考察」『海と山と里の考古学—山崎純男博士古稀記念論集—』山崎純男博士古稀記念論集編集委員会：pp.179 - 192

大鼠蔵西北麓2号墳

江上敏勝 1970「熊本県八代地方における文化財・遺跡の破壊の概要について」『夜豆志呂』15・16合併号、八代史談会：pp.8 - 21

江上敏勝 1972「熊本県八代地方に分布する古墳時代箱式石棺集成地名表」『夜豆志呂』27・28合併号、八代史談会：pp.23 - 34

江上敏勝 1984「大鼠蔵西北麓2号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：p.168

田川内1号墳

梅原末治 1917「日奈久町字田川内古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第1冊、京都帝國大學 pp.38 - 43

蓑田田鶴男 1959「田の河内古墳群」『金剛の歴史』八代市立第六中学校PTA：pp.58 - 61

佐藤伸二 1984「田川内1号（甲号）古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.178 - 180

吉永 明編 2004『熊本県指定史跡 田川内第1号古墳—石室修理報告書—』八代市文化財調査報告書第24集、八代市教育委員会

西嶋剛広 2012「熊本地域出土銀留短甲の検討—編年の位置付けと配布の背景—」『共同研究] マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館：pp.381 - 410

長迫古墳

梅原末治 1917「日奈久町字永迫古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第1冊、京都帝國大學：pp.43 - 44

蓑田田鶴男 1959「塩釜山古墳群」『金剛の歴史』八代市立第六中学校PTA：pp.51 - 57

松本雅明 1961「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第1集、熊本県教育委員会：pp.41 - 55

乙益重隆 1984「長迫古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.174 - 175

佐藤伸二 1984「付1. 日奈久神社の石材」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：p.175

佐藤伸二 1984「付2. 日奈久山下町の石材」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.176 - 177

門前2号墳

梅原末治 1919「肥後國八代郡龍峯村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳 附録 彌生式土器形式分類圖録』京都帝國大學文學部考古學研究報告第3冊、京都帝國大學：pp.46 - 48

松村道博 1980「門前古墳の調査」『清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓』熊本県文化財調査報告第41集、熊本県教育委員会：pp.29 - 31

隈 昭志 1980「門前古墳発見の経緯」『清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓』熊本県文化財調査報告第41集、熊本県教育委員会：pp.32 - 40

佐藤伸二 1984「門前2号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.161 - 162

小田良古墳

江本 直編 1979『小田良古墳』三角町文化財調査報告、三角町教育委員会

江本 直 1984「小田良古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.135 - 139

ヤンボシ塚古墳

高木恭二・木下洋介編 1986『ヤンボシ塚古墳・櫛崎古墳』宇土半島基部古墳群分布調査報告(V)、宇土市埋蔵文化財調査報告書第13集、宇土市教育委員会

坂本古墳

梅原末治 1919「肥後國上益城郡杉上村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳 附録 彌生式土器形式分類圖録』京都帝國大學文學部考古學研究報告第3冊、京都帝國大學：pp.28 - 29

三島 格 1984「坂本古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.95 - 96

劔原2号墳

未報告

千金甲1号墳

梅原末治 1917「飽託郡小島町千金甲高城山古墳群」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第1冊、京都帝國大學：pp.16 - 24

三島 格 1984「千金甲1号(甲号)古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.83 - 85

長砂連古墳

乙益重隆 1984「長砂連古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.140 - 141

三島 格 1984「〔資料〕下林繁夫氏の『長砂連古墳調査報告』について」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：p.141

下林繁夫 1984「長砂連古墳調査報告」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.141 - 143(初出は『天草維和村の考古学的調査の棗』熊本県立玉名高等学校考古学部、1955年)

南健太郎編 2005「長砂連古墳石障実測調査報告」『考古学研究室報告』第40集、熊本大学文学部考古学研究室：

pp.39 - 50

井寺古墳

濱田耕作 1917「上益城郡六嘉村大字井寺古墳」『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第1冊、京都帝國大學：pp. 8 - 6

田添夏喜 1982『史跡井寺古墳』嘉島町文化財調査報告、嘉島町教育委員会

乙益重隆 1984「井寺古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集、熊本県教育委員会：pp.88 - 91

図表出典

図1-1～6の実測図：高木正文編 1984

図1-3の拓本：大戸鼻南古墳関連文献の濱田耕作 1917

図1-3の写真：杉井健 2007年9月27日撮影

図2-7の実測図：広浦古墳関連文献の池田朋生 2014

図2-7の拓本：広浦古墳関連文献の濱田耕作 1919

図2-8の実測図：田川内1号墳関連文献の吉永明編 2004

図2-8の拓本：田川内1号墳関連文献の梅原末治 1917

図2-9：長砂連古墳関連文献の南健太郎編 2005

図3：杉井健作成

表1～5：杉井健作成

八代海周辺における横穴系装飾古墳の発生と展開

高木 恭二

はじめに

熊本県の西南地域に広がる八代海周辺には数多くの装飾古墳が分布する。それらの古墳の装飾文様は比較的に単純な構成をなすものが多く、やや質素な感は否めない。しかし、それらは全国的な装飾古墳の編年からみれば古い時期に属するものがあり、装飾古墳の発生と展開を考える上で重要な存在となっている。

この地域の装飾古墳は石障系横穴式石室に描かれるものが多く、初期装飾古墳の解明にはこの種石室と箱式石棺などとの関連を明らかにすることが重要である。

筆者はかつて、石障系横穴式石室の成立と変遷について論じ、八代海沿岸の球磨川河口付近で発生したこの種石室が、次第に変化しながら北上し、八代海から有明海へと広がっていったことを示した（高木恭二 1994a）。

更には、装飾古墳の文様と石製表飾の検討を行う中で、装飾文様の基本単位図形が本来は地域集団の祭祀シンボルであったのではないかとの見解を示し^(註1)、肥後南部には円文が集中することなどを指摘した。

その後、高木正文によって肥後の装飾古墳についての詳細な分析が行われ、八代海周辺地域が肥後の装飾古墳の初源地であり、そこから天草や宇土半島へと分布域を広げ熊本市や肥後北部、さらには北部九州を経て日本列島各地へと影響を与えたとする見解が示された（高木正文 1999）。

今回、八代海周辺の装飾古墳の発生について考える機会を得ることができたので、改めてその意味などについて検討したい。なお装飾古墳については、多くの先学の研究の積み重ねがあるので適宜必要に応じて採り上げることとするが、紙数の関係もあるので改めて学史を語ることはしない。装飾古墳研究史については国立歴史民俗博物館による詳細な「装飾古墳主要文献目録」（玉利勲・設楽博己 1999）があり、これとは別に筆者も整理を行ったことがある（高木恭二 2012）ので、参考にさせていただきたい。

まず最初に八代海周辺の装飾古墳について概観し、そののち古墳の埋葬施設や装飾文様が施された古墳の特徴について触れておきたい。従来、装飾古墳の発生を論じる際、割り抜き式石棺など縦穴系埋葬施設の装飾古墳系譜と、横穴系埋葬施設の装飾古墳系譜を明確に区分けすることなく論じられてきたために、装飾古墳の9割以上を占める横穴式石室や横穴墓への加飾の始まりが八代海沿岸地域にあるとの重要性が顕在化できなかったのではないかと考えている。それと共に横穴系装飾古墳の発生は石障系横穴式石室が大きな鍵であり、その発生メカニズムについても考察を行った。

1. 八代海周辺の装飾古墳

八代海周辺で明らかに装飾を持つ古墳・石棺は25基であり、そのうち円文・同心円文だけを持つ古墳が14基（小鼠蔵1号墳・小鼠蔵3号石棺・大鼠蔵尾張宮古墳・大鼠蔵東北麓2号石棺・大鼠蔵西北麓2号墳・五反田古墳・長迫古墳・田川内1号墳・田川内2号石棺・田川内3号石棺・竹ノ内石棺・門前2号墳・大戸鼻北古墳・大戸鼻南古墳）、円文と他の文様を併用するもの4基（大鼠蔵東麓1号石棺・竜北高塚古墳・広浦古墳・宇賀岳古墳）、直弧文を持つ古墳は3基（長砂連古墳・鴨籠古墳・国越古墳）、舟の線彫り（線刻）を持つもの4基（桂原1号墳・桂原2号墳・塚原1号墳・河添鬼塚古墳）となっている^(註2)。

(1) 円文を持つもの

八代海周辺において、円文を持つ古墳が総数の70%を超えるというのは重要で、ある意味極めて特徴的な地域現象と言ってもよい。18例ある円文が表現された古墳の内部主体は、石障系横穴式石室か箱式石棺のいずれかであり、円文（一重円文）、同心円文（二重円文）、そして上部から垂直に垂らした紐を持つものや、円圏内に連続三角文を巡らせたものがある。

丸林禎彦、宇野慎敏の詳細な観察結果によれば、直径が小さいものから大きいものへの変化、円文から同心円文への変化などが明らかにされ、その表現手法も陰刻から線刻、半肉彫りへといった移行が想定されており、重要な指摘である（丸林禎彦 2002）。宇野による円文の直径比較表（宇野慎敏 2008a）をもとにして、埋葬施設ごとに分けたのが第1表である。

箱式石棺に描かれた円文の直径は10cm以下だけであり、石障系横穴式石室に描かれた円文の直径は10cm以下と10～20cmの両グループに分かれる。これに対して同心円文を持つ箱式石棺の直径は10cm以下が1例だけで、10～20cmが5例と圧倒的に多い。横穴式石室で同心円文を持つものは直径10cm以下の例はなく、10～20cmのものが2例、直径は20cm以上が1例となっている。

ちなみに、石障の高さに注目してみると、円文の直径10cm以下や10～20cmの例は、何れも床面から石障上面までの高さは65cm未満となっている。ところが、同心円文の直径10～20cm、20cm以上のものの3例全てが、石障の高さは65cm以上あって、大きく分かれるのである。

また、直径が小さな円文を持つ箱式石棺と、直径10cm以上の同心円文を持つ箱式石棺では、石棺の法量をみれば前者が細長く、後者がやや幅広になる傾向が伺える。

旧稿による石障系横穴式石室の時期区分から見れば、円文を持つものはⅠ～Ⅱ期で集成編年5期であり、同心円文を持つものはⅢ～Ⅴ期の集成編年6～8期に該当するとみている。

円文を持つ箱式石棺・石障系横穴式石室のグループと、同心円文を持つ箱式石棺・石障系横穴式石室のグループでは、前者が時期的に早くなり、円文から同心円文へという流れは追認できる。

ただ、石棺と石障系横穴式石室の円文には何らかの違いがあるのかどうかは大事なことであり、この地域では小鼠蔵1号墳で最初に円文（直径7cmと最小）が始まったことは間違いのないようである。宇野の成果を参考に、いまし詳細に見て、直径の小さい順に並べれば次のようになる。

	石障高	円文(一重)		同心円文(二重)		
		直径10cm以下	直径10cm～20cm	直径10cm以下	直径10cm～20cm	直径20cm以上
箱式石棺		小鼠蔵3号石棺			大鼠蔵東北麓2号石棺	
		広浦石棺			大戸鼻南石棺	
				大鼠蔵東麓1号石棺	田川内2号石棺	
					田川内3号石棺	
					竹ノ内石棺	
石障系横穴式石室	床面から65cm以下	小鼠蔵1号墳	尾張宮古墳			
			五反田古墳			
			大戸鼻北古墳			
	床面から65cm以上				田川内1号墳	門前2号墳
					長迫古墳	

第1表 八代海周辺における装飾円文の分類

小鼠蔵1号墳→小鼠蔵3号石棺→大鼠蔵尾張宮古墳→大鼠蔵東北麓2号石棺→五反田古墳→大戸鼻北古墳→門前2号墳。

(2) 円文と他の文様を併用するもの

大鼠蔵東麓1号石棺は、箱式石棺の長側石1枚に弓・鞆・紐で吊した鏡・三角板短甲・鏡を吊した大刀などが線彫りで表現される。鏡は共に中心部に小さな円があり、鈕座を表現したものとみられる。刀には把頭・把縁・鞘尻などの装具も表現される。

広浦古墳は、側石とみられる4枚の石材が残っている。第1石とされるものは、刀とそれに付着した皮鞘つきの刀子が描かれ、この刀にも把頭・把縁・鞘尻などの装具が表される。何れも浮き彫りである。第2石には、皮鞘つきの刀子と紐で吊した鏡、半円形に柄のようなものが付いたモノがあり、第3石には皮鞘の刀子と、二つの円文が表現される。第4石は短甲のようなモノが描かれ、この石材には接合のための溝が表現され。広浦の装飾と大鼠蔵東麓1号石棺は全体的な文様構成には共通する点がいくつかある。

円文を中心とした八代海周辺の装飾古墳の詳細については高木正文による分析があるので、その編年図を第1図に転載した(高木正文1999)。

竜北高塚古墳は凝灰岩を用いた組み合わせ式の家形石棺であり、この石棺の棺蓋・棺身の内面に装飾文様が表現される。棺蓋内面の長辺には長方形の区画が南北両面のそれぞれに2段4列、計16区画が陰刻されており、妻側にあたる両小口には陰刻された方形区画内に円文を浮彫りで表現したものが二つずつある。これらの蓋内面はあたかも「屋根裏の梁を思わせる」との所見が示されている(梅原末治1919)。

棺身の西側小口には横長の長方形区画内に3個の円文が浮彫り表現され、この円文の両側のものには上部に紐状の沈線があり、鏡を表しているものと思われる。東側小口にも円文と皮鞘つき刀子が表現されている。

なお、この石棺には別作りの石枕があり、それには直弧文(?)を思わせる沈線がある^(註3)。高塚古墳の装飾文様は、皮鞘つき刀子と円文の組み合わせであり、広浦古墳の第3石と共通するが、使用石材に違いがあるにもかかわらず共通することは注目される。

円文と他の文様を組み合わせた装飾古墳として宇賀岳古墳がある。妻入り横口式家形石棺が巨大化して、石棺式石室と呼ぶのにふさわしい構造で、石室内の奥壁に沿って屋根形の蓋石を持つ石室形を配し、奥壁と両側面に線彫りと彩色を併用した円文、三角文を組み合わせた装飾がある。奥壁には一対の刀掛状突起があり、その突起を挟んで11個の円文が線彫りで表されている。そのいくつかには中心孔を持つものがある。

奥壁には円文の下部に三角文が3段にわたって描かれ、円文上部には対角線(菱形)文が1段描かれる。左壁には三角文4段と梯子文が1段描かれる。右壁にも三角文が読み取れる。

この古墳の対角線表現を直弧文の名残とみる見解もあるが、その見方に対しては後述する(200頁)。

(3) 直弧文を持つもの

これに該当する古墳は、長砂連古墳・鴨籠古墳・国越古墳の3基あるが、それぞれ異なった構造の埋葬施設であり特徴的なものである。

長砂連古墳は石障に馬門ピンク石・馬門灰黒色石を用いたもので、左右側壁には浮彫り手法による直弧文が描かれており、右障には2段に作り出された刀掛状突起の間にB型直弧文が、その両側にはA型直弧文が表される。左障にも3つの文様帯があり、中央部には大きな円文があってその両側にA型直弧文が表されている。

浮彫り手法だけで表現されている直弧文は、この長砂連古墳以外には福岡県石人山古墳と岡山県千足古墳の2例があるのみである。千足古墳と長砂連古墳の文様は、直弧文の単位図形を反転し天地を逆にするもので、極めて類似する。

沿岸地域で他に直弧文があるのは宇城市鴨籠古墳の舟形石棺棺蓋である。蓋の両側長辺には二つの円文を挟んで3区画のB型直弧文があり、妻側の両小口にもそれぞれ2区画にB型直弧文があらわされる。直弧文は5線

		横穴式石室	箱式石棺
中期前葉	小鼠蔵1号墳		小鼠蔵3号墳
	大鼠蔵尾張宮古墳		大鼠蔵東麓1号墳
中期中葉	大戸鼻北古墳		広浦古墳
	長迫古墳		大戸鼻南古墳
中期後葉	門前2号墳		
	田川内1号墳		

第1図 八代・天草の裝飾古墳編年図（出典：高木正文 1999 をもとに，年代表記を筆者の時期区分観に改変。）

表現であり、赤・青色で塗り分けられている。

国越古墳は両袖式の単室横穴式石室で、その玄室奥側に石屋形がある。この石屋形の棺蓋や棺身の内外面に赤・青・緑・白色で彩色された鍵手文を主文様とする直弧文があつて、この種文様の極致を示す優れた装飾古墳である。

このように八代海周辺で直弧文を持つ事例は3例であるが、有明海側の宇土半島基部周辺では、石障系横穴式石室の石障石材が中世の板碑に転用された三拾町石材にも線彫りの直弧文があり、更には熊本平野の東端に彩色を持った直弧文として井寺古墳がある。

(4) 舟の線彫り（線刻）を持つもの

八代海周辺の装飾古墳で、もう一つの特徴である舟の線彫りを持つ古墳は4基ある。まず桂原1号墳は、両袖式単室横穴式石室の玄室側壁の約19箇所にも舟が描かれている。この古墳の装飾の特徴は数多くの石材に1～2艘の舟が描かれているという点であり、宇土半島北岸側の事例のように1石に10艘近くを重ね描きするもの（高木恭二・土野雄貴2010）とは明確な差がある。

桂原2号墳は玄室の石材の多くが抜き取られているために本来玄室に線彫りがあつたのかどうかは不明ながら、羨道部左壁に帆を持ったゴンドラ形の舟を1艘描き、この舟の下部海面部には半円で多くの波を描いた波濤文がある。

塚原1号墳は、側壁や天井石に舟や木葉状の文様、それに何を意図して描いたものか、よくわからないものを線彫りで表現する。

河添鬼の岩屋古墳の装飾は、奥壁上部に1艘の舟が描かれたもので、帆柱と帆を表わし帆柱の頂点から船首と船尾にロープ状の表現がある。玄室の大半が埋もれているために他にも描かれていた可能性がある（高木正文2010）。

(5) 八代海周辺装飾古墳の特徴

この地域の装飾古墳で特徴的なのは円文を用いられた古墳が特に多いということと、九州でも8例しかない直弧文を表現した古墳が3基もあるという点にあり、ここではこの2種の文様についてやや詳しく触れることにする。

八代海周辺で円文を持つ装飾古墳に最初に注目したのは松本雅明であり、円文の分布する範囲を「葦北の国造」の文化圏とした（松本雅明1961）。

その後、斎藤忠（斎藤忠1973）、松本雅明（松本雅明1979）、高木正文（高木正文1999）、丸林禎彦（丸林禎彦2002）、宇野慎敏（宇野慎敏2008a）などによって円文や同心円文そのものの詳細な観察がなされ、その直径や形状による形態の変化、彫刻技法による分類、そして変遷や展開、その意味等々についての見通しが明らかになってきている。

古墳に描かれた円文・同心円文は何を表わしたのかというと、鏡あるいは太陽ではないかとするなどの見解がある。特にこの地域の同心円文には円圏を巡らして鋸歯文を施したものを紐のようなもので吊している表現のものがいくつかあり、明らかに鏡を表しているということが分かる。

このように鏡を表現するのは、鏡が持っている呪的機能を意図していると考えられ、被葬者に対してなされたということが明らかである。そこで、具体的にはどのような意図、考えのもとにそれがなされたのかを考えてみたい。

古墳時代の早い段階には、竪穴式石槨に割竹形木棺・舟形木棺を納めてその内部に被葬者を安置するが、その際に被葬者を取り囲むように銅鏡を配することがよくなされる。これらは遺体に対して外部からの侵入を防ぐための辟邪としての機能を鏡が持っているということを示し、逆に被葬者（遺体）が悪霊となって外に出て行かないように封じ込めるなどの機能も鏡にはあるからだと考えられている。

三角縁神獣鏡の棺内外の配置では、木棺内に鏡を立てかける場合、鏡面を被葬者側に向ける場合が多くあり、棺の両外側に並べ巡らす場合は、被葬者に対して鏡面を向けるものと鏡背面を向けるものの両方があるとの指摘（用田政晴 1980, pp38）（今尾文昭 1989, pp45）（今尾文昭 1991, pp236）（岩本崇 2004, pp101）がある。

八代海周辺の装飾円文には、一重の円文と二重の円文（同心円文）があるものの、前に述べたように、はじめの段階は円文で、のちに同心円文に代わるようである。装飾古墳の円文は鏡の鏡面を表し同心円文は鏡背面を表すという指摘があり、箱式石棺内面に円文を描くということは、石棺内の遺体に対して何らかの魔力を及ぼそうとする為のものであり、逆に石棺内面に同心円文を描くというのは鏡背面が内側なので、鏡面は外を向いて、外敵に体する魔力を発揮するというものである（河野一隆 2011）。

この指摘をふまえて八代海沿岸の鏡について考えれば、箱式石棺・石障系横穴式石室共に、鏡面を描いたもの（円文）から鏡背面を描いたもの（同心円文）に代わると言いかえる事ができ、鏡が持つ霊的機能も二つの見方が考えられる。

また、前節（1）でも述べたように、小鼠蔵1号墳がこの地域で最初に円文を描いた古墳であり、まさに画期的な出来事であった。なぜこの古墳ではじめて装飾が始まったのかという具体的なきっかけについては後述（206頁）する。

次に、3古墳に描かれた直弧文について考えてみよう。直弧文は、本来、弥生時代以来の特殊器台に由来する弧帯文、更には原単位文などから変化したものであるが、装飾古墳に描かれるようになる以前の、古墳時代成立間もない頃にヤマト王権によって新たに確立された独自のシンボル文様であり、腕輪や埴輪、鹿角製刀剣装具などに用いられた。

古墳の埋葬施設に直弧文を表現するものは、これまでのところ10例が知られており、八代海周辺の3例と宇土半島基部・熊本平野の各1例の計5例が熊本県にある。そして福岡県の筑後平野南西部付近の3例、そして他の2例は岡山県にあるものの、その2例の石材は共に天草と宇土半島から運ばれたものである。現在のところ八代海北部にあたる宇土半島の南岸にある国越古墳が直弧文を持つ装飾古墳では最も遅れると考えられている。

直弧文が古墳に描かれなくなることを類推する一つの考えとして、千金甲1号墳にみられる対角線文（X字文）が直弧文の省略されたものであり、その結果X字文が広がっていくとの見解がある（高木正文 1999, pp114 - 120）（白石太一郎 1999, pp77）（宇野慎敏 2008a, pp274）（高木正文 2011, pp361 - 372）（福田匡朗 2016, pp647）。

直弧文は浮彫り技法から線彫り技法へと、独自の過程を省略化の傾向を辿りながら変化していったのは間違いないが、基本的に円弧と直線を組み合わせて成り立つ文様であり、鴨籠古墳のように対角線文がないものもある。千金甲1号墳にはX字文以外に直弧文的要素は全くみられないし、直弧文の部分的要素から成立した鍵手文を多用する国越古墳にはさまざまな文様を組み合わせる独自の文様が施されるものの、この古墳に後続する時期で直弧文を有する古墳はない^(註4)。

宇野慎敏が指摘しているように、三角文は古墳時代の早い段階から短甲、鏡、盾などに施されており、無理に直弧文のX字文から三角文の発生を考えなくてもいいだろう（宇野慎敏 2008b, pp345）。

筆者は千金甲1号墳のX字文そのものの発想が直弧文の斜交線軸から生まれた可能性^(註5)は否定しないが、直弧文を省略したX字文だけでは直弧文としての意味はないと考えている。千金甲1号墳や井寺古墳に後続する国越古墳においてX字文は極めて限定的に使用されているだけであり、宇賀岳古墳にX字文は少しだけ描かれているが直弧文的な要素はほとんどない。

装飾古墳の直弧文は、宇土半島基部勢力が岡山吉備地方との密接な関係があったからこそ出来上がった文

様であり、むしろ吉備地方を介してヤマト王権との密接な関係を示す重要な象徴でもあった。埋葬の場である古墳の主体部に直弧文を表現するという事は、被葬者の系譜を重んじるということであり、吉備勢力と擬制的同族関係を結んだ人物・集団だけに許される意匠が直弧文であったと考えられる^(註6)。

宇土半島基部にある直弧文を有する古墳3例（鴨籠古墳・三拾町転用板碑・国越古墳）の分布する地域が吉備勢力と密接な関係を持っていた集団であり、彼らはこの極めて限定的に用いられた特殊な意匠である直弧文を占有できたのである。

2. 八代海周辺古墳の時期

ここで改めて、今回採りあげた装飾古墳が築造された時期について考えてみよう。ただ、各古墳の形状・規模については第3章（八代海周辺の装飾古墳の概要）に詳しいので、ここでは省略した。

実は、これらの古墳の多くは石室の開口が早かったことや、古墳の詳細な発掘調査が行われたものが少ないために時期を特定することは難しい。ただ、いくつかの古墳で時期推定の根拠となるような遺物が判明しているので次に触れることにする。

まず大鼠蔵東麓1号石棺は、箱式石棺の内壁に線彫りによって大刀・鏡・三角板短甲が描かれており、この石棺からはほぼ全形を知ることができる土師器高坏が出土している。坏部には低い段があり、脚部は少し膨らみを持ち裾に向かって若干屈折する形状で、中期前葉～中葉頃の所産とみられる。また、短甲表現から考えられる年代観とも符合する。

長砂連古墳からは、土師器高坏の破片と鉄銚・鉄刀片が見つかっている（杉井健・南健太郎・牧野幸子2005）。高坏は、坏と脚の接合部分のみが残っているものの、時期を明確に判断するにはやや材料不足の感がある。鉄銚は袋部と刃部が見つかっており、袋部は円形の断面で関はない。刃部は鑄をもつが断面は菱形のものであり幅と厚さの比率は0.6程度である。高坏から詳細を述べるのは難しいが、鉄銚編年によればⅡ期に該当（高田貫太1998, pp51－54）し、この古墳の築造時期は中期の中葉頃を考えている。

次に門前2号墳の遺物について述べる前に、この古墳の墳丘について考えてみよう。門前2号墳は、これまで直径約15mの円墳とされてきたが、隣接する古墳として取り扱われてきた門前1号墳を含めて、2号墳側を後円部とする全長40～50m程度の前方後円墳の可能性もある。前方後円墳ではないかとの指摘（熊本県教育委員会1980, pp29－40）は以前からあり、かなりの地形改変があるものの、二つの古墳が接する裾部だけが低く、他の裾線とは大きく異なって違和感がある。それは、この部分がくびれ部にあたるためそのようになっているのではなかろうか。従来の古墳名称を尊重すれば、北側の2号墳は石障系横穴式石室とみられ、1号墳は箱式石棺であったようである。

明治17（1884）年に門前1号墳から、鏡・管玉・勾玉・剣・刀・鉄器等が発見されており、それらの遺物の内の鏡3面・管玉16個・勾玉1個が、宮内庁に保管されている（宮内庁書陵部1976）。

また門前2号墳から出土したとされる円文が彫られた石障石材が谷川公民館前に保管されており、近年、石障石材がもう一枚確認された。

ところでこの古墳の裾付近より少し離れた場所から、コンパス文土器を含む須恵器や陶質土器が出土している。明らかに陶質土器とみられる別の破片には格子目叩きがあり、コンパス文土器はほぼ全形を知ることができる。近年の発掘調査で出土した松橋大塚古墳のコンパス文土器（宇城市教育委員会2015a, 宇城市教育委員会2015b）と比較すると施文の手法や器形などに若干の違いがあり時期差が予想されるが、文様その他の要素を勘案すれば松橋大塚古墳の方が古相を示す。またこれとは別に、京大報告にある薄灰色の三脚付き浅鉢について佐藤伸二は陶質土器の可能性のあることを報じている（佐藤伸二1984, pp161）。

コンパス文土器の出土位置は、この二つの古墳がそれぞれ単独の古墳であるとすれば、1号墳に近い。両古墳を含めて、これが前方後円墳であるとすれば、くびれ部からやや前方部寄りになろう。なお、いずれに

しても両古墳は極めて近い時期に築造された可能性が高く、門前2号墳は中期後葉でもやや中葉に近い頃と判断される。

次に田川内1号墳の出土遺物について見てみよう。大正5～6（1916～1917）年にかけて行われた京都大学による熊本県地方の装飾古墳調査によってこの古墳も発掘調査が行われ、多くの遺物が出土している。その内容はガラス玉10・蕨手刀子2・剣1・鉄斧1・貝釧5・鎧残欠・刀身残欠・須恵器（陶質土器？）数点と人骨5体分などであるが、人骨は原位置にもどされている（京都大学考古学研究室1917）。

また昭和35（1960）年に松本雅明・三島格らによっても調査が行われており、この時にも多くの遺物が出土した。北区から短甲片・鏝・鎌・人骨、東区から黄色ガラス小玉・真珠小玉・刀・剣刃部破片・鉄鏃茎破片・刀子柄片？ほか、西区からは勾玉・管玉・緑色ガラス小玉・藍青色ガラス小玉・刀・鹿角製刀装具他などである。この折に確認された人骨は男性2、女性3の合計5体となっており（三島格1988）、大正の京都大学調査時に元に戻されていた数と一致する。

ただ、遺物の中で明確に時期比定を示すものは少ないが、ガラス色玉の存在や滑石製勾玉の断面がやや扁平に近い点などを考慮すれば、中期後葉に該当するであろう。

八代海に面する宇土半島南岸に所在する国越古墳は、鏡3面をはじめとして、耳環8、硬石製勾玉1、ガラス勾玉10、碧玉製管玉13、銀製空玉3、ガラス製小玉多数、粟玉多数、帯金具2、大刀、鹿角製玉飾付矛1、鉄鏃約30、鉄錐約20、ノミ1、人骨4体以上がある。

また、奥屍床手前に設けられた副床からは斧8、ノミ2、刀子4、鉋3、矛1、石突2、鋤先12、鎌6、鏃約10、銅鏡1、杏葉1、辻金具2、帯金具2のほか鉄製雛形の斧3、同鋤先4、同刀子2、同鎌2、同鋤先3、同大刀片1などが出土し、中央通路には須恵器の小型高坏と、脚台付の蓋付壺1など極めて豊富な内容である。墳丘から多くの須恵器や、人物・鈴・盾その他の器財埴輪、円筒埴輪なども大量に出土した（乙益重隆1967, pp 1-8）。築造された時期としては後期中葉頃が想定される。

以上の出土遺物が知られている古墳・石棺の、石室構造や装飾文様による型式変化などを勘案して八代海周辺装飾古墳の時期変遷は第2表のようになる。

時期 区分	八代平野		上天草市域		宇土半島八代海側		
	円文・同心円文・その他		円文・その他	直弧文・円文	直弧文・円文	円文・三角文	船
中 期	前葉	小鼠蔵1号墳 小鼠蔵3号石棺 大鼠蔵尾張宮古墳	大鼠蔵東麓1号石棺 大鼠蔵東北麓2号石棺 高塚古墳	広浦古墳 大戸鼻北古墳	長砂連古墳	鴨籠古墳	
	中葉						
	後葉	門前2号墳 田川内3号石棺 田川内2号石棺 田川内1号墳	竹ノ内石棺	大戸鼻南石棺			
後 期	前葉				国越古墳	宇賀岳古墳	桂原1号墳
	中葉						
	後葉						

第2表 八代海周辺装飾古墳編年表

3. 竪穴系装飾古墳と横穴系装飾古墳

古墳の埋葬に用いられた施設には大きくは竪穴系と横穴系の埋葬施設があり、時期や地域、あるいは被葬者集団がもっている社会的ネットワークなどによって様々な種類のものがつくられていた。装飾が施された主要な埋葬施設としては、やや粗掴みな表現ではあるが第3表のようにまとめられよう。

ちなみに初期装飾古墳を考える上で横穴系埋葬施設という構造そのものが大きな意味を持つことの意義を改めて提起したのは藏富士寛であり（藏富士寛 1999）、また柳澤一男が九州の横穴系埋葬施設の地域性等について改めて整理を行い、肥後型（石障系）石室について論じている（柳澤一男 2011）。

		古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期
竪穴系 埋葬施設	「棺」	割竹形石棺・舟形石棺	舟形石棺・長持形系石棺 ・箱式石棺・家形石棺	
	「室」施設		横穴式石室(石障系のみ) ・地下式横穴	横穴式石室・横穴墓 ・石棺式石室
横穴系 埋葬施設	「棺」		箱式石棺	石屋形
			妻入横口式家形石棺	

第3表 古墳時代の装飾をもつ埋葬施設一覧

(1) 竪穴系装飾古墳

竪穴系埋葬施設において石棺を納める槨施設そのものに装飾を施したものはないよう^(註7)、遺体を直接安置する石棺そのものへの加飾をなされたものがいくつかある。古墳時代埋葬施設に最初に装飾が施されたのは大阪府柏原市安福寺に所在する割竹形石棺であり、それに続いて各地の舟形石棺に装飾がなされた。安福寺の石棺は本来、玉手山3号墳（柏原市教育委員会 1989、柏原市教育委員会 1997）の竪穴式石槨に納められていたとみられ、割竹形石棺の棺蓋のみが現存する。装飾は、棺蓋側縁部にのみ線彫り（線刻）するもので、直弧文の祖型とも言える原単位文が施されている（櫻井久之 2005）。

舟形石棺に装飾を持ち、なおかつ竪穴式石槨に埋納されたものは全国で3例（備前市鶴山丸山古墳・福井市足羽山山頂古墳・宇城市鴨籠古墳）あるが、この他に岡山市造山古墳前方部石棺も、その可能性がある。

次に直葬された舟形石棺について考えてみよう。

対象となる装飾を有する舟形石棺は、福井県牛ヶ島石棺^(註8)・小山谷古墳・免鳥長山古墳・西谷尾佐越石棺・大牟田市石櫃山古墳2号石棺の5例を数えるのみであり^(註9)、これらは被覆施設の省略化による措置であろうとみられる。松江市丹花庵古墳の長持形系石棺、そして、熊本県石立古墳・晩免古墳・潤野古墳・中郡石棺・竜北高塚古墳の5例の家形石棺も同じような理由によるものとみられる。

更に、箱式石棺に装飾を持つものは7例（上天草市広浦石棺・上天草市大戸鼻南石棺・八代市大鼠蔵東麓1号石棺・大鼠蔵東北麓2号石棺・小鼠蔵3号石棺・田川内2号石棺・竹之内古墳）となっている。ちなみにこの7例は何れも八代海周辺に位置する。

ここで述べた直葬された舟形石棺、家形石棺は、それぞれの地域周辺において横穴式石室の築造が開始されたところもあり、ここであげた石棺類を竪穴系として分類することには異論も予想される。しかし棺そのものに横口などをしつらえている妻入り横口式石棺などは区分けすべきものと考えている。

以上、竪穴式石槨や直葬された舟形石槨、箱式石槨、長持形系石槨、家形石槨などの竪穴系装飾古墳は、これまでのところ全国で23基を数える^(註10)。

竪穴式石槨そのものに装飾を施したものはなく、何れも石槨への加飾のみである。このような石槨等の被覆施設そのものに装飾を施すようになるのは、横穴系埋葬施設の出現以降と考えている。

(2) 横穴系装飾古墳

横穴式石室の構築がはじまったと考えられている北部九州地域においては、その最初の段階の古墳に装飾文様があるものは見つかっていない。現段階では横穴系埋葬施設で最も古いと考えられるのは、まさに八代海周辺球磨川河口にある八代市小鼠蔵1号墳であるが、この古墳の不確定要素を理由として横穴式石室とする事を保留しておくとなれば、その次の候補は大鼠蔵尾張宮古墳となる。

横穴系埋葬施設とはいっても、その範疇は多岐にわたっておりさまざまな種類のものがある。例えば、横穴式石室でも、竪穴系横口式石室や石障系横穴式石室、肥後型横穴式石室、両袖型横穴式石室、複室構造横穴式石室等の種類があり、地域や時期によって特徴が異なるということは周知のことである。

特にその中で装飾文様を有する古墳がいくつか知られており、竪穴系横口式石室に埋納された妻入り横口式家形石槨の4例（久留米市浦山古墳・八女郡広川町石人山古墳・佐賀市西隈古墳、同じく佐賀市西原古墳）があり、石室はないが妻入り横口式家形石槨を直葬したものには2例（熊本市石之室古墳・熊本市北原1号墳）が知られている。

横穴式石室内に家形石槨状の石屋形を持ち込んだいわゆる平入家形石槨には、推定も含め9例（熊本県の塚坊主古墳・白塚古墳？・チブサン古墳・馬塚古墳・弁慶が穴古墳・上御倉古墳・宇賀岳古墳・国越古墳、大分県鬼の岩屋1号墳）がある。

もちろん、石屋形の天井部が家形状ではなく板状石を架す釜尾古墳のようなものも14例（熊本県の大坊古墳・永安寺東古墳・永安寺西古墳？・馬出古墳・釜尾古墳・千金甲3号墳・稲荷山古墳・横山古墳・石川山4号墳・袈裟尾高塚古墳、福岡県の弘化谷古墳・成合寺谷古墳・桂川王塚古墳・桜京古墳）あり、石障系横穴式石室の井寺古墳・田川内1号墳もこれに含まれる（古城史雄1995、藏富士寛1997、宇野慎敏2010^(註11)）。

これら様々の形状をなす石槨を収めたもの以外にも、長砂連古墳や千金甲1号墳などの石障系横穴式石室、茨城県虎塚古墳のような単室構造横穴式石室、福岡県重定古墳などのような複室構造横穴式石室、福岡県日ノ岡古墳や弘化谷古墳など胴張型横穴式石室、鳥取県梶山古墳のような切石造り横穴式石室、宮崎県旭台7号墳などの地下式横穴墓、熊本県鍋田27号や福島県清戸迫76号などの横穴墓もこれに含まれる。

日本列島各地にある横穴式石室や横穴墓等、大半の装飾古墳を横穴系装飾古墳として、竪穴系装飾古墳と区別する。全国の装飾古墳の9割以上あるものと思われる。

(3) 横穴系装飾古墳のはじまり

横穴式石室が日本列島で最初にはじまったのは玄界灘沿岸地域であると考えられており、それからほどなくして八代海周辺でも横穴式石室の築造が始まった。それは球磨川河口左岸にある小鼠蔵・大鼠蔵^(註12)から始まり八代海周辺地域に広がっていったのである。

惜しいことに小鼠蔵1号墳の横口部の構造が明確でなく発掘調査が行われていないために、横穴式石室とする見解に対して懐疑的な見方もある（杉井健2009, pp236）（古城史雄2014, pp108）が、石室東側上部にある幅約65cm、高さ約60cmの空間が横口部とみられ、その横口部直下の中央部には2枚の板石を並べて「川」の字状に3区に仕切り、中央は箱式石槨となっている（池田栄史1986）。

中央部の箱式石槨には蓋石1枚が載っており、この蓋石の下面には身と接する部分に対応する溝が彫られており、蓋石であることは明らかである。横口部とは反対側にあたる石槨西側小口面に直径約7cmの円文が

彫りくぼめられており、そこが頭部側にあたるものとみられる。その装飾は、現在では確認できないのは惜しまれるが、写真は残っている。

石室主軸に沿う箱式石棺に蓋石があったというのは重要なことで、石障系横穴式石室の中では唯一の事例であり、特殊である。

なぜなら、基本的に九州の横穴式石室では石室内の空間に仕切り石によって分けがなされるが、基本的には蓋は載せない。初期縦穴系横口式石室や横穴式石室では谷口古墳が主軸並行の長持形石棺に、横田下古



写真 小鼠蔵1号墳の円文（出典：斎藤忠1989, 71頁）

墳が奥屍床は箱式石棺状でありこれも蓋石がある。丸隈山古墳は石室中央の主軸に沿って配される接続石棺に蓋石状のものがあるものの、やや寸足らずで小さく蓋の機能を果たしていない（辻田淳一郎2011）。

このように初期横穴式石室には蓋石を持つものが数例あり、小鼠蔵1号墳の箱式石棺に蓋石があることで横穴式石室ではないという理由にはならない。

大鼠蔵尾張宮古墳で完成する石障系横穴式石室直前の原初的な姿が小鼠蔵1号墳である。この古墳が横穴式石室であるという理由は、石障があるということ、頭部側の小口部に円文があるということのも重要な指標であり、これに旧稿（高木恭二1994a）で示した次の4点もそうである。

- ① 羨道部と玄室の段差は、高さ120cmであるが、石障系横穴式石室では横口基底面から玄室床面までの段差は次第に低くなっていくという変遷がうかがえる^(註13)。
- ② 玄門部の形態は未発達な横口になると想定される。確認できる埋土からは幅65cm、高さ60cmに空間があり狭いが、このような横口部は初期横穴式石室のほとんどに共通する構造である。
- ③ 石室の壁体を構築するのは水俣市大崎付近に産する角閃石安山岩と天草大矢野島から天草上島付近に産する天草砂岩が混用されており、板石積石棺墓^(註14)や箱式石棺、縦穴式石槨など八代海周辺地域の墓制の影響のもと新たに考案された石室である（第6図）。ちなみに、小鼠蔵1号墳以外の大鼠蔵尾張宮古墳の石室にも安山岩が使われていることが明らかになっており^(註15)、水俣付近産安山岩の可能性もある。両古墳の石室側壁にこの石が使用されているということから、持ち送り手法の最初の作業を水俣付近から石を運んできた人々が荷なったのではないかとすることを想起させる。
- ④ 八代海沿岸から薩摩北部沿岸にかけて発達した特有な石積技術の、基底部に板石を立て並べる縦穴式石槨を持つ薩摩川内市安養寺丘古墳や船間島古墳、天辰寺前古墳（薩摩川内市教育委員会2011）などの墳丘を持つ古墳（便宜上、天辰寺前古墳類似縦穴式石槨と呼ぶ）の影響によって生まれた成合津2号墳類似縦穴式石槨からの影響で小鼠蔵1号墳が出来上がったものとみられる^(註16)。

ここで、板石積石棺墓の構造・変遷について改めてみておこう。芦北・水俣地域における板石積石棺墓の平面プランは、前期の終わり頃には長方形であり、中期初頭には楕円形プランとなって、それに続いてほぼ円形に近いながらもやや楕円形プランをとどめ、中期前葉頃になるとほぼ円形プランに収束し、その流れは中期中葉頃まで継続していたとみられる（森山栄一・高木恭二・西健一郎ほか2019, pp39-45）。

この地域の板石積石棺墓では、石棺墓内の平面空間が拡大化していくことになるが、それに伴って、側壁は穹隆状に積み上げ、天井（蓋）石も次第に高い位置になっていった。それと同時に側壁基底石に補強が必要となり、新たに支柱石^(註17)が用いられるようになる。おそらくこの手法は中期初頭には始まっている。

さて、石障系横穴式石室解明のカギは円文を描くという点にあるのではないだろうか。

日本列島における横穴式石室の始まりは、古墳時代前期後半から中期前葉の頃であった。基本的に九州の

横穴式石室内部は仕切石で区分けされ屍床を形成し、一部の例外を除いて屍床に蓋はない。福岡市鋤崎古墳においても同様であり、追葬時には前回埋葬した遺体が見え、まさに「開かれた棺」が創設されたのである。

人は死後に肉体的要素としての魄となって、横穴式石室の空間で浮遊し、一方、人の精神的要素である魂は、亡くなってから天に昇って祖霊となる（和田晴吾 2003）（和田晴吾 2008）。

これに対し、古墳時代前期から中期の竪穴式石槨や粘土槨などは、基本的に肉体的要素としての魄を密閉するための装置であり、遺体（魄）に邪悪なものが寄り付くのを防ぎ、魄が暴れだすのを鎮め密封するための「閉ざされた棺」であった。この「閉ざされた棺」としての装置は基本的に畿内系横穴式石室に受け継がれた。

「開かれた棺」は九州で始まっているが、そのきっかけは中国北朝からの影響であった可能性があるという（和田晴吾 2007）。東アジアにおける「開かれた棺」を検討して得られた結果であるが、それは九州の横穴式石室にみられる4要素の分類項目（仕切り石型・石障型・石屋形型・石枕型）を基になされたものである。

小鼠蔵1号墳の円文は、遺体に魔力を及ぼすために、鏡の持っている霊的な威力を発揮すると信じられて石槨に陰刻されたものであり、石室空間に必要な精神的拠りどころとして擬え、発案・導入されたものとみられる。

九州の横穴式石室では死者の魄が自由に浮遊する空間が形成されていた（和田晴吾 2009, pp264）とされるが、八代海周辺においては早い段階にそのような他界観が成立していたのであろう。竪穴系埋葬施設での装飾とは異なる新たな横穴系埋葬施設における靈魂観の成立（広瀬和雄 2009, pp306 - 307）は、まさに小鼠蔵1号墳をはじめとする八代海周辺を嚆矢とする。

ただ、小鼠蔵1号墳は石障を持った横穴式石室ではあるが、内部には蓋石のある箱式石槨を持っている。いわば、開かれた石室に閉ざされた棺があるのであり、まさに創出された古墳らしい状況となっている。その意味では、完全に開かれた石室に開かれた棺のはじまりは大鼠蔵尾張宮古墳であり、「川」の字の屍床配置をなす。この古墳で完成した石障系横穴式石室に円文という組み合わせが、周辺地域に広がっていった。

この地域において数多くみられる箱式石槨の円文の場合はどうであろうか。円文の大きさを基準にみれば、時期的に小鼠蔵1号墳が完成した後に小鼠蔵3号石槨や大鼠蔵東麓1号石槨が作られた可能性があり、これに大鼠蔵尾張宮古墳が続く。

新たな円文の導入によって、箱式石槨の被葬者たちもこれに倣い従ったとみられるが、そこには地域における階層性の反映もあったものと推測される。天草を含む八代海沿岸地域から薩摩北部沿岸地域に及ぶ広範囲にわたる地域のアイデアの結集によって出来上がった小鼠蔵1号墳の存在の大きさについては改めて注目する必要があり、この古墳を含む球磨川河口一帯集団の影響力の大きさを垣間見ることができる。

ところでやや順序が逆になってしまったが、石障系横穴式石室がなぜ八代海周辺ではじまり、そもそも石障とは何かという起源の問題についてみてみよう。

（4）石障とは何か

小林行雄は装飾の施された古墳の構造を4区分したうちの 하나가、横穴式石室の石障そのものに加飾する一群であり石障系装飾古墳の名称を用いた（小林行雄 1964, pp28）。小田富士雄は石障の発生に箱式石槨を横穴式石室に持ち込んだことへの対応として生まれたとの見方を示した（小田富士雄 1966）。乙益重隆も箱式石槨に起因するとの見方は同じであるが、複数の箱式石槨を石室内に持ち込んだ結果が仕切石と石障であるとの観点で、仕切石も石障とみる（乙益重隆 1979）。

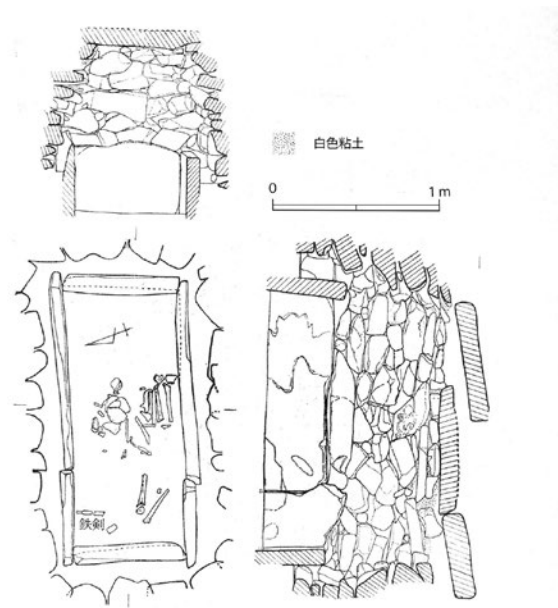
一方、藏富士寛は、追葬などのために広い空間を必要とするために箱式石槨が拡大された結果出来上がったのが石障系横穴式石室との見方を示し、熊本市北岡神社古墳の存在を重視する（藏富士寛 1997,

pp158)。

石障系横穴式石室の発生に箱式石棺が大きな役割を果たしたことは間違いないが、初期の石障そのものにはもっと重要な役割があったのではないかとみられる。それは石室基部の補強ではないか。

旧稿（高木恭二 1994a）において石障系横穴式石室の発生に大きな影響を与えた古墳の一つとして成合津2号墳を挙げた。この古墳の竖穴式石槨は、隅丸長方形プランで箱式石棺を内蔵するが、石室の長さ1.95m、幅1m、石棺床面から石室天井石下面までの高さも1mである（三島格ほか 1977）。小規模な石槨ではあるが、石棺を包み込む石槨としての機能は果たしている（第2図）。

九州の南西地方に分布する竖穴式石槨の中で成合津2号墳に類似し、その関連が想定される古墳として薩摩川内市船間島古墳（直径17m、高さ2mの円墳）を挙げておいたが、その後これらの古墳と構造的に近似する薩摩川内市天辰寺前古墳の発掘調査が実施され、その報告書が刊行された（小田富士雄 2011）。



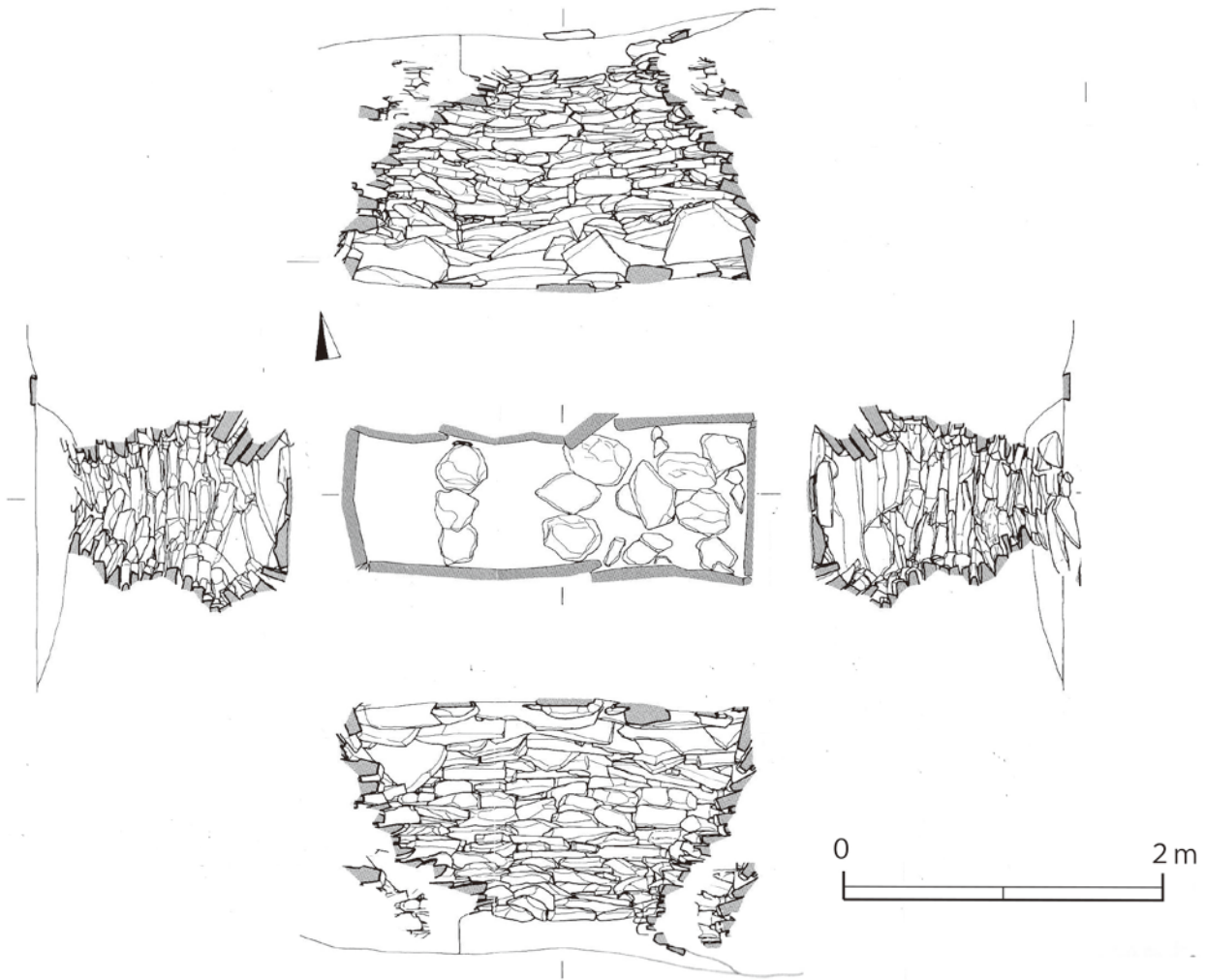
第2図 成合津2号墳石槨実測図（出典：三島格ほか 1977）

直径28m、高さ約3mの円墳で、主体部は床面長さ2.45m、幅0.95m（東側）と0.75m（西側）で、床面から天井石下面までの高さは1.3mを測る。石槨内の基底部四周には各面とも3～4枚の板石を斜めに立てており、その板石の4～5枚目より上部から天井面までは板石を水平に積んでいる。この板石の積み方は当該地域に多く見られる板石積石棺墓に類似する手法であるが、石槨の高さや、高く盛った墳丘などの点からみても、板石積石棺墓とは根本的に異なる。その前代にあたる古墳時代社会の埋葬施設（例えば鳥越1号墳のような竖穴式石槨の構築技術から）の影響により墳丘を形成するという新たな葬法が板石積石棺墓地帯にも波及し、それへの対応として板石積石棺墓を高くするという新たな構造のものが生まれたのであろう（第3図）。

天辰寺前古墳類似竖穴式石槨を経て、成合津2号墳のようにしっかりとした基底部に箱式石棺を持った古墳が誕生した。そして、小鼠蔵1号墳では盛土を持った高塚古墳としての体裁を整え、成合津2号墳と比べても見劣りしないような石室の高さを確保するため、四周にしっかりと安定した石障を巡らすことで方形プランを完成させたのではなかろうか。つまり方形プランと高い空間確保のための補強方法として石障をめぐるという手段が発案されたものと見られる。

また、小鼠蔵1号墳の石室は、長さ2.1m、幅1.8m、天井までの高さ1.8mを測り、天井石1枚を載せる壁体最上面の石は石室内部に面する幅に比べれば異常に長い控えがある。これは天井石の重みに堪え、内部への落下を防止するための措置であると考えられる。また小鼠蔵1号墳構築過程での最も大きな成果は、四周コーナー部では両方に板石をかけ渡して角部を消すいわゆる裁頭円錐形（甲元真之 2017a）の石室空間の完成にあった。

九州の横穴式石室の中で熊本県地方を中心とした穹窿天井で方形プランの石室についての研究の流れについては旧稿（高木恭二 1994a）でも触れたので繰り返さないが、白石太一郎によって九州に存する北部九州と熊本地域の二つの基本的な横穴式石室の系統に分類する見方（白石太一郎 1965）が示されて以降、肥

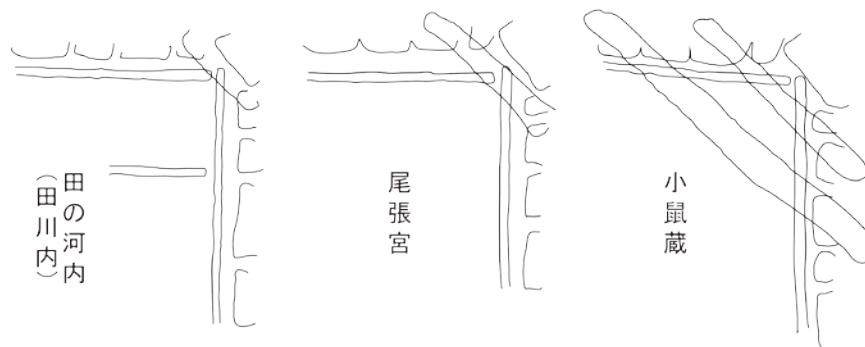


第3図 天辰寺前古墳石槨実測図 (出典：薩摩川内市教育委員会 2011)

後型横穴式石室についての多くの研究の蓄積がある(柳澤一男 1980)。

特に穹窿天井を形成する構築技術として、各側壁が接するコーナー部の石積において両側の石に渡しかける手法が重要である。このことについて最初に指摘したのは蓑田田鶴男であろう。小鼠蔵1号墳と尾張宮古墳、田川内1号墳の3石室の「隅切りの手法」を比較検討し、これが「石室の強化法」であるとの所見を述べており(蓑田田鶴男 1959, pp62 - 63)、小鼠蔵1号墳の隅切りが最も長く内側に突出していることを図示している(第4図)。

九州地方の横穴式石室の源流を探る為に、韓半島の石室構築技法を観察する過程で石室の両壁にかけ渡す手法として「力石的用法」が注目されている(小田富士雄 1980, pp288)。また、石障系横穴式石室につ



第4図 横穴式石室隅部見取り図 (出典：蓑田田鶴男 1959)

いて考察を行った河野法子は、「肥後型横穴式石室にみられる特徴的な壁面構築技法、すなわち石障上面の高さから四隅に抹角状の石を配し、稜線を消して上部を円形に持送る手法」としての明確な意義づけを行っている（河野法子 1982, pp51）。

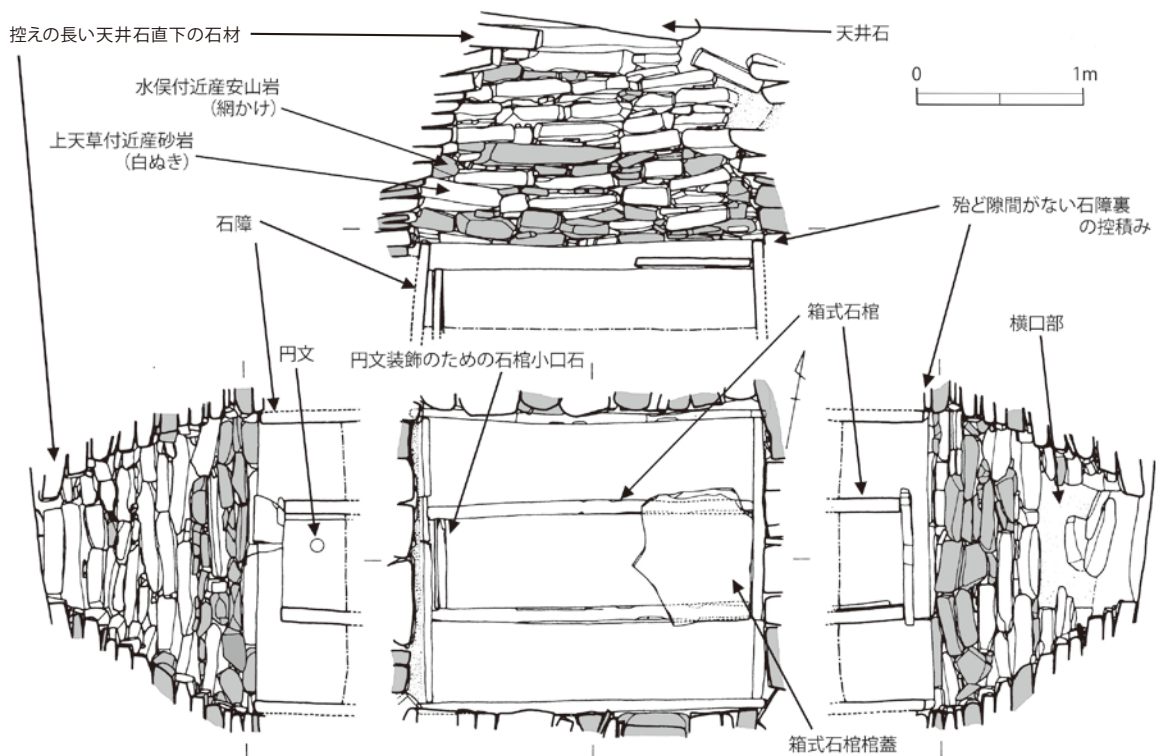
また、土生田純之も「四隅には斜めにかけわたした石材を用いて隅角を解消して丸天井を形成」するとして小坂大塚古墳の例について注目している（土生田純之 1983）。

近年になって甲元眞之によって構造力学的見地と広域的な視点での再整理がなされ、「略正方形に設えた石室下半部から石壁接触部分の角を消すように積み上げる構築様式を拵えた石室を肥後型石室と呼称する」との定義づけがなされている（甲元眞之 2017b, pp47）。基本的には首肯されるが、板石積石棺墓（地下式板石積石室墓・地下式板石積石棺墓）と石障系石室は構造的には根本的に異なるという点で、肥後型石室の祖形とはなりえないとの見解に同調しがたいことは前述（207 頁）の通りである。

小鼠蔵 1 号墳石室構築時の工法・技術によってもたらされた副産物があった。それは、さらに高い天井と広い空間を確保する穹窿天井構築技術が生まれたことであり、そのことで小鼠蔵尾張宮古墳のような奥行き 2.22m、幅 2.32m、天井までの高さ約 2.05m の石室を完成するに至ったのである。それはまた本格的な追葬施設としての屍床配置へとつながる。

ただ、小鼠蔵では明らかに石障補強という要素が強かったために石障裏面のすぐ後ろに壁体は積まれているものの、尾張宮では石障と壁体の間には 15～20cm の隙間があってどう見ても補強とは考えられない。それは、小鼠蔵での壁体構築技術の方法だと高い天井と方形プランが可能で、更には石障もあえて必要ではないということが分かったからではなかろうか（第 5 図）。

尾張宮古墳の石障には玄門側にあたる前障に幅 45cm の浅い U 字削り込みがあり、この削り込みが後の石障系横穴式石室では次第に深くなって型式変化を遂げる時期推定の根拠になりえるということが判明してい



第 5 図 小鼠蔵 1 号墳石室解説図

(出典：池田栄史 1986 をもとに水俣付近産安山岩の位置を示した高木恭二 1999 に加筆)

る（高木恭二 1994a）が、尾張宮古墳では他の石障3面にもU字割り込みがある。これらは深さ約3～5cmと浅いが2段の割り込みがあり幅1.1～1.3mで、前障とは大きく異なっている^(註18)。この割り込みは、補強の意味がなくなってしまった石障の飾りのために作られたのではなかろうか。

古墳時代前期以来、長方形プランを原則とする石槨構造とは異なる方形プラン石室の創出こそが肥後型横穴式石室として発展していくことにつながり、その後の数多くの横穴式石室へと受け継がれ全国に広がっていったのである。

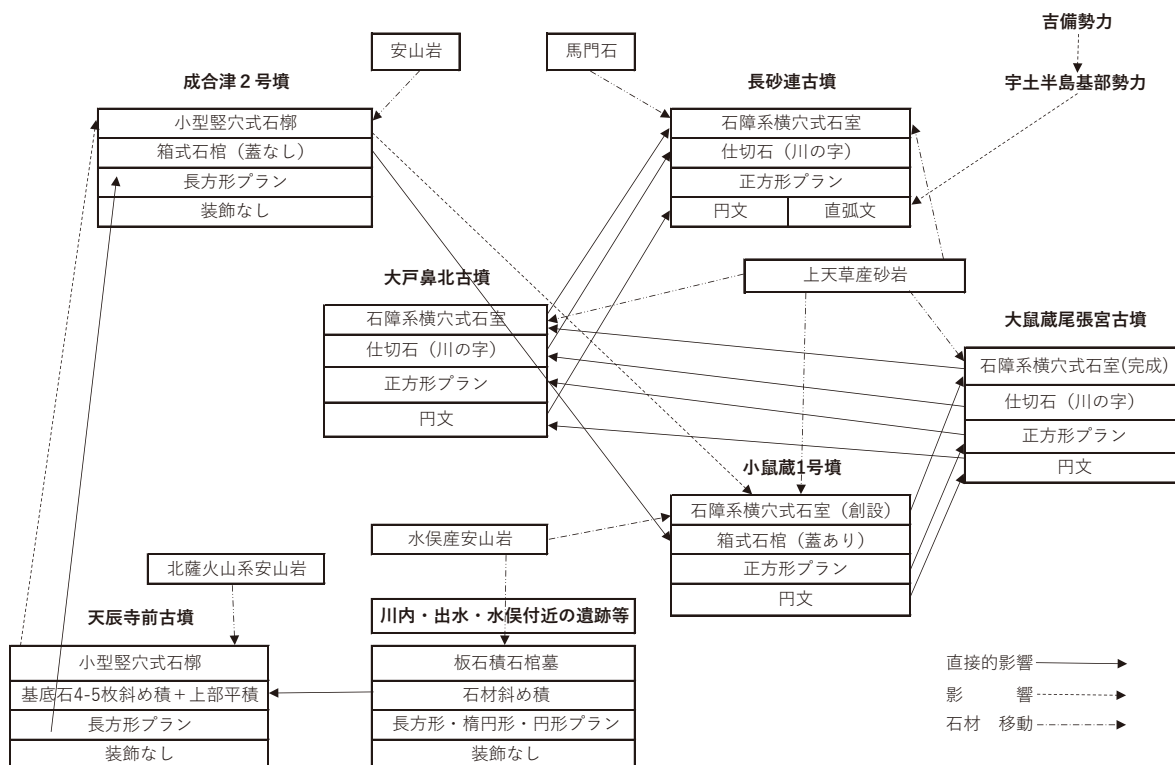
現段階において、日本列島における横穴式石室の始まりを北部九州ではなく、八代海周辺であると言えるほどの根拠はまだないが、その可能性は皆無ではないと考えている^(註19)。

小鼠蔵1号墳で生まれた石障は、その後も連続と受け継がれた。補強の必要性から生まれた石障は、尾張宮古墳以降、装飾を表わすためのキャンバスとしての機能に変わったのであろう。それは、球磨川河口域の八代一帯において石障系横穴式石室には必ず円文が表現されたのであり、その範囲として、北は門前2号墳付近であり、南は竹ノ内石棺であろう。横穴系装飾古墳構成の諸要素を第6図で整理を行った。

ところで、石棺や石室を構築する際に使用する砂岩の供給地についての決定的な考古学的証左はまだない（池田朋生 2013）が、現段階では傍証条件は整っていると考えており（高木恭二・芥川博士 2014）、その地域は上天草市大戸鼻北古墳などがある阿村付近や、広浦古墳を含む維和島南側一帯であるとみられ、それらの集団と八代市域とも密接な関係ができあがり、そこには同族関係を含む紐帯関係ができていたとみられる。

これとは別に、大矢野島の一部にある長砂連古墳の場合は、違ったありようを考えなければならない。それは直弧文という、それまでの八代海周辺には知られていなかった文様を採用しているということである。そこには、前にも述べたように宇土半島基部勢力との関係や、その背後にある吉備勢力の存在、更にはヤマト王権とのつながりを考えなければならないからである。

それからもう一つ留意しなければならないのは、八代海周辺で装飾を持たない石障系横穴式石室が存在す



第6図 横穴系装飾古墳の諸要素

ることである。宇土半島南岸にある重盛山1号墳と児島崎古墳、大串古墳の3基がそれで、詳細がよくわからない大串古墳はとりあえず除外して、重盛山1号墳と児島崎古墳をみれば、重盛山1号墳は川の字の屍床配置で石障の高さは40cmと低い。児島崎古墳の屍床配置はコの字形であり、石障の高さは45cmとやや低い。横口部の段差や構造、鉄鏃などが出土していることなどを考慮すれば、両古墳は尾張宮古墳や大戸鼻北古墳などに似た構造であり、時期的にも近いと考えられる。しかし装飾はないのである。

同じ八代海沿岸地域にある石障系横穴式石室で装飾が施されないのは、この地域が明らかに別の地域集団だからではないかと考えられ、埋葬、喪葬儀礼に対する観念の違いに起因するのではないだろうか。ちなみに八代海周辺の他の地域では、キャンバスとして機能していたはずの石障に装飾が施されないのを不自然に思われるかもしれないが、宇土半島南岸のこの地域では石室を構築するということと装飾文様は切り離して考えなければならないということであろう。言いかえれば石障は横穴式石室の構造上の一施設としてあるべき付帯設備のような存在になったのではないかとみられる。

その証拠に、有明海側には石障系横穴式石室で装飾が施されない古墳はいくつもあるのである。

なお、天草には竹島3号墳や千崎5号墳のような石障を持たない方形プランの横穴式石室も存在するが、これらも重盛山1号墳などのグループと似た、装飾が施されない別集団の古墳であると考えている^(註20)。

4. 横穴系装飾古墳の広がり

八代海沿岸地域における装飾を有する古墳が時間的・面的にどのようにして広がっていったのかは前掲第2表のような変遷が辿れると考えているが、球磨川河口付近より南には装飾古墳は存在せず、基本的にはこの地域より北に分布圏は広がっている。

球磨川河口付近からやや北部地域にあたる上天草市域には前出の大戸鼻北古墳や長砂連古墳があり、大戸鼻北古墳には奥壁の石障に3個、左右の石障にそれぞれ4個の円文が線彫りで表現されている。至近の位置にある長砂連古墳では左右の石障に直弧文が浮彫り表現され、左障には大きな円文があり、奥障に装飾はない。

直弧文は、八代海周辺地域で宇土半島南岸の鴨籠古墳、国越古墳にもみられる。ただ、鴨籠古墳の場合は堅穴式石槨内の舟形石棺棺蓋に直弧文と同心円文が線彫りで描かれて、中心孔があって上下に紐状のもので引っ張られたかのようになって、次に述べる小田良古墳に共通している。国越古墳の場合は両袖型横穴式石室の石室内奥壁に沿って置かれた石屋形の内外面に装飾文様がある。この古墳の場合は直弧文由来の鍵手文を主文様とし、一部に梯子文、連続三角文を彩色によって描く。

さて、長砂連古墳石障に馬門石が使われるようになったことが契機となり、宇土半島北岸地域を皮切りに石障系石室が有明海側や熊本平野へと広がった。この動きと連動して装飾を施す石障系横穴式石室も広がる。

ところが八代海沿岸での円文中心の文様から、有明海側になると円文と他の文様が組み合わせられるという現象が起こり、円文と武具を描くもの、直弧文に円文(車輪文)を併用するものなど石障系横穴式石室の中のバリエーションが増えてくる。それと同時に円文・同心円文そのものも変化するようになる。

小田良古墳では奥障に盾と鞆の間に3個の同心円文が描かれるものの、その同心円文には中心孔があり、円の上下には紐状表現があり上下から引っ張っているようになっている。他の石障の同心円文も同様で左障には4個、右障には3個、前障に2個があり、文様は全て浮彫り表現である。八代海沿岸のものとは異質の表現であり、鏡というにはやや違和感を覚える。小田良古墳についての見方ではないが、かつて大鼠蔵東古墳の円文を的ではないかとの見方を示されたことがある(板橋和子1977, pp135)。

次に千金甲1号墳であるが、この場合は三重の円文で奥障は鞆と三重円文を交互に配するものこの場合は上下2段に円文があり、鞆4個、三重円文8個が表現される^(註21)。左右の石障にもそれぞれ8個の三重円文があり、この場合は円文の間にX字状の対角線文が上下に合計10個表現されている。

宇土半島北岸地域で他に円文を表現するものとしてヤンボシ塚古墳がある。発掘調査時にはすでに奥障と右障は抜かれていたが、左障はかるうじて残っておりそこには二つの円文が陰刻されていた。本来はこの面に3個の円文があった可能性が高く、右障にも同じような配置で表現されていたものと想定される。また全く異質の文様ながら玄門立柱と玄室側壁の上部に舟の線彫りがある。宇土半島基部の三拾町石材は中世において板碑に転用されたものであるが、その直弧文は井寺古墳のA型直弧文を回転させたものである。ちなみにこの装飾石材は、宇土市石小路町の石瀬遺跡にあった古墳から運び出された可能性がある。

熊本平野地域では他に井寺古墳がある。この古墳は高度に発展した石障系横穴式石室の内部に直弧文を中心とした文様が多用され、この種文様の極致とっていいまでに線彫りで描かれている。A型・B型直弧文と車輪文が中心である。

石障系石室は、中期いっぱいまで終焉を迎えるようになり、後期にはほとんど造られなくなるが、このころ以降の石室は完全に四周に石障を巡らすものはなくなり、その名残ともいえる石室の側壁の下部に板石を巡らし奥壁に沿って石屋形を配するものが一般的になる。そして装飾文様が施されるのがこの石屋形に集約される。具体的には塚坊主古墳や国越古墳、釜尾古墳などであり、玄室奥の石屋形の内外面に円文、連続三角文をはじめとして直弧文（鍵手文）、双脚輪状文など各種の文様が描かれた。

八代海周辺に起こった横穴式石室への加飾が、宇土半島を越えて有明海沿岸地域に広がり、更にはそれが北部九州を介して日本列島全体に広がっていったことも間違いはない。有明海沿岸から北の地域への装飾古墳の広がりについては、高木正文による詳細な分析（高木正文 1999）があるので参照いただきたい。

おわりに

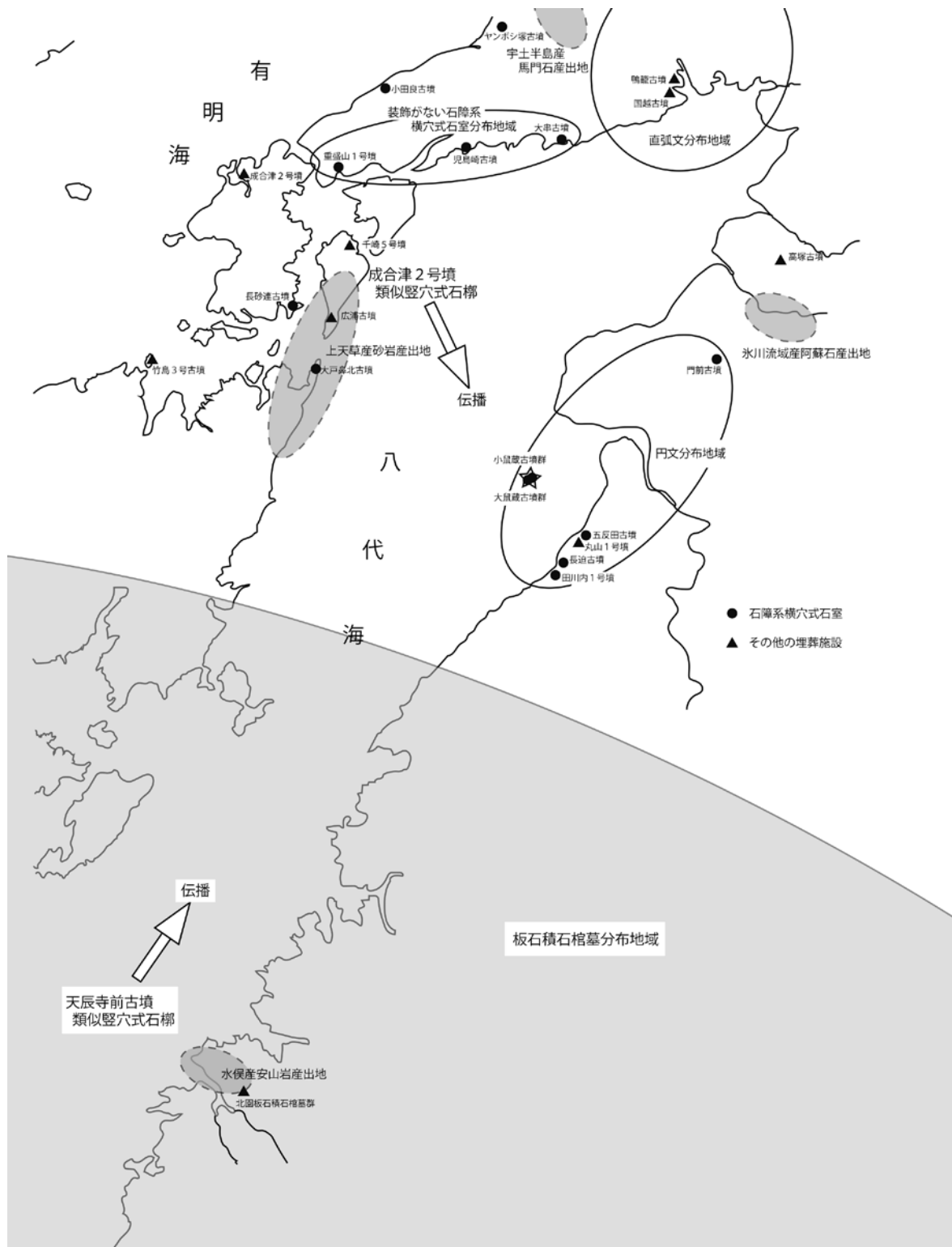
埋葬空間を広く確保し墳丘を高くするために、さまざまな試行錯誤を経て生まれたのが小鼠蔵1号墳の石室であった。各地の広範な勢力との交流によって、従来とは異なる新たな埋葬施設として石障系横穴式石室という形で結実したのであり、この古墳の被葬者像を考える上でも重要な示唆を与えてくれているように思われる。初期横穴式石室導入について丸隈山古墳の連接石棺について検討を行った辻田淳一郎による所見（辻田淳一郎 2011, pp32）として「最新の要素を取り入れて「複合」と「刷新」をはかりながら、他方でそれ以前に築造された横穴式石室・石棺などの要素を取り込んでいく」との見方に共通点を見いだす。

ただ、小鼠蔵1号墳の入り口にあたる横口部の明確な証左がないのに横穴式石室とすることには慎重にならなければならないことは重々承知しているが、今後の調査に期待したい。八代海周辺、限定的に言えば球磨川河口付近の小鼠蔵・大鼠蔵古墳群から横穴系埋葬施設の装飾が始まったことに変わりはない^(註22)。

装飾古墳の分布としては西九州南端に近い八代市域付近に発生した横穴系装飾古墳は、この地を起点として北上する形で分布を広げる。この実体こそが横穴系装飾古墳発生の謎を解き明かす鍵でありヒントがあるのではないかとみられ、地域的広がりを第7図のように整理を行った。

それは、前方後円墳に代表される古墳社会において、八代海周辺の球磨川河口付近勢力が、個性的な古墳文化を継続する八代地域以南の勢力と、交流関係を持ちながらも一線を画そうとする意識の表れがあったのであろう。古墳時代社会の呪具・宝器の一つとしてこの時代の最初期から重要な存在であった鏡を、横穴系石室の埋葬空間に円文という形で表象し、採り入れることによって境界領域として大きな地域シンボルを確立することに成功したものと思われる。

文末ではあるが、小論執筆までに多くの仲間や先輩、諸先生方のご指導・ご教示をいただいたことに対して感謝申し上げたい。特に宇野慎敏・藏富士寛・藤本貴仁三氏の所見や、高木正文兄の長年にわたる装飾古墳研究の蓄積、また、甲元眞之先生が熊本の装飾古墳・肥後型石室について示された微細かつ俯瞰的な業績（甲元眞之 2017a, 2017b, 2017c）を大いに参考にさせていただいたが、見解の異なる点もあり、今後一



第7図 八代海周辺における横穴系装飾古墳関連図

層研鑽を重ねたい。

なお、1998年12月に行われた熊本古墳研究会の討論会「装飾古墳を考える」^(註23)の折の宿題を、部分的であれ果たせたことに安堵している。

結びに、発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会と、今回のプロジェクトメンバー各位に深甚の敬意を表し、八代海周辺を始めとする多くの装飾古墳が末永く継承されていくことを切望する。

註

1. この考えは現在でも変わっておらず（高木恭二 1994b）、近刊の小稿（高木恭二・西平孝史 2019）で、その考えを、より明確にした。
2. 古墳・石棺のリストアップについては、石障石材・石棺石材の二次的な移動により重複や遺漏があり得るため、現段階で判断されるものに限っていることをお断りしておきたい（熊本県教育委員会 1984）。
3. 1979年4月調査の実施にあたっては木下洋介の協力を得た（高木恭二 1979・1980、高木恭二 1983、pp38）。
4. 福岡県日輪寺古墳も鍵手文を多用する直弧文を有する古墳であるが、この古墳出土の埴輪は川西宏幸による埴輪編年Ⅴ期のもので、国越古墳に近い時期の所産と考えられる。
5. 千金甲1号墳の装飾が描かれた石材は宇土半島網津町馬門産の阿蘇溶結凝灰岩であり、同じく馬門産の凝灰岩で直弧文を有する長砂連古墳は明らかに千金甲1号墳より先行する時期である。馬門の工人は直弧文の斜交線軸を彫った経験があり、千金甲1号墳の被葬者集団は所属集団が異なるために直弧文を使用することが許されず、斜交線軸（X字文）だけ使用するという経験技術を使ったとみられる。ちなみに、馬門の工人は長砂連古墳に後続し千金甲1号墳より古い時期にできたヤンボシ塚古墳では円文を陰刻している。ヤンボシ塚古墳の被葬者集団も所属集団が異なるために直弧文を使用することが許されなかったのであろう。
6. 八代海周辺・宇土半島基部周辺と吉備地方の密接な関係を具体的に示す考古学的事象としては、①千足古墳の石障・仕切石に八代海の天草砂岩を使用している。②千足古墳の石障系横穴式石室の玄門部構造は、宇土市ヤンボシ塚古墳石室の玄門部構造と極めて近似する。③吉備地方を代表する古墳である造山古墳の前方部舟形石棺は宇土半島馬門産である。④千足古墳の仕切石直弧文に彫られたA型直弧文の基本図形は、僅かな違いがあるものの長砂連古墳左右のA型直弧文を90度回転させたものと反転させたものがある（高木恭二・西平孝史 2019）。
7. 山梨県甲府市の丸山塚古墳の竪穴式石槨に赤色顔料で円文（珠文）を描いているとの所見（斎藤忠 1989）もあるが、装飾文様の手法などは、列島の装飾文様系譜とはかけ離れているので、保留しておく。
8. 福井県坂井市牛ヶ島石棺は装飾古墳として取り上げられることはほとんどないが、棺蓋小口の両側の縄掛突起に線彫りによる連続三角文があり、明らかに装飾古墳とすべきものである。石棺の実見にあたっては青木豊昭の高配を得た（青木豊昭 1998）。
9. 牛ヶ島石棺・西谷尾佐越石棺・造山前方部の3例は直葬か否かはっきりしたことはいえないが、造山古墳のものは本来、竪穴系埋葬施設に納置されていた可能性が高い。牛ヶ島石棺・西谷尾佐越石棺の場合は直葬として取り扱っておく。
10. 割竹形石棺・舟形石棺・長持形石棺の蓋石に区画を施したものが西日本地域に18例ほど確認でき、これらは装飾古墳として捉えるべき要素を備えるが、一応ここでは除外している（高木恭二 2012）。
11. 宇野慎敏は、大坊古墳・永安寺東古墳・永安寺西古墳・馬出古墳など4例の石屋形天井石が家形を呈するB類として分類するが、これは板状をなすものとみて後者に含めた（宇野慎敏 2010）。
12. 近世の干拓によって陸続きとなった二つの小山であるが、江戸時代後期以前は二つの島であった。
13. 初期竪穴系横口式石室とされる谷口古墳の横口部は床面から75cmある。また、この古墳では石室主軸と合わせて中央部に長持形石棺を置き、小鼠蔵1号墳では同様に箱式石棺が置かれる。
14. 板石積石棺墓の名称を用いた埋葬施設は、旧来の地下式板石積石室墓・地下式板石積石棺墓・板石積石室墓・板石積石棺墓などと呼ばれた一群である。この種施設が用いられた時期の前半には小規模な箱式石棺程度の大きさのものが多く、後半になると極めて広がって円形プランをなすものが主流となり、追葬などによって被葬者の数も増えている。しかし前半期から後半期への変化は漸格的であり、明確に線引きするのが困難である。その意味で、前半期の規模・形状を重視し石棺墓の名称を用いるのが適切であると考え、このような名称を用いることにした（藤井大祐 2009、森山栄一・高木恭二・西健一郎ほか 2019）。
15. 石室石材の帯磁率測定を行った池田朋生によれば、大鼠蔵尾張宮古墳の壁体の中位よりやや上部付近に安山岩が使われているという。小鼠蔵1号墳石室でも安山岩が用いられ、水俣市大崎付近の安山岩とみられる（渡邊一徳 2019）ところから、尾張宮古墳も大崎産が用いられている可能性がある。
16. 八代市敷川内に所在した丸山1号墳は、従来、板石積石棺墓の一種であろうとされてきたが、一般的な板石積石棺墓とは異なり塊石により壁体を積み上げる構造であり、天辰寺前古墳類似竪穴式石槨の可能性もある。

17. 板石積石棺墓の構造において、基底石を補強するための柱状の石材を平成元年時の発掘調査では「支柱石」と呼んだ（森山栄一・高木恭二・西健一郎ほか 2019）。その後 2017 年度（平成 29 年度）に実施された県教育委員会による発掘調査ではこの石を石杭として位置づけ、「支持杭」「摩擦杭」の 2 種の使用タイプに分類された（熊本県教育庁教育総務局文化課 2018）。
18. 1993 年 3 月調査実測。調査にあたっては元松茂樹の協力を得た。
19. 柳沢一男は、鋤崎古墳が日本列島最古の横穴式石室であるとの認識を持ちつつも、その報告書において、小鼠蔵 1 号墳が鋤崎古墳の段階まで遡る可能性があると考えている（福岡市教育委員会 2002, pp114）。
20. 石障系横穴式石室の発生に関して、千崎 5 号墳から大鼠蔵尾張宮古墳への変遷や、同じく千崎 5 号墳から竹島 3 号墳、大戸鼻北古墳への変遷が想定されている（古城史雄 2014）が、筆者は千崎 5 号墳や竹島 3 号墳は石障系横穴式石室とは別系統の石室と考えている。横口部については逆に竹島 3 号墳のように高い所から下に降りていくような流れを想定し、千崎 5 号墳が後続するとみられる。この一群の石室では、竹島 3 号墳→千崎 5 号墳→久保泉丸山 2 号墳の順で新しくなるのではないかと考えており、城 2 号墳がこれらの初現となる可能性も考えられる。
21. この靴の装飾は同時に彫られたものではなく、追刻ではないかとの高木正文・宇野慎敏による所見がある。
22. 小鼠蔵 1 号墳の時期は、現段階で明確にする根拠は乏しい。しかしながら、大鼠蔵東麓 1 号石棺の時期（中期前葉）に近い時期かそれより先行する可能性が高い。また石室構造としては、小鼠蔵 1 号墳より明らかに先行する天辰寺前古墳の遺物の中でも古墳時代前期後葉から中期前葉に属する土師器が見つかっており、それらを総合的に判断すれば、小鼠蔵 1 号墳は前期後半にまで遡り得る可能性がある。
23. 1998 年の討論会「装飾古墳を考える」は、甲元眞之・西健一郎・高木正文・藏富士寛の 4 名の論者と司会を高木恭二が務めた。テープ起こしは松島木綿子が行い、甲元による点検・校訂がなされた。内容は、①装飾古墳とは何か②研究の歴史③初期装飾古墳④装飾古墳の開花、の 4 項目であり、冒頭から未発表の内容も多く含まれた極めて内容の濃い活発な論議が行われている。

参考文献

- 青木豊昭 1998 「越の大首長と石棺」『継体大王と越の国』福井新聞社
- 池田朋生 2013 「天草産出の砂岩を対象とした文化財石材の研究—上天草市維和島とその周辺で営まれた石工業から—」『先史学・考古学研究と地域・社会・文化論』高橋信武退職記念論集編集委員会
- 池田栄史 1986 「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第 60 号
- 板橋和子 1977 「有明文化圏の形成」『古代の地方史』第 1 卷（西海編），朝倉書店
- 今尾文昭 1989 「鏡—副葬品配列から—」『季刊考古学』第 28 号，雄山閣出版
- 今尾文昭 1991 「配列の意味」『古墳時代の研究』8，古墳Ⅱ副葬品，雄山閣出版
- 岩本崇 2004 「副葬配置からみた三角縁神獣鏡と前期古墳」『古代』第 116 号，早稲田大学考古学会
- 宇城市教育委員会 2015a 「松橋大塚古墳」『宇城市文化財調査報告』第 4 集
- 宇城市教育委員会 2015b 「松橋大塚古墳—宇城看護高等専門学校建設に伴う発掘調査報告書—」『宇城市文化財調査報告』第 5 集
- 梅原末治 1919 「肥後國八代郡吉野村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第 3 冊
- 宇野慎敏 2008a 「装飾古墳における円文の出現と展開」『古代学研究』第 180 号，森浩一先生傘寿記念論文集
- 宇野慎敏 2008b 「装飾古墳における三角文の出現と展開」『九州と東アジアの考古学』
- 宇野慎敏 2010 「肥後石屋形に見る 2 つの系譜とその背景」『熊本古墳研究』第 3 号
- 小田富士雄 1966 「古墳文化の地域的特色 九州」『日本の考古学』IV，河出書房新社
- 小田富士雄 1980 「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』第 4 巻
- 小田富士雄 2011 「天辰寺前古墳考」『薩摩川内市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 9 集
- 乙益重隆 1967 「不知火町国越古墳」『昭和 41 年度埋蔵文化財緊急調査概報』熊本県教育委員会
- 乙益重隆 1979 「石障系石室古墳の成立」『國學院大學大学院紀要』第 11 輯
- 柏原市教育委員会 1989 『玉手山 3 号墳』柏原市文化財概報 1989 — II
- 柏原市教育委員会 1997 『重要文化財安福寺石棺保存整備事業報告』柏原市文化財概報 1996 — III

- 河野一隆 2011「装飾古墳における葬送の思想」『古墳時代の考古学』3, 墳墓構造と葬送祭祀, 同成社
- 京都大学考古学研究室 1917「肥後における装飾ある古墳及横穴」『京都帝国大学文科大学考古学研究报告』第1冊
- 宮内庁書陵部 1976『古鏡目録』学生社
- 熊本県教育委員会 1980「門前古墳の調査・門前古墳発見の経緯」『清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓』熊本県文化財調査報告第41集
- 熊本県教育委員会 1984「熊本県装飾古墳総合調査報告書」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 熊本県教育庁教育総務局文化課 2018「熊本県水俣市北園上野古墳群の概要」『考古学研究』第65巻第2号(通巻258号)
- 藏富士寛 1997「石屋形考」『先史学・考古学論究』Ⅱ, 龍田考古会
- 藏富士寛 1999「装飾古墳考」『先史学・考古学論究』Ⅲ, 龍田考古会
- 河野法子 1982「石障系古墳の一考察」『肥後考古』第2号
- 甲元眞之 2017a「熊本の装飾古墳とその展開」『葆光』
- 甲元眞之 2017b「肥後型石室考」『葆光』
- 甲元眞之 2017c「装飾古墳の分布と拡大」『葆光』
- 小林行雄 1964『装飾古墳』, 平凡社
- 斎藤忠 1973「装飾古墳図文の意義」『日本装飾古墳の研究』講談社
- 斎藤忠 1989『壁画古墳の系譜』日本考古学研究2, 学生社, 71頁第26図を転載
- 櫻井久之 2005「大阪府安福寺石棺の文様について一原単位文の提唱一」『大阪歴史博物館研究紀要』第4号, 大阪市文化財協会
- 薩摩川内市教育委員会 2011「天辰寺前古墳」『薩摩川内市埋蔵文化財発掘調査報告書』第9集
- 佐藤伸二 1984「門前2号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』
- 白石太一郎 1965「日本における横穴式石室の系譜一横穴式石室の受容に関する一考察一」『先史学研究』第5号
- 白石太一郎 1999「装飾古墳にみる他界観」『装飾古墳の諸問題』国立歴史民俗博物館研究報告第80集
- 杉井健 2009「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』熊本大学文学部
- 杉井健・南健太郎・牧野幸子 2005「長砂連古墳石障実測調査報告」『考古学研究室報告』第40集, 熊本大学文学部考古学研究室
- 高木恭二 1979・1980「環状縄掛突起を有する石棺について(1)(2)」『熊本史学』第53・54号
- 高木恭二 1983「肥後南部の石棺資料」『宇土市史研究』第4号
- 高木恭二 1994a「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号, 宮嶋利治学術財団
- 高木恭二 1994b「肥の石製品と古墳文化一装飾古墳文様との関連を中心として一」『石人・石馬一里帰り展一展示図録』岩戸山歴史資料館
- 高木恭二 1999「横穴式石室の石材一石障系横穴式石室の事例を中心に一」『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料集
- 高木恭二 2012「装飾古墳」『講座日本の考古学』8, 古墳時代 下, 青木書店
- 高木恭二・芥川博士 2014「古墳時代における天草砂岩の利用」『長目塚古墳の研究一有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究一』熊本大学文学部
- 高木恭二・土野雄貴 2010「船団か, 追葬刻か一数多く線刻された船の検討一」『古文化談叢』第65集(1)
- 高木恭二・西平孝史 2019「直弧文を有する古墳の始まりとその後の展開」『熊本古墳研究』第7号
- 高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『装飾古墳の諸問題』国立歴史民俗博物館研究報告第80集
- 高木正文 2010「船の線刻が発見された不知火町鬼の岩屋古墳」『熊本古墳研究』第3号
- 高木正文 2011「直弧文のゆくえ一熊本から東国へ一」『旃檀林の考古学』大竹憲治先生還暦記念論文集刊行会
- 高田貫太 1998「古墳時代副葬鉄鉾の性格」『考古学研究』第45巻第1号(通巻177号)
- 玉利勲・設楽博巳 1999「装飾古墳主要文献目録」『装飾古墳の諸問題』国立歴史民俗博物館研究報告第80集
- 辻田淳一郎 2011「初期横穴式石室における接続石棺とその意義」『史淵』第148号

- 土生田純之 1983「九州の初期横穴式石室」『古文化談叢』第12集,九州古文化研究会
- 広瀬和雄 2009「装飾古墳の変遷と意義—靈魂観の成立をめぐる—」『〔共同研究〕古代における生産と権力のイデオロギー』国立歴史民俗博物館研究報告第152集
- 福岡市教育委員会 2002「鋤崎古墳」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第730集
- 福田匡朗 2016「国越古墳の被葬者について」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集』下,中国書店
- 藤井大祐 2009「古墳時代薩摩地域における石棺墓の展開と特質—板石積石棺墓を中心に—」『薩摩加世田奥山古墳の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.4
- 古城史雄 1995「九州における横穴式石室の様相—石屋形を中心に—」『古代の出雲を考える』8,横穴式石室にみる山陰と九州,出雲考古学研究会
- 古城史雄 2014「石障系石室と箱式石棺」『長目塚古墳の研究—有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究—』熊本大学文学部
- 松本雅明 1961「敷川内五反田古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第1集
- 松本雅明 1979「円文の推移」『小田良古墳』三角町文化財調査報告
- 丸林禎彦 2002「円文・三角形の展開—彩色系装飾古墳を中心に—」『装飾古墳の展開』第51回埋蔵文化財研究集会
- 三島格 1988「熊本県田川内古墳1号出土の遺物および人骨」『日本民族・文化の生成』1,永井昌文教授退官記念論文集,六興出版
- 三島格ほか 1977「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第50号
- 蓑田田鶴男 1959『金剛の歴史』八代市第六中学校PTA
- 森山栄一・高木恭二・西健一郎ほか 2019『北園遺跡—熊本県水俣市所在板石積石棺墓発掘調査報告書—』
- 柳澤一男 1980「肥後型横穴式石室考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』
- 柳澤一男 2011「九州における古墳時代横穴系埋葬施設の地域性と階層性」『九州島における古墳埋葬施設の多様性』第14回九州前方後円墳研究会宮崎大会,追加資料2頁
- 用田政晴 1980「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』第27巻第3号(通巻107号)
- 和田晴吾 2003「棺と古墳祭祀(2)—『閉ざされた棺』と『開かれた棺』—」『立命館大学考古学論集』Ⅲ
- 和田晴吾 2007「東アジアの『開かれた棺』」『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』
- 和田晴吾 2008「黄泉国と横穴式石室」『我々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 和田晴吾 2009「古墳の他界観」『〔共同研究〕古代における生産と権力のイデオロギー』国立歴史民俗博物館研究報告第152集
- 渡邊一徳 2019「北園遺跡及び周辺石切場の石材について」『北園遺跡—熊本県水俣市所在板石積石棺墓発掘調査報告書—』

八代海沿岸の砂岩製埋葬施設における石材利用の検証から みた石棺・石障の技術的系譜

池田 朋生

はじめに

装飾古墳は、彩色・浮彫・線刻を、埋葬施設である主体部に意図的に施したことが認められる古墳の総称である。故に、主体部の分類を基本とした小林分類が最も用いられる（小林 1964）。更に主体部の分類が、装飾文様の分類とも関連する点も認められ有意な区分として理解できる。地域毎に注目すると主体部、及び装飾の種別、変遷過程を解決する素地も含んでいる。八代海沿岸における箱式石棺、肥後型石室との関係がそれに該当し、本論の主体となる課題となっている。これらは古墳時代における埋葬施設であるが、広く見れば、ある種の石造文化財であるとも言える。石造物、或いは石器等の研究には、目的とする石材を理解するため岩石の詳細な鑑定、及び産地同定に関わる研究テーマが設定される。

八代海沿岸は、阿蘇山系の凝灰岩の他、中央構造線、日奈久断層帯等の造山活動によって、表層に多種多様な石材が露出している地域である。故に、目的や時代に関わらず複数の石材との関り、その性質、利用の実態を通史的、且つ生業にも目を向けることで基礎的な理解が必要な地域である。異なる石材が互いに豊富に取れ利用されている地域において、ある時代に限り目的的に石材選択が行われる事実が認められるならば、その現象について考察を深めることで新たな歴史事象を見出すきっかけができる。地域で石材の物性を熟知した者、それは生業として営んだ経験を持つ職人、所謂石工から、生業の場で得た自然知を記録、確認しておくことは、基礎研究の一過程といえる。自然知と身体知は、機械技術が進めばそれに反比例して失われるという（篠原徹 2005）。この手作業により培った長年の経験を持つ専門石工からの聞取りが重要な手掛かりとなる。特に八代海沿岸では、干拓堤防などのステインや間知石・割石を大量に切り出した間知石屋、外材としての「ミカゲイシ」を使用し始める前、細工、墓石を専門とする細工屋、石塔屋などと呼ばれる石工の言葉、道具を分けて理解する事が重要となる。現代の墓地に向かうと、昭和 50 年代から 60 年代以降、黒御影、白御影と「商品名」で呼ばれるミカゲイシの墓石が建つ。平成に入り、このミカゲイシの墓石すら造立が少なくなり記念碑と化しつつある（狭川 2019）。県内で石工道具の機械化の波はおおむね昭和 30 年代から始まるが、これ以前に就業経験を持つ石工が手作業による道具と独特の勘を持つ。この豊富な自然知を有している世代は 80 歳～90 歳代、地域によっては更に古い段階で操業を止めており、その子孫からの間接的な聞取りに頼らざるをえないため、民具である石工道具の散逸、作業の場の喪失により更に情報は乏しくなる。この 10 年の間に、菊池川流域では鍋田石、江栗石、月田石、緑川流域では阿蘇系凝灰岩、天草では下浦石の手作業だけで地元石材のみを対象とした専門石工が姿を消した。この間に文化財側によって収集された道具は僅かであり、聞取りが伴った道具となると更に少ない。伝統的な石材を切り出す石工業は、南関石、江田石、下浦石等一部に限られ、それも少数の石切り場を残すのみである。これは、人文科学からの石材に関する基礎的情報を集める時期が終焉を迎えつつあるということであり、自然科学側のアプローチを受け入れる際、聞取りの内容を検証し、必要な作業仮説を得る総合化の機会を失うことを意味する。何より、修理・修復に用いる新材の確保が困難になっていることに直結する。また確保したとしても専門石工の目利きは失われているため、思いもよらぬ影響が石材に出ることが想定される。例えば、下浦石には、黄色味を帯びたアカと、青白いアオという色味で石材を区別する呼称がある（池田 2011）。通常、アオを用いることで石材を長く持たせる。こうした選択は下浦石の専門工が持つ自然知のひとつである。このアオは、風雨にさらされると表面のみ赤くなる。各地の文化財は表面の色味のみアカを呈するが、芯の部分はアオである。ところが文化財修理でこの色調、風合いを意識してアカ味の帯びた石材を発注すると、芯まで赤いアカが納品される恐れがある。アカはもともと含水率が高く家の土台石など一部で使用されるが、石塔には向かず耐

久性が低い。このように石材選択の自然知が失われる一方で、考古学上では型式学的検討が進むものの、材質、石質の基礎的理解は欠如したまま「仮説」が生まれる。しかしこの仮説検証は、專業石工が絶えていることから石材利用も絶えており検証は不可能に近く再考する機会を失ってしまう。こうした現状を課題認識として八代海沿岸に分布する装飾古墳、なかでも石棺・石障について考察を進める。

(1) 研究略史

考古学では石材利用を考えるにあたって、岩石の詳細な鑑定、および産地同定に基づく研究がテーマとしてしばしば取り上げられる。こうした石材鑑定による研究は、地質学の中でも堆積作用を専門に研究する研究者との共同研究で行われる場合が多い。一方で、浸食、或いは風化といった作用からその経過年代を示すことを目標に掲げ、石材の風化層の観察・分析によりその石材が置かれた環境を推定し実年代を割り出す試みも行われている。こうした研究の成果は、地質学の中でも浸食を専門とした分野の研究者によって行われている（筑波大学松倉公憲氏の教示によると浸食を専門とする研究者の絶対数も少ないと言う。）。ただ、その実年代が地質年代に相当する時間軸であることが多く、考古学に活かされる事例はそう多くは無い。

しかしながら、風化作用の研究では石材鑑定と同時に石材の性質を重視する研究は盛んに行われている。こうした研究方法を用いて考古学上で引用することは、石材の特性を理解して石造物の製作にあたる工人、石工の検討に有益と理解できる。前述の自然知を検証するベースとなりうる。そうした石材が持つ物性の理解を進めるべく、「文化財石材」という概念が地質学側から提唱されているが（朽津 2003）、考古学側からこうした投げかけに答えた研究は少ない。むしろ、そのような物性の理解のまま、産地、石材名が同一というのみで理解を進める傾向がある。即ち、硬さ・軟らかさ、劣化の進行

古墳名	石材	所在地	石材部位	装飾	L-max	F-硬度
広浦	砂岩	上天草市	石棺	浮彫	660	—
大戸鼻南	砂岩	上天草市	石棺	浮彫	637	—
大鼠蔵東麓	砂岩	八代市	石棺	線刻	732	—
門前	砂岩	八代市	石障?	浮彫	730	3
五反田	砂岩	八代市	石障	線刻	—	3
長迫	砂岩	八代市	石障?	浮彫	—	2.5
小鼠蔵1号	砂岩	八代市	石障	線刻	—	2.5
小鼠蔵3号	砂岩	八代市	石棺	線刻	—	3.5
下浦石(アカ)	砂岩	天草市	新材	—	730	4.5
下浦石(アオ)	砂岩	天草市	新材	—	744	6.5
千金甲1号墳	凝灰岩	熊本市	石障	浮彫	692	3.5
井寺古墳	凝灰岩	嘉島町	石障	線刻	695	2
江田石	凝灰岩	和水町	新材	—	743	—

表1 文化財石材硬度一覧表(朽津他 2007)

のはやいもの・そうでないもの、こうした特性を工人が意識し、石造物の製作を依頼する依頼者側の要求に對し応えられる石材か否かを自ずと選択して利用していることが想定される。石材の特性をいかに理解して、利用していったのかという視点は、石器研究をはじめ、石造物の検討でも一様に必要な研究視点であるが、およそ地質学上の成果を引用した研究では、石材産地の特定と、出土遺物の産地同定という「原産地研究」に偏重するきらいがある。もちろん、石材産地の特定は、考古学における流通をテーマとした研究と直結するだけに、有益かつ魅力的なものであるが、石材産地の同定そのものが、何れの石材においても同様な視点で進められるかは、疑問を投げかけるところである。

例えば、阿蘇熔結凝灰岩による一連の研究では、石材の遠隔地移動ということ突き止め、石棺研究を大いに飛躍させることとなった(高木 1983)。学史上「阿蘇石」と呼称された(間壁 1996)、阿蘇4を起源とする阿蘇熔結凝灰岩の石棺材遠隔地移動の指摘は、他地域の研究者が遠隔地移動の指摘を行うに至り使用されたものと理解できるが、産地同定以外で、石材、特に物性に迫る調査が乏しい。結果、セリヤで割るような硬岩に分類される凝灰岩と軟岩加工で使用された阿蘇産出起源の凝灰岩であっても、同じ石材と捉えられ人が利用した際に存在したはずの硬さや岩質の区分、理解まで得られていないという現状がある。そこで、前述の、風化・浸食の作用を目的とした研究方法を引用し(朽津 2007)、石材の硬度という物性に注目した研究を行うと、同一種の石材であっても目的に応じた石材利用が行われていることが判明している(池田 2006)。こうした理解があって、はじめて工人の技術、同一集団の存在、あるいは同一技術による製作とい

う課題に応えることが可能となる。対象とする砂岩は、「天草砂岩」という名称で使用される場合（高木 1989）、石材産地に言及したものもあるが、姫浦層群、砥石層群など複数の表層地質が示される範囲であり近接する。故に産地同定は本質的に難しく、なかんずく産地想定が行われたとしてもその根拠は地名研究の範囲でしかなく、仮説としての提唱は有効であったとしても、資料批判・追検証ができないため歴史学の成果として課題が残る。流紋岩、安山岩など、石材産地の特定の研究において考古学が期待する範疇にまで絞れる場合もあるが、出土遺物や遺構と採取する石材との関係について、同一石材でも、物性、石質差が認められる場合は、過去の人々の選択眼、石材選

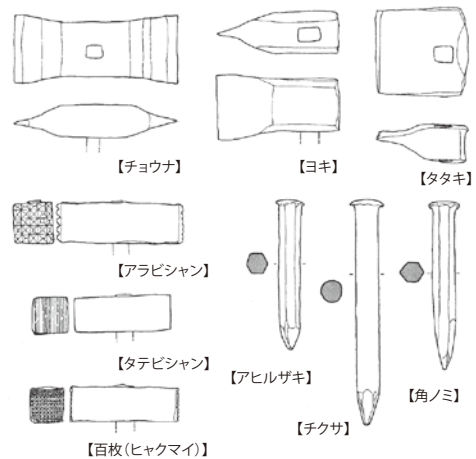


図1 下浦石工の細工道具（池田 2006）

択上の基礎的理解が求められる。石材の特性から目的的な石材を理解する試みは、同じ表層に分布する石材において考古学が期待するようなレベルでの原産地の特定にどこまで寄与できるか疑問を払しょくできない。以上のことから、本研究では砂岩を対象とした産地同定による研究視点は採用せず、阿蘇熔結凝灰岩の研究視点（池田 2007）と同様な、石材の特性・物性を考慮した各種調査から、砂岩製埋葬施設の理解に寄与できる内容を優先した調査方法を設定する。

砂岩は堆積岩の一種であることから、層理に沿った剥離、或いは剥落が特徴的に見られる。古墳の部材として利用された砂岩に関しては、軟岩の範疇に含まれるデータがあり（朽津他 2007）阿蘇熔結凝灰岩と同程度ということが判明している。また、そうした軟岩に残る石材加工痕には、チョウナ痕、タガネ痕などの加工痕が認められる（池田 2007）。こうした工具痕のうち、粗仕上げ（チョウナ痕）、仕上げ（工具痕が残らないため、工具不明）に先立つ粗加工では剥片剥離技術が用いられることも判明している。阿蘇熔結凝灰岩では、定規をあてても隙間ができない表面加工の仕上げは手作業では熟練の技術が必須であり、作業手順が存在する。工具痕が残りにくいこの平滑な面を造る最終仕上げは、大きくわけて五段階の作業手順があり、その手順は想定される工具こそ異なるが、石障を造る工程と合致することが判明している（池田編 2006）。下浦石の細工石工道具には細部での特徴は異なるが、凝灰岩製の工具である「ヨキ」と同じ、平滑に仕上げる「タタキ」が存在する。この身幅の細い工具は、硬岩専用の工具、採石、碎石の工程には用いられない、横斧、縦斧に似た道具で、熊本県内では阿蘇熔結凝灰岩と下浦石の細工専門の專業石工が持っていることを確認している（池田編 2006）。

故に、凝灰岩製石障と同じ硬度を持つ砂岩製石障においても、同種の加工、

項目	粗取り	粗整形	粗仕上げ	仕上げ	装飾加工	彩色
装飾古墳	(剥片剥離)	剥片剥離	チョウナ (チョウナ削り)	チョウナ・ タガネ	タガネ	○
鎌倉 やぐら	ツルハシ (粗ムシリ)	ツルハシ (コムシリ)	チョウナ (チョウナ削り)	—	タガネ?	○
專業石工	ツルハシ (粗ムシリ)	ツルハシ (コムシリ)	刃ビシャン	ヨキ	タガネ	○

表2 軟岩石材の製作工程及び使用工具案

工具痕が見いだせることが予想される。このような条件がそろえば、再現実験が有効な研究手段であるが（凝灰岩のみ実施 池田編 2006）、手作業ですべてをこなす細工屋と呼ばれる石工は、2006年の時点では存命ながら、何れも現役を引退しており検証がますます難しい状況にある。

(2) 調査対象・調査視点

凝灰岩、砂岩の違いはあっても、同じ軟岩で平滑な面に製作する仕上げは入念な整形加工があって初めて成り立つものである。言い換えれば、最も平滑な面を持つ石材の使用箇所、使用頻度を見出した際、その場所が埋葬施設によって差異があるならば、当時の石材利用の意識に迫ることができると考えることができる。従って、調査の対象を層理面や加工痕が把握できる面的に最も平滑な部位の調査・記録に絞り、それらを比

較することで考察を加えることとする。面的に平滑な広い石材面では、後天的な剥落と加工痕跡の有無を肉眼観察で判断することが比較的容易である。後天的な剥落部分、或いはその可能性の高い箇所を避けオリジナルと見られる面を選択する。この場合、装飾が施された面と同一な面や層理割れが認められながらも赤色顔料の塗布が認められる所ならば、後天的な剥落の可能性を避けて記録を行っておりオリジナルな面でのデータをもとにした議論という前提条件が理解されやすい。そうした平滑な比較的広い面を持つ古墳としては、肥後型石室、石障系石室である小鼠蔵1号墳、大鼠蔵尾張宮古墳、大戸鼻北古墳、小田良古墳の石障、千崎古墳群、小鼠蔵3号墳等の箱式石棺の長側石、小口石等、5世紀代に造られたとされる八代海沿岸に点在する砂岩製の石棺・石障系石室が対象として考えられる。6世紀代の天草型の石室の場合は、層理、加工による段差が大きく平滑な面は少ないことから対象外とする。従って、開口している石障を持つ所謂初期横穴式石室、同じく箱式石棺を中心に調査対象を絞る。(表3、図2)

(3) 調査対象地周辺で見られる石材の基礎的な理解

- ①石室
 - 小鼠蔵1号墳
 - 大戸鼻北古墳
 - 大鼠蔵尾張宮古墳
 - 小田良古墳
 - 田川内1号墳
 - 広浦古墳
 - 門前古墳
 - 五反田古墳
- ②石棺
 - 小鼠蔵1号墳内箱式石棺
 - 小鼠蔵3号墳
 - 千崎8号墳
 - 千崎9号墳
 - 千崎13号墳
 - 千崎15号墳
 - 千崎22号墳
 - 千崎26号墳
 - 竹島3号墳左右石棺

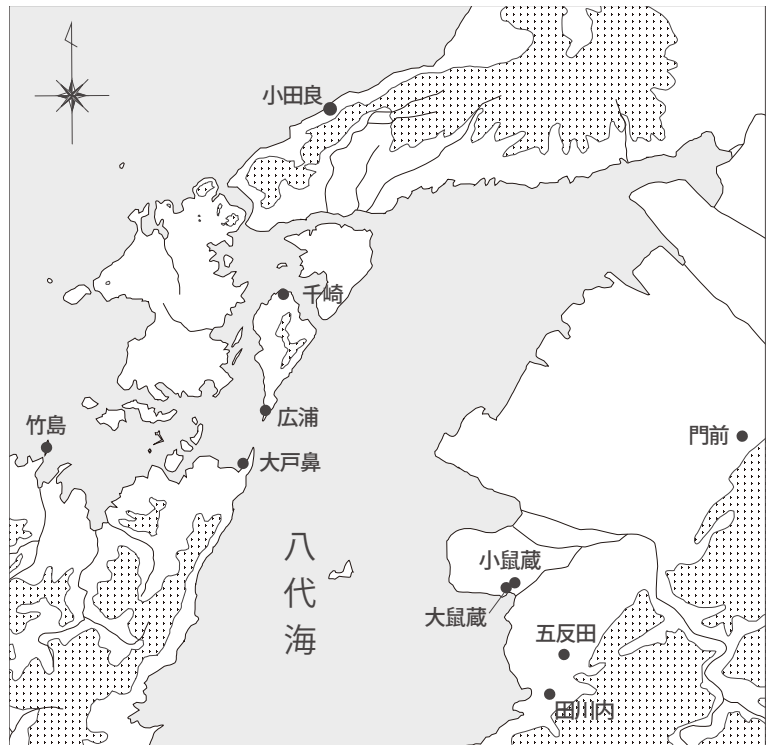


表3 うねり計測古墳一覧

図2 調査対象古墳

最初に、天草産出の砂岩のうち調査の対象となる横穴式石室、石棺の表層地質を把握しておく(図3 熊本県地質図)。次に、調査対象周辺での石材利用について聞き取り調査を実施する。聞き取り調査を通して、近現代での砂岩の利用状況を実見、砂岩の後天的な剥落や剥離の特徴、加工痕跡を肉眼で観察し対象となる古墳の石材表面の観察等の基礎的な理解を得る。

八代には文化財石材として用いられる砂岩を産出する地域は基本的に認められない。本研究の調査対象である大鼠蔵尾張宮古墳、小鼠蔵1号墳、3号墳のある鼠蔵は、それぞれ結晶質石灰岩、泥質岩の山体で構成されており石棺や石障の石材としては用をなさない。田川内1号墳の背景にある山塊は日奈久層群と呼ばれる前期白亜紀の地層であるが、この地域一帯での細工物の石工の活動は把握しておらず文化財石材として用いられているかは現時点で不明である。竹島3号墳、小田良古墳、千崎古墳群は、何れも教良木層群の範囲に含まれる。教良木層群での採石、文化財石材の利用はあるが、文化財石材としての具体的な使用実態は本調査では未確認である。

大戸鼻北古墳、広浦古墳は、姫浦層群に含まれ、周囲は礫岩、細粒砂岩、泥岩などの堆積岩が見られる

(小城他 2011)。八代海側、戸馳島、維和島、天草上島阿村にかけての八代海側の東海岸は、姫浦層群の堆積が確認できる。昭和 30 年代頃の文化財石材としての使用はステイシとしての活用がほとんどであり、間知石にも用いられる。石塔、祠、恵比須像など細工物への使用実績は認められない。玉名市横島干拓の築堤などで使用が確認できるが、1 m を超える大型の石材を切出し、板材等、「細工物」と呼ばれる石塔や狛犬など製品を加工した実績は、近代・現代においてこの一帯では確認出来ない (2013 池田)。これは姫浦層群中にある阿村層群、樋の野島群の特性に裏付けられるものと考えられる。

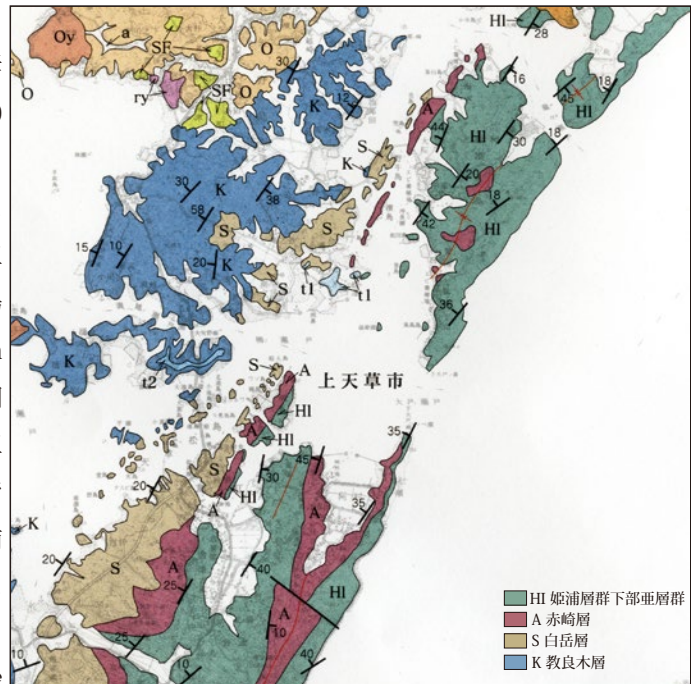


図3 熊本県土地資源対策課表層地質図 (阿村、大戸ノ鼻付近を抜粋)

阿村層群は、層ごとに同程度の大きさの砂岩が円礫状にいくつも連なって堆積していることが特徴であり大きいもので 3 m を超す。阿村層群の下部に連なるこれらの砂岩は、粗粒砂岩とされている (小城他 2011)。地元では、「タマイシ」と呼ばれるこの円礫状の岩塊は海岸部で転石として多くみられる (池田 2013)。幅 3 m あれば、規格の上では石障などの板材を切出すことは可能と思われる。石材の表面は赤っぽい「カブリイシ」と呼ばれる石質であり加工に向かず割れやすい。この阿村層群の転石のなかには、細工の加工に向く「アオ」の部分は石材の芯にしか含まれない。この芯の部分を取り出すには、石材の表皮であるカブリ石を剥がす必要があるが層理に沿った貫入が多く、意図的にアオの部分を取り出すことは難しく安定的な供給ができないという弱点がある。大型の斜交層理が入っていることが特徴とされるこれらの石材からは、大型の部材はかなり偶発の産物としてしか確保できない。灰石の石工によれば、凝灰岩で 1 m を超す巨石の切り出しは「いちかばちかの勝負」とされ確率が 5 割程度と理解される。同様な質問を維和島の石工にすると、かえってくる答えは「1 割に満たない」という。故に、近現代の石工業では職業的な細工物生産は一切なく、間知石は一尺二寸の幅の小ぶりなものしか切出せない。形状に厳密な規定のない埋め立て用の碎石ステイシを採ることが操業の基本となるエリアであり、1 m を超える板材の確保は困難である。

石材産地=良好な石材が大量に供給される場所というイメージは往々にして想起されやすいが、こと天草上島阿村や維和島のような姫浦層群のように採取する石材が使用に耐えがたいものが多いことは注意する必要がある。維和島に限りこの石材のことを地元石工は「イワノイシ」と呼んでいるが、同じ阿村層群の分布範囲である戸馳島南端の片島でも同層群の石材採石が行われており、同一名称かは未調査である。使用はやはりステイシが中心で、岩質が同じであると理解できる。大戸鼻古墳群のある阿村側では操業の実績は聞き取れなかった。維和島南端の下山集落の石工が、一時的に「ステイシ」の積み出しに都合の良い転石を採取(掘削は行ってない)した実績を持つ。小規模な採石場はあったかもしれないが、維和島の石工が操業を行っていないことから利用目的がステイシ中心であることは変わりなく、石質は同じとみて差し支えないようである。阿村層群に含まれる砂岩は、文化財石材として用いることは可能とは思われるが計画的な供給、特に大型の部材を取り出すことは極めて困難であるという点を注意しておきたい。この視点は、単に砂岩の取れるエリアであっても砂岩が全ての文化財で使われる部材全てに通用するわけではないという理解の根拠

となる。

阿村層群の下層にあり維和島の海岸地形を特徴づけるものとして樋の野島群がある。これは泥岩と砂岩が互層になっており、阿村層群にくらべて各層の堆積が薄く砂岩のみの取り出しは容易ではない。含まれる泥岩は、間知石等では一切使用しない石材である。泥岩と砂岩の互層から宮崎県青島の鬼の洗濯岩を彷彿させる景色が広がるが、八代海側に切出しており（地元では「サカハダ」と言う）、船が容易に接岸できない。維和島から流れ出す谷川のある周辺だけが沖合まで砂浜が堆積し船を着け易い。この砂丘のある地点は維和島東海岸には2か所存在し、何れの場合にも古墳（上大戸南古墳、越路北古墳・南古墳）が存在する（甲元・杉井2007）。

本章で調査対象とする古墳周辺にはないが、隣接する地質に白岳層群がある。ここから切出される石材は松島石、知十石、或いは合津石と呼ばれ、間知石あるいは建材として近現代には大量に切り出されている。合津石の歴史的起源は未調査であるが、横島干拓など大規模な干拓地造成では中心となる石材であり利用範囲は広い。特徴としては、2mm以上の石英質の丸い粒を多く含み礫岩として分類されるものである。

このほか、上天草市大矢野島柴尾山、飛岳、三角岳周辺では、ヒダケイシと呼称される飛岳火山産出の角閃石安山岩や、柴尾山火山産出の角閃石デイサイトなど、角閃石を含む安山岩のほか、角閃石、及び黒雲母を含むデイサイトが産出する。安山岩とデイサイトの区分は、過去の研究事例でどこまで厳密に分類しているかは検証が必要であるが、安山岩の使用は、周辺の古墳でも報告されているところである（高木1994）。本研究では安山岩を対象とした文化財石材としての調査を行っていないため、その区分を言及することができない。そこで、安山岩と思しき石材については、安山岩 or デイサイトとして併記する。

この他、先行研究では（池田他2011）、砥石層群に含まれる砂岩、下浦石を対象とした調査を行ったところ、「アオ」「アカ」「カブリイシ」の三種の岩質を区分して使用していることが判明している。三種のうち、アオとアカは色調差で、カブリイシは礫面の有無でその区別を行うことが可能である。

この下浦石は伝承では江戸時代に入ってから産出とされるが、アオの使用実績は慶長年間のキリシタン墓でも認められるところであり、使用の歴史にはなお検討が必要である。下浦石が採れる砥石層群は、前述の阿村層群のような玉石ではなく、石切りに良好な岩盤の露頭が見られる。

繰り返しになるが、この下浦石の最大の特徴は要求される大型の部材を切出し、かつ細工に向く良質の石材を安定的に供給できる点にある。砂粒の細かな大型の岩盤を見れば阿村層群の石材であると肉眼では区別がつくが、切出された個体の状態では何れも「アカ」「アオ」の色調を持つため判断は難しい。含まれる粒子についてもイワノイシがやや粗粒の感はあるが、こうした差は採取地が異なれば同一層群でも変化しているため両者を判断する明確な根拠にはならない。岩体としてみれば区別はつくが、加工された部材では現地での両者の区別は困難である。近世以降は、大型の部材であること、細工用の専用工具痕が付くこと、圧倒的な供給量が下浦石の根拠と言えなくもないが、状況証拠である。下浦石、イワノイシの石材判別については課題として提示しておくに留める。

従って、維和島をはじめ本研究の対象資料に含まれる可能性のある石材は、阿村層群から採取される砂岩（イワノイシ）、飛岳、三角岳周辺から採取される安山岩（飛岳石－ヒダケイシ） or デイサイト、白岳層群から採れる礫岩（合津石－アイツイシ）、可能性として砥石層群の砂岩（シモウライシ－下浦石）が



図4 本論に関する文化財石材調査図

考えられる。この他、文化財石材としての使用が想定される石材には、天草市五和町御領周辺と、宇土市馬門の阿蘇熔結凝灰岩、通称御領灰石と馬門石が挙げられる。御領灰石は維和島周辺などの近世・近代の恵比須を祀る石殿で見受けられる。馬門石は長砂連古墳にその存在が確認されている。

(4) 調査の方法

以上、八代海周辺地域での石材の基礎的な理解を踏まえ、対象となる石材について砂岩以外の使用石材の可能性を考慮し石材の簡易判定を行う。次に、石材の利用を見るため石材表面の形状を図示記録を行う。最後に得られた記録を基に砂岩における石材利用の特徴について考察を加える。

①表面観察、帯磁率計を用いた石材の判定 (内田 2011、池田他 2015)

蘚苔類、塩類、赤色顔料が付着しておらず、比較的新しい剥落箇所を選んで肉眼観察の他、Vitting 社 VT-101 拡大画像を用いて石材表面の鉱物、粒子の観察による判定を行った後、FUOG 社帯磁率計 RT-10 を用いて石材に含まれる磁鉄鉱の割合 (帯磁率単位 10^{-5} SI) を求めた。機器の接触面 (5 cm × 3 cm) が取れない凹凸のある石材では機器の接触面は 1 cm 四方に満たない Terrapulus 社の帯磁率計 KT-10 を用いた。磁鉄鉱は各々の岩石に含まれるが、概して火山岩には多く含まれ、堆積岩にはわずかな量しか含まれない。そこで本調査では $1 \sim 5^3$ SI 程度の数値の差に意味を持たせず、桁違いの値が出た場合にのみ有効な値の差として採用することで堆積岩、火成岩の区別をつけることをまず目的としている。更に肉眼観察の併用により簡易な石材判定の値として用いている。故に、RT-10 による $1000_{10^{-5}}$ SI、或いは $1500_{10^{-5}}$ SI 程度の差、KT-10 による $2.99_{10^{-5}}$ SI \sim $3.47_{10^{-5}}$ SI など、概ね一桁内での値のばらつきを問題としない。 $10.00_{10^{-5}}$ SI と $0.60_{10^{-5}}$ SI など著しい値の差を、有意な差として採用している。石材表面の剥落が起こることで、定点観測により文化財の劣化の判定ができる可能性があるほか (内田 2011)、同種の石材同士の比較では、帯磁率の値の差により石材産地を同定する試みも行われている。但し、後者の産地同定にはまず産地となる一帯の岩体から、十分な数のデータを収集した後風化により帯磁率の測定値がどの程度の幅を持つか基礎となるデータが必要となえ異なる産地であっても同じ値が示されることもままある。あくまで、磁鉄鉱の含まれる割合だけを示すた

Terrapulus 社 KT-10			
資料	対象資料名	石材	帯磁率 10^{-3} SI
下浦石 (細粒砂岩)	天草市楠浦眼鏡橋	砂岩	0.000
砂岩	平床の中世石塔	砂岩	0.060
栖本石 (安山岩)	天草市立本渡歴史民俗資料館	安山岩	0.114
水俣産出安山岩	水俣市北園上野古墳群	安山岩	15.100
御領灰石 (阿蘇 4)	五和町立御領小学校 (廃校)	凝灰岩	2.990
凝灰岩 (阿蘇 4)	熊本市大慈寺九重石塔	凝灰岩	3.478
凝灰岩 (阿蘇 1)	通潤橋	凝灰岩	14.700
FUOG 社帯磁率計 RT-10			
資料	対象資料名	石材	帯磁率 10^{-5} SI
下浦石 (細粒砂岩)	石材サンプル	砂岩	0
合津石 (礫岩)	下山集落石垣	礫岩	0
イワノイシ (粗粒砂岩)	下山集落石垣	砂岩	0
飛岳石	下山集落石垣	安山岩	1403
千崎 9 号石棺	北側小口石	安山岩	999
千崎 26 号石棺	北側小口石	安山岩	832
同	南側小口石	安山岩	995
同	東側長側石	安山岩	884
同	西側長側石	安山岩	919
千崎 10 号石棺	東側長側石	礫岩	0

表 4 文化財石材帯磁率一覧

めその測定値の解釈には議論が必要である。

ここでは、蘚苔類が繁茂し石材表面の観察だけでは砂岩等の判定の難しい場合、火山岩系と堆積岩系の値が三桁以上の異なる値を示すことを根拠として火山岩である安山岩 or デイサイトと堆積岩である砂岩及び礫岩との区別に用いる。測定箇所ですべて 3 ~ 5 回測定を繰り返したのち再現性の高い終息値のみを採用する。概して火山岩である安山岩は $900 \sim 3000_{10^{-5}}$ SI などの高い値を示し、砂岩・礫岩は $0 \sim 10_{10^{-5}}$ SI などの低い値を示す。

②真弧を使った石材表面の形状「うねり」の記録と模式図の作成

15cm幅の中型の真弧を用いて、石材表面の形状記録に使用した。砂岩は層理に沿って凹凸が認められるが、うねりの走る方向によっては計測できないことがある。そこで測定箇所では、上下方向、左右方向で測定し二

つの測点の一部を交点として定めた。測点箇所は1カ所の測点で2点設定し図上に記録した。まず、砂岩には特有の割れ方劣化の仕方があることから、石材表面の形状がオリジナルの状態であるか赤色顔料の有無などから確認する。後天的な剥落など劣化が起きているところ、あるいは後世の剥落の可能性があるところは対象としない。次に真弧による形状を記載し石材の「うねり」と「粗さ」の有無を検証する。この評価には金属の仕上げ加工の概念を引用（JIS規格2001年版）する。以下、「うねり図」と呼称する（図5）。砂岩特有の礫面の有無、層理割れ、海蝕痕、粗い加工痕跡など、「粗さ」を残す石材の表面か否かを見る。金属の仕上げ加工では、数、粗さの深さ等を計測するが、ここでは単に粗さの有無その種別を記載するに留める。



石障にみられる層理割れ（割れ面に赤色顔料が残ることからオリジナルと判断できる例）



海蝕痕のある積石の例（何れも小鼠蔵1号墳）



うねりの異なる二つの部材（小鼠蔵1号）
※左側：石棺長側石、小口石、右側：石障



左右で粗さの異なる表面加工（田川内1号墳）
※同一部材で左右仕上げの異なる仕切り石



計測状況1（千崎22号小口石19-20）
※二石ある北西側小口石の外側



計測状況2（千崎22号小口石17-18）
※二石ある北西側小口石の内側

うねりは上下左右の2つの線方向の形状を取る。計測する部材の大きさを考慮し、概ね1～3カ所（2～6点）を計測する。真弧の2点を基準線で結び、うねりの最大深度、うねり数をカウントする。

一面につき2カ所以上測定を試みるが表面の保存状態など条件が悪ければこの限りではない。一つの面で得られた複数のうねりの最大値から更に平均値、最大値を求める。石棺、石障の外側は測定可能な場合のみ記録する。記録した場合でも1カ所で上下左右の2点測定が不可能な場合は1点のみとする。一面につき測定が1点しかない場合は、唯一得られた数値のみを提示し、最大値（Max）／平均値（Ave）の記載は行わないことで複数箇所計測して得られた他の面との区別を表現する。

以上の記録を観察表（表5・6）に記載する。

次に、1点ごとにうねり数とうねり最大幅からグラフ上に記録し、石材表面のうねり、粗さの傾向を見ていく。グラフポイントは、1面目：○●、2面目：△▲、3面目：□■、4面目：◇◆とする。●は粗さのある粗面、○は粗さのない滑面とする。グラフポイントには、観察表の番号を付し、○1、○2・・・と表記する。最後にこれらうねりの計測値を最大深度ごとにカウントしてうねり最大値を分類し模式図を作成する根拠とする。この模式図を概ね使用される石材の平滑差を知る指標とし、他の部材、他の古墳の使用石材との比較検証に用いる。測定数が2カ所のところが含まれるため、最小値、最大値を省き、より信頼性の高い値による詳細な評価は今後の課題とする。

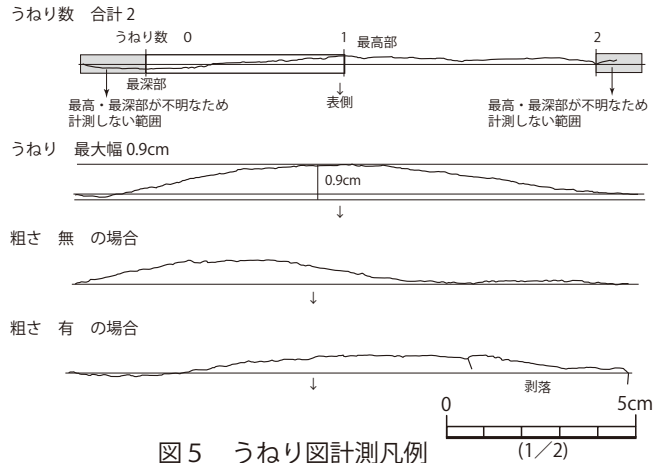


図5 うねり図計測凡例

③真弧を使った石障削り込みの形状記録

②と同様な手法で石障上部に残る削り込みの深さを計測する。必ずしもオリジナルな面が残っていないため、計測する削り込みは手前側石障などに限定していない。大戸鼻北古墳、大鼠蔵尾張宮古墳、小田良古墳で計測を実施する。田川内1号墳は図上から計測、広浦古墳、五反田古墳を参考事例として加える。

(5) 結果

①表面観察、帯磁率計を用いた石材の判定

事前に産地が特定できる部材を観察、帯磁率計を用いて測定した(表4)。

・下浦石(細粒砂岩・新材)

砥石層に含まれ、アオ、アカ、カブリイシの3種があることはすでに述べた。砂岩の一種であるため、帯磁率は $0 \sim 5_{10^5}SI$ 、或いは $0.00 \sim 0.100_{10^5}SI$ を示す。アカとアオの差は色調の他、含水率が異なり、アカは水分量が高い。

・イワノイシ(粗粒砂岩)

姫浦層群の阿村層に含まれる砂岩の一種であるため、帯磁率は $0 \sim 5_{10^5}SI$ を示す。吸水性が良く、含水率は高い。色調は下浦石に似る。下浦石に比べ構成される砂粒の粗さが目立つが、採取場所、層ごとで変わる可能性もあり、本調査では区別が難しい。但し、下浦石に比べ大きな岩盤には含まれないので、使用されるならば古墳の石材には、丸みを帯びた礫面が特徴的に残っている可能性が高い。帯磁率の値は下浦石と同様である。

・合津石(礫岩)

白岳層には、粗粒砂岩～細粒礫岩が含まれるとされる。表面がイワノイシよりナガレル(剥落する)ことがないため重宝される。帯磁率は $0_{10^5}SI$ のみである。

・飛岳石(デイサイト or 安山岩)

飛岳火山層に含まれる石材で、現在も採石が続いている。灰色から薄いピンク色を呈し、1～2mmの角閃石が特徴的に入る。地元では「黒いゴマ粒がはいる」と指摘される。帯磁率は $1200 \sim 3000_{10^5}SI$ を示した。

・その他(御領灰石・水俣周辺産出安山岩)

本調査対象には含まれていないが、帯磁率は特徴的な値を示すので提示する。阿蘇熔結凝灰岩の一種である御領灰石など細工に向く軟岩は $600 \sim 700_{10^5}SI$ であるが、馬門石は成因過程が異なるため、同じ阿蘇熔結凝灰岩でも $50 \sim 90_{10^5}SI$ であり、帯磁率による判別が有効な石材である。以上を基準に、対象資料で表面観察、帯磁率測定を実施、以下の古墳で異なる石材利用を確認した。記載していない他の古墳使用石材は、帯

磁率 0_{10^5}SI であり砂岩と判断した。水俣産安山岩は、江戸時代中期の墓石の他、沿岸部の石垣、ステインで用いられている。現在は石材加工の場は認められず操業は中止している。水俣川長野付近の河川敷では、 $1200_{10^5}\text{SI} \sim 3600_{10^5}\text{SI}$ と比較的高い値を示す。水俣産安山岩の石工道具は僅かに収集されているにとどまるが、間知石の切り出し、間知石を造るマワシ、コワリの道具のみであり、ヤが小さい特徴があるほか道具数はそう多くは無い。細工石工が絶えて久しいと見られる。水俣川一帯の付近は多数の石切り場跡が存在する。水俣産安山岩の特徴の一つに反球面レンズ状剥離による層理割れがある。一見、剥片剥離のように見えるがその割れの中心には石英質の不純物があり、容易に板材風に割れるため、地下式板石積石室墓の石材に用いやすい。

小鼠蔵1号墳(図6)

石障、石棺など主要な施設は何れも帯磁率 $0 \sim 5_{10^5}\text{SI}$ 未満を示し砂岩と判断した。積石では先行研究で安山岩と示されているように(高木 1994)、 $1000 \sim 3000_{10^5}\text{SI}$ と高い磁性を示した石材が確認された。安山岩と判定された場所もほぼ整合的である。角閃石と見られる長さ数mmの黒い粒子が入り安山岩と見られる。先行研究では偏光顕微鏡の鑑定により水俣産出の安山岩とされたものである(高木 1984)。この二種類の石材とは異なる帯磁率を示す石材が若干存在する。色調はこげ茶色に近いがほとんど砕けており、観察が容易ではなく石材は不明とした。

竹島3号墳(図6)

大部分が帯磁率 0_{10^5}SI を示し砂岩系の堆積岩である。なかに灰色で粒子のきめ細かい部材が使われており、 $3 \sim 35_{10^5}\text{SI}$ の値を示す。比較的低い値であり肉眼観察から、堆積岩系の石材であると理解できる。竹島の海岸部では、黄色い砂岩系の石材とこの灰色の石材の両方が確認できやはり帯磁率は似た値を示したことから付近の石材と理解できる。竹島が教良木層群に含まれることから泥岩と判断した。

千崎8号墳(図6)

構成する石材は何れも帯磁率は 0_{10^5}SI を示すが、東側長側石は構成する粒子が粗く肉眼で粒が観察できる。2mm以上の粒子であり全てが丸みを帯びている。この白く不透明な粒子によって石材の表面が粗面になっている。このことから礫岩の一種と判断した。

千崎9号墳

北側小口石のみ帯磁率 999_{10^5}SI の値を示す。蘚苔類に覆われ一見すると他の砂岩と見間違うが、黒から灰色に近い色調で砂岩の粗い粒子が見えない。但し、含まれる鉱物に角閃石のほか黒雲母が含まれる。このことから、安山岩 or デイサイトとしておく。

千崎22号墳

北西側小口石の内、副室を構成する外側の石材が千崎8号墳東側長側石と類似した表面が観察できる。このことから礫岩と判断した。

千崎26号墳

千崎9号墳北側小口石と類似した色調であり、南北の小口石は、 995_{10^5}SI 、 832_{10^5}SI 、東西の長側石は、 884_{10^5}SI 、 919_{10^5}SI と何れも高い帯磁率を示すことから、安山岩 or デイサイトと判断した。

②真弧を使った石材表面の形状「うねり」の記録と模式図の作成

i うねりの観察結果

模式図の作成(図7・8うねり模式図凡例参照)

次に、個々のうねりの形状から計測したうねり最大幅をカウント、グラフにまとめ模式図作成の際の纏まりを検討する。その際、外側の形状データは一樣ではなく、部分的な計測であり同一面で縦横に計測できない場合がほとんどであるため、石材の整形面の全体像を表しているとは言い難い。そこで全面を観察したうえで、計測を行っている石障、石棺の内側データだけを用いて、模式図作成の指標とする。データ総数は

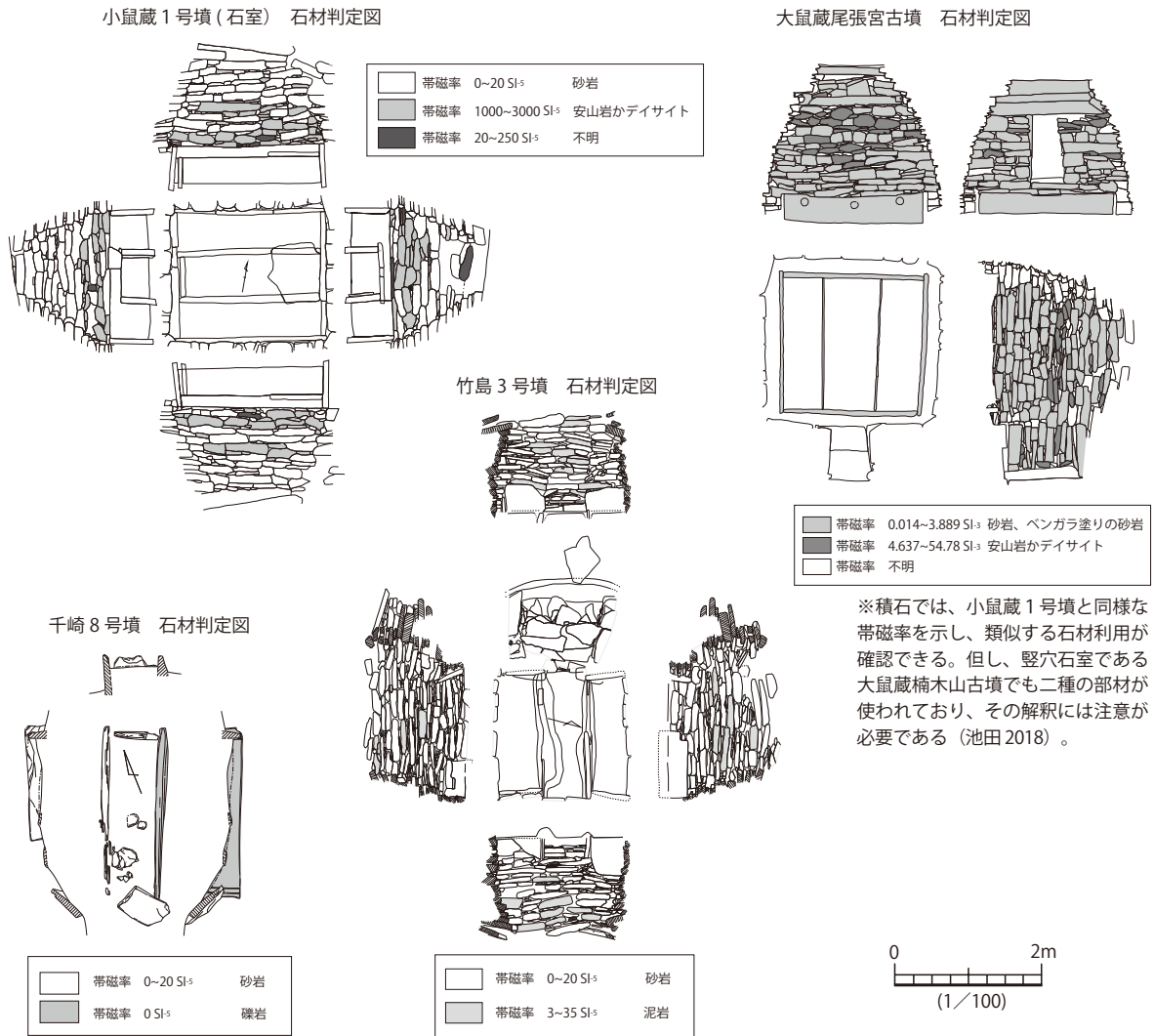


図6 石材判定図

227、内訳は、石障 113、箱式石棺 114 (小口石 42、長側石 72) で、異なる墓制同士の計測数はほぼ拮抗している。

このグラフを元に模式図に適した数値を検討する。まず、整形の際の誤差が 0.1cm以下の特に入念な仕上げ加工の部材がいくつか特徴的に見られた。この仕上げ加工の部材は、工具痕、層理ともに真弧では形状を記録できない群を抜いた出来映えと言える。そこで、このうねり最大幅 0.1cm以下の部材は、独立させて模式図上で表現する。

次に、データ数の多いうねり最大幅は、0.2cmをピークに 0.3cm内に集中する。データ数は 110 と全体の 48%を超える。そこで、0.1 ~ 0.3cm以内に収まるうねり最大幅を二つ目の模式図に反映させる。残る 0.3cmよりも大きな値では、1cmよりも値が大きくなると値にピークがなく、ばらつく傾向にある。そこで、0.3cmより大きく 1cm以内のデータを一括し、三つ目のうねり最大幅の模式図に集約する。残る 1cmより大きな値は、一括して四つ目のグループとする。

以上、四つの段階を模式図に表す。うねりの形状をモデルとし波線の振り幅の大ききで分ける。最後に部材ごとにうねり最大幅のデータの平均を求め、その値を模式図の線の割り当て (0.1cm以下 / 0.1 ~ 0.3cm以下 / 0.3 ~ 1.0cm以下 / 1.0cm~) に用いる。部材の表面の凹凸がひとつの指標であるため、最大幅も併記し模式図作成にあたっての設計図を作成する。例えば、四方の石障すべてが 0.1cm以下のうねり最大幅という平均値で示されるならば、正方形の模式図になる。

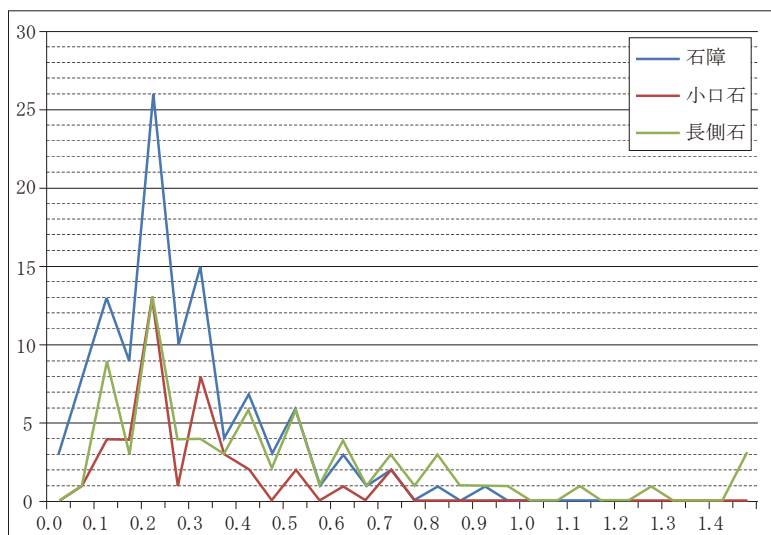


図7 石障・石棺に用いた部材うねり最大幅 (cm) のデータ総数グラフ

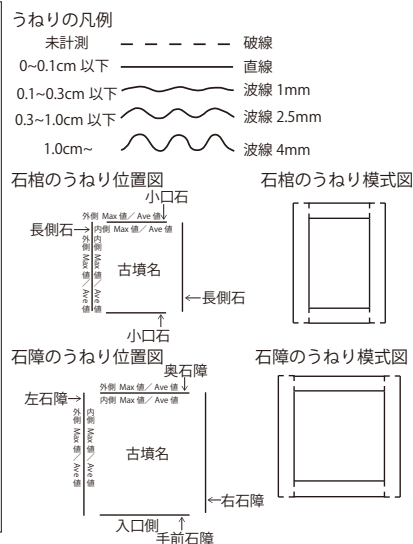


図8 うねり模式図・凡例

ii 石障模式図 (図8 うねり模式図・凡例参照)

計測が行えない石障外側、削り込み付近は、全て破線(未計測)で表現している。小鼠蔵1号墳は石障ながら、やはり東西方向の長側石に相当する面のうねり幅が、小口石に相当する南北方向の石障のうねり幅より大きいことが特徴である。大鼠蔵尾張宮古墳では、左右の石障より手前側石障のうねり幅が大きい。奥、左右の石障は相対的にうねり幅の小さいより平滑な材を用いている。大戸鼻北古墳の入口側石障内側は、振幅1mmの波線で表現しているが、平均値は0.12cmであり、直線で表現しても差し支えない整形であるが、石室内では相対的にうねり幅は大きい。本調査対象中、最も平滑な面を用いる石障である。但し、大鼠蔵尾張宮古墳と同様に、うねり幅の大きい石障が手前側に置かれ、左右と奥の石障がそれより丁寧かつ同程度の仕上げによる石障を用いる点は共通する。小田良古墳でも、大鼠蔵尾張宮古墳、大戸鼻北古墳同様に、奥、左右の石障が比較的うねり幅の値に近い部材が用いられている。手前側の石障において、相対的にうねり幅が大きい点も同様である。但し、粗さの点では小田良古墳は加工痕、層理割れの面が左右、手前の石障に顕著に残る。仕上げ加工という点では、奥側の石障が最も手を加えている。田川内1号墳は、仕切り石、石屋形袖石、羨道部の計測も行っているが、他の石障、箱式石棺と比較することを意図して、石障の形状のみ模式化している。ここで大きく異なるのは、大鼠蔵尾張宮、大戸鼻北、小田良古墳では、奥、左右の石障のうねり幅が小さく、手前石障が最もうねり幅が大きいことが看取できたが、その関係が田川内1号墳では逆転していることである。手前石障、それも内外面の何れも大戸鼻北古墳の石障と同等の精緻な仕上げ加工を施すのに対し、左右、奥の石障は相対的にうねり幅が大きい。

うねり最大幅は個々で異なるが、相対的には小鼠蔵1号墳、田川内1号墳は、特徴的な材の用い方が確認でき、大鼠蔵尾張宮、大戸鼻北、小田良古墳の3カ所では類似した材の用い方が認められる。広浦古墳、門前古墳、五反田古墳は、部材のみの現存するため石障の正確な位置関係は不明であり、部材として模式図にした。うねり図同様、装飾のある内側を下向きに掲載している。広浦古墳の部材を石障として取り扱った根拠は次の項目で示す。

五反田古墳では、うねり最大幅が0.1cmに近く比較的平滑な面が特徴的である。広浦古墳、門前古墳の装飾面のあるうねり最大幅の値は、石障のなかでも標準的な仕上げと見られる0.3cm前後の値に収まっている。石障外側の形状では計測データが少ないこともあり比較したうえでの傾向は積極的に見いだせないが、田川

内1号のような精緻な仕上げが大鼠蔵尾張宮古墳の左石障外面?にのみ存在する。この石障に限ってはなぜか内面よりも精緻である。小田良古墳の礫面の確認という点で、石材採取の状況は把握できる。

小鼠蔵1号墳(図10)

小鼠蔵1号墳は石障の内部に箱式石棺が置かれているため、石障と石棺に分けて結果を示す。本研究では小鼠蔵古墳を竪穴石室の一種ととらえるため、図では便宜上北側面を上にしており、全て方位で呼称する。まず、石障同士は先行研究ですでに指摘されているとおり(蔵富士1997)、天草諸島に多く見られる箱式石棺と同様な組み合わせで設置されている。構造上は、南北の石障が長側石に相当し、東西方向が小口石と対比できる。うねりの形状を見ると、この構造の理解と同様に南北にある2枚の石障と東西方向にある2枚の石障同士で類似した平面形状を示す。南北方向にあるうねり最大幅は何れも東西方向のそれに比べて小さい。東西方向の石障は0.35～0.9cmの幅を持ち、大きなうねりが肉眼でも観察できる。層理にそって割れた(或いは割った)面のように推察され加工痕が観察できない。南北方向はうねりの最大深度でも0.2cmしかなく、極めて平坦な部材と言える。北側の石障の中央付近は後世の剥落が激しく計測を控えた。保存上注意を要するが、剥落の厚さは1～2mm前後であり、仮に完全な状態であっても、うねりの最大幅に大きな誤差はないと考えられる。グラフからも対になる石障に類似する部材を使用していることが明確に出ており、何らかの意図を考える必要がある。

大戸鼻北古墳(図11)

この古墳の石障は、奥、左右の3面とも誤差1mm以下という精緻な平滑面で仕上げられており、特筆される特徴がある。手前石障は相対的にうねり幅は大きいですが、それでも最大幅は1.5mmと、小鼠蔵1号墳の南北方向の平滑面に匹敵する仕上げである。工具痕、層理の痕跡ともほとんど認められない。4枚もの部材が偶発的に割れたとは考えられず、精巧な仕上げととらえられる。

大鼠蔵尾張宮古墳(図12)

四方の石障の外側にわずかな隙間が存在するため、内外面共に測定している。計測可能箇所はあまり多くはなく、石障の四方隅でようやく図ることができた。これは表面のほとんどが塩類に覆われ、後天的な剥落が起きやすいと判断したことから、真弧の接触による破損を避けている。或いは中央部分の装飾付近ならばより精緻な形状が記録できるかもしれない。うねりの最大幅は大戸鼻北古墳に次いで四方共に精緻である。また、石障外側の形状も内側と同様な平滑さであり、両面どちらでの使用も可能な仕上げとなっている。入口側の手前石障、奥石障がうねり幅が大きく4mmを超える部分がある。このうねり幅は層理割れ、剥離、工具痕と考えられ、一部に製作痕を残しており大戸鼻北、小鼠蔵1号墳の南北石障に比べ粗い印象である。小鼠蔵1号墳の東西石障のような砂岩特有の層理割れで見られるうねりの形状をそのまま残した箇所は無い。むしろそうしたうねりの凸部を各種加工技術で平滑にした形跡がある。

小田良古墳(図14)

本古墳は海拔7mの海岸部に位置する。県内の砂岩製埋葬施設としては唯一の国指定史跡であり装飾古墳としても砂岩製のものはこと岡山県千足古墳のみという希少性がある。砂岩製の装飾古墳の中でも最も装飾の面積が広い。1979年(昭和54年)の調査直後に埋戻し保存、覆い屋による埋土への雨水の浸透を防ぐ覆い屋保存の二重の対策が施されているうえに、1992年(平成4年)には一度開口し熊本県立装飾古墳館内に設置しているレプリカが作成されている。全国的に見て埋戻し保存の成果が追認できる例はそう多くは無い。実物資料は埋戻し保存されているため熊本県立装飾古墳館内のFRP製レプリカを測定した。FRP製レプリカは厚さ1mm以下のごく薄い錫箔でかたどりされるため、正対した文様や一枚岩の石障の形状記録には優れている。ただし、石材ひとつひとつをこの手法で記録するため、石材同士の組み合わせは実物と異なる面がある。本調査は石材表面の形状記録であることから、実物に準じたデータとして採用する。レプリ

力ながら後天的な剥落箇所も確認できる。奥石障左側はレプリカ製作時薄い層理割れを起こしていたと見られ、小鼠蔵1号墳北側石障と同様なランダムに1mm程度の薄くて、面積が数cm四方の小さな層理が認められる。故に、奥石障は中心からやや右寄りに測定箇所を設定している。この古墳ではうねりの最大数値が奥、左、右で大きな差は無く、0.3cm前後である。手前側はやや粗く0.4cmを超える。数値では大きな差は見いだせないが、肉眼観察では四方それぞれに特徴的な仕上げになっている。まず、手前側の石障は工具痕が全面に残り粗い仕上げという印象をうける。チョウナによる工具痕と見られ、軟岩特有の粗仕上げになる「コムシリ」という平滑にする直前の作業で留めている。部分的に平滑にした箇所はなく、手前側石障での平滑にする調整はこの段階で留めるとい意志を感じる。右石障は、入口側から斜め下方向に割れ目状の大きな貫入が見られる。全体として層理割れが多く認められ、母岩から層理に沿って剥がされた印象を持つ。左石障は右石障と近いうねり最大幅を測るが、この面の粗さの要因は、層理割れではなく、工具痕である。手前側石障の工具より一工程多く、コムシリ状の仕上げの後、タガネ状の工具で全面を細かく調整している。それでも完全に平滑にするまでには至っておらず、大戸鼻北の石障のような平面は見られない。奥石障は左側の工具痕、右側の層理割れにくらべ、やや精緻な印象を受ける。工具か層理割れか判断しがたい程度の仕上げである。1mmに満たない整形痕の残らない仕上げとは異なる。外側はうねり最大幅の値では内側と差は無いが、礫面が残っている可能性がある。特に石障の上面付近、75 - 76 や 77 - 78 ではなだらかな稜線で緩やかにカーブしており、礫面の表面の形状と考えられる。盤上の岩塊から石材を剥ぐ、「掘割技法」を彷彿させる。但し、上部付近のみの計測のため全体の整形は把握できない。

田川内1号墳（図16）

議論を整理するため、石障に限定する。左右、奥側の石障は外側の計測できないため割愛する。左石障は八代市教育委員会により剥落止めの修復が実施された場所であり、現在も後天的な剥落が認められるため測定ポイントの設定には留意した。奥側、右側、手前石障ではこのような後天的な激しい剥落は観察できない。後世の剥落が目立つ環境下ながら比較的全面に赤色顔料が残っており、オリジナルの面を判別することは可能である。この古墳では、1mmに満たない精緻な仕上げは手前石障の内外面両方に認めることができる。肉眼でもその差は容易に認められ、奥側、左右の石障は層理が残り、比較的同程度の仕上げである。比較事例として、1mmに満たない平滑な手前石障と同じ仕上げが石屋形袖石、仕切り石で認められる。

広浦古墳（図13）

第一石：割られた部材の一部であるが、上部、裏側、表側は、後世の剥落もなく調整痕、層理面がよく残っている。装飾側の層理面は装飾文様が切っており、製作時には存在したことが理解できる。およそ平滑な面に装飾を施すことが有利と考えられるが、調整を行わずに層理割れの部分を超えて装飾するという特徴があり小鼠蔵3号墳の石棺長側石と同じ意識が見られる。外側は層理割れ、粗割りの痕跡がよく残り、平滑に仕上げた大戸鼻北の外側のような形状とは大きく異なっている。

第二石：第二石も第一石と同様に、上部、裏側、表側は、後世の剥落もなく調整痕がよく残っている。第一石、第二石は、最大幅こそ2mmながら、粗さが目立ち平滑に全面を仕上げる意識は希薄である。外側は、第一石同様に平滑に仕上げる意識は無く稜線が残っているが、正対して観察できないことから細かな加工痕の有無は判らない。

門前古墳（図15）

ほぞの形状、向かって左上部の稜線を割り込みと捉え、左右石障の何れかと判断した。割り込みと判断した箇所は相当磨滅を受けており議論の余地を残している。同じ所に段差の割り込みがある形状としては、東京国立博物館で展示中の長迫古墳の部材がある。箱式石棺長側石の可能性も捨てきれないが比較検討は後に述べる。内側全体では、石障の下部に整形前の剥離痕跡が残る。下部付近の加工が粗くなる様相は、凝灰岩

製ながら、千金甲1号墳で確認できる。また掘り込み部分は、両面から剥離を行ったままになっており、日奈久阿蘇神社にある長迫古墳の部材と加工は類似する。装飾文様付近から下部に所々に残る調整痕の粗さを含めても、うねりの最大幅は1-2で0.5cmと他の粗い仕上げの石障と同程度である。外側は内側と同様な丁寧な整形で、大鼠蔵尾張宮古墳の石障や日奈久阿蘇神社の長迫古墳部材と類似する。

五反田古墳

石障とされるが、現地での位置関係はオリジナルとは異なるとみられ部材の設置関係は不明である。石材の厚み、大きさからみて、仕切り石や石障の一部の可能性はある。削り込みは何れの石材でも確認できるが、計測可能な位置にあるのは一部のみである段差の小さな層理が残る以外は、丁寧な整形面を見せる。わずかな層理面が残る仕上げは、田川内1号墳の左石障などで確認できる。外側は現状では計測ができない。

iii 石棺模式図 (図8)

石棺は千崎型箱式石棺の特徴であるカギ継ぎによる長側石の継ぎ方の表現が難しいため、模式図では別石で表現する。また、長側石に小口石を削り込むH字形の組み合わせの表現を試みているが、小口石外側未計測部分がある場合(小鼠蔵1号墳・同3号墳、千崎9号墳・同15号墳)では、うねりの模式図が描けないため省略する。

竹島3号墳は石室としてではなく左右2基の石棺を比較資料として評価を試みた。また、小口石が長側石に比べ丁寧な整形を行っているという傾向は各石棺のうねり図の説明でも触れたが、二つの小口石を比較すると相対的に一方のみが特に精緻な整形を行っていると理解されるため、小口石内側のうねり最大幅の値が小さい方を図の上側に示す。まず、長側石のうねり最大幅が小口石より大きいものは、小鼠蔵1号墳・同3号墳、千崎8号墳・同9号墳である。千崎22号墳は副室を持ち他の石棺とは構造が異なるが、内側のうねりの最大幅は等しい。北西側の外にある礫岩製の小口石のみ粗い。千崎13号墳は北東側の長側石のうねり最大幅が小さく丁寧な面になっているが、南西側の長側石のうねり最大幅は大きい。小口石もそれに準ずる。千崎15号墳は、小口石より長側石のうねり最大幅が小さいという特徴がある。千崎13号墳は千崎15号墳の製作の意識に類似する可能性がある。千崎26号墳は全ての部材が安山岩 or デイサイトで作られているため、火山岩特有の割れ方、あるいは割り方をうねりの形状が反映している可能性があり、同一に議論するには注意が必要な安山岩 or デイサイトである。千崎9号墳北側小口石や礫岩とみられる千崎8号墳東側長側石は、同じ石棺内の砂岩と相対的に比較することで「使用の意図」と評価する。但し何れの外側の面も礫面と見られ、砂岩の礫面とは自ずと異なる風化の様相を示すためうねり最大幅の比較はここでも参考程度と捉えている。

小鼠蔵1号墳内箱式石棺 (図18)

東側小口石は当初から無いものと考えられる。装飾のある西側小口石が最も丁寧な整形であり、最大でも0.15cmのうねりしかない。南北の長側石は内外ともうねりが顕著であり、0.5cm前後と仕上げ面に違いは見られない。西側小口石の精緻さは南北方向の石障と酷似する。さらに南北方向の箱式石棺長側石のうねりの残る面は東西方向の石障と酷似しており、石棺に用いる材と石障に用いる材を計画的に組み合わせたと理解できる。西側小口石の外側は石障に挟まれ真弧による計測は不可能であるが、上部から観察すると細かな層理など、うねり、粗さが認められず、内外面どちらも似た仕上げであることが判る。

小鼠蔵3号墳 (図19)

北側の長側石に大きな層理割れを残したまま部材を用いていることが特徴である。円文がこの層理割れの上から彫られている点は、広浦古墳と同様である。北側長側石では、うねりの最大幅が1.1cm、1.25cmを測る。南側長側石では、剥離痕がオリジナルか否か解釈が分かれるが、0.9cmの幅を持つ。この場所の剥離は層理面を削り面取り加工した可能性がある。面取り加工部分と考えるならば、平坦面の形状計測とは言い難くな

るので、その場合は剥離面を除くうねりの最大幅は0.6cmとなる。南側長側石全体としては丁寧な仕上げを行っており、0.2cmの平滑な面が見られる。小口石では特に西側小口石の整形が丁寧であり、うねりの最大幅が0.1cmに収まる。東側はそこまでの精緻さはなく層理割れが残るが、それでも石障と同程度の仕上げで0.3cm内に収まる。西側小口石の整形の丁寧さに対し、長側石のうねり幅が広い点は小鼠蔵1号墳と酷似する。

千崎8号墳(図20)

長側石のうち東側の一枚岩は2～3mmの不透明な白色粒を多数含む礫岩であるが、形状記録を砂岩と同様に行った。礫岩故、表面の粗さが異なることが予想されたが砂岩同様、堆積岩の特徴と思われる層理に沿ったうねりのラインが計測できた。礫面が残り合津石に酷似する。西側長側石、北側小口石、南側小口石は何れも砂岩である。このうち西側長側石、北側小口石の外側は、礫面が残る。西側長側石内面の縁では階段状の層理割れが残る。後天的な剥落の可能性は捨てきれないが、ここでは端部の剥離面に層理が切られていることを根拠に面取り加工の一部と捉えておくが議論の余地を残している。何れにせよ小口石が最も精緻であることに変わりはない。長側石内面のうねりの幅に比べ、特に南側の小口石は最大幅0.2cmと丁寧な仕上げである。

千崎9号墳(図21)

北側小口石は、角閃石を含み $900_{10}^{\circ}\text{SI}$ と比較的高い帯磁率を示すことから安山岩 or デイサイトと見られる。8号墳と同様に、東側長側石、西側長側石、北側小口石で、石棺縁に剥離痕、内面に階段状の層理割れが確認できる。8号墳と同様、粗い面取り加工と捉え平坦面のみを計測した場合のデータを示す。但し8号墳と同様、長側石の解釈が変わっても小口石よりうねりの最大幅が大きいことに変化はない。南側小口石では特徴的に海蝕痕が見られる。1-2の窪みを考慮しなければ、うねりの最大幅は0.2cm、含んだ場合は0.6mmとなり、南側小口石のほうが比較的精緻(0.3cm)になる。

千崎13号墳(図22)

北西側小口石、北東側長側石内側は工具痕、南東側小口石、南西側長側石内側は層理割れが認められる。工具を起因とした粗さと層理を起因とした粗さが向かい合う。長側石は両側とも外側は礫面である。もっとも精緻な面は北東側長側石で、次いで南東側小口石である。0.2～0.3cmの平坦な面と0.4cm以上の比較的うねりの最大幅が大きい長側石、小口石がやはり向かい合う形で設置されている。但し精緻な面の形状は、それぞれ層理割れと工具による整形で、過程が異なる。

千崎15号墳(図23)

石棺内側に赤色顔料が良好に残る。外側は何れの箇所も埋没しており計測は出来ない。ここは他の石棺と異なり、小口石が二石とも長側石よりうねり幅が大きい仕上げとなっている。北西側小口石では層理割れが残り、南東側小口石では加工を中ほどまで行って残している。もっとも精緻な整形面は北西側長側石北側5-6、7-8や南東側長側石南側の石材で、うねり最大幅は0.2～0.1cm内に収まり石障のもっとも精緻な仕上げ部分と酷似する。長側石と小口石の仕上げ加工が8号墳、9号墳とは異なる長側石方向であり、大型の部材であっても均質に仕上げる技術を持っていることを示している。

千崎22号墳(図24)

北西側の小口石が2枚あり副室を形成している。北西側小口のうちより北側の石材は、礫岩、南側の石材は砂岩である。北側の礫岩はチョウナらしき加工痕が粗く残っており、他の石材に比べ、19-20の内外ともうねり最大幅が比較的大きい。残る北西側小口石、両長側石、南東側小口石は、何れの場合も内側は丁寧な整形である。副室を持つ一方四面の石材すべての整形が細やかなことも、千崎古墳群内では唯一の事例であり特徴的である。

千崎 26 号墳 (図 25)

構成する石材がすべて安山岩 or デイサイトであることから、砂岩以外の事例としてうねりの形状データのみ提示する。外側表面は何れも礫面と考えられるが判別が困難である。おおむね内側のうねり最大幅は外側よりも小さいことは他の石棺と同様ながら、半球面レンズ状剥離により自然の割れであり、意図した加工箇所を見出すうねりの調査手法にはなじまない。

竹島 3 号墳 (図 26)

石障を持つ部材、箱式石棺との比較資料として、鋤先古墳等の北部九州の初期横穴式石室の系譜と見られる本古墳を対象とする。石室内部の 2 つの箱式石棺を分析対象としたため、左右それぞれを調査の対象として取り上げる。

左石棺・右石棺：何れも羨道側の長側石内面 5—6、7—8 が最も精緻な仕上げであり、うねり最大幅は 1 mm 内に収まる。小口石は奥側が何れもうねり最大幅を測る。長側石内側の仕上げ加工は、田川内 1 号墳の手前石障や仕切り石と同程度の精緻さではあるが、内外面とも平滑な面を作り上げる田川内 1 号や小鼠蔵 1 号墳内の石棺の西側小口石等とは異なり、長側石外側のうねり最大幅が内側に比べ大きい点が異なる。

③真弧を使った石障上面の削り込みの形状記録 (図 28)

大鼠蔵尾張宮古墳

奥石障、左石障の一部を記録した。右、手前石障とも段を持ち奥石障と同タイプであり、削り込みの深さに差は無い。従って表面の剥落が少なく保存状況の良い 1 段の左石障、2 段の奥石障表面を計測した。左石障は 2.8cm、奥石障は 2.6cm の深さがある。

大戸鼻北古墳

奥、左右の石障上部には削り込みが認められない。そこで保存状態は良くないが手前石障の削り込みを計測する。入出の影響か剥落箇所が認められるが、奥石障に向かって右側は 4.3cm、左側は 4.1cm の深さがある。

小田良古墳

装飾古墳レプリカでの計測である。前障のみで段を持ち、12.9cm の深さがある。

田川内 1 号墳

大戸鼻北古墳、小田良古墳と同じ手前石障を計測した。42.5cm の深さがある。

広浦古墳

熊本県立美術館にある第一石 (濟々覺第一石) を計測した。わずかな削り込みながら 5 mm の浅い段差を確認している。同様に京都大学総合博物館が所蔵する第三石 (維和村第一石) でも、深さ 6 mm の削り込みを確認した。従って、保管されている広浦古墳の部材に限って石障と判断する。

なお、第一石には太刀の浮彫があるが、この浮彫に切られるように線刻が一本新たに検出できた。太刀を下げる意匠とも取れる。浮彫、線刻の併用による装飾という点を注意しておきたい。

五反田古墳

本資料は何れも削り込みを持つが、A、C は小さな部材であることから仕切り石の可能性もある。故に C の削り込みの深さは参考データとして提示する。1.6cm の深さがある。A、B でも削り込みはあるが、屋敷内の祠が遮っており計測できない。

(6) 考察

以上、①表面観察、帯磁率計を用いた石材の判定②真弧を使った石材表面の形状「うねり」の記録と模式図の作成③真弧を使った石障削り込みの形状記録、これら 3 つの調査結果に基づいて考察する。

①小鼠蔵 1 号墳 (図 6・9・10・18・27)

本古墳は横穴式石室として理解され、石障系石室の初見として理解されている (高木 1994)。高さ 1.2

mという、東側の開口部が横穴石室の入口とされている。更に積石に用いられた石材から薄片を作成し、水俣産出の安山岩が使われているとして注目されてきた。この結果から地下式板石積石室墓との関連が示唆されているが、一方で箱式石棺からの系譜という意見も出されている（甲元 1986、蔵富士 1997）。今回の調査ではこれら先行研究を踏まえ、石材の再調査と箱式石棺との関連を見ることとした。

まず、石材については報告された内容をほぼ追認する結果となった。帯磁率計の測定により若干の修正が加わったが、概ね変更点は無い。石材不明の部材が使われていることが判明したが、この石材は纏まりを持って使用されておらず積石の充填に使われた感が強く全体的に数も少ない。或いは小鼠蔵周辺の地元石材かもしれない。水俣産とされた安山岩については本研究の主目的が砂岩であるため検討を加えていないが、砂岩を補完する石材としては、上天草周辺でも安山岩 or デイサイトなどの石材が産出している。特に飛岳石は文化財石材としての使用例もあり鑑定を再度依頼するほか、「なぜ水俣産が使われるのか」という点を考古側から再度検討する必要があると思われる。

なお千崎9号墳、同26号墳で検出された安山岩 or デイサイトとは帯磁率が異なり別石材と見られるが、柴尾山産のデイサイト等との関連もなお考慮に入れる必要があるだろう。重盛山古墳、小田良古墳等の安山岩を用いた石材にも注意を要する。小鼠蔵1号墳での積石の安山岩の分布範囲は概ね石障の上部に砂岩と互層で積まれている。この互層の関係が周囲を巡っており、入口側とされる東側開口部でも状況は同じである。開口部付近には入口施設と積極的に評価できる部材は無い。うねり模式図を見ると、うねり最大幅が0.3cmより大きい部材は南北の箱式石棺長側石、東西方向の石障となる。また、うねり最大幅が0.3cm以下の比較的丁寧な部材は直交する南北方向の石障と西側小口石である。つまり、横方向から入る際的设计というより、上位から見た際に意味のある設計と考えられる。

小鼠蔵1号墳の箱式石棺だけを見ると、東側の小口石が無い。西側の小口石は、精緻な加工により長側石に削り込まれているが、削り込みの痕跡のない東側は石障が小口石の一部として機能することが考えられる。とすると、うねり最大幅 Ave0.64 / Max0.9 という小口石が想定できる（表5）。長側石と一方の小口石のうねり幅が大きく、小口石の1面側だけが相対的に丁寧な仕上げになる箱式石棺には、小鼠蔵3号墳、千崎8号墳、千崎9号墳があり、東側石障は箱式石棺の一部として利用した可能性のある部材ということになる。

また石障の関係だけを見ると、H字形になる組み合わせは先行研究で指摘されているように箱式石棺の組み合わせに酷似する。長側石に相当する南北の石障は、小口石に相当する東西方向の石障よりうねり最大幅が0.2～0.18と小さい。小鼠蔵3号墳等とは設計が異なるが、千崎15号墳では長側石の加工が小口石より丁寧な部材が用いられている。15号墳の長側石のうねり最大幅の平均値は0.15、0.15、0.18、0.4となり、小口石の0.3、0.73より丁寧な印象を受ける。長側石に小口石の加工に勝る丁寧な部材を用いる箱式石棺には、千崎13号、26号が該当する。

これらのことから小鼠蔵1号墳には、箱式石棺の構築技術のみならず、石棺の部材の選択眼をも含まれていることが理解できる。更に後続する石障系の石室は石障上部に削り込みを持つが、小鼠蔵1号墳は皆無である他、江上敏勝の紹介する写真(245頁)からも成合津2号墳のような天井石の外れた竪穴石室と見られる。以上のことから、石障が採用された小鼠蔵1号墳は、八代海周辺の箱式石棺構築技術と石材利用をそのまま用いた竪穴式石室として捉え、乙益重隆（乙益 1979）の分類に倣いたい。

②広浦古墳（図6・9・13・27）

本古墳は長らく箱式石棺の部材として理解されてきた（浜田 1918）。今回、第一石、第三石に5～6mmの削り込みが見つかったことで、石障としての可能性が出てきた。そこで石障と仮定した場合、どのような組み合わせになるのかについて検討する。第三石の京都大学総合博物館資料は、上下の石障の端部が残っている。また、第一石と同様に、層理割れが入り、装飾文様がその層理割れを切っている。このことから、未計

測の第三石も、第一石と同様な、うねり幅が大きな部材と理解できる。恐らくうねり最大幅は、0.3cmを超える。このような層理割れを切って装飾が施された事例には、小鼠蔵3号墳が挙げられる。小鼠蔵3号墳の長側石は、うねり最大幅の平均値は、0.46、0.32と、広浦古墳第一石のそれと近い。一方、部材の少ない第二石は大きく割られており、本来のうねりの形状は検証できないが、うねり最大幅の平均値は0.25という比較的平滑な部材である。

広浦古墳の削り込みの深さは大鼠蔵尾張宮古墳の2.8cm、2.6cm、大戸鼻北古墳の4.1cm、4.3cmと比べてもかなり浅い。石障を持つ小鼠蔵1号墳に削り込みが無いことを踏まえるならば、小鼠蔵1号墳に後続し、大鼠蔵尾張宮古墳に先行する石障という仮説を提示したい。

先に述べたように、小鼠蔵1号墳の石障は、箱式石棺の石材選択の感覚そのままに用いられている。長側石、或いは小口石どちらかでうねり最大幅が大きい部材を使用した場合は、もう一方の部材はうねり最大幅のより小さな部材を使うという利用方法である。広浦古墳の第一石、第三石のうねり最大幅が、他の古墳の石障に比べても大きい値に収まることを考えると、これ以上うねり最大幅のある部材が使われたとは考えにくい。そうすると、層理を超えて装飾を施すという共通性のある小鼠蔵3号墳の長側石と同程度の部材と理解できる。

小鼠蔵1号墳における箱式石棺構築技術を基盤とした石障構築技術が継承されていると仮定すれば、第一石、第三石は、左右どちらかの石障と考えることができる。第二石のうねり最大幅はあくまで参考値であり第二石が奥石障という根拠は無いが、第一石、第三石よりも細かな仕上げである。第二石と同程度の仕上げ加工の石材が奥石障に用いられることはまず間違いないだろう。

また第一石では浮彫の他、細い線刻が見つかった。このことから、初期の装飾文様が小鼠蔵1号墳のような細い線刻から、小田良古墳のような浮彫へと装飾技法が変化する折衷とも取れる。

以上の考察を踏まえ、広浦古墳の石障は、小鼠蔵3号墳の組み合わせに酷似した石材の利用を想定し、復元模式図を提示する。(図9)

③石棺・石障の相関関係と変遷(図9)

ここでは模式図で用いたうねりの凡例から、うねり最大幅が0.1cm以下の部材を「整形石材」とする。また「整形石材」とうねり最大幅0.3cm以下の部材を合わせて「滑面石材」、0.3cmより大きなうねり最大幅をもつ部材を「粗面石材」とする。模式図作成で用いたうねり最大幅の平均値ではなく、「最大値」が呼称する定義の条件となる。平均値上では平らであっても、数カ所の凹凸があれば観察上滑面とは言い難いため、最大値で定める。

分析した箱式石棺では小口石、長側石の石材選択において、仕上げる石材の用い方に特徴があることが判明した。各々のうねり最大幅は異なるが、概ね0.3cm以下の「滑面」を持つ部材が小口石、長側石の何れかに用いられる。うねり最大幅の平均値が0.1cm以下の「整形石材」は、小鼠蔵3号墳小口石や千崎26号墳長側石に見られる。

小口石の石材に「滑面石材」を用いる石棺は小鼠蔵3号墳、千崎8号墳、千崎9号墳が挙げられる。長側石側に「滑面石材」を用いる石棺は千崎13号墳、千崎15号墳がある。千崎26号墳は全て安山岩 or デイサイト製であるが、この長側石の整形を重視するグループに含まれる可能性が高い。

また分析対象の石棺では、小口石を観察すると2石あるうちの一方が、最も精緻な仕上げであることが判る。模式図ではより丁寧な整形を施した側の石材を上に表示した。長側石にもっとも精緻な石材を用いる千崎13号墳、千崎15号墳でも小口石の一方は丁寧な仕上がりである。

唯一小口石、長側石のすべてに「滑面石材」を用いている石棺が千崎22号墳である。副室構造を持つ特異な構造であるが、丁寧な仕上げの石材を用いるという点に限れば大鼠蔵尾張宮古墳や大戸鼻北古墳の石障

を持つ石室に近い。

一方、石障における「滑面石材」でも、0.1cm以下の「整形石材」が用いられる場合がある。小鼠蔵1号墳、大鼠蔵尾張宮古墳、小田良古墳の石障では「整形石材」こそ見られないが、それでも相対的に丁寧な仕上げで0.3cm以下の「滑面石材」が用いられる。このひとつの石障のなかで相対的に丁寧な「滑面石材」、或いはうねり最大幅0.1cm以下の「整形石材」の使用される場所に注目すると、正対する二枚の石障に「滑面石材」を用いる小鼠蔵1号墳と、奥・左・右の石障に「整形石材」或いは「滑面石材」を用いる大鼠蔵尾張宮古墳、大戸鼻北古墳、小田良古墳とに分けられる。またこの3つの古墳は、手前側の石障に何れも「粗面石材」が使用されるという共通点もある。そしてこの関係が逆転し、手前石材の内外面ともに「整形石材」が採用されるのが田川内1号墳である。もっとも丁寧な仕上げの部材を入口側に設ける「祭のための仕上げ」であろうか。この石障における「滑面石材」或いは「整形石材」の使用の変化を踏まえ、石障上部の削り込みの深さを一つの変遷過程としてとらえ乙益重隆の分類（乙益 1979）にあてはめると、小鼠蔵1号墳（竪穴系肥後型）→大鼠蔵尾張宮→大戸鼻北→小田良（半地下系肥後型）→田川内1号墳（肥後型石室）というグループと変遷が想定できる。

先に述べた広浦古墳の模式図では、小鼠蔵3号墳の箱式石棺と同じ石材利用を想定していることから、箱式石棺と類似した滑面石材を用いる小鼠蔵1号墳と同じグループに含まれると見られる。但し、石障上部に削り込みが存在することから小鼠蔵1号墳より後出と考えたい。

五反田古墳の削り込みデータは仕切り石部分の可能性があり、門前2号墳の削り込みは磨滅が激しく判然としない。また門前2号墳の現存する石障は側面部と見られ、条件が異なるため比較検討する根拠に乏しい。五反田古墳の場合は削り込みが浅く「整形石材」に近い「滑面石材」が見られるが、現存するものは手前側石障とは考えにくいことから、大鼠蔵尾張宮古墳や大戸鼻北古墳と同じ段階の所産と考えたい。門前古墳は表面にチョウナ等の工具痕が残り、側面の石障と考えられることから、小田良古墳や田川内1号墳に近い段階のものとする。

次に竹島3号墳について触れる。竹島古墳内の箱式石棺では「整形石材」が長側石に用いられるが、左石棺では小口石の両方ともに「粗面石材」を用いている。また「滑面石材」は右石棺の入口側に設けられている。他の箱式石棺での小口石と長側石との利用関係が異なる。また石障を持つ石室に「整形石材」が側面に用いられる事例は四方の石障すべてが整形石材である大戸鼻北古墳のみであり、他には事例が無く共通点が見いだせない。故に他の影響下のもとに造られたものであり、「整形石材」を造り出す技術は持つが、使用方法が異なる点で系統が異なるものとして理解したい。

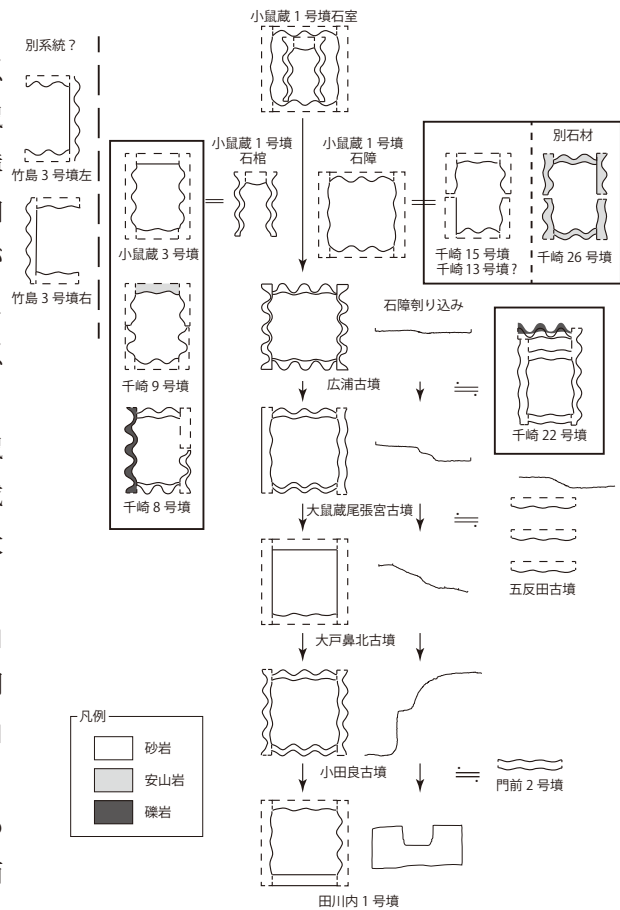


図9 石棺・石障うねり相関・変遷図

(7) まとめ—砂岩製埋葬施設の石材利用—

砂岩製埋葬施設のある八代海沿岸のなかでも、対象とした石棺・石障のある周辺の地域は、決して恵まれた石材採取地では無い。これは近現代の石垣にイワノイシ、飛岳石、合津石が交互に組み合わさっている補完状況から想定できる。板状の礫面を一面に残し、海蝕痕がある箱式石棺の部材が千崎8号墳、千崎9号墳、田川内1号墳等で存在するため、よほど条件の良い海岸部の露頭で表層を掘って採取したと見られる。しかし、その脆さは理解されていたと考えられ周辺の部材である礫岩や安山岩を補完的に使っている。これは現在でも同様で、昭和30年代、維和島周辺の粗粒砂岩（イワノイシ）はナガラヤスイため、間知石の出荷は公共工事では禁止されていたという状況と酷似する。

それでも、補完的な石材（礫岩や安山岩）を主たる部材として用いず耐久性の低い砂岩を主に用いる理由としては、本調査で明らかとなった「整形石材」「滑面石材」の使用、確保という意志が優先された結果とみられる。軟岩である砂岩は、斧状の工具で盤上に削り出すことが可能である。礫岩では0.1cm以下の整形石材を得ることは難しく、安山岩は比較的硬岩であるため、石障のように板状の整形ができず自然の節理割れである半球面レンズ状剥離による板状石材を利用するほか無い。恐らく礫岩では整形石材は不可能であるためすべて礫岩で造られた箱式石棺は存在しないのではないだろうか。初期の採取では剥片剥離で採れても、意図した時間内に意図した場所へ設置ができなければならない制約があるならば、砂岩のみを用いることは理解できる。積石には「整形石材」「滑面石材」を用いる「要求」「規制」は無いため、異なる部材が用いられるし、箱式石棺でも「粗面石材」でよい場所には礫岩が使われる。しかし、多方向に滑面石材が要求されるような石障を持つ石室では石障に他の石材が使われ難い。唯一、同じ軟岩である阿蘇溶結凝灰岩がそれをクリアできる。それが凝灰岩製の石障を持つ長砂連古墳がこの地域にある理由と捉えておきたい。長砂連古墳の一面は馬門石製であるが、赤味の強い馬門石は細工物には向かない石材として現代の専門石工からは敬遠される。千金甲1号墳、井寺古墳、長砂連古墳では赤味の強い馬門石は用いられていても主要な装飾を施し、尚且つ左右の石障では見られないことは注意する必要がある。粗い面を設けて良い場所であれば赤い馬門石や礫岩が使われる。本稿では触れられなかったが、凝灰岩と砂岩製石障の変遷過程、特に小田良古墳と千金甲1号墳の石障の共通点、相違点は再度検証が必要である。本論は主体部である石棺と石障にのみ注目し分析を行った。積石の問題、阿蘇溶結凝灰岩における「粗面」「滑面」の調査は今後の課題としたい。

最後に、調査対象とした箱式石棺、石障を持つ初期横穴式石室の時期について触れる。何れの古墳でも時期を決定する根拠に欠けるが、千崎古墳群を石障系石室に先行させる考え方（森2005）には、箱式石棺と石障の相関関係からみて妥当と判断できる。石障の成立についてはやはり当該地域の箱式石棺からの系譜が無視できない関連性を持っていることを根拠に考えるが、大蔵蔵尾張宮古墳、大戸鼻北古墳、小田良古墳では、既に石障独自の変化が見られる。また、小鼠蔵1号墳、広浦古墳のような石障の設置から、大蔵蔵尾張宮古墳、大戸鼻北古墳、小田良古墳の石障の設置に至る過程までは、千崎古墳での箱式石棺の技術を引き継いでいることから時間的にそれほど離れていない頃に成立したと考えている。従って、千崎古墳群、小鼠蔵1号墳、小鼠蔵3号墳、そして広浦古墳を、概ね4世紀後半～5世紀前半、大蔵蔵尾張宮古墳、大戸鼻北古墳、小田良古墳を続く5世紀前半～後半での変遷過程と捉え、出土遺物として帯金式甲冑が出ており、横穴式石室の思想を色濃く出す田川内1号墳まで5世紀内に含むものと捉えておく。

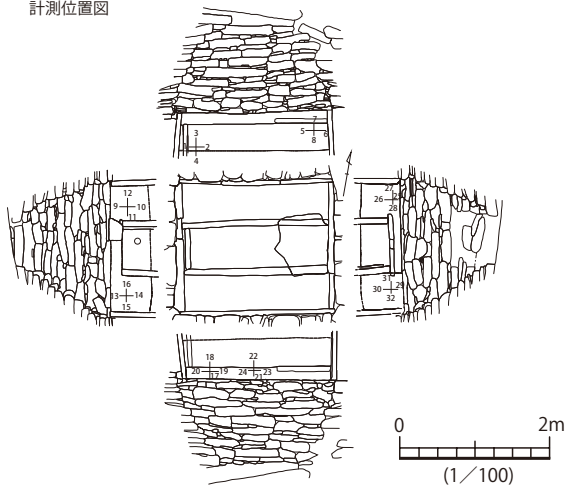
引用・参考文献

- 池田朋生 2013「天草産出の砂岩を対象とした文化財石材の研究」高橋信武退職記念論集 :pp.159-172
- 池田朋生他 2011「装飾古墳に用いられた砂岩の研究」日本文化財科学会第28回大会
- 池田朋生他 2015「帯磁率計を用いた古墳使用石材の簡易判定」日本文化財科学会第32回大会
- 池田朋生他 2013「古墳時代の八代海沿岸における砂岩製埋葬施設の表面加工」日本文化財科学会第30回大会
- 池田朋生 2014a「京都大学総合博物館所蔵「装飾石材破片」について」熊本県立装飾古墳館研究紀要第10集 :pp.19-22
- 池田朋生 2014b「千金甲1号墳「最新技術でよみがえる九州装飾古墳のすべて」」池内克史編 東京書籍
- 池田朋生編 2006「阿蘇の灰石展解説図録」熊本県立装飾古墳館平成18年度前期企画展
- 池田朋生 2006「熊本県下の石工道具二例」熊本県立装飾古墳館研究紀要第6集 :pp.83-95
- 池田朋生 2007「古墳時代『阿蘇石』の加工技術について—灰石加工技術から見た『馬門石石切場跡』出土石片の観察—」大
王の棺を運ぶ実験航海(研究編) 石棺文化研究会 :pp.13-24
- 内田悦生 2011「石が語るアンコール遺跡—岩石学からみた世界遺産—」早稲田大学学術叢書12
- 江上敏勝 1976「42. 八代海の小島、大小鼠蔵島には古墳が群集した」ふるさと百話 八代の史話と伝説 :pp.141-142
- 小城祐樹・小松俊文・岩本忠剛・高嶋礼詩・高橋修・西弘嗣 2011「天草上島東部に分布する上部白亜紀系姫浦層群の層序と
詳細な地質年代」地質学雑誌第117巻第7号
- 乙益重隆 1979「石障系石室古墳の成立」『國學院大学院紀要』第十一輯 :pp.31-60
- 朽津信明・松倉公憲・池田朋生 2007「エコーチップ硬度試験による文化財石材の評価—熊本県下の装飾古墳の例—」県立装
飾古墳館研究紀要第7集(採録2007) :pp.1-5
- 朽津信明 2007「エコーチップ試験による文化財石材の硬さに関する研究」保存科学46
- 朽津信明 2003「岩石の定義と分類」文化財科学の事典 朝倉書店
- 朽津信明・三木隆行・山村信榮 2012「福岡藩に利用された花崗岩類石材の帯磁率について」日本文化財科学会第29回大会
研究発表要旨集
- 熊本大学文学部考古研究室 2005「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」考古学研究室第40集
- 熊本大学文学部考古研究室 2006「千崎古墳群第4次調査報告」考古学研究室第41集
- 熊本大学文学部考古研究室 2007「千崎古墳群第5次調査報告」考古学研究室第42集
- 熊本大学文学部考古研究室 2008「千崎古墳群第6次調査報告」考古学研究室第43集
- 蔵富士寛 1997「石屋形考—平入横口式石棺の出現とその意義—」先史学考古学論究Ⅱ 熊本大学考古学研究室創設25周年
記念論文集 龍田考古会 :pp.133-166
- 甲元眞之編 1986「宇土半島古墳群分布調査報告Ⅱ」三角町教育委員会
- 甲元眞之・杉井健 2007「上天草にしえの暮らしと古墳」上天草市史大矢野町編1原始・古代
- 小林行雄編 1964「装飾古墳」平凡社
- 狭川真一 2019「墓と石塔の考古学」資料集 狭川真一さん還暦記念会 :pp.36-37
- 篠原徹 1995「海と山の民俗自然誌」日本歴史民俗叢書 吉川弘文館
- 杉井健 2009「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題」八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制
の発達過程に関する基礎的研究 熊本大学文学部 :pp.231-238
- 染矢多喜男・段上達雄 1987「大分県の諸職」大分県諸職関係民俗文化財調査報告書
- 高木恭二 1999「横穴式石室の石材」九州前方後円墳研究会第2回研究会 :pp.695-706
- 高木恭二 1997「阿蘇石の利用—宇土半島の事例—」史叢創刊号 熊本歴史学研究会
- 高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」宮嶋クリエイト第6号 :pp.109-132
- 高木恭二 1983「石棺輸送論」九州考古学第58号 :pp.42-54
- 高木正文編 1984「熊本県装飾古墳総合調査報告書」熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会
- 濱田耕作・梅原末治 1916「肥後に於ける装飾ある古墳及横穴」京都帝国大学考古学研究报告第一冊
- 濱田耕作・梅原末治・島田貞彦 1918「九州に於ける装飾ある古墳」京都帝国大学考古学研究报告第三冊
- 原口長之 1985「石工」『熊本県の諸職』熊本県調査報告第72集 熊本県教育委員会 :pp.66-69
- 藤本貴仁・高木恭二 2006「轟貝塚・馬門石石切場跡」宇土市埋蔵文化財調査報告書第28集 宇土市教育委員会
- 間壁忠彦・間壁葎子 1996「石宝殿」神戸新聞総合出版センター
- 和田晴吾 1983「古墳時代の石工とその技術 北陸の考古学」石川考古学研究会々誌第26号

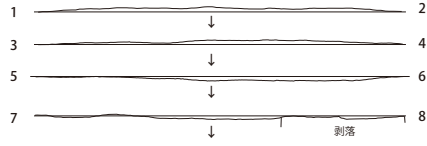
図表出典

図1：池田朋生2006より，図2・4～28：池田朋生作成，図3：熊本県地質図(10万分の1) 熊本県地質図編纂委員会編
表1：朽津他2007より，その他写真・表：池田朋生作成

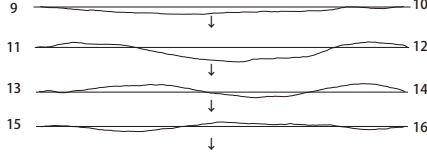
小鼠蔵1号墳(石障)
計測位置図



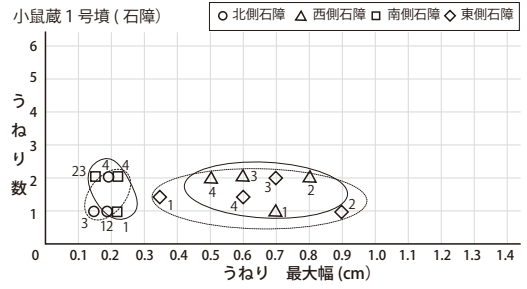
うねり図 北側石障(内側)



西側石障(内側)

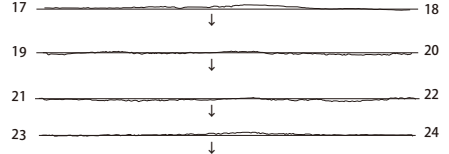


小鼠蔵1号墳(石障)



※グラフの数字は、グラフポイント (P253 からの一覧表) に対応。

南側石障(内側)



東側石障(内側)

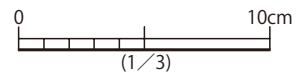
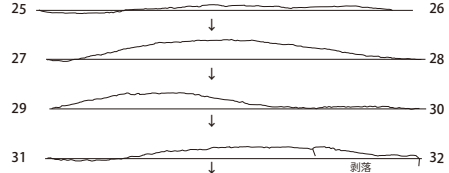
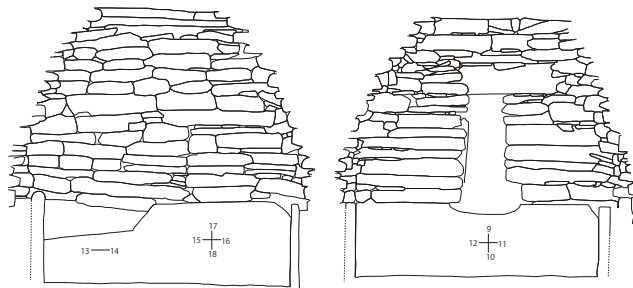
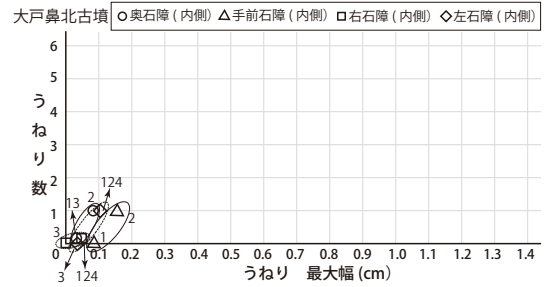


図 10 小鼠蔵1号墳(石障)

大戸鼻北古墳
計測位置図

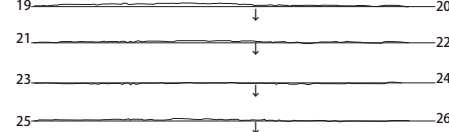


大戸鼻北古墳



うねり図

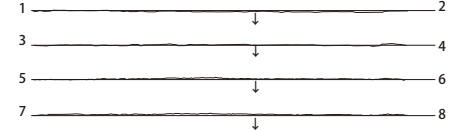
左石障(内側)



奥石障(内側)



右石障(内側)



手前石障(内側)

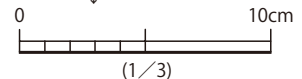
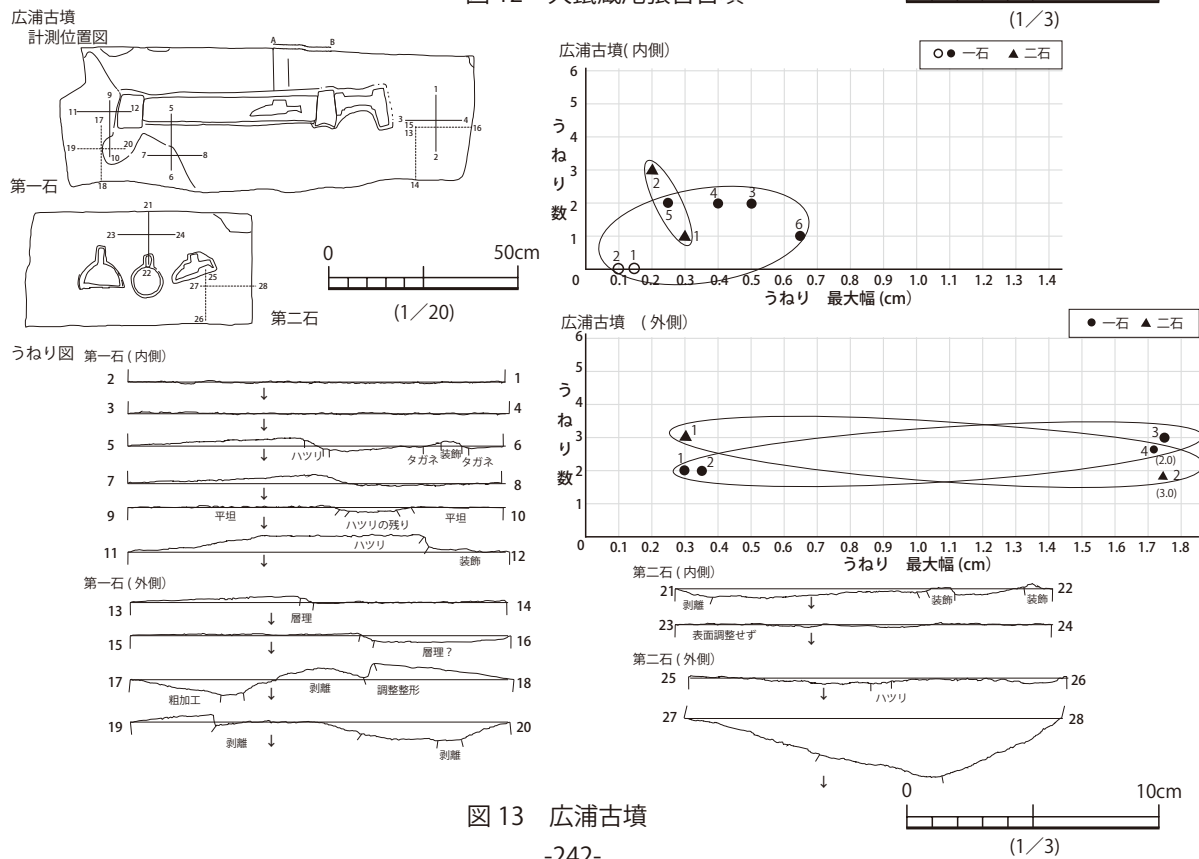
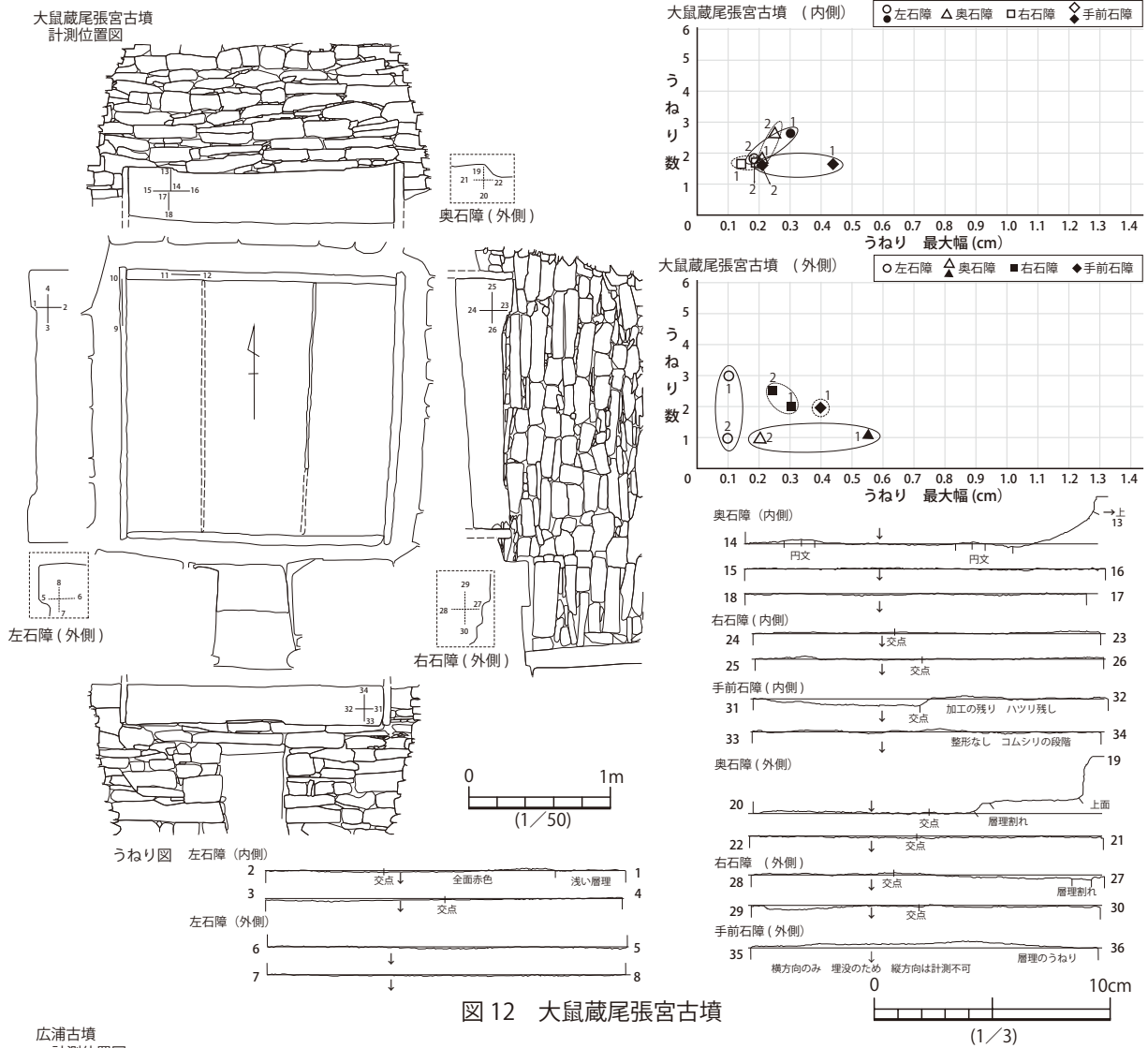
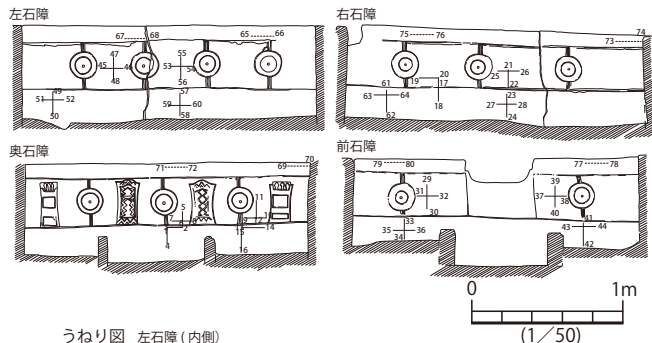


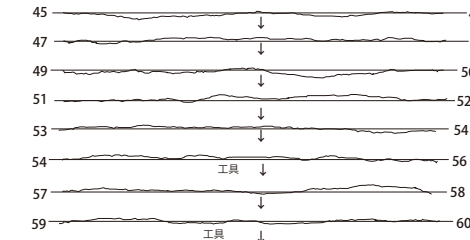
図 11 大戸鼻北古墳



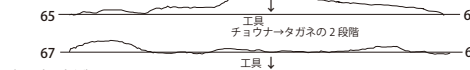
小田良古墳(石障) 計測位置図



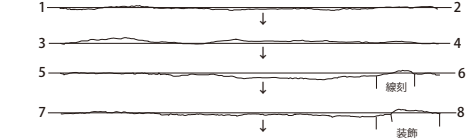
うねり図 左石障(内側)



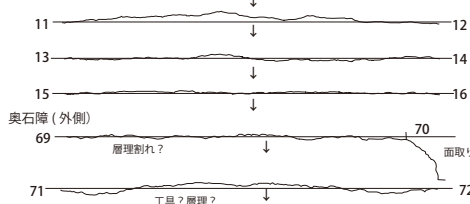
左石障(外側)



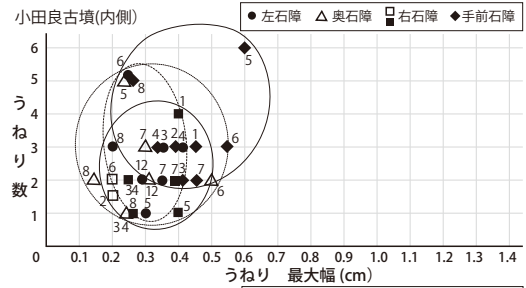
奥石障(内側)



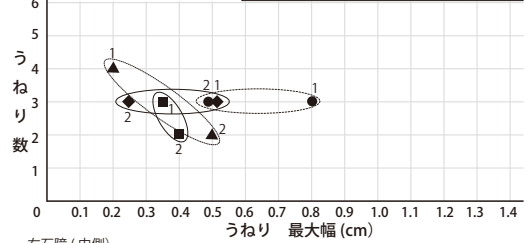
奥石障(外側)



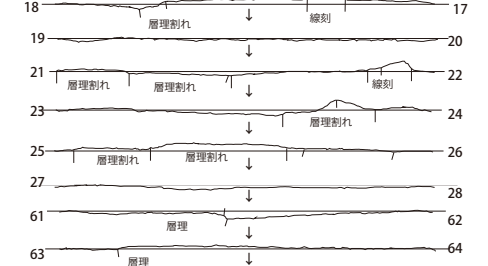
小田良古墳(内側)



小田良古墳(外側)



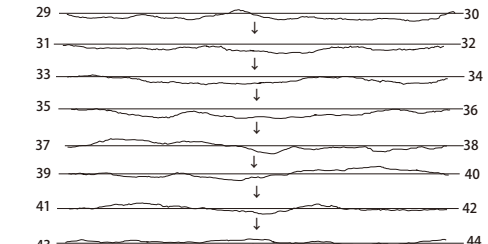
右石障(内側)



右石障(外側)



前石障(内側)



前石障(外側)

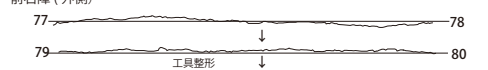
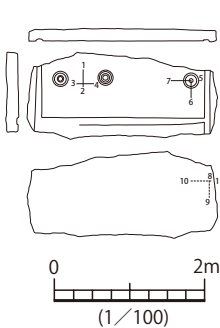
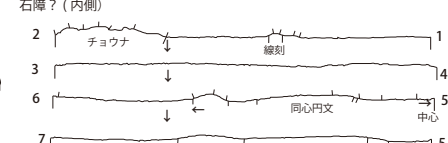


図 14 小田良古墳

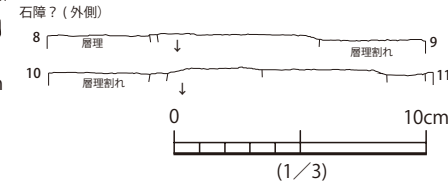
門前2号墳 計測位置図



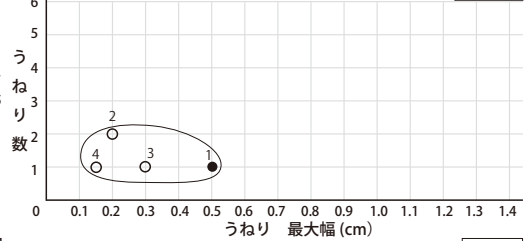
うねり図 石障?(内側)



石障?(外側)



門前2号墳(内側)



門前2号墳(外側)

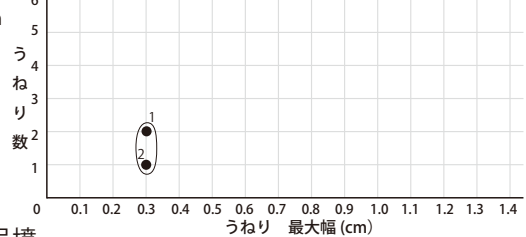
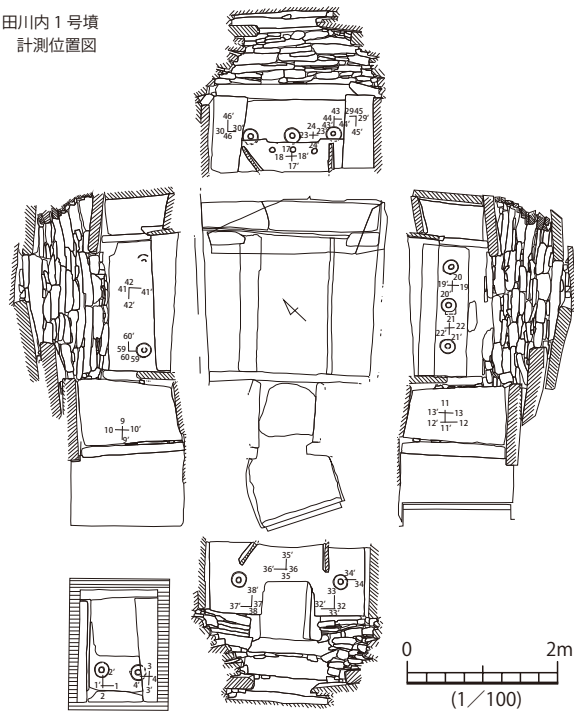
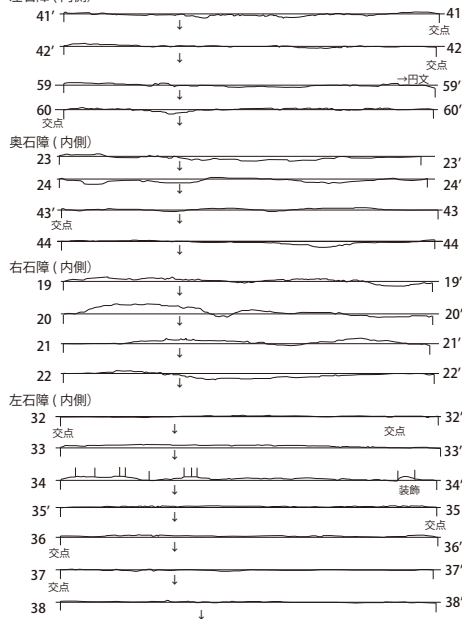


図 15 門前2号墳

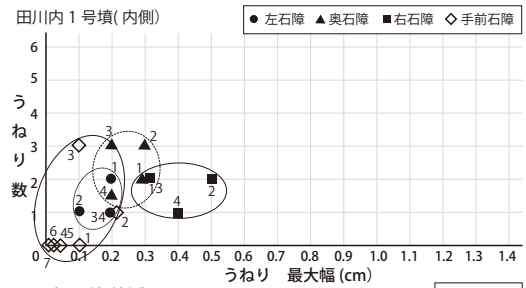
田川内1号墳
計測位置図



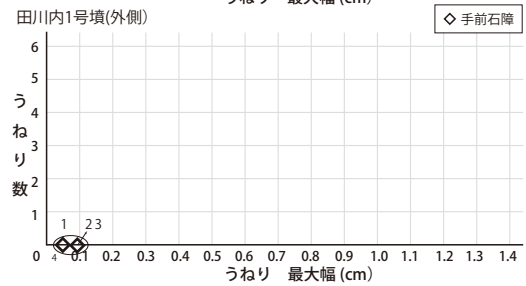
うねり図 左石障(内側)



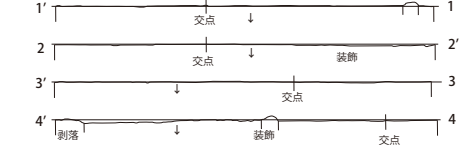
田川内1号墳(内側)



田川内1号墳(外側)



手前石障(外側)



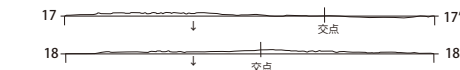
石屋形袖石(左側)



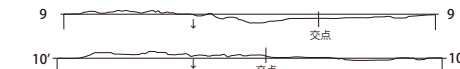
石屋形袖石(右側)



石屋形仕切石



前室左側石



前室右側石

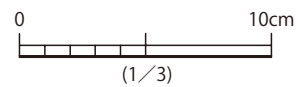
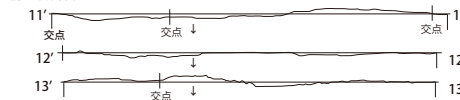
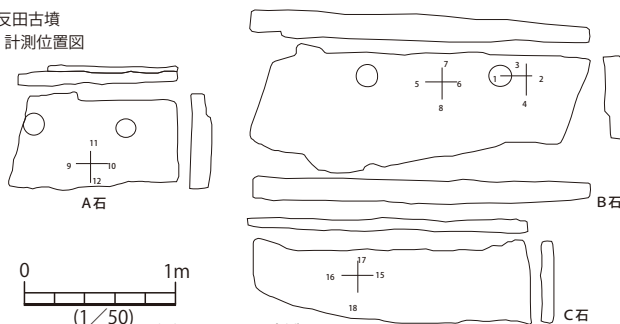
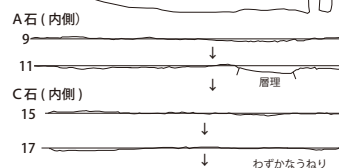


図16 田川内1号古墳

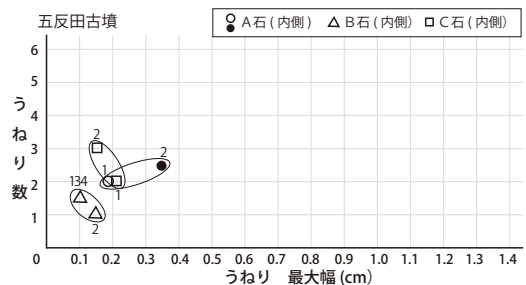
五反田古墳
計測位置図



うねり図



五反田古墳



B石(内側)

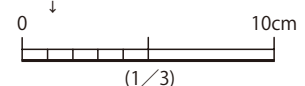
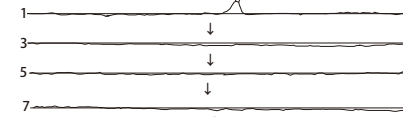
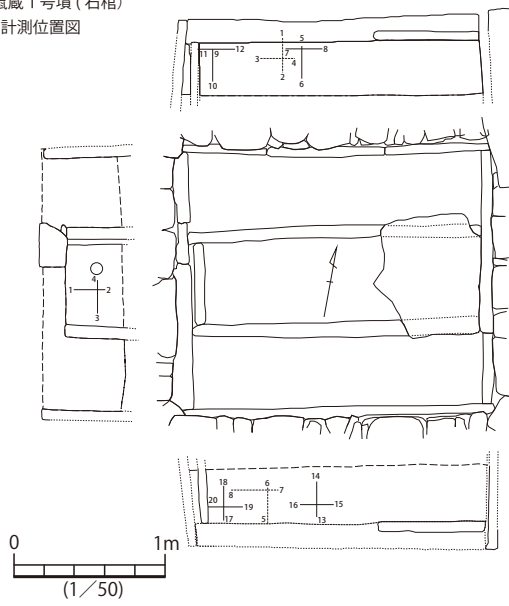


図17 五反田古墳

小鼠蔵1号墳(石棺)
計測位置図

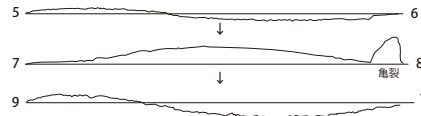


うねり図

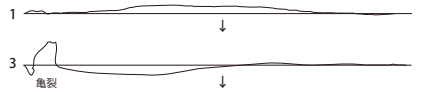
西側小口石(内側)



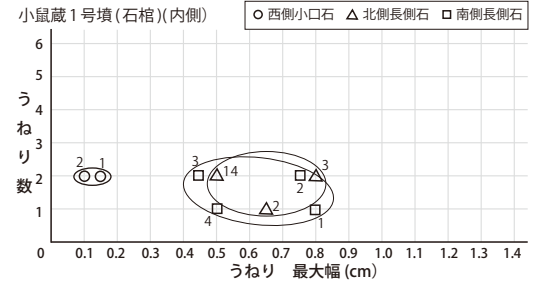
北側長側石(内側)



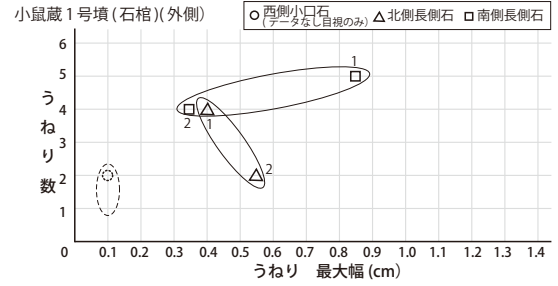
北側長側石(外側)



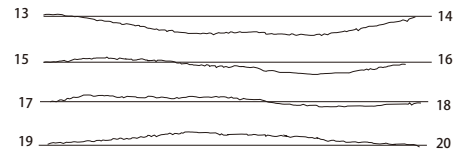
小鼠蔵1号墳(石棺)(内側)



小鼠蔵1号墳(石棺)(外側)



南側長側石(内側)



南側長側石(外側)

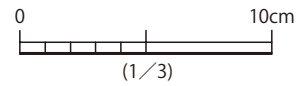
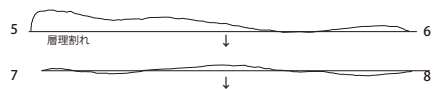
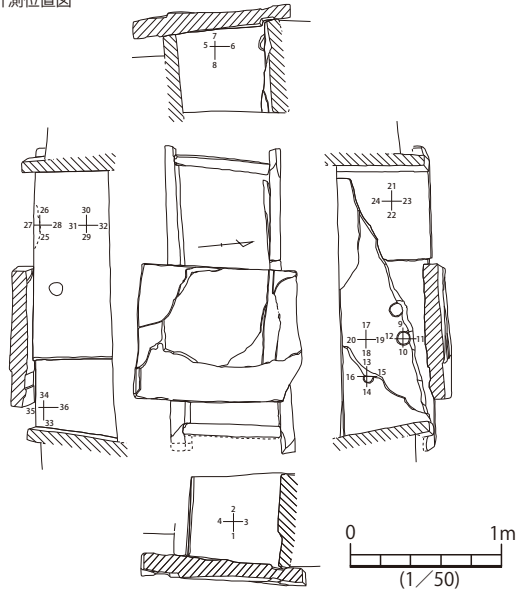


図18 小鼠蔵1号墳(石棺)



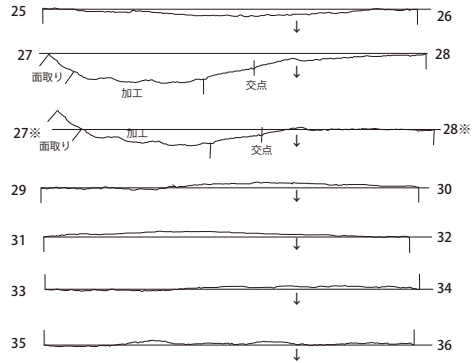
小鼠蔵1号墳(江上敏勝1976より引用)

小鼠蔵3号墳
計測位置図

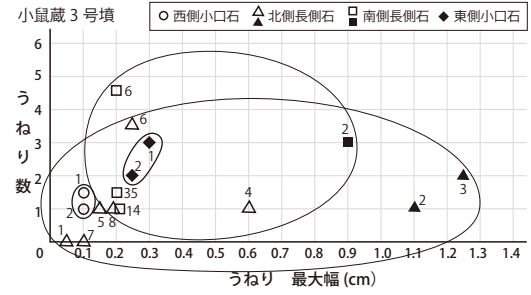


うねり図

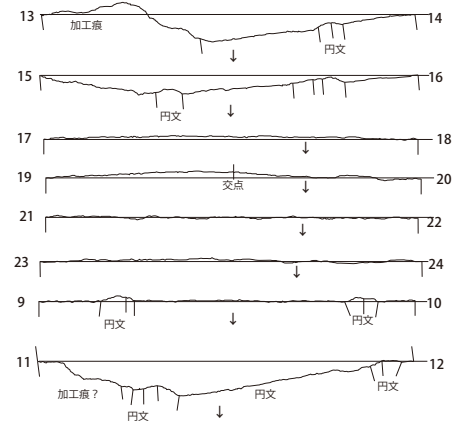
南側長側石 (内側)



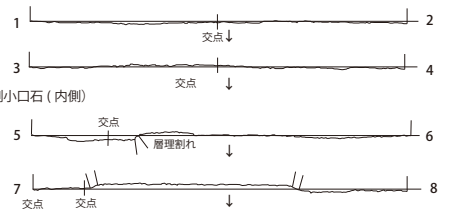
小鼠蔵3号墳



北側長側石 (内側)



東側小口石 (内側)



西側小口石 (内側)

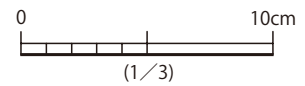
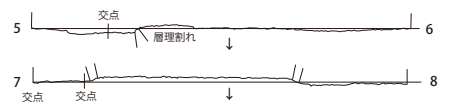


図19 小鼠蔵3号墳

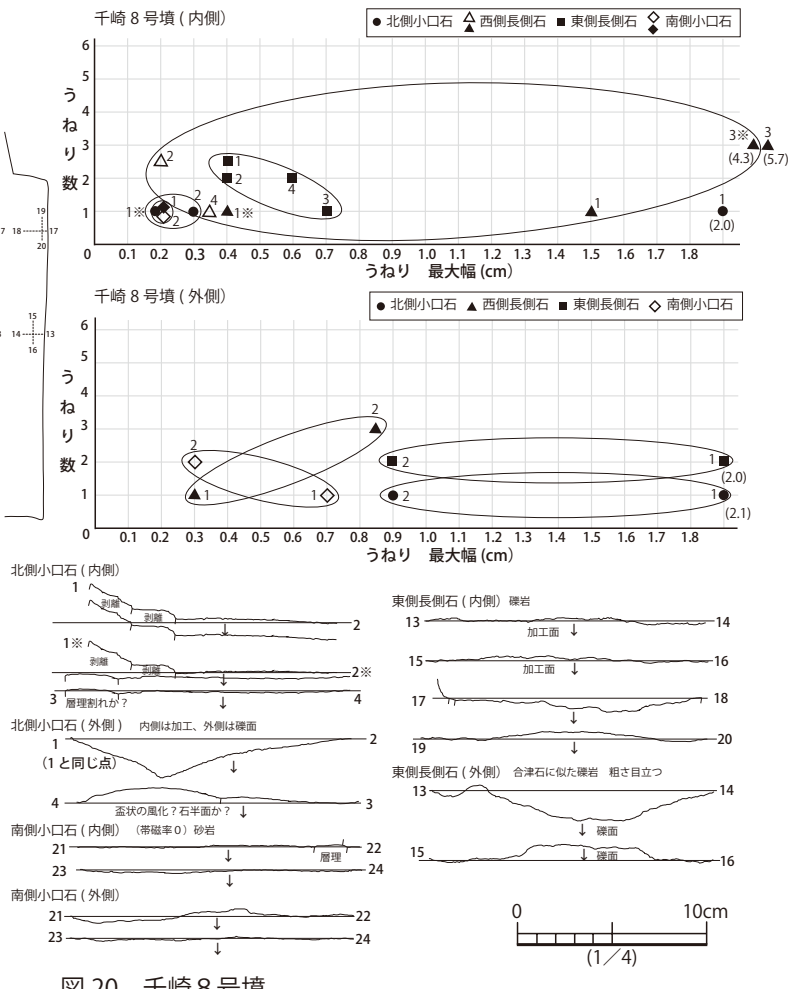
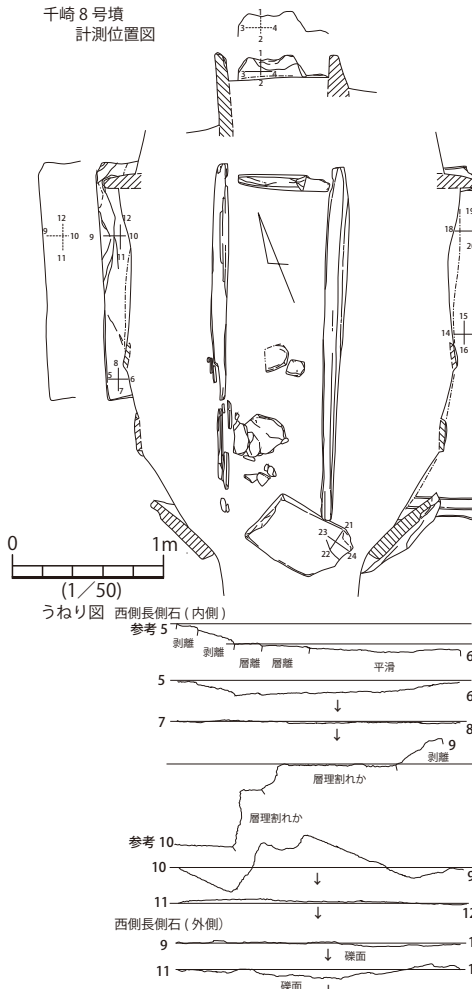


図20 千崎8号墳

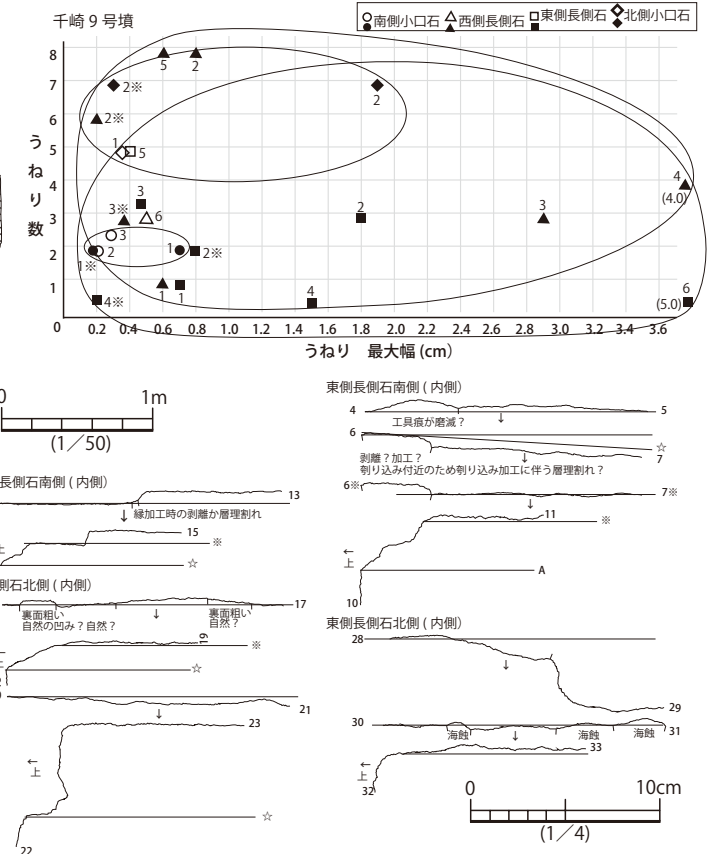
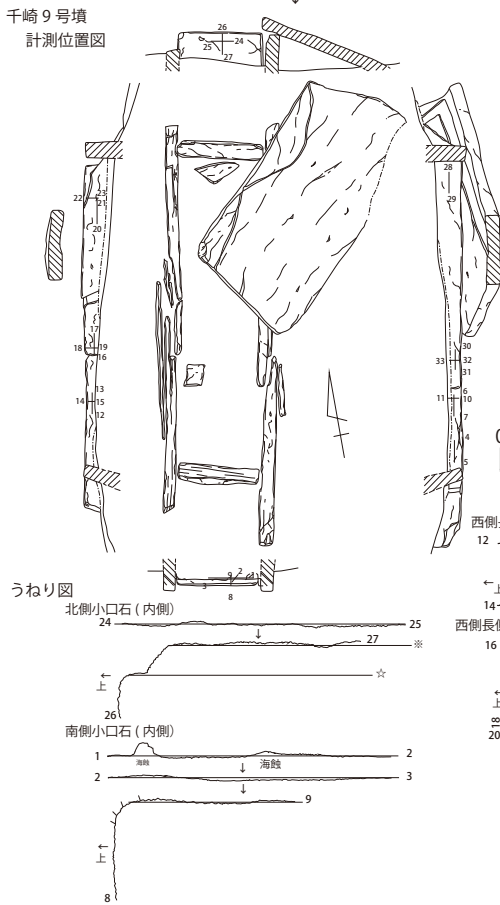
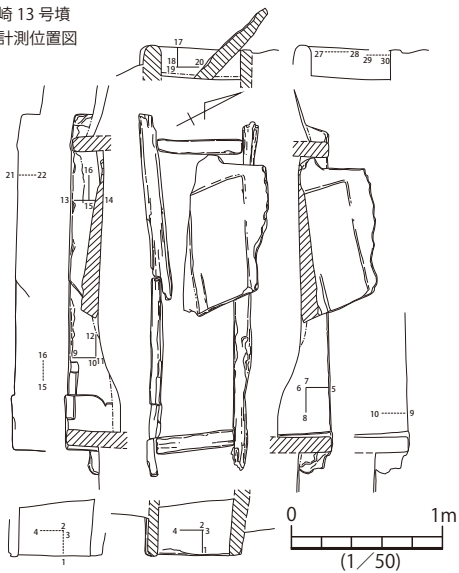
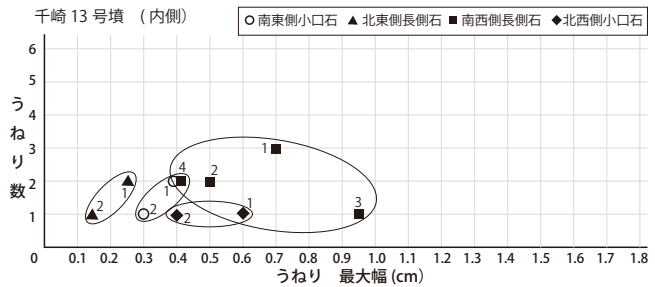


図21 千崎9号墳

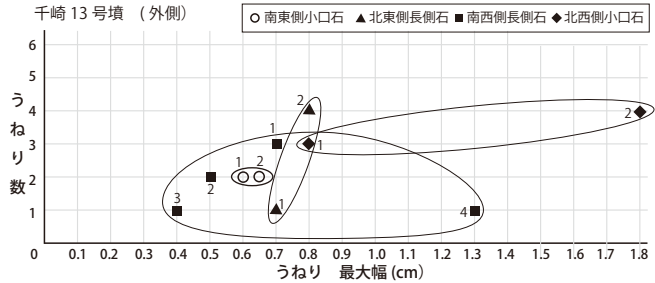
千崎 13号墳
計測位置図



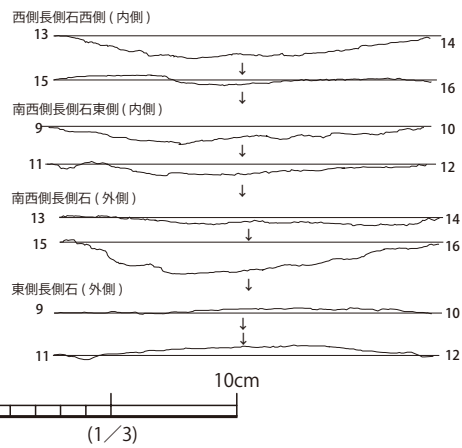
千崎 13号墳 (内側)



千崎 13号墳 (外側)



うねり図



北西側小口石 (内側)

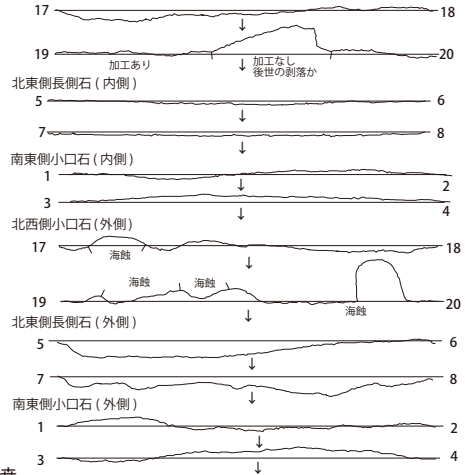
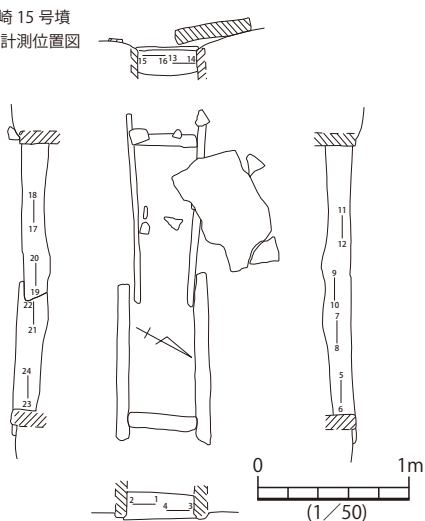
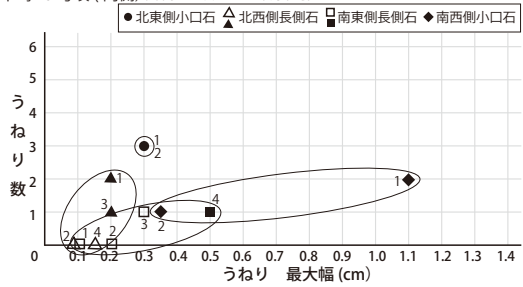


図 22 千崎 13号墳

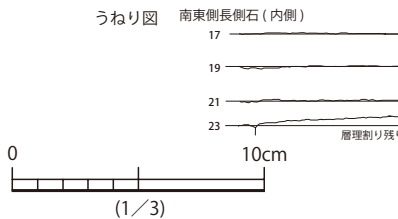
千崎 15号墳
計測位置図



千崎 15号墳 (内側) (外側は埋没のため計測不可)



うねり図



北東側小口石 (内側) いずれも外側は埋没しており計測不可
小口石はいずれも加工が粗い。長側石はいずれも加工が丁寧。

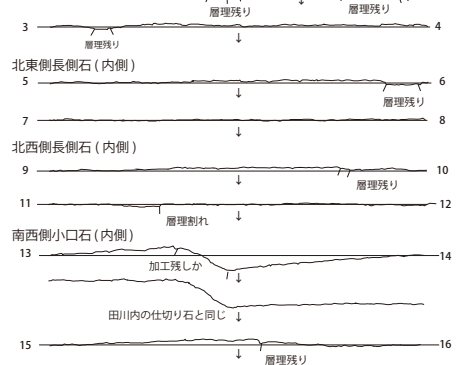


図 23 千崎 15号墳

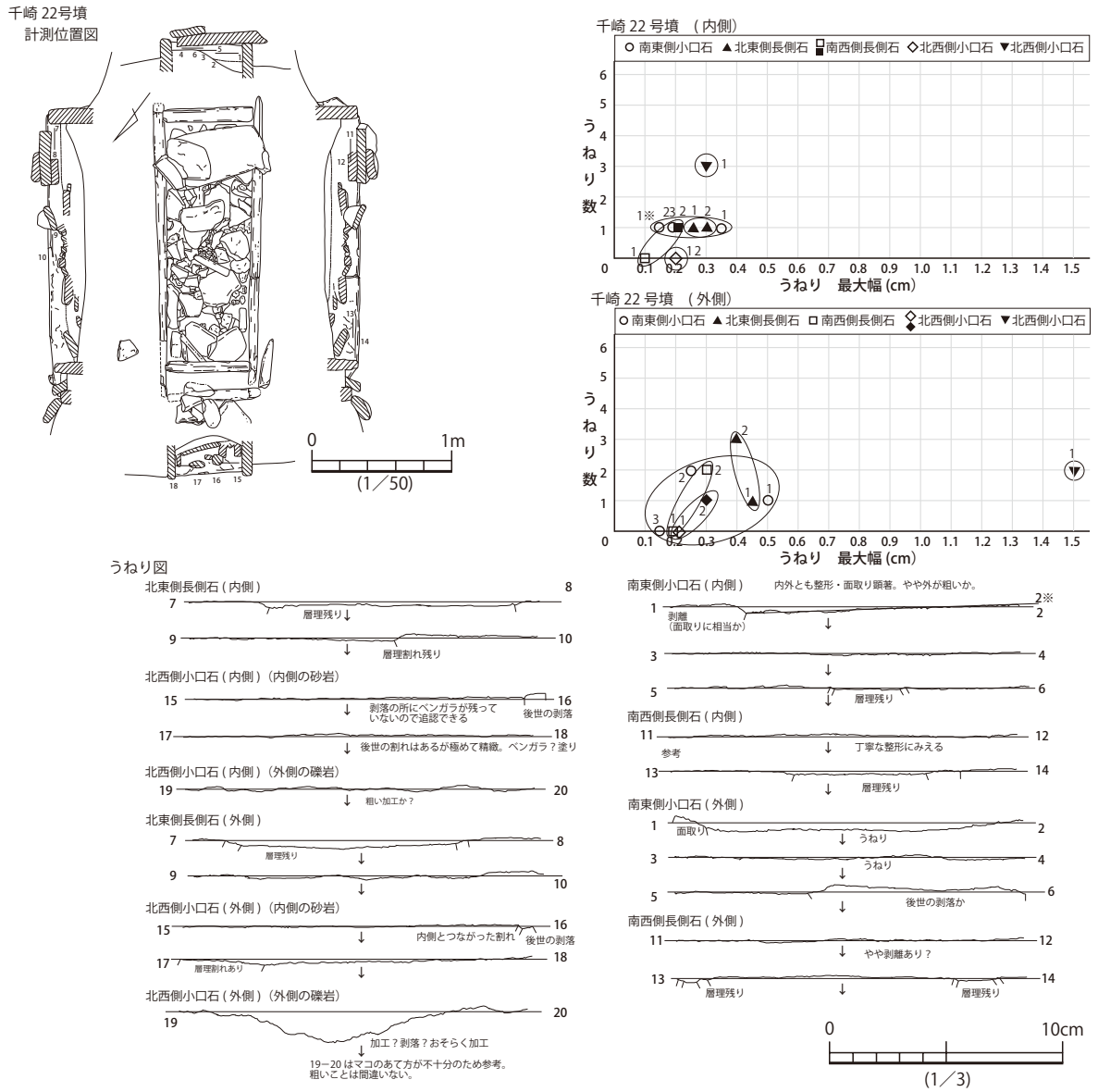


図 24 千崎 22号墳

第4章

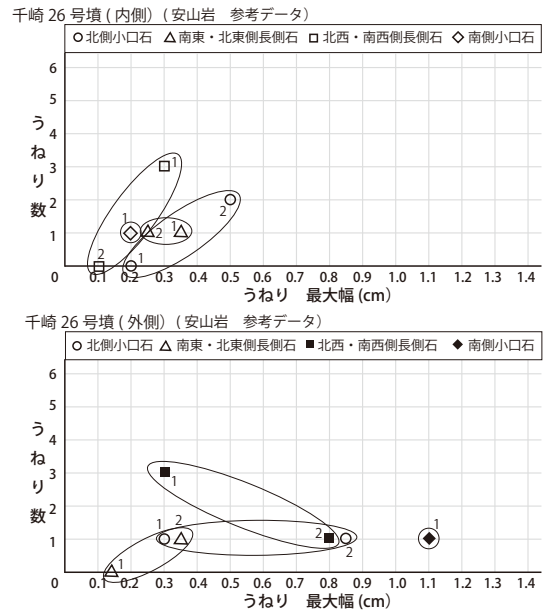
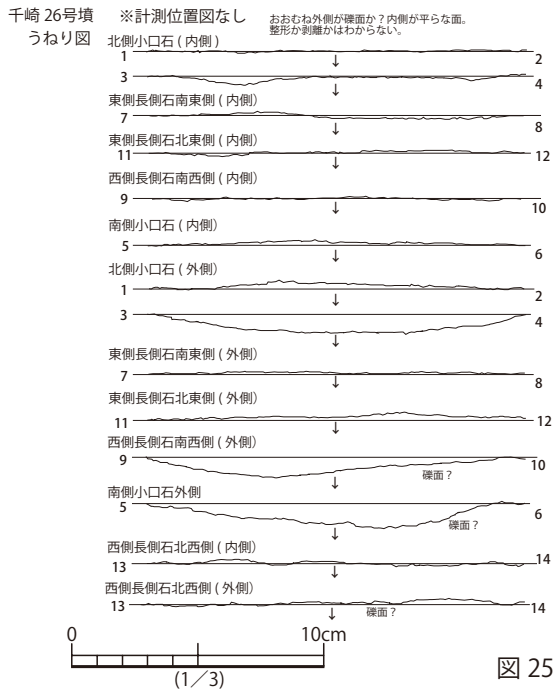
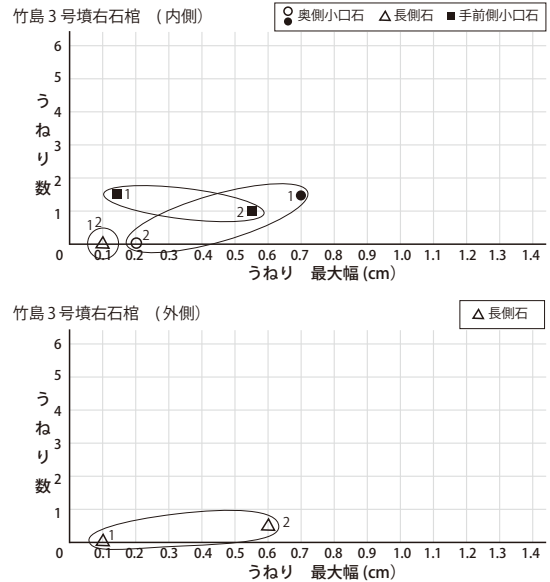
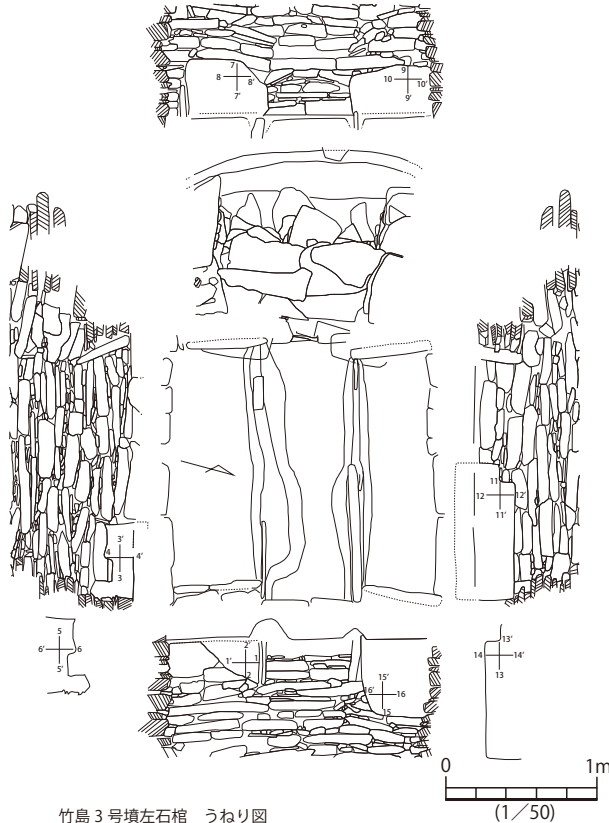


図25 千崎26号墳

竹島3号墳 計測位置図



竹島3号墳右石棺 うねり図

竹島3号墳左石棺 うねり図

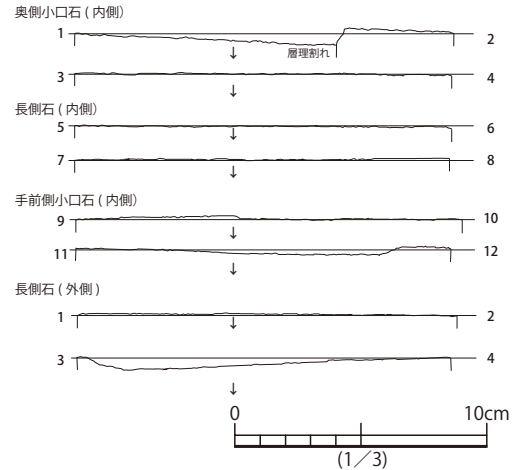
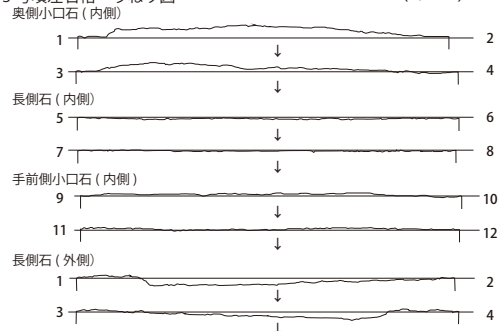


図26 竹島3号墳

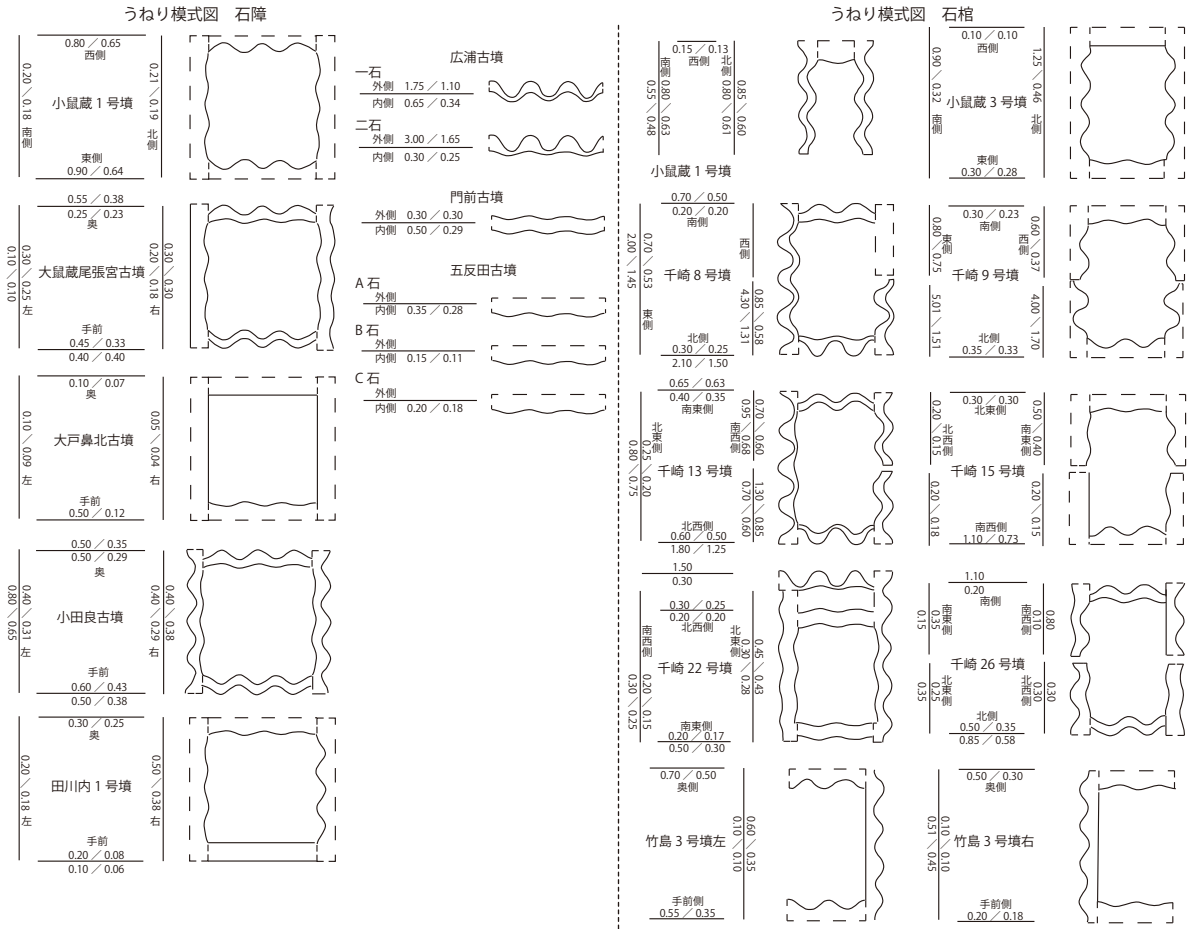


図27 うねり模式図(石障・石棺)

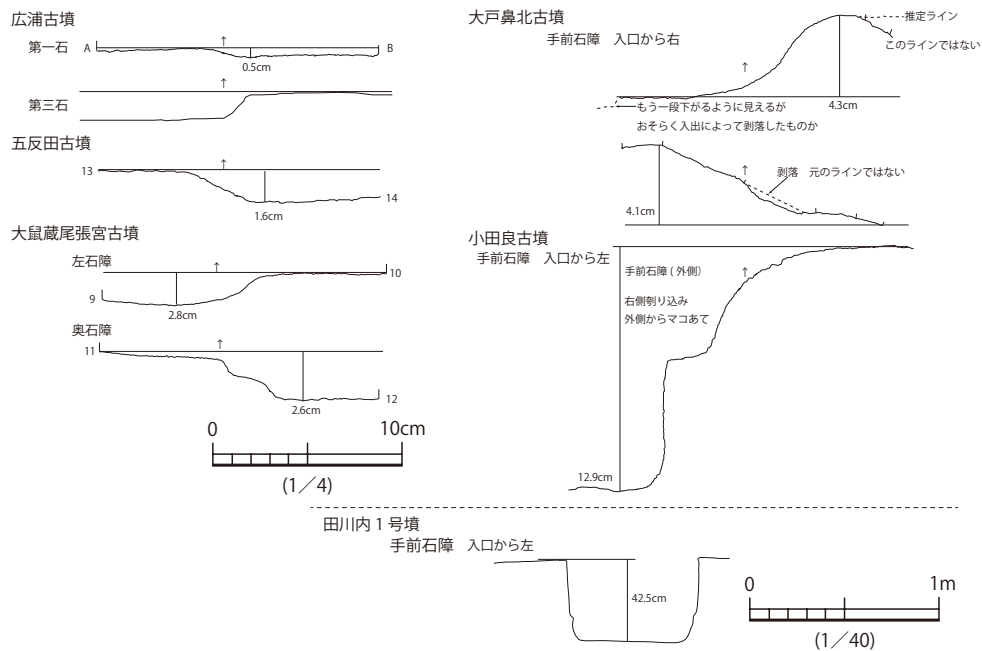


図28 割り込みうねり図

[表5 石障うねり観察表]
小鼠蔵1号墳(図10)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅(cm)				数	最大幅	
北側石障	1-2	1	0.20	-	-	○1	1.25	0.19	
	3-4	1	0.20	-	-	○2			
	5-6	1	0.15	-	-	○3			
	7-8	2	0.20	-	-	○4			
西側石障	9-10	1	0.70	-	-	△1	1.75	0.65	後世の剥落は計測から除く
	11-12	2	0.80	-	-	△2			
	13-14	2	0.60	-	-	△3			
	15-16	2	0.50	-	-	△4			
南側石障	17-18	1	0.20	-	-	□1	1.75	0.18	
	19-20	2	0.15	-	-	□2			
	21-22	2	0.15	-	-	□3			
	23-24	2	0.20	-	-	□4			
東側石障	25-26	1.5	0.35	-	-	◇1	1.50	0.64	
	27-28	1	0.90	-	-	◇2			
	29-30	2	0.70	-	-	◇3			
	31-32	1.5	0.60	-	-	◇4			

大戸鼻北古墳(図11)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅(cm)				数	最大幅	
左石障(内側)	19-20	1	0.10	-	-	○1	0.75	0.09	
	21-22	1	0.10	-	-	○2			
	23-24	0	0.05	-	-	○3			
	25-26	1	0.10	-	-	○4			
奥石障(内側)	13-14	0	0.05	-	-	△1	0.33	0.07	
	15-16	1	0.10	-	-	△2			
	17-18	0	0.05	-	-	△3			
右石障(内側)	1-2	0	0.05	-	-	□1	0.00	0.04	
	3-4	0	0.05	-	-	□2			
	5-6	0	0.00	-	-	□3			
	7-8	0	0.05	-	-	□4			
手前石障(内側)	9-10	0	0.08	-	-	◇1	0.50	0.12	
	11-12	1	0.15	-	-	◇2			
手前石障(上面)	右								4.3
	左								4.1

大鼠蔵尾張宮古墳(図12)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅(cm)				数	最大幅	
左石障(内側)	1-2	3	0.30	有	浅い層理	●1	2.50	0.25	
	3-4	2	0.20	無	-	○2			
奥石障(内側)	13-14				装飾		2.50	0.23	装飾部分、データ割愛
	15-16	2	0.20	無	-	△1			
右石障(内側)	17-18	3	0.25	無	-	△2	2.00	0.18	
	23-24	2	0.15	無	-	□1			
手前石障(内側)	25-26	2	0.20	無	-	□2	2.00	0.33	
	31-32	2	0.45	有	加工・剥離残り	◆1			
左石障(外側)	33-34	2	0.20	有	加工・コムシリ	◆2	2.00	0.10	
	5-6	3	0.10	無	-	○1			
奥石障(外側)	7-8	1	0.10	無	-	○2	1.00	0.38	上面付近は計測せず
	19-20	1	0.55	有	層理割れ	▲1			
右石障(外側)	21-22	1	0.20	無	-	△2	2.25	0.28	
	27-28	2	0.30	有	層理割れ	■1			
手前石障(外側)	29-30	2.5	0.25	有	層理	■2	2.00	0.40	埋没しているため1ヵ所
	35-36	2	0.40	有	層理	◆			
左石障(上面)	9-10				別途データ提示				2.8
奥石障(上面)	11-12				別途データ提示				2.6

広浦古墳(図13)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅(cm)				数	最大幅	
第一石(内側)	1-2	0	0.15	-	-	○1	1.17	0.34	
	3-4	0	0.10	-	-	○2			
	5-6	2	0.50	有	層理・ハツリ	●3			
	7-8	2	0.40	有	層理	●4			
	9-10	2	0.25	有	層理・ハツリ	●5			
	11-12	1	0.65	有	ハツリ	●6			
第二石(内側)	21-22	1	0.30	有	剥離	▲1	2.00	0.25	装飾
	23-24	3	0.20	有	粗仕上げ	▲2			
第一石(外側)	13-14	2	0.30	有	層理	●1	2.50	1.10	
	15-16	2	0.35	有	層理	●2			
	17-18	3	1.75	有	剥離・粗加工	●3			
	19-20	3	2.00	有	剥離	●4			
第二石(外側)	25-26	3	0.30	有	ハツリ	▲1	2.50	1.65	側面は後世の割り痕
	27-28	2	3.00	有	ハツリ	▲2			

門前2号墳(図15)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅(cm)				数	最大幅	
石障?(内側)	1-2	1	0.50	有	チョウナ痕	●1	1.25	0.29	装飾部分は計測に入れず
	3-4	2	0.20	無	-	○2			
	5-6	1	0.30	無	-	○3			
	5-7	1	0.15	無	-	○4			
石障?(外側)	8-9	2	0.30	有	層理割れ	▲1	1.50	0.30	他は補強のため計測不可
	10-11	1	0.30	有	層理割れ	▲2			

小田良古墳 (図 14)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値 (Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)				数	最大幅	
左石障 (内側)	45-46	2	0.30	有	工具痕、粗整形	● 1	2.63	0.31	
	47-48	2	0.30	有	工具痕、粗整形	● 2			
	49-50	3	0.35	有	工具痕、粗整形	● 3			
	51-52	3	0.40	有	工具痕、粗整形	● 4			
	53-54	1	0.30	有	工具痕、粗整形	● 5			
	54-56	5	0.25	有	工具痕、粗整形	● 6			
	57-58	2	0.35	有	工具痕、粗整形	● 7			
	59-60	3	0.20	有	工具痕、粗整形	● 8			
奥石障 (内側)	1-2	2	0.30	無	—	△ 1	2.25	0.29	
	3-4	2	0.30	無	—	△ 2			
	5-6	1	0.25	無	—	△ 3			
	7-8	1	0.25	無	—	△ 4			
	9-10	5	0.25	無	—	△ 5			
	11-12	2	0.50	無	—	△ 6			
	13-14	3	0.30	無	—	△ 7			
	15-16	2	0.15	無	—	△ 8			
右石障 (内側)	17-18	4	0.40	有	層理割れ	■ 1	1.94	0.29	装飾箇所は計測に入れず
	19-20	1.5	0.20	無	—	□ 2			
	21-22	2	0.25	有	層理割れ	■ 3			
	23-24	2	0.25	有	層理割れ	■ 4			
	25-26	1	0.40	有	層理割れ	■ 5			
	27-28	2	0.20	無	—	□ 6			
	61-62	2	0.40	有	層理割れ	■ 7			
	63-64	1	0.25	有	層理割れ	■ 8			
手前石障 (内側)	29-30	3	0.45	有	工具痕、コムシリ	◆ 1	3.38	0.43	
	31-32	3	0.40	有	工具痕、コムシリ	◆ 2			
	33-34	2	0.40	有	工具痕、コムシリ	◆ 3			
	35-36	3	0.35	有	工具痕、コムシリ	◆ 4			
	37-38	6	0.60	有	工具痕、コムシリ	◆ 5			
	39-40	3	0.55	有	工具痕、コムシリ	◆ 6			
	41-42	2	0.45	有	工具痕、コムシリ	◆ 7			
	43-44	5	0.25	有	工具痕、コムシリ	◆ 8			
左石障 (外側)	65-66	3	0.80	有	工具痕、チョウナ、タガネ	● 1	3.00	0.65	
	67-68	3	0.50	有	工具痕、チョウナ、タガネ	● 2			
奥石障 (外側)	69-70	4	0.20	有	層理割れ?	▲ 1	3.00	0.35	
	71-72	2	0.50	有	工具痕? 層理割れ?	▲ 2			
右石障 (外側)	73-74	3	0.35	有	工具痕	■ 1	2.50	0.38	
	75-76	2	0.40	有	層理割れ	■ 2			
手前石障 (外側)	77-78	3	0.50	有	工具痕	◆ 1	3.00	0.38	
	79-80	3	0.25	有	工具痕	◆ 2			
手前石障 (上面)					別途データ提示				12.9

田川内 1 号墳 (図 16)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値 (Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)				数	最大幅	
左石障 (内側)	41-41'	2	0.20	有	細かな層理	● 1	1.25	0.18	
	42-42'	1	0.10	有	細かな層理	● 2			
	59-59'	1	0.20	有	細かな層理	● 3			
	60-60'	1	0.20	有	細かな層理	● 4			
奥石障 (内側)	23-23'	2	0.30	有	細かな層理	▲ 1	2.38	0.25	
	24-24'	3	0.30	有	細かな層理	▲ 2			
	43-43'	3	0.20	有	細かな層理	▲ 3			
	44-44'	1.5	0.20	有	細かな層理	▲ 4			
右石障 (内側)	19-19'	2	0.30	有	層理	■ 1	1.75	0.38	
	20-20'	2	0.50	有	層理	■ 2			
	21-21'	2	0.30	有	層理	■ 3			
	22-22'	1	0.40	有	層理	■ 4			
手前石障 (内側)	32-32'	0	0.10	無	—	◇ 1	0.57	0.08	
	33-33'	1	0.20	無	—	◇ 2			
	34-34'	3	0.10	無	—	◇ 3			
	35-35'	0	0.05	無	—	◇ 4			
	36-36'	0	0.05	無	—	◇ 5			
	37-37'	0	0.03	無	—	◇ 6			
	38-38'	0	0.02	無	—	◇ 7			
手前石障 (外側)	1-1'	0	0.05	無	—	◇ 1	0.00	0.06	
	2-2'	0	0.05	無	—	◇ 2			
	3-3'	0	0.05	無	—	◇ 3			
	4-4'	0	0.10	無	—	◇ 4			
石屋形袖石 (左側)	30-30'	0	0.05						
	46-46'	2	0.10						
石屋形袖石 (右側)	29-29'	0	0.10						
	45-45'	2	0.10						
石屋形仕切石	17-17'	1	0.20						
	18-18'	1	0.10						
前室左側石	9-9'	1	0.60						
	10-10'	1	0.15						
前室右側石	11-11'	1	0.50						
	12-12'	2	0.30						
	13-13'	1	0.40						

五反田古墳 (図 17)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値 (Ave)		備 考	
		数	最大幅 (cm)				数	最大幅		
A 石 (内側)	9-10	2	0.20	無	層理	○ 1	2.25	0.28	A	
	11-12	2.5	0.35	有		● 2				
B 石 (内側)	1-2	1.5	0.10	無	—	△ 1	1.38	0.11	B	
	3-4	1	0.15	無		△ 2				
	5-6	1.5	0.10	無		△ 3				
	7-8	1.5	0.10	無		△ 4				
C 石 (内側)	15-16	2	0.20	無	—	□ 1	2.50	0.18	C	
	17-18	3	0.15	無		□ 2				
C 石 (上面)	13-14	別途データ提示						1.6		

[表 6 石棺うねり観察表]

小鼠蔵 1号墳 (図 18)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値 (Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)				数	最大幅	
西側小口石 (内側)	1-2	2	0.15	無	—	○ 1	2.00	0.13	装飾 装飾
	3-4	2	0.10	無		○ 2			
北側長側石 (内側)	5-6	2	0.50	無	—	△ 1	1.75	0.61	
	7-8	1	0.65	無		△ 2			
	9-10	2	0.80	無		△ 3			
	11-12	2	0.50	無		△ 4			
南側長側石 (内側)	13-14	1	0.80	無	—	□ 1	1.50	0.63	
	15-16	2	0.75	無		□ 2			
	17-18	2	0.45	無		□ 3			
	19-20	1	0.50	無		□ 4			
北側長側石 (外側)	1-2	4	0.40	無	—	△ 1	3.00	0.48	
	3-4	2	0.55	無		△ 2			
南側長側石 (外側)	5-6	5	0.85	無	—	□ 1	4.50	0.60	
	7-8	4	0.35	無		□ 2			

小鼠蔵 3号墳 (図 19)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値 (Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)				数	最大幅	
西側小口石	1-2	1.5	0.10	無	—	○ 1	1.25	0.10	
	3-4	1	0.10	無		○ 2			
北側長側石	9-10	0	0.05	無	—	△ 1	1.19	0.46	装飾 装飾 装飾
	11-12	1	1.10	有		▲ 2			
	13-14	2	1.25	有		▲ 3			
	15-16	1	0.60	無		△ 4			
	17-18	1	0.15	無		△ 5			
	19-20	3.5	0.25	無		△ 6			
	21-22	0	0.10	無		△ 7			
南側長側石	23-24	1	0.20	無	—	△ 8	2.08	0.32	※縁の剥離を面取り加工と判断 し考慮した場合、最大幅 0.6cm
	25-26	1	0.20	無		□ 1			
	27-28	3	0.90	有		■ 2			
	29-30	1.5	0.20	無		□ 3			
	31-32	1	0.20	無		□ 4			
	33-34	1.5	0.20	無		□ 5			
	35-36	4.5	0.20	無		□ 6			
東側小口石	5-6	3	0.30	有	層理割れ	◆ 1	2.50	0.28	
	7-8	2	0.25	有		◆ 2			

千崎 8号墳 (図 20)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値 (Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)				数	最大幅	
北側小口石 (内側)	1-2	1	0.20	有	剥離	● 1 ※	1.00	0.25	※面取りの解釈次第
	3-4	1	0.30	有		● 2			
西側長側石 (内側)	5-6	1	0.40	有	剥離・層理	▲ 1 ※	1.88	1.31	※面取りの解釈次第
	7-8	2.5	0.20	無		△ 2			
	9-10	3	4.30	有		▲ 3 ※			
	11-12	1	0.35	無		△ 4			
東側長側石 (内側)	13-14	2.5	0.40	有	加工痕	■ 1	1.88	0.53	礫岩 礫岩 礫岩 礫岩
	15-16	2	0.40	有		■ 2			
	17-18	1	0.70	有		■ 3			
	19-20	2	0.60	有		■ 4			
南側小口石 (内側)	21-22	1	0.20	有	—	◇ 1	1.00	0.20	
	23-24	1	0.20	無		◇ 2			
北側小口石 (外側)	1-2	1	2.10	有	礫面	● 1	1.00	1.50	
	3-4	1	0.90	有		● 2			
西側長側石 (外側)	9-10	1	0.30	有	礫面	▲ 1	2.00	0.58	
	11-12	3	0.85	有		▲ 2			
東側長側石 (外側)	13-14	2	2.00	有	礫面	■ 1	2.00	1.45	
	15-16	2	0.90	有		■ 2			
南側小口石 (外側)	21-22	1	0.70	無	—	◇ 1	1.50	0.50	
	23-24	2	0.30	無		◇ 2			

千崎9号墳 (図21)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)				数	最大幅	
南側小口石	1-2	2	0.20	有	海蝕	●1 / ●1 ※	2.17	0.23	※海蝕痕を除く
	2-3	2	0.20	無	—	○2			
	8-9	2.5	0.30	無	—	○3			
東側長側石 南側	4-5	1	0.60	有	工具痕?	▲1	3.00	0.37	剥離は、面取りと同義の可能性 がある、※剥離を除く 層理割れは、面取りと同義の可 能性がある、※層理を除く
	6-7	6	0.20	有	剥離痕	▲2 / ▲2 ※			
	10-11	2	0.30	有	層理割れ	▲3 / ▲3 ※			
東側長側石 北側	28-29	4	4.00	有	層理割れ	▲4	5.00	1.70	
	30-31	8	0.60	有	海蝕	▲5			
	32-33	3	0.50			▲6			
西側長側石 南側	12-13	1	0.70	有	層理割れ	■1	1.50	0.75	層理割れは、面取りと同義の可 能性がある
	14-15	2	0.80	有	層理割れ	■2			
西側長側石 北側	16-17	3.5	0.45	有	礫面?	■3	2.38	1.51	剥離は、面取りと同義の可 能性がある
	18-19	0.5	0.20	有	剥離?	■4			
	20-21	5	0.40	無	—	□5			
	22-23	0.5	5.00	有	層理割れ	■6			
北側小口石	24-25	5	0.35	無	—	◇1	6.00	0.33	安山岩
	26-27	7	0.30	有	層理割れ	◆2			安山岩、剥離は、面取りと同義 の可能性が有る

千崎13号墳 (図22)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)				数	最大幅	
南東側小口石 (内側)	1-2	2	0.40	無	—	○1	1.50	0.35	南東側の小口石が北西側に比べ 精緻
	3-4	1	0.30	無	—	○2			
北東側長側石 (内側)	5-6	2	0.25	有	工具痕	▲1	1.50	0.20	礫面側を外側に、母岩から層理 に沿って剥離した面を粗仕上げ して用いている
	7-8	1	0.15	有	工具痕	▲2			
南西側長側石 東側 (内側)	9-10	3	0.70	有	層理	■1	2.50	0.60	礫面側を外側に、母岩から層理 に沿って剥離した面を内側に用 いている
	11-12	2	0.50	有	層理	■2			
南西側長側石 西側 (内側)	13-14	1	0.95	有	層理	■3	1.50	0.68	
	15-16	2	0.40	有	層理	■4			
北西側小口石 (内側)	17-18	1	0.60	有	工具痕	◆1	1.00	0.50	工具痕
	19-20	1	0.40	有	工具痕	◆2			
南東側小口石 (外側)	1-2	2	0.60	無	—	○1	2.00	0.63	
	3-4	2	0.65	無	—	○2			
北東側長側石 (外側)	5-6	1	0.70	有	礫面	▲1	2.50	0.75	
	7-8	4	0.80	有	礫面	▲2			
南西側長側石 東側 (外側)	9-10	3	0.70	有	礫面	■1	2.50	0.60	
	11-12	2	0.50	有	礫面	■2			
南西側長側石 西側 (外側)	13-14	1	0.40	有	礫面	■3	1.00	0.85	
	15-16	1	1.30	有	礫面	■4			
北西側小口石 (外側)	17-18	3	0.70	有	海蝕痕	◆1	3.50	1.25	海蝕痕の残る礫面
	19-20	4	1.80	有	海蝕痕	◆2			

千崎15号墳 (図23)

部 位	地点	うねり		有無	粗 さ 内 容	グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)				数	最大幅	
北東側小口石 (内側)	1-2	3	0.30	有	層理	●1	3.00	0.30	
	3-4	3	0.30	有	層理	●2			
北西側長側石 (内側)	5-6	2	0.20	有	層理	▲1	1.00	0.15	
	7-8	0	0.10	無	—	△2			
北西側長側石 (内側)	9-10	1	0.20	有	層理	▲3	0.50	0.18	
	11-12	0	0.15	有	層理	△4			
南東側長側石 (内側)	17-18	0	0.10	無	—	□1	0.00	0.15	
	19-20	0	0.20	無	—	□2			
南東側長側石 (内側)	21-22	1	0.30	無	—	□3	1.00	0.40	ベンガラ残り
	23-24	1	0.50	有	層理	■4			
南西側小口石 (内側)	13-14	2	1.10	有	加工	◆1	1.50	0.73	平面の加工が中途。
	15-16	1	0.35	有	層理	◆2			

千崎 22 号墳 (図 24)

部 位	地点	うねり		粗 さ		グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)	有無	内 容		数	最大幅	
南東側小口石 (内側)	1—2	1	0.15	無※	剥離	○1※	1.00	0.17	剥離は、面取りと同義の可能性 がある、※データ採用
	3—4	1	0.15	無		○2			
	5—6	1	0.20	無		○3			
北東側長側石 (内側)	7—8	1	0.25	有	層理	▲1	1.00	0.28	
	9—10	1	0.30	有	層理	▲2			
南西側長側石 (内側)	11—12	0	0.10	無		□1	0.50	0.15	丁寧な整形
	13—14	1	0.20	有	層理	■2			
北西側小口石 (内側)	15—16	0	0.20	無		◇1	0.00	0.20	ベンガラ残り
	17—18	0	0.20	無		◇2			丁寧な整形
北西側小口石 (内側)	19—20	3	0.30	有	加工痕	▼	3.00	0.30	チョウナ痕か。礫岩
南東側小口石 (外側)	1—2	1	0.50	無		○1	1.00	0.30	面取り部分は計測から除く。うねり 顕著
	3—4	2	0.25	無		○2			
	5—6	0	0.15	無		○3			
北東側長側石 (外側)	7—8	1	0.45	有	層理	▲1	2.00	0.43	
	9—10	3	0.40	有	層理	▲2			
南西側長側石 (外側)	11—12	0	0.20	無	剥離	□1	1.00	0.25	
	13—14	2	0.30	無	層理	□2			
北西側小口石 (外側)	15—16	0	0.20	無		◇1	0.50	0.25	
	17—18	1	0.30	有	層理	◆2			
北西側小口石 (外側)	19—20	2	1.50	有	加工痕	▼	2.00	1.50	チョウナ痕か。礫岩

千崎 26 号墳 (図 25)

部 位	地点	うねり		粗 さ		グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)	有無	内 容		数	最大幅	
北側小口石 (内側)	1—2	0	0.20	無	—	○1	1.00	0.35	全て安山岩製の為、参考データ。 原図無
	3—4	2	0.50	無	—	○2			
東側長側石 南東側 (内側)	7—8	1	0.35	無	—	△1			
東側長側石 北東側 (内側)	11—12	1	0.25	無	—	△2			
西側長側石 北西側 (内側)	13—14	3	0.30	無	—	□1			
西側長側石 南西側 (内側)	9—10	0	0.10	無	—	□2			
南側小口石 (内側)	5—6	1	0.20	無	—	◇			
北側小口石 (外側)	1—2	1	0.30	無	—	○1	1.00	0.58	
東側長側石 南東側 (外側)	7—8	0	0.15	無	—	△1			
東側長側石 北東側 (外側)	11—12	1	0.35	無	—	△2			
西側長側石 北西側 (外側)	13—14	3	0.30	有	礫面?	■1			
西側長側石 南西側 (外側)	9—10	1	0.80	有	礫面?	■2			
南側小口石 (外側)	5—6	1	1.10	有	礫面?	◆			

竹島 3 号墳 (図 26)

部 位	地点	うねり		粗 さ		グラフ ポイント	うねり平均値(Ave)		備 考
		数	最大幅 (cm)	有無	内 容		数	最大幅	
左石棺奥側小口石 (内側)	1—2	1.5	0.70	有	層理割れ	●1	0.75	0.45	
	3—4	0	0.20	無	—	○2			
左石棺長側石 (内側)	5—6	0	0.10	無	—	△1	0.00	0.10	
	7—8	0	0.10	無	—	△2			
左石棺手前側小口石 (内側)	9—10	1.5	0.15	有	層理	■1	1.25	0.35	
	11—12	1	0.55	有	層理	■2			
左石棺長側石 (外側)	1—2	0	0.10	無	—	△1	0.25	0.35	
	3—4	0.5	0.60	無	—	△2			
右石棺奥側小口石 (内側)	1—2	1	0.10	無	—	○1	1.00	0.30	
	3—4	1	0.50	無	—	○2			
右石棺長側石 (内側)	5—6	0	0.10	無	—	△1	0.50	0.10	
	7—8	1	0.10	無	—	△2			
右石棺手前側小口石 (内側)	9—10	0	0.20	無	—	□1	0.00	0.18	
	11—12	0	0.15	無	—	□2			
右石棺長側石 (外側)	1—2	1	0.50	有	層理	▲1	1.00	0.45	
	3—4	1	0.40	有	層理	▲2			

第5章 総括

1 八代海周辺の古墳時代概要

八代海周辺地域の中でも装飾古墳が分布するのは、宇土半島基部・宇土半島・天草諸島北部・氷川下流域・球磨川下流域である(図143)。この中で前方後円墳は、比較的規模の大きい沖積平野が広がっている宇土半島基部・氷川下流域・球磨川下流右岸に分布し、宇土半島・天草諸島及び球磨川下流左岸には存在しない。この中で宇土半島基部は、熊本県下の中でも前期の前方後円墳が特に集中する地域である。中期になると停滞傾向となり、集成編年5・6期の確実な前方後円墳は知られておらず、7期になって前方後円墳の築造が再開する。氷川下流域では前期の前方後円墳2基が知られているが、その後築造は停止し再開するのは後期になってからである。球磨川下流域は右岸にのみ前方後円墳が存在するが、確実なものは、後期の2基の古墳だけである。

一方石障系石室^(註1)は中期まで前方後円墳が存在しない宇土半島・天草諸島・球磨川下流域に分布の中心があり、千崎型箱式石棺^(註2)も同様の分布を示す。対照的に家形・舟形石棺は前期の前方後円墳が存在した宇土半島基部と氷川下流域に分布する。なお球磨川より南の八代海沿岸には険しい山地がせまり、鹿児島県の出水平野まで大きな平野は存在せず、この間の水俣・芦北地域は古墳時代後期になり僅かに高塚古墳が出現するくらいで、高塚古墳の空白地帯である。つまり古墳をさかんに築く地域とそうでない地域の境界域に八代海の装飾古墳は位置する。

次に石材について述べると、石障石材は、砂岩と阿蘇溶結凝灰岩が主に使用される。まず砂岩が使用され、その後阿蘇溶結凝灰岩が加わる。このうち阿蘇溶結凝灰岩製石障のほとんどは馬門石産の可能性があることが指摘されている(高木恭二・西平2019)。馬門石と言うのは、宇土半島の宇土市網津町字馬門で採れる阿蘇溶結凝灰岩で、採れる場所により灰黒石をしたもの、ピンク色をしたもの、灰白色をしたものがある。石棺は、千崎型箱式石棺には天草砂岩が、家形石棺・舟形石棺には阿蘇溶結凝灰岩が使用され、産出地は石障石材と同様であるが、阿蘇溶結凝灰岩はこれに氷川産のものが加わる。この他安山岩も産出する場所はあるが、石障に使用されているのは八代海周辺では宇土半島南岸の重盛山古墳の石障だけで、装飾は施されない^(註3)。

表12・13は杉井論文に習いまず小林行雄分類に従って分類し^(註4)、更に箱式石棺・家形石棺など装飾が施される施設名称を加味したものである。また主要な古墳の年代観を表11に示した。八代海周辺の装飾古墳の概要を示せば杉井論文で示されたとおり、石棺系の箱式石棺と石障系古墳が卓越する。多くは内面に加飾され、装飾文様は彫刻された円文が主体で、砂岩製のものがほとんどである。この特徴は八代海の中でも球磨川下流域とその対岸である上天草市の大戸ノ瀬戸周辺に築かれた装飾古墳に顕著である。

石障系装飾古墳は小鼠蔵1号墳から始まり続くのが大鼠蔵尾張宮古墳とされている(高木恭1994)。いずれも球磨川河口付近の小島であった所である。また展開に関しては熊本平野及び県外の石障系古墳の石障石材の多くが阿蘇溶結凝灰岩であることから、八代海周辺で阿蘇溶結凝灰岩製石障である長砂連古墳・ヤンボシ塚古墳との関係が注目される。装飾文様に注目すると県外の石障系装飾古墳はいずれも直弧文装飾であり、熊本平野でも直弧文や上下の横線で区画された中に対角線文や靱が描かれるものが多い。上下の区画線や対角線も直弧文からの影響と考えると良ければ、直弧文が描かれる長砂連古墳が鍵を握る古墳となることが予想される。

次に石棺系装飾であるが、この中でも箱式石棺は球磨川下流域と対岸の大戸ノ瀬戸周辺にのみ存在し、それ以上広がることはない。家形石棺・舟形石棺の中で古いものは氷川下流域の竜北高塚古墳で、その後類例は少ないが宇土半島基部や熊本平野に広がっていく。また有明海北東部にも分布する。その他宇土半島基部

の鴨籠古墳石棺は熊本県内では唯一馬門石製石棺であり、外面加飾タイプで直弧文が施文される点も県内では唯一のもので中肥後型石棺と呼ばれている。中肥後型石棺は、装飾石棺として拡散することはないが、その後阿蘇ピンク石家形石棺として畿内中枢部まで運ばれるようになる。

一方古墳時代後期になると装飾古墳は宇土半島基部に限定される。いずれも壁画系装飾であるが、多くは10期以降の舟の線刻が中心で、彩色のある壁画系装飾は国越古墳と宇賀岳古墳の2例にすぎない。

2 装飾古墳の発生について

(1) 石障系石室の発生

初期の装飾は、石障系石室と千崎型箱式石棺に描かれる。装飾ある箱式石棺は、装飾のある石障系石室と共存し、小鼠蔵古墳群の立地から見ると高所に石障系石室があり周辺に箱式石棺があることから、最初に装飾が施されたのは石障系石室と考えられる。このことから石障の発生と装飾の発生はほぼ同時で不可分の関係であると考えられることから、石障の発生について高木恭二論文で言及してもらった。

高木恭二論文では、最古の石障系石室と言われている小鼠蔵1号墳の装飾は石障でなく箱式石棺の小口に描かれ、石障と箱式石棺は同時並存していることから、石障は箱式石棺から発展したものではなく、石障の発想は地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）からの影響と考える。まず地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）の影響を受け、基底部に板石を立て並べる薩摩川内市天辰寺前古墳の竪穴式石槨が出現する。この天辰寺前古墳の竪穴石槨は通常の竪穴石槨に比べ持ち送りが急で高さも1.3mを測る。この高さを確保するために板石を立て並べる技法が出現したとする。その影響によって、竪穴式石槨に箱式石棺を内蔵する上天草市成合津2号墳が生まれ、更にその影響により小鼠蔵1号墳が成立したとする。

高木は箱式石棺が石障系石室の成立に大きな役割を果たしたことは認めつつも、初期の石障には石室基部の補強という大きな役割があったとする。石室の高さを確保するためには石室基部の補強が必要で、四周にしっかりと安定した板石を巡らすことから石障は誕生した。その副産物としてドーム形天井構築技術が生まれ、その後はドーム形天井構築技術のみで石室の高さを確保することが可能になり、石障に補強の役割は求められなくなり、装飾を描くキャンパスになったとする。また高木は明確には言及していないが、方形プランの採用も石室の高さを確保するための大きな要素と考えているようである。

石障の起源については、地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）に発生を求める考え方以外に（ア）中国・北朝域に発生を求める説（和田 2007）や（イ）箱式石棺を起源とする考え方がある（小田 1966・藏富士 1997 他）。（ア）は、ドーム形天井の構造が楽浪地域など埴室墓からの影響を考えられていた経緯があり魅力的な説ではあるが、現時点では根拠となる資料が少なすぎる。（イ）は比較的多くの研究者が提唱しているものだが、小鼠蔵1号墳に限れば、石障の中に箱式石棺を持ち込んでおり両者は並存している。しかし石障の起源を地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）基底部の板石とする考え方についても、丁寧に加工された石障石材と地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）の基底部の板石では様相が大きく異なるとの指摘（杉井 2009）がある。

このように石障の発生についてはまだ多くの疑問点があるものの、石障石材の丁寧な加工や組合せ方法など千崎型箱式石棺と共通することは確かである（杉井 2009）。池田論文は、石障と箱式石棺に用いられた砂岩製材の表面加工について調査研究を行ったもので、小鼠蔵1号墳は千崎型箱式石棺の石材選択と構築技術をそのまま用いていると評価し、石障の成立に千崎型箱式石棺製作の技術が大きく関わっていることをさらに裏付けた。一方で球磨川下流域左岸では石障系石室の分布域内に地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）である丸山古墳が存在し、地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）分布域の石材が石障系石室に供給されており、石障の発生に限らず地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）との関係は今後も検討を続けていく必要がある。

凡例 灰色塗●：装飾古墳 ドット●：直弧文装飾古墳 白抜○：非装飾古墳

集成	須恵器 型式	横穴式石室										割抜式石棺				九州の 主要古墳								
		八代海周刃地域			熊本平野		県外 石障系		南肥後型		中肥後型石棺		北肥後型	その他県南 主要古墳										
		天草	宇土半島	宇土半島基部	熊本平野	県外	水川	県内	県外	宇土半島基部	県外	畿内(非装飾)												
4		球磨川河口	小鳳蔵1号																					
5	TG 232	尾張宮		城2号																				
6	TK 73	大戸鼻北	ヤンボシ塚			藤山甲塚									石人山		(小坂大塚)		女狭穂					
	TK 216	五反田	長砂連	小田良			千足													男狭穂				
7	ON 46																							
	TK 208	田川内1号							千金甲1号	円山											(松橋大塚)			
	TK 23								井寺	日輪寺											船山			
8	TK 47																							
	MT 15																							
9	TK 10 (古)																							
	TK 10 (新)																							
	TK 43																							
10	TK 209																							
	飛鳥																							

表 11 関連古墳の編年表

ろう。ただし地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）に関しては年代が不確定であり、まずは築造年代を確定させることが不可欠である。

この他小鼠蔵1号墳は横穴式石室か否かと言う問題もある。石障系石室の変遷は小鼠蔵1号墳を最古としそれに続くのが大鼠蔵尾張宮古墳であると言うのは共通認識であるが、石室構造の変遷に飛躍があることが問題とされていた(杉井 2009)。池田論文では小鼠蔵1号墳の石室壁面は砂岩と安山岩が互層に積み巡り、入口側とされる東壁面でも状況が同じであることから、入口施設と積極的に評価できる部材は無いとする。また石材の使い分けや構築技術が箱式石棺そのものとし小鼠蔵1号墳は竪穴式石室としている。池田は他の石障系石室の奥障には表面が滑らかな石材（うねりの最大幅0.3cm以下の石材）が使われているのに対し、小鼠蔵1号墳だけはうねりの最大幅が0.3cmより大きい「粗面石材」が使用されるなど箱式石棺に見られる

地域区分	番号	古墳	時期 (集成編年)	装飾古墳分類			施文石材 の種類	装飾文様の種類等	
				小林行雄分類	施文施設	内面 外面			
八代海周 辺地域	球磨川 下流	島	25 小鼠蔵1号墳	5期以前	石障系	箱式石棺	○	砂岩	○ 施文箇所は石障石材ではない
			小鼠蔵3号墳	5期	石棺系	箱式石棺	○	砂岩	○
		左岸	大鼠蔵尾張宮古墳	5~6期	石障系	石障	○	砂岩	○
			大鼠蔵東麓1号墳	?	石棺系	箱式石棺	○	砂岩	◎・弓・靱・短甲・太刀
			大鼠蔵東北麓2号墳	?	石棺系	箱式石棺	○	砂岩?	◎
			大鼠蔵西北麓2号墳	?	石障系	石障	○	砂岩?	◎
			27 五反田古墳	6	石障系	石障	○	砂岩	○
			28 長迫古墳	8期	石障系	石障	○	砂岩	◎
		右岸	田川内1号墳	7	石障系	石障	○	砂岩	◎、○(仕切り石)
			29 田川内3号墳	?	石棺系	箱式石棺	○	砂岩	◎
	田川内2号墳		?	石棺系	箱式石棺	○	砂岩	◎	
	30 竹之内古墳		?	石棺系	箱式石棺	○	砂岩	◎? 阿弥陀如来の光輪の可能性	
	天草 (大戸/瀬戸 周辺)	24 門前2号墳	7期	石障系	石障	○	砂岩	◎	
		18 長砂連古墳	6~7期	石障系	石障	○	凝灰岩	◎・直弧文	
		19 広浦古墳	6期?	石障系?	石障?	○	砂岩	○・刀子・大刀・短甲	
		20 大戸鼻北古墳	6期	石障系	石障	○	砂岩	○	
		大戸鼻南古墳	7期?	石棺系	箱式石棺	○	砂岩	◎	
		氷川 下流域	21 竜北高塚古墳	6期	石棺系	家形石棺	○	凝灰岩	蓋内面:○方形区画、身内面に○・刀子・靱
		22 大野村石棺	?	石棺系	舟形石棺?	○	凝灰岩?	長方形区画	
		宇土半 島	北岸	16 ヤンボシ塚古墳	6期	石障系	石障	○	凝灰岩
基部			17 小田良古墳	7期	石障系	石障	○	砂岩	◎・靱・盾
			1 三拾町板碑	7	石障系	石障	○	凝灰岩	◎・直弧文
	8 晩免古墳		7~8期	石棺系	家形石棺	○	凝灰岩	身内面:○、蓋外面:区画線?	
	9 潤野古墳	7~8期	石棺系	家形石棺	○	凝灰岩	身内面:○・連続三角文		
展開地 域	熊本平 野	北西部	12 鴨籠古墳	7期	石棺系	舟形石棺	○	凝灰岩	◎・直弧文・梯子形文(複数彩色)
		東部	31 千金甲1号墳	7期	石障系	石障	○	凝灰岩	◎・靱・X
			32 井寺古墳	7期	石障系	石障	○	凝灰岩	◎・直弧文・鍵手文・梯子形文
			33 釧原2号墳	7~8	石障系	石障	○	凝灰岩	X
	有明海	南東部	- 坂本古墳	?	石障系	石障	○	凝灰岩	◎
			- 石之室古墳	8期	石棺系	横口式家形石棺	○	凝灰岩	斜格子状文様
			- 中郡古墳	7~8	石棺系	家形石棺	○	凝灰岩	◎・◎
		北東部	- 西隈古墳	7期	石棺系	横口式家形石棺	○	凝灰岩	◎・連続三角文
			- 西原古墳	?	石棺系	横口式家形石棺	○	凝灰岩?	◎・三角文・方形文等
			- 石人山古墳	6期	石棺系	横口式家形石棺	○	凝灰岩	◎・直弧文
岡山	- 浦山古墳	7期	石棺系	横口式家形石棺	○	凝灰岩	内面:◎・直弧文 外面:鍵手文		
	- 日輪寺古墳	8期	石障系	石障	○	凝灰岩	◎・鍵手文		
	- 千足古墳	6期以前	石障系	仕切り石	○	砂岩	直弧文・鍵手文		
- 造山古墳前方部所在石棺	7期	石棺系	舟形石棺	○	凝灰岩	直弧文			

表 12 古墳時代中期の装飾古墳

地域区分	番号	古墳	時期 (集成編年)	装飾古墳分類			施文石材 の種類	装飾文様の種類等
				小林行雄分類	施文施設	内面 外面		
宇土半 島基部	13 国越古墳	9期	壁面系	石屋形	○	凝灰岩	鍵手文・梯子形文・連続三角文(複数彩色)	
	10 宇賀岳古墳	9期	壁面系		○	凝灰岩	◎・連続三角文・梯子形文(複数彩色)	
	2 梅崎古墳	10期以降	壁面系		○	安山岩	舟の線刻	
	3 城塚古墳	10期以降	壁面系		?	安山岩	?	
	4 東畑古墳	10期以降	壁面系		○	安山岩	?	
	5 橋原古墳	10期以降	壁面系		○	安山岩	羨道右に矢印状と格子目状線刻、左浮彫○	
	6 仮又古墳	10期以降	壁面系		○	安山岩	舟の線刻	
	7 宇土城跡出土石材	10期以降	壁面系		○	安山岩	舟の線刻	
	11 不知火塚原第1号古墳	10期以降	壁面系		○	安山岩	舟及び不明線刻	
	14 桂原1号墳	10期	壁面系		○	安山岩	舟の線刻	
	桂原2号墳	10期以降	壁面系		○	安山岩	舟の線刻	
	15 (河添) 鬼の岩屋古墳	10期以降	壁面系		○	安山岩	舟の線刻	

表 13 古墳時代後期の装飾古墳

石材選定に通じることを明らかにしている。「(3) 装飾の見え方・施文時期について」で後述するが、奥障に滑らかな石材を採用するのは羨道側からの見え方を意識している可能性がある。その中で奥障に粗面石材を使用する小鼠蔵1号墳は、羨道側からと言った見え方が存在しない点では池田の指摘どおり横穴式石室という評価に疑義を投げかけるものである。しかし石障系石室の中で小鼠蔵1号墳だけが石材の使い分けが違うことは、石障系横穴式石室定形化以前の試行錯誤段階の可能性もあり、現時点では横穴式石室か否かの判断は保留したい。また小鼠蔵1号墳の玄室構造は、仮に横口がなかったとしても通常の縦穴式石室とは平面比や高さなどが大きく異なり、それは肥後型石室そのものであり十分に追葬が可能である。追葬は地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）や箱式石棺でも行われており、一部の石材を取りはずして出入りできて、構造上問題がなければそれで事足りる。小鼠蔵1号墳は私たちが考えているような明確な横口ではなく、簡易な出入口があった可能性も含めて検討を続けていく必要がある。

(2) 装飾の発生について

装飾の目的について、従来から「辟邪・鎮魂」のためと言われている。また箱式石棺など下位の階層では、副葬品の代用として内面に描かれたと言う説も乙益により提唱されている（乙益 1974 : p38）。最近では九州の横穴式石室が「開かれた棺」であると言う視点から装飾の発生を考える論もある（和田晴吾 2014）。「開かれた棺」であることは、装飾発生の大きな要因と考えるが、「開かれた棺」を採用する北部九州型横穴式石室には装飾がないことや石障系石室の中でも装飾がないものがあることから、この地域の特殊性に発生の要因を考えた方が良いと思われる。

杉井論文ではこの地域性に着目し、弥生時代まで銅鏡の空白地域であった八代海沿岸地域は、古墳時代になると中央政権主導の政治秩序が直接おおよぶ日本列島南西の最前線の位置に組み込まれ、熊本県内でもっとも三角縁神獣鏡が集中する地域となったとする。このことが鏡をより重視する地域となり、鏡を用いた序列表示システムに下位階層は埋葬施設の内面に円文を刻むことで参画したことが装飾の始まりとした。

高木恭二論文でも杉井同様八代海沿岸に円文が多いことを指摘し、極めて特徴的な地域現象とし円文は銅鏡を表し階層性も反映しているとする。高木は、高塚古墳を築造しない地域との境界域に位置していることから、より集団としての帰属意識が必要であったことからその発露として円文を採用したと考える。

つまり二人の論を総合するなら、この地域は特に銅鏡を重視した地域であり、下位階層が銅鏡を用いた序列システムに参画する目的で円文を描くことから始まった。それは高塚古墳を築造しない地域との境界域にあることから集団としての帰属意識を高める役割も担っていた。円文は球磨川河口域の地域シンボルとして古墳時代中期を通じて使用されるようになっていった。それには当然辟邪の意味もあったと思われる。

(3) 装飾の見え方・施文時期について

装飾古墳の発生とは直接関係ないが、施文のタイミング等についてもここで記す。

池田論文では、小鼠蔵3号石棺のように石材表面が滑らかでない場合でも装飾は施され、逆に鏡面仕上げなみの面でも施文されない場合があり、装飾と表面の加工とは無関係であることを明らかにした。また砂岩製石障系石室は小鼠蔵1号墳を除くといずれも奥障は滑らかに加工される。一方で田川内1号古墳を除き前障の内面は粗いままであることも判明した。

このことを筆者なりに考えると、コの字形配置である田川内1号古墳でも奥障は滑らかに加工されていることや、砂岩性の石障をもつ装飾古墳の奥障にはすべて施文されていることから、羨道側からの見栄えを意識していることが想定される。一方凝灰岩製石障を有す長砂連古墳とヤンボシ塚古墳では装飾は左右の石障に施され、長砂連古墳は奥障に施文されず、ヤンボシ塚古墳もなかった可能性が高い。このことからすると、凝灰岩製石障では羨道側からの見栄えは関係ないようにも思えるが、奥障にはピンク色の馬門石製凝灰岩が使われている。凝灰岩製石障について奥障を滑らかに加工しているというデータは公表されていない

ので慎重にならなければならないが、この2つの古墳には奥障の色味を見せる意図があったとは考えられないだろうか。

施文の時期については、井寺古墳が貴重な情報を提供してくれる。井寺古墳では石室壁面との間にあまり隙間のない前障の外にも装飾が施されていることから、石障の施文時期は石室構築以前であることが指摘されており（蔵富士 1999）、熊本県立装飾古墳館による石障への施文実験では石障を寝せて文様を刻んだ可能性が高いことが明らかになっている（池田 2006）。一方井寺古墳の羨門袖石前面の装飾とその上に載るブロック状石材及び天井石の装飾は、対角線などの線が連続しており、少なくともブロック状石材や天井石の施文は袖石の上に載った状態で行われたと考えるのが自然である。それは施文面が狭く寝かせた状態の方が不安定で、設置した後で施文する方が容易な場合などに限られているのかも知れないが、一部は石室構築中に行われていたようである。この他石棺製作の事例を参考にすると、奈良県植山古墳の墳丘や石室内で馬門石の石屑が採集され、それはチョウナ痕跡が残る雑な削りであったことから、最終仕上げは古墳築造場所で行っているとされた（高木恭 2007）。石障と石棺の違い・文様の難易度・近接地と遠隔地など条件は様々であり、これらを一様に考えて良いのか検討は必要であるが、石棺や石障への施文も古墳築造地で行っている可能性は高い。

この他、近年大戸鼻北古墳や南古墳で新たに見つかった細い線刻の円文は、一定以上の照度と光の角度によってやっと認識できるものである。大戸鼻南古墳東側小口で見つかった円文は、長側石西側の円文の内径と同じで、高さもほぼ同じである。このことから、あらかじめ下書きとして書かれていたが、何らかの理由で取りやめになったことを推測させる。一方大戸鼻北古墳は、歪な円で低い位置にあるなど、その性格は不明である。このような細い線刻発見事例は、多くはないかもしれないが今後も発見される可能性があり、事例の増加をまって再度検討したい。

3 装飾古墳の展開について

(1) 石障系装飾古墳の展開

石障系石室は八代海沿岸より宇土半島北岸そして熊本平野という具合に展開していく。また県外へも展開を見せる（図 143）。熊本平野まではその多くに装飾が施されるが、熊本平野より北で装飾が施されるのは、岡山市千足古墳（図 144 の 2）と福岡県久留米市の日輪寺古墳（図 144 の 8）の 2 例だけである。

装飾の有無を無視し石室構造だけでみれば熊本平野までは方形プランでドーム形天井の石室で肥後型石室の範疇に入るが、県北菊池川流域の銭亀塚古墳（図 144 の 4）や県外の石室平面形は長方形プランが主流となる。天井構造の確認できる千足古墳や藤山甲塚（図 144 の 5）では完全なドーム形天井にはならず、複数の天井石で構成される。しかし玄室壁面四隅は石材を両壁に架け渡し隅角を消している。このような石室は筑肥型石室 A 類と呼ばれている（柳沢 2007）。

伝播時期に注目すれば、宇土半島北岸の次に伝播したのは熊本平野より遠方の地域である。福岡県久留米市の藤山甲塚古墳・岡山市の千足古墳などで、この 2 古墳の石障は天草砂岩の可能性が高いとされる。平面形は藤山甲塚古墳が方形プラン、千足古墳は長方形プランと異なるが、玄門部構造は宇土半島のヤンボシ塚古墳に類似する。装飾は千足古墳だけに見られる。千足古墳は横穴式石室に直弧文が描かれた最初の古墳である。高木恭二は、八代海沿岸地方では既に円文を天草砂岩製の石障に彫り込んでいたからこそ直弧文を彫り込むという指示にも対応可能だったとする。また千足古墳での経験をもとに九州での直弧文装飾が始まる。県内で最も早いのは長砂連古墳で、文様技法に千足古墳と極めて類似すると言う（高木恭・西平 2019）。ここで述べたヤンボシ塚古墳、長砂連古墳の石障石材は馬門石製で、この馬門石製石障は熊本平野をはじめ県外にも運ばれ、直弧文が加飾される割合が高い^(註5)。

熊本平野の装飾文様は直弧文(井寺古墳)や上下の横線で区画された中に対角線文や靱が描かれるもの(千金甲1号古墳)で、井寺古墳や千金甲1号古墳の円文は中心に小孔をもちコンパスのような器具で描いたものとなる。上下の区画線は直弧文装飾にも使用され、長砂連古墳の左右石障の直弧文に挟まれた円文は中心に小孔があることから、これらも直弧文の影響を受け出現した可能性があり、対角線文も含めいずれも直弧文装飾からの影響が大きい(図144下)。

このように八代海から展開していく契機は阿蘇溶結凝灰岩製石障の出現であり、装飾文様では直弧文の出現である。具体的な古墳で言えば、ヤンボシ塚古墳・長砂連古墳である。杉井論文では、長砂連古墳について八代海沿岸地域に位置する装飾古墳としては、石障が凝灰岩製である点、および文様が直弧文である点において、長砂連古墳はきわめて特異な存在であるとしている。池田論文では石障表面に滑らかさを要求される場合、砂岩以外で唯一クリアできるのが同じ軟岩の阿蘇溶結凝灰岩であることから、長砂連古墳に凝灰岩石障が使用されたとする。

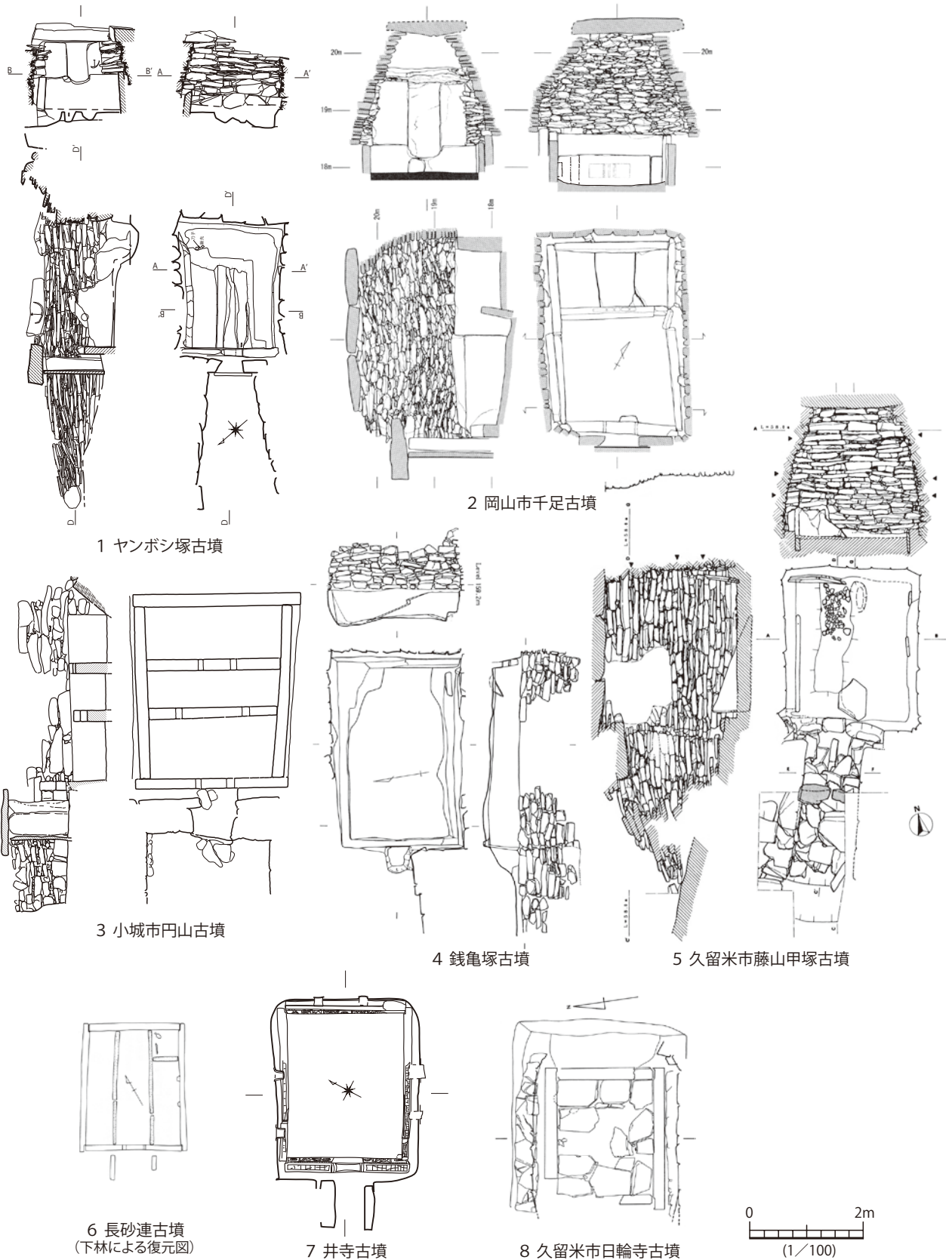
一方ヤンボシ塚の位置する宇土半島網田平野には肥後型石室の城1号墳、今宿・唐津型石室の城2号墳があり、融合するベースが備わっている地域である。このヤンボシ塚・長砂連古墳は石障石材の組合せも特徴的である。一般的な組合せは千崎型箱式石棺同様、奥障と前障を左右石障で挟むもの(H形)だが、ヤンボシ塚古墳は左右の石障を前障と奥障で挟んでいる(Ⅱ形)。類例はいずれも非装飾古墳ではあるが、菊池川中流域の銭亀塚古墳・佐賀県小城市の円山古墳(図144の3)・福岡県久留米市の藤山甲塚古墳など筑肥型石室A類と呼ばれているものの多くがⅡ形の組合せである。長砂連古墳は下林の復元図を見ると、組合せ部を鍵形に加工し形状は「ロ」の字形である。いずれも直弧文をもつ井寺古墳・久留米市の日輪寺古墳が同様の組合せ方をしている。石障の組合せが同一であるということは石障の組み立て方の手順が同じであることを示し、藤山甲塚古墳を除くと石材も阿蘇溶結凝灰岩であることを加味すると同一工人集団が携わっている可能性があり、ヤンボシ塚古墳・長砂連古墳を構築した工人集団が他地域への展開に深く関わっていたと考えられる。

(2) 石棺系装飾古墳(家形・舟形石棺)の展開

石棺輸送は集成3期頃には既に始まっており、菊池川流域や氷川流域で造られた阿蘇溶結凝灰岩製の石棺が各地に運ばれている。石棺形態に地域性があることから北肥後型石棺・南肥後型石棺と呼称される。また7期前後から宇土半島基部を中心とした地域でも石棺製作が開始され、中肥後型石棺と呼ばれている(図145)。

このうち6期から8期にかけて少数ではあるが装飾を有する石棺が出現する。主体は南肥後型石棺で6期の竜北高塚が初出で、宇土半島基部の潤野古墳・晩免古墳や熊本平野南東部の石之室古墳(塚原古墳群)がある。その他県外では佐賀市の西原古墳・西隈古墳や直弧文の装飾をもつ福岡県久留米市浦山古墳がある。北肥後型石棺では装飾が施されるのは福岡県広川町石人山古墳1例だけであるが直弧文装飾が施される。

石棺系の装飾は古墳時代前期より散発的に見られ、氷川流域でも3期頃の大王山古墳第3号の舟形石棺の外面に区画が認められる。しばらく空白の時期があって6期に竜北高塚古墳等の家形石棺が出現する。従来までの区画文を残すものの、内面加飾となっており円文や刀子が描かれることなど球磨川河口や大戸ノ瀬戸地域の箱式石棺の影響が窺える。県外に運ばれた装飾のある石棺は、すべて石室を有する妻入横口式家形石棺で、規模も大きく4例中3例が外面に装飾があるなど熊本県内のものと様相を異にする。横口を設けること・直弧文を描くことなど特注品であった可能性がある。直弧文装飾は南肥後型石棺だけでなく北肥後型石棺の石人山古墳にもあることから、直弧文装飾については吉備勢力と紐帯関係を結んだ勢力でなければ描くことは許されなかったとし、筑後地域の勢力はそれぞれ関係を結んでおり、その証として直弧文を描いたとする(高木恭・西平2019)。熊本県下での石棺への直弧文装飾は、宇城市鴨籠古墳が唯一である。この石



【装飾文様】

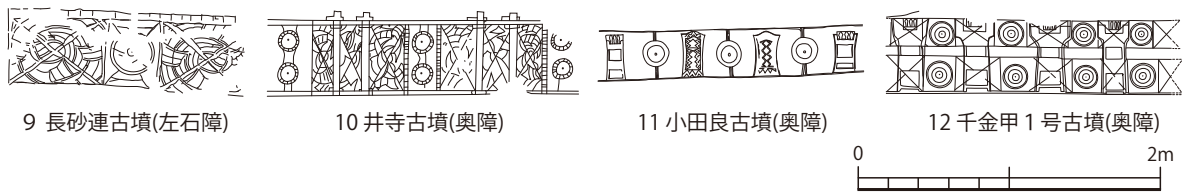


図 144 装飾古墳展開に関する石室及び文様

棺は中肥後型で、この中肥後型石棺は鴨籠古墳を除くとすべて県外にあり、その後畿内まで輸送されるようになる。

4 装飾の終焉と新たな展開

古墳時代後期になると、八代海周辺では舟等の線刻壁画系装飾を除くと装飾が施される古墳は宇土半島基部に所在する国越古墳と宇賀岳古墳の2例のみとなってしまう。この時期に石障の前障が消滅する。これを藏富士は、石障と言う棺が解体し本当の意味での室が誕生したと評価する（藏富士 1997）。ところが国越古墳は、石障が腰石として石室構造に取り込まれるが、前障が残っており石障系石室と何ら変わりはない。また宇賀岳古墳は、天井石が屋根形をしていること・一枚石を指向しているなど石棺式石室の源流とされている古墳である。つまり両古墳とも棺の意識が残存する旧来的な石室であり、藏富士も国越古墳・宇賀岳古墳は石工施文による装飾としている（藏富士 1999）。つまり未だ「棺」であった古墳には装飾が施されたが、「室」となった古墳にはこの地域では装飾は施されなくなった可能性がある。しかし菊池川流域では前障のない石室に装飾が描かれており、「室」になったと言うだけでは説明は十分ではない。特に円文を描きつづけた球磨川下流域を考えれば、もっと大きな変化が想定される。

他に八代海周辺地域での中期から後期への大きな変化は、中期に前方後円墳の築造が極めて低調であった八代海側に有力な首長系譜が出現することである。氷川下流域は前期以降前方後円墳の築造が途絶えていた

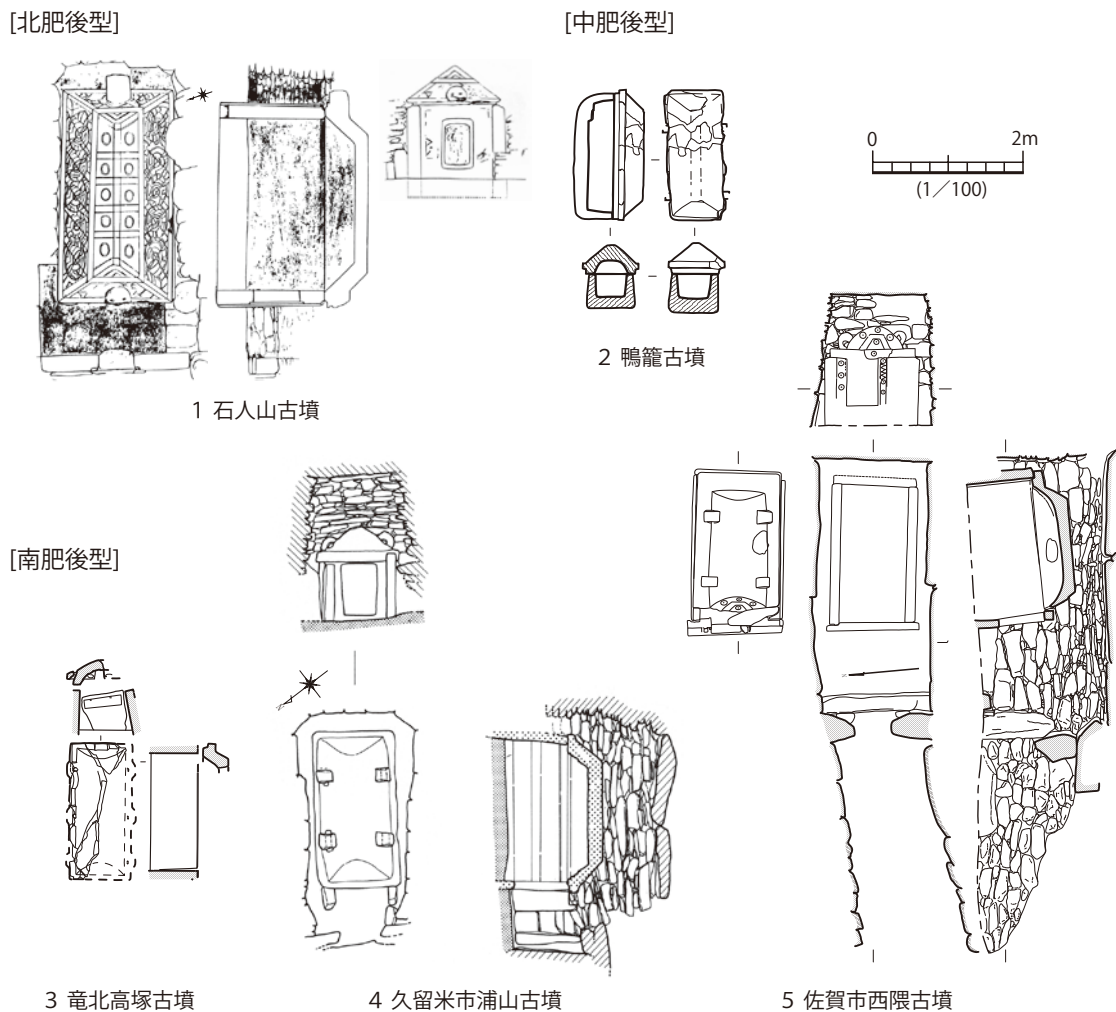


図 145 主要装飾石棺

地域であったが、後期になると7基の前方後円墳が出現し少なくとも3基は100mを超える。また球磨川下流域右岸にも前方後円墳である八代大塚古墳(60m)・高取上の山古墳(60m)の他前方後円墳の可能性を指摘されている茶臼山古墳が出現する。中期の球磨川下流域右岸は門前1号墳と2号墳を同一古墳として前方後円墳の可能性を指摘されてはいるが、確実な前方後円墳が存在していなかった地域である。一方で中期において装飾文様は集団的帰属意識の発露(地域シンボル)としての役割を果たし、特に球磨川下流域で顕著で、中期を通じて円文が刻まれてきた。この装飾が消滅するということは、装飾文様に地域シンボルとしての役割が必要とされなくなったと考えられる。装飾古墳の終焉は野津古墳群など八代海沿岸地域全体を統括する広域首長の出現が関係しているのかも知れないが十分に検討できていない。

新たな展開としては、大野窟古墳に代表される特徴ある石室構造が出現することが挙げられる。この古墳の石室構造は、細長い羨道を有し平面プランは長方形で上部構造は直方体に近く壁面四隅には目地が通るなど、これまでの肥後型石室とは異なる。また石柵・二重玄門・刳抜玄門などの付帯施設を設ける。

この大野窟古墳の石室構造の影響を受けたものが、今城大塚古墳と桂原1号古墳である。今城大塚は全長30m程の前方後円墳で熊本平野南東部に位置する。大野窟古墳同様長方形プランで上部は直方体状になる。複室ではないものの細長い羨道部がつく。他方で壁画系装飾を有し熊本平野以北との関連も窺える。また石製表飾をもつことから菊池川上流域の木柑子古墳群・氷川下流域の野津古墳群・大野窟古墳など各地域の首長との連携していたことも窺わせ(高木正文2017)、熊本平野では盟主的古墳であった可能性も考えられる。

宇土半島基部の桂原1号古墳は円墳であるが、二重玄門・刳抜玄門・石柵など付帯施設が大野窟古墳と共通である。石室は粗雑な造りではあるが、刳抜玄門の奥側にある突出している石材を袖石とするなら、壁面から羨道側に斜めに突出するのは今城塚古墳と同じで、比較的長い羨道を持つ長方形プランの石室である。桂原1号古墳出現以降、宇土半島基部に刳抜玄門を有する古墳が多く見られるようになり、刳抜玄門にはピンク色の馬門石が使用されているものがほとんどである。しかし桂原古墳と方墳である椿原古墳には、灰黒石の馬門石が使用されている。灰黒色の馬門石に直弧文が描かれることや、宇土半島基部の後期の前方後円墳の主体部に使用されていることから有力者のみが使用することが許された石材とみられている(高木恭1995 p55)。桂原古墳も宇土半島基部の南西部地域の首長墓であった可能性がある。

5 八代海周辺の装飾古墳の歴史的意義

古墳時代中期になると畿内では奈良盆地から大阪平野へ巨大前方後円墳の築造が移動する。当初は岡山県地域の造山古墳(360m)や作山古墳(286m)など畿内以外でも巨大古墳の築造が認められるが、中期後葉(8期)頃になると巨大古墳は中央政権以外では築造されなくなる。

熊本県内の古墳時代中期の特徴として集成編年5・6期頃に前方後円墳の築造が停止することが挙げられる。特に前期に前方後円墳が集中して築造されていた宇土半島基部で顕著である。その後合志川流域の高隅古墳や熊本平野南東部の琵琶塚古墳(塚原古墳群)など、これまで前方後円墳の築造がなかった地域で出現するようになる。特に合志川流域や熊本平野南東部の古墳や集落遺跡の出土遺物に、渡来系文物や甲冑が見られることから中央政権との関係が論じられている。この背景として、中央政権と連携して交通網の整備や朝鮮半島での活動に従事したことが想定されている。交通網に関しては、遺跡の分布から海岸沿いのルート以上に河川沿いの内陸ルートが重視されたことが想定され、八代海地域に関連するものは、有明海側と八代海側を結ぶルートで、従来の宇土半島基部を南北に抜けるルートより熊本平野南東部と八代海北東隅の沿岸部を結ぶ内陸ルートの重要性が高まったとされた(杉井2010、西嶋2014)。

前期には宇土半島基部に前方後円墳が集中すること、実態は不明ながら球磨川下流域付近に三角縁神獣鏡

の出土が熊本県内で最も多いことからすると、宇土半島基部や球磨川下流域は、中央政権から重要視されていた地域であったことが推測される。中期になると宇土半島基部は前述したように交通の要衝としての地位が低下し、前方後円墳の築造も衰退している。球磨川下流域は前期の実態が不明で比較のしようがないが、中期に確実な前方後円墳がないことから、前期よりは重要性は低くなっていったのではないだろうか。

筆者は、球磨川下流域で最初に石障系石室を築いたのは小規模な円墳の被葬者であり、前方後円墳の築造が停止する集成5期・6期に従来の有力者の衰退の間に出現した新興勢力と捉えたことがある（古城2010）。その勢力は千崎型箱式石棺製作で養った石材加工技術を用い、当時としては最先端の墓制である石障系石室を生み出した。銅鏡を用いた序列表示システムに参画するために埋葬施設の内面には円文を刻みこんだ。またこの地域は高塚古墳を築造しない地域との境界域に位置することから、円文は集団としての帰属意識の発露としても機能した。序列表示システムとしての役割は終わっても、円文は地域シンボルとして精神的拠り所となって中期を通じて施文された。副葬品から中央政権と関係が窺えるのは田川内1号古墳くらいであるが、石障系石室は平野部の少ない八代海沿岸に立地するので、海が生産基盤になっていることが推察され、地理的条件からも朝鮮半島での活動に関わっていたことが想定される。

装飾古墳の展開に関しては、直弧文装飾の出現と馬門石の利用開始が大きな契機となる。関わった勢力は関連する古墳等（馬門石産出地・長砂連古墳・ヤンボシ塚古墳・三拾町板碑石障石材・鴨籠古墳）から想定すれば宇土半島または宇土半島基部の勢力と考えられる。前述したように中期には宇土半島基部勢力と中央政権の関係は希薄になっている。そこに新たな勢力が台頭したか、旧勢力のままなのかはわからないが、中央政権との関係が希薄になったことで他地域との関係を強めることになったのではないか。岡山の千足古墳・造山古墳前方部に存在する石棺からは吉備地域との関係、城2号墳やヤンボシ塚からは、九州北西部（今宿・唐津）や有明海北岸地域などとの関係が浮かんでくる。特に吉備地域との関係を強めたことで馬門石製石障や石棺を各地へ搬出することが可能となり（高木恭・西平2019）、これが契機となり宇土半島基部で築造が停止していた前方後円墳が復活したのかもしれない。

池田論文によると八代海沿岸の装飾のある石障系石室や箱式石棺周辺で採取できる砂岩は耐久性が低い、それにも関わらず使用されたのは石障表面を滑らかに仕上げるのに適した石材であったからという。同じようにピンク色をした馬門石も、石質は均等でなく所々穴が開いていたり不純物が混じったりするなど当たり外れがあるとされ、そのようなリスクにもかかわらず馬門石のもつ風合いや色味の良さのため使用されたのではないかとする（高濱2007）。このような天草砂岩・馬門石の特性を生かし加工、築造したもので、そこに文様を刻み込むことから八代海の装飾古墳が始まったのである。全体的に見れば八代海沿岸から拡がっていく過程で装飾文様や施文個所に変化がおこる。装飾文様は、円文が中心だったのが、直弧文が加わり、更に盾や鞍などが彫られるようになっていく。また施文個所は、石障の内面だけであったのが、石障の外面にも施され、更に袖石や仕切石など石障以外にも刻まれる。井寺古墳や千金甲1号古墳では赤以外の色も使われ始め次第に華やかになっていく。このように石に刻むことで表現していたものが、複数の彩色の使い分けで表現できるようになっていったことが、菊池川流域で壁画系装飾古墳として成立するきっかけとなる。全国の装飾古墳の約9割は横穴系であり、その源流がこの八代海周辺であった。

おわりに

今回の調査研究を通して感じた課題を提示し結びとしたい。

まず墳丘調査が行われているものが少ないことが挙げられる。石障系古墳の墳丘は極小規模であったものが次第に大きくなっていき集成7・8期には30mを超える規模になっていくと思われるが、それは現況の地形からの推測にすぎず、門前古墳に至っては墳形が確定できていない。今後墳丘確認調査及び国土座標を

ともなった地形測量調査が必要となってくる。

次に報告書が未刊行な古墳や調査・報告が十分でない古墳があることが挙げられる。宇城市国越古墳は、1966年に熊本県教育委員会により緊急調査が行われ多くの副葬品が出土しているが、概報のみで正式な調査報告書が刊行されていないままとっている。また多くの石障系石室は開口が古く出土遺物は知られていない中で、八代市田川内1号墳は比較的多くの副葬品が出土している。しかし出土人骨と一部の遺物についての報告が行われているのみである。この他八代市の長迫古墳は消滅していたと考えられていたが、担当者の詳細な調査により古墳の位置がほぼ特定され、まだ石室の一部は残存している可能性が出てきた。同じく八代市の門前古墳も石室の一部は残存している可能性があり、今後の調査次第では、より八代海の装飾古墳の概要が明らかになるだろう。

最後に、今回の調査研究では保存施設等の検討が十分にできていないことも課題である。八代海周辺では宇賀岳古墳・桂原古墳・長砂連古墳・大戸鼻北古墳・大戸鼻南古墳・田川内1号墳の6カ所で保存施設が設けられている。保存施設設置から40年以上が経過しており老朽化も進んでいる。熊本県立装飾古墳館によって環境調査が行われている古墳もあるがすべてではない。一方で梅崎古墳・椿原古墳・仮又古墳・晩免古墳・潤野古墳・国越古墳・ヤンボシ塚古墳・小田良古墳の8カ所は埋戻しが行われている。小田良古墳については埋戻しから約10年後に熊本県立装飾古墳館で展示するレプリカ作成のため再度発掘されたが劣化はなかったことが報告されており、保存だけを考えるならば現段階では埋戻しは最良の方法であろうが、研究者でさえめったに訪れなくなるなど活用面を考えると悩ましいところで、さらなる論議が必要である。

以上、3つほど課題を挙げたが、今後この課題を解消するとともに、装飾古墳を次世代に継承していく方策を図っていきたい。

註1 石障系石室とは文字通り石障を有する石室と言う意味で、平面形や天井形は問題とせず長方形プランのものや天井がドーム形でないものも含める。他方肥後型石室とは地域性を重視した捉え方であり、その特徴は玄室の平面形が方形をしており天井形はドーム形(穹窿形)をする。つまり肥後型石室と石障系石室は全く同じではないが、多くは方形プランでドーム天井をもつもので、熊本県内の石障系石室は宇土半島のヤンボシ塚古墳・菊池川中流域の銭亀塚古墳以外は肥後型石室の範疇に入る。県外の石室の多くは長方形プランで筑肥型石室と呼ばれることが多い。

註2 千崎型箱式石棺とは、石材に砂岩を使用し、長側石小口部に溝状加工を施す。石材を継ぐ場合はカギ状に加工するなど丁寧な加工を施すもので、上天草市千崎古墳群を中心に、八代海沿岸地域の箱式石棺に共通する特徴(島津屋2009)。

註3 池田論文では、天草砂岩など石材産地名を冠すると、良好な石材が大量に供給される場所をイメージしてしまうが、採石場所により性質が違い、大戸鼻古墳群・広浦古墳が所在する天草上島阿村や維和島のような姫浦層群の石材は、使用に耐えがたいものも多いことを指摘し、狭い地域での石材の特性・物性を理解することの必要性を訴えており、このことについては十分に留意すべきと考えている。

註4 小林行雄分類に従えば、国越古墳は石屋形への装飾であることから石棺系に分類されるべきであるが、装飾の主体は奥壁で、石室の奥壁でもあることから壁画系に分類している。

註5 馬門石の中でピンク色をしたものは色調で判別できるが、灰黒・灰白色をしたものは他地域との阿蘇溶結凝灰岩との判別は難しい。長砂連古墳・ヤンボシ塚古墳の奥障にピンク石が使用されているのは間違いないが、他の石障は厳密に言えば馬門石であると証明は出来ていない。この2古墳については近接地に他の石材産地がないことから馬門石である可能性は高いと考えるが今後検証が必要である。また円山古墳・銭亀塚古墳・日輪寺古墳も馬門石の可能性は高いと思うが、やはり検証は必要である。

参考文献

- 池田朋生編 2006『阿蘇の灰石展 解説図録』熊本県立装飾古墳館平成18年度前期企画展
- 池田朋生 2019「不知火海に分布する古墳の使用石材とその特徴」『熊本古墳研究』第7号：pp.31－42
- 小田富士雄 1966「古墳文化の地域的特色 九州」『日本の考古学』IV古墳時代上 河出書房：pp.114－174
- 乙益重隆編 1974「九州の装飾古墳」『装飾古墳と文様』古代史発掘8 講談社：pp.35－50
- 藏富士寛 1997「石屋形考—平入横口式石棺の出現とその意義—」『先史学・考古学論究』II 龍田考古学会：pp.133－166
- 藏富士寛 1999「装飾古墳考」『先史学・考古学論究』III 龍田考古学会：pp.87－103
- 島津屋寛 2009「熊本県下の古墳時代箱式石棺」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』：pp.125－156
- 杉井健 2009「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特徴とその検討課題」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』：pp.231－238
- 杉井健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集 九州前方後円墳研究会：pp.131－184
- 高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号宮嶋利治学術財団：pp.109－132
- 高木恭二 1995「石棺式石室と肥後」『横穴式石室にみる山陰と九州』古代の出雲を考える8 出雲考古学研究会：pp.50－69
- 高木恭二 2007「石棺輸送実験からみた古墳づくり」『大王の棺を運ぶ実験航海—研究編—』石棺文化研究会：pp.142－153
- 高木恭二・西平孝史 2019「直弧文を有する古墳の始まりと、その後の展開」『熊本古墳研究』第7号：pp.11－30
- 高木正文 2017「熊本県御船町今城大塚古墳の腰掛形石製品」『古文化談叢』第78集：pp.51－56
- 高濱英俊 2007「石棺復元を終えて」『大王の棺を運ぶ実験航海—研究編—』石棺文化研究会：pp.115－123
- 西嶋剛広 2014「甲冑から見た九州と倭王権との地域間交流」『古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会大分大会発表要旨集 九州前方後円墳研究会：pp.115－139
- 古城史雄 2010「肥後における初期横穴式石室出現の背景」『先史学・考古学論究』V 龍田考古会：pp.579－596
- 柳沢一男 2007「横穴式の成立と普及」『日本の考古学』下 学生社：pp.527－533
- 和田晴吾 2007「東アジアの『開かれた棺』」『渡来系遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』：pp.19－40
- 和田晴吾 2014「(1)装飾古墳について」『古墳壁画の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ報告書』：pp.1－5

図表出典

- 図143：カシミールにより新規作成
- 図144－1・3～5・7・8：九州前方後円墳研究会編1999『九州における横穴式石室の導入と展開』
- 図144－2：西田和浩編2015『千足古墳』岡山市教育委員会
- 図144－6・10～12：高木正文編1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会
- 図144－9：本書図61 拓本写真をトレース
- 図145－1：広川町教育委員会編2013『石人山古墳資料集・文献編』（初出 福岡県1937『史跡名勝天然記念物調査報告書』第12輯）をトレース
- 図145－2・3：本書図37・74
- 図145－4・5：埋蔵文化財研究会編2002『装飾古墳の展開』資料集をトレース

報告書抄録

ふりがな	やつしろかいしゅうへんのそうしょくこふんーはっせいとてんかいー
書名	八代海周辺の装飾古墳ー発生と展開ー
副書名	ー
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第337集
編著者	古城史雄（編集） 藤本貴仁・芥川博士・神川めぐみ・池田朋生・今田治代・吉永明・山内淳司・西山由美子・村田仁志・米崎寿一・杉井健・高木恭二
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号 TEL 096-383-1111(代表)
発行年月日	2020年3月31日

熊本県文化財調査報告第337集

八代海周辺の装飾古墳ー発生と展開ー

発行年月日 令和2年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行 〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号
印刷 株式会社城野印刷所
製本 〒861-2296 熊本県上益城郡益城町広崎 1630-1

発 行 者 : 熊本県教育委員会
所 属 : 教育総務局文化課
発行年度 : 令和元年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第337集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：八代海周辺の装飾古墳の発生と展開

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2020年10月1日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>